

第6章 赤壁の賦——黃州

[第6章その一]

元豊2年 [1079年]、蘇軾44歳。

元豊3年 [1080年]、蘇軾45歳。

■【06-1-001】十二月二十八日、蒙恩責授檢校水部員外郎黃州團練副使、復用前韻二首

【解題】「困窮して後に人は詩に巧みになる」とは欧陽脩の言葉 [→作品番号 04-3-047]。梅堯臣の詩集に寄せた序文の中にあり、その直前に「蓋し愈いよ窮すれば則ち愈いよ工みなり」とある。これはむしろ、時間は前後するが、蘇軾のために記されたかのように思えもする。前の章までに見たように、蘇軾の詩はすでに巧みで、高麗国にも聞こえるほどであった。しかし、もしもこれから後に見る詩がなかったならば、蘇軾は梅堯臣や欧陽脩と肩を並べる北宋の代表的詩人の一人という評価に留まったのではなかろうか。その特徴は、難解な語句を自在に駆使し、次韻を異様に得意とし、時に人の意表を衝く警句もしくは諧謔の辞を吐くということであったろう。蘇軾が北宋のみならず中国を代表する詩人の一人とされるのは、愈いよ窮して愈いよ工みになったからで、本章からその過程をたどることになる。

御史台の獄での苛酷な審理は4カ月間にわたった。最終的に神宗皇帝が下した処分がいかなるものであったのか、それがこの項の詩の題に記されている。「十二月二十八日、恩を蒙り、檢校水部員外郎、黃州團練副使に責授され、前の韻を用いてまた二首を作った」。皇帝の御恩によって、死罪は免れて、官位を下げる処分となり、「檢校水部員外郎」という名目上の官位と、「黃州の團練副使」という実質的に仕事のない

職を与えられた。詩の題では省かれているが、正式の処分には、「黄州団練副使」の後ろに「本州安置不得簽書公事」の十文字がある。これは、黄州で軟禁状態に置かれ、公文書には署名できない、つまり公の仕事を禁じるという意味である。蘇軾を告発した李定、舒亶、何正臣、張璪等は何としてでも蘇軾を死罪にしようと手を尽くしたのだが、神宗皇帝が特に罪を軽くしたというのが、当時の人々の一般的な理解であった。しかし、宋代の法体系からして、蘇軾の罪状に対する罰としてはこの程度が妥当で、神宗皇帝が特別に優遇したわけではないという説もある。

この事件で処分を受けたのは蘇軾だけではなかった。王誥 [→作品番号 05-3-011 など] は先帝の嬖として特別の恩を受けていながら朝廷の機密を漏らした罪で全ての官職を停止されて均州に移動を命じられ、弟の蘇轍は自身の官位をもって兄の罪を贖いたいと申し出ていることもあって、官位を下げられて筠州に移され、王鞏 [→作品番号 05-4-084 など] は賓州に流された。均州は都から南東に数百キロ、筠州は南方にその二倍、賓州は南方にさらに二倍ほど離れたところである。罪が大きいとされた者ほど距離が遠くなる。それ以外にも蘇軾と交流のあった張方平と李清臣は罰として銅三十斤を科せられ、司馬光、范鎮、錢藻、陳襄、劉攽、李常、孫覺、曾鞏、黃庭堅、吳瑄、周邠、顔復ら 22 人は罰として銅二十斤を科せられた。銅量の差は、張方平と李清臣が高い地位にあることによるのだろうか。王鞏も、蘇軾との関係はこれらの人々と同レベルで、特別に何かをしたようには見えないのだが、なぜか群を抜いて重い処分となり、蘇軾は王鞏に対してすまないことをしたと後に述懐している。劉攽はかつて言葉が過ぎるのではないかと蘇軾に忠告していた [→作品番号 05-1-064]。それに素直に従っていたならこのようなことにはならなかったのかもしれないが、愈いよ窮することがなくて蘇軾の詩文が熟す機会は失われてしまったであろう。

皇帝の詔が下ったのは12月26日、蘇軾は12月28日に獄を出て、すぐに2首の詩

を作った。獄中で弟に向けて詠んだ詩 [→作品番号 05-5-094] と同じ韻を用い、次韻の達人ぶりは健在であった。

【訳文】

其の一

獄中で百日……

しゃぼ
娑婆に帰るのはちょうど春になろうというとき。

我が身に最も関わるのは、残された歳月の楽しみ事だ。

門を出て、まずはしゃつぱんじょう便旋すると、春の風が顔に吹いてくる。

人々と馬を連ねて走ると、かきさぎ鶻が^{かき}にぎやかに祝ってくれる。

酒杯に向かう。

——すべては夢。

試しに筆を執れば、すでに神技のように詩が湧いてくる。

このたびの災いのもとには必ずしも深く追求しなくてもよいのだろう。

前々からろく禄を竊みとっていたのだから、それが原因でないことはないのだ。

【補足】 [(1) 「べんせん便旋」の解釈は一つではないが、しゃつと立小便することだとするの
がいかにも蘇軾らしくて人気がある。しかし、その解釈だと、詩文のせいで死罪にな
りかけたのに、解放された途端にいきなり品のない詩を作り全く懲りない人間だと、
人を呆れさせる度合いはよりひどくなる。(2) 同じ韻を使って、獄中での重苦しい詩
と、この軽やかな詩が作れてしまうというのは、自分でいう通りまさに神技なのだろ
う]

其の二

文字は、普段から私に災いをもたらすものであった。

これからはこれをやめ、私の評判が低くなってよしとしよう。

どのみち「万事塞翁が馬」なのだ、今日の不幸が将来の幸福を導く期待してみたり、

玄宗皇帝の好みに合わせて闘鶏の技を習って出世を目指した少年の真似をしてみたり、

そういうことはしない。

官職を棄てた陶淵明は、貧乏で好きな酒さえなかった、

釈迦の弟子の維摩詰は、病んで机にもたれながらも仏法を妻とした、

そういうことを我が事としたいものだ。

それこそ笑ってしまうのは、

南京応天府の老役人だ、

僕のために意気だった文章を書いて江西に流されてしまったのだから。

【補足】〔(1) 末句は、決死の覚悟で嘆願書〔→作品番号 05-5-094〕を書いた弟を「笑ってしまう」と手荒く言い放ちつつ、実は深く感謝しているのである。(2) 蘇軾を告発した急先鋒の一人に李定がいた。ここまで読んでこられた方は、李定に対してかなり悪い印象を抱いているであろう。公平性を期すために、李定には次のようなエピソードが伝えられていることを補足しておきたい〕

【訳文】

邵博：『邵氏聞見後録』

李定は蘇軾を獄中で尋問し、その勢いは激しかった。

ある日、李定は崇政殿の門の外で同輩と語り、

「蘇軾は奇才である」

と、いった。同輩は(意外であったので)返事ができずにいると、

「二、三十年前のこと、蘇軾が詩文を作り、経典や史書から故事をいろいろに引いていた。それについて問うと蘇軾は即答し、一字の誤りもなかった。まことに天下の奇才ではないか」と、しばらく嘆息してやまなかった。

仇敵といえども蘇軾の才を認めないわけにはいかなかったのである。

【補足】〔これを記録した邵博は、司馬光とも深い交流のあった邵伯温の息子で、邵伯温は当時極めて著名だった学者の息子である。だから、この記事は信頼性が高いといえるだろう。ただし、ここで蘇軾に問うたのが李定自身であるかどうかはよくわからない。「二、三十年前」とあるから、蘇軾が制科を受けたころということになるのだが……〕

■【06-1-002】文与可飛白贊

【解題】獄を出て3日後の元豊3年1月1日に、蘇軾は都を発って黄州に向かった。同行したのは長男の蘇邁だけで、あるいは馬正卿のような身の回りの世話をする者がいたのかもしれないが、その他の家族は南京応天府の蘇轍のもとに身を寄せていた。黄州は長江中流の小都市で、まずは船で陳州を目指した。かつて杭州に赴任した際にも、都から陳州に向かっていた〔→作品番号 03-4-015〕。そのときは陳州に弟がいたのだが、今度は文務光〔字は逸民〕がいた。文務光は親友文同〔字は与可〕の子で、蘇轍の娘の婿。文同は1年前に陳州で亡くなっていて〔→作品番号 05-5-013〕、息子は父の棺とともになおここに留まっていた。蘇軾は陳州で文同の遺品を見て、この短文を記した。逮捕直前の前年7月7日に文同の画についての文を記していたこと〔→作品番号 05-5-086〕を思うと、出獄後の最初の文章が文同の書について記したものであるのは感慨深い。

【訳文】

あ あ
嗚呼、哀しいではないか。

ぶんどう
文同には、好むものがこもたくさんあったとは。好むものがこも奇しかったとは。

こうし
孔子はこういったという。

「私は世に用いられなかった。だから多芸となった」

文同もまたそうであったのだろうか。

私は始めに文同の詩と文を見た。それから、行書と草書と篆書と隸書を見て、これで全てであろうと思った。

亡くなって一年が経って、ここに飛白を見た。あまりにも美しい。まさしく万物のありようがここにことごとく尽くされている。

文同の筆の痕を自然界の事物に譬えるなら――

ひ ひ かる おお ほんほん ゆる はた しい かげろう
霏霏として軽やかな雲が月を蔽うかのよう、翻翻として長やかな風が旆を巻くかのよう、猗猗として遊糸
が柳の絮にまどわりつかのよう、裊裊として流れる水が苕帯を舞わせるかのよう。

文同の筆の勢いは――

り り たく しゅくしゅく
離離として遠くこまでも及んで断たれることなく、縮縮として近くに溢れて滞ることがない。

文同の工みかここにまで至っていたことを私は初めて知った。私が知っている文同はまんのいばくでもなく、私の知らない文同は恐らく計りようがないのであろう。

あ あ
嗚呼、哀しいではないか。

【補足】〔(1) 飛白とは書法の一つで、筆に墨をあまり含ませないで、白い部分を多く残してかすれたように書く。(2) 霏霏、翻翻、猗猗、裊裊、離離、縮縮の6個のオノマトペで文同の書を表現している。オノマトペの意味するところは、それに続く語句に示されている通りで、無理に日本語に置き換える必要はないだろう。(3) 「哀しい」とあるのは、文同の「計りようがない」ものがさらに発揮する機会が永久に失われた

ことをいうのだろう]

■ 【06-1-003】 陳州与文郎逸民飲別、携手河堤上、作此詩

【解題】 陳州ちんに滞在する間に、南京なんけい応天府おうてん ふから蘇轍そてつがきた。兄弟が一緒にいられたのはわずかに3日間で、1月14日、蘇軾そしつは陳州の川のほとりで、弟と文務光ぶんむこう [字は逸民いつみん] と別れた。これは文務光に送った詩。

【訳文】

白く濁った酒は何もいわない。

静かに瀉そそげば油のように滑らかである。

酔って堤の上を歩いて、我が愁しゅうを発散させようとする。

春の風ひやひやは料峭として、羊の角のように向きが定まらずにあれこれ転じる。

河の水ゆらゆらは渺綿として、瓜の蔓のようにあてどなく流れゆく。

貴君はすでに帰ることを思い、巴峽はきょうを夢みているであろう。

私はまだ到っていないので、黄州こうについて説くことができない。

人の世に生きる我等に、離合集散はやむことがない。

だからといって、

楚その囚人の悲しい歌を学ぼうとは思わない。

【補足】 [(1) 文務光ぶんむこうも蘇軾そしつも蜀しよくの人で、故郷は長江ちやうこうを遡った巴峽はきょうの先にあり、黄州こうは巴峽の手前にある。文務光は父の棺を携えて近く帰郷するので、「帰ることを思い」と詠んでいるのである。(2) 「楚その囚人の悲しい歌」とは次のような故事による。遠い昔のこと [紀元前582年とされる]、晋国しんこくの景公けいこうが、楚国そこくから捕虜として連れてこられた囚人を見たところ、その中にきちんとした身なりの人物がいた。誰であるかと尋

ねると、楚国で楽官であった鍾儀であった。景公が鍾儀に琴を与えると、楚国の音楽を演奏し、幾つか問うと、その答え方には仁、信、忠、敏が具わっていた。そこで、鍾儀を礼儀正しく扱って帰国させ、楚国との和議を進めた。それから 900 年ほど後に、晋朝 [先の晋国とは全く別の王朝] は異民族の攻撃を受けて都洛陽を失い、一部の皇族、貴族は南方に逃れ、江南の見慣れない風景に涙を流した。王導は、「楚の囚人のように泣いてばかりでどうするのか」と、人々を励まし、晋朝の再興に向けて努力した。蘇軾は、これらのことを踏まえて、自分はまさに異郷の地に囚われの身となるけれど、それを悲しむような歌をうたおうとは思わないといったのである。(3)「羊の角」や「瓜の蔓」のように先は見定めることはできずとも悲嘆はしない——この決意は黄州でのこれからの日々基調となる]

■ 【06-1-004】子由自南都来陳三日而別

【解題】陳州での別れに際して弟にも詩を送った。

【訳文】

夫子だって、朝廷を逐われた身であるのに、

楚の囚人であるこの僕のことを、よくまあ哀しんでくれるものだ。

たちまち三百里をあたふた馳ってきて、僕の憂いを寛めようとしてくれるとは。

君と逢うと、やはり得るところがあるとわかる——

君は道を修めた眼をしていて、清く澄み、あらぬところへ視線が流れたりすることがない。

この前別れてからまだ一年にならないけれど、

どうたい、僕の顔に浮かんでいた驕った気配は落ち尽したのではないかな。

だけど、僕は道を聞くことが晩くて、了見のちっ掛けなことといったらかの孫休のようなものだ。

至言^{しげん}[最も大切なこと]をいつまでたっても自分のものとしてすることができないし、

放心^{ほうしん}[本来の場所から散ってしまった心]を自分で収め直すこともできないのだ。

やはり、善知識^{ぜんちしき}[良識のあるよい友]こそが、

妙薬を投じればただちに応じるところがあるのと同じであって、

君の言葉を、この憂い^い患うときに納れることで、

獄中で過ごした百日間の愁いも消し去ることができるというものだ。

僕は冥く頑^{くら かつ}なで教化し難い人間ではあるけれど、

君によって、その頑^{かたく}なところが鑄^はられ、冥^{くら}いところが発^{ひら}かれることが、

すでに^{あまね}周く全体に及ぼうとしている。

普段の心の種々の乱れも、次第に去って留まるものはなくなるであろう。

そして、無所還^{むしょげん}[還るところがあるとするのは、還るところがないとするのになお及ばない]のところまで永く

夫子^{せんせい}と遊びたいと思う。

だから、今回の別れなどは言うに足りない、

長江^{ちやうこう}の東と西になるだけではないか。

煩惱を毒蛇に譬え、毒蛇の這う床を畏れて禪榻^{ぜんとう}から下りないのがよいというけれども、

そのまま榻^{いす}の上でたっぷりと眠れたなら、それ以上に求めるものはない。

つまり、僕は黄州を禪榻^{こう}だと思ってそこに安んじるつもりでいて、

必ずしも故郷に帰りたいとは思っていないのだ。

【補足】[(1) 最初に弟に向かって「夫子」^{ふうし} [先生] と呼びかけているのは、弟を敬いつつ、冗談ぽくもしているのだろう。(2) 自分のことを「楚の囚人」^そ といっているのは、前の詩の続きとしてこれが詠まれているためだ。(3) 苛酷な獄中体験を経てこれからいかに生きてらよいか、蘇軾はいろいろな思索を巡らしていたのだろう。その支えとなったのは、儒学であるよりも、^{そうし} 荘子の哲学であり仏教であったようだ。^{そんきゆう} 孫休

は『莊子』の説話に出てくる人物で、「善知識」「無所還」「畏蛇」などは仏教用語で、それらを用いて何をいおうとしているのか掴み取るのはなかなか容易ではない。(4) 脇道に逸れるようだが、蘇軾の思索に触れるために孫休の説話を見ておこう]

【訳文】

『莊子』「達生篇」より

孫休という者がいた。扁慶子先生の門を訪ねて、孫休はこのようにいった。

「私は郷里にいて身が修まっていなといわれたことはありません。困難に臨んで勇気がないといわれたこともありません。しかし、田を耕して豊年に遇ったことがなく、君主に仕えて世の時流に遇ったことがなく、村からは排斥され、町からは追い払われ、そんなこんなで、私は何か天に対して罪があるのでしょうか、私はどうしてこのような運命であるのでしょうか」

扁慶子先生は答えた。

「君は聞いたことかないのかい、かの至人[最高の道徳を具えた人]がどのように振る舞っているのかを。至人は自分の肝胆を忘れ、自分の耳目を遺れ、塵と垢にまみれた世間の外を悠々と歩きまわり、何事もないという業に遊んでいる。これはいわゆる『為して恃まず、長じて宰せず』[何かをしても己を誇らないし、何かを化育しても支配しない]ということなのだ。いまそなたは知識を見せびらかして愚かな者を驚かせ、身を修めて他人の汚点を明らかくしてみせ、あかあかと日月を掲げて行くように自分を目立たせようとしている。それでいながら、そなたは身体をきちんと保っていて、九つの竅を具えたまま人生の途中で聾、盲、跛、蹇になることがなく、人間の仲間の数に入っていられるのだから、それだけで幸せなのではないのかい。それでどうして天を怨んだりするのだ。さあ、もう往ってくれ」

孫休が出て行くと、扁慶子先生は部屋に戻って座り、しばらくして天を仰いで嘆息した。弟子が尋ねた。

「先生はどうして溜め息をつかれるのですか」

扁慶子先生は答えた。

「いま孫休なる者がきた。私はこの者に至人の徳を告げた。孫休が驚いてしまって、ついには惑いに至ることを私はいま恐れているのだ」

弟子はいった。

「それはなりません。孫休の言うところが正しくて、先生の言われることが間違っているのなら、間違いは正しいものを惑わすことができません。逆に、孫休の言うところが間違っていて、先生の言われることが正しいのなら、孫休はもともと惑っていたわけですから、先生に罪などありません」

扁慶子先生は言った。

「そうではない。昔、魯国^{ろこく}の郊外に珍しい鳥がきて留まった。魯の君主は喜んで、鳥のために正式の御馳走を用意して持たせ、古代の名曲を演奏して楽しんでもらおうとした。鳥は憂い悲しみ、目をきろきろさせて、飲食することがなかった。魯の君主は自分を養うのと同じようにして鳥を養おうとしたのだが、鳥は鳥を養うようにして養わなければいけないのだ。人のいない林に棲まわせるなり、広い湖に浮かばせるなりして、泥鱒や蚯蚓を食べさせておけば安らかにいらされる。孫休は、小さな孔^{あな}から覗いて、わずかなことしか聞いていない了見の狭い人間である。これに対して私は至人の徳を告げてしまった。これを譬えれば、鼠を載せるために馬の曳く車を用い、鶉を楽しませるために鐘や太鼓を叩くようなものだ。孫休は驚かすにはいないのだ」

【補足】[蘇軾は、ここにある「知識を見せびらかして……」[知^ちを飾^{かざ}って愚^ぐを驚^{おどろ}かし、身^みを脩^{おさ}めて汗^{あせ}を明^{あき}らかにし、昭^{しょう}昭^{しょう}乎^ことして日^{にち}月^{げつ}を掲^かげるが若^{ごと}くにして行く] というのは、実はまさしく自分のことなのではなかろうかと、考えるようになったのだろう。蘇軾を嫌う人からしたら、これ以上にぴったりな形容はない。制料^{せいりょう}にまで合格した超エリートとしては、むしろ「昭^{しょう}昭^{しょう}乎^ことして日^{にち}月^{げつ}を掲^かげるが若^{ごと}くにして行く」であらねばならないという意識があったのかもしれない」

■ 【06-1-005】正月十八日蔡州道上遇雪、次子由韻二首

【解題】陳州ちんから先は陸路こで黄州を目指したようだ。1月18日に蔡州さいに至る道で春の雪に会い、弟がかつて雪を詠んだ詩に次韻した。

【訳文】

其の一

路傍の蘭や菊に生意せい い[生命エネルギー]がある。

微かなあたたか陽みによって、根が短いながらも張られつつあるのたろう。

蘭や菊は、

暮れ方には雪が己の身に集まってくるのを憂い、

明け方には朝日を迎えるのを喜ぶ。

おも憶うに、僕等の故郷の居室では、

朝の光は、南の軒端で揺れ動き、

雪の晩には、松や竹が傾いて雪を落とした。

いまごろの季節には、

また葵や萱あおい わすれぐさは数えることはできなかったけれど、

我が家に通じる道には様々な草が茂り、

早朝に酌む井戸水は温かかった。

かつて僕等が歩きつつ詩を吟じたところには、

きつといまも僕らの履くつの痕が残っているたろう。

あるときから僕等は故郷を出て官に仕えたので、

蜀しよくの地を生涯出ることがなかった古代の賢人、李仲元り ちゆうげんに対してずっと愧はしななければならなくなった。

この年齢はになってさらにますます羞はしななければならないのは、

雪を冒してこして南へと奔はしらなければならないこと。

これから行く小さな町では、
廃れた農園でも買って、
僕は自分の手で枯れた枝葉を取り除き、
昔の東陵侯とうりょうこうに習って瓜でも植えて、
あそこの畑の瓜は旨かったなあと、
あとあとまでも町の人々に言い伝えられるようにするつもりでいるのだよ。

【補足】〔(1) 冒頭にある蘭も菊もたまたま目に入ったから詩に詠んだというものではないだろう。林の下にひっそりと咲いてほのかな香りを漂わせる蘭も、ほかの花々よりも遅れて最後に咲く菊も、君子のあるべき姿の象徴とされてきた植物である。(2) 詩の末尾にあるのは、召平しょうへいという人の故事。蘇軾はそのことを時々詩文に引いているので、ここで紹介しておく。召平しんは秦の始皇帝しこうていに仕えて高位に昇り、東陵侯とうりょうこうに封じられた。しかし、秦朝の政治が乱れてゆくを見て一般庶民に自ら身分を落とし、漢の世になると、長安ちやうあんの東の農園で瓜を栽培して町に出て売った。その瓜は非常に味がよかったので評判になり、召平がもとの東陵侯であったことも知れて、「東陵の瓜」と呼ばれるようになった。召平の身の処し方は一つのよい手本とされた]

其の二

鉛あぶらの膏を使って白髪を染めたところで、
白く霜や雪のついた毛の根元はすくに露わになってしまう。
そんなことをするよりは、目を閉じて座り、
丹府こころの夜に自ずから朝日が射してくるのを待つのがよいだろう。
いかなる憂患の中にあっても、方寸こころには太古の純朴さが寓されている。
大雪で家が潰れたってかまわないさ、

僕は萱わすれぐさを見てめそめそするような者ではない。

普段から踵かかとで息することを学んでいるので、

この雪の中でも、鍔あぶみに載せた両足が温かくなってくるのがわかる。

馬より下りてこの雪を詩に詠む。

見渡す限りのところに、人々が行き来した痕がある。

原野を望んで佇み、民衆のために悲歌する。

道で、弓を射る獵師に出逢う。

獵師は、遠く遥かに狐や兎はしが奔るのを指さす。

雪に残る足跡は尋ねることができたらう。

でも、その棲み穴までは見つけ出さずともよいのではないだろうか。

僕はここでかの李宰相りに謝らないとならない。

だって、僕は李宰相と違って、まだしも丘の園田に帰ることができのだから。

【補足】〔(1) この詩には道教の術語が織り込まれていて、十分には理解できないところもあるが、このときの複雑な思いが詠まれているようだ。(2) 「踵きびすで息する」とは、『莊子そうじ』に「真人しんじんの息は踵をもってし、衆人の息は喉をもってす」とあるのに基づく。自然と一体化した真人きは気を全身に廻らせるということなのだろう。(3) 「民衆のために悲歌する」[悲歌為黎元]は、厳しい境遇に置かれても、蘇軾は民衆の困苦を考えていたことを示す句として注目される。雪面に残る往来の跡を見て、それぞれに生きる苦勞が宿されていると感じ取ったのだ。(4) 末尾にあるのは、李斯りしという人の故事。李斯も先の召平しょうへいと同じく秦しんの始皇帝しこうていに仕え、秦の天下統一に大きく貢献して宰相にまでなった。しかし、強引に富国強兵策を進めたために人々に憎まれ、始皇帝の死後、死刑となった。その最後のありさまを『史記しき』は次のように記している。

「二世皇帝の二年七月、李斯は五つの刑〔顔に入れ墨をする、鼻をそぐ、くるぶしか

ら下を斬る、鞭で打って殺す、死骸を市場にさらす] を全て加えられ、咸陽〔後の長安〕の市場で胴斬りにされた。李斯が獄から出されたとき次男とともに繋がれ、李斯は息子を顧みていった。『おまえと一緒にまた黄色い犬を牽いて上蔡の東門から出て、兎を逐ってみたいものだ。だが、もうできやしないのだ』。父子ともに泣いた。そして、李斯の三族は皆殺しとなった」。上蔡は李斯の故郷で、李斯はそこでの狩猟を好んだ。上蔡は蔡州のすぐ北の町である。李斯を導き出すために、蘇軾は詩中に実際には見ていない獵師を詠んだのかも知れない。李斯に対して謝っているのは、李斯は無残な殺され方をしたけれど、蘇軾は獄を出て生きることを許されたからだ。(5) 2 首の詩で、対照的な召平と李斯を引いて、蘇軾は自分のこれからを考えたのである。蘇軾を始めとして改革を批判する人々は、王安石のやり方は李斯の富国強兵策と同じく非常に危ういものであると指摘していたので、ここで李斯を引いたのは少々複雑な意味合いがあるのだろう]

■ 【06-1-006】 過新息留示郷人任師中

【解題】蔡州の町から南に百五十里で淮河に臨む新息県に到り、同郷の任伋〔字は師中〕のことを思い起こし、この詩を作った。任伋はその兄とともに科挙に合格した郷里の大先輩で、いわゆる「小任」と呼ばれていた人。作品番号 05-3-053 で任伋に送った詩を見ている。そこに「かつて蔡州にいたときに土地の人に慕われてよい農地を寄贈された」とあったように、任伋は官職を退いた後は蔡州に住むと決めていた。

【訳文】

昔、私は任先生を羨ましく思った――

新息県の淮河を臨む地に引退後の住まいを得ていると聞いたからだ。

先生は蜀の故郷を忘れてしまったのだろうかど怪しみもしたが、
 ここにきてみると、
 稲がよく稔り、魚がよく肥え、まことに美しいところである。
 竹林によって覆われた丘があり、
 そこから雁が、天を真黒にして飛び上がる。
 半ば霧に隠れて紫色に見えるのは、
 漢の時代の太守を祀った桐柏廟のある山だ。
 聞くところでは、先生の家族はいま大変な苦しみの中にあるとか。
 この清らかな流れのところに早くに帰っておかなかったことを、
 先生は悔いておられるのだろうか。
 私もまた塵埃の中で我が身を収めるところを失い、
 あたふたと最も鄙しむべき旅をしている。
 これからの私は、どこかの僧侶のもとにでも寄寓するよりなく、
 この手紙を先生に送るにして、犬にでも頼まなければならぬ。
 先生のもとに行くことなどはとてもできないけれど、
 新たな歳月なら私のところにもきてくれるだろうから、
 いつしかお上の御恩を頂戴して帰郷が許されたりするのかもしれない。
 そのときは黄州から長江を遡らずにおしろ下り、
 黄州の特産である水牛を三百頭ほども連れて、
 ここ蔡州で暮らそうと思う。

【補足】〔(1) 詩の中ほどに、「先生の家族は苦しみの中にある」〔原詩は「君坐して
 児女困を受く」〕とあるのは、このとき任伋は瀘州の知事であったが、不法行為があ
 ったとして取り調べを受けていたからだ。その告発をしたのが程之才だった。程之才

は蘇軾の母の兄の程澹^{ていしゆん}の息子で、つまり蘇軾の姉の結婚相手だった。蘇軾の姉は程澹等によって虐待死させられたとして、蘇軾の父の蘇洵^{そじゆん}は不道德極まりない程一家との絶縁を宣言し [→作品番号 01-2-009]、蘇軾はそれを守り続けていた。任侠の災厄を聞いて、程之才^{わざわい}はいったいいつまで自分たちに禍をもたらし続けるのかと、蘇軾は思ったに違いない。程一家との関係は、今後いろいろな場面で見ゆことになる。(2) 犬に手紙を届けてもらうというのは、晋の陸機^{しん りくき}の故事による。陸機は家族と遠く離れて音信も絶えてしまったときに、飼犬の黄耳^{こうじ}に向かって、「おまえが手紙を届けてくれたらなあ」と笑って語りかけると、犬は尾を振って応えたので、首に手紙を括り付けたところ、犬は走り出て、返事を持って帰ってきた。前に蘇軾が蝗退治で苦勞していたときに、弟に向けて詠んだ詩を犬にでも届けてもらわなければならないとぼやいた [→作品番号 04-3-057] のは、同じくこの故事に基づくものである。(3) 水牛^{こう}は黄州の特産物といわれていたようだ。]

■ 【06-1-007】 過淮

【解題】 淮河^{わいが}を渡ってこの詩を詠んだ。

【解題】

朝^{しん そく}に新息^{しんじ}県を離れ、一本の碧の水を横切る。

千山^{せんざん}が早くも夕日に赤く染まりゆくを見ながら、

暮れ^{わいが}に淮河の南の村に宿る。

夜になると、傷んだ駅舎は霧雨に暗く閉ざされ、

古い戍^{とりで}で磨^{しか}や颺^{むさび}が叫ぶ。

古くは梁楚といわれたこの地で頭^{りょうそ}を回らすと、
こすべ めぐ

ちゅうげん
中原[中華文明の中心地]とは、悠久の昔から遠く隔てられている。

こう
黄州はどこにあるのか、

まず想像されるのは、詩によく詠まれる雲夢の沢。

せい よ
私の生は寄せるようなもの、

ゆ
もとより適くところを選んだりしない。

魚や稻さえあるのなら、

せい り ことわり
生理[生きる理、あるいは生きる道]はすでに十分なのである。

一つ喜ばしいのは、

我が息子は小さいときから安佚のうちに育ったのに、

このたびの艱難の中に付き従ってくれたことで、

かんはい てっせき
肝肺[心のありよう]が鉄石のようになってきたこと。

だから、息子が語るのは、

すいしつ
父親の衰疾をいたわる言葉だけではないのである。

【補足】[(1) 雲夢の沢は、黄州とは長江をはさんで南にある有名な景勝地。ただし、黄州からそこそこ距離がある。これから行くところには不案内であるために、思い浮かぶのはそこくらいしかないというのである。(2) 途中にある「吾生如寄耳、初不扞所適」[吾が生は寄せるが如き耳、初めより適く所を扞はず]は、これまでも類似の句を何度か見てきているが、意味が一段と深化しているように感じられる。「吾が生は寄せるが如き」は、もとは「浮世寄せるが如し」という慣用句からきていて、この世ははかないものであるから、せめて生きている間は楽しく過ごそうという感じの意味合いで用いられていた。なおこの句についての詳しい考察は、吉川幸次郎著『宋詩概説』、岩波書店(1962年)にある。(3) 一人従う息子は長男の蘇邁で、このとき23歳。湖州で逮捕されてからの困難な日々を乗り越えてきたことで、目に見えて大人

らしくなったのだろう。(4) 都を出てからの詩には蘇軾の思索の跡が刻まれている、一首ごとに異なる味わいがある]

■【06-1-008】書磨公詩後、并引

【解題】蘇軾はいついかなるときも蘇軾なのだろう。苛酷な獄中体験を経て、深い反省の内にあつて、この先に大きな不安を抱いていても、目の前に興味を引くものがあれば、それに応じてかなり場違いな言葉さえも吐いてしまう。これは磨公^{どんこう}という僧の詩を見て作った詩。序文がついている。

【訳文】

引[序]

加祿鎮^{かろくちん}を過ぎて南に二十五里の大許店^{だいきょてん}で、祁宗祥^{きそうしょう}の逆旅^{ぎゃくりょ}[旅館]で馬を休めた。見ると、壁に一幅の紙があり次のような詩が記してあった。

満院秋光濃欲滴、[寺の中は滴るばかりの秋の光でいっぱいである]

老僧倚杖青松側。[青い松のかたわらで老いた僧が杖をたよりに立っている]

只怪高声問不鷹、[大きな声で尋ねても応じてくれないので、おかしいと思っていると]

曠余踏破蒼苔色。[私が蒼い苔を踏んでいるのを怒っているのだった]

その後ろに題して、溢水^{ふすい}の僧の宝磨^{ほうどん}とある。

主人^{きそうしょう}の祁宗祥が私にいうには、

「これは光州^{こうしゅう}と黃州^{こうしゅう}の間を往来していた狂僧でありまして、熙寧十年[三年前]に百三十歳で亡くなりました。いまになっても、この詩を見てこの僧のことを思い出し、おかしい語り草をあれこれいう人がおしま

す」

そこでこの詩を作り、この僧の^{しる}ことを識す。磨公の本名は清戒、俗に^{せいがい}は^{かい おしょう}戒和尚と呼ばれていた。

また^{せんげ}遷化する前の昔、

磨公は、^{どんこう}淮河を^{わいが}囲む山々が^{なげ}曲がりくねるあたりを来往し、

その年齢は還暦を二度超え、

その気迫はいかなる尊い僧侶をも圧倒し、

^{じよくあく}濁悪の世にあることを^{なげ}たたき、

^{りゅうぞう}竜象[学徳の高い僧]の^{しゅうどう}蹴踏[教導]を受けることはなかった。

私はここに来たものの磨公に逢うことができず、

その姿を想ってむなし^{なげ}あたりを歩む。

磨公は、^{みけん}眉間の^{びやくこう}白毫[光を放つ毛]を隠したまま亡くなり、

埋葬したとき、骨は^{ぎよく}青い玉を^{なげ}連ね、

後に^{たると}達摩大師のように^{てんじく}草鞋を履いて天竺に還ったのだという。

壁に清らかな詩を残し、その字は俗界から^{なげ}抜き出した勢いがある。

磨公のために^び五字の偈を吟じよう――

^{いっせん}一洗せよ^{ほんがんにく}凡眼肉[凡人の浅い思慮を洗い流せ]。

【補足】[(1) 序文に引かれている^{どんこう}磨公の詩を、蘇軾は「清らかな詩」[清詩]と形容しているが、どう見てもかなり俗っぽい。一種のジョークなのだろう。(2) 「白毫」は仏の眉間に生えている白く長い毛で、世界を照らす光を放つという。磨公が白毫を隠していたというのはあまりにも過剰な贅辞である。己も磨公のような諧謔の僧として生きる可能性もあったのではなかろうかとふと思ひ、冗談ぽくこの詩を詠んだのであろう]

■【06-1-009】遊浄居寺、并叙

【解題】^{こうざん}光山県にある^{じょうこじ}浄居寺に立ち寄っての詩。序文が付いている。

【訳文】

叙

^{じょうこじ こうざん}浄居寺は光山県の南四十里、^{だいそざん}大蘇山の南、^{しょうそざん}小蘇山の北にある。寺の僧の^{こじん}居仁が私にいわくは、
「^{せい てん ほ}齊の天保年間に、僧の^{えし}恵思が^{よぎ}ここを過りまして、土地の老人を見てその姓を尋ねましたところ、^そ蘇氏との
答え。二つの山を大蘇山、小蘇山と呼ぶことを知って恵思は驚き、『私は師から^{さんそ}三蘇に遇ったならばそこに住まれ』といわれておりました』といて、そのままここに留まって庵を結びました。ところが、先の老人はどこにも姿がなく、たぶん山の神様であったのでしょうか。その後、僧の^{ちぎ}智顛がこの山で恵思に会い、
仏法を得ました。これが世にいうところの^{しだいおしょう}思大和尚と^{ちしゃだいし}智者大師であります。唐の^{とうしんりゅう}神竜年間に^{どうがん}道岸禪師が初めてこの地に寺を建て、^{とうまつ こうめい}唐末の広明年間の戦乱の際に寺は兵火で失われてしまいました
が、^{そうけんこう}宋の乾興年間に再建して、^{ほんてん}お上より梵天の名を賜りました」

十年の間、私は各地の名山に遊び、山中で着る衣を自分で作りした。

息子たちを結婚させたなら、山に入って老いに至ろうと、そのことを願っていた。

しかし、己がいかなる俗縁によって結ばれているかを悟らなかつたために、

身を失う危機に陥ってしまった。

^{ほうか}法家の学を修めなかつたことから^{らくし}落とし穴にはまり、

身に付けた学問を台無しにし、

ついには死生を隔て、永久に山にも行けなくなると恐れなければならなかつた。

ああ、今日はいかなる日であろうか、

山に入って、我が草鞋は飛ぶように軽い。

浄居寺に至って思大和尚と智者大師けいしゅうに稽首して、

頭を再び挙げる我が両眼から涙が溢れ出る。

いまなお智者大師が思大和尚に教えを受けた会合が続いていて、

その弟子たちの輝きがここに満ちているかのようだ。

願うのは、二人の師せんこうに従って、千劫あやまちにわたる非を一洗すること。

月明かりのもと、竹林の中の溪流を歩けば、ほのかな霧が山に揺れ動く。

鐘の聲に送られて谷を出たけれど、心はなおも山に留まる。

首こうべを回らして吾が家の名の付く大蘇だいそ、小蘇しょうその山を見る。

我が晩年ばんねんに至って、これから私はどこに帰ろうというのだろうか。

【補足】 [(1) 「法家の学」と訳したのは原詩では「刑名」。法家は戦国時代に発展した学問の系譜で、人の内側にある規範じん [仁] に則ることを重視する儒家に対して、法によって人を外側から規制することを重視する。作品番号 06-1-005 で見た李斯りしは法家の思想に基づく政策を実行した代表的な人物である。蘇軾を初めとする保守派の人々は、王安石が主導する改革は「法家の学」に準じるもののだとして強く批判していた。

(2) 蘇軾はここが「三蘇」の地であると聞いて、恵思のように人生の大きな岐路きろに立っていると強く感じたのだろう。なお後世、「三蘇」といえば蘇洵、蘇軾、蘇轍の父子を指すことになる]

■ 【06-1-010】 梅花二首

【解題】 蘇軾さんそは三蘇の地に心をひかれつつも前に進み、1月20日、黄州こうとの境に達する。黄州には黄岡県、黄陂県、麻城まじょう県が属し、麻城県の春風嶺しゅんぷうりょうで、峠とげに開く梅の花を見てこの2首の詩を詠んだ。

【訳文】

其の一

春がきて、奥深い谷にも潺潺と水が音を立てている。
草や雑木に間に、的躰な梅の花が開くのは、
昨夜の東の風が凍った石をも裂いたからなのか。
ここの梅の花の半分が雪のように飛ぶのなら、
私は一緒になって山を登って行きたいと思う。

其の二

何が、私の奥深くにあるものを慰めてくれるのか。
酒ではないし、
梅の花も、
開けば落ち着かないし、散れば愁いかけこる。
それでも、
これから続く谷川の三百回の折れ曲がり、
黄州に着くまでの間ずっと梅の花が送ってくれるのなら
私は辞退はしない。

【補足】 [黄州の町 [州庁は黄岡県にある] まであとわずか。言い知れぬ不安に襲われもするが、折よく咲き出した梅の花にエールを送ってもらっていると見て、敢えて力強く前進して行こうとしたのだろう]

■ 【06-1-011】 万松亭、并叙

【**解題**】^{まじょう}麻城県にある^{ばんしょうてい}万松亭で詩を詠んだ。序文がある。

【訳文】

叙
^{まじょう}麻城県知事であった^{ちようき}張毅が、道を行く人の上を被うように、左右に一万本の松を植^{ばんしょうてい}え、万松亭を建てた。それからまだ十年にもならないのに、残っている松は十分の三もしくは四しかない。後の者が張毅の意思を嗣^つがなかったのを残念に思い、この詩を作る。

穀物によって一年の計を立て、木によって十年の計を立てるといふ。

張知事の計を受け継いで、助ける人はいなかったのか。

百年の計は徳をもって立てるといふ。

張知事の徳を好む心が受け継がれてゆくのなら、

この松も茂り、知事の子孫も枝を伸ばすであらうに。

天はどうしたことか、この松が斧で伐られてしまうことから救ってくれなかった。

野火までも、氷雪に痛めつけられたこの松を憐れんでいる。

木を大切にせよという古い歌がある――

それを心して歌って、残った松の幾本かは大きく育ててほしい。

■ 【06-1-012】 戯作種松

【**解題**】松の植樹には一家言ある蘇軾のこと [→作品番号 03-3-009、05-5-007 など]、^{ばんしょうてい}万松亭の松を見て前の詩だけではすまなくてこの詩も作った。「戯れに作った」と詩題にあるよう、言葉が言葉を呼んで次々に飛躍する。詩の冒頭で、少年の日に松を植えたといっているが、実際には父や妻の墓所のまわりに植えた松のことを歌っている

のだろう。

【訳文】

私は昔、少年の日に、

東の岡が松でいっぱいになるまで植えた。

最初に、

根が一寸ばかりしか伸びていない松を、

小さな稲の苗を植えるようにして移植した。

二年経っても、

黄色い茅ちがやよ朧おぼろ低いまま、

一つ一つは尖った麦のきの芒ほこのようであった。

三年にして、

蓬よもぎの丈たけを超えるようになり、

山に牛や羊の群れを放ったようなありさまになった。

それから十余年の間、その松を見ていないが、

すでに竜を想わせるような姿となって、

夜の風に浪が砕けるような音を発し、

朝の露が根もとに宿って美しい珠のように輝いているであろう。

私は松あんにの膏しんやくを煮て神薬を得たいものだと、

そのためなら百本の桑を伐ることまで考えていたのだが、

人の世の事はたいたいがうまいかないもので、

その計画は泡と消えてしまった。

ところが、この地にきてみると、

路の両側に松があって蒼い髭のようによく繁っている。

茯苓ぶくりょう[仙薬になるきのこ]は得られないだろうけれど、

いい具合に亀の甲羅のようなひび割れがあれば、

斧きずで瘡をつけて松脂まつやにを取り、

釜で煮て冷水に投じることを百回繰り返すなら、

真白な霜のような物が得られ、

それを飲むなら五穀で汚れた腸が洗われ、

人の寿命を食う鬼かを槁かれさせ、

骨の髄まで緑色となって、丹田たんでんから幽かき光が発せられるようになるだろう。

白髪は消え、瞳が四角の仙人となり、

さらに五百年の後に、鶴に騎って故郷に還るのだ。

【補足】[(1) この詩の後半は、碩学の注釈家も「仙家の事を説くに解すべからざるものあり」と嘆き、蘇軾の妄想には誰も付いて行けないので、訳詩は凡人のごく平板な「ずっぽ訳」である。(2) 丹田たんでんは臍の下あたりにおいて、「気」の廻りを司る極めて重要な器官とされた]

■【06-1-013】張先生、并叙

【解題】麻城まじょう県の故県鎮こけんちんで張先生ちやうせんせいと呼ばれる風変わりな人物に会ってこの詩を詠んだ。序文が付いている。

【訳文】

叙

先生はその名を知らない。黄州の故県鎮こけんちんの人で、ももとの姓は盧であったが、張氏ちやうに養おわれた。陽

に狂を装い、垢にまみれ、汚れがひどすぎて寒暑もその内側にある身を侵すことがない。昼間は市中を独りで歩きまわり、夜はどこに止まるのか人は知らない。往来の者が張先生を見ようとしても、たいいていはうまくいかない。ところが、私が試しに人を使わして呼んでみたところ、先生は喜んで来てくれた。来たのはよいが、立ったまま何もいわない。私が尋ねても返事をしない。座るよういってもきかない。駅舎の建物の中をじろじろ見て、しばらくすると行ってしまった。駅舎に普通はないようなものがあつたのたろうか。一体何かあつたのか、先生の思うところのものを追認しようとしたけれども、まだそれはできないている。

何も無い建物を熟視してついに何もいわなかった。

きっと私が天全てんぜん〔本性を完全に守っている〕ではないのを先生は知つたのたろう。

人はこいつ。

「よくまあ駅舎に来てくれたものです。

張先生をそのようにさせた人もまた賢人でございましょう」

張先生は、履を脱いで糞小屋の中でも眠りにつき、

氷がやたらと流れる下る川でも水浴びをする。

かつて唐とうの時代に、朱桃椎しゅとうついという名高い隠者がいて、

高士廉こうしれんがその地の長官になったときに丁重に招いたところ、

朱桃椎はやってきたものの何も言わずに去ってしまった。

高士廉は朱桃椎の後ろ姿を拝し、

「あのお方は作為的なことは何もせずにここを治めよと教えてくださったのだ」

といって、法規を簡便にし、税金を安した。

しかし、それはあくまでも高士廉の勝手な当て推量であつて、

きっとそいつのことではなかつたのたろう。

【補足】[罪人として黄州こうにきた蘇軾そくは、張先生ちやうせんせいに認められるところとはならなかったと、この詩でいっているのだらう]

■ 【06-1-014】 記張愍子

【解題】前の詩の張先生ちやうせんせいと同じ人物を描いたと思われる『張愍子ちやうかん しについて記す』という短文があるので、それも見ておこう。

【訳文】

黄州こうの故県鎮こけんちんの張愍子ちやうかん しの振る舞いは狂人のようで、これを見る人は「火付け野郎」と罵る。いさか書道を心得とくていて、紙しを与えこくると唐の鄭谷の雪の詩を書く。人に使われて力仕事をし、一日中続けることができる。時には物乞いをするが、私が錢せんを与えようとしても受け取らなかつた。冬も夏も一枚さもの褐あかで過ごし、三十年変わらないという。しかし、近付いても垢あかの臭いを感じることはない。実際にこのような人物であるけれど、土地いじんの人はなかなかの異人[人とは異なる次元じげんに生きる人]であるようにいふ。本当にそうなのかどうかはわからない。

【補足】[ここにある「異人いじん」は、蘇軾の人生観を探る上で重要なキーワードの一つである。先に見た僧どんこうの磨公 [→作品番号 06-1-008] も異人であり、次にもう 1 人の異人を見る]

■ 【06-1-015】 方山子伝

【解題】麻城まじやう県と黄岡こうこう県の境にある丘、そこを超えれば、あとは黄州こうの町へと下ってゆくことになる。麻城県側から丘への坂を登りつめると、そこに奇跡の出会いが待ち受けていた。それによって黄州での日々が大きく変わり、さらには後の蘇軾の人生をも変えることになった。夢にも会うとは思っていなかつた人がそこにいたのである。

その場面を1年ほど後になって蘇軾自身が記したこの文章で見ておこう。

【訳文】

方山子^{ほうざんし}は光州^{こうしゅう}、黄州^{こうしゅう}の間で自在に生きる隠者である。

若いときは漢代の有名な朱家^{しゆか}、郭解^{かくかい}といった男伊達^{おとこだて}の人となり^{まぢ}を慕い^{きょうと}、閭里^{かいら}の侠徒は皆この人を宗としていた。壮年になると、己の侠気を折って書物を学び、表の世界で存分に駆けまわろうとした。しかし、ついに世とは^あ遇わなかった。

後に光州と黄州の間の岐亭^{きてい}というところに逃れ^{いかり}、庵を結び、野菜ばかりを食べ、世間にその動静が聞こえないようになった。かつて所有していた車や馬を棄て、きちんとした衣服や冠^{こぼ}を毀ち、山中を徒歩で往来し、人が見ても誰であると識れることはなかった。その著けている帽子が、方くて高く聳えているのを見て、「これが古の方山冠^{ほうざんかん}のなごりの姿なのだろうか」という人があり、それで方山子[方山冠の先生]と呼ばれるようになった。

私は黄州に謫居^{おとがめをうけてなご}れ、岐亭を通りかかり、たまたまこの者に会った。

私はいった。

「嗚呼^{ああ}、あなたは昔馴染^{ちんぢう}の陳慥^{ちんざう}さんではありませんか。どうしてここにいますか」

方山子も矍然^{おどろ}いて、私がどうしてここに至ったのかを尋ねた。私がわけをいうと、俯^{うつむ}いてしばらく答えなかったが、上^{あお}を仰いで笑い、

「どうぞ我が家にお越しください」

と、私を招いてその家に泊めてくれた。

それはごく小さくてからんとした家で、しかし、妻子や使用人は皆それぞれに満足しているようで、私は^{いづまいをただ}聳然してこれはなかなかのことでありと感入った。

さて、方山子は若いころは酒をやたらに食らって剣を好み、金を泥土のように使ったものだ。十九年前、私は岐山^{きざん}[鳳翔^{ほうしやう}]にいたときに、方山子が馬に乗った二人の従者を連れ、二本の矢^{ふし}を挾んで、

西山に遊ぶのを見た。鵲がその前に起つと、従者に命じて逐って射させた。矢は当たらなかった。方山子は馬を奮い立たせ、進み出ると、一発で仕留めた。そして、私と馬上で兵の用い方や古今の成功と失敗について論じた。方山子は己のことを一世の豪士であるといった。

あれからどれほどの日数を経たのか、方山子の眉間にはなお精悍の色が現れている。これで山の中に隠れ住むような人物であるのだろうか。

方山子は、実のところは代々官僚としての実績があり、それをもって官職を得ることもできたはずで、官の仕事に従事していたならば、いまごろはとくに世に名が聞えるまでになっていたであろう。しかも、その家は洛陽にあって、公侯に等しい壮麗な園宅を構え、黄河の北に農地があって、一年に帛にして千匹分の収入がある。富んで楽しむのに十分であるのに、それを棄てて一切取らずに、独り山の中にきているのである。何かしら得るところがあるから、きっとそれているのだろう。

私は聞くに光州と黄州のあたりには異人がたくさんいるという。陽は狂人のように見せかけ、垢まみれて、会おうと思ってもなかなか見ることができない。方山子はあるいはこうした人々と会っているのだろう。

【補足】〔(1) 方山子とは陳慥〔字は季常〕の仇名である。昔馴染みとあるように、陳慥の名はすでに作品番号 02-3-015 などで見ている。蘇軾の最初の任地である鳳翔で、いまでいえばパワハラで蘇軾を大いに悩ませた陳希亮〔字は公弼〕知事の子息である。陳希亮は、蘇軾が鳳翔での任務を終えた後に間もなく亡くなっている。官職には就かずいた陳慥のその後の消息を蘇軾は何も知らずにいた。蘇軾が黄州に至る直前に最後の峠にさしかかると、青い日傘を並べて待っている人がいた。それが陳慥だったのだ。(2) 陳慥との驚くべき再会を、文章としての効果を高めるためであろう、ここに示した『方山子伝』では、例によって舗席を装って必ずしも事実のままには書いていない。①陳慥は独自の情報網を駆使して蘇軾の到着の日時を測って待ち受けていたのだろうが、方山子がたまたま岐亭を通りかかって偶然出会ったように書いている。②陳慥は蘇軾が黄州に流された経緯を知っていたのだが、方山子は何も知らずにいた

として理由を尋ねている。③岐亭にある方山子の庵はごく小さい〔原文は幅が一丈、高さが一丈としている〕とあるが、実際は陳慥にはそれなりに財産があり、この後、黄州での蘇軾の暮らしを何かと支援している。また方山子の妻子がそれぞれに満足しているとあるが、陳慥の妻はかなり嫉妬深い人であったと、いらぬ詮索をしている考証家もいる。④方山子の家は代々官僚であったとしているが、作品番号 02-3-015 で見た『陳公弼伝』には、陳希亮ちんきりやうの代で初めて官職に就いたと記してある。陳希亮の功績によって子弟は無試験で官職を得る恩恵を被り、三男まではそれによって官職に就いたが、四男の陳慥には及ばなかったと『陳公弼伝』にはある。一家が洛陽らくやうに豪邸を構え、莫大な収入があるというのも恐らくはかなりの誇張であろう。これらは方山子が謎めいた人物であると印象付けるために少々話を盛ったのである。方山子が「異人いじん」と交流があったことは事実で、その幾人かを蘇軾に引き合わせたことで蘇軾の黄州での日々は奥行き深いものとなった。(3) なお、作品番号 02-4-014 で引いた信憑性のあまり高くない記録によると、陳希亮は錬金術を会得したようであるから、それによって豪邸を得たと想像するのはなかなか愉快であろう]

■ 【06-1-016】 陳季常所蓄朱陳村嫁娶図二首

【解題】蘇軾きでいは岐亭にある陳慥ちんぞう〔方山子ほうざんし〕の家に案内され、そこで『朱陳村嫁娶図』を見てこの詩を作った。この図は、朱家しゆと陳家ちんが互いに嫁を娶り合って、他の家とは一切姻戚関係を結ぶことがないという村を画いたものである。

【訳文】

其の一

いったい何れの年に、顧愷こがいし之もしくは陸探微りくたんびが絵筆を振ったのだろうか、

画いたのはこの『朱陳村嫁娶図』。

聞くところでは、

一つの村に朱と陳のふたつの姓しかなく、

家の地位を高めるために名のある貴族の嫁を金で買ったりはしない。

其の二

私はこの朱陳村のある徐州の元の知事。

かつて私は耕作に励むよう民を指導するために隣の杏花村にまで行った。

現在の風物はとても画々に堪えない、

県の役人が錢を徴収するために夜でも村人の門を叩きにくるのだから。

【補足】〔(1) 朱陳村は蘇軾が前に知事をしていた徐州管内の蕭県にあった。画に描かれた朱陳村は遙か昔の理想化された姿で、現実とはまるで違う。改革政治は税金を錢で納めることを徹底させようとした。(2) 知らぬ土地の黄州に向かっていた蘇軾は、旧知の陳慥に会ったことで不安な気持ちがかかなり和らいだからなのだろうか、獄から出てまだ1カ月で早くもここで政事批判をしている〕

■ 【06-1-017】 臨江仙

【解題】岐亭の近くに竜丘山がある。漢の時代の乱れに高い位を捨てて洛陽から逃れてここに隠れ住んだ竜丘先生という人がいたとの言い伝えがあった。竜丘先生と陳慥をないまぜにしたこの詞を作って陳慥に贈った。序文がある。

【訳文】

竜丘先生は、二人の侍女に兵士の服を着せて駿馬に載せ、洛陽から蜀に行こうとした。溪山の景

色のよいところがあるとしばらくそこに留まり、それを見る人は「異人」であると思った。それから十年ほどして黄岡の北に家を建てて住み、静安居士と号した。

細馬遠駄双侍女、[美しい馬に乗せて遠く二人の侍女]

青巾玉帯紅鞵。[青い衣、玉の飾りの帯、紅い靴]

溪山好处便為家。[溪山のよいところがあればそこが家]

誰知巴峡路、[まさか誰も思わないでしょう、蜀に至る道で]

却見洛城花。[洛陽の名花のようなこの美女を見ようとは]

面旋落英飛玉蕊、[振り向くとき、落ちる花びら、飛ぶ花の蕊]

人間春日初斜。[人間世界の春の日も斜めになり]

十年不見紫雲車。[十年の間、美女を乗せた車を見ることはありませんでした]

竜丘新洞府、[竜丘山は新たな仙人境]

鉛鼎養丹砂。[鉛の鼎で不老長生の薬を作るのです]

【補足】 [陳慥は蘇軾と同郷、眉州青神県の出身であるから、洛陽から蜀に行こうとして途中の竜丘山に留まったという竜丘先生の伝説が生きてくる。この詞の後、陳慥は竜丘を号とするようになる]

■【06-1-018】少年時、嘗過一村院。見壁上有詩、云、夜涼疑有雨、院静似無僧。不知何人詩也。宿黄州禅智寺、寺僧皆不在、夜半雨作、偶記此詩、故作一絶

【解題】いよいよ黄州の町 [黄岡県] に入る前の晩、禅智寺に泊まってこの詩を作った。長い詩の題は次の通り。「少年のころにある村の寺に立ち寄り、見ると壁に詩が記してあった。『夜は涼しく雨が有るかと思ひ、院は静かで僧が無きに似たり』。誰の

詩であるのかわからなかった。黄州の禅智寺に泊まったところ、寺の僧は皆不在で、夜半に雨が降り出した。たまたまこの詩を思い出し、一首の絶句を作った」。

【訳文】

仏に供えた燈火が暗くなりかけると、
飢えた鼠が出てきた。

不意に雨が降り始め、竹が鳴る。

あの旧い詩句を作ったのが何人であれ、

すでにそのときに、

いまこの私の情を知っていたのだ。

■ 【06-1-019】 到黄州謝表

【解題】2月1日、蘇軾は黄州に到着し、新たな職務を与えてくれたことに対する感謝状〔着任報告書〕を記して皇帝に差し出した。

【訳文】

臣蘇軾は申し上げます。

去年十二月二十九日、敕書によって、けんこうしやうしよすい 檢校尚書水部員外郎にせきじや 貴授され、こうしやうだんれんふくし 黄州団練副使に充てられ、ほんしやうあん 本州安置となり〔おとやけ 黄州の外に住むことを禁じる〕、せんしよ かつ公の事に僉書〔署名〕してはならないとされ

まして、臣はわたし 今月一日に本所に到着し終わりました。

きやうく 狂愚冒犯〔ぼろ 愚かな私が恐れながら申し上げます〕、もと 固より刑罰は常に定まっているものでありますのに、

陛下の御仁聖によりあわれみ 矜憐を頂戴し、特に軽い規定に従って、必ず死すべきところをお救いいただき、

自ら新たになみだ なることを許可していただきました。謹んで訓辞に服し、たまただ感動の涙が溢れるのを知

るばかりです。

伏して念おもいますに、臣わたしは早くに科挙に合格し、誤まちがって忝かたじけなくも官員の内に加えていただきました。睿哲えいてつの興おこる[賢臣が並んで世が盛んになる]のに逢って、自分自身も功名を挙げたいとの意おもがありました。また、かつて陛下のお召しによって宮殿でそれまでに学んできたことを申し上げましたところ陛下の御評価をいただき、試みしに三州の知事として実際に行くところを觀わたしていたただけのこととなりました。しかし、臣は己の意を用いるところが過当で、日に日に迷はしいに趨まり、天賦の運命は衰窮し、天は臣の魄わたしを奪たまひましたのでしょか、義理はんいに叛違ぼし、陛下の御恩に背き、茫ぼうとして酔夢の中にあるように、自分でわからないままに言語を出してしまいました。陛下は至仁しじんにしてはば赦して下さいましたが、衆議はそれを容赦せず、事情ただを糾として罪を調べるならば、固より都の門の前ふしつで斧鑕ちみ[処刑のための巨大な斧]の下に伏すべきであって、たとえ御恩によって法を曲げましても、魑魅が充満する辺境の地に流されてしかるべきでありました。ところが思いさんいんがけず、散員さんいん[窓際の閑職]を汚せんちし、さらには善地ぜんち[暮らしやすい土地]を叨むさびることを許して下さり、鹿や麕むさびのような者を野に放ち、役立たずの独活の大木のような者を生かして下さることとなりました。

臣わたしは愚ぐの至りではありますが、幸いということを知らないわけではありません。皇帝陛下が徳と刑とを並び用い、善と悪を兼ねて容れ、法を行って恩を知らせようとするところに臣は遇えたのであります。これは小さく懲らして大きく戒めるものであります。天地は臣のような者でも大地の上に載せ天の下に置いてくれはしても、天地の法則の外に出ることまでは許容してけません。父母は臣のような者でも生育してくれはしても、死ぬべきところから出してくれはしません。陛下の御恩を伏して惟おもいますに、何をもって報いたらよろしいのでしょうか。ただまさしく一生そしよくを蔬食あやまして過あし、門を閉ざして愆あやまちを思い返し、深く積年の非を悟り、永久に百官の戒めとなるべきであります。臣は聖世わたしを貪恋どんれんするあまり、敢えて身を殺すこともできません。願うのは、これからの生涯が棄てられたもののままではないこと。もしも、刑余の身でもなお力を尽くすことを得られましたならば、必ず身を矢や刀の間に捐すてるものであります。天を指して心に誓います。死ぬともそれを変えることはありません。

【補足】[極めて真摯な反省文である。皇帝に差し出す文章であるから、何はともあれ体裁を整えたというわけではない。これらの言葉に真の裏付けがあるのかどうか、これから見てゆく詩文で明らかになるであろう]

■【06-1-020】初到黃州

【解題】^{こう}黃州に到着した直後の思いを記した詩。蘇軾はあくまでも蘇軾で、上の感謝状とは矛盾するような言葉をいきなり発する。

【訳文】

自分で笑ってしまうのは、

普段から口のために忙しくしてきたこと。

老いるに従って、やることなすことみんな荒唐でたらめになってしまった。

こ^こ黃州は、

城郭めくを繞るよう^{ちやうこう}にして長江が流れる。

——きつと魚がうまいに違いない。

美しい竹が山に連なるよう^こにして生えている。

——きつとよい香りの筍が採れるに違いない。

だいたい朝廷から放逐された旅人は員外郎いんがいろうに置かれるものだし、

詩を得意とする者すいぶは水部の一員となるのだ。

た^{はず}た漸かしく思うのは、

糸の先ほども世に補うことができない身でありながら、

朝廷は酒を搾った後の袋を私のために費やして下さることだ。

【補足】[(1) 蘇軾の肩書にある「員外郎」や「水部」に関連する故事を引いて、実

質的な仕事のない窓際族になった自身のことを詠んでいる。それでも、「酒を搾った後の袋」〔原文は^{あつしゅのう}圧酒囊〕が給与代わりに現物支給されると自嘲しているのである。実際にそのような囊の支給があったのか定かではないが、蘇軾はほとんど無収入の状況に置かれたようである。(2) この詩をどう見るかで蘇軾に対する好悪は大きく分かれるであろう。罪を得て流されたのだから、当地に着いての第一声は、深く悲嘆するものであってしかるべきで、^{とうだい}唐代の人々はほぼ例外なくそのような詩を詠んだ。ところが、蘇軾はいきなり「自ら笑う」〔自笑〕と歌い出す。「口のために忙しくしてきた」といえば、当然、言葉数が多すぎて失敗したことを反省しているのだろうと思うわけだが、魚や筍を食いたいと、当面の問題はそちらの「口」であるとはぐらかすようなことをいう。生真面目な人は怒ってもおかしくない。一方で、自身の境遇を客観的に軽やかに歌うところに強靱な精神を見て、この詩に魅力を感じる人もいる。宋代の^{そうだい}人々の一系^{おうようしゅう}列〔歐陽脩と蘇軾をその代表とする〕はそのような^{したいふ}士大夫像を追求してきたのである]

■ 【06-1-021】 黄州春日雑書四絶

【^こ解題】 黄州に到着して間もないころに詠んだと推測される詩。

【訳文】

其の一

このあたりの春はなお冷やかで、

早咲きの梅がまほろびだしたところ。

^{うつく}妍さを闘わせているのは柳の緑と波の光。

^{わい}淮河のあたりを飛ぶ雁はみな北に向かっている、

私のところに手紙をもたらすものはいないのだろうか。

【補足】〔訳詩では、あいまいに「このあたり」としたのだが、原文は「楚郷」^{そきょう}で、蘇軾の認識としては、黄州は「楚」^この範囲に入るようである〕

其の二

都のあたりではまだまだ春は浅く、

可憐なのは梅の花だけ。

梅の前では牡丹などは俗物に過ぎず、

豊肌弱骨^{ほうきじやくこつ}〔牡丹のぼてつとした感じ^{うづし}をいう〕は妍いとはいえない。

【補足】〔深読みをすれば、都の人々を牡丹に譬えて皮肉っているのかもしれない〕

其の三

清らかな曉に衣を^{あかぎ}はおり藜の杖をついて歩く、

牆^{がき}を隔てて見えたのは最もよく繁った枝。

老人は半日費やしても、

この梅の美しさに酬^{あは}いるすべがなく〔つまり、好い句が浮かばない〕、

夜になって、燈火のもとで『楚辞』^{そじ}を読む。

【補足】〔『楚辞』は古^この楚国^{いにしえ}の韻文^{そこく}で、屈原^{くつげん}や宋玉^{そうぎよく}が代表的な作家であった〕

其の四

我が腹はどつちも病みやすいのか、

茶も七杯は飲みきれない。

明け方の窓辺にいたと思っていたら、

眠りから覚めるともう日が西に傾いている。

貧乏であるから、桃や李を植える隙間もないのだが、

門前には花売りを毎日見ることができる。

【補足】〔(1)「七杯の茶」とあるのは、唐代の盧仝とう とうが、一杯目から七杯目まで順に茶の効用を説いたことに基づくもの〔→作品番号 04-2-078〕。(2) 黄州こうは田舎の町ではあるけれど、花売りが日々歩いていたのだろう〕

■【06-1-022】安国寺浴

【解題】上の詩に、城郭を廻るようにして長江ちやうこうが流れる〔長江繞郭〕とあった。黄州こうの町は、長江をぐいと直角に折り曲げるようにして台地が張り出したところに位置し、長江は町の西北から西南、東南の三方を廻って流れ下る。それに対して、町の北側と東側は小高い岡になっている。黄州に到着した当初、蘇軾は町の南東側、清淮門せいわいもんの外にある定恵院じやうゑいんという仏教寺院に寓居した。恐らく、黄州知事の陳軾ちんしやく〔字は君式〕が手配してくれたのだろう。蘇軾が罪人であるにもかかわらず、陳軾はすこぶる好意的であった。定恵院には美しい竹林があり、奥の小山かいどうに一本の海棠があった〔後にそれを詠んだ詩を見る〕。近くに、やはり仏教寺院の安国寺あんこくじがあり、蘇軾はそこで入浴し、ここまでの旅の疲れを癒した。

【訳文】

老いた身には、何もかもがものう懶い。

それでも、体に垢がたまればやはり沐浴もくよくしたいと、それくらいおものことは念う。

髪は衰えて耳に達しないくらいしかないのだが、

面倒ながらも、月に一回は刈って洗わないとならない。

ここは山がちの町であるから、薪炭がたくさんあるのだらう、
湯を沸かす煙が谷を暗くするくらいに昇っている。

我が身に付いた塵と垢はいったいどれくらいあったのか、
さっぱり たづな てかせ
 儻然として羈や梶がはずれたかのようなのだ。

衣を緩くして小さな部屋に座り、
髪をばらばらにしたままで竹を眺める。
くる よろず ほど
 心を困しませるものも、万の縁もなく、

身を安らかにするには小さな寝床があれば十分だ。

これは単にけがれ きよ穢を浄めただけではなく、
まいじよく
 榮辱とやらも洗い流したのであろう。

あまり多くを語り過ぎないようにしよう、
もう黙って帰ろう。

ここにある理は、ことわり かなめ要のところみが熟すのを観る必要があるだらう。

【補足】[(1) この詩の初句は「老来百事懶」おい く ひやく じ ものう [老い来れば百事懶し]。「老」といいつつも、このとき蘇軾は数えて44歳である。すでに見てきたように、蘇軾は詩文中に「老」や「病」という語をよく用いる。真に老いたわけではなく、本当に病気ではなくても、心理的あるいは身体的もしくは状況的に不如意であることを「老」「病」で言い表すのだらう。この詩では「たくきよ適居」の身であることをあからさまにはいわずに「ろうらい老来」と表現しているのである。(2) 蘇軾は沐浴して何かを感じ取った。それが何であるのか。「かなめ要のところこうが熟す」のをこれからの黄州の日々で観てゆく]

■ 【06-1-023】安国寺尋春

【解題】じょう さい いん定恵院にきてまだ日の浅いころ、早朝に目を覚まし、あんこく じ安国寺のあたりを歩い

て詠んだ詩。

【訳文】

寝ていると百舌もずの音がする、

あれはきっと春の風を呼んでいるのだろう。

起きて花や柳を尋ねると、

どの村も同じ春の盛りを迎えようとしている。

町の南の古い寺あんこくじ[安国寺]は長い竹に囲まれ、

小さな建物の蔭やら曲がった欄干のあたりに深い紅色がひよいと覗く。

花を見ると、老いを嘆いて年少おとのころを憶うのが常のこと、

酒に向かへと、家を思っおもてかへも老翁となったのを愁うのが常のこと、

何しろ、眼は雲母うんもがきらきら光るようなありさまだし、

髪は少なくなってまとめるのも簡単ではない。

遙かに知る、この二月、都は玉仙觀ぎょくせんかんやら洪福寺こうふくじやらのあたり——

花が海のように開いて、我も我もとやってくるのは、

薄羅うすざねを霧のように纏って化粧したばかりの女、

風のように馬を速く走らせて腰に付けた玉ぎょくを威勢よく鳴らす男。

そうした薄夫はくふ[輕薄児]を見て、唐の盧全ろぜんは、

「薄夫は錢があると楽しみに耽るが、わしは錢がないから淡泊を養っておる」

と、嘯うそいた。

盧全にしたところで、薄夫と同じ酒を食らって結局は一文無しになった。

私は病んだたふさ[謫居]身で、もとより錢はなく、

春風の吹く九十日間を空しく過ごすはめになったのだが、

今日は息子を伴ってここに花が発く^{ひら}の^みを見る^{こと}ができた。

【補足】[長い獄中生活と旅を経て、ひとまず定恵院^{じょうえいん}の寓居に落ち着けた安堵感を歌っているのだろう。息子は長男の蘇邁^{そまい}である]

■【06-1-024】黄州安国寺記

【解題】「理^{ことわり}の要^{かなめ}」はどのようにして熟していったのか。これより4年後の元豊七年[1084年]4月に記したこの文章から窺い知ることができるので、先に見ておきたい。

【訳文】

元豊二年十二月、私は湖州知事^{ちゆう}であったときに罪^{つみ}を得た。お上は誅^{ちゆう}するには忍びないと、黄州^{こうしゅう}団練副使^{だんれんふくし}にし、過^{あやま}ちを思^{おも}って自ら新^{あらた}たになるよう^{よう}にという処^{ところ}分に^にして^ただ^きった。その明^あくる年二月、黄州^{こうしゅう}に到着^{とく}し、しばらくすると、仮^{かり}の住^{すま}まい^かま^ぼ定^{ぢやう}まり、衣^い食^{じき}もやや足^{たり}るよう^{よう}にな^なった。

私は、門^{かど}を閉^しじ、部^ぶ屋^やの内^{うち}を掃^{はき}き^よめ、世^よ間^{かん}から退^ひいて謹^{こん}慎^{しん}し、ばらばらにな^なってしま^まっていた我^{われ}が魂^{こん}を一つに収^こめ、思^{おも}い^ねん^んて、自^{みづか}ら新^{あらた}たにな^なるに^にはど^うし^らよ^いのかと考^かえ^た。これま^までの己^{おの}の挙^{きよ}意^い[思^{おも}いの定^{ぢやう}め方^{かた}]、動^{うご}作^{さく}[行^{こう}動^{どう}の仕^し方^{かた}]を顧^かみ^みると、全^{ぜん}てが道^{みち}に中^{あた}ら^ないもの^{もの}であ^あった。今^{いま}回^{かい}の罪^{つみ}を得^えたこと^{こと}だけ^{だけ}が問^{もん}題^{だい}な^なのでは^{では}ない^いのだ。

多^{おほ}々^ずあること^{こと}の一つ^{ひとつ}を新^{あらた}たに^にす^すると、そ^そのた^ため^めに二^{ふた}つ^つを失^うつこと^{こと}を恐^{おそ}れ^れな^なけ^けれ^れば^ばな^なら^らない^い。こ^これ^れか^から^らそ^それ^れへ^へ、そ^それ^れか^から^らあ^あれ^れへ^へと順^{しゆん}に考^かえ^えて答^{こた}え^えを求^{もと}め^めても、悔^{くわい}い^いても悔^{くわい}い^いよ^よう^うの^のな^ない^いと^とこ^ころ^ろに^に行^いっ^つて^てしま^まう^うの^のだ^だった。

そ^それ^れで^で深^{ふか}く溜^かめ^め息^{いき}をつ^つき、

「道^{みち}の知^ち識^{しき}は氣^き[己^{おの}を構^か成^{せい}する物^{ぶつ}質^{しつ}とエネ^えルギ^ぎー]^を制^{せい}御^ぎする^には十^{じゅう}分^{ぶん}なも^{もの}では^{では}な^なく、性^{せい}[天^{てん}より授^{じゆ}か^かった本^{ほん}性^{せい}]^は習^{しゅう}[後^{こう}天^{てん}的に^に身^みに付^ついた習^{しゅう}性^{せい}]^に勝^かつ^つに^には十^{じゅう}分^{ぶん}なも^{もの}では^{では}な^ない。根^ね本^{ぽん}か^から^ら耕^{かう}し^し直^ちさ^さない^いで草^{くさ}の先^{せん}を刈^{かり}るよ^よう^うなこ^{こと}を^をし^した^たと^とこ^ころ^ろで、改^かめ^めら^られた^たと思^{おも}っ^つても^も必^{かならず}ず^ずまた^た草^{くさ}が茂^さるよ^よう^うに^にして^{して}元^{もと}に^に戻^{かえ}っ^つて^てしま^まう^う。こ^こは^は誠^{まこと}の心^{こころ}に^に帰^{かえ}っ^つて、仏^{ぶつ}の教^{きやう}え^えに^に帰^{かえ}依^いし、一^{いっ}切^{せつ}を洗^{せん}っ^つて^てしま^まう^うべ^べき^きでは^{では}な^ない^いのか」

と、つぶやいた。

町の南に寺を見つけ、それは安国寺あんこくじという。木々が茂り、竹が長く伸び、池あずまやがあり亭がある。一日ないし二日ごとにそこに行き、香を焚き黙って座り、深く自ら省察した。すると、物も我も忘れ、身も心も皆くう空になり、罪の垢が生じてくるところを求めてもそれはもはや得られないようになった。全ての念が清浄になり、身を染めていた汚れが自ずと落ち、表も裏も翛然さっぱりとして、付き纏うものは何もなくなった。

私は竊ひそかにこれを楽しんで、且あさに往き暮に還ること、これで五年になる。

寺の僧けいれんを継連けいれんといい、僧の首かしらとなって七年で朝廷から衣を賜わり、また七年にして号を賜わるはずであったのだが、継連は僧の首から降りようとした。寺の僧や土地の父老が一緒になって引き留めると、継連は笑っていった。

「足ることを知っていれば辱めを受けない。止まるところを知っていれば危ういことはない」

それでついに辞めてしまった。そうした継連の振る舞いに対して私は我が身を愧じなければならぬ。

元豊七年、私は汝州じょに旅することになり、継連はいった。

「この寺にはまだ『記』というものがありません。石は用意してあります。どうか一文を書いてください」

私は辞退することができなかった。

寺は南唐国の保大二年[944年]に立てられ、始めの名は護国寺ごこくじであった。嘉祐八年[1063年]にいまの名を賜わり、本堂も離れも高殿も皆が新しくされた。巖麗深穩げんれいしんおんで、人の意を悦おんばせ、ここに来る者は帰るのを忘れる。

毎年正月に一万人もの男女が寺の庭に集まり、飲食して音楽を演奏し、瘟神おんしん[疫病の神]を祠まつる。これは長江と淮河の間で行われている旧い習俗である。

四月六日、汝州団練副使、眉山の蘇軾そくし記す。

【補足】[蘇軾は黄州こうにきて、新しい自分になろうとした。これは、蘇轍が兄の罪を軽くしてほしいと皇帝に願った文章 [→作品番号 05-5-094] に「過ちを改めて自身を一新する」とあったのと一致する。具体的にどのようなようにしたのかがこの文章に記され

ている。蘇軾は時折軽薄ともいえるような言辞を吐くのだが、自身に向き合うときは非常に真剣で、深く思いを巡らした。しかし、「全てが道みちに中あたらず」、一つを変えてもかえって二つが駄目になってしまうという具合にたちまち行き詰まってしまった。ここで思い出すのは、かつて蘇軾は「道に達する」ということについて後輩に向かって教えを垂れていたことだ [→作品番号 05-4-101]。そのときは己のそれまでに歩みにある程度の自信があったのだろう。しかし、魂魄がばらばらになるまでにその自信は打ち砕かれてしまった。蘇軾は詩文で朝政を批判したことが悪かったとはたぶん思っていなかった。改革派の一部の愚昧な連中によってあらぬ罪を着せられてしまったとも思っていなかった。我々には想像が付かないのだが、皇帝によって罪人とされたことで、人間として全否定されたように感じ、己を完全に一新しなければならぬと考えたのだろう。蘇軾は、道みち、気き、性せい、習しゅうといった旧来の中国哲学の諸道具を駆使して一新しようとした。しかし、根本的な解決策は見出せなかった。そこでいまだ深くは親しんでいなかった仏教に解決の糸口を求めた。そしてたどりついたのが、空くうであった。何かの原因を求めたり、何かを改めたりするのではなく、いったん全てを空くうにし、そこから新たな己になって行くのである。この文章を読んで、二つ前の詩『安国寺に浴す』に戻ると、実は同じことを詠んでいるのではないかと思えてくる。直観的に得たことを詩で表現すれば先ようになり、思索を巡らして行き着いたところを文で表現すればこのようになるのであろう]

■ 【06-1-025】 定恵院寓居月夜偶出

【**解題**】 上に見た『黄州安国寺記』は一旦忘れ、己を新たにすることに思い悩んでいる蘇軾に戻り、時間順に詩文を詠んでゆこう。これは定恵院じょうえいんに寓居して、月の夜にたまたま外を歩いたという詩。初句は「幽人無事不出門」[幽人は事も無く門より出ず]

とあって、冒頭の二字を先の沐浴の詩と比べると、「^{ろうらい}老来」が「幽人」に変わっている。「罪人は門を閉ざして深く自省している」ということを「幽人」の語で言い表しているのだろう。「幽人」はかなり幅広い意味を持ち、俗世から離れて静かに隠れ住む人、あるいは、俗世から離れた心をもって静かに生きる人、あるいは、そうした人と思いが通じ合う人のことである。

【訳文】

^{ゆうじん}幽人はする事がなく、門から出ることもない。

たまたまこの良き夜に、春風を追って出歩くと、

木の枝の先から、寺の建物の屋根が高くあるいは低く飛び出し、

月の光のもと、^{こう}香の煙が細くたなびいてくる。

^{ちやうこう}長江の上の雲は清らかであるけれど、自分の美しさを誇るように姿を変え、

竹に宿る露は声を出しはしないけれど、^{そそ}ほどりほりと瀉ぐかのようだ。

柳の枝が糸のように柔らかく垂れるのに触れて驚かされ、

また花を残した梅の一枝があるのを香りによって気づかされる。

独りて詩を吟じて自分で和し、

酒はとっくにないし、誰も貸してくれない。

酒を飲むなら、老いていよいよその^{こま}真の味を濃やかに知るべきで、

酔っておかしなことを言ってしまったのではないかと、醒めてから^{おそれ}怖るようではいけない。

^{たちまち}春が忽忽過ぎ去るのは惜しむまでもないと、^し訳知り顔につぶやいてみて、

^{よるこ}春を飲む^{こころ}意が^{しほ}年年凋んできたのかと残念な気になる。

たまたまここに仮の宿りを結んでいるのは、

この耳が松に風が鳴る音を愛するからだ。

門を閉ざして、客人の訪れを断り、

冠^{かんむり}なんそはさかさまにし、衣もそこらにうっちゃって、

家の者には何をしているのかと罵^{ののし}られながら、

米を炊く湯気がふわふわと甑^{こしき}から立ち昇り、

甘藷^{かんしょ}を搾った汁がまたぼと槽^{おけ}から垂れるのを見ている、

そういう暮らしでよいのだろう。

■【06-1-026】次韻前篇

【解題】上の詩と同じ韻を用いてもう一首作った。

【訳文】

去年の花の落ちるころ、

徐州^{じょ}にいて、月に向かって酔って歌い、

清らかな夜を褒め合ったのだった。

今年は花の開^{こう}くのを黄州で見て、

湿った夜風が、門を閉ざした小さな部屋へと入ってくる。

花は時がくれば必ず咲く、

だが、我が万事はそのようにはならない。

残りの年月はこの酒にも似て、

もう注げるものがない。

昔^{おも}を憶うと、

舟^はで巴峡^{きょう}へと浜^{さかいのぼ}ついでたときに、

樊口^{はんこう}〔黄州の対岸〕で高い^{マスト}桅から帆を落としたのだった。

あれから、長江は自ずから衰衰とひたすら流れ続け、

我が白髪は容赦なく紛紛として増え続けた。

古の隠者に倣おう思っても、私には五畝の田さえもなく、

空しくあるのは、古の詩人を数では凌ごうという千篇の詩。

今に至るも故郷の山に背いたままで、帰る計画はなく、

旅の宿りで独り眠る境遇から免れることができない。

若いときに苦い夢を食うような苦勞をするなら、

老いてからは蔗を舐めるような甘い安樂があるという。

いまはなぜか飢えも寒さもなく安居していて、

憂患すべきこともすでに空しくなったのだが、

ときに夢に怖ることがある。

月の光を踏みつつ花の間を通り抜け、

村の酒をちよいとひっかけて、

官長に罵られる前にそそぐと帰るのである。

【補足】[(1) 蘇軾自身の注で、「去年は、徐州で花の下で月に対し、張師厚、王適兄弟と酒を飲み、蘋の字を韻として詩を作った」と書き添えている。その詩は作品番号05-5-016で見ている。(2) 船で長江を遡って樊口に停泊したのは、父の棺を故郷に運んだときで、これより14年前である。樊口の地名はこれから何度も見ることになる]

■【06-1-027】卜算子

【解題】前の詩とほぼ同じ時期に、定恵院で作った月の詞。この年の秋の作であるとする説もあるが、内容的にはこのころのものようである。

【訳文】

欠月挂疏桐。[葉がまばらな桐に落ちかかる欠けた月]
 漏断人初静。[時を測る水音が絶えて静まり返る人の世]
 時見幽人独往來、[ここにひっそりと行き来する孤独の人]
 縹緲孤鴻影。[縹緲に孤り行く鴻の影のようです]

驚起卻回頭、[驚いて起きて回らず頭]
 有恨無人省。[恨みがあっても顧みてくれる人はいません]
 揀尽寒枝不肯棲、[寒々とした枝を選んで選んで、でも棲もうとはしません]
 寂寞沙洲冷。[寂寞も沙洲は冷えびえとしています]

【補足】[(1) この詞で、蘇軾は己を、棲む場所を見出せない孤独な鴻になぞらえている。(2) 後世の好事家は、この詞から次のような物語を作った。牽強付会の作り話なのだが、人々が想い描く蘇軾像に合致するものなのだろう]

【訳文】

楊湜：『古今詞話』に引用されている『女紅余志』より

(これから十四年後、蘇軾は五十九歳のときに惠州に流され)、その地には温超超という十六歳でまだ嫁に行かない美しい娘がいた。超超は蘇軾がくると聞くと、

「我が婿殿だ」

と、いって非常に喜んだ。

温超超は蘇軾の仮の宿に毎夜通い、窓辺で蘇軾が吟詠するのを聞き、その詩詞を覚えるとそっと歩み去った。

蘇軾がその様子を知って窓を開けると、娘は^{かき}牆を超えて逃げた。蘇軾は人づてに、
「君のためにより婿を探してあげよう」

と、娘にいったのだが、間もなく海の向こうの^{かいなんとう}海南島に流されてしまい、三年後に戻ってくるとその娘はす
でに死んで沙の下に埋められていた。蘇軾は『卜算子』の詞を墓に手向け、婿を選ぶ約束を果たせ
なかつたことを、

^{かんし えら つく あ す}
「寒枝を搥び尽して肯えて棲まず」

の句に詠み込んだ。

【補足】 [この話は、実は根も葉もないわけではないとして、次のような事実に基づ
くといわれもするが、これも作り話であるのだろう]

【訳文】

^{えんぶん おうゆうかんひょう}
袁文：『夔牖間評』より

^{こし}
蘇軾が黄州に流されたとき、隣家にはなほ賢い娘がいた。娘は、毎夕、窓の下に忍んで蘇軾が
読書するのを聞いていた。

後に、その家の者が娘の結婚相手を選ぼうとしたときに、娘は、

「蘇軾様のように書物がよく読める人でなければだめです」

といい、どう誰もかなう者が見つからないままに娘は死んでしまった。

■ 【06-1-028】 寓居定恵院之東、雑花満山、有海棠一株、土人不知貴也

【解題】 これも^{じょう えいん}定恵院での詩。詩の題は「寓居するところの定恵院の東の山にさまざま
な花がある。なかに一株の^{かいどう}海棠があるのだが、土地の人はその^{とうと}貴さを知らない」。
海棠が貴いと感じるのは蘇軾が^{しよく}蜀の人間だからだ。海棠は蜀、とりわけ^{せいと}成都を象徴す
る花である。譬えるなら、日本人が異国の地に流されて、山で一本の桜を見出したと

想像するとよいであろうか。

【訳文】

黄州は長江沿いの町、

湿気が満ちて草木の成長が盛んである。

山にあるのはどれもが世俗的な花ばかり、

そのなかで、名花がひそやかに孤独に苦しんでいる。

竹の籬の間から、嫣然と笑みをもらす花——

それは佳人を人気のない谷に置かうなもの、

造物者にどのような深い意があるのだろうか。

天より出た姿は自然界の富貴ともいへば、

金の盤に盛って御殿に献上するまでもなく貴い。

花びらは、朱い唇から酒が入って頬がぼと染まったよう、

葉は、緑の袖を翻して紅をより、さう映えさせる。

朝には、林は深い霧に包まれて暗く、光の及ぶのが遅く、

昼には、日ざしか暖かく風が軽やかで睡りが十分に足り、

雨には、涙にぬれて悽愴く、

月には、人影がなくさらに清淑である。

ここに先生[蘇軾]はたっぷり食べて何もすることがないので、

ただ腹を撫ぜ撫ぜしながらぶらぶらと歩き、

民家だろうか僧舎だろうかおかまいなしに門を敲き、

杖に身を支えて竹を眺めるなどしていると、

たちまちこの絶艶の花によって衰朽の身を照らされ、

嘆息して言葉もなく目をめぐって思うのは――

この辺鄙な土地に、どこからこの花を得たのか、

好事家しよくが蜀しよくの地から移したのか、

一寸の根の植物が千里を旅するのは容易ではない、

とすると、種子たねを銜くわえて、鴻鵠おどりが飛来したのだろうか。

天ほての涯へに流落して、先生と海棠おもにはともに念おもうところがある。

酒を飲んで此の曲を歌おう。

明朝、酒が醒めてまた独りで来ると、

紛紛ふんぶんとして雪のように落ちかけて、

もはや触れるのも忍びがたい……。

【補足】〔この詩で、海棠かいどうの姿に自分自身を重ねて詠んでいるのは明白であるのだが、蘇軾は「ひそやかに孤独を苦しんでいる」というわけではなかった。深い苦しみのなかにありつつも、孤独だったのではない。すでに見たように、陳慥ちんぞう [方山子] [→作品番号 06-1-015] が待ち受けていたし、黄州こう周辺の多数の人々が蘇軾のまわりに集まってくるのである。それはさまざまな社会階層の多様な人々であった〕

■ 【06-1-029】 訴衷情

【解題】 同じころに海棠かいどうを詠んだ詞。

【訳文】

海棠珠綴一重重、[海棠かいどうがひとつまたひとつ、珠たまを綴り重ねています]

清曉近簾櫳。[さわやかな明け方の窓辺近くで]

胭脂誰与匀淡、[さらりと淡あかい紅あかい化粧]

偏向臉辺濃。[ほほのあたりだけが濃いのです]

香葉嫩、[若い葉を見て]

惜花紅。[花の紅を惜しみます]

意無窮。[この思いは窮まることはないのです]

如花似葉、[花なのでしょうか、葉なのでしょうか]

歳歳年年、[毎年、毎年]

共占春風。[春の風を独占しようとするのは]

■ 【06-1-030】 王齊万秀才寓居武昌劉郎伏、正与伍洲相對、伍子胥奔吳所徙渡江也

【**解題**】^{こう}黄州に流されなかったならば、先に見た^{ちんぞう}陳慥との再会はありえなかった。そしてもう一つのありえなかった再会が黄州には待っていた。蘇軾は24歳のときに都に向かう旅に出て、^{けん い}犍為という町で^{おうせい ゆ あざな ぶん ぼ}王齊愈[字は文甫]の書樓を訪ねた[→作品番号01-1-003]。そのとき蘇父子を迎え入れたのは弟の^{おうせい まん あざな し べん}王齊万[字は子弁]で、王齊愈は何かしら事情があつて不在であつた。その後、王兄弟の家は傾き、書樓も手放して犍為を離れ、^{ちやうこう}長江を下つた^{ぶしやう}武昌県に寄寓する身となつた。武昌県は長江を挟んで黄州の向いの地。蘇軾が黄州に着いて10日余り、王齊万がひょっこり^{じやう えいん}定恵院に現れて蘇軾を驚かした。この詩の題は、「王齊万は武昌県の^{りゅうろうふく}劉郎伏に寓居し、そこは長江の中州の^{ごしゆう}伍洲の対岸である。遠い昔に^{ご ししよ ごこく ほし}伍子胥が呉国に奔ろうとして長江を渡つたところだ」。伍子胥は、^{そ こく}楚国の王位継承を巡る争いに巻き込まれて父と兄弟を殺され、一人だけ呉国に逃れた。そのとき、漁師の船に身を潜めて長江を渡つた。後に伍子胥は呉国を強国に成長させ、呉国の軍勢を率いて楚国の都を占領して復讐を遂げた。

【訳文】

貴君の家の稲田は西蜀せいしよくの地に冠たるものだった――

玉ぎよくのような米を搗つき、珠たまのような米を取り揚げ、その量こくは三万斛、

川を塞ぐようにして大量の木材を流して書樓を建て、

碧あおい瓦と朱あかい欄干が山や谷に照り映えていた。

一家をあがての楽しみに、天命などは論じるまでもないと、

蠟燭ろうそくを次々に灯すようにして黄金を使い尽した。

残ったのは、百台の車に満載した蔵書だけ、

筏ちようこうに載せて長江が曲がるころまでやってきて、

江かわのほとりに何かあるかを見ると、

伍洲ごしゅうから遙かに望む劉郎りゅうろうそう藪ぶしだったのだ。

明朝はちようと寒食かんしょく、

貴君がいるその劉郎藪に行こうと思う。

牛を殺して秘蔵の酒を搾って待っていてくれたまえ。

貴君と酒を飲みつつ細かに文を論じ、

ほどよく酔ったころに、江かわのほとりで古いにしへを訪ねようではないか。

今回は三国時代の周瑜しゅうゆや孫権そんけんを弔うことはしないで、

ただ伍子胥ごししよだけに酒を捧げるとしよう。

【補足】〔(1) 三国時代の周瑜しゅうゆや孫権そんけんに言及したのは、黄州こうに赤壁せきへきがあり、そこは孫権〔周瑜はその軍師りゅうび〕が劉備りゅうびとともに曹操の大軍を破った決戦場であるといわれていたからだ。そのことはまた後の詩文で何度か見ることになる。今回は特に伍子胥だけに酒を捧げようとするのは、伍子胥が逃亡した後に父や兄の仇を討ったように、王兄弟も家の再興を果たすであろうというココロであろう。(2) このときの訪問を後に回

顧する文章を作品番号06-5-015で見ると、そこには、^{かんしょく}寒食の日に^{ぶしょう}武昌に赴いたとは記されていない]

■【06-1-031】二月二十六日、雨中熟睡、至晩、強起出門、還作此詩、意思殊昏昏也

【解題】これまで見てきた杭州、^{こう}密州、^{みつ}徐州、^{じょ}湖州での詩の大半は官僚仲間とともに詠んだ社交的な作品であった。^{こう}黄州に来てからは、事に触れて自分自身のために詠んだ作品が多くなり、蘇軾らしさがよりいっそう濃く、そして深くなる。この詩の題は「二月二十六日、雨の中で熟睡した。晩に至って強いて起きて門を出てこの詩を作った。意識が^{ほつきりしな}妙に昏昏かった」。

【訳文】

朝酒三杯をやらかしたせいで、

昼の食事は一品だけでもうたぐさん。

後から後からやってくる雨音に引き込まれ、

眠気がやってくるまに深く寝入ってしまった。

^{こんこん}昏昏と眠って、覚めたと思ったらまた臥せ、

ごろごろ寝返りを打って、いつまでも眠りは足りない。

強いて起きて門を出てみたが、

夢はなおも続いているかのようだ。

泥の深い^{うずら}あたりで竹雞が何やら語っているようであり、

村の暗がり^{うずら}のあたりで鳩の御婦人が何やら泣いているようだ。

この詩を明日の朝になって見たなら、

寝返けたまま書いたのでさぞかし読みにくいであろう。

【補足】 [(1) 「朝酒」と訳したのは原詩では「卯酒」で、もとの意味は卯の時 [午前6時ごろ] の酒であるのだが、たぶん本当に朝酒を飲んだのではなく、調子が悪くて起きられなかった理由を朝酒によるという虚構を設けて詩にしたのだろう。2月1日に黄州に着いて、このころになって疲れが出たのだろうか。(2) 竹雞は「泥滑滑」と鳴き、鳩は婦人の怒りの声のように鳴くというので、この詩の句が生まれている。後に鳥の鳴き声を主題にした詩を見る [→作品番号 06-1-044]]

■ 【06-1-032】 雨晴後、歩至四望亭下魚池上、遂自乾明寺前東岡上帰、二首

【解題】 上に続いてこれも日記調の詩。詩の題は、「雨が晴れた後に歩いて四望亭の下の魚池にまで行き、乾明寺の前の東岡の上を通過して帰った」。四望亭は、唐の時代にこの地の知事であった劉嗣が再建したとの記録があり、黄州の町の北東にある竜王山の高台にあつて、その名の通り非常に見晴らしがよい。蘇軾が寄寓する定恵院からは、乾明寺を經由して北に行き、往復数キロほどの道のり。

【訳文】

其の一

魚池では、

雨が降った後に、浮き草が合わさって水面を被い尽くし、

蛙の音があたり一帯に満ちる。

海棠の花はもはや夢となってしまったが、

梅の実が新たに嘗められくらいにまでなっている。

歩くついでにそこらの菜を摘み取る。

鞦韆が目にも留まるものの遊ぶ人はいない。

心して対応してくれるのは木芍薬^{もくしゃくやく}〔牡丹〕だ、
春の終わりの殿^{しんがや}を自ら買って出てくれている。

其の二

四望亭^{しぼうてい}の高い建物は廢墟となつてすでに久しく、
下に魚を育てる池がある。
あたりの山に暮色が迫つてくると、
春風にいろいろな草の香りがより一層立ち昇る。
町につながる橋に人の姿はなく、
通りかかる古い寺には竹が青々と伸びている。
夕陽の当たるところを鳴く声で満たしているのは一羽の鶴^{こうのとり}、
それはいったいどこから来たのだろうか。

【補足】〔(1) 蘇軾^{しほく}が四望亭までの道を歩いたのかがこれが初めてであったかどうかはわからないが、後にこのあたりを頻繁に行き来するようになり、ここに詠まれた鞞^{ブランコ}にしてもすっかり馴染の存在となる。(2) 黄州^{こう}に来てからの作品は蘇軾ファンを何倍にも増やし、後世の文人は黄州を訪れると、蘇軾の足跡を尋ね歩くのを楽しみとした。この詩を読むと、我々も同じコースを歩いてみたくなる〕

■ 【06-1-033】 与王定国書

【解題】黄州^{こう}に到着してすぐに王鞏^{おうきょう}〔字は定国^{あざな ていこく}〕〔→作品番号 05-5-004 など〕から手紙が届いた。王鞏は蘇軾に連座して遙か南方の地に流され〔→作品番号 06-1-001〕、移動の旅の途中にあった。王鞏の量刑が理不尽なまでに重かったのは、王鞏が宰相を出した名家の出であったことから、一種の見せしめであったのだろう。蘇軾は王鞏を卷

き込んでしまったこと責任を強く感じていた。蘇軾から王鞏に宛てた手紙は多数残されていて、それぞれの書かれた時期や順序は必ずしも明らかではないのだが、ここでは、黄州での日々がまた浅かったころに書かれたと思われる 4 通から、適宜抜粋して訳出しておこう。

【訳文】

(1) 私は黄州こうに来てからは、長江ちやうこうの岸辺で船が行き来するのを眺めて過ごしていました。そこに貴君からのお手紙を頂戴し、すぐに憂いをとぎほどくことができました。ここにあって体も気持ちもまずまずであるのをよとしています。いまはある僧舎に寄寓し、僧に従って菜食し、私にはそれが非常によいようです。
とが
咎を受けた身には有り余り恩であると感じ、心を鎮め、口を閉ざすようにしています。記すべきことも、近くの寺で沐浴したこと、谷川を尋ねたこと、魚釣り、薬草の採取といったことくらいで、つまりおぼろぼろ楽しんでいる次第です。

(2) 私の罪は大きいのに、責めは軽く、これは幸いなことでありました。しかしながら、数十人もが私との縁で罪を得てしまい、とくに貴君は私のために最も深く累るいが及び、辺境の地に流れ落ちることとなりました。このことを思うたび、心しん肺はいの間に火の熱さ、棘の痛さを覚えます。貴君からの手紙を見るに、棄てられたとの怨みはなく、自ら思コントロールいを遣しておられ、真にその人となりを知ることができます。この不肖の身が、後に衰顔白髪をさらして貴君の家の訪問客の末席に連なることができましたなら、それに勝る幸いはありません。

(3) 揚州ようには侍其君じしがいて、気候の悪い地で十余年間官の仕事をして帰って来られたところ、顔色は良く、悪いところは一点もありませんでした。侍其君がいうには、「磨脚まきやくしんほう心法」を用いただけのことです。貴君はすでにこの法を行っているわけですから、さらに続けて怠らないようにしてください。酒は少量

にし、飲食を節制し、常に胃の状態をよく保って下さい。私は張方平殿の「軟朱砂膏」を湖州で試したことがあり、はなはだ益があると知りました。貴君も服用するとよろしいでしょう。

弟とは先日、陳州で別れましたが、顔色はすこぶるよく、目が輝いていました。夜中に臍から腹のあたりを気がよく巡っているのでしょう、隆々と雷のような音を発していました。弟の振る舞いは我らがそうありたいと常に論じている通りのものです。弟のように高い志節があってこそそのように行えるのでありましょう。

粉白黛緑〔女色のこと〕は狐狸や妖しい獣のようなものでありますから、貴君におかれては、道眼をもつてきつと見破りますように。そのほかにも大切なのは、儉約に努めることで、軽々しく銭や物を費やしませんように。遠方の地でありますから、万一欠乏したときに補うのは難しいであります。それに、災難のなかで自分を抑えて節約するのは、厄を消して福を致す一端となりましょう。

思うところは多々あり、その一つ二つでも尽くすことはできません。

(4) 貴君がいま向かっている賓州では気候の悪さにきつと迫られるでしょうから、心と体をほどほどのところに安らかに保つことが大切でしょう。貴君は流落のために悲嘆に沈み込むようなことはきつとないでしよければ、節制せずにはよろしくありません。よく自愛し、すてに行っている「道引」「服食」をさらに功を倍加するようになれるとよろしいでしょう。

【補足】〔王鞏は名門の生まれで、ずっと都での贅沢な暮らしに慣れていたので、蘇軾はとりわけ王鞏の健康を気遣っている。「磨脚心法」「軟朱砂膏」「道引」「服食」がそれぞれ具体的にどのようなことをするのかはよくわからない。蘇軾は健康法に強い関心をもっていたことはこの後でもいくつかの詩文で見ようになる〕

■ 【06-1-034】 与陳季常書

【解題】陳慥〔方山子、字は季常〕〔→作品番号 06-1-015〕から一つの提案があり、それに答えた手紙。

【訳文】

武昌ぶしやうの一策を諭し示されまして、出費が少なく生計が立つ真に上々の策です。しかし、私が考えますに、世の好事家が粉飾こなざうを加えてあれこれ言うようになるのを恐れます。黄州安置こうしゅうあんちの身でありながら、別の町に住まいを移したと都に聞こえられたなら、それは小さなことではすまないでありましょう。常に黄州と武昌の間を往き来しているとしましても、あれこれ詮索する者は何を言い出すかわかりません。皇帝陛下の示された御恩にいさか反することにもなりましょう。この策を採るかどうか、なお深く考えるべきであると思います。

【補足】[この手紙から、陳慥ちんぞうが対岸の武昌ぶしやうによい土地を見つけたので、そこに住まうよう蘇軾そしつに勧めたと推測される。蘇軾は黄州安置こうしゅうあんちの処分を受けていて、黄州以外の地に住むことはできないので、黄州に住まいを置きつつ武昌に適宜通うという形を取ればよいのではないと陳慥は提案したのだらう。武昌には先に見たように王兄弟おうもいて、なかなか好条件の案なのだが、やはり黄州安置の禁を破ったと都で沙汰されるのを恐れて蘇軾は断った。陳慥がこの地で相当に顔がきき、蘇軾のために何かと手を打ってくれていたことがわかる]

■ 【06-1-035】雨中看牡丹三首

【解題】3月になれば牡丹の花盛り。雨の日に牡丹を見ての詩。この詩は道教の寺院である天慶觀てんけいかんで詠まれたものであろうと推測されている。天慶觀あんどくじは安国寺のすぐ近くにあった。

【訳文】

其の一

霧のような雨は点にもならない。

空に映し見て、雨があるかないかを疑う。

ときに牡丹の花についた雨は、

ぼつんぼつんと明るいたま珠を走らせる。

紅い化粧を洗い、ほのかな香りを生じさせる。

たそがれ黄昏になって雨はさらに静かに注ぎ、

牡丹の頭は扶けなければと思わせるまでに重くなる。

其の二

明日になればきっと雨は止むだろう。

朝の光が松の枝に及ぶころには、

清らかな寒さが花の中にまで入り込んで、

しっかりと自分自身を保っていられるようになるだろう。

かくて、昼には濃い艶やかさを發揮し、

我が時を得たと牡丹は一笑するであろう。

そのまま暮れ方に至り、

自分の奥深い姿を、

いづれなきものとしておさ斂めなければならないのを悲しむのだ。

其の三

牡丹の奥深い姿は惜しんだところで甲斐がない。

後に東の風が吹き出したなら、

酒が醒めた後で何を見るのかというと、

めしべ
雌蕊に残る金粉だけなのか。

千種の花も百種の草も、

華やかなものも地味なものも、どれももうなくなってしまう。

泥に汚したくないのなら、

ヨーグルト
落ちる蕊を牛酥で煎じて食べるしかないだろう。

■ 【06-1-036】 次韻楽著作野歩

【解題】 かつては役人仲間に贈った次韻の詩が、蘇軾の作品に占める割合が非常に高かったのだが、黄州にきてからは大幅に少なくなり、楽京がくけいに対してこの時期に三首の次韻を贈っているのはむしろ例外的な事例であろう。楽京は新法の問題点を指摘してしばし官職から離れ、ようやく黄州で酒税の管理をする仕事を得た人で、当局の目を恐れることもなく、罪人として流されてきた蘇軾と果敢にも詩のやりとりをしたのであろうか。

【訳文】

老いて、西も東もわからなくなり、

林がひどくあか紅くなったのを見て、いまは秋かと思う始末。

逆に花と見たのは、眼がくも暈って本当は病気のためであるし、

耳の中では、からっぽなのいいつも蟻の音がしている。

酒が醒めたら、知らないうちに春は半分が終わっていたのだった。

眠りから起きるのはいつも日中を過ぎてからで、

杖をついて野に出て、

たまたま黍きびを作る人に会ったり、

衣を緩めて、おつな風だと詠じてみたり、
 仰ぎ^み見て松から粉が落ちるのを手に受けてみたり、
 俯して^{くこむれ}杞の叢から新芽が出ているのを摘んでみたりしている。
 この地に降るのは^{そこく}楚国の雨、かの^{うんぼう}雲夢の沢を昏く、
 川を遡^{ごこく}ってくるのは遥か^{ぶしやう}呉国の潮、それでも武昌宮にまでは至らない。
 歴史の興廃を見てきたこの地には無数の詩があり、
 窓辺より静かに見やるだけで運命について考えさせられる。
 いずれ我等は官服を脱いで、
 二人の老人として、風流をともしする仲間となるであろうか。

【補足】〔(1) 前半は老い衰えたことをことさらに強調していて、無害の流人であることをアピールしているのだろうか。(2) 後半はこの地の歴史や名所を詠み込んでい
 る。蘇軾自身の注で、「^{こう}黄州の対岸は^{ぶしやう}武昌県で、^{そんけん}孫権の故宮がある」と付記されてい
 る〕

■ 【06-1-037】次韻樂著作送酒

【解題】^{がくけい}樂京が詩を添えて酒を贈ってくれたのでそれへの返事。酒税を管理する樂京
 が、どこから酒を入手したのかと妙に気をまわす必要はないだろう。

【訳文】

若いころの私は、
 酒を飲むと調子が悪^{さかづき}くなり、^{おそ}觴を怯れたものだ。
 老いてくると、長じつり味わえるようになった。
 故郷を離れている我が愁いのかさを計るならば、

きつと一万斛こくはあるだろう。

春に届いたひと壺の酒は、いったいいかなる湯なのか、
愁いは雪のようにたちまち消えてしまった。

■【06-1-038】次韻樂著作天慶觀醮

【解題】がくけい てんけいかん しょう 樂京が天慶觀で醮〔道教の祭祀〕を行って詠んだ詩に次韻した。

【訳文】

たぐせ 濁世、この紛紛とした濁った世に天帝が果たして降ったりするのだろうか。

夢の中で、天帝が飛び歩む後を尋ねたのだが、

五色の深い雲に覆われてしまって何も見えない。

我等には仙界つうめいでんの通明殿に到る手立てはなく、

わずかに玉佩ぎょくはいの音が聞こえてくるだけである。

【補足】〔蘇軾を罪に陥れた人々なら、朝廷から遠ざけられたしまった境遇を恨んで詠んだ風諭の詩であると解釈するであろう〕

■【06-1-039】杜沂游武昌、以酴醾花菩薩泉見餉二首

【解題】とぎん あざな どうげん ぶしょう 杜沂〔字は道源〕が対岸の武昌にまできて、とび ぼさつせん 酴醾の花と菩薩泉の水を贈ってくれた。杜沂の名は作品番号05-1-002で見えていて、父のそじゆん蘇洵が親しくしたとしゆくげん杜叔元の子である。酴醾はバラ科の植物で、香りのある白い花を晩春に咲かせ、文人に珍重された。菩薩泉は武昌のせいざん じ西山寺にある泉。

【訳文】

其の一

酴醾とびは、他の花と春に争いごとを起こしたりはしない。

最も遅れてひっそりと開くのである。

青い蛇、あるいは玉の骨のような蔓を延ばし、

羽根おおいの蓋たまから珠すだれを連ねた簾ように花を垂らす。

敢えて装うことなしに艶えんなることは絶世であり、

風がなくても香りが自ずから遠くまで及ぶ。

呉ごの孫権そんけんが建てた故宮の址には、宮女の紅の粉がたくさん埋まっています、

微かに月の光が射す晩には、どこかからか笙簫ふえの音が聞こえてくるという。

そこに残った妍あでやかさがこの花に入ったために、

千年の後にもなお清婉せいえんなのだろうか。

怪しむのは、杜君とは呼ばれてもなかなか山から帰らずにいること。

きっとこの花ひかに挽れているからなのだろう。

しかし、昨日の宵には悪い雷雨があったから、

花が終わってしまって、杜君も返ってしまうのだろうか。

其の二

貴君はいう、

西山せいざん [樊山はんざん] の頂いただきには昔から白泉はくせんが流れ出ている、

初めは千頭の牛が垂れる乳のように白く、

下流では一万石せきの鉛のような鈍い色になり、

水の味けいざんは恵山の泉に取じるところはないのに、

残念なのは、陸羽りくうのような賢人に知られなかったことだ、と。

ならば、貴君こそが文字に託して天下に伝え、

泉の名を揚げるとよいだろう。

冷たい泉は人と似ていよいか、

せい だく
清も濁も源に具わっている。

我らは泉の水を飲みたいと思うが、

飲まれようか飲まれまいか、泉の患うところではない。

ああ、私はそもそも何をする者であったのだろうか、

虚名を空しく纏まとってきただけではないのか。

どう
唐の時代に柳宗元は、

自らの愚ぐをもって谷を愚溪ぐけいと名付けた。

ならば、私がこの水を飲んだなら、

泉はどのような名によって汚されてしまうのだろうか。

【補足】〔(1) 恵山けいざんの石泉せきせんの水が陸羽りくうによって天下第二の名水であると賞賛されことは作品番号 04-2-102 で見ている。(2) 「嗟我本何有、虚名空自纏」〔嗟我本何あわれもとなにが有る、虚名きよめいむな空しく自みずから纏まとう〕は当時の心情をかなり顕わに示したものであるのだろう。

(3) 杜沂とぎんがこのときに何か官職に就いていたのか、何らかの用事があって武昌ぶしやうにきたのか、それらのことは知られていない。蘇軾が他の人に宛てた手紙で、杜沂が外からの最初の来訪者であったと記しているのです、杜沂は厚い友情をもって、わざわざ罪人に会おうとして訪ねてきたのだろうか。黄州知事こうの陳軾ちんしよくが温かく蘇軾を遇している様子を聞いて安心し、以下に見るように、山遊びに誘い出すようになる。そうしたことが外に知れたからかどうはわからないが、蘇軾に会いにくる者が徐々に現れるようになる〕

■ 【06-1-040】 与朱康叔書

【解題】 鄂州知事の朱寿昌〔字は康叔〕に宛てた手紙。鄂州は長江をはさんで黄州と向かい合う州で、上の詩にあった武昌県はその中に含まれる。朱寿昌は幼いときに生みの母と別れ、後に何としてでも母に会おうと官職を棄てて探す旅に出て、感動の再会を果たした人である〔→作品番号 03-3-014〕。都で蘇軾と若干の交流のあった朱寿昌は、情の篤い人らしく蘇軾を慰めるべく物資を援助してくれた。朱寿昌は州知事として武昌からは西に100キロほど離れた江夏にいたので、人を介してのやりとりが続いた。朱寿昌は頻繁に物を贈ったようで、蘇軾の礼状が多数残っている。これはその一つ。

【訳文】

武昌から人づてにお手紙をいただき、続いてお使いの者がきてさらにお手紙などを頂戴しました。深く感服いたしております。日々御健勝のこと、また春の季節もよろしく、江山は美しく、政事は万事整い、時に遊び歩かれているとのこと、お伴できないが残念であります。二つの酒壺はまことに珍しく、旅愁を一洗してくれて、これ以上の幸いはありません。また結構な果実を巧みに収蔵して送ってくださり、まことにすばらしく思います。拙い私はこの風土には馴染がなかったのですが、いまはすでに落ち着いています。弟はまだ来ておりません。一寸ずつ千里の道を歩んでいるところです。……

【補足】〔終わりのところで弟に言及している。弟は陳州にきて兄に会い〔→作品番号 06-1-004〕、すぐに南京応天府に戻ると、自身の家族と兄の家族を伴って朝廷から指定された筠州に向かう旅に出た。そのときに大恩人の張方平〔→作品番号 05-5-094〕は実に悲し気に見送ったという。筠州に行くには、長江を遡って途中の九江〔江州〕で南に折れて内陸深くに入っていくのだが、弟は九江からさらに長江を上流に進んで黄州にまで行って兄の家族を送り届けようとしていた。蘇軾はこれから家族をど

のようにして支えていったらよいのか大きな不安がありながらも、弟と家族の到着を心待ちにしていたのである]

■【06-1-041】与朱鄂州書

【解題】これも鄂州知事の朱寿昌〔字は康叔〕に宛てた手紙。この手紙が書かれた時期はこの春ないしは翌々年の春と推測されているが、ここでは前者の説に従って、早くに読んでおこう。

【訳文】

近ごろ、春とはいえ寒さが続いています、いかがお過ごしでしょうか。

昨日、武昌に寄寓する王天麟さんが来られ、たまたまあることを話され、それを聞いてあまりの酸辛さ、食事もうを通らなくなりました。貴君のような賢者であればわかってくださると思い、王さんをわずらわしてこの手紙をお送りいたします。

王さんがいうには、岳州、鄂州あたりの農民は、およそ二男一女を養い、それを超過すると子供を殺してしまうのだと。とくに女を養うのを嫌い、そのために民間には女が少なく、妻のない男がたくさんいます。生まれてすぐに、赤ん坊を冷たい水に浸して殺すのだとか。その父母は忍びなくて、目を閉じて顔をそむけ、しかし、手は赤ん坊を水の中に押さえつけ、泣き声はやんでしばらくすると死んでしまっています。神山郷には石揆という農民がいて、続けて二人の子を殺し、去年の夏にその妻は一度に四人の子を産みました。そのとき、母子ともに皆が死んでしまいました。これは犯した罪の応報によるものなのですが、愚かな民は天の戒めを知りません。

王さんは、近所でこのようなことがあると聞くと、すぐに走って行って赤ん坊を救い、衣服や食べものを与え、たくさん命を助けてくれました。赤ん坊を殺そうとしていた者も、生まれて数日もすると、たとえ子を持たない人がその赤ん坊をまいといってくる、与えようとしなくなります。親子の愛は天性として具わ

ていて、赤ん坊を殺すのは習俗に牽かれてしまっているだけなのです。

鄂州たいこうりょうには秦光亨という者がいて、科挙に及第して、いまは安州あんで官僚となっています。秦光亨が母の胎内にあったとき、秦光亨の叔父ちんじゅうんの陳遵は、夢の中で、一人の小児が衣を曳き、何かを訴えようとしているのを見ました。二晩続けて同じ夢を見て、その様子が甚だ切迫していました。陳遵は、姉が妊娠してまさに産むときになったけれども、これ以上子供が多くなるのを望んでいないのだからと気づき、急いで様子を見に行くと、まさに赤ん坊は水を満たした盆の中に置かれようとしていました。陳遵が救い出し、秦光亨は死を免れたのです。鄂州の人はこのことをよく知っています。

法律によれば、子孫を殺した者は二年の徒刑となります。これは州知事が執行する法です。そこで貴君にお願いしたいのは、各地の役人に命じて村々の顔役を招集し、この法律のあることを告げ、良し悪しを諭し、必ずこの法を実行するようにしていただきたいのです。顔役たちには村に帰って皆に話をさせ、さらに法律の条文を書いて壁に貼って示し、また、罪を犯したことを官に通報した者には賞を与え、その賞は罪を犯した者と隣組組織から徴収したものを充てるようにします。もし小作人が罪を犯したなら罰は地主に及ぶようにします。婦人が妊娠して月日が立てば、隣人や地主は知らないはずがなく、もし産んで後に殺せば、それがわからないはずはありません。黙認して官に告げないでいけば、当然罰金を科すべきです。法律によって数名を罰するなら、この風習も改まることでしょう。

人には人情があります。きっとこのために楽しんで従うことでしょう。殺すことなく生まれて数日が過ぎれば、その後でたとえ殺すように勧められても、誰もそうしようとはしません。貴君によって生かされる者がどれだけたくさんになるのか、きっと数えることもできないくらいになることでしょう。

仏教は殺生を罪とし、卵を抱くものを殺すのを最も重い罪であるとしています。動物であってもそうなので、まして人の子を殺す罪は重いのです。俗に病氣となった小児を「無辜むこの者」[罪なく苦しめられている者]といいます。赤ん坊を殺すのはまさに「無辜むこの者」を殺すのです。法律では毫碌もうろくして人を殺した者だけは死刑を免れるとしています。罪のない子を殺して赦されるはずがないのです。貴君が一万の赤ん坊を死から救い出したならば、大人を生かすよりも十倍もの徳を積むことになりましょう。

昔、晋の時代に王濬が巴郡の知事であったときに、子を産んで殺した者を厳罰に処し、生かした者には徭役を軽減したところ、数千人が救われました。その後、呉と戦争になったときに、助けられた者は皆が兵士となり、その父母が息子を戒めて「王知事がそなたを生かしてくださったのです。そなたは王知事にために命を捧げなさい」といったそうです。昔の優れた役人にはこのような例はたくさんあります。いまの世において、昔の優れた役人のよさが残っているとしたら、貴君をおいて他にあるでしょうか。

私がかつて密州に赴任したのは、飢饉の年に当たり、多くの人が子を棄てました。私は官の余剰米をもとに「勧誘米」を設け、数百石を集め、捨て子を養う者には月に六斗の米を与えるようにしました。一年後には、養った者と子は皆が互いに親子の愛を持つようになり、決して捨てられることなく、数十人が生きることができました。

これらのことは貴君なら簡単に実行できます。貴公とは深い契りがあると考え、敢えてお願いする次第です。この不躰な手紙を民衆のためにどうかお許しください。

【補足】[蘇軾は密州で「涙をこぼしつつ捨て子を拾う」と詩に詠んでいた [→作品番号 05-1-056]。そこでは捨て子を救う措置については何も言及していなかったが、「勧誘米」の仕組みを作って数十人の子を救済していたのだった]

■ 【06-1-042】黄鄂之風

【解題】生まれたばかりの嬰兒を殺す習俗に対して、蘇軾は鄂州知事の朱康叔に手紙を送っただけでなく、自身でもできること考え実行している。この文章はしばらく後になって書いたものであろうが、関連するのでここに訳出する。

【訳文】

近ごろ聞いたところでは、黄州のあたりの庶民で貧乏な者は、子がたぐさんになると、生まれても取り挙げないで、すぐに水を満した盆に浸して殺してしまい、とくに長江の南の鄂州では最も甚だしいとか。こ

れを聞いて忍び難く、鄂州知事の朱康叔はたまたま知り合っていたので、手紙を書いて、賞罰をきちんと定めて、この風習を変えるように勧めた。

また、黄州には古耕道という、椎魯で大して長所はないのだが、すこぶる誠実で、善を為すことを喜ぶ者がいる。黄州の富裕な者に一年に十貫の銭を出資してもらい、もっと多く出したい者にはそれてもらい、その銭を古耕道が管理して、米や綿や絹の類を買って、安国寺の僧の継連がその出納を帳簿に付け、村々の貧者で子を挙げ難化している者を訪問して、物品を与えるようにした。一年の間にもしも百人の小児を活かすことができたなら、閑な身となった私にとって実に楽しいことである。私も貧乏ではあるけれど、手始めに十貫の銭を出資した。

【補足】〔(1) 密州では知事という立場で捨て子救済のための仕組みを作った。それと同様のものを、黄州では民間の力によって作った。(2) それを実際に運用したのは古耕道と安国寺の継連で、継連の名は先に見ていて [→作品番号 06-1-024]、黄州ではよく知られた高僧であるから、継連が関わっているのならと町の富裕層の賛同が得られたのだろう。(3) 「椎魯」とここでは評されている古耕道も実は一目置かれるような人物であったのだろう。古耕道について詳しいことはわからないが、科挙を目指したものの合格するには至らなかったようで、それなりの教養人であったようだ。何かのきっかけで蘇軾と親しくなり、後に蘇軾は古耕道のすぐ近くに住むようになる。古耕道が陳慥 [方山子] の交遊仲間、つまり「異人」の一人であったと推測しても、たぶん間違いではないだろう。(4) さらに補足すると、この元豊三年三月にもう一人の異人として潘丙が蘇軾のもとを訪れている。潘丙は、黄州の対岸の樊口で大きな居酒屋を営む潘革の息子で、潘一家の面々はいずれも個性的で、蘇軾は深く付き合うことになる。潘一家は古耕道とも親しく、さらに薬屋を営む郭邁も加わるならば、黄州の異人は芋蔓式にいくらかでも繋がるということになる。つまり、蘇軾は黄州に到着してわずか2カ月にして庶民の間にしっかりとした足場を得たのである。制科にまで合格

した超エリートでありながらそのようなことができたのは蘇軾の天性によるのだろう]

■ 【06-1-043】 与李公叔書

【解題】蘇軾は、古耕道ここうどうを始めとして黄州こうの庶民との間に新たなつながりを構築する一方で、国家の上層部にある人々との交際も続いていた。李常りじょう [字は公叔あざな こうたく] から手紙が届き、すぐに返事をしたのがこれ。蘇軾が徐州知事じよであったときに李常が訪ねてきて詩を詠み合うなど [→作品番号 05-4-030]、二人は極めて親密で、そのために李常は連座して罰として銅二十斤を科せられていた。

【訳文】

貴君より新しい詩をいただきました。どれも、遠く別れて悲しく、惘然ぼんやりしているという意味のことが詠まれていて、貴君が厚く私を思ったださっていることがよくわかります。しかしながら、私は「鉄心石腸てっしんせきちやう」をもって貴君と向かい合っているつもりです。

それはつまりこういうことです。我等は老いてかつ窮しんかんしておりますも、正しい道理しんかんが心肝を貫き、骨の髄に至るまで忠義うめによって填められ、いざ死ぬというときであっても普段通りに談笑している——そのようであってしかるべきではないでしょうか。もしも私が困窮しているのを見て憐れと思うのであれば、それは道みちを学ばない者と少しも遠くないと言わざるを得ません。

貴君は道に至ること深いわけですから、詩はかのようにあっても、貴君の本心はきっとそうではなくて、友を好む心あつの篤さからかのようになっただけであるのでしょう。とはいえ、真の朋友の本義は、もつぱら道理に則して諫めることにありましょう。ちょっと言い過ぎかも知れませんが、貴君の本来こころの意を敷衍して申すまでです。

私も時に悩んだり苦しんだりしますが、事に遇あって、お上を尊んで民を扱うるおすことができるのなら、我が身を忘れてそれを行い、自分自身の禍福や得失は造物者に任せるのであります。

貴君でなければこのようなことは申しません。この手紙を御覧になったならばすぐに火にかけてください。道理をわきまえない者は侮辱されたと思うかもしれませんから。

【補足】〔(1) この手紙はかなり強い口調で書かれている。「鉄心石腸」〔心は鉄のように強く、腸はらわたは石のように堅い〕とは、蘇軾にはあまり似つかわしくないようにも見えるが、軟弱なようであるが実はそうなのだろう。作品番号 06-1-019 で見た真摯な反省文の裏付けとなる心構えを示したものであるのだろう。(2) 「民を択うるおすことができるのなら我が身を忘れて行う」とは、すでに嬰兒救済で実行しつつある。(3) どうしてこの手紙を火にかけるようにといったのか。蘇軾に対して監視の目を光らせている連中が見下されたと感じるのではないかと、蘇軾は気にしたのでろう〕

■ 【06-1-044】五禽言、并叙

【解題】4月、季節は春から夏へと移り、蘇軾はこの詩を定恵院で詠んだ。序文がある。

【訳文】

叙
梅堯臣はかつて『四種の禽の言』の詩を作った。私は黄州に流されて、定恵院に寓居した。僧舎をめぐって、林には丈の高い竹があり、池には蒲や葦があり、春から夏への変わり目には百種もの鳥が鳴く。土地の人はその声に似せて鳥の名を付けている。そこで梅堯臣の詩をまねて『五首の禽の言』を作る。

其の一

かつて王禹偁が蕪州おろしゅうに放逐されたとき、

啼く鳥の声を聞くと、「蕪州鬼」といっていた。

己が蕪州で死ぬことを暗示するのかと、それを非常に嫌った。

鳥はもとより王禹偁を知らないし、

ましてその死について知るはずもない。

人というものは、死んで鬼になることは免れようがない。

鳥の声で己の老いを知るようでは遅すぎるのではなからうか。

【補足】 [(1) 王禹偁おううしやうについては、その肖像画を見た印象を記した文章があった [→ 作品番号 05-4049]。そこでは王禹偁を偉大な先人として称えていたが、ここでは皮肉な言葉を吐いている。(2) 蕪州きこうは黄州の東隣りの地で、実際に王禹偁はそこで死んでいる。なお「鬼」とは日本語の鬼とは異なり、死んだ人を意味する]

其の二

昨日、南の山で雨が降り、

西の溪川たにがわは深くなって渡れない。

川辺の「布穀児ふこくじ」は、

「脱却破袴だつせきわこ」[破れた袴を脱ぎなさい]と人に勧める。

ならばと袴を脱ぐと、溪の水は冷たい。

水に映して見るのは、租税を催促されて叩かれたときの癩かさおとだ。

【補足】 [「布穀児ふこくじ」は鳩の一種で、その鳴き声は「脱却破袴だつせきわこ」と聞こえる。蘇軾はここでも政治に対する皮肉な言葉を吐いている]

其の三

去年は麦は十分に稔なりなかった。

人は我が肉[鳥の肉]を狙って弾丸を打った。

今年は麦の出来がよくて、

ところどころに粟の採り残りもある。

豊年の兆しなどないとは昔からいどころ、

なのに、人は我が「快活」^{かいかつ}の声を聞いて豊凶を占おうとする。

【補足】^{ばくはんじゅくそくかいかつ}「麦飯熟即快活」と鳴く鳥がある。その鳥がさかんに鳴くと豊年になると知って喜ぶのに、凶作の年にはその鳥を獲って食べようとするのはどうかと、これも皮肉な口調の詩]

其の四

頑張って作ろう、頑張って作ろう、

^{さんし}蚕紙を一百枚。

丘には麦の頭が高く伸び、

林では桑の実が落ちる。

あたしが願うのは、

蚕が^{かえ}孵って蛹になって、さらにその子が増えて、

一枚の蚕紙から一千両の糸が得られますように。

【補足】^{さんし いちひやくはく}「蠶糸一百箔」と鳴く鳥の詩]

其の五

^{こあく こあく}「姑悪」「姑悪」と鳥が鳴く。

^{しゅうどめ}姑に虐待されて死んだ嫁が、鳥になって鳴いているのたとか。

しかし、鳥はいう。

「姑が悪いわけではありません、^{わたし}妾が薄命だっただけなのです。

見てください、世には孝婦といわれる嫁がいます。

東海の孝婦は、夫が亡くなり、子もなくて、でも、家を去らずに姑を養いました。

姑は私がいるから嫁に苦勞をさせていると、自分で命を絶ちました。

姑の娘は、嫁が殺したと訴え、孝婦は死罪になりました。

それから三年、その地は早魃に見舞われました。

^{こうかん}広漢の孝婦は姑が好む水を汲みに毎日七里の道を川まで通っていました。

ある日、嵐に遭って定刻までに帰れず、隣りの家にまでもどって来ると、

『喉が渴いた。あんな嫁はいらない。離縁だ』と、叫ぶ姑の声が聞こえました。

孝婦は隣家に留まり、それから昼夜働いて、隣家からということで姑にいろいろな物を届けました。

姑はそのことを知って、孝婦を呼び戻しました。

ああ、^{わたし}妾はどちらの孝婦にも及ばなかったのです」

【補足】 [(1) 「姑悪」と鳴く水辺の鳥がいる。この訳詩では二人の孝婦の故事を長々と織り込んでいて、原詩はずっと簡潔である。(2) この詩を詠んだときに、蘇軾は姉の死 [→作品番号 01-2-008] を思わずにはいらなかったと推測してもよいだろう]

■ 【06-1-045】 武昌西山題名

【解題】 ^{ちやうこう}長江の対岸に渡り、先に^{とび}酔麴の花と^{ぼさつせん}菩薩泉の水を贈ってくれた^{とぎん}杜沂 [→作品番号 06-1-039] とともに、^{ぶしやう}武昌県の^{かんけい}寒溪にある^{せいざんじ}西山寺に遊んだ。その記録。

【訳文】

^{こうえん}江綆、^{とぎん}蘇軾、^{とぎん}杜沂、^{でんご}杜沂の子の伝と^{あそ}僕がともに遊ぶ。

^{げんほう}元豊三年四月十三日。

【補足】〔(1) たったこれだけのメモのようなものでも蘇軾の名があると珍重されて後世に伝えられた。お蔭で蘇軾の確かな足跡が知れるのである。(2) 江^{こうえん}^ぶ^{しょう}は武昌^ぶ^{しょう}県知事。杜^と^{ぎん}沂の子のうち杜^と^{でん}伝^{あざな} [字は孟^{もう}堅^{けん}] については、後に蘇軾が送った手紙を見ることになる [→作品番号 06-2-085]]

■ 【06-1-046】 遊武昌寒溪西山寺

【解題】 上に記録された西山寺^{せいざんじ}の遊びで詠んだ詩。

【訳文】

対岸^{たいしやう}の武昌^ぶには連山^{れんざん}が蟠り、

樊口^{はんこう}の渡し場のあたりも緑の木々で鬱蒼としている。

私は黄州^{こう}に来てすでに百日、

向こうに渡りたいと思いつつ、

鷗^{おう}が長江^{ちやうきやう}の水を出入りするのを座って眺め、

鹿が武昌の山を駆け巡るのを夢の中で追い掛けていた。

今朝はようやく、

衰え朽ちた身を一本の葦に寄せ、

強大な浪が襲ってきても平然と話し続けつつ長江を横切った。

重なる丘も、朝飯前^{あさひめの}たと履を飛ばすようにして登る。

寒気^{さむけ}がするばかりの絶壁に行き当たり、

その下を吼えるようにして谷川が流れる。

これまで幾人の者がここにまで来ただろうか。

おもむろに進むと、

心に得るものがあるのを欣よろこび、

あたりにあるのはいずれも靈草や藥草。

西山寺せいざん じの九曲亭きゅうきょくていに上ると、

まわりの山々はどれもほんの小さな土の丘、

長江の北を見るなら、

都からここに来た路は全て雲水の彼方。

振り返って、呉国の宮殿跡こ こんくを求めればまごまごと藪があるだけ。

伝え聞くところの歴史を偲ぶよすがとてなく、

尋ねようとする風流人もこのさすらいおきなの叟すいくらいしかいない。

よし、田を買って隠棲するのはここだと決めようではないか。

よい水はあるし、結構な酒もある。

竹林を整えて、その奥深くに井戸を置こう。

さあさあ、もって景色のよいところがあるだろうから、

さらに三日分の食糧をつつんで行こうではないか。

【補足】[詩の前半で初めて対岸に渡ると歌っているので、王兄弟の家は予告しただけでまだ訪ねていなかったのだろう [→作品番号 06-1-030]]

■ 【06-1-047】 与陳季常書

【解題】杜沂と ぎんとともに西山寺せいざん じに遊んだことは、陳慥ちんぞう [方山子、字は季常] ほうざん し あざな きじょう [→作品番号 06-1-034] に宛てた手紙にも記されている。

【訳文】

鄭巡察ていじんさつが来られてお手紙を受け取りました。貴君が健やかであることをつまびらかにするとともに、羈き

孤この身として、貴君を思う気持ちがますます高まります。数日前にとさん杜沂君とともちようこうに長江を渡り、寒溪かんけいの西山せいざんに遊んで、聞いていた奇勝きせうのまぎまぎすべてを過きようせんせいりました。狂先生ちんぞう〔陳慥〕がけられないのがまことに残念でありました。

武昌ぶしょうの田についての利害を詳しく論じてたざり、老成の人でなければここまで聞くことはできません。またいろいろな物を別に届けてたざり、すべてを有難く頂戴えききようしました。『易経』の注釈書はなお半年は練り上げる必要があります。秋にお会いするときにお見せてきてはいかがでしょうか。

近ごろ、李賀りがの二詩を得ました。ここに書き留めましたので、お納めください。目の病はきつとすくりに治るであります。さわやかな木陰にいれば自然とよくなるものです。

【補足】〔(1) 鄭巡察ていじゆんさつは、鄭という姓の役人である。巡察は武官で警察のような役割をする。(2) 陳慥ちんぞうが武昌ぶしょうの土地を買うよう提案していることについてまた言及している。(3) 『易経』は蘇洵えききようも蘇轍そじゆんも深く研究してきたいわば家の学問で、公務を離れた機会に蘇軾そてつはその集大成を志したのである。(4) 李賀りがは唐代とうだいの人で、「鬼才」という言葉がこの人のために作られたとされるほどユニークな詩風であった〕

■ 【06-1-048】 書杜君懿蔵諸葛筆

【解題】西山寺せいざんじを訪問したのと同じころに、杜沂とさんの父の杜叔元としゆくげん〔字は君懿〕の所蔵品であった諸葛筆あざなについてこの短文を書いた。諸葛筆とは、宣州くんいの諸葛氏あざなが作る筆で、非常に優れていることで昔から知られていた。

【訳文】

杜叔元としゆくげんは書を善よく、李建中りけんちゆうの筆法を学んだ。

宣州せんの副知事であったとき、その地で筆を作る職人の諸葛氏しよかつを士人しじんと同様に厚く遇した。それで諸葛氏は力を尽くし、杜叔元はいつも善い筆を得た。

私が科学を受験したとき、杜叔元は二本の筆を贈ってくれた。試験の間中使い続けてもその筆は駄目になることはなかった。

それから二十五年を経て、私は黄州にきて、杜叔元は亡くなって久しく、その子の杜沂とぎんと会った。杜沂はその父が宣州にいたときに得た筆をなお蓄えていて、丈夫でいまも使うことができる。

杜叔元は特別な筆の保存方法を知っていた。百本の筆に対し、水銀の粉を一銭分用意し、全てを沸騰した湯の中に入れる。筆に薄い糊が付いたようになる。そのようにしておくと、筆も硯や墨のように永く虫に食われることがなく、軟らかくかつ潤って乾燥しない。杜叔元の方法によらなければ、これほど長くもつことはない。

【補足】 [(1) 先の作品番号 05-1-002 と合わせて読むと、杜叔元と しゅくげんの人となりが見えてくるであろう。(2) 李建中り けんちゅうの筆法については、後に作品番号 06-2-013 で触れられる]

■ 【06-1-049】 武昌銅劍歌、并叙

【解題】 古い銅劍を見て詠んだ詩。序文がある。

【訳文】

叙
鄭文ていぶんがかつて武昌ぶしやう県の役人ちやうこうだったときに、長江の岸が裂けて古い銅劍が出てきた。鄭文はこれを得て、私に贈ってくれた。非常に精巧な出来で、並みの鍛冶職人かじが造れるものではない。

雨が止んで長江ちやうこうの流れが静まり、

沙すなを巻いて風が吹き過ぎたとき、

雷様は雲を踏んで黄色い蛇を捕えた。

蛇は矢のように空中を飛んでいたのだが、

雷様は電光でその尾を焼いてしまい、
丸めてからりと投げ捨てた。

雷様は飛んで天に上り、蛇は水に入った。

その途端に、鉄を削るような音かして、
水辺の山が裂け、神物[銅劍]が出現した。

その劍を仔細に見るなら、両側に朱い花模様がある。

かの蛇の血なのだろうか。

ああ、凌雲閣にある唐王朝を樹立した功臣の像を見るよい。

高さは九尺、いずれの人物も頸にまで届く長さの宝劍を腰に掛けている。

私なんぞがこの劍を得て何をするのか。

ただ叩いておかしな詩を詠むだけだ。

【補足】[唐王朝を樹立した功臣のような活躍をする——それは8歳のときに4人の
スーパースターに憧れて以来の蘇軾の願いであった。しかし、罪を得て、もはやその
夢は断たれてしまった]

■ 【06-1-050】 与王定国書

【解題】王鞏 [字は定国] [→作品番号 06-1-033] には引き続き頻繁に手紙を書いている。その一部を見ておこう。

【訳文】

(1)手紙を書いて、江州[九江]に人を遣わそうとしました。すると、黄州の役人の李奉職が、王君はすでに湘江に沿って南に進んでしまっているでしょうということで、またこの紙に書いて、遞[官の通信網]で出すことにしました。いろいろ聞きますと、川を上流に向かって進むにつれて、水が石に激しく当たり、そ

の険悪なことは名付けようもないとか。……[道中の困難さを気遣い、配所に着いてから気を付けるべきことなどを記す]……

【補足】[王鞏^{おうきやう}が都を出て配所^{ちやうこう}に向かうルートは、大運河^{だいゆんが}を使って長江^{ちやうこう}に出て、長江を遡^{さく}って九江^{きゅうきやう}に至ったところで、支流^{しやうきやう}の湘江^{しやうきやう}に沿って南下するのだが、そこからが実に困難で長い道のりである]

(2) 貴君にはもともと罪がないのに、私のために累^{るい}が及んでしまいました。そのことをずっと想っています。きっともともと善^よい土地に移されるようになるであります。

私ははなはだ頑健で、住むところも、食べ物もなかなか結構です。ただ、平生から生計を営むことが不得^{とくじ}手で、たちまち貧乏^{びんぱん}になり、どこから物を得たらよいやら、きっと孔子の弟子の顔回^{がんかい} [顔淵^{がんえん}] や原憲^{げん} [子思^し] のような暮らしをして、この先を過ごすことになるのでしょう。私の命分^{めいぶん}はこのよなものだと思っしまえば、憂^{うれ}うことはもうありません。

かつて私は徐州^{じょ}にいたときに黄樓^{こうろう}をつりました。そしていまは黄州^{こう}にいます。また密州^{みつ}にいたときには獵^{えつ}をして勇ましい武官^{ぶくわん}になりたいものと歌いました。そしていまは団練副使^{だんれんふくし}という武官です。みな先に兆^{ちやう}しがあって、このようになっていくのです。こう書いている間にも笑ってしまいます。……

■ 【06-1-051】 題子由蕭丞相樓詩贈王文玉

【解題】 弟の蘇轍^{いん}は作品番号 06-1-040 で触れたように、配所^{ちやうこう}の筠州^{いん}に向かうために、自分の家族に加えて蘇軾^{そく}の家族も連れて長江^{ちやうこう}を遡^{さく}る旅の途上^{ちやうこう}にあった。池州^ちに至ったところで、睢州^そ知事^{ちやうほ}の滕甫^{とうほん} [後に滕元発^{とうげんはつ}と改名、字は達道^{たつどう}] の出迎えを受けた。滕甫は蘇軾より 16 歳年長で、朝廷の要職にあったのだが、改革を批判して都から放逐^{ちやうそく}されていた。今後、蘇軾は滕元発と親しくするので、ここで関連する文章を見ておこう。なお、蘇轍が酒石所^{しゅうせきじょ}に向かうルートは、長江^{ちやうこう}を池州^ちからなかも遡^{さく}って九江^{きゅうきやう}に至り、

そこから支流の湘江沿いに南下するあたりまでは上に見た王鞏と共通するのだが、王鞏の移動距離は蘇轍のほぼ二倍もあって、いかに王鞏が過酷な処分を受けたのかわかる。蘇轍は九江に着くと、自分の家族を一時的にそこに置いて、蘇軾の家族を連れて黄州に行くことになる。

【訳文】

元豊三年五月、弟の蘇轍は池州を過った。知事の滕元発が、蕭丞相楼に上って詩を作り、それを携えて黄州に行き、向こうで蘇軾のために誦じたらよいだろうと弟にいった。それで弟はこの詩を作った。

繞郭青峰睥睨屯、……

元豊七年六月、私は王琦兄弟に従ってこの楼閣に登った。そして、兄弟のために弟の詩を書いて出して見せた。

弟はいま筠州にいるが、またここを通るであろう。

汝州団練副使蘇軾書く。

【補足】 [この短文は、弟が実際に池州に立ち寄ったときから4年後に書いたものである]

■ 【06-1-052】 石芝、并引

【解題】 夢を見ての詩。序文がある。

【訳文】

引[序]

元豊三年五月十一日癸酉の夜、誰の家とも知れぬところに行き、堂の西の門を開けると小さな庭があり、古い井戸があった。井戸のまわりは蒼い石で、石の上に紫の藤のようなものが蛇のように蟠り、

枝や葉が赤い^や筍のようであった。主人が「これが石芝^{せきし}です」というので、私はいきなり一枝を折って食べた。人々は驚いて笑った。その味は^{しそ}雞蘇のようで甘かった。その明るる日にこの詩を作った。

がらんとした部屋に明るい月が清らかに射し込んできて、
独り眠っていた私は目覚める。

次第に呼吸が整ってきて、

これは夢ではないのやら、まだ覚めてはいないのやら。

人の呼ぶ声かしたので、ついて行き、

^{たま}瓊の飾りの戸を開いて、朱い欄干、碧の井戸。

石の上に蛇が蟠っているのとかと驚けば、

紫の筍のような玉芝^{せきし}が無数に生えている。

ぽきんと折り取ったのはまるで青い珊瑚、

味は甘い蓮根^{しそ}に^{しそ}雞蘇を合わせたよう。

主人は私を見て手を打ち、満座の客人がころころと笑う――

仙人は生半可な脱俗の士を嘲笑する。

そんな我であっても、

氣後れて仙薬を食べそこなった昔の人よりはましたろう。

何しろ、石髓^{せきずい}を服せば身は鉄のごとく、寿命は天に等しくなるのに、

^{しんざん}神山が自ら開いてそれを取れるようにしてくれるのは、

五百年にたった一度だけなのだ。

【補足】〔(1) 石芝^{せきし}とは仙薬のもととなるもの。それをいきなりぽきんと折って食べてしまうのが^{しそ}蘇軾らしい。(2) 詩の終わりの部分は、500年に1回しか採ることのできない石髓^{せきずい}を目の前にしながら、ためらったために仙人になりそこなった人の話に基

づく]

■ 【06-1-053】 与章子厚参政書

【解題】都から章惇〔字は子厚〕の手紙が届いたのでそれへの返事。章惇は鳳翔時代からの親友。湖州の飛英寺で章惇が書いた詩を見て、「蓮の花が天にまで続くこの場所へと飛んで来るがよい」とのメッセージを送ったのは、前年の夏であった〔→作品番号 05-5-078〕。蘇軾はそのすぐ後に逮捕され、章惇は政治的立場を異にしながらも、蘇軾の刑が減じられるよう諸方面に働きかけた。章惇はこのころまでに改革派の中心人物の1人となっていて、この年の2月に副宰相になった。章惇の手紙には、これまでの姿勢を改めて我々に協力しないかと記してあった。それに応じれば蘇軾には朝廷に復帰する道が開けるであろう。

【訳文】

去年、湖州でまたお会いできればと申しましたが、思いがけず逮捕され、ついにいまに至った私が、副宰相殿からお手紙を頂戴し、不思議に思っております。私は罪を得てからは、世間の事とは関わりを持たず、親戚の者との間でさえ一文字の手紙の往来もありません。お手紙で温かいお心で近況を尋ねていただき、友愛、親切に感動して言葉もありません。

貴君が副宰相に任命されて大政に関わるようになりましたこと、世の全ての者が喜んでおります。私が貴君と初めて長安で会って語り合いましたとき、私は「貴君は世に抜きん出た優れ者で、一代の異人になるに違いない。功名を高く上げ、将軍でも宰相でも何にでもなるだろう」と思い、そのことを口に出して言ったところ、他の者は驚いただけでありました。今や副宰相になり、朝廷が人を得たのを喜ぶだけでなく、私の言ったことがまことになったのを喜んでおります。

私は罪を得まして、その悪かったことは一つや二つではありません。平生から、貴君と我が弟だけが、

口を極めて繰り返し強く私を戒めてくれましたが、私は自分の思うままに振る舞って、お言葉に従うことはありませんでした。獄に入れられるに及んで、いまさら後悔しても遅く、きつと死ぬてあろうと思いました。はからずも陛下の寛大な御心によって再び人間世界に出られるようになりました。これで身を改めなければ決して人とはいえません。

貴君のお手紙には「過去の過ちを悔やんで自ら痛むのであれば、一度の失敗ですっかり捨てられてしまうことはない」とあります。これは才能があつて、朝廷が惜しむような人物にいらることでありましよう。私のことときは、^{ミズ}瑕を削り垢を洗い、朽ちたところを刻み鈍ったところを磨いたところで、いったい何の役に立ちましようか。一日に百回反省し、旧悪がありながらも命を保ち、いつしか後の世において父に仕えるようになることを天地の仁愛に願つたのです。

私はまた年若いときに、皇帝陛下にやや見知っていたとき、そのときから私も道理に従って分に安んじておりましたならば、どうして今日のことがありましたでしょうか。これまでに犯したところを思い返しますに、まことに義も理もなく、頭を病んでおかしくなった者が川を踏み海を歩いて渡ろうとするのに異なるところがなかったのです。そのような病がおこりましたときには、自分ではそれと知らず、何かしら迫られて使われているかのようにありました。病がおさまった後で、ただただ恥しく思うのです。私が再び過ちを犯すであろうと自ら疑うのは理由があることありますので、貴君は前からの知り合いであることをもって私を称誉してくださるのは、けたし私を過ちに導くものなのであります。私が再び艱難に陥ってもう誰も哀れんでくれないでしよう。

貴君は平生から私に薬を送ってくださり、また慰めの言葉をかけてくださっています。それだけで十分に世間の他の者とは異なっています。

^{こま}黄州は僻遠の地で雨が多く、いつも暗い天気です。魚、稻、薪、炭は値が安いので窮乏の者には結構な場所です。それでも、私は平生から生活設計をしたことがないのは貴君も知っているとおりで、俸禄が入るとすくに使ってたちまちなくなっていました。いま弟のもとには娘と姪が七人いて、負債を山のようにかかえています。私の家族は皆そこにいる、いつこちらに来るのかわかりません。いま

私は僧舎に寄寓し、粗末な衣を着て僧侶とともに野菜ばかりを食べ、質素な暮らしをしています。これで家族が来たならどうなるかと畏れています。窮乏と栄達の道理はまぼ了解しているとはいえ、俸給が絶たれましたために、一年もないうちに飢えと寒さの内に陥るのではないかと、思わないではいられません。俗に「洪水がくれば溝がでる」といいます。そのときになれば、きっと何か処置できるとあります。最初から心配して愁いに身を焦がしたところで何ともなりません。

黄州に到着してから一度だけ黄州知事にお会いしました。それ以外は門を閉ざして外に出ていません。閑居とはいえ、また儒学の経典は見ることなく、ただ仏典に向かって日を送っています。筆硯を近付けることもありません。貴君とお会いすることはもうあるまいと思うと、紙に向かって茫然としてしまいます。

【補足】[文章の表面的な言い回しは丁寧であっても、章惇しょうてんからの誘いはきっぱりと断ったのである。李常りじょうに対して「鉄心石腸てっしんせきちよう」と書いた先の手紙 [→作品番号 06-1-043] とはかなり調子が異なり、非常にへりくだった書き方をしている。李常への手紙には他人に見せないようにと記してあった。副宰相の章惇に手紙を送れば、それは必ず他の人も見るであろうと意識しないわけにはいかない。それでそれなりの書き方をしたのだろう]

■【06-1-054】与朱康叔書

【解題】鄂州知事の朱寿昌しゅじゅしやう [字は康叔あざな こうしゆく] [→作品番号 06-1-041] に宛てた手紙。

【訳文】

ふんどう
文同君の船が間もなくこちらに到着します。そのために涙がこぼれてなりません。貴君もまた同じ思いであります。弟がここに来たならば、数日間留まることになるでしょう。

……[朱寿昌しゅじゅしやうがまたいろいろな物を贈ってくれた謝礼を述べる]……

お尋ねの菱、翠の二人はこれまでも何でもない女性で、ただ朝雲だけは仮に妾の位にあるとしていますが、何らお氣にかけていたくまでもないことです。……

【補足】〔(1) 1月に陳州で会った文務光〔字は逸民〕〔→作品番号 06-1-002〕は、父文同の棺を船に載せて故郷に向かって長江を遡りつつあって、間もなく黄州に到着する予定であった。そのことが冒頭に記されている。(2) 弟もまた文務光の船を追うようなかたちで黄州に向かいつつあった。(3) 後半には極めて私的な内容が記されている。朱寿昌は手紙で、蘇軾のもとには妻以外にも複数の女性がいて、経済的にもまた健康の面でも気がかりであるようなことを記していたのだろう。菱、翠と記されている女性は何者であるかはわからない。朝雲は杭州を離れるに際して家に引き取った女性である〔→作品番号 04-3-069〕。当時の士大夫は通常の使用人とは異なる複数の女性を家に置くのが普通で、妾と称せられる女性の全てが必ずしも性的関係の対象となったわけではないようであるが、女色に溺れて健康を害したり、家の風紀を乱したりすることもあったので、朱寿昌は危惧するところを率直に蘇軾に伝えたのだろう。最後に省略したところでは、いわゆる房中術について言及しているのだが、訳者には全く意味が汲み取れないので割愛した〕

■【06-1-055】黄州再祭文与可文

【解題】文同〔字は与可〕の棺を載せた船が黄州に立ち寄り、蘇軾は棺の前に文同を祭る文を読み上げた。文同の霊に捧げる祭文は前にも書いている〔→作品番号 05-5-013〕ので、題に「再び」とある。

【訳文】

嗚呼哀しいかな。

鳳翔^{ほうしょう}で官職に就いたときに、私は初めて貴君^{ききん}と識り合った。大きな口に秀でた眉、忠信が言葉に現れ、志気^{つよ}は剛く、事をよどみなく論じていた。

ひとたび別れて五年、貴君の評判は日に日に聞こえ、貴君の徳はますます高く、自ずと周囲を洗ってよい薫りで包むようになった。芸学の豊かさは秋の果実が盛んに実るかのようで、言葉は口から出るままに直すところのない立派な文章となり、他の百家の文などはつまらないものにしてしまった。私も自分の文を取じ、筆硯^{びつえん}を焚いてしまおうとした。

二度目は都で会い、貴君は黙って何も言わなかったが、杳^{よう}として清く深く、華が落ちかかるほどに開き、あるいは黍^{きび}を刈り取ってちょうど炊き上がったかのような趣^{おもむき}があって、酒を啜って歌い合つと、純粋な喜びがあった。貴君は天から力を得て自然に振る舞って誤ることがなく、たちまち万事におさまりを付け、垢にまみれた世俗から独り抜き出ている。

貴君は知事として三つの州を廻りつつも、常に家郷を恋慕し、草や木にまで仁を施し、その信義は山の鹿にも及んだ。地方から都に帰っても人と群れをなすことなく、都から地方に出ても特に親しくする相手はなかった。

死と生は大きな事柄^{せいそう}、凄愴として貴君を祭る。

貴君はもう談笑することがなく、自然界はただ虚しく運行を続けている。貴君が西に帰って葬られるときに当たって、私は長江^{ちやうきやう}のほりに流された。貴君のために捧げるものは何もなく、ただ川辺の芹を摘むばかりだ。天には日と月があり、朝があれば必ず夜がある。人は茫茫とした空間の内^{ぼうぼう}にあって、幾たびか会い、幾たびか別れる。この觴^{さかずき}の酒を尽くそう。安らかな土の内^{ふん、むこう}に帰りたまえ。

嗚呼^{あ あ}哀しいかな。

【補足】[間もなく弟の蘇轍^{そかく}がここに来るはずだからと引き留めたが、文務光^{ぶんむこう}は先を急いで西に去った]

■ 【06-1-056】 浄因浄照臻老真賛

【**解題**】^{ぶんどう あざな よ か}文同 [字は与可] の画について論じた文章を作品番号 03-4006 で見ているが、そこでは敢えて末尾に置かれた次の 18 文字を訳さなかった。「元豊三年端陽八日、眉山蘇軾于浄因方丈書」。これによれば、^{げんほう}元豊三年五月八日に^{じょういん じ}浄因寺の方丈でその文章を書いたことになるのだが、元豊三年五月とはまさにいま見ている通り、^{ぶんむ}文務光が^{こう}黄州に立ち寄ったところで、都にある浄因寺で蘇軾が書ける道理がない。それで、元豊は^{げんゆう}元祐の誤りだろうとする説がある。元祐三年とはこれより 8 年後で、確かにそのころは蘇軾は都にいるので一応のつじつまは合う。しかし、それではいかにも遅すぎるので、普通は文同も蘇軾も都にいた時期に書かれたと考えられていて、第 3 章において訳したのである。ここで一つ考えられるのは、元豊三年五月に改めてその画論を清書して文務光に与えたということはあるのかもしれない。そのように解釈してもよい理由の一つとして、このときに^{じょういんいん どうしん}浄因院の道臻長老の肖像画に書き添えたと言われる賛が残っていることがある。^{どうしん}道臻長老は画論を書くよう蘇軾に勧めた人である。ここからは訳者の当て推量でしかないが、文同の遺品のなかに肖像画があつて、この賛を加えつつ、清書した画論を文務光に渡したのではないだろうか。なお、賛の本文は訳者には理解不能なので、原文をそのまま掲げて訳は割愛する。

【訳文】

浄故能照、為照故浄。亦如是身、孰知其正。四大是仮、此反為真。従古聖賢、所莫能分。視彼如此、凡賊皆子。喜甲怒乙、雖子猶賊。人方自我、物固相物。是故東坡、即此為実。

■ 【06-1-057】与李公拱書

【**解題**】このころに、^{り じょう あざな こうたく}李常 [字は公拱] [→作品番号 06-1-043] に宛てて、^{ぶんむ こう}文務光を支援してほしいと頼む手紙を書いている。

【訳文】

文同君が亡くなり、あれだけの徳がありながら、寿命が短かったのを痛まずにはいられません。極貧のうちに亡くなり、残ったものはごくわずかしありません。若い息子は我が弟の婿で、私とも深い縁があります。その子は幸いにも賢く、学問もよくてできるので、遠い将来においては何ら憂うべきことはありませんが、目下のところは助けなければならぬのであります。

■ 【06-1-058】 今年正月十四日、与子由別於陳州、五月、子由復至齊安、以詩迎之

【補足】 5月末、弟の蘇轍は黄州にあと少しのところまで至った。この詩の題は、「今年正月十四日、弟と陳州で別れた。五月、弟は齊安〔黄州〕にやってきた。詩を弟に送って迎えた」。

【訳文】

僕の貂の裘は、

人を驚かせる世間の塵やら激しく降る雪やらでいっぱいになっていた――

宛丘〔陳州〕での君との別れに、

僕は涙を浅い春の風に灑いだ。

かの「邯鄲の枕」の夢にまた向かうかと思ったら、

かえって雲夢沢のある南の地に僕は来てしまった。

これから君と会っても、

その後には三年間の別離を覚悟しないとならぬだろうから、

必ず十日間は滞在するよう引き留めようと思っている。

いつしか僕等の白髪が故郷の山の前に映えるときがきて、

何もかもが終わったと見てとるようなことになるのだろうか。

【補足】〔(1) 最初に陳州での別れを歌っているが、実景というよりはイメージであろう。詩は必ずしも事実をそのままに叙述するものではない。(2) 次に「邯鄲の一炊の夢」の故事を引いて、人間世界の栄枯盛衰の夢の内に再び入るのではなく、世間から切り離された流謫の身になったとして、夢の縁で「雲夢沢」〔黄州の南にある名所〕の地名を引き出している。(3) 終わりの部分は、蘇軾による注記があつて、唐の柳宗元の『劉禹錫と別れる』の詩に「皇恩によつてもしも田に帰り去くのが許されたなら、黄髮〔白髮〕となつて万事が休むのを見るであろう」の句によるとある。実は、第一句は確かに柳宗元の詩であるけれど、第二句は劉禹錫が返した詩にあつて、蘇軾は誤つて二つの詩を合わせて一つにしてしまったのだという〕

■ 【06-1-059】 曉至巴河口迎子由

【解題】蘇軾は弟が到着するのをじっと待っていることができなくて、朝早くに黄州を發つて長江を下り、二十里先の巴河口まで迎えに出た。

【訳文】

去年、僕は御史台の獄にいた。

手を挙げても、体を動かしても、すぐに四方の壁にぶち当たった。

深い深い井戸の底にいて、

小さな小さな天を仰ぎ見ていたのだった。

垣根を隔てて歌声が聞こえてくると、

僕は生きる計を自分自身で失ってしまったのだと恨みもした。

詩を書き留めようとしたけれど、

忍び難さのあまり紙も筆も涙で濡れてしまった。

ところが、どういふ幸いであったのか、

なお生きることができて、

今日のこの楽しさがある。

ちやうこう長江の流れは鏡のようきよに浄らかで、

煙のような雨が軽ただよっている。

僕の乗る一艘の舟はまるで水鳥だ、

けい千頃あおの広さの水の碧を、

一つの点から左右に分けて進んで行く。

聞けば、君はじこ磁湖にあるという。

見ようとして、隔てているのもうわずかな距離だけだ。

朝になって風光はまことによい。

竿に付けられた旗は、風によって西北に流れている。

まさにその風に乗って君はやってきて、

川の中ほどで会う、

君の笑っている目から、清らかな光が溢れ出るのを見るのだ。

僕はこの地で老いるのだらう。

こう黄州かには柯氏の林がある。

美しい竹があり、石のかたわらから泉が湧いている。

そこに土地を買うべきかどうか君と相談して、

ぜひそうすべきだと君がいってくれるのを待っている。

■ 【06-1-060】 遷居臨臯亭

【**解題**】上の詩の終わりで、柯^か氏の林〔定^{じょう}恵^{えい}院^{いん}の北^{きた}の丘^か〔柯^か山^{ざん}〕にある〕を買うつもりでいると詠んでいたが、弟が連れてきてくれた家族をどこに住まわせるかは火急の問題で、黄州知事^{こう}の陳^{ちん}軾^{しよく}の助力を得て、定恵院から西に少しだけ離れた臨^{りん}臯^{こう}亭^{てい}に移ることになった。臨臯亭は、黄州の州庁がある黄州城^{なんもん}の南門のすぐ外側、長江を臨む高台にあった。

【**訳文**】

天地の間に生まれた私は、
大きな磨^すり臼^{うす}に身を寄せる一匹の蟻のようなものか。
蟻はよたよた右に行こうとするのに、
臼は止まることなく左に回る。
私は仁や義のために走ろうとしているのだが、
餓えや寒さの苦しみ^がが追いかけてくるのから免れることができない。
我が身の危^{あや}うさをいえば、
剣の先に釜を置いて米を炊くようなもの、
針をばらまいた氈^{むしろ}の上でぐつろごうとするようなもの。
それでも天地の間には佳^よい山水があり、
風や雨とともに瞬時に変化するありさまが眼の内を通り過ぎる。
老いを待たずに故郷の田園に帰るのを決断できる人は多くない。
幸いにも、私は世間から棄てられた余^{あま}りものとなり、
疲れ切った馬は鞍から解放された。
我が一家は長江を臨む^{ちようこう}駅舎を占拠し、
天が切り開いた絶境を自在に見ることがができる。

そのことと、餓えや貧乏との得失を乗除計算するならば、
悔やみをいうべきことでも、祝いをいうべきことでもないのであろう。
かくて淡く生きて、憂いも楽しみもないとし、
苦しいとかの言葉はいささかも成さずにおこうではないか。

【補足】[^{こう}黄州知事の^{ちんしよく}陳軾を初めとして蘇軾を支えてくれる人は少なくともはなかったが、それでも急に大所帯となったことで、蘇軾は不得手な家計問題に苦勞しなければならなくなる]

■ 【06-1-061】 書臨臯亭

【解題】^{りんこうてい}臨臯亭で記した短文。この文章も含めて執筆時期は必ずしもこの年の夏ではないかもしれないが、以下に関連するものを幾つかまとめて見ておこう。これらの作品には家計問題の影が一切見えないのが面白いところである。

【訳文】

私は、飯をたらふく食べ、酒に酔って机にもたれかかる。白い雲が左側からまどわりついてきて、清らかな江が右側から巡り来る。重なり合う門の全てをからりと開け放つと、丘の林が後ろからどっと入り込んでくる。このときに、私には思いがあるようについて、思うところはない。私もまた万物の一つとして、あるべきものが備わっているのだ。^{ありがたし}慚愧、^{ありがたし}慚愧。

【補足】[(1) ^{りんこうてい}臨臯亭から南を見れば、^{ちやうこう}長江が右側からカーブしながら目の前を通過し、背後には^{こう}黄州の町とそれを囲む丘がある。そのことが前半に記されている。(2) この文章の核心は終わりにある 5 文字、「受万物之備」[^{ばんぶつ}万物の^{そな}備われるを^う受く]である。この意味は、①^{みち}天の道 [自然の基本法則] は万物に備わっている、②それは自身の内にも備わっている、③だから万物と自分は通じ合っている、④そのことを知る以

上の喜びはない、ということである]

■ 【06-1-062】 南郷子

【解題】 臨臯亭りんこうていで詠んだ詞。「春」の字が用いられているので、翌年の春の作であるのかもしれない。

【訳文】

晩景落瓊杯。[夕暮れの風景が落ちたのは瓊たまの杯の中]

照眼雲山翠作堆。[それが眼を照らし、雲のかかった山みどりの翠うずたかが堆かさね積たかります]

認得岷峨春雪浪。[そうだったのです、岷山びんざん、峨眉山がの春の雪が浪びさんとなって]

初来。[初めてここにまで来ているのです]

万頃蒲萄漲淥醅。[眼前ちやうこうの長江みなさに漲るのは葡萄から搾ったばかりの故郷の酒なのです]

春雨暗陽台。[春の雨が暗くさす天上界の高楼]

乱灑歌楼湿粉腮。[歌宴の場に雨が乱れ注ぎ、仙女けしやうの粉腮こなほを濡らします]

一陣東風來捲地。[一陣の東風が地を捲まくよこして来て]

吹廻。[吹き廻ります]

落照江天一半開。[長江の上に、落日に照り映えた天が半ば開かれます]

【補足】 [この詞はイメージが次々に飛躍して訳すのは容易でない。杯の中に風景が落ちてくるというのが第一の飛躍。目の前に流れている長江ちやうこうの水は、故郷の山の雪が解けていまここに到着したとするのが第二の飛躍。杯の中の酒と長江ちやうこうの水を同一視するのが第三の飛躍。酒は故郷の葡萄を搾ったものだとするのが第四の飛躍。そして、後半でさらに飛躍して、自身は臨臯亭りんこうていにいながら、仙女けしやうの住まう「陽台」にいるかの

ようにイメージし、にわか^にに降り出した雨が、仙女に降りかかると想像して、最後に雨が上がり出した実景を描写する。以上のような幾つもの飛躍を意識して、漢字の並びを眼で追うなら、この詞をよりよく味わえるであろう。なお、他の詞も同じように、字面から喚起されるイメージを補助線として鑑賞していただきたい。詞は字句が比較的平易であるからそうすることが可能であろう]

■ 【06-1-063】書臨臯亭風月

【**解題**】^{りんこうてい}臨臯亭から見る自然物について書いた短文。これが書かれたのは恐らく2年ほど後のことであろうが、臨臯亭のイメージを掴むためにここで見ておきたい。

【訳文】

^{りんこうてい}臨臯亭から数十歩も行かずに^{ちやうこう}長江の^{がびさん}大河がある。川の水の半分は峨眉山の雪が解けたものだ。

私が飲食に使う水も、沐浴する水も皆ここから取る。だから何も故郷に帰らなくてよいのだ。川と

山、風と月、それらには^{あるじ}もともと決まった主がいるわけではない。そのときに閑な者が主になるのだ。

^{はんひやくか}范百嘉君が近頃、邸宅と庭園を新しくしたとか。そこでこの臨臯亭とどちらが勝るか、そこらあたりの人に尋ねたいものだ。こちらが及ばないのはたった一つだけ、土地と住人にかかるところの税金をお上に対して払っていないことだ。

【**補足**】〔(1) ^{ちやうこう}長江の水の半分は^{がびさん}峨眉山の雪解け水だというのは、前の詞と同じ発想である。(2) ^{はんひやくか}范百嘉 [→作品番号 04-1-040] は^{はんちん}范鎮の息子。范鎮は蘇軾の大先輩で、かつて都の門の手前で足止めされたときに、しばらく范鎮の所有する^{とうえん}東園に居候させてもらったことがあった [→作品番号 05-3-013]。後で見るように、范鎮は流罪をなつた蘇軾の身の上を心配し、たびたび手紙を送って、自分の近くに住まないかと誘ってもくれた。税金を納めないのが短所であるとはひねったユーモア。(3) 「もともと決

まった主あるじがいるわけではない」という発想は後に大きく展開される [→作品番号 06-3-057 など]]

■ 【06-1-063】 与朱康叔書

【解題】 弟が黄州こうに滞在していた時期にもどって詩文を見てゆく。これは鄂州知事がくの朱寿昌しゅじゅしょう [字は康叔あぎな こうしゆく] [→作品番号 06-1-054] に宛てた手紙。

【訳文】

お使いの者が来て、お手紙を頂戴しました。情宜のますます厚いことに感服いたしております。お健やかにお過ごしつまびの事を審らかに安堵いたしました。弟は我が家族を連れてここに到りました。こうして平安でいられますのも、返す返すも貴君のお蔭ふたつばによるものであります。二壺を賜り、弟とともに酔いを重ねております。これも貴君の徳によるものです。暑さの盛りであります、万万自重されますように。

■ 【06-1-065】 与子由同遊寒溪西山

【解題】 弟とともに武昌ぶしょうの西山寺せいざんじ [→作品番号 06-1-046] に遊んだ。

【訳文】

散人さんじん [束縛されない人]である君は、
都会の道も田舎の道も自在に出入りし、
朝こほくには湖北こほくにいたかと思えば、夕わいせいべには淮西わいせいにいる。
筠州いんの酒官しゅかんになりしたものの、まだ仕事に就いていないので、
両脚を泥に突っ込むもお構いなしと歩きまわる。
君と僕は、雲と雨のように集散定めなく、

ともにいられるこの日々を惜しんで手を取り合って行く。

ちようこう
長江の流れに一本の^や箭を放ち、水鳥の前に躍り出し、

一千回揺れての後に、向かいの^{ほんこう}樊口に至り、

一万回の上り下り、草木の重なり合う西の嶺に入る。

たに りゅうりゅう
暗い溪に瀏瀏と鳴り響く水音、霜や雪の冷たさを思わせる。

人影のない山の古い寺に何があるかという、

けい ガラス
眼下に広がる万頃の青い玻璃。

おおどり かり
僕等はいま鴻や雁のような漂泊の身、

長江の南も北も常の棲家ではない。

身なりなど気にもしないので、

ぶしやう
武昌の町に下りるのはよしとして、

新しい道筋を踏み開こうと思う。

不意に悲しくなる――

君と別れた後で、

独りでまたこの道にいくことができるだろうか、

君とたどった跡にはどのような思いが残っているのか。

僕等がこのように流落したのはきっと天の意なのだ。

うかつ
自らの迂闊によるのであって人に陥られたのではない。

はじ
君は山水に行き逢うたびに羞らい嘆息する。

ここを去ればまた官の仕事から免れずにいるからだ。

しよく り はちひやく
そういえば、我等の蜀にはおかし李八百という仙人がいて、

聞くところでは、君がこれから行く筠州で仙薬を練ったとか。

あまり嘆いてばかりいると、

すっかり真白になってしまった頭で、

李八百から薬を分けてもらうことになるだろうは[もはや手遅れたね]。

【補足】[黄州から武昌こうに行くには、前にも見たように、黄州の町の西側にある渡し場から船で向かいの樊口はんこうに渡る。樊口は樊水が長江かんけいに注ぐ合流点にある。樊口の背後きゆうきよくていに樊山はんざんが聳え、樊山の西に西山せいざんが並ぶ。西山の見晴らしのよい場所に九曲亭きゆうきよくていがあり、山の直下に長江を臨む。西山から長江とは逆側に流れ下る寒溪かんけいのほとりに西山寺せいざん じがあり、そこから降りて行くと武昌ぶ しょうの町に到る。この詩では、樊山から西山を経て西山寺を訪れたものの、この身なりで町に入るのはやめておこうと、別の道から樊口に引き返したのである。詩には樊山の一万回の上り下りまんこつ [万兀] とあるが、実態としては樊山はさほど高い山ではなく、軽いハイキングコースくらいのだ。なお樊口から樊水を遡れば容易に武昌に行ける]

■ 【06-1-066】 記樊山

【解題】樊口はんこうや樊山はんざんについて、このころに書いたと思われる文章があるので、ここで見ておこう。

【訳文】

私が住んでいる臨臯亭りんこうていの下には、長江ちやうこうが西から乱れ流れきて、樊山はんざんに衝突している。そこに樊口はんこうがある。樊山はんざんはあるいは燔山はんともいう。日照りが続く年に、この山を燔やく、竜が起って雨を降らせるので、燔山はんというのである。あるいは、樊氏はんがここに住んでいたのが樊山はんざんともいう。どちらが正しいのかわからない。

樊口の上流ろしゅうに盧洲そんけんがある。孫権[三国時代の英雄]が長江を渡ろうとして大風に会い、船頭せんとうはどこに船をついたらよいかと聞かれ、孫権は盧洲に行こうとした。従者こくりの谷利が船頭に刀を突き付けて

脅し、樊口につけさせた。それによって、孫権は樊口から山中の路を通って武昌ぶしやうに帰ったのだった。山中にはいまも呉王岷ごおうけんと呼ばれている洞穴がある。岩は紫色で、磨けば鏡のようになる。

樊山を巡って南に行くかんけいじと寒谿寺せいざんじ【西山寺】がある。その上に曲山きよくざんがあり、山頂にある即位壇そくいだんや九曲亭きゅうきよくていは、どれも孫氏の遺跡である。西山寺の泉の水は白く甘く、菩薩泉の名がある。水は石から出ている、その石は人が手を垂れるようなかたちをしている。山の下に陶母廟とうぼびやう【陶侃の母を祀った廟】がある。陶公とうこう【陶侃】が武昌を治めていたときに、陶公は病んで船に乗り、樊口で死んだのだった。

こうした故跡せいぜんを尋ねると、悽然とした思いこころに駆られる。

孫権は樊口で獵をして一頭の豹を得た。そこに老婆が現れて、「豹の尾をどうして掴まないのか」とい、たちまち消え去った。山中には聖母廟せいぼびやうがある。私が十五年前にそこを過ったときには板に「得一豹」の三字がまんやりと記されているのを見たが、いまはなくなってしまった。

【補足】【終わりに十五年前とあるのは、父の棺を船に乗せて故郷に帰ったときのこと。樊山はんざんのあたりを見て歩くようなこともしたのだが、服喪中であることから詩を詠んだりはしなかったのだろう】

■ 【06-1-067】 次韻答子由

【解題】6月9日、弟は黄州を去って筠州いんこうに向かった。蘇軾は対岸おうの王兄弟【→作品番号06-1-030】の家にまで行って弟を見送った。

【訳文】

僕の翼は弱いので、
 とかく吹きくる風に任せて飛ぶだけで、
 それによってどこに行くにしても、
 そこがすなわち帰るところなのだ。

君の詩はいわゆる珠玉のことは、
一つ一つが核心を衝いて、
僕を覆う煩惱の膜を何枚となく剥かしてくる。
山に住む高僧は味わい深い^{おもむき}趣をわきまえてはいても、
君のことを十分に知ることはないだろう。
そこの小役人ともはまともなことは言わないけれど、
僕なんぞは笑うべきだとちゃんと知っている。
僧にとっても役人にとっても読書は清浄^{ぎょう}な業ではあるが、
僕のような暇人の昼寝の価値には及ぶものではない。

【補足】[弟は蘇軾の家族を連れてきた。前年の7月に湖州で別れて以来の再会を果たし、さぞ深く感じるところがあったろうと推測するのだが、そのことは全く詩詞に詠んでいない。詠んでも人に一切見せなかったのでもいまに伝わらないという可能性は皆無とはいえないが非常に考えにくい。杜甫が、安禄山^{あんろくざん}の反乱軍によって占領された都を脱出してようやく家族に再会したときに感動的な詩を詠んだのとは対照的である]

■ 【06-1-068】 与朱康叔書

【解題】この年の夏はとりわけ暑く感じたようで、そのことが鄂州知事の朱寿昌^{しゅじゅしょう}

[字は康叔^{あざな こうしゆく}] [→作品番号 06-1-064] に宛てた手紙に記されている。

【訳文】

(1) すでに長江^{ちやうこう}のほとりの臨臯亭^{りんこうてい}に遷居し、はなはだ広々としてすがすがしいところです。朝の風、夕べの月に乗じてあたりをぶらぶらと歩き、江の水を酌んで飲んでおります。このようにできるのも貴君のお

蔭で、貴君の風義を想いつつ水を味わい、孤^{ひと}りの寂しさを慰めています。また去年の六月に詩を写された一軸を寄せてくださいましたのを楽しんでいます。酷暑の折から、くれぐれもお体を大切に。

(2) やり過ぎすこともできないこのひどい暑さに、何事も放り出してしまいかありませんので、お手紙も稀になっておりますことも、たぶんあまり深く訝しくは思っておられないであります。このごろはいかかされてますでしょうか。副知事殿がこちらの州に来られて、お手紙とともに新しい酒をお持ちくださいました。ここに到着したお酒はあたかも新たに甕^{かめ}から出たばかりのようで、極めて珍しく優れた品であります。ありがたさに言葉ありません。二三^{かし}の佳士[きちんとした人]とともに飲み、貴君の徳に感じ入っております。秋に向かう季節、ますます御健勝でありますことを祈っております。

(3) ……弟はすでに筠州^{いん}に向かいました。伝え聞^{いん}くところでは、虚実のほどは確かではありませんが、筠州では大水が出て、町の中でも一丈余りも水が溜まったとか。

屏風の賛や硯の銘は無用の物であります、貴君がお好きとあれば写さないわけにはいきません。装幀をしてお送りますので御覧ください。

小さなことをお耳に入れるのをお許^{はんげんしゅうさい}ください。潘原秀才という者がいて、売卜のことで法の禁むところを犯したとされています。私とその兄^{はんへいかいげん}の潘丙解元とはよく知る仲で、潘丙君は文章を作りますし、行いもしっかりした人です。潘原君も自ずと佳士でありまして、家業もきちんとしていますので、どうか御庇護を望むものであります。暑い季節でありますから、早くに獄から出られたらよろしかろうと思っています。この人の父母は真面目な老人で、潘原君のためにひどく憂慮しております。貴君は仁孝をもって世に名の聞こえるお方ありますから、哀れんでくださるものと思っております。これまでの馴染みをもってお願いする次第です。……

【補足】 [(1) 終わりの部分で、蘇軾としては珍しく私的な願いを述べている。樊口^{はんこう}で酒店を営む潘革とその息子の潘丙の名は作品番号 06-1-041 で見たが、潘丙の弟の潘^{はん}

げん
原が獄に囚われてしまったので、赦されるよう働きかけてほしいと頼んだのである。
この手紙では、潘原は「潘原秀才」、潘丙は「潘丙かいげん解元」と記されている。「秀才」は科挙を受けることを目指して勉強しているような人を指し、「解元」は科挙の一次試験を首席で合格したことを意味する。いずれにしても教養ある人であるということ伝えて、朱寿昌しゅじゅしょうの印象をよくしようとしたのであろう。(2) ついでながら、徐州で無実の罪に落とされてしまった人について配慮してくれるよう章惇しょうじゅん [→作品番号 06-1-053] に手紙を出していることを記しておこう。その手紙には経緯が詳しく記してあって、当時の裁判事情を知るのによい史料であるのだろうが、訳者の手にかかると誤訳だらけになってしまうのを恐れて割愛する。その手紙からも、政治的立場は異にしても、章惇は信頼できる友であると蘇軾が考えていたことがよくわかる。(3) 先に見た朱寿昌しゅじゅしょう への手紙 [→作品番号 06-1-054] で言及していた女性たちがどのようになったのかいささか気になるのだが、そのような極めて私的なことについて蘇軾が書くことはほとんどない。菱や翠については何ら知れるところがなく、朝雲ちょううんだけが、作品番号 06-4-057 以降、時折詩文に登場するようになる]

■ 【06-1-069】 与司馬温公書

【解題】 蘇軾は土地の庶民のためにひと肌脱ぐようなことをする一方で、当時の著名人との交流も保っていた。これは洛陽らくやうにいる司馬光しばこう [→作品番号 05-3-018] に宛てた手紙。このころに改革政治に不満のある人々が最も囑望する人物が司馬光であった。

【訳文】

たくきょ きゅうへき
謫居の窮僻きゅうへきは井戸の底にあるかのようで、都みやこや洛陽らくやうのことは杳ようとして聞こえてきませんので、近頃は
いかにお暮してあるのか審つまびらかにいたしておりません。

私は我が愚暗をもつて罪を獲て、咎は己から招いたものでありますから、言ひに足るものは何らありません。しかしながら、いろいろな方に波及してしまいましたこと、とくに深く残念に思っております。貴君は風儀が高く、少々のことでは塵や垢によって汚されることはないといひましても、私は貴君のことを思つたひに背にも腹にも痛みを覚えずにはいられません。

我が住まいは長江から十歩も離れておらず、風や波や霧や雨が朝に夕に百変し、長江の南のもろもろの山がほとんど部屋の内にあるかのようで、それらを目にする幸いはこれまでになかったものです。欠乏の憂いはあるとしても、衣服や食事が粗末であるだけのことです。

いつまたお会いできるのかと思ひ、書に臨んで惘然としてしまいます。季節柄、くれぐれも御自愛されますように。

■【06-1-070】菩薩蛮

【解題】七夕に黃州の朝天門に上つて作つたと伝えられている詞。織女の伝説を詠んでいる。たぶん同行した町の人々へのサービスで作つたものなのだろう。二首のうちの一首を訳す。

【訳文】

其の二

風回仙馭雲開扇、[風がまわり、仙人が扇を開くようにして雲が晴れます]

更闌月墮星河轉。[夜は更け、月が落ちて、天の川が移り行きます]

枕上夢魂驚、[枕の上の夢がふいに覚めると]

暁来疏雨零。[暁の雨がさっと降りかかります]

相逢雖草草、[お会いするのはわずかの間]

長共天難老。[でも、天とともにいつまでも老いないのです]

終不羨人間。[人間世界を羨みはしません]

人間日似年。[人間世界では一日に一年が過ぎてしまうのですから]

■ 【06-1-071】 陳季常自岐亭見訪、郡中及旧州諸豪争欲邀致之、戲作陳孟公詩一首

【**解題**】ちんせう ほうざん し あざな きじょう 陳慥 [方山子、字は季常] [→作品番号 06-1-015] が岐亭から蘇軾きていに会うためにこう黄州にやって来た。町の伊達者だ てもんたちが挙って出迎えたのを見て、陳慥を漢代かんだいの豪傑ちんじゆん あざな もうこう陳遵 [字は孟公] になぞらえて戯れの詩を作った。

【**訳文**】

かんだい もうこう 漢代の孟公は酒を好み、一斗とか二斗どころではなかった。

酔と客を帰らせまいと、門を閉ざしてしまふ。

酒があるところなら、寡婦の家でも構わず上がり込むので、

規律違反で百回も罰せられたのだが、

優れた太守であるとの名声は変わらなかった。

老いて裏町に住み、世の浮沈を淡然と眺めやり、

耐え忍ぶ苦節など阿呆らしいと笑い飛ばした。

酒の匂いがするなら忽然と路地奥にも現れ、

ようゆう 揚雄が作った、酒を戒める文章を読んでも、

「酒そのものは悪くない」というところだけを喜んだ。

都の金持ち連中は孟公に来てくれるよう求め、

謝礼に千金を渡そうとしても笑って唾を吐きかけた。

私の住まいはとても孟公殿を客として迎えることはできない。

何しろ孟公殿は酔と冠やら衣やらをはいりまい投げ捨てるとか。

我が家にはそれを避けて逃げる広さがないのだ。

【補足】〔(1) ある人は、この詩をはなはだ軽薄と評している。黄州に流されて反省の日々を送る中でもこのような戯れの詩を詠んでしまうところが蘇軾らしい。(2) この詩で、蘇軾の住まいは陳慥を迎えるだけの広さがないと詠んでいるが、次の手紙にもそのことが記されている〕

■【06-1-072】与陳季常書

【解題】陳慥〔方山子、字は季常〕の訪れを蘇軾が心待ちにしていたことは、陳慥に宛てた幾つかの手紙からわかる。陳慥の黄州訪問は7回あったとされ、以下の二通目の手紙はこの最初の訪問の折のものであるかどうかはわからないが、ここで合わせて読んでおこう。

【訳文】

(1)……夢に仙界の果実を得たという堂々の詩を拝見しました。まことに結構です。私は夢の中でござり靈芝を食べたのですが、貴君は国のために立派なものを鑄造されました。貴君は仙薬の力を自在に發揮して、陰功〔死んでからの功德〕はきっと貴君のもとにあるでしょう。……

このごろはいかかお過ごしでしょうか。こちらの町に遊ぶのはいつと決められましたでしょうか。待ち望む気持ちが日に日に深まっています。臨臯亭には従者が休憩できるような部屋もあることはありますが、西日がひどく当たります。承天寺がごく近くにありますし、門前に大きな船を泊めても、いづれでもよろしいでしょう。……

【補足】〔(1) 蘇軾の夢の詩は先品番号 06-1-052 で見ていて、陳慥は別の空想を詩に詠んだのだろう。(1) 臨臯亭は手狭で、大勢の人を迎えるには難があることを少し遠

回しに述べている]

(2)お宅にある『易経』と『史記』に関する書物をお借りたく思っています。貴君のこられるときに持ってきてくださるでしょうか。貴君はいまだかつて王公にも膝を屈したことがなく、私のためにわざわざ町にこられると聞いて、州中の士大夫が駭然としています。このことで不肖な私の名が重みを増しております。お越しになるのは果たしていつでしょうか。お酒はふんだんにありますので、あまり待ちぼうけを食らわせませんように。

【補足】[誇張はあるにしても、陳慥が独立不羈の人物としてこの地の人々から一目置かれていたことがわかる]

■【06-1-073】定恵院顛師為余竹下開嘯軒

【解題】7月、定恵院の院主である顛師が、竹林の傍らに「嘯軒」と称する小さな建物を蘇軾のために作ってくれたので、この詩を詠んだ。

【訳文】

顛師は天が明けるのを促そうと嘯き、

喧嘩と詆讒(そし)合うかのようだ。

蛩は夜の永さに暗く泣き続け、

啾啾と己のことを弔(な)うかのようだ。

蟬は風を飲むだけで至って潔く、

長く吟じてその調子が改まることはない。

蚓は土を食らって腸がなく、

哀しがることなどあるはずもないのに、

夕べの間ずっと叫んでいる。

^{とび}鳶の貪欲な声は最も鄙しく、

^{かたさぎ}鶺鴒の喜びの声は何のためなのか。

生きるものたちの慟哭も嬉笑も同じと、

みな何かしら平らかでないところから鳴るのだという。

かの阮籍も平らかでないところが多々ある麤率な人間でよく叫び、

その友人の孫登も道術を学びながら妙所に至らずによく叫んだ。

^{じょうえいん}定恵院の道人はこの軒を開いてたざり

黙って座って自己を觀照せよといわれる。

どこやらの風が海も河も震わせて吹いてきて、

全ての竅を共鳴させようとしようと、

それはできるものではない。

世間との繋がりの切れた私は何もいわないのだ。

風がくれば竹が自から嘯くだけである。

【補足】 [(1) この詩をどのように読むのか。一つの解釈として、蘇軾を罪に陥れた人々に対する批判を籠めたと見ることも可能だろうか。世俗のがやがやに耳を貸さず、世間に同調するよう促す風にも応じず、沈黙を保って竹 [脱俗の象徴] の嘯きだけを耳にするのである。(2) 阮籍は作品番号01-2-041で見えて以来、蘇軾がしばしば言及する晋の時代の人で、乱れた世に、政治向きのことを口に出さずに身の安寧を保った。それでも時に高台に上って叫ばずにはいられなかった]

■ 【06-1-074】 和何長官六言次韻

【解題】 ^{かちょうかん}何長官が作った一句六言の詩に次韻した。何長官はたぶん^{こうこう}黄岡県の知事なの

だろう。第一首と第二首は何長官を称える挨拶の詩で訳は割愛する。

【訳文】

其の三

漢の時代の石渠閣かん せききょかくはいまは見ることができない、

幸いにも私にはこの身を容れるに足る臨臯亭りんこうていがある。

長江ちょうこうによってすつぽりと庇かばわれているうえに、

お上からは八月の涼風をいたたいている。

其の四

長江からの清らかな風がくると、

それに大地が共鳴し、

明るい月が天の姿を水に映す。

この貧乏な家で客人をどのようにもてなすのかというと、

ただ風と月があるのだ。

其の五

青い山々はまさに絶景、

それを誰とともに称えるのか。

町の公子に向かって説いても、

まさしく馬耳東風である。

【補足】[最後は、わかるのは何長官かちょうかんだけというココロ]

■ 【06-1-075】 与参寥子

【解題】 このころに杭州から使いの者が黄州にきたようだ。これは参寥 [道潜] [→作品番号 05-5-045 など] に宛てた手紙。

【訳文】

去年は慌たたく湖州を離れてしまったために、秦観君にも参寥師にもお別れを申し上げることができず残念に思っております。僧官に言葉を残したのですが、伝わりましたでしょうか。

黄州にきてすでに半年、友人は少なく、貴僧のことを想って心から去りません。怠け者であり、便宜もないために、お手紙を差し上げることもありませんでした。遠より人を遣わしてお尋ねくださり、まことに丁寧なお心遣い痛み入ります。

私は罪は大きく責めは軽く、門を閉ざして咎めを念い続けています。かつて親しくしていた人々からも関りを断られたのもかくあるべき理であります。それでも、数人の僧や道士の方々からは千里の遠くからお尋ねがあり、情義はかねてより厚く、また徳の高さが知られます。やはり俗世の外にあるからなのでありましょう。

寄せてくださった数首の詩や、新たに編まれた詩集を拝見し、詳しく味わい、灑然として貴僧が穏やかに語る言葉を聞くかのように感じております。このころは筆硯を焚き、作詩を断っておりますので、和することはいませんが、独りの寂しさを慰め、思いを開くことができ、これに勝る幸いはありません。貴僧の筆力ははいよいよ老健にして清熟し、かつて拝見したものを超えております。道に至ることの妨げにはなりませんでしょうから、廢するには及びませぬでしょう。きっと陶淵明にも及ぶようになるでしょう。

【補足】 「罪は大きく責めは軽く」 [原文は罪大責軽] は、先に見た王鞏に宛てた手紙 [→作品番号 06-1-033] にも同じ表現があり、これからも何度か見るようになる]

■ 【06-1-075】 与言上人

【**解説**】^{こう}杭州の^{せいりんぼう えいん}西林法惠院の^{ほうげん}法言のために^{せつさい}雪斎の詩を作ったことは作品番号 05-5-018

で見たが、その法言に宛てた手紙。

【訳文】

去年、^{ごこう}呉興[湖州]で慌たたくお別れしたことは、いまに至りましても耿耿として忘れることはありません。私は窮まって^{へきち}僻地に譴責され、人々との往還は尽く絶えました。遙か遠くよりお手紙を頂戴し、拝見するに及んでことに深く感じ入りました。このごろは貴僧におかれてはいかかお過ごしでしょうか。お書きになったものはいよいよ精健で、詩は必ずやすばらしいものがあるでしょうに、どうして見せてはいただけないのでしょうか。^{せつさい}雪斎は清らかな場所で、すばらしい夢想が発せられるであります。ここはただ^{こうざん たいこう}荒山と大江、青い竹と古い木があるだけで、いつも田舎の酒を飲んでおります。酔うと杖を曳いて、遠くも近くもかまうことなく、足の向くままに歩き、^{こうぜん てんしん}曠然として天真のままであることは、^{こう}杭州でのかねての遊びと優劣決めがたいところがあります。いつの日にかお会いして一笑できますでしょうか。ただ万万自愛されますように。

【**補足**】[この手紙によると、^こ逮捕されて湖州を去る直前に^{ほうげん}法言と会っていたようである]

■ 【06-1-077】 与陳大夫書

【**解説**】^{こう}黃州知事の^{ちんしよく}陳軾 [字は君式] に宛てた手紙。蘇軾を陰で支えていた^{ちんしき}陳軾は、仏教を奉じる実直な人物であったようだ。

【訳文】

(1)秋とはいえなお暑く、敢えて御門にお伺いいたしておりませんが、いかかお過ごしでしょうか。^{じゅう}丞相殿のお手紙をお借りし、また、『弥勒偈』を見せてくださり、その筆勢は勝れて強く、実に奇観でありま

す。お手紙の方は急いで返却いたしますが、『偈』の方はきっと別に書かれたものもあることでしょうか。しばらく箱のまま留め置いて、味わいつつ唱え、それによって従来の罪垢業障ざいこうごうじょうを洗いたいと思っています。……

【補足】[ここに丞相殿の手紙とあるのは、陳軾ちんしよくはかねてから王安石おうあんせきと親しくしていたことから、王安石の手紙であろうと推測されている。王安石の改革政治に対しては蘇軾を初めとして大勢の人々が批判したのだが、王安石の知性が当時の士大夫したいふの中でも群を抜いていることは誰もが認めるところで、詩文は欧陽脩おうようしゅうや蘇軾と比肩しうる優れたものが多い。明代や清代の後世の歴史家は、改革派は北宋を滅ぼした元凶として、呂惠卿りょけいけいや章惇しょうじゆんといった人々には「奸臣かんしん」のレッテルを貼って悪人と決めつけているのだが、王安石だけは別格で、唐代、宋代を通じての名文家の8人、唐宋八大家の一人として、王安石の文章は長く読書人によって学ばれた]

(2)これからお会いすることも多くはありませんでしょう。ただ貴君の御健勝を願うのであります。刺繍で作った仏像を貸していただきましたが、精妙を極め、あたかも天たみの工、神技によるものであります。普通の女工が作れるようなものではありません。目礼するだけで、俗世の塵が一洗され、まことに幸いであります。謹んで速やかに返却申し上げますので、お納めください。

【補足】[最初の文章から、陳軾ちんしよくが黄州こうを去る日が近づきつつあったことがわかる]

■ 【06-1-078】 繡仏贄

【解題】上で見た陳軾ちんしよくに宛てた手紙に、刺繍で作った仏像のことが記されていたが、これはその仏像に添えた贄。

【訳文】

およそ仏には、それぞれの持つところによって仕えるのであって、富む者は財をもってし、丈夫な者は力をもってし、巧みな者は技をもってし、弁の立つものは言葉をもってする。もし持つところのものが何もなければ、それぞれに心をもってする。見るにつけ聞かにつけ随喜し、礼拝し、讃嘆するもので、これに及ぶものがないのは、一針ごとの労によって作られた二つとないこの刺繍の仏で、これを拝むことで得度、成仏するなら、まさにこれが導師なのである。

■ 【06-1-079】 与章子厚書

【解説】 章惇 [字は子厚] に宛てた手紙。先に見た章惇への手紙 [→作品番号 06-1-053] は、相手が副宰相であることを強く意識したものであったが、これは旧友への私信として書かれている。

【訳文】

閑居の身で、公文書を写したのを見ることもなく、また手紙を送る便宜もありませんので、特別に簡慢であるわけではありません。長江と淮河の間のこのあたりでは、歳の稔りが豊かで、物の値は安く、どのような物も手に入れやすいのですが、貧窮に迫られ、自分の力でまかなえるものしか得ることができません。

弟が南都[南京応天府]からきてくれました。私の家族を伴って淮河から長江のあたりを巡って、百日をかけてここにきて、十日ほど皆で一緒に過し、それから筠州に行きました。筠州に着いて数日もないうちに娘を一人喪いました。その心の内はどのようにありましようか。眼に涙が溢れます。弟もまた私と同じように貧困のうちにあります。貴君のことを思ううちに、筆がここに及んでしまいました。短い手紙では十分に書き尽くすことができません。

■ 【06-1-080】 与仏印

【**解説**】^{ろざん}廬山の^{ぶついでん}仏印禪師^{じりょうげん}了元から手紙がきて、それに答えた。^{きゅうこう}廬山は九江の南方にある靈山で、古くから信仰の地とされ、現在でも仏教、道教の多数の寺院がある。弟の蘇轍は^{いん}筠州に向かう道すがら、二日間ほど廬山を見て歩いていた。仏印禪師は当時よく名の知られた僧で、このときは廬山の^{きそうじ}帰宗寺にいた。この手紙から推測するに、蘇轍は廬山にきてみないかとの誘いを受けたのだろう。この後、仏印禪師との交流は長く続くことになる。

【訳文】

^{ろざん}廬山の^{きそうじ}帰宗寺から僧が来られてお手紙を頂戴し、御返事申し上げようとしていましたところに、廬山の^{すうけんじ}栖賢寺の^{ちせんぜんじ}智遷禪師からもまたお手紙が届き、皆様方の厚いお気持ちに感慨無量であります。

ここ数日はひどい暑さのなかであります、^{すがすが}山門は清々しく^{なご}和やかであろうと、想いを巡らせております。

……昔の人はひと通り世事を渡った後に、^{さんれい}俗界より返るよう山霊によって促されたと聞いています。私は世俗の塵を犯すことすでに三十年になろうとしています。困窮して後に返ることを知るのであるとしても、^{ろざん}敢えて名山[廬山]を汚すようなことは私にはできないであります。しかも、^{こうじん}山中の高人とは知り合いか誰もいません。そこにこうしてお二人の禪師から来るようにとのお許しのお言葉をいただきましたのは、どのような宿縁によるものなのでしょうか。

まだまだ暑さはこれからであります、^{じゆんじ}順時御自愛くださいませ。

■ 【06-1-081】 与参寥子

【**解説**】^{さんりょう}参寥[^{どうせん}道潜] [→作品番号 06-1-075] に宛てた手紙。『^{しんたいきょだいめい}秦太虚題名記』というタイトルの短文として読まれることも多い。^{しんかん}秦觀[^{あざな}字は太虚あるいは^{しょうゆう}少游] が書いた^{だいめい}「題名」[訪問記録]に、一文を添えて参寥に送ったものである。1年前に蘇轍が^こ湖州に赴任する旅の途中で、秦觀と参寥が加わり、二人はしばらく湖州に滞在した後に

こう
杭州に向かった [→作品番号 05-5-070]。「題名」にはそのときの杭州でのことが記されていた。

【訳文】

しんかん だimei
秦観:「題名」

げんほう
元豊二年、中秋の一日後のこと。

私[秦観]は呉興[湖州]から杭州を通して、東に会稽に還ろうとしていた。

りゅうせい べんさいだいし
竜井におられる弁才大師から、お手紙で山に来るよう誘われ、杭州の城郭を出たところ、もう夕方になっていた。舟で西湖を渡って普寧の岸边に行き、僧の参寥師に出会ったので、竜井から遣わされているはずの藍興について尋ねた。「あなたが刻限に来られなかったので帰ってしまいました」と参寥はいった。

この夜、天字は晴れわたり、林の中は月の光で明るく、髪の毛が一本ずつ数えられるくらいであった。

そこで舟を置いて参寥師と杖をついて湖に沿って歩くことにした。雷峰に出て、南屏山を越え、恵因の澗で足を濯ぎ、灵石の高まりに入り、分かれ道を取って風篁の峠に上った。竜井の亭で憩い、岩にもたれて泉の水を酌んで飲んだ。

普寧からおよそ十五の仏寺を経たが、どれもが静かで人の声を聞かなかった。道の傍らにある民家に燈火が見え隠れすることもあった。草木が深く繁り、流れる水は一度止まって悲しく音を立て、ほとんど人間世界の内ではないようであった。

そろそろ夜も半ばになるとするころに寿聖院に着き、潮音堂で弁才大師にお会いし、その翌日に帰った。

こうゆう
高郵の秦観が題す。

秦観の「題名」を見ると、どこも私が昔遊んだところです。目を閉じてそれらを想うと、全てがぐっさりと浮か

んできます。

私は弁才大師と別れて五年後に徐州から湖州に移りました。湖州に向かう途中、高郵で秦観君と参寥師と会い、そこから一緒に舟に乗りました。弁才大師は私が湖州に来ると聞いて、小舟でやって来ようされましたが、九十日間の結夏の行に籠るために果たせませんでした。秦観君と参寥師は「秋が終われば還ります」といってともに会稽に向かいました。私は突如として湖州を去ることになり、それぎり会えなくなってしまったのでした。

その翌年、私は黄州に流され、弁才大師と参寥師は使いの者をよこして様子を問われ、弁才大師はこの「題名」も届けてくれました。

時に中秋まであと十日足らず、秋の水が川に漲り、水面は千里にわたって広がります。月は房宿[星の名]と心宿の間にあって、露を帯びた風が天地を満たします。住まいから長江まで十歩もなく、息子の邁とともに小舟に棹さして赤壁に行くと、西に武昌の山や谷を望み、高い木々が青黒く並び、雲と波が天の際にまで連なっています。

そのことをこのように書いて参寥師に寄せます。弁才大師にもお見せして、何かのついでがあれば、写しを作って秦観君にも寄せていただきたい。

【補足】〔(1) 弁才大師元浄は、蘇軾が杭州にいたときに親しくした僧で、その後も交流が続いていた [→作品番号 05-4-046]。この文章によると、参寥からの手紙 [→作品番号 06-1-075] と前後して弁才からも手紙がきて、そこに秦観の「題名」が添えられていたので、参寥のために写して送ったのである。杭州と黄州の間を手紙がしばしば行き来していたことになる。(2) 杭州は、蘇軾がこれまでに赴任した土地では最も風光明媚で、その地を非常に愛していたので、「題名」を読んで強く心を動かされたのだろう。(3) 後半で言及している赤壁については次の文章に詳しく記されている〕

■ 【06-1-082】 記赤壁

【**解題**】上に文に出ている赤壁について記した短文。「赤壁の戦い」といえば、中国史上最も有名な合戦といっても過言ではないだろう。西暦 208 年、天下統一を目指す曹操の率いる大軍を、孫権と劉備の連合軍が長江の赤壁で迎え撃ち、周瑜の指揮のもと曹操軍を潰走させた。黄州に赤壁といわれる場所があり、地元ではそこが古戦場であるとされていた。それは事実ではないと蘇軾は知りつつも、黄州の赤壁が名立たる古戦場であるかのようにして数々の文学作品をそこで生み出した。この短文は赤壁についての最初の印象を綴ったもの。

【訳文】

黄州の官舎があるところから数百歩のところ^{せきへき}に赤壁がある。ある人は、周瑜が曹操の大軍を破ったのがこ^ここであるという。果たして本当かどうかはわからない。

切り立った崖が壁のように立ち、長江の水は深い碧色^{みどり}をしている。崖に鶺鴒の巢^{はやぶさ}が二つあり、そこに二匹の蛇を見たという人がいる。

風と浪が静かなときに、小舟に乗ってその下にまで行き、舟を下りて岸に登った。徐公洞^{じょこうどう}というのがある。洞穴^{ほら}というほどのものではなく、山のちょっとした穴だ。『本草図経』に「この徐邈^{じょげい}はいつの時代の人かわからない。魏の徐邈とは別人だ」とある。

岸には小さな石がたぐさんあり、玉のようにきらきら光るものもあれば、淡い紅や黄色のものもあり、人の指紋のような模様のあるものもある。何度か赤壁に遊ぶうちに二百七十枚を得て、大きなものは棗や栗の実ほどあり、小さいものは蓮の実ほどだ。古い銅盆の上に盛り、水を注ぐと美しく輝く。一枚は虎か豹の頭^{なづめ}のようで、口や鼻や眼のようなところがある。それを石の中の長^{おさ}としている。

■ 【06-1-083】乳母任氏墓誌銘

【解題】蘇軾のそばにずっといた乳母の任采蓮にんさいれんが8月12日に亡くなった。蘇軾の母が蘇の家に連れてきた二人の女性の一人で、もう一人の楊金蟬ようきんぜんは3年前に徐州じょで亡くなっていた [→作品番号 05-3-032]。蘇軾は10月に黄岡こうこう県の北に任采蓮を葬り、墓誌銘を作った。その序文を訳す。

【訳文】

趙郡ちょうぐんの蘇軾そしつの乳母にんの任氏さいれん、名は采蓮びは、眉山びざんの人である。父は任遂にんついで、母は李氏りである。先夫人[蘇軾の母]に仕えること三十五年、仕事を器用にこなし、勤勉で慎ましく、老いても衰えることがなかった。乳母として亡き姉と私を育て、私の子の邁まい、迨たい、過かの面倒を見てくれ、思いやりがあった。私の任官に従って、杭州こう、密州みつ、徐州じょ、湖州こに行き、黄州こうに流されたときにもついてきた。元豊三年八月壬寅げんぽうに黄州じんいんの臨臯亭りんこうていで亡くなった。享年七十二であった。十月壬午じんごに黄州の東の阜おか、黄岡こうこう県の北に葬った。

【補足】[任氏にんが育てた姉とは、嫁ぎ先で虐待されて死んだ姉であろう [→作品番号 01-2-008]]

■ 【06-1-084】 与王慶源

【解題】郷里おうらいにいる王淮奇き [字は慶源あざな] [→作品番号 05-1-080] に宛てた手紙。

【訳文】

竊逐さんちくされて以来、手紙を記して御様子をお伺いしなければとずっと思っておりましたが、もとよりの怠け癖で、しかも閑すぎてすっかり駄目になり、どれもこれも手がつかないままで、たまたた取じるばかりです。このころはお体の御様子はいかがでしょう。皆様方御健勝のことと思います。私の方では子供たちは安らかにしておりますが、ここにきてすぐのころに老いた乳母を喪いました。七十二歳でした。長く悼み続

け、いまでも気持ちが落ち着きません。寓居するところの官亭^{りんこうてい} [臨臯亭]は、大江^{たいこう}が迫るのを見下ろし、ほとんど部屋の真下にあります。江上に雲が湧いて天に接し、草鞋^{わらじ}のような小さな舟が山のような浪の中を上下します。客人がきても、なんだかんだといって不在を決め込み、届けられる手紙類は山のよみがありますが、どれにも返事をしておりません。こらしていると、まことに佳ろしく、生まれてからこれほど快適なことはありません。このことを知ってから憂いを免れております。近頃^{ぶんむこう}、文務光君がそちらに向かいましたので、皆様への手紙を託しました。ただ、そちらに到着するのはかなり遅くなるでめいしょう。お会いする縁はまだありませんが、ただ万万自愛されますように。

【補足】 [(1) 味わい深い手紙である。郷里の人であるので、気を許して自然体で記したのだろう。 (2) 文務光^{ぶんむこう}が父の棺を船に載せて郷里へと向かったことは作品番号 06-1-055 で見ている。蘇軾もやはり父の棺を携えて帰郷したことがあるので、旅の困難をよく知っているのだろう]

■ 【06-1-085】 次韻子由病酒肺疾発

【解題】 弟が酒のために肺^{やまい}の疾を發したことを詩に詠んだので次韻した。

【訳文】

思い出すに、

君は若かったときにも肺を病み、

座っていても、臥せていても、疲れ切って、

一日中せいぜいと、

風雨の通り過ぎるような苦しい息をしていた。

陽^{よう}の氣^きが虚^{うわ}しく浮^{みなぎ}ついて漲り、

冷え切った氣が下に落ちてしまった。

家族は心配の余り、
 何も喉を通らないありさまだった。
 胃が強まると膜が突っ張って肺を害い、
 肺が膨らむと腹の方が圧迫されるというので、
 君は夕べに食事を取ることを禁じられ、
 夜中に腹をすかせて苦しんだ。
 君が何を食べても、
さんぼう
 三彭[身中の三神]が勝手に食ったり噛んだりするだけだし、
 どのような手当をしても、
にじゅう
 二豎[二種の病のもと]はどうしても出て行かなかった。
 ついに、真に効薬を得て、
 その効き目は、初めは雪の花のような小ささだったものが、
 次第に大きな珠のようになって、
 垣根を隔てて、君がうんうんと三度むせぶ声が聞こえると、
 それからは長かった病が失せて、
 君の身中で陰と陽が調和するようになった。

……

今回もまたいずれ君は回復して、
 ともに遠く遊んで詩を賦そうではないか、
 そのときはせんご仙語[道教の特殊用語]は一切用いないことにしよう。

【補足】 [(1) 訳者が非常に頼りにしている岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解『蘇東坡詩集』(1927年)には、この詩に対して、「此の篇は仙書と医書に精通する者にあらざれば、真意を解することを能わず」と記してあり、私ごとときにはチンプンカンプン

で、前半はひどい「ずっぱ訳」である上に、後半で一部を省略した。末句で「仙語は一切用いないようにしよう」とあるのは、それとは正反対の詩を詠んでしまっていることへの笑いであろう。(2) 弟への詩は、真情を詠んだしみじみとした作品が多い一方で、この詩のように超絶的に難解な詩も少なくない。どちらにしても、弟ならわかってくれると、思う存分作ったのだろう]

■ 【06-1-086】 鉄拄杖、并叙

【解題】 鉄拄杖 [鉄製の杖] について詠んだ詩。序文がある。

【訳文】

叙

柳真齡、字は安期は閩の人である。家に鉄拄杖が伝わり宝としていた。榔栗木[ヤシの類]のような形状で、突起や節があり、中は空洞で簧[笛のリードのようなもの]があって歩み行くといささか共鳴する。柳真齡がいうには、これは浙中で得たもので、伝承によると、唐の終わりに王審知が錢鏐[呉越国を興した人物]に贈ったもので、錢鏐はある僧にこれを賜った。たまたま柳家が得て私に贈ってくれた。その謝礼にこの詩を作った。

柳公[柳真齡]の手の中にあるのは、

黒く滑らかな蛇なのか、

老いて千年を経た節だらけの根なのか。

たちまちガランガランと甲を叩くような音、

まわりの者は驚いてよく見直し、

それは鉄であったと知るのである。

その腹中にはこゝろ簧が含まれているのか、

細い泉のような声かし、

石を突くと火がほとほとしり、

星が裂けて飛ぶかのような。

公はいう、

「この物は老いて神が宿りまして、

昔、びんおう閩王がごえつおう呉越王に贈ってから、

流落して幾人の手に渡ったのやら。

こうして見ますと、

物の変滅とは春の雪のようでありますな」

公は突然、

「これを貴君に贈ろう」

と、いう。

果たしてその意はどこにあるのだろうか。

私の両脚はまだ衰えるがままだに甘んじようとはしていない。

ならば、この杖がかつてたどった跡を尋ねてみようではないか。

まずはこうどうさん空峒山[伝説上の仙山]にでも行ってみて、

そこからどうていこ洞庭湖を渡ってうけつ いしえ禹穴[古の聖王の禹を葬ったところ]を探ってみようか。

さらにはこの杖で藪を開いて、しきん芝菌を採って仙薬を得たり、

はたまたこの杖を鋭いみずち錐として、虎を刺し、あそり蛟も蠍を突いてしまおうか。

かくて旅より還って公に会えば、

公はいまだに白髪もなく若々しく、

「かのてつくん鉄君[鉄拄杖]は変わりませんか」

と、私に問うてあるから、

私は鉄君を撫ぜながら我が旅を語りつつ、

まんまと公の意こころのままにしてやられたと悟るのである。

【補足】〔柳真齡りゅうしんれいは蘇軾好みの「異人いじん」であったのだろう。蘇軾が罪人となったことで、柳真齡のような者も容易に接近できるようになったのである〕

■ 【06-1-087】 西江月

【解題】 8月15日の中秋の名月を見て弟に寄せた詞。

【訳文】

世事一場大夢、〔世上の事はひとつの大きな夢でしょうか〕

人生幾度秋涼。〔人生において、秋の涼しさにあえるのは幾度いくたびあるのでしょうか〕

夜来風葉已鳴廊、〔夜になって廊下に鳴るのは早くも風に落ち始めた葉〕

看取眉頭鬢上。〔季節の衰えは眉にも鬢にも見て取ることができます〕

酒賤常愁客少、〔ここは酒が安いのに、いつも残念なのは客人の少ないこと〕

月明多被雲妨。〔月は明るいのに、しばしば雲によって妨げられてしまいます〕

中秋誰与共孤光、〔中秋の日に、この孤高の光を誰とともに見るのでしょうか〕

把盞淒然北望。〔君は盞さかずきを手に寂しく北を望み見ていることでしょう〕

【補足】〔弟がいる筠州いんは兄のいる黄州こうのちょうど南に位置するのでこの詞の末句がある〕

■ 【06-1-088】 書蘇李詩後

【**解題**】^{こう}黄州知事の^{ちんしよく}陳軾が黄州を去ることになり、^{かん}蘇軾は漢の時代の^{りりよう}李陵が詠んだ詩を書き、それに短文を添えて贈った。

【訳文】

これは^{りりよう}李陵が^{そぶ}蘇武に贈った詩である。

私は^{ちんしよく}陳軾君のことはこれまで^し識らなかった。黄州に^{たくきょ}謫居し、昔からの友人だったかのように頻繁に行き来するようになった。

ここに^{ちんしよく}陳君が黄州を去ることになった。私は長らく詩を廃して、この離別の^{おも}懐い伝えることができない。そこで、^{いひこし}古の人が作った作品で意を尽しているものをいろいろと観て、^{りりよう}李陵が蘇武に贈った詩に勝るものはないと知り、これを書いて贈ることにした。春秋時代に、三百六篇の詩はみな志を表したものであるとして、^{こうし}孔子は『詩経』を編んだのだが、^{しきよう}孔子自身は詩を作らなかった。

【**補足**】〔(1) ^{ちんしよく}陳軾はあまり詩を作らない人だったのか、知事としての立場から控えたのか、^{かん}蘇軾との間で詠み合った詩は残っていない。送別に際しても、このような文章を贈ったのだった。なお、^{りりよう}李陵の詩は後世の偽作であるされ、^{かん}蘇軾もそのように見えていたが、それはそれとして送別の場にふさわしい作品として書いたのだらう。(2) ^{じょだいじゆ}陳軾の後任は徐大受〔^{あざな}字は君猷^{くんゆう}〕で、^{かん}蘇軾に対してやはりすこぶる好意的であったことを後に見る〕

■ 【06-1-089】 与宝月大師

【**解題**】^{せいと}成都にいる^{ほうげつだいし}宝月大師〔^{いかん}惟簡〕〔→作品番号 03-1-009 など〕に送った手紙。宝月大師は^{びざん}同じ眉山県出身の同姓の親戚であり親友。文中にあるように翌年の一月に出したものと思われるが、話の順序としてここで見ておく。

【訳文】

近ごろ二通の手紙をお送りしましたが、届いておりますでしょうか。新たな年を迎えられて、遠く法体の康勝であらんことを想っております。お会いする縁がないのは残念でなりません。しほば経蔵碑の文章をお求めてありますが、このごろは文章を作ることを断っており、もはやそのようなものは作ることはないと思っております。ところが、先に遠より丁寧なお手紙を頂戴し、さらには悟清君が来られて日夜に督促し、そのためついこれを作って寄せることとなりました。罪に墜ちた者であるのを嫌うのでなければ、どうぞ石に刻んでください。碑の文字は悟清君が文章を持って安州の滕元発君に頼みに行ってくれたらよかるかと思っていますが、それがうまくできますでしょうか。……[碑の作り方についていくつかの希望を記す]……黄州には何もお届けするようなものはありませんので、建茶[有名な茶]のひとかたまりを添えることとします。……

【補足】〔(1) 宝月大師は、成都の勝相院に経典を納める建物を造り、それを記念する文章を蘇軾に依頼してきた。手紙だけでなく、弟子の悟清もきて頼まれたので、蘇軾も書かないわけにはいかなかった。蘇軾は9月12日にそれを書いたことが後の文章でわかるのだが、なぜかこの返書は翌年になってから出している。(2) 滕元発 [滕甫] の名は作品番号06-1-051で見ている。滕元発は作品番号06-1-093で見ると、朝廷の中枢部にいる人々に嫌われて都からより遠くより小さな安州へと移動し、安州が黄州の西隣であることから、揮毫を依頼するには都合がよかった〕

■ 【06-1-090】勝相院経蔵記

【解題】上の手紙で触れていた記念の文章。独特の文体で記された技巧的な文章で、意味を掴むのが難しく、日本語に移すのはかなり困難であるので、ほんの数行だけを訳す。勝相院は成都の大聖慈寺にあつて、もとは中和院といい、後に勝相院の名を賜り、仏典を納める大宝蔵を設けた。中和院の名は、唐の中和年間に当時の皇帝が黄

巢そうの乱らんによって都長安ちやうあんを失って成都せいとに逃れたことに由来する。

【訳文】

元豊三年げんほう さんねん、歳は庚申とし こうしんにあり、大比丘だいひく惟簡く いかん、号は宝月ごう ほうげつは幻まぼろしの如ごとき修行しゆぎやうをして、三摩鉢さんまぼつだい提だいし、蜀しよくの成都せいとの大聖慈寺たいせいじじ、もとの中和院ちゆうわいんに……[以下、一句四字の文体で、経典を納める蔵を作ったことを述べる]……

ここにもとは蜀人の居士しよくじん [蘇軾そしのこと]がいて、この比丘とは大きな縁があり、国を去って流浪ちゆうらうして、長江ちやうかうと淮河わいがの間まにあって、この比丘がこの仏事を為すことを聞き、……[以下、一句四字の文体で、この記を書くことを述べ、さらに一句四字の文体で、この蔵を賛美する]……

■ 【06-1-091】 自跋勝相院経蔵記

【解題】 上の文章に書き添えた跋文。

【訳文】

私は夜よ、宝月ほうげつ大師だいしからこの文章を書くよう求められるのを夢に見た。目覚めるとすてに三鼓さんこであった。紙を引っ張り出して筆に任せ、一気にこれ書き上げた。

元豊三年九月十二日四鼓しこに書く。

【補足】 [三鼓、四鼓とあるのは夜を五等分した時刻の測り方で、真夜中に起きて二時間ほどで書き上げたことになる。まさに神技というべき速さであるが、蘇軾としては興が乗りさえすれば何でもないのであったのだろう]

■ 【06-1-092】 中和勝相院記

【解題】 成都の勝相院について記した文章がもう一篇ある。これより 13 年前に父の

喪に服して故郷に帰っていたときに書いたとの推測もあるが、ここで読んでおこう。

【訳文】

本来、仏の道は成り難いものである。それについて聞くと、何ともすさまじいものだと思うにはいられない。

初めて仏の道を学んだ者〔釈迦〕は、深い山林に入り、荊や毒蛇を踏み、裸体に霜や雪を被り、我が肉体を裂いて焼いたり煮たりして虎や鳥や虫に食べさせました。そのような苦しく辛いことを百千万億年も続けて後に仏の道は成ったのである。

そこまではできない者でも、家族と絶縁し、麻の布をまとい、草木の実を食べ、日中は薪や水を運んだり糞便の掃除をするなどの労働をし、夜には火を焚き、香を薫じてその師に仕えた。その身をもっぱら痛めつけ、自身の思いを口にするには厳格に禁じられた。これはごく一部を述べただけで、詳細はとて書ききれない。生涯このようにしてようやく出家して沙門比丘の一員になれたのである。

僧は農耕をせずに食べていられるとはいっても、その労苦と人から卑しめられることでは、農工に携わる者の遠く及ぶところではない。その利害を計るなら、庶民が喜び楽しんで為すようなものではないのだ。ところが、いまでは家を棄て、衣服を毀ち、毛髪を損なう者が多いのはどうしてなのか。仏の道が安直で簡便であるとも思っているのだろうか。

寒さの中で耕し、暑さのもとで草刈りをし、官に徴集されて労働するのは、庶民の患い苦しむところである。私はそれを全て免れている。私は仏教を知ろうとして、師に尋ねたところ、「戒」とは、またもののわかっていない凡人のために設けられたものであると。ならば、私は何を用了らよいかというと、患うところのものを削るのだと。しかし、自分にとってよいことばかりを取ろうとしてもそれはできるものではない。よい評判ばかりを求めただけになってしまうのではなからうか。

荒唐無稽な説を正し、堂上で自由自在に問答をする人を長老という。私はかつて長老の語ったことを研究してみたが、そのほとんどが理解できなかった。「械を設けて敵に應じる」「形を匿して敗に備える」

「窘ゆきづまったなら広い水みづに墮おちよ、捉とらえられないだろう」。このような類である。

私は四方を旅して、このようなおかしな説を繰り返して聞いて困り果て、それから逃れようとして袋小路に閉じ込められてしまった。長老たちは往往にして顔を真っ赤にして説き、仏の道が成ったかのように言うのだが、かえって間違っているように思えてしまう。そこで、私は笑って、「これが外道げどうの魔人まじん[仏道の妨げをなす者]なのか」とつぶやくである。

これほどまでに私は僧まんじを慢侮し、信じていないのである。

ところが、いま宝月大師ほうげつだいし惟簡いかんは、その居るところの寺院の本末について文章に記すよう私に求めてきた。全くのお門違かたがたいではないだろうか。

しかしながら、私は昔初めて成都せいとに遊あそんだときに、文雅大師ぶんがだいし惟度いどに会った。度量が大きく、純朴で愛すべき人柄であった。唐代の終わりから五代の時代について詳しく、史書には載っていないことをいろいろと話してくれた。惟度とはそれから深く付き合うようになった。惟簡はその同門の友である。惟簡の人となりは、緻密で明敏なところは他の人の及ぶものではなく、仏に仕えることでは衆人と等しくまことに謹嚴である。私は惟度、惟簡の二僧と非常に親しくしてきた。

この寺院には、唐とうの僖宗皇帝きそうと、皇帝に仕えた文官、武官七十五人の像がある。僖宗皇帝が都を失って成都に逃げ、いまにも唐が亡びようとして、しかしまだ滅亡はしなかったことを想うと、深い感慨を覚えて嘆息せずにはいられない。その画はまことに精妙で、称賛に値するものであることから、特にここに記しておく。

この寺院に最初に居たのは長安の人、広寂大師こうじやくだいし希讓きじょうであった。それから伝わること六世で惟度と惟簡に至った。惟簡の姓せいは蘇氏そ、眉山びの人で、私の遠い親類である。惟簡は、いまの院あるじの主であり、惟度はすでに亡くなった。

【補足】〔(1) 蘇軾そせきの別の文章には、「宝月大師ほうげつだいし惟簡いかんは、字は宗古あざな、姓は蘇氏そ、眉州そ眉山び山ざん県の人である。私にとっては同世代の遠い親族である。9歳で成都せいとの中和院ちゆうわいんの慧悟けいご大師だいしに仕え、19歳で得度し、29歳で紫の袈裟を賜り、36歳で大師号を賜った」とあ

る。(2) この文章では、蘇軾は現在の仏教者のあり方を厳しく批判している。これまで蘇軾は幾人もの僧侶と親しくしてきたし、とりわけ黄州に流されて自身を一新しようとしたときに仏教を一つの指針としたのであるから、かなり意外な感じがする。しかし、仏教そのものを批判しているのではない。仏教は個々人を救済することはできるのかも知れないが、社会を救済するものではないとするのが儒学者の伝統的な捉え方で、唐の韓愈などはその観点から仏教を全面的に否定した。蘇軾は遥かに柔軟であるが、墮落した仏教者は許すことができず、大寺院で小難しいことを言う「長老」よりも、磨公のような「異人」をよしとしたのだろう [→作品番号 06-1-008]。そして、惟度や惟簡は「異人」側の僧であると蘇軾は見ていたのだろう)

■ 【06-1-093】 与滕達道

【解題】 滕元発 [滕甫、字は達道] [→作品番号 06-1-051] に送った手紙。滕元発の任地が変わったことを報せてきたことへの返事である。

【訳文】

罪によって廃された余りかすの身でありますから、門を閉ざし、誤りを省みて、人との交わりを断っております。しばらく御無沙汰いたしておりますのは、怠慢のためではありません。弟が来まして貴君の動静を詳しく知り、あたかもお目にかかったかのような気がしました。安州知事としてすでに移られたと、お手紙を得て知りました。……赴任に当たって黄州の近くを通られることを知らずにおりまして、わかったのはすでに去った後のことで、はなはだ残念に思っております。……

【補足】 [安州は黄州の西隣であるので、移動の際に会えたのではないかと残念がったのだが、現在の朝廷から嫌われている二人が顔を合わせるのとは穏やかではないと、滕元発は判断して、蘇軾に知らせずに通過したのではないだろうか]

■ 【06-1-094】 商君功罪

【解題】後に見るように岐亭の役人である胡定之が蔵書家で、蘇軾に自由に書物を貸してくれた [→作品番号 06-1-103]。公務から離れた蘇軾は、自分のための読書に好きなだけ時間を使うことができた。これは、戦国時代の遊説家の言説を集めた『戦国策』という史書を読んで、商鞅の功罪について論じた短文。商鞅は紀元前 356 年、秦の孝公のもとで、法家の思想に基づいて国政改革に取り組み、新しい法を作って猛然とそれを推進した。それによって秦の国力は一気に強まり、後に始皇帝が天下統一を果たす基盤が作られたのだが、法の過酷さと商鞅の強引なやり方を嫌う民衆や旧勢力に憎まれ、商鞅は無残に殺されてしまった。

【訳文】

商鞅の法は、民衆の本業としては農に務めさせ、公のために戦うときには勇敢に、しかし私的な争いごとにおいては臆病にさせ、食を足らせ、兵を強く、帝業[天下統一]を成そうとするものであった。民は法によって縛られ、刑を見て徳を見ず、利を知って義を知らず、ついに秦はそれによって亡んでしまった。つまり、秦の帝業を成したのは商鞅であり、秦を滅ぼしたのも商鞅であったのだ。商鞅の生涯において、民衆の上に君臨する福を得たのは、帝業の功に報いるものとして十分であった。そして、車裂きの禍を受けたのは、秦を滅ぼした罰の償いとしては僅かなものであった。そのようになったのは理としても歴史の勢いからしても自然なことであって、何ら怪しむに足りないのである。後の君子で、商鞅の罪があってしかし商鞅の功はなく、それでいて、商鞅の福を受けながら商鞅の禍をまた受けていない者がいたりないだろうか。私はそのことを懼れる。

元豊三年九月十五日、『戦国策』を読んで書く。

【補足】 [(1) 一読してわかるように、蘇軾は、商鞅の改革に現在の新法による改革

を重ね合わせてこの感想を書いたのである。(2) 作品番号06-1-009で見た李斯^{りし}は、商鞅の考えを継承^{しこうてい}して始皇帝に仕えた人。国を強くした功績は大きかったが、やはり最期をよくしなかったのは同じである]

■【06-1-095】書南史盧度伝

【解題】これは『南史』^{なんし}という史書を読んでのメモ。『南史』は南北朝時代の南朝の宋^{そう}、齊^{さい}、梁^{りょう}、陳^{ちん}の4王朝の歴史をひとまとめにした書物。

【訳文】

私は若い頃から殺生を喜ばなかった。しかし、それをやめることはできなかった。近頃はようやく猪や羊を殺さないですむようになったが、根っからの蟹好き、貝好きであることから、それらの殺生はまたやめられなかった。

去年罪を得て獄に下り、始めは死を免れないと思ひ、それから脱することができて、一切のものをもう殺さないようにしようと考へた。蟹や貝が食事に供されると、皆を川の水に放つことにした。いまさら水に入れたところで、ほとんど生きる道理がないのはわかっているのだが、それでも万に一つでもぜひ活かしたいと願うのだ。そしてどうしても活きなかったときには、いよいよ煮て食べるのである。活かすことで何か望みを得ようというのではない。私自身が経た患難は、鶏や鴨が厨房に置かれるのに何ら異なるところがなく、それを食べて自分の腹を満たすことがどうにも忍び難いのである。生あるものにひどい恐怖や苦痛を与えたくないだけだ。それでも、私は残念なから生き物の味を忘れることはできないので、自ずと死んだものは食べている。

『南史』の「隱逸伝」にこのようにある。

「始興の人で盧度^{ろど}、字は彦章^{あざな げんしょう}は、道術を修めた。若いときは張永^{ちやうえい}に従って北の魏朝^ぎとの戦争に出たのだが、張永は敗れ、魏人に激しく追われ、淮河まできてそこを渡ることができなかった。盧度はそこで

のように誓った。『もしも死を免れたならば、これからは一切の殺生をしません』。するとたちまち二枚の楯が流れてきたので、それをつなぎ合わせて川を渡ることができた。後に廬陵郡の西昌県にある三顧山に隠れ住み、鳥獣とともに暮らした。夜に鹿が壁を叩くと、盧度は『壁を壊さないでくれたまえ』といい、鹿はその声に応じて去った。家の前には池があって、魚を養い、それぞれに名前を付けて呼び、餌を与えた。かねてからいつ死ぬかを知っていて、ついに寿命をもって終えた」

たまたまこの部分を読んで、自分とほぼ似ていると思い、ここに書きとめた。

【補足】[ここで思い起こすのは、蘇軾の母が庭に来る鳥を殺すことなく大切にした話である [→作品番号 01-2-017]。母の影響を受け、なるべくなら殺生はしないという気持ちが育まれていったのだろうか]

■【06-1-096】 与朱康叔書

【解題】がく 鄂州知事のしゅじゅしやう 朱寿昌 あぎな こうしゆく [字は康叔] [→作品番号 06-1-068] に宛てた手紙。ここでは唐のとう 李肇りちやうが編集した『こくしほ 国史補』を読んでの感想を記している。

【訳文】

今日はたまたま『こくしほ 国史補』を読み、とこう 杜羔の事を見て、貴君とすこぶる似ているのを知り、嘆息してやみません。それについて記して貴君にお寄せします。どうかほかの人には見せませよに、恐らく嫌う人もいでしょうから。……

杜羔はもとより純真な人で、その父はかほく 河北の役人としてその地で死に、母は兵乱を経て行方知らずになってしまいました。杜羔は従兄のとけん 杜兼のもとに身を寄せ、杜兼はたくろ 沢潞判官として、私邸において罪人の取り調べを行っていましたが、ある老婆が尋問を受け、杜兼が出入りするのを見て、ひそかに「あの少年は面差しが私の夫に似ているようだ」と人に語りました。それで調べてみると、杜羔の母であるとわかり、杜羔は家に迎えました。さらに杜羔は父の墓を探そうとしましたが、ゆかりのある村の老人たちは

すでにいなくなっていて、墓の所在はわかりませんでした。ある仏寺に泊まり、日夜泣きながら父の墓を求めていると、たまたま煤けた柱に数行の字が隠れているのに気づき、煤を払ってよく視ると、それは亡き父の書いたもので、「我が子孫がもしも我が墓を探しにきたならば、某という家に問うがよい」とありました。杜羔がその家に行ってみると、八十余りの老人がいて、岡の上の高まりがそれであると教えてくれたのでした。それによって杜羔は改めて父を葬ることはできたのです。杜羔の官は工部尚書こうぶしょうしょに至って引退しました。

このことは唐の李肇の『国史補』こくしほにあつて、ちかごろたまたまこの書を見て、すこぶる貴君と似ていると感じ入り、よって書いたものである。

元豊三年九月二十五日記。

【補足】〔(1) 人には見せないようにと記してあつた後の省略したところに、武昌ぶしょう県知事の江縵こうえん [→作品番号 06-1-045] の名があつて、事情はわからないが朱寿昌しゅじゅしやうと江縵の関係には微妙なところがあつたようだ。(2) また、省略したところに、章しょう◆あざな [字は質夫しつふ] [◆は次の下に呆という字] [→作品番号 05-4-001] が間もなく武昌にくることも記されている。(3) 都では9月27日ぶんげんはくに文彦博 [→作品番号 5-5-014] が太尉たいいの称号を受け、蘇軾は祝賀する文章を書いて贈っている]

■ 【06-1-097】 答畢仲挙書

【解題】畢仲挙ひつちゅうきよへの返書。この手紙によると、畢仲挙とはかねてからの知り合いであつたようだが、どのような人物でどのような関係があつたのかはわからない。手紙から推測するに、畢仲挙は地方の知事クラスの職にあつて、蘇軾そうが黄州こうに流されたと聞き、仏教に帰依することで苦しみから脱却できるであろうとアドバイスしたようである。これは味わい深い手紙なのだが、残念ながら訳者の力ではその魅力の百分の一も引き出すことができない。特に末尾の20字余りはひどい誤訳なることを避けて割愛

した。この訳文を見て興味を覚えた方は、原文を味読していただきたい。

【訳文】

お別れてからたちまち十年余り、この愚かなぼんこつ男でありますから、もとより貴君の友人にはとてもなれませんのに、思いもよらぬことになお御記憶に留めおかれて、遠より曲げてお手紙をくださり、はなはだ有難く思っております。まずは貴君の御佳勝^{つまび}を審らかりし喜んでおります。

貴君の任地である羅山^{らざん}は善い土地柄であることでよく知られ、風土病の恐れもなく、四季は穏やかであります。貴君は失うようなものはなく、朝廷の恩寵を蒙り、しかも得喪^{とくそう}[世俗の利害]を忘れておられますのは、まさに天の恵みを得ているといえるであります。

私は長者の教えを用いなかったために罪に触れてしまいました。禍福というものは自ら避けたり得たりできるときではなく、己の巧拙によるものでもないのであります。黄州は大河に面し、山を帯び、耳目の好むところに適い、暮らしに必要なものを整えるのは難しくありません。早く寝て遅く起きて、禍福というものは果たしてどこにあるのかも知らずに過ごすことができます。

たまたま『戦国策』^{せんごくさく}を読んでいたところ、顔蠅^{がんじょう}が「晩れて食べることで肉の代わりにする」と語ったのを見て、ふっと笑ってしまいました。顔蠅は巧みに貧乏暮らしをする者であったのでしょう。菜でも雑穀でも、腹をうんとすかせてから食べるなら、その味はいわゆる「八珍」^{はちちん}[天下の珍味]に等しいものがあります。すでに腹がぱんぱんに膨らんでいたなら、どのような御馳走を並べられても、早く目の前から持ち去ってほしいと思うだけです。うまいかまずいかは実は己にあって、物にあるわけではないのです。

貴君がお示しくさいました、仏書を読むことと、薬を作って人を救うことの二事は、閑居の身へのはなはだ厚い賜りのものであります。私もかねてより仏書は看ておりますが、いつも暗く塞がれて妙処に通じることができずいます。独り粗く浅くわかるころの説を仮に作って、自らそれを何度も吟味直して見ます。譬えるならば、農夫が草取りをするようなもので、取っても取ってもたちまちまた生えてきてしまうので一見すると無益なようですけれども、取らないよりはよいのであります。

世間の君子で、超然と悟ったとかいう者のことは私は理解できません。かつて陳襄君とよく禅について論じたことがありました。陳襄君は自分ではすっかりわかったと考えていて、私のいうところは浅く陋いといっていました。その一方で、私は陳襄君に次のようにいったことがあります。「貴君が談じているのは、譬えれば、竜の肉を食らうことで、私が学んでいるのは豚の肉を食らうことです。竜と豚では月とすゝまんの開きがあります。しかしながら、貴君はいつも竜の肉を食らうことを説いているばかりで、私はときには実際に豚の肉をおいしく食べて満腹になっています。とすると、どちらがどちらに及ばないのでありましようか」

貴君が仏書から得ているのは果たしてどのようなことでありましようか。生死の境から出る、あるいは小乗、中乗、大乘の三つの差異を超える、あるいはついに仏となることなどでありましようか。そもそも貴君はなお我らのような者とともに浮き沈みのなかにおられるのでしょうか。仏教や道教を学ぶ者は、「静」と「達」[悟り]を期す者であるのでしょ。 「静」は「懶」[怠け]に似て、「達」は「放」[放縦]に似ています。学びつつあって、まだ期するところに至っていないのに、それより先にその似たところを得てしまったのでは、害なしとはいえないのではないでしょ。 私は常にそのことを疑っています。それで私の思うところを書いてみました。

お手紙には、「世にあって平穩で無病であることを得て、粗衣でありながらも食が足りて、人を無実の罪に陥れたりしないのなら、それで十分であろう」と、書かれていましたが、全もってその通りで、感嘆しやみません。……

【補足】 [(1) この手紙でも『戦国策』 [→作品番号 06-1-094] を読んでいと記している。顔蠅については蘇軾が別々に文章を書いているので、次の項目でそれを見ておこう。(2) 陳襄は蘇軾が杭州にいたときに知事であった人 [→作品番号 04-1-052]。二人は非常に良好な関係にあったので、このような皮肉ともいえるようなことも蘇軾は面と向かっていえたのだらう。もしかすると、実話というよりはそれなりに脚色されているのかもしれない。(3) 仏教や道教において瞬時に何かを悟るような話がよくあ

るが、それに対して蘇軾は極めて懐疑的であった。蘇軾は直観的に理解することと、膨大な知識をベースに帰納的に理解することの両者がなければならないと考えていて、むしろ後者に重きを置いたかたちでの両立を重視していたようだ]

■ 【06-1-098】 顔蠟巧於安貧

【解題】 上の手紙で言及していた顔蠟^{がんしよく}について記した短文。執筆の時期はこれより15年ほど後と推測されている。前半は『戦国策』^{せんごくさく}からの引用で、後半が蘇軾の感想である。

【訳文】

顔蠟^{がんしよく}がもしも仕えてくれるのなら、食事には常に御馳走を揃え、送り迎えには車を用意し、家族には美しい衣服^{せいおう}を与えようと、齊王は約束した。しかし、顔蠟は辞退して齊王のもとを去ろうとし、このようにいった。

「玉^{ぎよく}は山に生じます。その形を整え、磨きあげると、もとの姿は破壊されてしまいます。成形された宝玉は貴ばれないわけではありませんが、もとの大きく完全であったものはなくなってしまっています。士は野に生まれます。君主に推されて選ばれると、士は禄を得ることができます。そうなれば人から貴ばれないわけではありませんが、身体も精神ももとの完全なものではなくなってしまいます。私をどうか帰らせてください。帰ったならば、腹^{おく}をすかせて晩れて食べることで肉に代え、ゆるゆると歩くことで車に代え、罪のないことをもって貴くなることに代え、清く静かに、節^{せつ}をもって正しく生きることを自分の楽しみといたします」

嗟乎、戦国時代において魯仲連^{ろちゆうれん}と顔蠟^{がんしよく}ほどの賢者はいなかった。しかし、その二人にしても道^{みち} [最も大切な道理] がわかっていただけではなかった。顔蠟^{がんしよく}が、晩^{おく}れて食べることで肉に代え、歩くことで車に代えるといったのは、いまだにその心が肉や車にひかれていたからに違いない。晩^{おく}れて食べること

で自ずからまくなり、ゆるゆると歩くことで自ずから快適になる。そのうまさと快適さが取ればそれで十分ではないのか。どうしてわざわざ肉に代えるだの、車に代えるだのというのだろうか。

顔蠟は貧しく暮らすことに巧みであったというべきであろう。腹がすく前に食べれば、いわゆる「八珍」^{はちちん}でも草や木を噛むようなものだ。草や木を「八珍」^{おく}にするには、晩れて食べればよいだけである。顔蠟はもとより巧みであった。私は長く貧乏を続けているわけではないので、顔蠟のように巧みにはなれない。

【補足】〔(1) 魯仲連^{ろちゅうれん}は非常に優れた遊説家であったが、特定に君主に仕えることはしなかった。(2) 顔蠟^{がんしよく}についての考察は、先の手紙よりも一段深まっている。顔蠟は巧みであっただけで、真に大切なところにはなお至っていないと、ここではいつている。最後の一文はよく吟味しなければいけない。これを書いたとき、蘇軾^こは黄州に流されたときよりもさらに重い罪で処分されて遥かに遠い地に流されていた。蘇軾は顔蠟の巧みさを真似する気はもとよりないけれど、貧乏暮らしがまだ短いから、その巧みさもまだできないと、この文章ではいつている。その裏には、さらに長く貧乏暮らしを続けるならば、顔蠟を超えて真に求めるところに達するであろうという希望ないし自負があるのだろう。流されたことを悲嘆するのではなく、さらなる飛躍がこの先にあると前向きに考えているのである。そのころの日々は第 11 章で見ることになる]

■ 【06-1-099】 与章質夫

【解題】先に武昌^{ぶしょう}県に間もなく来るとあった章質夫^{しょうしつふ} [→作品番号 06-1-096] とは会うことができなかった。そのことを記した手紙。

【訳文】

武昌^{ぶしょう}で再会を果たすことができず、いまに至っても残念でなりません。お手紙でわざわざお別れの言

葉を伝えてくださり、感服してやみません。来年は任を終えられるとのこと、また長江を過られるときにお会いできればと思っています。鼎州の桃源県のあたりに行かれましたら、きっとさまざまな遺跡をお訪ねになることでしょう。鼎州、澧州にはもとより佳いところがたくさんあります。『新唐書』によると、劉禹錫がその地で民間から採取して作った『竹枝詞』は、その後も武陵の土地の人が歌っているとありますが、果たしていまはどうなのでしょう。もしもそうであれば、蘇君や秀君によってその歌声を伝え聞かせてもらうことができないのでしょうか。ああ、かつて徐州の駅舎でお二人の歌声を聞いたのは夢の中の出来事であったかのように思えます。

【補足】[最後に、蘇君と秀君とあるのは、章質夫のところにいる歌妓であるという。作品番号 06-1-054 でも触れたように、士大夫のもとには往々にして技芸をもって主人に仕える女性がいた。主人と特別な関係にあるのでなければ、譲渡や売買の対象となって仕える相手が変わる不安定で厳しい身の上であった]

■ 【06-1-100】 太守徐君猷、通守孟亨之、皆不飲酒、以詩戲之

【解題】10月、新たに黄州知事となった徐大受 [字は君猷] らの宴席で詠んだ詩。詩の題は「知事の徐大受も副知事の孟震 [字は亨之] も皆が酒を飲まないの戯れに詩を作った」。「酒を飲まない」とあるのは、下戸で飲めないとするのが一つの解釈であるが、お上からの経費節減の号令に従って飲酒を自粛していたとする解釈もある。なお、この詩はこれより1年後の作であるとする考証もあるが、ここで読んでおこう。実は徐大受のもとには多数の女性がいたことは後に見ることになる。

【訳文】

昔むかしの孟嘉と徐邈は大酒飲みだった。

孟嘉は、当代の姦雄の嘲笑をざりとかわし、

徐邈は、当代の姦雄を冗談で煙に巻いた。

ところが、孟嘉、徐邈の子孫というべき知事も副知事も酒の興趣を知らず、

ここでは私だけが孟嘉、徐邈の仲間である。

孟嘉の風流[ものに捉われない振る舞い]は高人[高い道義を具えた人]が識り、

徐邈の通介[斜に構えた言動]は薄っぺらな世俗に受けるものではない。

孟嘉と徐邈の霊がここにゐるなら笑っていつてあろう、

「我等の子孫どもは独り醒めた目で時勢を見ておるわい」

【補足】[孟副知事と徐知事の縁で同姓の孟嘉と徐邈を引いて即興の詩を作り、皆を楽しませたのだらう。孟嘉が重陽の節句で帽子を飛ばされ、当時の権力者の桓温の嘲笑をさらりとかわしたことは、これまでに何度か見ている [→作品番号 05-3-061 など]。徐邈は三国時代の魏の人で、当時の権力者の曹操に対して阿らずにひねった言辞を吐いた。知事と副知事は酒は飲まないけれど、脱俗、反骨の精神は受け継いでいるというのだ。なお、先に見た『赤壁の記』 [→作品番号 06-1-082] に「徐邈とは別人」というのがあったが、こちらが本家の徐邈である]

■ 【06-1-101】 菩薩泉銘

【補足】李常 [字は公拱] [→作品番号 06-1-043] が淮南西路の役人となり、職務を帯びて黄州に来た。仕事の合間に蘇軾とともに西山寺 [→作品番号 06-1-046] に遊んだことがこの文章から知れる。

【訳文】

晋の時代の陶侃[陶淵明の曾祖父]が広州の長官であったとき、夜になると川の上に怪しい光が現れるのを漁師が見て、陶侃に報せた。陶侃が光のもとを調べさせると金の像が見つかった。そこに刻

まれた文字に、天竺の阿育王が鑄た文殊菩薩の像とあった。そこで武昌の寒溪寺に納めた。陶侃は荊州に移るに際して、その像を持って行こうとしたが、人の力では動かすことができなかった。三十頭の牛を連れて車を曳いて船にまで運んだ。ところが船に載せると、船が覆って沈んでしまった。そこで、寒溪寺にまた戻した。

その後、恵遠法師が廬山にその像を迎えた。そのときは何のさわりもなかった。廬山において二人の僧がそれを守り続けたのだが、唐の武宗の時代に天下の仏寺を破壊するよう命令が下り、二人の僧は像を錦繡谷に隠した。仏教がまた許されるようになってからその像を探したが見つからなかった。しかし、谷の中には今でも時々光が射し、峨眉山や五台山のような姿が浮かび上がるという。

恵遠法師に関する文集に載せられている張文逸の文や山中の父老が語り伝えるところは以上の通りである。

現在では寒溪から西に数百歩ほどのところに西山寺があり、岩穴から泉が湧き出している。水は澄んでいて甘く、菩薩泉と名付けられている。人々はその由来を知らない。

建昌の李常が菩薩泉に来て、「ここは昔、文殊菩薩像が置かれていたところではないのだろうか」といい、そのことを銘に刻むよう私に勧めた。

【補足】 [(1) 銘の本文の訳は割愛する。(2) 晋の時代の陶侃の名は作品番号 06-1-066 にもあった]

■ 【06-1-102】 記公扨天柱分桃

【解題】 これは李常 [字は公扨] が黄州に来る前にあったことを語ったのを記録した文章。

【訳文】

李常君は客人たちと天柱寺に遊んで帰り、司命祠の下を過った。道の傍らに一本の桃の木があり、

実がよい具合に熟していた。ちょうど道が交差するところに木はあるのに、誰にも実を採られずに残っていたので、もしかしたら真霊しんれいによる瑞祥かも知れない疑った。皆で分けて食べるには数が足りないので、人々は李君が取るように勧めた。李君はそれをよしとしないので、同行する蘇君そと徐君じょにはそれぞれ七十余りの老母がいたので、李君はその二人に桃を分けて、帰って母に贈るようにいった。それで人々は、自分が桃を食べるよりも満ち足りた気持ちになったのだった。このことは書いておかずにはいられないことである。

【補足】[天柱寺は黄州の百数十キロ東の潜山せんざんにある。桃は長寿を象徴する果実であるので、老母に与えるのが何よりもよいのであった]

■ 【06-1-103】 与秦太虚書

【解題】 作品番号 06-1-083 で見たように乳母が亡くなり、臨臯亭りんこうていには、妻と息子3人、長男の妻、王朝雲おうちやううん、馬正卿ばせいけいがいて、少なくともその7人 [実際にはさらに数人いたよ
うだ] を、俸禄のほぼ途絶えた蘇軾が養っていかねばならなかった。陳慥ちんざうや朱康しゅこう
叔やいろいろな人が時折贈ってくれる物があるにしても、それだけで生活できるわけ
ではない。蘇軾がどのように家計のやりくりをしたのか、秦觀しんかん [字は太虚] [→作品
番号 06-1-081] に与えた手紙の中に記されている。この手紙は、本文中の記述から冬
至の直前、11月上旬に書かれたと推測される。

【訳文】

五月末に弟が来て、貴君のお手紙を受け取りました。温かないた労わりの言葉にお礼を申しねばと思いつつ、ぐずぐずしている間に、飛脚に託してお手紙を重ねて頂戴し、はなはだ恐縮です。このごろは少し寒くなってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。

私の寓居は乱れほどにかなりましたが、弟は筠州いんに着くなり一人の娘を喪い、私は老いた乳母を喪い

ました。悼む心が回復しないうちに、郷里からの知らせで九月中旬に従兄が亡くなったと聞きました。異郷の地にあつて、自身も病み、目に触れるものはもの悲しく、人の命のはかなさが思われてなりません。貴君も病を得てしかも軽くなかったとのこと。また健やかになられたのを喜んでます。我等も次第に衰え、少年のころのように元気に振る舞うことはもうできないものなのでしょう。道士や方士の言うことを速やかに用いて、厚く養生と鍛錬をすべきでしょう。私はこの地に謫居となつてから特にこれとてすることがないので、その一つ二つを研究してみています。

黄州にある天慶観に部屋を借り、冬至の後に入つて四十九日間籠ることにしています。追放の身になつていなければこのようなことはきっとできないでしょう。貴君もいずれ仕官すれば、四十九日の閑を得ようとしてもできないでしょうから、いまこそやるべきです。普段から簡単に実践しやすいことを選んで、寝食のことの他には、それ以外のことは何もしないで日夜を過ごすことによつて、期が満ちたときには、根本から立ち直つてゐることでしょう。その後でまた世間の事に関わつても、事がすめば心は根本のところに戻るるので、再び駄目になることはもうないでありましょう。この手紙が着くのは冬至には間に合はないでしょうが、貴君が始めるのは何も冬至からでなくてもよろしいでしょう。

貴君の詩文を寄せてくださいました。どれも超然と優れていて、どんどん私の書くものに迫りかかのように。とはいえ、私なんぞに追い付こうと努力する必要はありません。貴君もきっと官職に就こうと、科挙に合格しようとするでしょう。科挙は必ずしもあてにはなりません。貴君のためにひそかに考えるに、もっとたくさん書くべきでしょう。見せてくださったなかに『兵を論じる』とか『盜賊を論じる』といった数篇の文章がありますが、それらが数十篇にもなれば、どれも卓然として、実際に用いるべきものとなるでしょう。ただ、いまの政治情勢を論じることはしなくてよろしいでしょう。そうした文章を書いたからといって、科挙に応じることを止めるべきではありません。文章ができたらまた見せてください。それによつて貴君のこゝを知る人がきっと出てくるでしょう。ここに書いた意味はおわかりくださると思います。

先頃、李常君がここに来られて数日間滞在しました。もっぱら貴君のことばかりを話していました。孫覚君からはまだ手紙がきません。きっと書くだけの余裕がないのでしょう。程師孟君からは、御子息の履

中君が亡くなったことを悼む文章を書いてほしいとの依頼がありました。それはもともと私から書こうと言
い出したことなので、果たさなければなりません。しかし、罪を得てからはもう文章は書かないと、自分自
身を厳しく戒めています。もしも一つでもまた作ったならば、垣根が壊れて、その後は止めどなく多言とな
ってしまうことでしょう。

私は黄州に来てから収入が途絶え、しかし一家の人数は増え、はなはだ心配が募るばかりです。とに
かく懸命に節儉に勤め、日に使うのは百五十銭を超えることがないようにしています。毎月一日に四
千五百銭を用意して、三十の塊りに分け、梁から吊るします。朝、二股の棒でひと塊りだけ取り、棒は
のけてしまします。その日使ってもも余った銭があれば竹の筒の中に入れ、それは客が来たときに用
いるようにします。これは実は買収さんから教わった方法です。囊の中にある貯えを計算すると、このや
り方で一年余りしのげそうです。使い果たしたなら、「洪水になれば自然と溝がでる」のたとえの通り、
そのときはそのときでまた知恵も出てくるであらうから、あらかじめ考えすぎないようにしています。

このことさえどうにかなるなら、胸中に心配事は一つもないのです。

住まいの対岸は武昌で、山水の美しさは絶品で、蜀の人の王兄弟があちらの村にいます。しほば
王兄弟を訪ね、浪風が激しくなると帰れなくなります。王兄弟は鶏を殺したり、黍を炊いたりしてもなして
くれます。数日間居続けても嫌な顔をしません。

また樊口には潘君がいて酒店を営んでいます。小舟を仕立ててその店の下に行くと、土地の酒のよ
い香がします。

柑橘類も棗も柿もきわめてたくさんあり、一尺以上も長い芋もあります。それらの豊富なことは蜀の地
にもひけをとりません。米は水路で他所から運ばれてきて、一斗二十銭と安価です。羊の肉も北方の
地と変わらずにあり、猪、牛、鹿もたくさんいて土みたいに安い値で、魚や蟹はただ同然です。

岐亭の酒税監視官の胡定之君は万卷の書物を所蔵し、その任地にも携えてきていて、喜んで人に
貸しています。

黄州の役人のうち数人はしほば御馳走に呼んでくれて、皆が喜んで集まる会を開いてくれます。

貴君はこれらのことを見て、私が何事もなく過ごしていると思うでしょうか。貴君に話したいことはたくさんあります。書けば紙がつきてしまおう。ここまで読んで、髭をひねって少しでも笑ってくれたらと思うだけです。

鮮于侁君はもとより私の畏友ですが、その御子息もなかなかの人で、貴君は会ったことがあるでしょうか。

この地の黄岡県の副知事の張舜臣君とその兄の堯臣君は、貴君のことをよく知っているといっています。

息子についていつもお気遣いいたしていますが、たまたま乳母の葬儀があり、墓を作るのを任せておきますので、まだ御返事を差し上げる余裕がありません。

歳の暮れともなれば寒さが強くなります。ぜひぜひ御自愛ください。

李之儀君に手紙を届けてくださるようここに託します。

夜中に少し酒を嘗めながらこれを書きました。字が乱れています。どうぞお許しください。

【補足】〔(1) この手紙には多数の人の名が挙がっている。初めのところで郷里の従兄が亡くなったとあるのは、伯父の蘇渙の息子の蘇不欺で、しばしば手紙を出している蘇不疑〔→作品番号 04-1-070 など〕の兄である。(2) 李常^{りじょう}が黄州^{こう}にきたことは作品番号 06-1-101 で見ている。(3) 孫覚^{そんかく}が李常^{しんかん}や秦觀と親しい関係にあることは何度も見ている〔→作品番号 05-5-059 など〕。孫覚も蘇軾の事件に連座している。(3) 程師孟^{ていしもう}は官界の人で、これまでに蘇軾とどのような関りがあったのかは不明。(4) 中間で述べている家計の遣り繰りは興味深い。銭を1日分ずつ小分けにする方法は賈収〔字は耘老^{うんろう}〕に教わったとある。賈収^こは湖州の隱者である〔→作品番号 05-5-062〕。(5) 手紙の後半には黄州にきてからの知り合いの名が上げられている。武昌の王兄弟は王齊愈^{おうえい}と王齊方^{おうせい}のこと〔→作品番号 06-1-030〕、樊口で酒店を営む潘一家^{はん}のことは作品番号 06-1-042 などで見ている。(5) 岐亭の胡定之^{きてい}が藏書家であると記されている。先に蘇

軾が史書を読んでいたことを見たので、それらの書物は胡定之から借りたのであろうか。(6) 黄州の数人の役人とは、先の詩で見た黄州知事の徐大受^{じょだいじゅ}、副知事の孟震^{もうしん}、それに黄冈県知事の何氏^か、同じく黄冈県の役人の段氏^{だんし}、それに黄州の酒税官の樂京^{がくけい} [→作品番号 06-1-036] らであるとされる。(7) 最後にまた共通の知人について述べているが、鮮于侁^{せん うしん}の名はこれまでに何度も見ている [→作品番号 05-4-085 など]。李之儀^{り し ぎ}については次に見る]

■ 【06-1-104】 答李端叔書

【解題】 上の手紙の終わりに言及されていた李之儀^{り し ぎ} [字は端叔^{あぎな たんしゆく}] への手紙。李之儀^{しんかん}は秦觀と同じく蘇軾の弟子筋に当たる人で、かつて揚州で一度だけ会っていたが [→作品番号 04-3-090]、まだそれほど親しい関係にはなっていなかった。

【訳文】

私は貴君の名を以前から耳にし、知人のもつて時折貴君の詩文を見ておりました。数は多くはありませんでしたが、貴君の人となりをおよそ知ることができました。

このところお手紙も差し上げることもなく、貴君がひどい病になられたときにも一字のお見舞いも申し上げなかった怠慢の罪は、どうか寛大にお見逃してください。弟が先頃来まして、貴君のお手紙を頂戴しました。やはりものぐさのために即答しませんで、くずくずと礼にもとること、実にひどいものがあります。それでも貴君は私のことを見捨てることなく、飛脚便にて再びお手紙を送ってくださいました。私に対してますますよけていただき、顔が赤らみ汗が流れ落ちます。

貴君は才能があり高い見識がおありですから、軽々しく人と交わりを結ぶのはよろしいことではありません。黄庭堅君や秦觀君^{こうていけん しんかん}がいうのをそのまま真に受けるべきではありません。私は人に憎まれ、ただ二君だけが喜んで私のことを誉めてくれています。蓼食う虫も好き好きの例でありましょう。そのわけを明ら

かにするのは簡単ではありません。二君がでたらめをいっているというではありません。二君が、いのに人が同調するのは大いによろしくないのです。

私が若いころに書物を読み文を作りましたのは、もっぱら科挙を受験するためでした。すでに科挙に合格すると、その次を貪るようして望み、制科も受けました。制科に合格して私は何をしたのでしょうか。そのときの制科の科目の名は「直言極諫^{せいか}」でありました。その意味するところは何かというと、古今の事例を参照して是非を議論することにあります。人というものは自分のしていることが知られずにいるのを残念に思ふので、私は制科に合格したからには、実際にそれにふさわしいことをしていると知られたいと思ひ、多くのことを論じて今に至りました。そのために罪を得てほとんど死ぬばかりとなったのです。これはまさに昔漢^{かん}の高祖^{こうそ}が「口先だけで官職を得た奴め」と罵った対象となった者と同じで、真に笑うべきことでありました。

とは言え、世の人が、私がことさらに異論を唱えようとしていると評するのは間違いです。利害をやたらと論じたがり、得失を先んじて言い募ろうとするのは、制科に合格した者によくある癖で、譬えていうなら、季節の虫や鳥が自ずと鳴いて自ずとやむようなものです。自身の損得を考えてのことではないのです。世間の人々がどうやら私のことを過重に評価しているのを不思議に思っています。貴君もやはり私を称揚し過ぎです。全くもって私はそうではないのです。

罪を得てから深く閉じ籠っております。小舟に乗り、あるいは草履を履いて、山水の間を放浪し、木こりや漁師の仲間に加えてもらっています。しばしば酔っ払って、人に怒鳴られることもあり、ようやく世間に知られない身になったと喜んでます。以前からの友人からは一字の通信もなく、手紙を送っても返事はありません。それでこそ世間から逃れられたと喜んでます。

貴君が初めて私に手紙をいただきましたのは、私としては実は望むところではありません。木にこぶがあり、石にくもりがあり、犀に白い筋があって、人はそこに面白みを見出します。それらはどれも物としては「病^{やまい}」に当たります。謫居^{たくきょ}して何もする事がなく、黙って自らを省みますと、この三十年間にしてきたことは多くは「病」でありました。

貴君が見知っているのはそしたもとの私であって、いまの私ではありません。声を聞いてその真情を考
えない、花を取って実を遺さないといいますが、貴君にはどうか真情と実に思いを巡らせていただき
いのです。

こしたことは会ってお話するのでなければ十分には申し上げられません。罪を得てからは敢えて文章
を作ることはありません。この手紙はきちんとした文章にはなっていません。筆に任せて綴るうちに、思わ
ず紙数を重ねてしまいました。他の人にお見せすることは無用に願います。その意味をおわかりください。
一年の終わりが近づいてきています。寒さが厳しくなる折から、万万御自愛されますよう。

【補足】 [(1) 制科^{せい か}に合格した者としての振る舞いについて述べているところは、『荘
子』に描かれた孫休^{そんきゅう}とよく似ている [→作品番号06-1-004]。 (2) 十分に意味が汲み取
れていないところもあるが、決して無批判に自分を追隨する者にならないようにと、
李之儀^{り し ぎ}に注意したのであろう]

■ 【06-1-105】 与王定国書

【解題】 上の二つの手紙と同じ頃に王鞏^{おうきよう} [字は定国^{あざな ていこく}] [→作品番号 06-1-050] に送っ
た手紙。王鞏が流謫の地、賓州^{ひん}に到着したと報せてきたのに対する返事である。

【訳文】

またお手紙を頂戴し、すでに恙なくそちら[賓州]に到着されたと知りました。泰然と構えてくよくよされず
いるのがよろしいのでしょう。知事代行としての貴君の英姿はそちらで評判となりましょう。それもよいでは
ありませんか。

私の寓居はまあどうにかなりましたが、ただ八月に老いた乳母^{うしな}を喪いました。弟は筠州^{いん}に着くなり娘を
一人亡くしました。十二歳でした。悲しみがおさまらないうちに従兄^{そ ふ ぎ} [蘇不欺]が故郷で亡くなったと聞き
ました。異郷にあってこのようなことが続き、目に触れるものが皆悲しくてどうにもなりません。

近ごろ、養生についてかなり知るようになり、自ずと大切なところに迫りつつあると感じています。私に会う人は、以前とは風貌が異なるといえます。これで数年もしたなら、仙人の仲間入りをするのではないのでしょうか。兼ねて、画は竹を描いてすでに神品しんぴんとなりつつあり、行書、草書も極めて巧みになりました。ただし、詩だけはひどく後退しています。どういわけなのでしょう。

張方平殿ちやうほうへいからお手紙つつががあり、恙なくお暮しとありましたが、御子息が妻を実家に帰らせたために家中のことでお困りであるとありました。

弟は筠州いんでひどく忙しくして、この兄が安逸あんゐにしているのをひどく羨んでいます。

間もなく冬至です。すでに天慶親てんけいしんに部屋を借りていて、そこに籠って四十九日間を過ごすことにしています。客人も全て断り、たとえに張方平殿が来られても口をきくことはないでしょう。常に戸に背を向けて過ごすのです。きっと深い益があるでしょう。

先に貴君が寄せてくださった二冊の書物は、憂い患いについて詳しく反覆議論しています。読むだけですでに憂いが解け、また私の無知を洗い流してくれ、得るところがたくさんありました。しかし、いわゆる「知っただけは駄目で、実践しなければいけない」のです。この語は常に唱えるべきであります。

杜甫とほはひどく困窮しても、一飲一食のたびに、国君のことを忘れませんでした。詩人としてそのようであったのは杜甫一人だけです。いま貴君の手紙を見ると、毎回皇帝の恩を思い、自分を咎める言葉を連ねています。詩人の本意をはなはだ得たものであります。私は不肖といえども、貴君のようになりたいと願います。

私は文章も詩も作っていません。近頃、乳母を亡くし、その墓誌銘だけが作りました。貴君が私の書をお望みでありますので、それを記してここに添えます。

今日は駅伝の馬の親方の李孝基りこうき さいじょう せきこくが蔡襄の石刻一卷を届けてくれました。それこそは貴君の題字がありました。それを見て思いが湧き出し、しばらくおさまりませんでした。数日前には沈達君ちんたつがここを過り、貴君をよく知っているというので、船の中で会って、夜遅くまでほとんど貴君のことばかりを話しました。

近ごろ、ある人[張師正ちやうしせい]から大きな丹砂たんさをいただきました。とてもすばらしい光沢があります。敢えて服

用はしていませんが、その人は火で丹砂を变化させることを教えてくれましたので、その様子を観察し、いさか楽しんで日を送っています。貴君のおられる賓州は桂州からさほど遠くないので、たやすく丹砂が手に入ることでしょ。できれば数両でも送ってもらえないでしょうか。難しければ、急に必要ということではないので結構です。

そちらは僻遠の地でありますから、変わったこともあるでしょう。冷静な眼で探してみるのがよいでしょう。多くの道士は金丹を用いなければ羽化[昇天]できないといひます。丹薬の材料は多く南の涯の地にあります。昔、葛洪が响嶼の地の県令になることを求めたのもそのため、ついに廉州で仙人に化したといひます。貴君もこのようなことは心に留めておくよろしいでしょう。

道士の陳璨が一月前に筠州で弟に会って、道術の要妙をあらかた伝えたそです。陳璨はさきにこちらに来るそですが、この人は道術を得ているだけでなく、情義があり、大切な旧友として忘れることのできない人です。

道術にはいろいろあり、その要となるところを会得するのは簡単ではありません。私が観ますに、ただ静心閉目して、よく習熟することで、効果があると知れてくるものなのでしょう。静かな夜に、脈拍を百二、三十数え、次にまた脈拍が百二、三十を数えるまで息を止めます。これを何回も繰り返します。私の言うことを信じてくれるなら、体中に氣を行き廻らせることができ、体に病を近づかせないようにできるでしょう。

こちらでは鶯鳥や鴨を売ることの良さを知りましたが、とにかく何もない暮らして、買うものといったら、刻んだ魚や豚や羊や雁の肉などです。先立つものが入ってこないで、ただ節儉に務め、毎日百五十銭だけに限定しています。月の初めに四千五百銭を用意し、三十のかたまりに分け、天井の梁の上に架けておき、朝早くに椀子にひっかけたひとかたまりだけ取ると、椀子はすくりに片づけてしまひます。また、大きな竹筒に別に不意の入用のときのための銭を貯えています。これだけの儉約をしていて、それでも毎日肉を食べることができているのは、この地の物価が安いからです。いま囊の中にあるもので一年余りは支えられるであります。そのときがきたらまた別の手段があるでしょうから、いまは考えないでい

ます。

息子はこのような状況を見て、敢えて家を出て官に仕えようとはしないので、少なからず助かっています。筆にまかせて字が乱れました。思いつくままに順序もなく書いてしまい、思わず長くなりました。ここまで書いて時刻は二鼓となり、部屋の前の空には冬の白い月の光が満ち、あたかも私の懐いを知るかのようです。まだまだ言い尽くせません。何はともあれお体を大切にされますように。

【補足】〔(1) ここまで「飛脚」と訳していた原文は「遞」で、官が営む郵便制度で、基本的に官用の通信網である。時にそれに便乗して士大夫たちが私信を送ることができたようだ。宋代の「遞」には、人が運ぶ歩遞、馬が運ぶ馬遞、最も早い急脚遞があつて、急脚遞は一日四百里〔二百数十キロ〕行くのだが、軍用に限られていた。この手紙に記されている李孝基は、原文では馬鋪の者とあり、黄州において馬遞を司る人物であるようだ。官用の「遞」に託せなければ、特にそのために人を派遣して手紙や物を送ることもあり、それは「專使」と呼ばれる。そのほか、旅行く人に託して送ってもらうこともあり、蘇軾はさまざまな手段を用いて多数の手紙のやりとりをしていた。(3) 「蔡襄の石刻」とあるのは、蔡襄が書いた字を石に刻んだものの拓本であろう。蔡襄は官界の先輩で、その名は作品番号 04-3-056 などですで見えて、蘇軾が宋代一の書家であると考えていることはこの後で詳しく見ることになる。

(3) 沈達は運輸に関わる役人であるが、詳しいことはわからない。(4) 張師正から丹砂をもらったことについては、『張師正の蓄える所の辰砂を觀る』という詩に詠まれている。ただし、意味を掴むのが極めて難しい詩で訳は割愛する。その詩の題では「辰砂」と書かれているが、辰砂、丹砂、朱砂はいずれにしても硫化水銀を含んだ鉱物で、猛毒である。化学反応を巧みに制御すると黄金のような色を放つので、仙薬の原料になると考えられていた。それを飲めば、毒にあたって、ひどいときには即死し、軽くても慢性の中毒症状によって健康を損なって必ず寿命を縮める。(5) 葛洪は

晋代しんだいの人で、神仙思想に傾倒し、辰砂の出る遙か南方の地へ赴任することを敢えて希望し、広州こうに至ったところでその地の知事に引き留められ、羅浮山らふざんに入って仙薬を作りつつ、著作を続けた。その主著である『抱朴子ほうぼくし』は後代の神仙思想に大きな影響を及ぼし、それまでは仙薬の原料としては植物由来のものも多種あったのだが、葛洪以降はほぼ硫化水銀に限られるようになってしまった。蘇軾が後に羅浮山に行くのを第11章で見ることになる。(6) 道教に基づく養生は大きく「外丹」と「内丹」に分けられ、「外丹」は仙薬によって不老長生を得ようとし、「内丹」は自身の身体を鍛錬して健全な心身を養おうとする。黄州時代こうに蘇軾は「外丹」と「内丹」の両者に実践を試み、この手紙にあるように丹砂を使った化学実験も行っている。唐とうの歴代皇帝の多くが道士たちの作る怪しげな仙薬を飲み、水銀中毒で神経系を害して若死にしたことは史実に明らかで、蘇軾は当然そのことをよく知っていたのだろう、妙な薬は実際には服用しなかったようだ。「内丹」についても、道士たちなどからいろいろ教わり、有用そうなものを選んで試みている。ここに記述されている呼吸法は後に精密化される

[→作品番号 06-4043]。(7) 冬至てんけいかんの後で天慶觀しんかんに四十九日間籠ることは、秦觀しんかんに宛てた手紙にも記してあったが、滕元発とうげんぱつ [→作品番号 06-1093] に宛てた手紙にもそのことを書いて、「聊いさか自みずから反照はんしょうするのみ」と記している。同じ手紙に、弟の手紙で、「ひたすら自省して、終日、一語も一事もなければ、そのなかに言いようのない最高の楽しみがある」と教えられたと記している]

■ 【06-1-106】 趙先生舍利記

【解題】蘇軾ちやうどうは趙棠しやりという不思議な人物の舍利みや [骨] を持っていた。蘇軾は密州みつにいたときに趙棠の息子の趙昶ちやうちやうと知り合いになり、趙棠のことを聞いて短文を書いていた [→作品番号 05-2004]。これは趙棠の舍利についての文章。

【訳文】

趙棠先生はもとは蜀の人で、孟氏の蜀国の節度使であった趙廷隱の子孫で、その後は南海の人となった。趙先生は宋朝に仕えて幕職となり、南海に職を得た。そこに潘冕という者がいて、狂を偽って不可思議な行動をし、「潘盎」と呼ばれていた。南海の方言で心を病むことを「盎」というのである。潘盎は都の僧である言法華とともに偈頌しつつ道を歩くようになり、言法華は「盎は日光仏である」といっていた。趙先生は官職を棄て潘盎に従って遊行し、潘盎は、「そなたは我が道をこごとく得た」といった。潘盎は隠れ去り、どこで終わったのかわからない。趙先生は坐したまま亡くなった。その衣を焚いたところ、数升の舍利が得られた。

私は先生の子である趙稔と交流があり、その舍利四十八粒を得た。潘盎と趙先生には不思議な足跡が極めてたくさんあり、張方平先生が墓誌を作って、具にそれらのことを記録している。趙稔はいま大理寺丞として藤州知事となっている。

元豊三年十一月十五日、舍利を宝月大師[惟簡]の弟子の悟清に授けて、本院[成都の勝相院]に持ち帰らせて供養してもらうことにした。

巴郡の蘇軾記す。

【補足】〔(1) ここに大恩人の張方平の名が挙がっていて、作品番号 05-2-004 でも、趙棠のことは張方平に尋ねたと書いてあった。(2) 趙棠の舍利は成都の宝月大師のもとに預けることになった。悟清が黄州にきていたことは作品番号 06-1-089 などで見ている。なお、原文では悟清のことを宝月大師の「孫」と書いているが、本当の孫ではなくて弟子で、宝月大師の「孫」は十四人いると、蘇軾は別のところで記している〕

■ 【06-1-107】 書蒲永昇画後

【解題】これは蘇軾よりも年長の蒲永昇が描く山水画について記した短文。これを書

き添えた画を悟清ごせいに託して宝月大師ほうげつだいしに贈った。

【訳文】

昔から水を画くときは、遠くまで平らに細かな皺を作ることが多い。善く画いたとされるものにしても、波頭の起伏をうまく作っただけのことで、手で画を撫ぜるよう^{たか}にしてみても、「窪みと隆まりがみごとだ」と感じさせるまでになると、「至妙し むよう」[最高の芸]であるとされる。しかし、その^{いんぼん}技芸の品格の程度をいふなら、印板すいし水紙[型に押し波模様を浮かび上からせた紙]とほんのわずかな巧拙の差を競うだけのものなのである。

唐の^{どう こうめい}広明年間[唐の末期]になって、孫位が初めて新たな工夫をした。奔るような湍はしと巨大な浪が、山の岩とともに折れ曲り、物に当たって様々な形態になるのを画き、水の変化を^{しんいつ}尽して「神逸」といわれた。その後、蜀の^{しよく こうせん そんちひ}黄筌と孫知微がその筆法を^{せいと だいじじ じゅねいん}会得した。孫知微は、成都の大慈寺の寿寧院の壁の四面に「湖」「灘」「水」「石」の四つを画こうとして、何年も思案を凝らし、いつまでも筆を下さずにいた。ある日、慌ただしく寺に入ってくると、非常にせいて筆と墨を求め、風のように袂を奮い、またたく間に完成させた。輸よく瀉ぎ、跳び、^{きようきよう}感まる水の勢いを作って、洶洶として建物を崩さんばかりであった。孫知微が死ぬと、その筆法は五十余年にわたって絶えた。

近ごろ、成都の人、^{ほ さいしやう}蒲永昇は酒を嗜み、各地を放浪し、本性として画に合致している。初めて「^{かっすい}活水」[本来の活きた性質を持った水]の画を作って、孫位と孫知微の真髓を会得した。画工として名をなした^{こう}黄兄弟[黄筌の息子]や李懷衰といった人々は皆それに及ばない。高位高官の者や金持ちたちが権勢をもって頼んでも、蒲永昇は冷ややかに笑ってまるで聞かない。たまたま画く気になると、相手の貴賤を問わず、たちまち画きあがる。

かつて蒲永昇は私のために寿寧院の孫知微の壁画のうちの「水」を模写して二十四幅の掛け物を作ってくれた。夏の日^{なつ}にこれを広間の壁に掛けると、たちまち冷たい風が人を襲い、毛髪が逆立つばかりになる。蒲永昇はいまや老い、その画を得るのはますます難しくなった。

世間には真の価値を識る人は少ない。かつての董羽とか、最近の常州の戚文秀の画いた水でさえ、世にはそれを宝物のようにいう者がいる。董氏や戚氏の類は、「死水」[本来の性質を失った水]というべきである。蒲永昇とはとても並べて語ることはできない。

元豊三年十二月十八日夜、黄州臨臯亭の西の書齋で戯れに書いた。

【補足】[(1) 文同の画について、「常理」「常形」の語を用いて論じた文を見たが [→作品番号 03-4-006]、「常形」のない水を「常理」によらずに画いたのが「死水」で、「常理」によって画いたのが「活水」なのだろう。(2) 唐の広明年間に孫位が初めて新たな工夫をしたとあるのは注目すべき記述で、このとき黄巢の大乱によって皇帝は都の長安から成都に避難し、孫位はそれに付き従った1人だった。その後、皇帝は都に帰還したものの唐はますます衰えてついには亡んでしまう。文化の担い手たちは比較的静穏であった成都に集まり、唐代文化の伝統は成都において生き残った。孫位、黄筌、孫知微がまさにそうした人々で、それを継ぐ者として蒲永昇や惟簡や蘇軾がいる。宋朝は天下統一の過程で武力によって蜀を征服し、成都に伝わる優れた文物を都に持ち去った。その際、宋朝の軍団は蜀の人々を極めて手荒く扱い、多数の人々が命を失い、民衆は宋朝による強圧的な支配を嫌ってしばしば大きな反乱を起こした。それを教訓として江南の平定を任された曹彬は、融和的な戦略を用いて民衆の被害を最小限に留めるよう心を砕いた。そのことを蘇軾が獄中で詩に詠んでいた [→作品番号 05-5-093] のは実は深い意味があるのだ。なお、作品番号 06-1-090 で記した中和は広明の次の元号である。(3) 孫知微が何年も画想を練った上で、短時間で仕上げたというのは、文同が「胸の内に成長した竹を得たなら、直ちにやり遂げる」と自分の画法について述べた [→作品番号 05-5-086] のに通じるものがあるだろう]

■ 【06-1-108】石氏画苑記

【**解題**】これは上の文章から 2 日後に記された。天慶観てんけいかんでの四十九日間のお籠りが終わった直後である。画しよくと蜀文化の 2 点のつながりから石康伯せきこうはく [字は幼安あぎな] [→作品番号 05-1-035] のことを思い起こして書いたのだろう。なお、冒頭に、石康伯は石揚休せきようきゆうの末子とあり、蘇軾そ せいの長男の蘇邁は石揚休の孫娘と結婚した推定されているので [→作品番号 05-3-009]、蘇邁からすると石康伯は義理の叔父に当たるのだろう。

【**訳文**】

石康伯せきこうはく、字は幼安あぎなは眉州眉山び びざんの人である。かつて紫微舍人し びしゃじんであった石揚休せきようきゆうの末子だ。科挙の二次試験を受けて不合格となり、受験資格を放棄し二度と受けなかった。父が高位にあったお蔭で官職を得ることもできたのだが、それに就くこともなかった。

石康伯は書物を読み、詩を作り、それを自分の楽しみとするだけで、人に知られることを求めない。名筆、名画、古い器物、珍しい物を好み、たまたまよい物を見ると、衣を脱ぎ、食べるのを止めてもそれを求め、家に銭があろうがなかろうが、そんなことはお構いなしだ。都みやこに居ること四十年、町の道を行くのに馬に乗ったことがない。人ごみの中なかにいても、耳と目は喧騒から抜き出たところところにあって、もつぱら好むところを探し求めている。

背丈は七尺、色黒で髯ひげがあり、よく画にあるところの道人や剣客のようだ。塵埃ちんがいの中なかを歩き、何かいわずくありがありがしているので、知らない人は「異人」であろうかと思う。

滑稽を善し、巧みに微妙なところを言い当て、傍らそばの人は腹を抱えて笑う。しかし、石康伯自身は静かしずかにしていて顔色を変えることもない。人と交際してその危難を知ると、自分のためにする以上のことをする。都みやこに寄寓きよぐしている間に病んでしまった者がいと、昇かこにのせて自分の家に運び込み、自ら飲食おんじを与え、死んでしまったりすると棺かふに納めるまでしてやり、いやがる様子はない。

石康伯せきこうはくを識しる者は皆がこれこれくらいことはききっと知しっている。私わたしはいいささか深こく知しっているだけだ。

石康伯せきこうはくの知識ちしきと慮おもんばかりははなはた遠大とんたいであるのだが、口くちに出でして言いうことことはない。今年六十二歳ろくにじゅうにさいで、

顔かたちは四十ばかりに見え、鬚ひげは三尺もあって、白いものは一本もない。何のわけもなくこうなったのではないだろう。

ところで、亳州ぼくの官吏ひつとなって富弼ふひつとともに罪を得たのは、石康伯の息子せきいこうの石夷庚である。

石康伯の家には書画の軸が数百あり、その中からごくさいいな小品を集めて書画集を編んで『石氏画苑せきしがえん』と名付けた。石康伯は文同ぶんどうと交遊があり、兄弟のような仲であったことからその画をたくさん得た。また私も古木や竹を画くので、それを贈って『石氏画苑』に加えてもらった。

我が弟はかつてこのようにいった。

「画でよく貴ばれるのは、描いて似ることだ。似ているだけで貴ばれるのなら、本物はもっと貴いはずだ。私は都会や田舎を歩き回って人や物を見る。どれもが本物であるから、我が画の収集物しゅうしつに加えて貴ぶべきなのだろう。見ないのは鬼神きじんだけだ。それは画によって識ししかない。しかし、人は鬼を見たところで何の役にも立たない」

この言葉には道理がある。いま石康伯が画を好むのは、要するに一つの病のようなもので、記録するに足るようなことではない。だから、石康伯の人なりの大略を記したまでである。

元豊三年十二月二十日、趙郡ちやうの蘇軾そしが記す。

【補足】〔(1) 蘇軾の文章は、AならばB、BならばC、よってAならばCのように一直線には進まない。途中に曲折があり、時には矛盾するようなことが放り込まれたりもする。石康伯の画のコレクション『石氏画苑』〔その中には親友の文同の作品も蘇軾自身の作品も含まれる〕を礼賛するのが主題であるかのように見えて、実はそうではない。弟の画論を、真理を衝いているかのように持ち上げたりもして、しかし、全体としては石康伯の「異人」ぶりが読む人の心に残るようになっていいる。(2) 石康伯は蘇軾の故郷、眉州眉山びびざん県の出身である。罪を得てこれからいかに生きて行くかを考えるときに、頭に浮かんできたのが先の文章にあった蜀しよくの画人や石康伯のような人々だったのだろう。(3) 富弼ふひつとともに罪を得た石康伯の息子について言及している

のは、この文章の流れからすると場違いのようだが、書いておかすにはいられなかったのだらう。蘇軾が憧れた 4 人のスーパースターの中でこのとき唯一存命なのは富弼で、富弼が罪に落とされたのは要するに改革に反対したためであった。(4) 石康伯が文同の画を多数持っていることは作品番号 05-4-002 に記されていた。(5) これより 2 年ほど後に石康伯に送ったと推測される手紙があって、『石氏画苑』を大切にしようにと特に記している]

■ 【06-1-109】 与王元直

【解題】 以下は、この年に書いたと推測されている手紙や短文。これは郷里の王箴^{おうしん}
[字は元直^{あざな げんちよく}] に宛てた手紙。王箴は王淮奇^{おうわいき} [→作品番号 06-1-084] の甥である。

【訳文】

黄州^{こう}にいるのはまことに井戸の底にいるようなもので、郷里からの消息は杳として聞こえてきません。このごろはいかにお過ごしでしょうか。お母様や皆様もお変わりありませんでしょうか。

私はこの界限のもろもろによってどうにか気持ちを放つことができています。つまり、川べりで水を弄んだり、菜を採ったりしながら、一日一日を過ごしているのです。……

なおわずかに望みをつないでいるのは、もしや御聖恩によって郷里に帰るのを許されて、一頭の馬に一人の従者を連れて、お父上^{おうわいき} [王淮奇] や楊宗文^{ようそうぶん} 君らとともに瑞草橋^{ずいそうきょう} のあたりを歩き来し、夜に村に帰り、貴君と向かい合って農家の門に座り、瓜や炒った豆を食べたりできるようになることです。はてさて、いつのことになりますやら。

楊從君^{ようじゅう} が不幸にして亡くなったとか、いまもお悲しい思いかみあげてきます。楊從君の家はどうなっているのでしょうか。

蜀からの人が還るところですので、数文字を記したまでです。万万保愛されますように。

【補足】〔(1) 王箴おうしんはこれより21年後の建中靖国元年二月二十八日に53歳で亡くなり、その後、蘇邁そまいがその墓碑を書いた。それによると、王箴は蘇軾そうしの二度目の妻の王閏之じゆんしの弟で、蘇軾が杭州副知事に赴任したときに、はるばる郷里から訪ねてきたとある。そのころ蘇軾と交際する人は天下に名の知られている人ばかりで、王箴だけが無名であったが、蘇軾は何ら分け隔てすることなく王箴を遇したという。王箴は郷里に帰ってからは、官に仕えることなく質素に暮らし、蘇軾と会ったことを人々に自慢するようなこともなかった。後に、蘇軾の最晩年に、王箴はもう一度蘇軾に会おうとして、遠くに南方に向かう旅に出て、その途中で亡くなった。そのとき蘇軾は海南島かいなんとうから帰還する途中で虔州けんのあたりにいた。(2) 王箴は眉州眉山びびざん県に住んでいたが、もともと王氏は隣の青神せいしん県の人で、ここに挙がっている瑞草橋ずいそうきょうは青神県にあった。(3) 楊宗文そうぶん〔字は君素あざな くんそ〕も楊従ようじゆう〔字は存道そんどう〕も郷里の人で、楊宗文の名は作品番号03-1-009で見ている。楊従は詳しいことはわからないが、これより13年前に科挙に合格している]

■ 【06-1-110】 与杜幾先

【解題】揚州の杜介と かい〔字は幾先あざな きせん〕に対して熙熙堂き き どうについて詠んだ詩を贈ったことは作品番号05-4-035で見ている。その杜介に宛てた手紙。杜介の住まいは歐陽脩おうようしゅうが建てた平山堂へいざんどうの近くにあり、蘇軾は湖州で逮捕されて都に連行される途中で、そのすぐ近くを通過していた。この手紙にそのことが記されている。

【訳文】

お別れしてからもう何年にならぬでしょうか。かつてお話ししたことはいまも忘れておりません。このごろはいかがお過ごしでしょうか。

思えば昨年の八月初めに私は逮捕され、(都に護送される途中に)揚州を通過しました。天長県から平山堂の下にさしかかりましたときに、かきね 塙根の向こうに貴君の家が見えました。紙の窓、竹を葺いたさまは以前通りで、貴君が道士どうしのなりをして、薬を煮る炉と碁を打つ盤の間におられるありさまを、ありありと想い見たのでした。私は綱に繋がれ、生死のほども知れぬ身で、貴君は銀河の彼方の存在であるかのように思われ、羨慕してやみませんでした。

すでに聖恩を蒙り、罪罰ゆるを寛めて善い地こう[黄州]に置いてくださることになりました。門を閉ざし、外出することなく、蕭然と為すこともなく過ごしています。酒が醒めてまだ夢の中しやうぜんにいるような心地であります。

弟からは何度か手紙が届き、厚くいたわ 労りの言葉を寄せてくれており、ありがたく思っています。私のところでは老いた乳母が亡くなり、また弟のところでは幼い娘が亡くなりました。悲しい気持ちが癒えぬうちに、従兄が亡くなったとの知らせを聞きました。哀しみや憂いはいつまで続くのでしょうか。聞けば、貴君は六月にまた職務を授かって都に向かわれたとか。いまはどちらにいらっしゃるのでしょうか。

鮮于侁君に託してこの手紙を送ってもらおうとしています。いつお会いできるかわかりませんが、時節柄 万万自重されますように。

【補足】 [(1) 杜介は隠棲していたのだが、一時的に官職に復帰したようである。

(2) 鮮于侁も蘇軾の旧い友人。蘇軾が都に護送される途中で揚州を通過したときに、鮮于侁は蘇軾に会おうとして果たせなかった [→作品番号 05-5-090]。鮮于侁はその後、湖州知事となっていた。鮮于侁は蘇軾に連座して罰を被ることはなかったが、湖州は揚州よりも遥かに格が下の州であるので、若干の制裁処置を受けたことになるのだろう]

■ 【06-1-111】跋張希甫墓誌後

【解題】蘇軾は徐州で張天驥という異人と親しくしていた [→作品番号 05-4-106]。

その父張希甫が亡くなり、張天驥がその墓誌銘を送ってきた。それにこの跋文を書き

添えた。

【訳文】

私は徐州知事であったときに初めて張希甫父子のことを知った。

元豊元年の冬[蘇軾は徐州にいた]、李夫人[張希甫の妻]が病で亡くなり、徐州の人々は賢人であったことを言い合った。李夫人は死の間際までしたばたするようなことは一切なかった。李夫人がかかつて記していた数十枚の紙を息子の張天驥が取り出してみると、仏教のことや道家の語が記されていて、その筆跡は雅健で、婦人の手のようには見えず、また書いてあることはどれも条理が整っていた。

このとき張希甫は七十歳であった。これより穀物を避け、道引[道教の呼吸法]を行い、水だけを飲んで百日余りを過ごした。非常に痩せたのだが、衰えることはなく、瞳は炯然と輝いていた。私はそれを見て、苦しんではいないと知ったものの、息子の張天驥は憂懼に耐えられない様子であった。それで私は張希甫にこのように告げた。

「人の生は寄せるようなもの。自分からこのような苦しみを得ることはないではありませんか。できれば、時には飲酒し、米や肉を食べて、お子様方のお心を慰めてはどうでしょうか」

張希甫は私のために強いて食べるようにしてくれた。しかし、この世にあらうとする意はすでになかった。

それから二年、私は黄州に謫居し、張希甫が亡くなったことを聞いた。張天驥がその墓誌銘を寄せてくれたので、私はその夫婦が超然として世の外にあったことを知ったのである。

■ 【06-1-112】 朱元経廬葉

【解題】蘇軾の「異人」好きはなかなかのもので、これは黄州の北隣の光州の朱元経について記した短文。

【訳文】

光州こうしゅうに朱元経しゅげんきやうという道人どうじんがいて、年は百歳ほど、世の多くの人は朱元経には道術があるといっている。私は黄州こうしゅうにきて、一度は会ってみたいと思っていたのだが、すぐには果たすことができず、黄州こうしゅうにきてまたそれほどにならないうちに、朱元経が亡くなったと聞いた。

たまたま旧知きうちの曹九章そうきゅうしやうが光州の知事で、棺を与えて葬った。そのときにこれといって不思議なことはなかった。後に、朱元経が作った金銀や薬が非常にたくさんあった。郡中の人々はその薬を争って買おうとした。曹知事は許さず、すべて封をして役所に納めた。私は曹知事にこのようにいった。「後に貪欲な者が盗み取ろうとするかも知れません。だったら、朝廷に知らせて、朝廷の蔵に納めてもらった方がよいのではないでしようか」。曹知事がそのようにしたかどうかは知らない。

黄金は確かに作れるというのは虚言ではなかったのだ。ただし、金などは土つちくれと同じだと視る者にだけそれができるのだらう。

【補足】〔(1) 光州知事の曹九章そうきゅうしやう [字は演甫えんほ] とは、後に親戚になる。曹九章の息子そうかんの曹煥そうかんが蘇轍そうてつの娘と結婚するからである。(2) 蘇軾そうてつが黄州こうしゅうに来て最初の年はこのようにして終わる。自分を新たにするために、最初は安国寺あんこくじにしばしば参禅し、冬至から49日間は天慶観てんけいかんに籠った。殺生戒を守るよう努め、読書に励み、節儉を旨とした。それによって蘇軾は新たに変わったのだろうか。(3) 一方で、弟の蘇轍そうてつは筠州いんしゅうでどのように過ごしていたのか、それを知るために次の一文を読んでおこう〕

【訳文】

蘇轍そうてつ：『東軒記とうげんき』

私は罪をもって、筠州いんしゅうの塩酒税を管理する役人に左遷された。

筠州いんしゅうに着く前に大雨があり、筠水いんすいが溢れ、南の市場を水没させ、北の堤を越えて州庁の門を破壊した。塩酒税の役場は川を見下ろす岸辺いんすいにあり、水の被害が最も甚だしかった。

筠州に着くと、役場の建物は壊れていて住めなかった。そこで郡知事に、国の出先機関の役場を借りて住むようにできないかと頼んだ。郡知事は行き場のないことを憐れんで許してくれた。

その年の十二月、ようやく役場の傾いた柱を直し、倒れた壁を補った。その上で、執務室の東に小さな建物、東軒とうけんを作り、杉二本と竹百本を植え、休息の場しよにしようとした。

塩酒税の仕事はもともとは三人で担当していたのだが、私が到着したときにはたまたま二人が辞めて去った後で、一人だけで仕事をこなさなければならなかった。昼間は市場に出向き、塩を売る者、酒を売る者、肉や魚を売る者たちの間を、わずかな利潤を巡って税を徴収して回る。夕方に帰ってくると、全身がぐたぐたで、すぐに眠くなってしまい、いつ夜になったのかも知らないうちにもう朝になってしまう。朝にはすぐにまた市場に出て仕事をするので、東軒で休むことなどできない。毎朝、毎夕、東軒の横を出入りするたびに、それを見て肩をすくめて苦笑せずにはいられない。

私は昔、少年のころに書物こうしを読んで、孔子の弟子の顔回がんかい [顔淵がんえん]の振る舞いを不思議に思った。顔回は狭苦しい路地奥に住み、一つしかない竹の器に飯を盛り、一つしかない瓢ひさごで水を飲み、普通の人なら苦しくて耐えられない暮らしをしながらも、それを楽しいとして改めなかった。私が疑問だったのは、たとえ役人として仕えないにしても、門番とか夜回りとかの仕事をして、そこそこの暮らしができるようにしたところで学問の妨げにはならないはずで、どうしてそこまで貧乏をして自分を苦しめなければならないのかということだった。

筠州に来てからは市場で働いて一日の休みもない。このごたごたを棄て、束縛するものを断ち切って、学問の世界にこの身を解き放ちたいと思わない日はない。それでも、いつも事に迫られて現状に留まってしまっている。そうこうするうちに、顔回が貧賤に甘んじて、敢えてわずかな俸給すらも求めなかったのは、学問のためであったのだと知った。士しがまだ大道だいどう [真理]を聞かないうちは、権勢とか利益とかに酔いしれ、美服や美女をよいものとし、それらを楽しみとしてしまう。正しい原理を教わって道を求めるに及んで、あた華を落とし、確かな実みを求めるようになる。そして、従容として自得し、天地の大小も、生死の変化も意に介しなくなり、ましてそれ以下のものには全く心を動かされなくなる。その楽しさからしたら、困

窮などはもの数ではなく、怨みごとを言うことはない。たとえ王の位と取り替えようといわれても、承知することはない。徳を具えるに至った者でなければこうはならないので、私は何とかして我が身にまとう汚濁を洗い流して、聖賢に万分の一でも近づきたいと思うのだが、自らの欠けているのを視るに、顔回の楽しみを得たいと願っても、それは無理なのであろう。孔子は天下をあまねく巡って、高い地位では大臣になり、低い地位では倉庫の管理人になった。ただ遇うところに己を任せたのであって、それは道に達した者でなければできないことで、私のような平凡な学徒が希望してもできるものではないのだろう。

私は譴責されてここにきてから、束縛されていることの害を知りつつも、成り行きとしてここから去ることができない。もしも幸いにも遠い将来に、世間の人が私のことを憐れんで故郷に帰らせてくれたならば、先祖の壊れた家を直し、小さながらんとした部屋を住まいとしたいと思う。そこで、顔回の楽しみを追い求め、東軒のことを思い出しつつ、優遊ゆうゆうとして老いを忘れるとしようか。しかし、それとてそうなるようにと敢えて望むものではないのである。

【補足】[最初に、筠州で洪水があったことが書かれていて、それについては作品番号 06-1-068 にも記されていた]

第6章 赤壁の賦——黄州

[第6章その二]

げんほう 元豊4年 [1079年]、そしよく蘇軾46歳。

■ 【06-2-001】 子姑神記

【こう解説】 たくきよ黄州での謫居生活は2年目に入り、土地の風習にも徐々に親しむようになった。これは、し こしん子姑神というかわや厩の神との面談記録である。

【訳文】

げんほう元豊三年正月一日、私は都を出てこう黄州に向かい、二月一日に到着した。

その明るる年の正月に、はんへい潘丙が私にいった。

「不思議なこともあるものでございます。ここに赴任せよとお上の御命令を先生が受けられて、黄州の人々がまだ誰もそれを知らずいましたときに、神様がかくこう郭邁さんの家に降りまして、あたりによく響く声で人に告げ、詩を賦したのでございますが。神様がいわれるには、『そこう蘇公が間もなくここに来られます。しかし、吾はちょうど会うことができません』。そして、先生が黄州に着かれたまさにその日に、神様は去ってしまいました」

そのまた明るる年の正月、はんへい潘丙が私にいった。

「あの神様がまた郭邁さんの家に降りました」

そこで私は見に行くと、神というのは、草木を衣として婦人の姿を成し、手の内に箸を持ち、二人の小さな童子がそれを支えているのだった。箸で字を書いて私にこのようにいった。

「吾はじゅうよう寿陽の人、姓はか何氏、名はび あざな麗卿でございます。幼いころから書物を読み、文章を書き、立派な人の妻となりました。ところが、とう すいきやう唐の垂拱年間に、寿陽の長官が私の夫を殺害し、吾を妾として

納れたのでございます。その妻はひどく嫉妬深く、吾は廁かわやの中で殺されてしまいました。吾は死んで、どこにも訴えることができずにおりますと、天の使いが吾を御覧になり、罪なく殺されたことをお知りになって、人間世界において神として仕事をするようにして下さったのでございます。世にいうところの子姑神しこしん[廁の神]は大勢いましょうが、吾ほど優れた者はいませんでしょう。貴公はここにしばらく留まっておられますので、お慰みに詩を賦し、舞ってさしあげたいと思います」

神は詩数十篇をたちまち作り、どれにも妙所があり、時に嘲笑を雑えるものであった。

私が神仙鬼仏へんげ こつりの変化の理について尋ねると、その答えはどれも人の意表を衝くものであった。

部屋にいた者が拍子をとって『道調梁州』どうちやうりやうしやうの曲を歌うと、神は起って舞った。音楽にぴったり合い、曲が終わると私にお辞儀をしていった。

「貴公の名は天下に知られています。吾のことは世間に知られていません。どうか一寸ばかりの紙を惜しまないでください」

私は何氏の人生を聞き、酷い役人に掠め取られ、嫉妬深い妻に殺され、その怨みの深いことを知った。しかし、その悪い長官の姓名をいかなかったのは、慎ましかで礼に適うところである。自分の苦しみは知らせても、人が隠している悪事を取って暴露しないのは、知があるといえる。また、詩文をよくしながら、それが世間に聞こえるまでにならなかったのを恥としているのは、賢であるといえる。これらのことを記すなら、何氏の望みにほぼ沿うことになるだろう。

【補足】〔(1) 淮河と長江には含まれたあたり、そのなかに黄州も含まれる、には、廁かわやの神を正月に祭る風習があった。それを子姑神あるいは紫姑神といった。その風習は姿を変えつつ、ずっと後世にも及んだ。(2) この文章には潘丙はんへいと郭邁かくこうの2人が登場している。潘丙はんこうは樊口で酒店を営む潘革はんかくの次男で、科挙の一次試験には合格したものの二次試験には受かっていなかった。作品番号06-1-068では、「潘丙解元かいげん」と記されていたが、ここでは原文では「進士潘丙しん し」と記されている。潘丙の弟の潘原はんげんは獄中であってまだ解放されていなかった。郭邁は原文で「僑人郭氏ぎやうじん」と記されていて、薬屋の

あるじ主である。(3) この文章によると、蘇軾が子姑神に会ったのは黄州に到着した翌々年の正月ということになるが、記述に若干の混乱があるのだろうか、実際は翌年の正月、つまりいま見ているときであったと推測されている。(4) 子姑神の存在など全く信じない訳者の邪推ではあるのだが、郭邁らは入念に準備をして蘇軾を子姑神に会わせたのだろう。蘇軾が敢えて麗々しく礼、知、賢を兼ね備えていると記したのは、うすうすまやかしものであると知りつつも、洒落でこの文章を書いたからなのかもしれない]

■ 【06-2-002】 少年遊

【解題】紫姑神しこしんの求めに応じて蘇軾が作った詞。短い序文がある。

【訳文】

黄州こうの商人である郭邁かくこうは毎年正月に紫姑神しこしんを迎える。箕みをもって腹となし、箸をもって口となし、盤に盛った灰に字を書き、すばやく詩を作る。私が見に行くと、神は『少年遊』の詞を作って[まい]といったので、戯れにこれを作った。

玉肌鉛粉傲秋霜。[貴君は、秋の玉の肌みに赤く化粧をして]

準擬鳳呼風。[鳳ほう[雄のおおどり]に呼ばれる風ふう[雌のおおどり]のようでありましたのに]

伶倫不見、[夫ふうはいなくなっていまい]

清香未吐、[清らかな香かりは絶えて]

且糠秕吹揚。[糠ぬかのかすのようになっちゃったのです]

到处成双君独隻、[誰もがペアペアているのに貴君ききんだけは一人ひとりぼっち]

空無数、[おなしぎばかりなのなかでも]

爛文章。[文章は輝いています]

一点香檀、[香の立ち上るもとで]

誰能借箸、[貴君に箸を貸しますのよ]

無復似張良。[かの張良のようなはかりごとが聞けるやもしれぬと……]

【補足】〔(1) 紫姑神しこしんの実態を知らない訳者にはこの詞を訳すのは難しすぎる。ごくいい加減な訳である。(2) 先の文章とこの序文を合わせて考えるに、紫姑神は操り人形のように、少年たちに支えられて、箸で字を書くようである。神が少年を動かしているのか、郭邁かくまいらにあらかじめ指示された通りに少年が操作しているのか、本当はどちらなのだろうか。(3) 最後に漢かんの天下統一を支えた軍師ちようりようの張良ちようりようが出てくるのは、張良が箸を使って劉邦りゆうほうに作戦を説いた故事による。(4) 蘇軾しこしんにはこのときの子姑神との面談について書いたもう一篇の文章があり、神との問答の内容がより詳しく書かれ、また神が詠んだ詩も記録されている。読めばそれなりに興味深いところもあるのだが、どうせまやかしだと思つと訳す労力を注ぐ気になれないので割愛する]

■ 【06-2-003】 正月二十日、往岐亭、郡人潘、古、郭三人送余於女王城東禪莊院

【解題】この詩は、後に見る作品番号 06-3-005 と 06-4-003 と合わせると、訳者が特に好む作品群となる。蘇軾きていは岐亭ちんぞうに陳慥ほうさんし [方山子] [→作品番号 06-1-015] を訪ねようと思ひ立ち、1月20日の朝、臨臯亭りんこうていを出発した。道案内を買つて出たのが、上の文章に登場した潘丙はんへいと郭邁かくまい、それに古耕道ここうどうの3人であつた。古耕道は赤ん坊救済基金の実務担当者 [→作品番号 06-1-042] である。3人は道の途中じようおうじようの女王城とうぜんそういんの東禪莊院まで蘇軾を送り届けた。潘、古、郭の三人の姓が詩の題に入っているところが何とも嬉しい。もしも蘇軾こが黄州こうに流されて来なかつたならば、この三人がこのときにここで生きていたことなど我々は知りようもない。蘇軾が詩文に幾つかの手がかりを書き残してく

れたことで、三人のそれぞれの人生をあれこれ想像し、潘、古、郭のいずれかになつて黄州での蘇軾の日々を見ていると空想することもできるだろう。実際に訳者は古耕道を主人公にした小説を書こうとしたことがあった。残念ながら訳者のあまりの非力のために、蘇軾が黄州に現れるところまで書いて力尽きてしまった。もしもさらに書き進んでいたならば、超エリートで改革に反対した蘇軾に始めは反感を抱いていた古耕道が、逆に蘇軾の人間性に強く惹かれるようになる場面が、この1月20日の道中のどこかで描かれるはずであった。

【訳文】

春の初めの寒さのために、

ここ十日ほどは門から出ないでいた。

村々の柳がもう芽を吹いて、

川べりで枝を揺らしているのも知らずにいた。

凍りついていた谷から、さんざん 決決と水音が聞こえてくるし、

野焼きの痕を隠すようにして、青青と草が一斉に萌え出ている。

とうぜんそういん 東禅荘院の小さな庭が私を引き留め、

徳利に半分ほどの濁り酒を温めてくれる。

そういえば、去年のこの日、

私は岬の路で細かい雨に降られつつ、

梅の花に、魂を断たれるような思いをしていたのだった。

【補足】「去年のこの日」とはまじょう しゅんぷうれい 麻城県の春風嶺でのこと [→作品番号 06-1-010]。間もなく到着する黄州にはいかなる日々が待っているのかおぼつかない思いでいたのだった。そのときは全く知りもしなかったはんへい かくこう ここうどう 潘丙と郭遘、古耕道といった人々と親しくし、

黄州とかなり馴染んできたことに、ある種の感概を覚えてこの詩を詠んだのだろう]

■ 【06-2-004】 黄州隋永安郡

【解題】 少し寄り道をして、上の詩の題にあった女王城^{じょおうじょう}についての考証を見ておこう。女王城^こは、黄州の町の北東 5 キロほどのところにあった古い町 [城] の址。土地の人は、楚王^{そおう}の娘が築いたので女王城と呼ぶのだといていたが、蘇軾は疑っている。

【訳文】

昨日^{けふ}、『隋書』の「地理志」を読んだところ、黄州^{こう}は、当時は永安郡と呼ばれていて、いまの黄州の町から十五里ばかりのところ永安城^{えいあん}があった。これを俗に「女王城」と呼んでいるのだが、その説はなはた怪しい。『図経』によると、女王城は戦国時代の春申君^{しゅんしんくん}の故城である。それも正しくないだろう。春申君が居場所としたのはもとの呉国^{ごこく}のあたりで、いま無錫県の恵山^{ゑいざん}の上にある春申廟のあたりではなからうか。

【補足】 [(1) 無錫県の恵山^{ゑいざん}について言及しているが、蘇軾はかつてその山を何度か訪れている [→作品番号05-5-041など]。 (2) 黄州に来て以来、蘇軾がいろいろな書物を読んでいることがこの文章からもわかる]

■ 【06-2-005】 応夢羅漢記

【解題】 女王城^{じょおうじょう}の東禅荘院^{とうぜんそういん}に泊まった翌日は団封^{だんほう}というところで一泊し、不思議な夢を見た。

【訳文】

元豊四年正月二十一日、私は岐亭^{きてい}に行く途中に団封^{だんほう}で宿り、夢に一人の僧に会った。顔から血を

流し、何かしら訴えたいことがあるような様子であった。

その明る日、岐亭に着き、一つの廟の前を過つたので、ふと立ち寄ると、中に阿羅漢の像があり、左に竜、右に虎を従え、はなはた古めかしい姿であった。しかし、その顔面は人によって破壊されてしまっていた。それを見て呆然としたのは、昔もきっと会っているような気がしたからだ。

そこでその像を車に載せて帰ることにし、修復して仏龕に収め、安国寺に置いた。

四月八日、我が母、武陽君の忌日に安国寺で仏事を行い、このことを記す。

【補足】[夢で見た僧は、破壊された羅漢像ということなのだろうか。昔も会っているとあったのは、何かしら母と関係があるのだろうか]

■ 【06-2-006】 王翊夢鹿剖桃核而得雄黄

【解題】蘇軾は、岐亭に関連して似たような夢の話記録しているのだからここで見ておこう。

【訳文】

黄州の岐亭に王翊という者がいた。家は富み善行を好んだ。

王翊はある日、夢に、誰かに殴られたのか、水辺でほとんど死にそうになっている者を見た。その者は王翊を見ると叫び、王翊は助けてやった。

翌日、たまたま水辺に行くと、獵師に捕えられた一頭の鹿がいた。鹿には槍が突き刺さっていた。王翊ははっとして、数千銭を出してそれを買った。鹿は王翊に付き従い、それからはいつも王翊と一緒に過ごし、一步も離れなかった。

王翊の住まいの背後に林があり、実の成る木があった。ある日のこと、村の婦人が林の中で一つの桃を見つけた。たった一つだけよく熟れた非常に大きな実がたった一つだけ木の枝にあった。婦人はそれを取って食べた。ちょうど通りかかった王翊はそれを見て大いに驚いた。婦人は食べ終わると種を捨

てた。王翊はそれを拾い、割ってみると、桃の仁じんの形をした「雄黄ゆうおう」のかたまりであった。それを嘔むとはなはだ美味であったので、すっかり吞ってしまった。それから王翊は生臭い野菜や肉を断ち、日に一食だけで、殺生をしなくなった。

これもまた不思議なことである。

【補足】〔(1)「雄黄ゆうおう」は光沢のある明るい黄色の鉱物で、神秘的な作用があると思われていた。実際はヒ素の硫化化合物で毒性がある。(2) 蘇軾は、夢に不思議な働きのあることは、かなりの程度信じていたようで、しばしば夢を詩文に記している〕

■ 【06-2-007】 岐亭道上見梅花、戲贈季常

【解題】岐亭きていへの道中に戻ると、岐亭に至る途中で陳慥ちんぞう [字は季常あざな きじょう] に会い、梅の花とともにこの戯れの詩を贈った。

【訳文】

季節の移り変わりとともに、

蕙けいは死らんに蘭は枯れ、菊もまたくだ摧かれてしまった。

しかし、魂を呼び返す靈薬「返魂香へんこんこう」が峠の梅に入ったのだろうか、

風によって緑が吹き尽くされた枝に、

雀がぐちばしで叫びたのに応じて、

一点かぐわの芳しい心が開いた。

花は長江の上を行く雲が落ちてきたかのように、

その香りは野辺の店で嘗める美酒のようだ。

さあこれから行って貴君の奥方にお会いするなら、

すでに病より起って、梅の花は満開となっておられましょう。

【補足】[このとき陳慥^{ちんぞう}の妻が病んでいたという説があり、詩の終わりの部分は、それに基づいてかなりの意識をした]

■【06-2-008】蜀僧明操思歸書竜丘子壁

【解題】明操^{めいそう}という蜀^{しよく}出身の僧がいて、雲水の旅を重ねて黄州^{こう}にしぼし足を留めていた。たまたまこの岐亭^{きてい}訪問の折に、蘇軾^{そしつ}は明操に会ったようだ。蘇軾も陳慥^{ちんぞう} [方山子^{ほうさんし}]も蜀の人であることから、明操は同郷のよしみで、故郷に帰ってみたいというようなことを語ったのだらう。それで蘇軾は戯れにこの詩を作り、陳慥の家の壁に書いた。詩の題に「竜丘子^{りゅうきゅうし}の壁」とあるのは、作品番号06-1-017で見たように、岐亭の近くに竜丘山^{りゅうきゅうざん}があり、漢の時代に竜丘子^{かん}がここに隠れ住んだということから、蘇軾は陳慥を竜丘子になぞらえた詩を作り、以来、陳慥は竜丘と号するようになっていたからである。

【訳文】

生きるのは苦勞ばかりたとしても、
それはあと幾日ほどのことであるのだろうか。
帰りたいの思いによって、
晩年を乱すのはよろしくないだらう。
貴僧はいかに見るのか——
あの一片の雲は無心を会得しているだらうか。
南も北も東も西も同じ一つの天である。

【補足】[「晩年を乱すな」とは明操^{めいそう}だけでなく自分自身に向かってもいったのであるう]

■ 【06-2-009】 書所獲鏡銘

【解題】蘇軾は陳慥ちんぞうに会った後、帰りは川に船を浮かべて黄州こうしゅうに戻った。その折のことを記した一文。

【訳文】

元豊四年正月、私は齊安せいあん [黄州こうしゅう]から岐亭きていに行き、舟を泛うかべて還こった。古黄州ここうしゅうを通り、そこで一枚の鏡を見た。周囲が一尺二寸ほどで、その背に銘が記され、「漢代かんだいに白陽はくやうから善い銅が出て、それを取って鏡を作った。澄んで明るく、左に竜、右に虎を配してこれを守らせる」とある。その字は豆粒まめつぶくらいで、篆書と隸書を交えてはなはた精妙せいめうである。白陽はくやうとは南陽なんやうを流れる白水はくすいの北岸ほくせいのあたりだろうか。その銅は漆のように真黒まぐろくで、その背は玉を刻むかのような。鏡の明るさはわずかに人を照らすだけである。聞きくところの古代の鏡はたいたいこのようしゅうけいで、道家の「聚形しゅうけいの法」によるものである。

【補足】 [後にこの鏡びは眉州眉山び出身の道士陸りく惟忠いちゆうに渡されることになる]

■ 【06-2-010】 与滕達道

【解題】 作品番号 06-1-089 などで見た通り、宝月大師ほうげつだいし [惟簡いかん] の弟子の悟清ごせいが黄州こうにきて、勝相院しょうそういんに新たに造った經典を納める建物を記念する文章を書いてほしいと依頼され、昨年の秋のうちにそれは書いたはずなのだが、伝わる記録に混乱があるのか何かしら事情があったのか、悟清は年が明けてもまた蘇軾の文章を持ち帰ることなく黄州に留まっていた。蘇軾はその文章を刻む碑の題字とうげんはつを、滕元発あざな たつどう [字は達道] に頼もうと考え、この手紙を送った。

【訳文】

……罪を得てからは、文章を書けようがないでありますが、近頃、成都の僧の惟簡が『経蔵碑』に刻む文章を堅く求めてきて、断ることができませんでした。惟簡は私の一族の年長の者です。……ここにその写しを添えて、差し上げることにします。よろしければ、貴君に題字を書いていただい、石碑を輝かすことができたと思っています。蜀にまだ貴君の筆の跡がないのははなはだ欠けたところですので、もし書いていただけたら、まことに一段の奇事となりましょう。いかがでしょうか、御返事をお待ちします。いまここに一人の蜀僧がいて間もなく帰ることになっていますので、書をいただきましたなら、その者に託すことができます。

【補足】〔(1) 悟清が成都に帰る道すがら安州の滕元発のもとに立ち寄って、書いてもらおうという段取りである。(2) 宝月大師には、悟清に全てを託したので、詳しくは悟清に尋ねてほしいという手紙を書いている〕

■【06-2-011】四花相似説

【解題】3月に長江対岸の王齊愈〔字は文甫〕、王齊方〔字は子弁〕兄弟〔→作品番号06-1-030〕の家〔達軒〕を訪ねた。書や花について論じ合い、それぞれ文章を残している。これは花について記したもの。

【訳文】

茶麩花は通草花に似ている。桃花は蠟花に似ている。海棠花は絹花に似ている。罌粟花は紙花に似ている。

三月十一日、王齊愈の家に集まり、皆で花を評議し合った結果である。

【補足】〔似た者同士を並べたというだけのことで、わいわい楽しく論じ合ったのだろうと想像すればそれでよく、それぞれの花がどのようなものであるかを吟味するまでもないだろう〕

■【06-2-012】 王文甫達軒評書

【解題】これは書しよについて評議した文章。

【訳文】

唐末とうまつから五代ごだいの時代に、文章は品がなく、書しよも同様であった。そのころの人としては楊凝式ようぎょうしき [字は景度けいど]の筆を雄ゆうとして、唐代たうたいの顔真卿がんしんけい [字は清臣せいしん]や柳公権りゅうこうけん [字は誠懸せいげん]と肩を並べるといわれることが多い。しかし、私はひどく怪しいそうと思っている。宋代そうになってからは李建中りけんちゆう [字は得中とくちゆう]と宋綬そうじゆう [字は公垂こうすい]が特に挙げられるが、私はそれは思っていない。宋綬そうじゆうの筆は寒く、李建中りけんちゆうの筆は俗で、二人はみだりに名を得ているだけではなからうか。最近さいじゆうの人では蔡襄くわんぼ [字は君謨くんぼ]は天から与えられた資質からしてすてに高く、学んでさらに至り、まさに本朝第一とすべきである。

【補足】 [ごく簡略ながら、五代ごだいから北宋前半ほくそうの書家を蘇軾がどのように見ていたかがわかる。唐代たうだいまでの書家の流れについては作品番号 04-1-044 の詩で詠んでいるし、本章のこの後にも見るようになる。ここに名が挙がっている人々について一人一人見ることは避け、蔡襄さいじゆうについてのみ以下の文章で見てゆくことにする]

■【06-2-013】 論君謨書、跋君謨書賦、評楊氏所藏歐蔡書、跋君謨飛白

【解題】 かつて蘇軾かいえじは海会寺さいじゆうで蔡襄あざま [字は君謨くんぼ] が書いた『海会寺記』を見ていた [→作品番号 04-3-056]。黄州こうにいる間に蔡襄さいじゆうの書について記した四つの文章があるのでここでまとめて見ておこう。

【訳文】

(1)『論君謨書』[蔡襄の書を論じる]

おうようしゅう しよ
 歐陽脩は書を論じてこのようにいった。

「蔡襄の書は当世独歩である」

これは至論である。思ひに、蔡襄は行書が第一で、楷書が第二、草書が第三である。その長ずるところからあえて短所をいなら、大字の楷書は小字の楷書に劣る。

蔡襄は天から与えられた資質からして高く、それを補ひに篤く学んだことから、当世独歩となったのである。近頃、蔡襄の書を論じる者には、いろいろと異論があるので、とくにこのことを明らかにしておきたい。

(2)『跋君謨書賦』[蔡襄が書いた賦に添えた跋文]

私は近年の書を評して蔡襄を第一であるしている。ところが、そうではないという論者もいる。それは何も知らない者とはほとんど変わるところがない。書法はまず楷書に始まり、正しく楷書が書けなくて行書や草書がうまいわけがない。蔡襄は二十九歳で楷書の法をこのように会得していたのであって、ここにそのおおもとを知ることができる。

【補足】[蔡襄が29歳のときに書いた賦に書き添えたのだらう。『海会寺記』はその1年前に書いたもので、「天から与えられた資質が高い」というのは、そうした若い頃の書を見たことに基づく評であらう]

(3)『評楊氏所藏歐蔡書』[楊氏が所藏する歐陽脩と蔡襄の書を評す]

顔真卿と柳公権が没してから筆法が衰え絶えてしまい、加えるに唐末の喪乱で人物が雕落磨滅したために、五代の時代には文芸や芸術は地を掃うようにして尽きてしまった。ただ独り楊凝式だけは筆跡が雄傑で、王羲之や王献之、そして顔真卿や柳公権の名残をとどめていて、まことに書の豪傑、時代の流れの中に沈み込まれてしまうことがなかったといえるだらう。

宋代の初めに李建中が「能書」と呼ばれたが、その格調は低く、与える印象は濁っていて、唐末以来の衰え卑くなった風気にやはり染まっている。その他には、卓然として前の時代の人々を追うような者

はいなかった。

ここに独り蔡襄の書は天資がすでに高く、学びを積んで深くに至っている。心と手が応じあい、変化すること窮りなく、ついに本朝第一となった。そして、行書が最も勝れ、小字の楷書がそれに次ぎ、草書がまたそれに次ぎ、大字の楷書がまたそれに次ぎ、八分と隸書は少し劣る。また新たな意匠を出して飛白の書を作り、蔡襄本人は「天を翔ける竜、舞う鳳の勢いがある」といい、識者はそれは言い過ぎであるとはしなかった。

歐陽脩の書は学ぶ者が手本とすべきもので、まさに歐陽脩その人を見るに近いものがある。エミでは無いとしても、なお宝として伝えるべきである。しかも精勤敏妙で自ずから一家を成している。

楊君は蔡襄と歐陽脩の書を所蔵していて、黄州に立ち寄った際にそれを出して私に見せてくれたので、たまたまこれを評するものである。

【補足】〔(1) 蘇軾に2人の書を見せた楊君がいかなる人であるのかはわかっていないようだ。(2) 蔡襄について蘇軾は「天資高し」と繰り返し記している。(3) 李建中の名は作品番号06-1-048で見ているが、蘇軾の評価は高くない〕

(4)『跋君謨飛白』[蔡襄の書いた飛白に添えた跋文]

物の理は一つである。その意[本質]に通じるなら、何をしてもまいかないということはない。

専門の科を分けて医術を行うのは医を衰えさせ、画法を分けて画を描くのは画を卑しくする。古代の名医は老人も子供も分けずに診たし、古代の名画家は人も物も分けずに描いた。これに長じているといわれるのがよいとしても、これはできるがあれはできないといわれるのはよろしくない。世間の書家が、篆書はできても隸書はできないとか、行書が草書のように書けないとかいうのは、書の意[本質]にほとんど通じていないからである。

蔡襄は、楷書も行書も草書も隸書も思いのままに書けないということではなかった。その力と思いが余ったものが変じて飛白となった。これは愛すべきではあっても、学ぶことはできない。その意に通じないでは、

このようにはできないのである。

【補足】[物の理^{ことわり}は一つで、それに通じなら何でもできるようなるというのは、蘇軾の根本にある考え方である。だから、親友の文同^{ぶんどう}も蘇軾自身も、詩も文も書も画も本質は同じとして広く己のものとし、そのようにできないのなら、結局は何もわかっていないとしたのである]

■ 【06-2-014】西江月

【解題】蘇軾は人を喜ばせるのが好きだった。黄州^{こう}に来てからの手紙などで、詩文は廃したので作れないと断りつつも、実際には求めに応じているのを何度か見てきた。ずっと後のことになるが、蘇軾が訪問する予定の寺の前で待ち構えていた人々のために、あかたもアイドルのサイン会のように、筆を手に何十枚も書き続け、蘇軾はそれを少しも嫌がらず、むしろ書をもらえなくてがっかりする人が出てしまうことを心配したというエピソードが残っている。新たに黄州知事となった徐大受^{じょだいじゆ あぎな くんゆう} [字は君猷]

[→作品番号 06-1-100] はかなりの風流人であったようで、技芸をもって仕える女性が少なくとも4人はいて、嫵卿^{ぶけい}、勝之^{しょうし}、慶姫^{けいき}、懿懿^{い い}の名が伝わっている。その女性たちに蘇軾が贈ったとされる詞が7篇残っている。ここでは勝之に贈った『西江月^{せいこうげつ}』の詞を見ておこう。この詞には、「建溪^{けんけい}の双井茶と、谷廉泉^{こくれんせん}の水を勝之に贈った。徐大受の家の侍女は非常に美しく、勝之は家柄のよいところの生まれだと自分でいっている」との添え書きがある。二つともブランド品で、困窮生活を強いられていた蘇軾であるから、誰かから贈られた物を惜しまずプレゼントしたのだろう。

【訳文】

竜焙^{りゅうばい}今年絶品、[竜焙^{けんけい}[建溪の地名]の茶]といえは現在の絶品]

谷簾自古珍泉。^{こくれん} [谷簾の水といえ^{いにしよ}ば古から珍品とされています]

雪芽双井散神仙。^{おもむき} [雪のような茶の芽は神仙の趣]

苗裔来従北苑。^{おもむき} [仙界の宮殿からきた子孫なのでしょう]

湯発雲腴醜白、[泉の水から濃い白い雲が湧き]

盞浮花乳輕円。^{おもむき} [まろやかな花が浮かびあかります]

人間誰敢更争妍。^{おもむき} [人間世界にこれより美しいものがあるとしたら]

鬪取紅窗粉面。^{おもむき} [紅い窓から見える化粧した顔でしようか]

【補足】 [プレゼントした品物について歌っているように見えて、実は勝之^{しょうし}を称えているのであろう]

■ 【06-3-015】 減字木蘭花

【解題】 ある人の随筆に、蘇軾の詩に次のような題のものと記されている。

「鄂州の役人である張商英^{あざな てんがく} [字は天覚、号は無尽^{むじん}] が黄州^{こう}に来た。黄州の徐知事^{じょ}には四人の侍女^{てんがく}がいて、姓は孫^{そん}、姜^{きやう}、閻^{えん}、斉^{せい}という。たまたま知事の妻である張氏^{ちやう}がその一人を連れて婿の家に行き、暮れ方に帰って来た。それは閻姫^{えんき}であって、徐知事が最も寵愛する侍女であった。よって絶句を作った」。つまり、張商英も同席する場で、蘇軾が閻姫のために詩を贈ったのである。ただし、その詩は意味が取りがたいので、ここでは慶姫^{けいき} [すなわち閻姫であると推測されている] に贈った詞を見ておこう。これは相手を喜ばせるために心地よい言葉を並べただけで内容は乏しい。敢えて堅苦しい読み下し文で訳してみた。このようにするとわれわれには何やら立派げな作品に見えるから面白い。

【訳文】

天真雅麗、[天真雅麗]

容態溫柔心性慧。[容態溫柔にして心性慧]

響亮歌喉、[響き亮らかな歌の喉]

過住行雲翠不収。[行雲を過住て翠に収らず]

妙詞佳曲、[妙詞の佳曲]

轉出新声能断続。[新声を轉出して能断続す]

重客多情、[重客多情]

満勸金卮玉手擎。[満たして金卮を勧め玉手にて擎げる]

【補足】[張商英が黄州にきたのはこの年の春ないし翌年の春であったと推測されている。張商英は蘇軾より5年後れて生まれ、章惇によってその才能を認められて中央で活躍していたが、改革派か保守派かという区分におさまる人ではなく、独自の政治的立場をとり、時には改革派から、時には保守派からの批判を浴び、このときは改革派によって左遷されて移動する途中に黄州に立ち寄ったのだった。蘇軾が黄州にいた間に張商英に宛てた手紙が4通残っていて、その一つに、「羈旅の索漠を久しくし、貴君を一見できるなら思いを發散できましよう」と、張商英の来訪を歓迎する字句がある]

■ 【06-2-016】水竜吟

【解題】章◆ [字は質夫] [◆は次の下に呆という字] [→作品番号06-1-099] から
 楊の花を詠んだ詞が送られてきたのでそれに次韻して返した。

【訳文】

似花還似非花、[いったいそなたはなにもの、花のようですが、でも花ではないみたい]

也無人惜從教墜。[だから、落ちたら落ちたで、惜しむ人はいないのでしょう]

拋街傍路、[すみかをすてて、道ばたをころげゆくのは]

思量却是、[どういこと?]

無情有思。[そなたには情がないからなの、それでいて、思わせぶり]

縈損柔腸、[わたしのはらわたをきりきりとねじり]

困酣嬌眼、[わたしの目を疲れさせ]

欲開還閉。[開こうとしても、きっと閉じさせてしまうのです]

夢隨風万里、[そのままわたしは夢に誘われ、そなたとともに風に乗って]

尋郎去處、又還被、[万里の彼方を尋ねようとします、でも目覚めなさいと]

鶯呼起。[うぐいすが呼ぶのです]

不恨此花飛盡、[花であって花ではないのですから、そなたが飛び尽きてしまっても恨みはしません]

恨西園、落紅難綴。[恨むのはわたしの紅（れない）が落ちてしまって、もう枝にはもどれないこと]

曉來雨過、[朝がきて、雨が通りすぎたあとで]

遺蹤何在、[そなたのなごりはどこかで見れば]

一池萍碎。[池一面の浮き草がそれなのでしょうか]

春色三分、[いまや春の色は三つに分かれ]

二分塵土、[二つは塵となって消え]

一分流水。[一つは水とともに流れてしまいました]

細看来、[もう一度こまやかに見るなら]

不是楊花、[そなたと思った浮き草は、もとよりそなたではありません]

点点是離人淚。[わたしの紅のなごり、ひとしづくずつの涙だったのです]

【補足】〔(1) 楊の花は一見すると花らしくない。だから「花に似てまた花にあらざるに似る」と詠み出し、その花にこそ無限の情趣があると連綿と歌いあげる。蘇軾の詩は往々にして理屈が勝る印象を与えるのだが、この詞を見れば、天性の詩人であると知れるだろう。詞の後半にある「紅」を自分自身のこととして訳しているが、あくまでも一つの解釈である。(2) 作品の優劣は読む人の判断に任せるべきであるが、訳者が見るところ、これは蘇軾の詞の中でも特に優れた作品であるといつてよいだろう。次韻の達人である蘇軾は、むしろ制約があつてこそ計り知れない力を発揮するようだ]

■【06-2-017】黄州上文潞公書

【解題】政界の大物ある文彦博ぶんげんはく [潞公ろこう] に送った手紙。文彦博はこのころは実質的な権限は持たないものの太尉たいいという名誉ある称号を受け [→作品番号 06-1-096]、大きな存在感をなお保っていた。それだけにこの手紙は重々しく綴られているのだが、この訳文はいつも通りの軽さで、特に荘重なところは割愛してしまっている。なお、宿州しゆくで船を搜索された部分についての訳は作品番号 05-5-090 ですで見ている。

【訳文】

夏の初めの次第に暑くなりゆとうやゆきに、恭しく留守太尉執事殿の万福をお伺いいたします。……[莊重な言葉を並べて文彦博ぶんげんはくの徳を称える]……都よりお手紙を賜り、爛然と輝く行草によって、無用の身となった私でありながら、重き宝のように遇していただけましたような気がいたしております。

私が罪を得てあわただしく獄から出ましたときには、まだ生きるか死ぬかもわからず、家族親類が無事であるのかもわかりませんでした。自分自身について思いを巡らす暇もなく、ただこれまでも名と義を最も

重んじてきましたことから、もはや聖賢の方々からは絶縁され、君子の方々にお会いできることはないと考えておりました。そもそも罪は赦されるものでありません。それでもなお我が身を改めることができるのかと、ひたすら思索したのでありますが、十日に及んでも考えがまとまることはありませんでした。結局は恥を忍んで強いて顔を上げ、卑しい言葉を飾ってかつてのよみの方々に申し上げて、これからについて探ることにしたのでした。……[そのようなときに文彦博からの手紙がきたことを重々しく記す]……

私が逮捕されて獄に赴いたときに、長男はすでに長じておりましたので、徒歩でついてきましたが、その他の者は湖州の官舎に残りました。いずれも婦女人いし幼稚の者でありました。

宿州しゆくに至りますと、私が家に所蔵する文書を取り集めるようぎょしだいの御史台の命令が下り、各地の役所はそれに従って役人を捜索に派遣し、私の乗る船も役人に囲まれ、文書類を持ち去っていきました。

家でも捜査を受けて、老人や幼い者は死ぬばかりに怖がり、役人が去ってから、女たちは、「こんなことになったのも日ごろからものを書くことを好んでいたからで、書いていったい何を得たかといったら、私たちをひどく怖からせたばかりではありませんか」と、怒り罵り、残ったものごとく焼いてしまいました。事が定まって後に調べてみますと、書いたもののうち十に七ないし八は失われてしまっていました。

黄州こうにきてからは、ほかえききやうに心を用いることもなく、ただ『易経』と『論語』を繰り返し読んで深く考え、得たところがあるように思い、ついらんごに父の研究の上えきでんに立って『易伝』九巻を作り、また自らの考えによって『論語説』五巻を作りました。窮苦多難の身であり、寿命はあてになりませんから、この書物が埋もれて後世に伝わらなくなるのを恐れ、数冊の写本を作って人間世界に留めおこうと思っております。文字によって罪を得た私ですから、人はこれを凶衰不詳の書として収めようとはしてくれませんでしょう。また一代の偉人でなければこれを託して必ず伝えてくださるものではありません。そこで明公めいこう[文彦博]に献じる他はないと考えたのであります。『易伝』は文章が多く、まだ写し終わっておりませんので、ただ『論語説』五巻のみをお届けいたします。公におかれましては閑暇の折にでも御一読いただけましたなら、たとえ取るところがないとされましても、窮みちまってもなお道みちを忘れず、老いてもなお学び続けていることを見ていただければかと、それだけで十分なのであります。

私が徐州じょにおりましたときに、諸郡が盗賊のために患いを受けているのを見まして、それらの人々が乱暴不遜であるのは飢饉によるものであって、いつまでも騒動がやまないのを恐れ、考えるところつひさを具こに記して公に申し上げようとした。その後、湖州への移動を命じられたために事はそのままになってしまいました。家に所蔵していた書類の多くは失われてしまったのですが、その草稿はこは故紙はことして篋こに貼られていたために焼かれるのを免れました。篋を開くと思いかげずそれが出てまいりましたので、惘然もうぜんと夢の中の出来事のように感じたのであります。それでそれらを写して、合わせてここに献けんじさせていたたきます。罪人としてここに廃逐はいしゆされながら、あえてまた天下の事を申し上げようとするものではありません。世に有益であるはずのことが行われぬままであるのを残念に思うだけであります。かねてからの私の心がな消え去っていないことを公に知っていただけましたら、それでよいのです。御一読の後には、どうぞ焼き捨ててください。

黄州こうは物価や安く、風土は安らかで、いまは去りがたいくらいに感じておりますし、またここを去って帰るところはありませんでしよから、きつとここで老いて行くのでありましよう。お会いすることはもうないのでしよ。紙に臨んで憂悶ゆうもんに堪えません。公におかれましては国のために身を重おもじられますよう願ねがうものです。

【補足】〔(1) 『易経』えききやうの研究けんぐうをしていることは陳慥ちんざうへの手紙〔→作品番号 06-1-047〕でも触れていて、計画通り半年ほどで完成したのであった。合わせて、『論語』ろんごの研究書も書き上げたのである。なお、『易経』の研究はさらに深められ、後年、改訂版が作られる。(2) 文彦博ぶんげんぱくには、密州みつにいたときに、塩の専売せんばいについての意見書を提出していた〔→作品番号 05-1-066〕。徐州じょでも政策提言せいさくていげんを文彦博にしようとしていたのである。朝廷には蘇軾そしつの意見を聞いてくれるような人がいないので、文彦博を頼りにしたのであろう〕

■ 【06-2-018】与杜道源

【解題】杜沂とぎん〔字は道源みちげん〕〔→作品番号 06-1-045〕に宛てた手紙。

【訳文】

窮陋きゆうろうに謫居たくきょの身を寄せる私のところに、友として最初に貴君が訪れてくださり、流落の嘆きがかかりと晴れたような気がしました。私はとにかく人に累るいを及ぼすばかりで、独自の見識を持って、進退など意にかけない者でなければ、敢えて私と付き合おうなどとはしていません。常にこのことを思っ、貴君のことは忘れるときがありません。

お別れしてからまた夏がきました。暮る思いは言葉になりません。いかがお過ごしであろうかと遠くより想い見えています。

二度にわたってお手紙を頂戴していながら、怠慢にもすぐには御返事せず、いつもそれで人様に罪を得ております。かねてからの友は、私がもとのものぐさでなかなかものを書けないのは御存知でありましょうから、他意のないことと大目に見ていただけると望んでおります。

貴君はすでに官職に就かれて、交替を終えられたとのこと、高い志をもって、何事も適宜こなしていられるであらう。

江縊かうえん君はもはや少しも留まることはありません。その決断けつだんは並みの人の及ぶところではありません。

お会いすることはできませんが、時節柄御自愛されますように。

【補足】〔(1) この手紙から杜沂とぎんは新たな官職に就いたとわかるので、蘇軾を訪ねるときにはまだ職に就いていなかったのだろう。(2) 終わりに名の挙がっている江縊かうえんは武昌ぶ昌しょう県知事だった人で、かつて一緒に武昌ぶの西山寺せいざんに遊んでいる [→作品番号 06-1-045]。江縊かうえんと鄂州知事の朱寿昌しゅじゅしょうと関係に微妙なところがあったようなのだが [→作品番号 06-1-096]、それとここに記してあることとが関係するかどうかは全くわからない]

■ 【06-2-019】 与陳大夫

【解題】先の黄州知事であった陳軾ちんしよく [→作品番号 06-1-077] への手紙。陳軾は黄州を

離れた後も、蘇軾への支援を続けていたのである。

【訳文】

竹簞ちくてん〔竹で編んだ敷物〕や剪刀はきみなどを頂戴し、御厚意に敬服おうようぶんちゆうこういたしております。歐陽文忠公おうよう〔歐陽脩しゅう〕の文に「暑い風も竹簞によって涼む」とあります。その味わいゆこれ得られます。

このごろは己を省みて、出て歩くことは少なくなっています。去年の冬至には齋戒して四十九日間を過ごし、我がおおもとに帰ろうとして、得るところがあったように思います。たちまちまた夏となり、また門を閉ざして思いを掃おうとしています。昔の人は、「国を治めるにはゆったりゆるゆる行うのがよい」といいました。つまらない想念が絶えれば、太古の民のようにもなれましょうか。道家どうかが老いを退けて寿命を延ばすといっているのは、たぶんそのようなことであるのでしょう。もしも毎日汲汲として外物に随ってあたふたとしていたなら、たとえ長い寿命を授かっていたとしても、一寸の隙間を馬が駆け抜けるようにして終わってしまうでしょう。この福を自分だけが享けるのではなく、皆様にもお分けしようと、このように記したまでであります。

■ 【06-2-020】 少年遊

【解題】現在の黄州知事である徐大受じょだいじゅが主催する端午たんごの節句の宴で詠んだ詞。座を盛り上げるための作である。

【訳文】

銀塘朱欄麴塵波。あか〔朱い欄干から臨む池こうじには麴の色のような波〕

円緑捲新荷。〔蓮の緑の葉は新たに円になったばかりです〕

蘭條薦浴、〔蘭の茎が誘う沐浴〕

菖花釀酒、〔菖蒲の花が旨くさせる酒〕

天氣尚清和。〔天氣もまことに清く和やかです〕

好将沈醉酬佳節、[さあ、この佳節に酔いつぶれましょう]

十分酒、[酒はたっぷり]

一分歌。[歌はちよっぴり]

獄草煙深、[獄は草に深く埋もれ]

訟庭人情、[訴訟をする人もいませんから]

無吝宴遊過。[遠慮せずにこの宴遊を徹底しましょう]

【補足】 [(1) 5月5日には、蘭 [いわゆるランではなくキク科の香りのよい草] を入れて沐浴したり、菖蒲の花を漬けた酒を飲んだりする古くからの習わしがあった。

(2) 「獄は深い草に埋もれ」とあるのは、黄州はよく治まって獄に入れなければならない者はいないということで、徐知事を讃えたのである]

■ 【06-2021】 跋子由棲賢堂記後

【解題】 弟の蘇轍が書いた『廬山棲賢寺新修僧堂記』に添えた跋文。最初に蘇轍の文の一部を掲げる。

【訳文】

蘇轍：『廬山棲賢寺新修僧堂記』

元豊三年、私は罪を得て高安[筠州]に遷った。(筠州に移動する途中の)夏の六月に廬山を過り、そこが風光に勝れているのを知ってはいいても、長く留まることはしないで、二日間だけ山の南側を歩き、棲賢谷に入った。

谷の中には、互いに重なり合うようにして巨大な岩が多数あり、その間を流れる水は雷のような音を立て、千台の車が走り抜けるかのようにしてあたりが揺れ、立って見ているのさえ難しい。その陰しきは長江

の三峡をも上回るほどで、そこに架かる橋は三峡橋という。橋を渡って東に行くと、山に沿って水が巡り、そこでは水は平らで白い練り絹のようで、横ざまに巨大な岩にぶつかると、そこに水が集中して大車輪のように回転し、沸き立ち上がって水の変化を窮める。

その川の上流に寺があり、寺の右側は石の壁に寄り添い、左側は流れる水を下に見る。僧堂は石の壁の真下にあつて、その簷先で鋭い峰や奇怪な形の岩が翔んだり舞ったりしているかのようである。杉や松や竹が横に生えたり逆さまに伸びたりして、互いにからまりあっている。大風や大雨のときは堂中の人は押しつぶされてしまうのではないかと恐れる。

廬山に詳しい人に問うと、「この山の景勝地として、棲賢谷は必ず一ないし二に数えられるでしょう」といった。

翌年、智遷長老の使者として恵遷が高安にきて私にこのようにいった。「我らの僧堂は建ててから六十年になり、瓦が傷み木が朽ちて、四方からの客人を受け入れることができなくなりました。私恵遷は力を尽きてこれを新しく、ついに立派に完成しました。以前とは面目を一新しましたので、そのことについて文を記していただきますようお願いいたします」。

……[以下、堂を新しくした意義について述べる]……

四年五月九日、眉陽の蘇轍が記す。

弟が作った『棲賢堂記』を読むと、まさに堂中にいて、水石が陰森として、草木が膠葛するありさまを見ているよかのようになる。私はこの記を書き、石に刻んで堂のあたりに置いて、廬山との縁を結びたいと思う。そうすれば、後に廬山に入ったときに、ただの通りすがりの客人であるとは思われずにすむであらうから。

■【06-2-022】書唐氏六家書後

【解題】唐垌〔字は林夫〕からの依頼で、隋から唐の時代の6人の書家についての評

論を書いた。唐垌は政治的には王安石おうあんせきに近く、朝廷の重要な役を勤めたこともあったが、このころは職から退いていたようだ。筆法に詳しく、蘇軾しよの書を愛し、長く交流が続いた。書を言葉よって的確に論評するのは、恐らくかなり困難であろう。蘇軾は漢字を駆使して視覚的イメージを伝えようとしているかのようだ。それでこの訳文では幾つかの漢語は訳さず生のままにしておく。

【訳文】

智永ちえいぜんじ禪師の書は、骨気こつきは深穩しんおんで、体たいは集妙しゅうみょうを兼ね、精密せいみな技能ぎぎょうが極ごくってかえって疏淡そたんとなっている。陶淵明とうえんめいの詩みを観るかのようだ。初めて見ると散漫さんまんで締まりつひがないようだが、反覆はんぷくして何度も見ると、その奇趣きしゆが識しれてくる。今いまに伝つたわる法貼ほうちょうの中に「不具ふぐ釈智永白しやくちえいぱく」と文末ぶんまつにあるものがあって、「具ぐせずせ」をよく用もちいていた)王羲之おうぎしの作品群さくひんぐんの中に誤あやって収められたりもしているが、智永ちえいぜんじ禪師の書ではない。また「謹きん此代申しだいしん」と文末ぶんまつにあるのは唐末とうまつ五代ごだいの俗語ぞくごで、その書は下手てしやくそである[やはり智永ちえいぜんじ禪師の書ではない]。

欧陽詢おうようじゆんの書は群ぐんを抜ぬいて引き締しまって美うつくしく、小字しょうじの楷書かいしよに最さいも巧くわうみである。高麗国こうらいこくからの使者しやがその書を買かい求めたとき、唐たうの高祖皇帝こうそていは嘆息たんそくしてこいこった。「高麗国こうらいこくの人は欧陽詢おうようじゆんの書を見て、その人はささいぞ魁梧奇偉かいこきい[堂々の偉丈夫]であろうと思おもったろうな。これは書を知る者の言葉ではない。書といものはその人となりひとなりに似るものだ。欧陽詢おうようじゆんの容貌らうぼうはさえないけれど、頭の切れは圧倒的であつた。いまその書を観ると、強く険けんしく削けいだような厳げんしさがあつて、まさしくその風貌ふうぼうに合致あひあしていたのだ。

褚遂良ちすいりやうの書は清遠せいえんにして蕭散しやうさん、いいくらか隸書れいしよ体が雜ざいざつている。昔むかしの書を論ろんじる人は、兼ねて平素へいその暮くらしらも論ろんじた。もしもそれなりの人でなければ、書が巧くわうみであつても貴きぶぶことはなかつた。褚遂良ちすいりやうはもとより忠臣ちゆうしんであつたが、劉洎りゅうきを讒言ざんげんで殺ころしたという事件じけんがあり、人の心を曇くもらせる。私はかつてその事件じけんの実情じつじやうを検討けんたうしたが、きつと劉洎りゅうきが晩年ばんねんには片意ぺんい地で怒おこりおこり、天子てんしの廢立へいりつについて實際じつじやうに口くちにしたのであつて、褚遂良ちすいりやうが讒言ざんげんしたわけではないのだ。もしそそうでないのなら、馬周ばしゆうが劉洎りゅうきに有利りういな証しやう

言をしていながら、^{たいそう}太宗皇帝が劉洎だけを罰して馬周の罪を問わなかったことと辻褃が合わなくなる。つまり、褚遂良が讒言したというのがそもそも後の人がでっちあげたことであって、歴史家がそれを見破れなかったのである。

^{ちゆうきやく そうしよ たいぜん}張旭の草書は頽然と酔って天に放たれたよう、点や画はどうかそのところにある程度だが、意のおもむくところを十分に示している。号して神逸と称せられる。今の世で草書を善くするとされる者は楷書や^{ぎゆうしよ}行書が上手に書けなかつたりするのだが、これは大きな間違いである。楷書が行書を生み、行書が草書を生むのであって、楷書は人でいえば立つ姿、行書は行く姿、草書は走る姿である。立つことも行くこともできないのに走れる者はいない。^{ちゆうあん}いま長安に張旭が楷書で書いた^{らうかんせきちゆうき}『郎官石柱記』があり、その字は簡素で俗っぽさを超え、南朝時代の人が書いたかのようにである。

^{がんしんけい}顔真卿の書は雄にして秀で独り突出している。古法を一変させたことでは詩における^{とほ}杜甫と同じだ。その力は天を縦横に^{か かん ぎ しん そう}翔け、漢、魏、晋、宋[南朝]以来の風流を超えている。後の作者はほとんど迫ることすらできない。

^{りゅうこうけん}柳公権の書はもとは顔真卿から出たもので、自身の工夫で新意を出した。柳公権の書を見るなら、「一字百金」という言葉も虚しいものではない。皇帝に筆法を問われて「心が正しければ筆もまた正しい」と答えたのは、皇帝を遠まわしに諫めただけでなく、道理としてまさにその通りなのである。世間のつまらない人間どもは、字がたとえうまく書けても、その心持ちはいつも^{せせせか}睚眦として^{こびへつらい}側媚の態があるものだ。そのように思うのは、私の思い込みであるのかもしれないが、その書を見て心持が悪くなるのでは、やはりそれを書いた人のありようが知れるというものだ。

私は^{こう たくきよ}黄州謫居となり、^{とうとう こうこう}唐垌が湖口から手紙をくれた。そこに「吾が家にこの六人の書があります。私のために六人を短く評して、書の後ろに書いてください」とあった。唐垌の書は私よりずっと優れているのに、かえって私に書を求めるのはどういうことなのか、私には全く理解ができない。

^{げんほう}元豊四年五月十一日、^{びざん}眉山の蘇軾、書く。

【補足】[作品番号 06-2-012 で、^{がんしんけい}顔真卿と^{りゅうこうけん}柳公権は唐代を代表する書家として挙げら

れていた]

■ 【06-2-023】 武昌酌菩薩泉送王子立

【解題】 弟の娘の婿である王適 [字は子立] が黄州にきた。王適は、蘇軾が湖州で逮捕されたとき、その家族を蘇轍のいる南京応天府に送り届け [→作品番号 05-5-088]、その後はずっと蘇轍のもとにいたらしく、蘇轍の左遷先の筠州にも付いて行った。そして、この年の秋に行われる科挙の一次試験を徐州で受けるために筠州を発ち、途中で黄州に寄ったのである。この詩は武昌の西山にある菩薩泉で水を酌んで王適に別れを告げたもの。菩薩泉については作品番号 06-1-101 などで見ている。

【訳文】

君は行く。

私には酒もなく銭もない。

君に勧めるのは菩薩泉で酌んだ一杯の水。

君は頭を垂れ、私を見ることができない。

そう悲しむでない——

別れてどこに行こうとも、

四方の全てはこの水に映る天の内にあるのだから。

■ 【06-2-024】 東坡八首、并叙

【解題】 蘇軾には数々の号がある。自称するのは、東坡、東坡居士、老泉山人、鉄冠道人、戒和尚、玉局老、眉陽居士、雪浪齋。他称では、無邪公、仇池翁、▲陵先生 [▲は田+比]、泉南老人、水東老人、東坡道人、海上道人、蘇仙、坡仙 [以上『蘇

軾年譜』による]。最も知られているのが「東坡」で、その号を用いるようになったのがこの年、元豊4年である。東坡とは東の坡の意味で、先に見た四望亭のある竜王山 [→作品番号 06-1-032] のあたりの小高い場所 [黃州の町の中心から北東の方角にある] に対して、蘇軾自身がその名を与えた。この年の春の初めごろから、蘇軾は東坡の一角のかつて兵舎があった土地で開墾を始め、夏までの間に、東坡について詠んだ8首の詩を作った。序文がある。

【訳文】

叙

私は黄州に来て二年目となり、日々に生活が苦しくなった。昔からの友である馬正卿は食べるものさへ欠乏しているのを哀れみ、郡中にあるもとの兵営地、およそ数十畝ほどの土地をお上に請い願って、そこで私が自ら耕作ができるようにしてくれた。

土地は長らく荒れ果て、茨が繁茂し、瓦礫がころがる場所となっていた。しかもこの年はひどい日照りで、開墾の労働だけで筋力がほとんど尽きてしまった。耒を投げ捨て、嘆いてこの詩を作り、自分で自分の辛い努めを哀れんだ。

切望するのは、来年からの収穫がこの労苦を忘れさせてくれることだ。

【補足】[蘇軾は、家計のやりくりに関し、買収の法を実践することでこの先1年くらいは大丈夫だろうと書いていた [→作品番号 06-1-103]。行き詰まるのは目に見えていたので、馬正卿が奔走して、わずかながらも耕作地を、たぶん無償で、手に入れることに成功した。いつかは役人生活から足を洗って自作農に回帰しようというのが蘇軾の初めからの願いであったから、はからずもそれが早々と実現したような格好になった。馬正卿と知り合ったのは最初の赴任地である鳳翔に行く前のことで [→作品番号 02-1-012]、それ以来20年になるが、詩中にその名が現れたのはこれが初めてであ

る]

其の一

廃墟となった跡地は人に顧みられることがなく、

土の塀はくず頽れ、雑草が生え放題だ。

ここに筋力を投入したところで、無駄に捐るようなもの、
一年の終わりにその労力を償ってくれはしない。

そこに他郷から、

広大な天地にも逃れるところがなく、

行くに窮してさすらい来た独りの男——

最初に手掛けたのはがれき瓦礫拾い、

あいにくと日照りの年で、土は痩せている。

男は草の中に埋もれながらも、

ここからわずかでも収穫物をけず刮り取ろうとしているのだ。

ああ——

男はすき耒を投げやって嘆息する。

「我が廩はいつになったら高く聳えるのたろうか」

其の二

この全くとめもなく荒れた土地、

それでも高い低いがあるのを見れば、

それぞれに適した使い方があつたろう。

低くじめじめしたところは稲を植えるがよろしかろうか、

東の高まりなつめには粟と粟を蒔くまのがよろしかろうか。

長江ちやうこうの南の岸辺しよくには蜀から来た友人がいて、

桑の種子をくれることになっている。

姿のよい竹を植栽してもよいのだが、

根があちこち勝手に張ってしまうのはちょっと心配である。

いましばらく佳い場所を検討した上で、

我が家族が安心して住める敷地を定めるとしよう。

そんな算段をしていると、

枯草を焼いていた家童かどう[少年の使用人]が走って来て叫ぶのは、

「隠れていた古井戸が出てきました」

ここから一食分の作物だって収穫できるかどうかもわからないけれど、

とりあえず一瓢びやう ひさご[瓢で作ったひしゃく]の水を飲めることだけは確実にになった。

【補足】しよく [蜀から来た友人とは王兄弟 おう [→作品番号 06-1-030] のこと]

其の三

昔からここには小さなせせらぎがあって、

遠い峠の背後からきているという。

それは城壁こうを穿って黄州の町へと入り込み、

集落を通過する間に汚水が流れ込み、

草が高く生い茂るようになる。

ここから去って、流れは、

十畝はほどの広さかの柯氏ためいけの陂となり、

そこには魚えびや蝦がいる。

今年は日照りて小川の水は尽き、

^{たぬけ} 陂の浮き草も枯れて泥にべったりと付いてしまっている。

昨夜、南の山に雲が湧いたかと思うと、

雨が来て、^{すき} 犁で一回盛った土を超えて降ってくれた。

水はもとの溝を尋ねてちよろちよると流れ、

あたかも私が荒れ地を切り開いているのを知ってくれているかのようだ。

溝の底の泥には去年の芹の根があり、

見れば、一寸ばかりのが確かにある。

白く芽が伸び出すのはいつだろうか。

そのときには鳩の肉とともにあえたらよいだろう。

【補足】 [(1) ここにある^か 柯氏の^{たぬけ} 陂は、^{しぼうてい} 四望亭の下の^{ぎよち} 魚池のことであろう [→作品番号 06-1-032]。その近くにある柯氏の林を買うかどうか検討していると弟に語っていた [→作品番号 06-1-059]。東の^{たかまり} 坡はそれよりも少し北に位置し、この詩にあるように北の峠から流れてきた小川が東の坡を經由して柯氏の池に注ぐのである。(2) この詩の最後には蘇軾自身の注記があつて、^{しよく} 蜀の人は芹の芽を細く刻んで、鳩の肉と合えたものを好むとある]

其の四

【補足】 [この詩にも蘇軾自身による注記がある。(1) ^{しよく} 蜀の人は、細かい雨を「^{うもろ} 雨毛」といい、稲の芽が伸び始めることを「^{はり} 水に鍼を刺す」という。(2) 蜀の地では、稲が稔るころに^{さくもろ} 蚱蜢が田に群がって飛ぶ。形状は小ぶりの蝗のようで、稲を害することはない]

せいめいせつ とう
清明節の前に稲を種える。

私はすぐにそれから続く楽しいことを数え上げる——

春の沢辺を雨毛が暗く覆うと、

「水に鍼を刺した」との嬉しい言葉を聞く。

苗を分けて植え終わるのは初夏のころ、

稲の葉が風に翻るのは喜ばしい。

夏は、月の明りに照らされて、稲の穂に露が上り、

幾つもの珠を連ねたように見える。

秋になれば、稲の穂が重くなり、

倒れかかるのを互いに支え合う。

そして畔道のあたりからは、

蛭蝨の飛び交う音が風雨のように聞こえる。

新らたに舂いた米をすくひ甑に入れて炊けば、

竹籠の中で玉の粒が輝きわたる——

私はお上から支給される米ばかりをずっと食べてきた。

それは紅く変色して泥のようなものだ。

ゆゆは収穫したばかりの米の本当の味わいを知ることができると、

いまから我が口と腹に約束しておこう。

其の五

良い農民は地力を惜しむという。

ならば、ここが十年も荒地地であったのは幸いではなからうか。

桑の木はなかなか成長しないにしても、

麦くらいなら望みがありそうだ。

種を蒔いてまだ一カ月にならないけれど、

土の塊を覆ってすでに蒼蒼あおあおと出てきている。

農夫は私にいう。

「苗のうちから、葉ばかり繁らせちまったらどうにもなりませんぞ。

麦で団子をたんとこさえたかったら、

牛やら羊やらを放し飼いにするとええかな」

繰り返して教えてくれることに何度も礼をいう。

腹を満たすためとあれば、

助言を忘れることなどありません。

其の六

粟なつめを種えるのは、実を剥ち落とす時がくると思うから、

松を種えるのは、材きを斫り出す時がくると思うから。

そうなるのは十年以上も先であるが、

我が計画は懸おろかなまでにひたむきである。

十年などどうということもない、

千年だって電が風によって吹き過ぎるようなものだ。

学んたらよからうと思っていたのが昔聞いた「李衡りこうの召使い」の話——

呉ごの国の李衡は千本の蜜柑を植えて子供らにこいした、

「これでおまえたちの将来には何の心配もない、

ここに千人の『木の召使い』がいるのだからな」

よ、塩梅に私にはその名もまさに李君という同僚がいて、

いまは舒州じょで官の務めをしていて、
 たまたま三寸もの大きさの蜜柑を贈ってくれた。
 その輝きといったら、見る者皆を驚かせるほどだ。
 もしも、春の氷がまだあるうちに、
 その苗木を百本ばかりももらえたらと思ひもする。
 竹の籬まがきの先、軒端のあたりに、
 青い実、黄色い実が垂れるのかもう目に見えるようだ。

【補足】[同僚の李君りとは李常りじょうのことであると、蘇軾自身の注記がある。李常と手紙のやりとりをしていることは作品番号 06-1-043 で見ている。三国時代の李衡りこうの故事と李常が贈ってくれた蜜柑とを結びつけたのである。米、麦、蜜柑と次々に収穫物を想像してゆくのである]

其の七

潘丙はんへい君は、長らく官の仕事にありつけないために、
 長江ちやうこうの南の村で酒を売っている。
 郭邁かくまい君は、ももとは將軍を輩出してきた家柄だが、
 町の西側にある市場の城壁の際で葉を売っている。
 古耕道ここうどう君は、人とは変わったことを好み、
 たぶん唐代とうだいの侠客、古押牙こおうがの子孫なのだろう。
 古耕道君の家には十畝の広さの竹林があり、
 いつでも門を叩いて訪れてよいことになっている。
 私は生きるに窮して旧くからの交わりを絶ったのだが、
 この三君だけはたえず声をかけてくれ、

東の坡たかまりでの労苦も私と一緒にしてくれる。

せめてものねぎらいのこと、ささやかな弁当を用意して共に食べる。

気の毒なのはかの杜甫とほである、

何しろ朱のいさんと阮のいさんしか相手をしてくれないと嘆いたのだから。

私しかはかの子夏しかを師匠とすると決めたのだ、

「四海しかいの内、皆、兄弟なり」なのだ。

【補足】〔(1) もしも蘇軾の多数の詩に対して、宋代そうだい以来の約千年間にわたる無数のファンが人気投票をしたならば、この『東坡八首』は必ずベストファイブの中に入るのであろう。その詩に、潘丙はんへい、郭遵かくこう、古耕道ここうどう [→作品番号 06-2-003] が詠まれたのは、三人にとってこれ以上ない幸運であったろう。(2) 古耕道の先祖かもしれないとされた古押牙こおうがは伝説の人物で、約束したことは必ず果たし、己の命を犠牲にしてある人の許嫁を救出している。(3) 黄州こうのいわば無名な人々と気安く付き合った蘇軾は、そこまで突き抜けることのできなかつた杜甫とほを哀れんでいる。杜甫は安祿山あんろくざんの乱をどうにか乗り切った唐の朝廷の一員に加えられものの、己の信念に忠実に従ったために周囲と馴染めず、職を辞して浪々の身となった。杜甫は常に国家のことを考え、自身は庶民とは一線を画す士大夫層したいふに属するとの意識と責任感を強く抱いていた。それは極めて尊敬すべきことであると蘇軾も考える一方で、蘇軾には意識の底層に自身は本来は農民であるとの思いがあり、荒れ地を耕し、潘、郭、古の3人と付き合うなかでそれを強めのだろう。孔子の弟子の子夏しかの言葉「四海しかいの内、皆、兄弟なり」を実践できると歌ったこの詩の末の句は、黄州に来て1年余りで、蘇軾の精神が力強く蘇ったことを示すものであろう。それを導いたのが、東の坡たかまりの地を得た馬正卿ばせいけいであるので、最後の第八首は馬正卿のことを歌う〕

其の八

馬正卿君は士大夫としてもとは苦しい境遇にあった。

私に付き従って二十年、

馬正卿君は、日夜、私が高位に昇ることを望んできた。

それは、隠棲するための土地を買う錢を私からもらうためである。

ところが、私は馬正卿君に何もしやれず。

かえって馬正卿君に面倒をかけ、

この土地を借り受けて、ここで農耕ができるようにしてくれた。

馬正卿君は自身の人生設計を放棄して、

ここで収穫することを目論んでいるのだが、

それは龜の甲羅から毛を刮り取って毛氈を編もうとするようなものだろう。

馬正卿君が癡なのはそれだけではなく、

いまもって私が賢人であるかのように誇らしげに人に吹聴しているのだ。

誰もがそれを笑うのに、いっかな改めようとなしない。

憐れなことに、

私に一つ施せば、千倍になって返ってくるといまもって思っているのだ。

【補足】[馬正卿がいかなる考えから 20 年もの間蘇軾に仕え、流罪になってもなお離れずにいるのか。この詩に詠まれている通りではないことだけは確かである]

■ 【06-2-025】馬正卿守節

【解題】蘇軾を「蘇東坡」にした最大の功労者は馬正卿である。馬正卿について記した二つの短文を見ておこう。一つ目はすでに作品番号 02-1-012 として見ているが、もう一度ここに掲げておく。

【訳文】

杞^き [雍丘^{ようきゅう}]の人の馬正卿^{ばせいけい}は都^{たい}の太学^{がく}の年長の組の学生だったが、はなはだ潔癖で気骨があり、学生仲間からは好かれず、教授連中からは敬遠されていた。私は若いときにたまたまその下宿を訪ねたところ、壁^とに杜甫^{とほ}の『秋の雨の嘆き』の詩が書いてあった。それを見ても、そのときは特に何も思わなかったのだが、馬正卿は間もなく太学を辞めて、二度と世に出ようとしなかった[よって、都の人々に己が理解されない苦しさを杜甫の詩に託したのだと知れた]。馬正卿はいまや白髪で、やはり困窮しているが、節^{せつ}を守ることはいまも変わらない。馬正卿^{あざな}の字^{ぼうとく}は夢得である。

【補足】 [蘇軾^{ぼせいけい}が馬正卿の下宿を訪ねたのは制科^{せいこ}の受験を控えて勉強に励んでいたころであった。そのときに2人がどのような話をしたのかわからないが、翌年には、馬正卿は自身が科挙に合格して官僚になるのは断念して、蘇軾の従者になることを選択したのであるから、よほど蘇軾という人物に惹かれたに違いない]

■ 【06-2-026】 馬夢得同歳

【解題】 馬正卿^{ばせいけい} [字^{あざな}は夢得^{ぼうとく}] についてのもう一つの短文。

【訳文】

馬正卿^{ばせいけい}は私と同じ年の同じ月の生まれで、私よりも八日だけ若い。この年に生まれた者で富貴な者はいない。私と馬正卿はその中でも困窮の冠たる者である。そして、私と馬正卿を比べてみるなら、やはり馬正卿を首位として推さなければならぬだろう。

■ 【06-2-027】 与王定国書

【**解題**】新たに土地を得て耕作を始めたことを、この頃に王翬おうきょう [字は定国あざな ていこく] [→作品番号 06-1-105] に送った手紙に記している。

【**訳文**】

(1) 王詵おうしん君が都に召し還されると聞きました。その娘たちが泣いて訴えたために、皇帝が哀れまれたからだとか。その通りなのでしょう。

送ってくださった詩はいよいよすばらしく、和したいと思いつつも、戒めを破るのは望むところではありません。こちらに来てからは歴史を学ぶのを楽しみとしています。お上に仕えて以来、学問から離れていたので、これで行くかまともになれるであります。

私は荒地は数十畝を得ました。牛を一頭買い、自分でそこを耕しています。今年は日照りの歳に当たり、米の値段が非常に高くなっています。近ごろ折よく雨が降りましたので、日夜開墾し、麦を植えようとしています。苦労ではありますが、かえてそこに味わいがあります。近隣の人々と顔を合わせればわいわい（舌に当たらないと舌）かやがや賑やかにやっています。自分では「麴糟とうぜんめい波裏の陶淵明」との号を思いついたのですが、どんなものでしょうか。

貴君の数枚しよの書を拝見して、筆法が次第しんに晋の時代の人々に迫ってきています。私の筆法はどうでしょう、少しは進んでおりますか。画はどうもうまいきません。酔って後に、十枚、二十枚と描いて、時に見られるものが一枚くらいあるかどうかで、多くは人が持ち去ってしまいます。貴君は画をお好みでしょうか。いま急には描けませんが、今後、酔ったときにうまくきたなら、お送りいたします。

【**補足**】 [(1) 最初に、蘇軾きんに連座して均州おうしんに流された王詵 [→作品番号 06-1-001] について記している。どうやら蘇軾は誤った情報を聞いたようだ。王詵は先帝の婿で、その娘は皇室の血を受け継いでいるからいかにもありそうな話なのだが、王詵が実際に都に帰還したのは3年後であった。(2) 戒めを破りたくないの詩に和すことでは

きないと記している。詩を作ることを完全に断っていたわけではないが、罪人同士が唱和するのはさすがに控えたのだろう。(3) 晋の時代の人とは王義之などである]

(2) 荒れ地を耕して詩を詠んでいます。その中に、「枯草を焼いていた家童が走って来て、／叫ぶには、／隠れていた古井戸が出てきました／一食分の作物だってここで採れるかどうかもわからないが、／一瓢の水を飲めることだけは確実にになった」[家童焼枯草、走報暗井出。一飽未敢期、瓢飲已可必]。とか「亀の甲羅から毛を刮り取って毛氈を編もうとするようなこと」[刮毛亀背上、何時得成氈]といった句があります。万里の彼方で笑ってくださることもあろうかと、紙の余白を埋めておきます。

■ 【06-2-028】 与章子厚書

【解題】 自分で土地を耕すようになったことは、章惇 [字は子厚] [→作品番号 06-1-079] への手紙にも記している。

【訳文】

私は東の坡に住まいし、棚田を作り、稲を植えています。農地は五十畝あり、自ら耕し、妻も自ら蚕を飼っています。それによって一年のやりりをしようとしています。

昨日は一頭の牛が病気のためにほとんど死にかけました。牛の医者はその病状を識りませんでした。老妻はそれを識っていて、「この牛は豆斑瘡です。治療法は青い蒿を粥にして食べさせることです」というので、その通りしてみると効果がありました。

私は謫居の後、すっかり村の翁のようになった気でいたのですが、まだまだです。老妻の方がよほど黒牡丹[牛のこと]の扱いを知っています。

千里の向こうで、貴公に笑っていただきたく思います。

【補足】 [(1) 章惇に対して、こうした日常の些事を記して送っているのは、政治的

立場は異なっているけれども友人としての関係は変わらないと自分は考えていると伝えたかったからなのだろう。(2) 元来自分は農耕をする民であるとする蘇軾であっても、農事の実体験は少年の頃に少々あった程度で、ここにあるように妻やあるいは馬正卿ばせいけいや近隣の人々の手助けを必要とした。蒿よもぎを粥にして食べさせるとは、要するに下剤を施したのだろう]

■ 【06-2-029】 題織錦回文上回文三首

【解題】蘇軾はいかなる遊び心からだったのだろうか、このころに回文かいぶんの作品をいくつも作っている。ここに掲げるのは、「タケヤブヤケタ」のように右から読んでも左から読んでも同じというタイプの回文ではなく、終わりから逆に読んでもちゃんと意味が通じる詩になるというタイプの回文。3首のうち1首だけを書き下し文にして示す。言葉を操る名手である蘇軾は、荒地を耕しながらこうした遊びに耽ったりしたのだろうか。

【訳文】

春晚落花余碧草、
夜涼低月半枯桐。
人隨遠雁辺城暮、
雨映疏簾繡閣空。

左上から読めば、

「春晚くれて落花へきそうに余し、夜涼こどうしくて低い月なかは枯桐えんがんに半ばす。人は遠雁へんじょうに随う辺城の暮れ、雨それるは疏簾しゅうかくに映じて繡閣空し」

右下から読めば、

「空閣の繡簾は疏にして雨に映じ、暮城に辺雁は遠く人に随う。桐は枯れて半月は涼夜に低れ、草は碧にして余花晩春に落つ」

■【06-2-030】書鶏鳴歌

【解題】先に「女王城」についての考証 [→作品番号 06-2-004] を見たが、黄州の自然、歴史、習俗に関していろいろな考察を加えている。これは民謡について記したもの。

【訳文】

私は黄州に来て、二月、三月のころに、黄州の人々が群がり集まって歌うのを聞いた。その詞はわからないし、その音律は正しい音階に合っていない。その声はなめらかに高くなったり下がったり、鶏が鳴くのも似ている。

遠く周の時代に、祭祀に携わった「鶏人」が廟堂において時を告げた声が、もしやこうであったかと思わせるところがある。ただしどぐ田舎臭い。

後漢時代の応劭が書いた『漢官儀』には「宮中では鶏を飼っていない。汝南郡には長く鳴く鶏がいて、宮殿の朱雀門の外を守る兵士は、その鶏の鳴く声を伝える」とあり、「これはいまの『鶏鳴歌』のものである」といっている。晋の時代の『晋太康地道記』には「後漢のときに固始県など四県では、宮中の護衛兵がこの曲を習って天子の御前で歌った。いまの『鶏鳴歌』のものである」とある。唐の時代の顔師古は事の本末を考えることなく、みだりにこの説を否定した。

いま私が黄州で聞くのは『鶏鳴歌』のなごりなのではなからうか。土地の人はこれを「山歌」といっている。

【補足】[古い文化が、都から離れた辺縁の地に残るという現象がある。周の時代の

祭官^{かん}や漢の時代の衛兵が鶏の声を真似た名残が、黄州^{こう}に今も伝わっているのかも知れないと蘇軾は考えたのである]

■【06-2-031】 雑書琴事十首

【解題】6月、陳慥^{ちんぞう ほうさん し} [方山子] [→作品番号 06-2-007] が黄州^{こう}に来た。2回目の訪問である。蘇軾は琴に関する10篇の短文『雑書琴事十首』、および琴の曲に関する12篇の短文『雑書琴曲十二首』を書いて陳慥に贈った。まず『雑書琴事』から5篇を訳す。序文が付いている。

【訳文】

元豊四年六月二十三日、陳慥^{ちんぞう きてい}が岐亭^{きてい}から訪ね来た。精巧^{せいこう}な筆、佳^よい紙、妙^{たえ}なる墨を携えて、私に書^{しよ}を求めた。たまたま客人の中に琴を善くする者がいて、私が所蔵^{しよざう}する琴を求めて弾した。それで全て琴に関する十の事柄を書いた。

【補足】 [旧い中国において「琴棋書画^{きんきしよが}」は文人の嗜むべきものとされた。囲碁について蘇軾が語ることはあまりないが [→作品番号 06-4-087]、書や画については頻繁に語り、琴についても深い知識があった。訳者は「琴棋書画」の全てに無知で、ここの訳文もまたはなはだ心もとない]

其の一 家蔵雷琴^{いえ ぞう らいきん} [家に蔵する雷琴]

我が家に琴がある。雷文^{らいぶん}が造ったので雷琴^{らいきん}という。琴の全ての面に蛇の皮が張られている。上池^{じょうち} [琴の部位の名称。以下の下池^{かち}、嶽山^{がくざん}も同じ]にある銘に「開元十年に雅州靈閣村で造る」とあり、下池の銘に「雷家^{らいけ}、八日合^{はちにちごう}に記す^{しる}」とある。「八日合」とは何の意味かわからない。嶽山^{がくざん}には指を入れられず、そのために弦を収めることができない。これがこの琴の最大の特徴で、雷文の琴だけがその

ようになっている。その理由がわからないかと家蔵の雷琴で探ってみた。琴の声は上池と下池の間から出る。琴の背面はやや隆たかくなっていて、薤にらの葉のような形をしている。琴の声はその隘せまいところから出ようとして徘徊して去らないので、余韻が残る。これが雷琴の最大の妙所であろうか。

【補足】[かつて蘇軾そ じゆんは舟の上で父の蘇洵が弾く琴を詩に詠んでいた [→作品番号 01-1-008]。そのときの琴がこの雷琴らいきんであったのだろうか。「八日合」とは数字の判じ物であることを考証している宋代そうだいの随筆がある]

其二 歐陽公論琴詩おうようこう こと し ろん[歐陽公が琴の詩を論じる]

唐とうの韓愈かん ゆの詩に『穎師の琴を聴く』があり、

昵昵儿女語、[へちャへちャと男女がしゃべるかのようであり]

恩怨相爾汝。[愛と怨みがこもこもであるかのようでもある]

画然變軒昂、[にわかにな高くなったり、勢いづいたり]

勇士赴敵場。[勇士が戦いの場に赴くかのようでもある]

とある。

かつて欧陽公おうようこう [欧陽脩おうようしゅう]は私に「琴を詠んだ詩で最も佳いのはどれだろうか」と尋ねられ、私はこの韓愈の詩を挙げた。

欧陽公はこのようにいった。

「この詩は確かに巧みである。しかし、これは琵琶を聴いての詩で琴の詩ではない」

後に私は『杭州の僧の惟賢いけんの琴を聴く』という詩を作った。

大弦春温和且平、[琴の大弦だいげんは春のようあたたに温かやわで、和らかく平らである]

小弦廉折亮以清。しょうげん [小弦は高く折れ、あきら 亮かして清らかである]

平生未識宮与角、[私はもとより宮きやうの弦とか角かくの弦とかの区別さえつかなくて]

但聞牛鳴盎中雉登木。[牛が盎はらの中で鳴いたり、雉が木に登って鳴いたりしているようだと言っただけである]

門前剥啄誰扣門、[惟賢師が弾く琴を聴いていると、門をほとんど叩く者がいた]

山僧未閑君勿嗔。[師は山にあっても閑がなく、琴は中断されてしまった]

帰家且覓千斛水、[それを残念に思う前に、私は家に帰って千斛せんかくの水を求め]

淨洗従前箏笛耳。[箏そうや笛の音に慣れてしまった耳を洗って出直さないとならない]

詩ができて欧陽公に寄せたいと思ったが、公はすでに亡くなっていた。いまに至っても残念でならない。

【補足】 [(1) 惟賢いけんの琴を聴いたのは蘇軾そうが杭州の副知事であったときのことで、欧陽脩ようしゅうの訃報が届く直前だったのだらう [→作品番号 04-1-056]。 (2) 続く其の三も杭州副知事時代の思い出で、張先ちやうせんのエピソードを記している。張先が何やらジョークをいっているのだが、何がおかしいのかさっぱりわからないので割愛する。 (3) さらに其の四は、琴と外来の音楽との関係が記していて、これもさっぱりわからないので割愛する]

其の五 琴貴桐孫こと きり まご どうじ [琴は桐の孫を貴ぶ]

木は普通は根元の方が堅くまわって、末の方が軟らかくて緩い。桐だけはそうではない。試しに小枝を取って削ってみると、どこも堅実で蠟のようであるが、根元側はどこもが緩い。世間の人か桐まごの孫えだを貴ぶのは、その堅実さを貴ぶからである。堅実であると、糸の音の中に木の声が入るのである。

其の六 戴安道不及阮千里たいあんどう げんせんり およ [戴安道は阮千里に及ばず]

げんせん あざな せんり

阮瞻[字は千里]は琴を上手に弾いた。そのことを聞いた人が、阮瞻のもとを訪れて琴を聴きたいと求めると、貴賤長幼を問わず、誰にでも弾いて聴かせた。音が自然に和し、人が演奏しているようには

思えなかった。義兄の潘岳が琴を所望すると、夜遅くになっても嫌な顔をすることなく弾き続けた。その

てんたん えいじよく

恬淡として栄辱にこだわらないありさまに人々は感心した。

たい き あんどう

ぶりょうおう

戴逵[字は安道]もまた上手に琴を弾き、武陵王が人を使わして召そうとすると、戴逵は使者の前で、「わしは王侯のための芸人にはならない」といって、琴の弦を破った。

戴逵の介

たつ

[臍曲がり]は阮瞻の達[こたわりのなさ]に及ばない。

【補足】〔(1) 晋の時代の戴逵と阮瞻のエピソードを記して、蘇軾の価値観がよく表れている。蘇軾もまた庶民の求めによく応じる人であった。(2) 其の七から其の九は訳者の理解が及ばないので割愛する〕

其の十 文与可琴銘[文同の琴の銘]

ぶんどう

文同の家に古い琴があり、私はそれに銘を記した。

攫之幽然、[これを攫むなら幽然として]

如水赴谷。[水が谷に赴むかのように]

醒之萧然、[これを醒なら蕭然として]

如葉脱木。[葉が木から脱するかのようである]

按之噫然、[これを按じれば噫然として]

応指而長言者似君。[指にに応じて長く言うところは貴君に似ている]

置之枵然、[これを置けば枵然として]

遺形而不言者似僕。[形は遺っても、もうものを言わないのは僕に似ている]

文同は楚詞[古風な詩]を好んで作ったので、「長く言うところは貴君に似ている」の句がある。

「醒」と「釈」は同義である。

昔むかし鄒忌は琴を論じてこのようにいった。

「これを攫むこと深く、これを醒くこと愉し」。

この言葉は指の使い方の妙所をいっている。

【補足】 [(1) 親友の文同 [字は与可] [→作品番号 06-1-055] が所有する琴のために
かつて作った銘についての一文。「攫」「醒」「按」「置」は弦の操作法をいう。(2) 演奏を終えて琴を置いたさまは無口の自分のようだとは、実態の逆をいうユーモアであろう]

■ 【06-2-032】 雑書琴曲十二首

【解題】 陳隨に与えた『雑書琴曲十二首』は、琴の曲にまつわる豆知識を記したごく短い十二篇の文章で、『瑤池燕』の曲について記した一文だけを訳す。

【訳文】

其の十二 瑤池燕

琴の曲に『瑤池燕』があり、怨み咽ぶ声調で、その詞はあまりよろしくない。ある人[実は蘇軾]はこの詞を改めて、女性の悩ましさの歌とした。

飛花成陣。[花が一斉に飛ぶと]

春心困。[春の心の苦しみは]

寸寸。[ずたずた]

別腸多少愁悶。[別れてからの愁い悶えはどれほどなのですかと]

無人問。[尋ねてくれる人もなくて]

偷啼自搵。[忍び泣きを抑えて]

残妝粉。[化粧が崩れてしまうのです]

抱瑤琴、[琴を抱いて]

尋出新韻。[新しい曲を尋ね]

玉纖趁。[指が音を追います]

南風未解幽愠。[南からの風もこの思いをといてはくれません]

低雲鬢、^{こつべ}[頭を垂れ]

眉峰斂暈。[眉の間を曇らせ]

嬌和恨。[なまめかしくも恨むのです]

この曲の妙なるところは、人に与えないでくれたまえ。

■ 【06-2-033】 与彦正判官

【解題】 琴に関連してこの手紙も読んでおこう。彦正判官^{げんせいはんがん}は何者であるのかわからないという。字が彦正というこの界限の官員なのだろう。

【訳文】

「響泉^{きやうせん}」と「韻磬^{いんきやう}」の二つの古い琴は、まさにいまの世の宝というべきものであります。すばらしい音色で、このようなものを頂戴^{かたじけな}して、忝^{かたじけな}きに汗が流れてやみません。……私はもとより琴は弾けないのですが、たまたま海印^{かいいん}禪師^{ぜんじ}紀公^{きこう}殿^{でん}が道を枉^まげて立ち寄^まってくださり、その従者^{じゆうしや}がたちまち数曲^{すうきよく}を作って披露^{ひろう}していただきました。湧き出る音はまるで人が語っているかのようでありましたので、試^{いら}しに一偈^{いつげ}をもって尋ね

てみました。

「もしも琴に琴の声があるのならば、琴が匣^{はこ}の中に置かれていても鳴るはずだ。もしも声^{こゝろ}が指の頭にあるのならば、指の上で聴けるはずだ」

そのことをここに記しましたので、千里の彼方でお笑ください。佳い紙に名高い茶も寄せていただき、重ねての御厚意に感謝いたします。

【補足】[海印禪師紀公は詳しいことはわからないが、黄州を訪れて蘇軾に会ったことは次の文章からも知れる]

■ 【06-2-034】送海印禪師偈

【解題】海印禪師紀公について記した文章。偈の本体は意味がきちんと掴めないので割愛する。また、文章の終わりに元豊元年九月十五日の日付があるのだが、それは明らか^{げんぼう}な間違いであるので、元豊六年であろうとの推測もある。琴に関連してここで読んでおこう。

【訳文】

海印禪師紀公は峨眉山に行こうとして、まず太子少保趙公[趙抃]を衢州に尋ねた。趙公は三首の詩を禪師に贈った。禪師はさらに道を枉^まげて齊安[黄州]に私を尋ね一偈を求めた。趙公は宋朝の元臣大老で功成^{ろくぬす}って帰られたのに対して、私は非才でありながら禄を竊み罪を得て都を去ったのである。このような二人を禪師の道眼は区別しない。仏法の大海のような恵みは、大小縦横一切関わらずに万の殊を照らすのである。……[以下、偈が続く]……

【補足】[(1) 趙抃が政界を引退して衢州に隠棲したことは作品番号 05-5-065 で見ている。(2) 海印禪師がどこから旅を始めたのかわからないが、衢州と黄州を経由して峨眉山に至るのは、大陸を東西に横切る長大なコースである]

■ 【06-2-035】 水調歌頭

【解題】 琴に関連してもう一つ見ておこう。章^{しょうほう}◆ [字は質夫^{あざな しつふ}] [◆は次の下に呆という字] [→作品番号 06-1-099] に贈った詞。序文が添えてある。

【訳文】

欧陽文忠公^{おうようぶんちゆうこう} [欧陽脩^{おうようしゅう}]がかつて私に尋ねた。「琴の詩で何が最も優れているだろうか」。私は、韓愈^{かんい}が穎師^{えいし}の琴を聴いて詠んだ詩が最も善いと思います」と答えたところ、「この詩は非常に奇麗であるが、琴を聴いての詩ではなく、琵琶を聴いての詩である」といわれ、私はその通りだと深く思った。建安^{けんあん}の章質夫^{しつふ}君の家には琵琶の上手な者がいて、私は歌詞を作るよう頼まれていた。私は長らく作れずにいたのだが、韓愈の言葉を取って、やや手を加え、音律を整えて詞に直し、これを贈ることにした。

【補足】 [序文の前半は作品番号 06-2-031 の其の二と多く重複している。この詞は韓愈^{かんい}の詩から多くの語句を採って再構成したもので、ざっとした訳文を添えておく]

昵昵儿女語、[ぺちやぺちやと男女が語っています]

燈火夜微明。[夜の灯のほかな明るさのなかで]

恩怨爾汝來去、[思ったり怨んだり、私とあなたでいったりきたり]

彈指淚和聲。[指で弾くのは涙と声のハーモニー]

忽變軒昂勇士、[たちまち打って変わって勇ましい人]

一鼓填然作氣、[太鼓がどんと鳴ると勢いつき]

千里不留行。[留まることなく一気に千里だて行くのです]

回首暮雲遠、[振り返ると、遠く夕暮れの雲]

飛絮攪青冥。^{やなぎ} [楊^{わた}の絮が遙かな空へと飛んで行きます]

衆禽裏、[たぐさんの鳥の中で]

真彩鳳、[本物おぼの鳳だけよ]

独不鳴。[独り鳴くことがありません]

躋攀寸歩千陰、[一步一步と高く険しいところへと登り]

一落百尋輕。[さっと軽やかに飛んで落ちるのです]

煩子指間風雨、[指の間から風雨が起こり]

置我腸中氷炭、[我が腹の内が熱くなったり冷たくなったり]

起坐不能平。[居ても立ってもいられなくなります]

推手従歸去、[手を押さえて、もう帰りましょう]

無淚与君傾。[涙をおさめてあなたとともに]

【補足】[音楽が喚起するさまざまなイメージを歌っていて、曲とともに聴くなら、情感豊かに鑑賞できるのだろう]

■ 【06-2-036】 祭任師中文

【解題】陳慥ちんぞう [方山子ほうざん] が黄州こうにきた時点に戻ると、蘇軾はそのときに大切な祭祀を行った。ここまでに何度か登場してきた郷里の大先輩である任佖にんきゆう [字は師中あざな しちゆう] が 3月 24 日に蜀しよくの遂州すいで亡くなり、その霊を遠く離れたこの地で陳慥らとともに祭ったのである。その祭文さいぶんを見ておこう。任佖てい しきいが程之才の告発によって嫌疑をかけられたことは作品番号 06-1-006 で記したが、任佖はその結果譴責処分を受け、瀘州ろから遂州に左遷となり、その間の心労がたたったためか、遂州に到着後間もなく亡くなったのだった。

【訳文】

眉山の陳慥と蘇軾、犍為の王斉愈と弟の王斉万、黄州の潘丙と古耕道は先の瀘州知事の任伋を祭り、その霊に申し上げる。

貴君はまことの知事として蜀の地の偉人であった。『詩経』にいうところの「老成」であり、『易経』にいうところの「丈人」であった。私と別れてから十年、その徳は日々に新たになり、いま一度お会いしたいと思っていたのだが、ついに元の身ではなくなってしまった。

陳慥と蘇軾と王斉愈と王斉万は貴君の友であるか親しい者であり、潘丙と古耕道は貴君が治めた州の民である。

貴君が郷里を離れた地で亡くなったことを哭し、その酸辛を痛ましく思う。禍福の来たる所以は誰も知らない。長生きしようも若死にしようも、貴君は己の道を歩んだ。天が為すのでも鬼神に左右されるのでもなかった。生きてる間に誉れがあり、死んで後に哀れまれるのは昔から難しいとされる。貴君ばかりは立派な名を持って彼方の世に行くのだ。

【補足】 [任伋がかつて黄州に赴任したことは作品番号 03-2-002 で見ている。だから、潘丙と古耕道は任伋に縁のある者として祭祀に加わったのである]

■ 【06-2-037】 任師中挽詞

【解題】 任伋 [字は師中] の挽歌。任伋は兄の任孜 [字は遵聖] とともに科挙に合格し、郷里の人々から兄は「大任」、弟は「小任」と呼ばれた [→作品番号 01-1-009]。先に亡くなった「大任」の挽歌を作品番号 05-3-022 で、また蘇軾が若い頃に見た「小任」の印象を歌った詩を作品番号 05-3-053 で見ている。この詩はこれまでに任兄弟を歌った数々の詩の総まとめに当たる。

【訳文】

だいにん

大任ほど剛烈な人は世にまたとなかった。

強いて挙げるならば、

後漢ごかんの時代の「悪にくを疾むこと風のごとし」といわれた朱震しゆしんが匹敵しようか。

しょうにん

小任は温雅にして剛毅、老いてはさらに恵み深い徳に満ちた。

比べるならば、

前漢ぜんかんの時代に聡明かつ慈愛と讃えられた小馮君しょうふうくんが似ているだろうか。

兄弟の才行が優れていたことは説くまでもない。

敢えて付け加えるなら、

昔、我が父が二人を友としたことをいっておこうか。

父の友は暁の星が消えゆくように次第にいなくなり、

哀しいことに、いつしか月[大任]に金星[小任]が対するだけとなった。

その大任が先に亡くなって墓を覆った土がまた乾かないうちに、

小任が続き、呼んでももう声が還ってこなくなった。

一樽の酒を生死の別れに寄せようとすると、

樽の中に涙がこぼれ、酒の味が酸っぱくなってしまふ。

貴賤、賢愚、いかなる人も命が尽きないということはない。

しかし、任君の家は賢子が続いたことで尽きることはない。

人間世界の得失にはこれに拠ればよろしいというものはない。

ただ、賢子を生じさせる天公てんこう[造物者]だけに拠ることができるのであろう。

【補足】[任にんきゆうと黄州こうとのつながりは、弟の蘇轍こうしゆうしちゆうあんの『黄州師中庵の記』に詳しく記されている。参考までに見ておこう]

【訳文】

そ てつ こうしゅう し ちゅうあん き
蘇轍：『黄州師中庵記』

し ちゅう にん いみな きゅう び ざん
師中の姓は任氏、諱は伋である。先祖代々眉山の人である。私の父の友人であることから、私はその人となりを知っている。

せいらん こう
かつて齊安〔黄州〕の副知事を務め、去って後にも黄州の人々は任伋のことを思って忘れなかった。黄州の人々は任伋が立派な役人であることを知っていたのである。

任伋は普段から書物を読むのを好み、大義〔本質〕に通じると、細かな字句にはこだわらなかった。本性として任侠の人で、勇ましいことを喜び、役人としては融通をきかせつつたらしまなくなることはなく、厳しいけれども暴虐になることはなかった。人々は畏れつつも任伋のもとで安んじていられ、また任伋を欺くことはできなかった。

しんそく
始めに新息県の知事になったときに、その民衆から愛されていることを知って、そこに土地を買って家を構えた。新息県の人々は「我等の『故君』〔もとからの主君〕である」といった。互いに親しみ合って変わることはなかった。

じょう えいん
黄州にきてからは、任伋はいつも定恵院に遊んだ。黄州を去ってからは、人々は任伋が遊んでいた亭を「任公亭」と呼ぶようになった。我が兄の蘇軾が罪を得て黄州に遷ってからは、兄と任伋が親しいことを知って、任公亭の西に「師中庵」を作った。土地の人がいうには、「任伋はきっと蘇軾を訪ねにここに来るはずだ。だからここに庵を建てたのだ」と。

すい
その翌年の三月、任伋は遂州で亡くなった。黄州の人々はこれを聞いて、定恵院に集まって哭する者が百人を超え、任公亭で飯僧〔読経〕し、師中庵で霊を祀った。任伋が黄州を去ってすでに十余年が経っていた。

そもそも役人と民衆の関係は、役人が民衆から取るだけで民衆に与えるものがなく、罰を加えるだけで恩を恵まないのなら、役人が去った後に民衆はその人を忘れる。せめて怨むところがないのなら、まだしも善い役人であるのだろう。しかし、任伋だけは、十年以上後になっても民衆はその人を思い、皆が声を失って哭したのである。これは普通にあることではない。

漢の時代に朱邑は若いときに桐郷の村長となり、その民に徳があった。朱邑は死に際して息子にこういった。「必ずわしを桐郷に葬ってくれ。後の世に我が子孫が我が墓を守ってくれるのは、桐郷の民が厚く奉仕してくれるのにきつと及ばないだろう」。朱邑は桐郷に葬られ、その祠は後々絶えることがなかった。

任伋は生きている間に新息に家を構えた。亡くなってから黄州の人は亭と庵で任伋を待っている。もしも死んで後にも知ることがあるのならば、任伋はきっと新息県と黄州の間を往き来しているのではないだろうか。私はそれを知りたいができない。

元豊四年十二月、眉山の蘇轍記す。

【補足】〔(1) 任伋が新息県に土地を得て官職を退いた後にそこに住もうとしていたことは作品番号 06-1-006 で見ている。(2) 漢の朱邑の故事は地方を転々とする官員の一つの理想像とされ、蘇軾も何度か詩文に引いている [→作品番号 05-1-010 など]]

■ 【06-2-038】 答李琮書

【解題】李琮〔字は献甫〕の問い合わせに答えた手紙。李琮はこのときは淮南路転運副使の職にあり、蜀の西南の地で生じた変事についての情報を蘇軾に求めたのだった。手紙の冒頭の一文から半年前に会っていることが知れる。淮南路は淮南東路と淮南西路に分かれ、黄州は淮南西路に属するので、李琮は職務を帯びて黄州に立ち寄っていたのだろう。

【訳文】

お別れしてからたちまち半年、貴君のことを深く思い、また御家族に御不幸があったと聞きましたので、慰めのお手紙を差し上げよしておりましたが、なかなか便宜がなく、また手紙ではなかなか思いを晴らすのは難しく、さらに憂いに沈むこともあるかと、ためらっておりましたところに、そちらからお手紙を頂戴

し、はなはた取じ入っております。……夏になってからは門を閉ざして外に出ることもありません。このひどい暑さは過ごし難く、住まいが西向きであるために遷居を勧める人も多くいます。しかし、遷居はひと月くらいでは定められませんので、そういううちに暑さの方が衰えてゆくであります。……

お問い合わせの、王天常が辺事^{おうてんじょう へんじ}[国境地帯での不穏な動き]について申していることについて申しますが、王天常の父の王齊雄^{おうせいゆう}は髪を結んで西南の地^{えびす}で夷と戦い、夷は王齊雄を畏れておりました。王天常は若いときにその父に随って夷の地に入ったことがあります。近頃、朝廷から遣わされた王中正^{おうちゆうせい}が蜀に入り、王天常に命じて、近傍のもろもろの夷を宋朝のもとに招こうとしたところ、夷は王天常が王齊雄の子であることをもって、その言うことを信じたのでした。かつて王天常は私に瀘州^ろの状況を詳しく聞かせてくれまして、……[以下、王天常から聞き取った情報を詳述する]……

【補足】[この手紙は非常に長文で、王天常から聞いたことを詳細に記している。蘇軾が情報を収集し分析する力に長けていたことを示すものであろう。訳者としては辺境の事情にそれほど関心を持ってないので訳は割愛する]

■【06-2-039】 答李方叔

【解題】李廌^{り たい} [字は方叔^{あざな ほうしゆく}] への返書。李廌は、蘇軾と同じ年に科挙に合格した李惇^{り じゆん} [字は憲仲^{けんちゆう}] の子で、父が亡くなったために苦勞しつつ学問に励み、このころに蘇軾に詩文を送って自分のことを認めてもらおうとしたようだ。

【訳文】

(1) 長らく御返事をしないままで取ずかしく思っています。……今年の暑さのひどさといったらいつもの年の十倍くらいでしょうか。昼も夜も雨が降り続いて十日以上もやまず、門の外では水と天が接するばかりです。いまは晴れ上がりましたが、地面は水びたして、空気は蒸しあがり、病の身は息もたええです。貴君は門を閉ざして著述に専念して、それを楽しんでおられることであらう。時に優れた人々

と唱和し議論しておられるのは羨ましいかぎりです。いつお会いできるかわかりませんが、万万自重されますように。

(2)間もなく科挙の一次試験がありますが、服喪の期間は終えられたのでしょうか。もしも受験が可能であれば、大いに希望が有らましよう。

暑さの中で酒を飲むこともできず、字を書くことも縁がなく、たまたま一字か二字を書くと、すぐに人が持ち去ってしまいます。物好きな連中の意に応じることがとてもできませんし、貴君にはそのようなものを好む癖はないものと願っています。

近頃、一枚の銅鏡を得ました。漆のような色で、光明は冷たく透き通っています。背に銘があって、「漢有善銅出白陽、取為鏡、清如明、左竜右虎輔之」と記してあります。字体は篆書と隸書が混じっていて、まさしく漢のときの字です。白陽の所在はわかりませんが、南陽の白水の北なのでしょうか。「如」の字は「而」の字に作っており、「左竜右虎」の意味はまだわかりません。閑な折にでもさらに考えてみます。

【補足】[(1) 服喪について触れているのは父の李惇が亡くなっていたからである。

(2) ここに記されている鏡については作品番号 06-2-009 で見ている]

(3)我が婿である王適君、字は子立、が近頃ここを過って、科挙を受けるために彭城[徐州]に行きました。あるいは試験場で会うことがあるかもしれません。王君は議論する相手としてよく、詩文も学問も徳性もいずれも人より優れています。その弟は、名は適、字は子敏といい、兄とほとんど変わるところがありません。我が息子についてお尋ねいただきましたが、何かと用事が多く、またお手紙を書いておりません。王文甫君はすでにお手紙を出したとのことですから、お受け取りください。

【補足】[(1) 王適が科挙を受けるために徐州に向かったことは作品番号 06-2-023 で見ている。試験場とあるのは、都で二次試験を受けるようになったらという意味であ

ろうか。^{り たい}李廌は都の西南の^{ようてき}陽翟の人で、徐州とは離れている。(2) 作品番号 06-1-068
の補足で、徐州の民で無実の罪に落とされてしまった人について、^{しょうじゆん}章惇に配慮して
くれるよう頼んだことを記したが、このころにその者は無罪放免となり、その件につ
いて蘇軾は朝廷に感謝状を提出している]

■ 【06-2-040】 与王正夫朝奉

【^{おうとう あざな せいふ}解題】 王讜 [字は正夫] に宛てた手紙。

【訳文】

(1)お手紙を頂戴し、気持ちさがさらに慰められます。このごろはいかがお過ごしでしょうか。御葬儀のこ
とを伺い、はなはだ哀しく思います。何の手助けもできず、紙に臨んで、余りある残念を嘆くばかりです。…
…

【^{おうとう おうぼう}補足】 [ここ記されている葬儀とは、王讜の父の王彭が亡くなったことを指す。王
彭は、蘇軾がかつて^{ほうしょう}鳳翔に赴任していたときに^{かんぐん}監軍としてその地にいた人物である]

(2)^{おうぼう}王彭君の哀詞は、私の拙さのためにその盛徳を十分に表現し尽くすことができませんか、貴君の
孝心の万分の一ばかりを塞ぐことができますでしょうか。……

【^{おうとう おうぼう}補足】 [蘇軾は王讜のために王彭の哀詞を作った。それを次に読んでおこう]

■ 【06-2-041】 王大年哀詞

【^{おうぼう あざな だいにん}解題】 王彭 [字は大年] の哀詞。

【訳文】

嘉祐年間の末に私は岐下[鳳翔]に赴任し、そのとき太原の王彭君、字は大年、が監府諸軍の任にあった。互いに隣り合わせに住み、日々に顔を合わせていた。そのとき知事の陳希亮は下の者を非常に厳し馭ごして、その威令は傍らの郡を震わせるほどで、役人たちは陳知事の顔をまともに見ることもできなかった。王君は独り泰然自若として、陳知事に対して怖気づき様子がなく、陳知事もまた王君のことを敬っていた。私は始めはこのことを不思議に思っていて、王君のを知る者に尋ねたところ、皆がこのようにいった。

「この人は武寧軍節度使であった王全斌の曾孫で、武勝軍節度觀察留後であった王凱の子であります。若いときに父に従って甘陵で賊を討伐し、城下で接近戦となり、部下が七十余人を斬り、自身も二人を射殺しました。そのことは報告されたものの賞せられませんでした。ある人が、自分から賞を求めるよう勧めると、『私は父のために戦ったのであって、賞のために戦ったではありません』と、答えたのでした」

私はこのことを聞いて、王君は賢人であると知り、それからさまざまなことを論じ合う仲になったのだ。

王君は博学で学問に鍛錬し、通じていない書物はなかった。私の文章を非常に喜んでくれて、一篇を出すごとに膝を打ち、一日中喜んでいて。私はまだ仏法について知らなかったので、王君がその大略を話してくれて、奥深く隠れているところまで、疑いの余地なく明らかにして見せてくれた。私が仏書を読んで読むようになったのは、思えば王君がそのきっかけを与えてくれたのだ。

その後、王君は將軍となり、その評判は日々に高まり、自ら辺境の地に出ることを願った。そして、韓琦も文彦博も王君を用いたのである。先帝は王君の才能を存分に發揮尽かんさせようとしたが、王君は病となり、亡くなってしまった。

その子の王讜は学問と弁論をもって世に聞こえ、私に従って勉強に励んだ。私は王君が不遇であったのを悲しむが、この子が後に残ったことを喜ぶ。その葬儀にあたって、挽詩を作ってお別れを申し上げる。

……[以下、一句四字の韻文が続くが訳は略す]……

【補足】 [(1) 鳳翔の帕ワハラ知事の陳希亮こそが陳慥 [方山子] [→作品番号 06-1-015] の父である。(2) 王彭の曾祖父の王全斌は五代十国時代の終わりから宋の初めにかけて活躍した武将で、蜀を平定して宋朝の天下統一に大きく貢献した。ただし、蜀の民衆を手荒く扱ったために、長く恨みをかった]

■ 【06-2-042】 記王彭論曹劉之沢

【解題】 王彭がふとした折に蘇軾とかわした会話が、中国の芸能史において必ず引用されるはなはだ有名なエピソードとなっている。

【訳文】

王彭がかつてこのようなことをいった。

「巷では、道理をわきまえない少年たちがいて、家の者がその扱いに困ると、銭を与えて集め、古い昔の話の聞かせます。三国時代のことを説いて、劉備が負けたと聞くと、少年たちは顔をしかめ、涙を流します。曹操が負けたと聞くと、喜んで、やったやと叫びます。このことから、君子や小人の行いの余沢は百世に及ぶということがわかるというものです」

王彭は王愷の子で、字は大年で、武官でありながら、学問をよく知っていて、私は『哀辞』を作ったことがある。

【補足】 [これは中国における講談の始まりのころの姿を伝える貴重な証言とされている。子供たちを教化するために、三国時代の歴史を語って聴かせていたのである。後に『三国志演義』などで定着するように、早くから曹操が悪者で、庶民は劉備を最厚していたのだ]

■ 【06-2-043】 答呉子野

【解題】呉復古^{ごふくこ} [字は子野^{あざな しや}] への返書。呉復古は4年前に済南^{さいなん} [齊州^{せい}] で出会った神出鬼没の不思議な人物である [→作品番号 05-3-005]。その使いの者^{せんじん} [原文では専人] が手紙を届けにきて、それへの返事。この年に呉復古に書いたと推測されている手紙が4通あるので、ここで合わせて見ておくことにする。

【訳文】

(1) 済南^{さいなん}の境目でお別れしてからたちまちいまに至りました。その間に何かがあったかといったら、どれも言ひに足りないことばかりです。専人^{せんじん}が来られてお手紙を頂戴しました。安穩に、そしてお健やかに郷里でお暮しとのこと喜んでおります。私は黄州^{こうしゅう}にきてすでに一年半になり、窮乏のなかにあつて、昔からしてきたことをまた習つております。思えば、罪は大きく、罰は軽く、いま生きていられるのは君父からの賜りものであります。自ら耕し、自ら魚を獲り、自ら木を刈り、そこに真の楽しみがあります。千里の彼方からの古い友人のお尋ねを得て、真心の深さをしみじみ感じております。いつまたお会いできるのでしょうか、紙に臨んで呆然としてしまいます。

(2) 承れば三年の間、墓をお守り、葬事^{まこと}に誠を尽くされ、さらには園亭を整え、子弟を養い教えておられるとのこと、これらは古の人のしていたことで、呉君でなければそれを望むことはできません。……弟からは間断なく手紙がきていて、恙なく過しております。お尋ねの数人の方々の消息は必ずしも詳らかにしませんが、馮京君は河陽^{かうやう}に、滕元発君は安州^{あんしゅう}に、沈括君は延州^{えんしゅう}に、王君は都^{みやこ}にいます。

……

【補足】 [4人の名が挙がっているが、これは呉復古^{ごふくこ}の交遊範囲の広さを示すものである。馮京^{ふうけい}と滕元発^{とうげんはつ}はこれまでに何度かその名を見ている。沈括^{ちんかつ}は蘇軾より5年上で、すこぶる理系的人間で、改革派ではあるけれど、政争に関わるよりも政策の実効性を

高めることに意欲を注いだ。蘇軾との接点はわずかしかなかったようだ。王君は誰を指すのか不明]

(3) 寄せてくださった建茗^{けんめい} [茶]などの数品はいずれも絶品です。そちらでは茶は手に入れにくいはずでありますのに、このようにしていただき、はなはだ恐縮しております。沙魚^{さぎょ}、赤鯉^{せきり}は皆珍物で、言葉にならないくらいに感じ入っております。ただ私はそれが何物であるかもわからず、珍しさに大切にしまっておくだけで、用い方もわからないところに、幸いにもお手紙に詳しく書いてくださり有難く思っています。近ごろ李^り明^{めい}という人が山水を画いて新たに名を知られつつあります。墨の用い方が俗でないので、一卷を得たところ、すこぶる長いもので、屏風のように巡らせて、人を困ませることができます。……

【補足】 [沙魚^{さぎょ}は南方の海の産物で、呉復古^{ごふくこ}が潮州^{ちようこう}の人であるからこそその贈り物である]

(4) 李師中^{りしちゆう}君が亡くなったことを思うたびに、俗世にあることの虚しさを覚えます。その詩を読むと、いつも涙が下ります。黄州^{こう}の風物は楽しむべきものがあり、暮らしに必要な物は手に入れやすいです。住まいは長江^{ちようこう}のほとりにあって、切り立った岸を下に見て、天を洗う波の上に座っているような気分になります。対岸は武昌^{ぶしやう}の諸山で、時折、小さな舟で独りそちらに渡っています。もしも呉君が北に旅することがありましたら、少しばかり遠回りをしていただければ、お会いできましょう。

【補足】 [(1) 李師中^{りしちゆう}は官界の大先輩で、作品番号 05-3-007 から済南^{さいなん}で呉復古^{ごふくこ}と会っていたと推測されている。その後亡くなったのだろう。(2) これらの手紙だけからでも呉復古が不思議な人物であることがわかるだろう。呉復古^{ごふくこ}は道士^{どうし}であるのか商人であるのか、とにかく幅広い人脈を持ち、財力も豊かで、そして自在に各地を移動するのである。後にまた登場する]

■【06-2-044】書淵明酬劉柴桑詩

【解題】蘇軾は東の^{たかまり}坡を耕す日々を送るなか、陶淵明^{とうえんめい}により深く共感するようになった。夏と秋の境に陶淵明の詩の感想を記した。

【訳文】

夏から秋にかけて、毒熱が七、八十日もゆるまなかった。^{あぶ や ことわり}炮り灼く理が極まって、もはや清涼の時はないと思わせるくらいであった。今日、たちまち涼しい風が吹き、細かな雨が降り、ついには重ね着をするようになってみると、今年も指折り数えれば終わるばかりになってきたのを思うのである。

^{とうえんめい}陶淵明の詩にいう。

今我不為樂、[このときに楽しまなければ]

知有来歳不。[来年もあるかどうかわからない]

この言はまことにはと思わせるものがある。

【補足】[ここに引かれているのは、^{とうえんめい}陶淵明の『^{りゅうさいそう むく}劉柴桑に酬いる』の中にあり、その詩の全体は次の通り。

^{とうえんめい}陶淵明：『^{りゅうさいそう むく}酬劉柴桑』[劉柴桑に酬いる]

窮居寡人用、[田舎暮らしには人としての用事が少なく]

時忘四運周。[時には四季のめぐりも忘れてしまう]

欄庭多落葉、[庭に落ち葉が多くなって]

慨然已知秋。[ああもう秋になったのだと知る]

新葵郁北牖、[北の窓辺で新たに植えた葵が咲き]

嘉穗養南疇。[南の田圃で稲穂が美しく稔る]

今我不為樂、[このときに楽しまなければ]

知有來歲不。[来年もあるかどうかわからない]

命室携童弱、[妻に命じて子供たちを連れて]

良日登遠遊。[良い日に遠く登って遊ぼうではないか]

【補足】^{りゅうさいそう}劉^{ろざん}柴桑は廬山に隱棲した人で、^{とうえんめい}官職から離れた者として陶淵明とともに知られていた]

■ 【06-2-045】 跋陶潛詩

【解題】もう一つ^{とうえんめい}陶淵明の詩に感想を添え書きしたものを見ておこう。まず陶淵明の二つの詩を写し、それに短い文章を付した。

【訳文】

^{とうえんめい}陶淵明：『^{えんでん}歸園^{きょ}田居』[^{かえ}園田の居に帰る]其の三

種豆南山下、[^{なんざん}豆を南山のふもとに植えた]

草盛豆苗稀。[草ばかりが盛んに伸びて、豆の苗はわずかしかない]

晨興理荒穢、[朝早くに起きて荒れた土地の世話をし]

帶月荷鋤歸。[月明かりのもと、^{かつ}鋤を担いで帰る]

道狹草木長、[道を狭くして草や木が生え]

夕露沾我衣。[夕べの露が我が衣を濡らす]

衣沾不足惜、[衣が濡れるのは構わないけれど]

但使願無違。[ただ我が願いは裏切られないでほしい]

陶淵明：『庚戌歳九月中於西田穫早稻』こうぼ とし くがつなか にし た わせ と [庚戌の歳の九月中ごろに西の田で早稲を穫った]

人生歸有道、せい [人の生も一つの法則のもとにある]

衣食固其端。[衣食足ることがまずは第一である]

孰是都不嘗、[そのことを嘗まずして]

而以求自安。[安らぎの境地を得た者はいない]

開春理常業、[春の初めからいつもの仕事をきちんとして]

歳功聊可觀。[一年の終わりにその成果をいさか見ることができる]

晨出肆微勤、[朝早くに出て我が力を尽く]

日入負未還。[日が落ちてから鋤を荷って帰る]

山中饒霜露、[山の中は霜や露の気が多く]

風氣亦先寒。[風もまたよそよりも先に寒くなる]

田家豈不苦、[田家の暮らしは苦しいものだが]

弗獲辞此難。[この難しさから逃れることはできない]

四体誠乃疲、[身体はまことに疲れ切ってしまうが]

庶無異患干。[願うのは戦災や天災がないことだ]

盥濯息簷下、[手と足を洗って軒下に憩い]

斗酒散襟顏。[酒を手にして胸と顔をほころばせる]

遙遙沮溺心、[遙か昔の隠者の心が]

千載乃相關。[千年を経て我が心と通い合う]

但願常如此、[どうかいつまでもこうであってほしいものだ]

躬耕非所歎。[自ら耕すことは少しも嘆くことではないのだ]

陶淵明は、晩年せつは節を守って躬耕きゅうこう[自ら耕す]した。いつも詩を作って自分の心をとさほくした。思うに、

その心の内は平らなものではなかった。私は黄州に流寓して二年、たまたま困難な歳に当たり、往々にして食べる物は乏しい。耕すべき田を自分では持っていない。陶淵明のようにになりたいと思ってもなれない。この二篇の詩は最も善く、親しく録した。

げんほう
元豊四年八月十六日。

【補足】〔(1) ここに蘇軾が写した2篇の詩のうち最初の『園田の居に帰る』は、陶淵明が官職を棄てて郷里に帰った翌年の作とされる。このとき陶淵明は42歳であった。次の詩は題に「庚戌の歳」とあり、陶淵明は46歳で、黄州2年目の蘇軾とまさに同じ年齢だった。(2) ここのキーワードの一つは「躬耕」である。俸給を得て生きるのではなく、自身で耕して食物を得て生きることをいう。「耕すべき田を自分では持っていない」とあるのは、東の坡の農地はあくまでも借りているものだからだろう。(3) 陶淵明の詩の終わりの方にある「遙か昔の隠者の心」の原文は「遙遙たり沮溺の心」で、これは『論語』に登場する長沮と桀溺という古代の隠者のことを歌っている。2人は隠者の理想とされ、蘇軾の詩文によく登場するので、後で詳しく触れることにする〔→作品番号 06-5-008〕。陶淵明から千年ほど昔の人で、そして蘇軾からすれば、「遙遙たり陶淵明の心」ということになるだろう]

■ 【06-2-046】 書鄭君乘絹紙

【解題】これは蘇軾の書を求める人が大勢いたことが具体的によくわかる一文である。

【訳文】

私は黄州に謫居し、鄭元興、字は君乘、は黄州で官職に就いていた。ある日、この紙一軸を持ってきて、私に書を所望し、このようにいった。

「私の古い友人で孟陽^{もうよう}という者がおりまして、とにかく貴君の書をひどく好んでおります。私にこれを託して、貴君に書を頼んでくれといっているのです」

そして、孟君が書いた数枚の紙を出して私に見せたくれた。孟君は善い筆遣いで、筆の痕は灑然^{さいぜん}として、私には何も加えられるものがなかった。しかし、鄭君があまりにも熱心に頼み込むので、とても断ることができなかった。

それから数日後、たまたま中秋にあたり、私は江亭^{こうてい}で客人と飲み、酔いがまわり、この数枚の書を作った。時に元豊^{げんほう}四年である。

翌日になって書いたものをよく視ると、紙ではなく絹であった。昔は絹紙^{けんし}というものがあったが、近世には失われたという。

【補足】[鄭元興の名はここでしか見られないので、どのような人物なのかわからない]

■ 【06-2-047】水龍吟

【解題】つれづれの思いを詠んだ詞。

【訳文】

小溝東接長江、[小さな川が東へと流れる先は長江]

柳堤葦岸連雲際。[柳の堤、葦の岸が雲の際まで連なっています]

煙村瀟灑、[霧に包まれたこざっぱりとした村で]

人間一閩、[人間界のさざめきが起こり]

漁樵早市。[漁師^{きこり}や樵たちの朝の市が始まります]

永昼端居、[私は永い昼をもてあまし]

寸陰虚度、[時は少しも進まなくて]

了成何事。[何もできずにいます]

但糸蓴玉藕、[蓴菜^{じゆんさい}とか蓮根とか]

珠杭錦鯉、[米やら鯉やら]

相留恋、[食べたい思いにつながれて]

又経歳。[また歳を過ごしてしまうだけなのです]

因念浮邱旧侶、[思うのは、かの仙界にあったもとの住まい]

慣瑶池、[いつも瑶池^{ようち}でたを巻き]

羽觴沈醉。[觴^{さかずき}を飛ばしてへべのれけ]

青鸞歌舞、[青い鸞が歌って舞って]

銖衣摇曳、[軽やかに衣を翻す]

壺中天地。[そんな別世界にいましたのに……]

飄墮人間、[人間世界に漂い落ち]

歩虚声断、[虚空を歩いて、仙界の声は断たれてしまつて]

露寒風細。[冷たい露に風がそっと吹き寄せるのです]

抱素琴、[弦のない琴を抱き]

独向銀蟾影裏、[独り月の影に向かいつつ]

此懷難寄。[この懐^{おも}いはどこに寄せればよいのでしょうか]

【補足】[誰かに聞かせるのではなく、ただ自分のために作った詞なのだろう]

■ 【06-2-048】 与子明兄

【解題】郷里にいる従兄の蘇不疑^{そふぎ あざな しめい} [字は子明] [→作品番号 04-1-070 など] に宛てた手紙。

【訳文】

久しくお手紙を差し上げずにおりましたのは便宜がなかったためであります。これも送られて行く途中で失われてしまうことありましようか。いかがお過こしてしょうか。

たいかそふぎ
大哥[蘇不欺]が亡くなってたちまち一年が過ぎ、いまでもおも
大葬のことを承り、墓所に臨めなかったのが残念でなりません。いま王君の使用人が郷里に帰るのに合わせて、お墓に供えていただく一文をお送ります。……私は何事もなく日常を過こしておりますが、この土地に不慣れで、食に窮することに困るくらいで、ほかに心配事はありません。……九月一日

【補足】〔(1) 蘇不疑の兄の蘇不欺が亡くなったことは作品番号06-1-103で見ている。

(2) ここに王君とあるのは果たして誰なのだろうか。蘇軾の妻の王閏之の一族なのだろうか]

■ 【06-2-049】 南郷子

【解題】9月9日の重陽の節句に、涵輝楼 [棲霞楼という説もある] で催された黄州知事の徐大受 [字は君猷] が主催する宴で詠んだ詞。涵輝楼も棲霞楼も黄州の町の西側、赤壁より少し北側の、長江に臨む場所にあった。

【訳文】

霜降水痕収。[霜が降るこの季節にさかり水収]

浅碧鱗鱗露遠洲。[浅くなった水に碧いさざ波が立ち、遠くまで洲が現れ出ます]

酒力漸消風力軟、[酒の力も次第に消え、風の力も軟らかく]

颼颼。[たたく颼颼とやさしく鳴ります]

破帽多情却恋頭。[その風に飛ばされたらよいのに、帽子は頭をしっかりと恋慕っています]

佳節若為酬、[この佳き節句の応酬は]

但把清尊断送秋。[酒樽を空に飲まして秋を送るのです]

万事到頭都是夢、[何事もつまるころは夢]

休休。[休めよう、休めましょう]

明日黄花蝶也愁。[明日には褪せてしまった菊の花を蝶が愁いてくれるでしょう]

【補足】[重陽の宴といえ、すぐに思い浮かぶのが、帽子を飛ばされた孟嘉の故事
[→作品番号 06-1-100]。折よく風によって自分の帽子が飛んでくれたら宴も盛り上がるのに、あいにくと帽子は頭が好きだとしがみついているというのがこの詞の前半の眼目]

■ 【06-2-050】 与王定国

【解題】王鞏 [字は定国] [→作品番号 06-2-027] に送った手紙。上の詞を詠んだ場所が棲霞楼であろうかとするのはこの手紙があるからである。

【訳文】

お手紙と新しい詩をいただき、感慰無窮であります。貴君が恙なく、長く辺地にあるのも問題にしてい
ないのを知りました。それが何よりであります。馬黙君がそちらに行くのでこの手紙を託しました。きっと届
てまいしょう。いま馬黙君がどこにいるのかわかりませんが、桂州のあたりをくるとまわって帰ることにな
るのでしょう。

重九には棲霞楼に登って、貴君の方を望んで、哀しく思いつつ、『千秋歳』を歌いました。満座の
人々で、貴君のことを知る人も知らない人も、皆が貴君のことを思ったのでした。

そして詞を一首作りました。……[上で見た『南郷子』の一篇を記す]……終わりの部分は、徐州の道

遙堂ようどうでの夜に貴君の詩に和した詩を踏まえたものです。

貴君からの詩に、私が画いた竹を御所望とありますが、何の足しになるのやら、貴君のためとなるのなら一枚画いてお寄せしましょう。

弟は安らかりにしています。我らがかつて禪について知るところはありませんでしたが、弟がいま禪をいうのは、鬼を仏とするものではないかといさか疑っています。

丹砂たんさは果たして送っていただけるでしょうか。便宜がありましたらお寄せください。私は薬について強い興味があり、暇な折に珍しいものを観てみたいと思うだけで、決して服用するものではありません。

張方平様からは長らくお手紙がきませんが、きっと安らかりにしておられることでしょう。……r

【補足】〔(1) 馬黙〔字は処厚〕の名が挙げられている。馬黙は官員で、このころに黄州こうに立ち寄ってから、職務を帯びて南方に旅立ったので、王鞏宛ての手紙を託したのである。いろいろな機会を得ては手紙を送っていたのである。(2) 『千秋歳』とあるのは、3年前おうきように王鞏が徐州じょにきていたときに、重陽ちやうようの日に蘇軾が作った詞。宴席で作った平凡な内容の作であるので、第5章では訳さなかったが、その中に「明年人縦健、此会応難復」〔来年はたとえ元気であったとしても、この会をまた持つのはきっと難しいでしょう〕の句があった。平凡な句であっても、二人の境遇ががらりと変わった時点で見ると、深い意味合いが自ずと生まれ出てくるであろう。まして、蘇軾自身が思いを込めて歌えば、満座の人々は感動するのである。(3) 逍遙堂しょうようどうでの夜とは、まさに王鞏と過ごした重陽のことで、そのときに詠んだ詩は作品番号 05-4-075 で見えて、その終わりの句に「明日黄花蝶也愁」とあって、上の詞の終わりと同じである。

(4) 弟の禪は「鬼を仏となす」とあるのは、意味がさっぱりわからないままに読み下しただけである。弟は年齢とともに仏教に深くはまり込み、儒学、道教、仏教の三者の絶妙なバランスの上に立ち続けた兄とはいさか異なっていく。(5) この手紙でも丹砂たんさ〔硫化水銀〕を所望している〔→作品番号 06-1-105〕。注目すべきは、研究する

ためで、服用する気はないと明言していることだ]

■ 【06-2-051】 集帰去来詩十首、并引

【解題】これは、陶淵明^{とうえんめい}の作品である『帰去来兮の辞』^{ききょらいけいじ}の語句を使って10首の詩に編集し直したもの。短い序文がある。参考のために『帰去来兮の辞』の原文を後に掲げ、両者に共通する文字を赤色で示す。なお、十首のうちの六首は黄州^{こうしゅう}で作られ、残りの四首は遙か後年に作ったとされるが、ここでは合わせて見ておく。

【訳文】

引[序文]

私は陶淵明^{とうえんめい}の『帰去来兮の辞』^{ききょらいけいじ}を読み、その字を集めて十の詩にした。いま子供らにこれを吟唱させている。題して『帰去来集字』^{ききょらいしゅうじ}という。

【補足】[「子供らに吟唱させている」とあるが、むろん自分で吟唱しつつ農作業に携わり、陶淵明^{とうえんめい}に作品を一字ずつ深く味わっていたのである]

其の一

命駕欲何向、[私はどこに行こうとしているのやら]

欣欣春木栄。[春の木が喜んで栄えているこのときに]

世人無往復、[もはや世間の人と関わることはない]

郷老有逢迎。[故郷の老人たちが迎えてくれるであろう]

雲外流泉遠、[雲よりも遠くで流れる泉]

風前飛鳥輕。[風に誘われて鳥は軽やかに飛ぶ]

相携就衡宇、[さあそこにある我が家に帰って]

酌酒話交情。[酒を酌んで心置きなく話そうではないか]

其の二

涉世恨形役、[世渡りの奴隷となっていたために]

告休成老夫。[やめると告げるときにはもう老人になっていた]

良欣就歸路、[よること帰路につき]

不復向迷途。[迷いの途^{まよひ}に向かうことはもうない]

去去徑猶菊、[去り行く道に以前通りに菊が咲き]

行行田欲蕪。[行き去る田は荒れてしまっている]

情親有還往、[これからは心親しむ者とだけ行き来し]

清酒引罇壺。[酒壺からうまい酒を飲むとしよう]

其の三

与世不相入、[私は世間とはうまくなくて]

膝琴聊自飲。[膝に琴を載せてせめてもの飲びを味わってきた]

風光歸笑傲、[自然の風光は帰ってきた私を笑って迎えてくれ]

雲物寄遊觀。[雲を眺めて自由に遊ぶ気持ちを寄せる]

言語審無倦、[自然との包まぬ対話は飽きることがなく]

心懷良独安。[心にうちの懷^{おもひ}はまことに安らかである]

東臯清有趣、[東の臯^{おさ}はことに清らかな趣^{おもむき}があり]

植杖日盤桓。[杖をついて日に何度も行きつ戻りつする]

【補足】[この詩に終わりにあるように、蘇軾^{とうば}は東坡、陶淵明^{とうえんめい}にとっての東臯^{とうこう}に、臨臯亭^{りんおさてい}から毎日のように通っていた]

其の四

世事非吾事、[世間のあれこれは私には関係がない]
駕言歸路尋。[いざここにと歸る路を尋ねる]
向時迷有命、[これが我が定めかとの迷いもあったが]
今日悟無心。[今はもうきっぱりと無心でいられる]
庭内菊歸酒、[庭の内の菊のもとに歸って酒を飲めば]
窓前風入琴。[窓辺の風が琴の音に入りこむ]
寓形知己老、[形をこの身に寓してすでに古い]
猶未倦登臨。[高いところに登って臨むに倦むことはない]

其の五

雲岫不知遠、[雲の立つ峰は遠くにあり]
巾車行復前。[車は前へ前へと行き進む]
僕夫尋老木、[伴う僕夫は老いた木のもとへ]
童子引清泉。[伴う童子は清らかな泉のもとへと行く]
矯首独傲世、[頭を上げて世の中を見回し]
委心還樂天。[天の与えてくれた運命に心を委ねて楽しむとする]
農夫告春事、[農夫が春の農作業を教えてくれたので]
扶老向良田。[老いの身を助けて田畑に向かうとしよう]

其の六

富貴良非願、[富貴などはもとから願っていなかった]

郷関歸去休。[故郷に帰ればよいだけなのだった]

携琴已尋壑、[琴を携えて谷を尋ね]

載酒復經丘。[酒を載せて丘を巡る]

翳翳景將入、[日が蔭って沈もうとし]

涓涓泉欲流。[泉はいつまでも流れ続ける]

農夫人不樂、[農夫の仕事は楽ではないけれど]

我独与之遊。[私は独りそれに遊ぶのである]

其の七

觴酒命童僕、どうぼく[童僕[少年の使用人]に酒を命じ]

言歸無復留。[帰ると己に言って、もう留まることはない]

輕車尋絕壑、[車を軽やかに走らせて谷の奥を尋ね]

孤棹入清流。[舟を清流に浮かべよう]

乘化欲安命、[自然の変化に任せて運命に安んじ]

息交還絕遊。[世間とのつまらない交わりは絶ってしまうのだ]

琴書樂三徑、[琴と書物の楽しみだけで十分で]

老矣亦何求。[老いてはそれ以外に求めるものはない]

其の八

歸去復歸去、[帰ることだけが]

帝鄉安可期。[神仙の世界も期待しない]

鳥還知已倦、[鳥が帰るのはもう十分であると知っているから]

雲出欲何之。[雲は出てどこに行こうとするのか]

入室還携幼、[部屋に入るときには幼い子を伴い]

臨流亦賦詩。[流れに臨んで詩を賦す]

春風吹独立、[春の風に独り吹かれて]

不是傲親知。[何かを人に誇るわけでもない]

其の九

役役倦人事、[ごたごたとした世間の事がいやになり]

来歸車載奔。[車を走らせて帰って来た]

征夫問前路、[この先の道を問いつつ来ると]

稚子候衡門。[幼い子供たちが門で待っていた]

入息亦詩策、[家に入って詩を吟じ]

出遊常酒樽。[外を出歩くときには酒樽を携える]

交親書已絶、[親しい者からの手紙も絶えて]

雲壑自相存。[雲と谷があるのを見るだけだ]

其の十

寄傲疑今是、[心豊かないまがたぶん正しくて]

求栄感昨非。[栄えを求めていた昔は間違っていたのだ]

聊欣樽有酒、[樽にいくらかの酒があるのを喜ぼうではないか]

不恨室無衣。[着るものがなくてもどうということはない]

丘壑世情遠、[丘や谷は世俗から遠く離れ]

田園生事微。[田や園にはささいな事柄しかない]

柯庭還独盼、[庭の木々は実に美しく]

時有鳥歸飛。[歸り行く鳥がその上を飛ぶ]

陶淵明：『歸去來兮辭』

歸去來兮、田園將蕪胡不歸。既自以心為形役、奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫、知來者之可追。實迷途其未遠、覺今是而昨非。舟遙遙以輕颺、風飄飄而吹衣。問征夫以前路、恨晨光之熹微。

乃瞻衡宇、載欣載奔。童僕歡迎、稚子候門。三徑就荒、松菊猶存。携幼入室、有酒盈樽。引壺觴以自酌、眄庭柯以怡顏。倚南窓以寄傲、審容膝之易安。園日涉以成趣、門雖設而常閑。策扶老以流憩、時矯首而遐觀。雲無心以出岫、鳥倦飛而知還。景翳翳以將入、撫孤松而盤桓。

歸去來兮、請息交以絕遊。世与我而相違、復駕言兮焉求。悅親戚之情話、樂琴書以消憂。農人告余以春及、將有事于西疇。或命中車、或棹孤舟。既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮、泉涓涓而始流。善万物之得時、感吾生之行休。

已矣乎、寓形宇內復幾時。曷不委心任去留、胡為乎遑遑欲何之。富貴非吾願、帝鄉不可期。懷良辰以孤往、或植杖而耘耔。登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑。]

【補足】 [(1) 先人の詩句を借りて別の詩に組み立て直す「集句」という行為は、宋代だいに入って行われ始めたようで、王安石にもその作例があり、約150年後の文天祥の『集杜詩』が最も有名である。文天祥は宋が元げん [モンゴル] によって滅ぼされたときに最後まで抵抗した宰相で、北京で獄死したのだが、獄中において、杜甫の様々な五言詩から句を抜き出して約200首の五言絶句に組み替え、そこに自分の思いを託すということをした。言葉の遊戯だとの批判もあるが、文天祥の考えは、杜甫は人間の代表として詩を作ったのであるから、それは人間の共有財産として普遍的な価値を持ち、

それを並べ直したものは人間の一人である自分の作品になるというものであった。集句に対する蘇軾の見解は後に作品番号 06-4-005 で見ることになる。(2) 参考までに陶淵明の『歸去来兮の辞』の訳文を添えておこう]

【訳文】

陶淵明:『歸去来兮辞』[歸去来兮の辞]

余の家は貧しく、耕して植えるのでは^以で自給するのには足り^なかった。幼稚が室に盈ちて、鉶^はには儲の粟も無^なかった。生きて生らすためのものを資める所^について、其の術を見られ未^なったのだ。親や故の多^がが余に長吏に為るよう勧めたので、脱然して懐^うところ^が有^って、之を求めたものの途^がが靡^なかった。会たま四方之事^が有^って、諸侯は(賢人を)患愛を以^って(用いるのを)徳のあることと為^し、家の叔が余の貧苦を以^って(推薦してくれしたので)、遂に小さな邑に於いて用い見れることとな^った。時に於いて風波[世の騒乱]は未^だ静ま^ってい^なかったので、心のうちでは遠^くに役^にこと^に憚^りがあ^った。彭沢は家を去ること百里で(近^く)、公の田から之利は、それで以^って酒を為るに足り^るので、故^にで^き便^に之を求めた。(それから)少しばかり日^がたつに及^んで、眷然から歸ろう歎^と之情^が有^れた。何^れ則^とい^うと、(わたしの)質^はは性^{から}自然^{である}ことを(よしとして)、(おのれを)矯^げて励^むのは(わたしが)得^る所のものでは非^いから^なだ。饑^や凍^を(さけるのは)切^{こと}ではある雖^も、己^と違^うことをする^{こと}と交^わり病^{んで}しま^うのだ。嘗^て人事^{に従}ったのは、皆^て口腹^に自ら(無理^{して})役^ののである。是^に於^いて悵^然として慷^慨って、深^く平生^{から}之^の志^に(反^{して}いることを)愧^{しく}おも^った。それでも猶^も望^{んで}いたのは(秋^{にな}って)一^たびの総^りを^えることで、それから当^にに裳^をを^ぬいで宵^のうちにも逝^ってしま^うつも^りだ^つた。尋^と程^氏にと^ついて^いた妹^が武昌^にに於^いて喪^り、情^は(も^はや)駿^奔こと^のま^にに在^って、自ら免^めて職^をを^去ったのだ^つた。秋^の仲^{から}冬^{に至}るまで、官^に在^ること^は八十^余日^{であ}った。しかしかの事^をを^因け^にに心^に順^{えた}わけ^で、この篇^をを^命じて歸^去来^兮と^いう。乙巳^の歳^[405年]の十一月^で也^つた。

歸去來兮、^{かえりなん、いざ} [歸去來兮]

田園將蕪胡不歸。^{でんえん いまし あ どう かえ へ} [田園は將も蕪れようとしている、胡して歸らないといふことがあるか]

既自以心為形役、^{すで すぜん ころも からた したばたらき し} [既に自分でわが心を以て形のための役に為ってしまったのだ]

奚惆悵而獨悲。^{どうれい くまくよ そし ひとかな} [いまさら奚て惆悵して而て独り悲しむのか]

悟已往之不諫、^{さと すで おわ つい いき へ} [悟ったのは、已に往ったことに之では諫めようがないということ]

知來者之可追。^{し くる こと つい どのに でき} [知ったのは、これから来る者に之では追か可るといふこと]

實迷途其未遠、^{まこと みち まよ それ ま ほどお} [実に途に迷ったものの、其は未だほど遠くではなくて]

覺今是而昨非。^{いま したく そし これまで まちが わか} [今は是て而て昨が非っていたのが覺つたのである]

舟遙遙以輕颺、^{ふね ゆらゆら そし かる あが} [舟は遙遙と、以て輕やかに颺]

風飄飄而吹衣。^{かぜ ひゅうひゅう そし ころも ふ} [風は飄飄と、而てわたしの衣を吹く]

問征夫以前路、^{たびゆ おんこ このきき みち つい ち} [征く夫に前の路に以て問うたところ]

恨晨光之熹微。^{あさ ひかりの ほのか かすか ざんねん} [晨の光之まだ熹で微なのが恨である]

乃瞻衡宇、^{こし もん いえ み} [乃てわが衡や宇が瞻えてきたので]

載欣載奔。^{すぐ よろこ すぐ はし} [載に欣び、載に奔った]

僮僕歡迎、^{しようにん よろこ むか} [僮僕たちが歡んで迎えてくれて]

稚子候門。^{おきな こ もん ま} [稚い子らが門で候っている]

三徑就荒、^{みずじ みち あ はじめ} [わがやへの三の徑は荒れ就ているけれど]

松菊猶存。^{まつ きく なお あ} [松や菊は猶もとのまに存る]

携幼入室、^{おさない たずさ へや はい} [幼らを携えて室に入ると]

有酒盈罇。^{さけ あ たる み} [酒が有って罇に盈ちている]

引壺觴以自酌、^{どっり さかずき ひ そし みずか く} [壺と觴を引きよせて以て自ら酌んで]

眄庭柯以怡顏。^{にわ えだ み そし おお よろこ} [庭の柯を眄て以て顔を怡ばせる]

倚南窓以寄傲、^{みなみ まど もたれ そし こころいづ よ} [南の窓に倚て以てわが傲を寄せる]

審容膝之易安。ひざ い [膝を容れるのがやっとの之ところでこそ安らかでいられ易やすことを審やすのである] しみにする

園日涉以成趣。にわ ひ すぎ つれ おもむき な [園は、日が涉るに以て趣を成し]

門雖設而常閑。もん もう けれど しから いか とも [門は、設けてある雖も而し常も閑している]

策扶老以流憩。おし たす つ それ きまひ いこ [老を扶けるつえを策おしいて以て流たすつ憩いこい]

時矯首而遐觀。とき こうべ あげ そ とお み [時に首を矯あげて而して遐とを觀みたりする]

雲無心以出岫。くも むしん それ みね で [雲は無心で、以て岫みねを出るが]

鳥倦飛而知還。とり と う それ かえ し [鳥は飛うぶに倦とんで、而それから還かえるを知る]

景翳翳以将入。たいよう ほのくらく それ そろ はい [景は翳翳ほのくらくなそるはいって以て将そろろ入はいろうとし]

撫孤松而盤桓。いっぼん まつ な なが ふらふらどまて [孤いっぼんの松まつを撫なで而ながら盤桓ふらふらどまている]

歸去來兮。かえりなん、いざ [歸去來兮]

請息交以絕遊。きめ まじわ や それ こゆり た [請きめよう、交まじわるのを息やめて以て遊そを絶たつのだ]

世与我而相違。よのなか と わたし とか ずれて [世よのなかと我わたしとは而とく相違ずれてのだ]

復駕言兮焉求。ま しかんんを き いったいに もと [復また駕言しかんんをしたところで、兮きて焉いったいにを求もとめようというのだ]

悅親戚之情話。しんせきの こころ はなし よろこ [親戚しんせき之情のこころのある話はなしを悦よろこび]

樂琴書以消憂。こと しよつ たの それうれ け [琴ことと書しよつを樂たのしんで以て憂そいを消うれすのだ]

農人告余以春及。のうか ひと わたし つ ほ はる きま [農のうかの人が余わたしに告つげるのには、「いれ春ほが及はるたよ]

將有事于西疇。いよ にし はたけ おい しごと あ [將いよは西にしの疇はたけに于おいて事しごとが有ありますよと]

或命中車。ある ほろ (くるまめい) [或あるときは中ほろつきの車(くるまめい)を命めいじし]

或棹孤舟。ある いっそう ふね さお [或あるときは孤いっそうの舟ふねで棹さおさすこともある]

既窈窕以尋壑。まず ずんずん すす たに たず [既まずは窈窕ずんずんと以すすて壑たにを尋たずね]

亦崎嶇而經丘。また ぐいぐい すす おか へ [亦または崎嶇ぐいぐいと而すすんで丘おかを經へてゆくのである]

木欣欣以向榮。き にこにこ そ きか む [木きは欣にこにこ欣そと、以きかして榮むえに向むかい]

泉涓涓而始流。いずみ きらきら そ なが はじ [泉いずみは涓涓きらきらと、而そして流ながれ始はじめる]

善万物之得時、[万物之よい時を得たことを善ろいとして]

感吾生之行休。^{わたし いのちの ゆく や} [吾の生之行ゆは休むことを感ずるのである]

已矣乎。^{とどのつまり} [已矣乎]

寓形宇內復幾時。^{に(た)い うちう うち やど き とれほど じかん} [形を宇の内に寓しておくのは復ても幾の時でもないのだ]

曷不委心任去留。^{どう き とど こころ ゆた まか} [曷して去るも留まるも心に委ねて任せないなどいふことをするのか]

胡為乎遑遑欲何之。^{なんだっ ばたばた どこ ゆ して か} [胡為てこも遑遑して何に之こど欲いるの乎]

富貴非吾願、[富貴は吾が願うものではない]

帝鄉不可期。^{せんにんのせかい たのみ でき な} [帝郷などは期に可るものではない]

懷良辰以孤往、^{よ とき たいせつに それ ひと ゆ} [良い辰は懐して以て孤けて往く]

或植杖而耘耔。^{ある つえ つ そ くさとりをし つちをかかむ} [或いは杖を植いて而して耘たり耔たりもする]

登東皋以舒嘯、^{ひがし おか のぼ そ ゆつり うそぶ} [東の皋に登って以して舒と嘯さ]

臨清流而賦詩。^{きよ なが のぞ そ し ふ} [清い流れに臨んで而して詩を賦したりする]

聊乘化以歸盡、^{しほく ちゅうかわり の そ つ かえ} [聊は[大自然の]化に乗って、以れで尽きるところに歸るのだ]

樂夫天命復奚疑。^{か てんめい たの も けし うたが} [夫の天命を樂しんで復う奚て疑わないのである]

■ 【06-2-052】 樂全先生生日、以鉄拄杖為壽、二首

【**解題**】王鞏に出した先の手紙 [→作品番号 06-2-050] で、大恩人の張方平 [字は安道] からは長らく手紙がこないと書いていた。その一方で、蘇軾は張方平の誕生日 [9月23日] に間に合うように鉄の杖を贈った。それは昨年得た鉄拄杖である [→作品番号 06-1-086]。張方平が樂全堂を作って「樂全堂居士」と称したことは作品番号 05-1-052 で見ていて、ここでは張方平のことを樂全先生と呼んでいる。

【訳文】

其の一

らくぜんせんせい
楽全先生はまさに地上の仙人というべきお方、

この世に住まってかれこれ五百年になる。

どうじん
いつも銅人に向かって昔話をし、

てつちゅうじょう
この鉄拄杖と清らかさと堅さを競うのである。

先生の胸には氷雪が入って透徹した思想が生まれ、

先生が昼寝をするときには四方の壁を竜が守る。

遙かに想像するのは、

天の方丈に仙人たちが集まり、

先生が語り出すや、一同の者が驚倒するありさま。

【補足】ちやうほうへい [張方平を 500 年よりも長く生きる仙人に譬えた戯れの詩であるが、張方平に対して、普通の言葉ではとても言い表せない思いがあるから、このような表現になるのだろう]

其の二

この杖は二年の間、影のように我が身に随い、

こうこ
江湖[田舎の自然]の草木の春を遍く踏み鳴らしてきたもので、

杖で石を突いた痕がなお眼に明らかに見える。

もしも、門を閉ざして家に置いたら、

杖はいずれ気高い竜に変じて鱗を生じるであろうか。

この杖とともに身を守りつつ慎重に歩くときは、

みち
途で敵に脅かされることはないのだが、

もしも、先を争って近道を行こうとすると、

かえって人に累わずらわされることになるだろう。

遠こく公にこの杖を寄せるのは、

この重さを嫌いはしないと知るからである。

なぜなら、公が文章を記すときは、

筆の端で自在に千鈞の重さを操っているのだから。

■ 【06-2-053】 与潘三失解後飲酒

【解題】 潘丙はんへいの弟の潘原はんげん [潘三はんさん] は法に触れることをしたとされて、しばらくの間拘束されて官の取り調べを受けていた [→作品番号 06-1-068]。この頃になってようやく解放されたので、蘇軾はこの詩を贈った。詩の題にある「失解」は、科挙の試験に不合格になったときに用いられことが多い語句で、直接的に落第とはいわずにややぼかした表現であるのだろう。それをここではより不名誉な事柄に対して用いている。

【訳文】

我が家に伝わるおんぼろほうきの箒、

それには千金の価値があると思ひ込んでいたところで、

誰も買ってくれはしない。

額みたいの半分ほども長く引いた眉、

それがいまの流行だからといって、

本当に美しいわけではない。

私自身を顧みるなら、

どの箒がよいのか、どの眉が美しいのか、

鈍い頭で何もわかっていない。

それでも、貴君がちつげけなせんけん嬋娟[美点]を争うのを残念に思っている。

青雲の上に昇る志を果たすことができるのかどうか、

将来のことはいまわからない。

黄色い菊は去年と同じように咲き、

ちやうこう長江を満たす風と月の光には値段が付いていない。

さあ今日は酔って、

人生の得失など忘れるがよい。

【補足】 [この詩を読んで、われわれには詳しい意味を汲み取ることができなくても、はんげん潘原には思い当たるところがあるのだろう。要するに、目の前のことにひかれておかしなことをしたりせず、大きな目標を持つてというのであろう]

■ 【06-2-054】 記游垂虹亭

【解題】 この文章は作品番号 04-3-077 としてすでに見ている。7年前の楽しい遊びをいま思い出して記したものである。

【訳文】

私は昔、こう杭州からみつ密州に移ったときに、ようかい楊絵と同じ舟に乗ってこう杭州を發った。そして、ちんしん陳舜俞とちやうせん張先とともにこ湖州のりじやう李常を訪ねた。さらに、りゅうじゆつ劉述とともにしやうこう松江に至ると、すいこうてい夜半に月が出て、ちゆうこうてい垂虹亭の上で酒を置いた。このとき張先は八十五歳で、歌詞で天下にその名が聞こえ、ていふうはれい『定風波令』の詞を作った。その中に、

見説賢人聚呉分、[いま賢人が呉の分野に集まっているとか]

試問、[ちょっと聞いてみましょう]

也応傍有老人星。[星々のかたわらにあるのはきっと老人星でしょうね]

坐客は非常に喜び、酔い潰れる者もいた。このときの楽しさはいまも忘れることができない。

あれからわずかに七年であるのに、張先も劉述も陳舜俞もこの世の人ではなくなっていました。そして松江の橋のたもとにあった亭あづまやも、今年の七月九日に海からの風で水位が上がって一丈余りの水が平地上に溢れたために、跡形もなく消えてしまったという。

昔を思えばまさに一つの夢である。

げんほう元豊四年十月十二日、こう りんこうてい黄州臨臯亭で夜に坐して書く。

【補足】〔(1) ここに記されている人名や事柄については作品番号04-3-077を見ていただきたい。(2) ここまで読み進めてくると、「昔を思えばまさに一つの夢である」ということが実感として伝わってくるだろう。(3) 最後の日付は、作品番号04-3-077では元豊四年十二月十二日としたが、ここでは別の考証に従って十月十二日としておく。(4) なお、上の文章にある李常りじょうと楊絵ようかいは健在で、李常は作品番号06-1-043などで見ているし、楊絵は作品番号06-2-083でまた登場する〕

■ 【06-2-055】 飲酒説

【解題】 これはお酒についての短文。

【訳文】

私は酒を飲んでも多くはない。しかし、毎日盃を手にするのを楽しみとしていて、この君なしでは一日も過ごせないほどである。

こう黄州で造られる酒は少なく、官が扱う酒は質が悪いかも高い。つまるところ、門を閉ざして自分で醸かもさなければならぬ。ところが、材料となるものがよくない上に、我が腕がためなので、全くとって口に入れ

るに値しないようなものしかできない。がっりして、世間に生きること窮した者は何一つとして成すことができないのだと、嘆息するのである。

とはいえ、甘かろうか酸っぱかろうか苦かろうか、瞬時に口を通過してしまって、それを追いかけてやうとしてもう及びぬのだから、味などはさておいて、人を酔わせることができるという点なら、私の酒だって悪くはないだろう。客人は私の酒では楽しめないだろうが、客人が喜ぼうか怒ろうか、いずれにしても私の知ったことではない。

げんほう

元豊四年十月二十一日

【補足】〔蘇軾は自分で酒を造ろうとして、なかなかうまくはできなかったのだろう。〕

「門を閉ざして釀す」とあるのは、酒は課税の対象で、お上に届けずに私的に酒を造るのは、厳密に言えば禁止されていたからなのだろう」

■ 【06-2-056】 飲酒説

【解題】 もう一つ酒についての短文。これは翌々年に書いたものであるが、ついでにここで見ておこう。

【訳文】

飲酒を嗜む人は、一日酒がないと調子が悪くなり、酒を断つと居ても立ってもいられなくなる。そして、「酒は断ってはならないのだ。酒で死ぬなら本望だ」という。

酒を断って病むのは、それはすでに病があるからだ。常に飲んでいるから病にならないという者は、一つでも病があると死んでしまう。

私は平生から「熱薬」を服し、飲酒は多くないとはいえ、盃を手にしらない日はない。ところが、去年から「熱薬」を服さず、今年になってからは飲酒も至って少ない。すると、日に日に病んでしまい、大きな害

にはなってはいないものの、飲酒をし、「熱薬」を服して無病であったころとはまるで違っている。

いま眼に痛みがある。よく考えてみれば、それはこのような理由によるのではないだろうか。

【補足】[要するに、酒は飲んだ方がよいといたいのだろう。「^{おっやく}熱薬」の語は意味がよくわからないのでそのままにしておく。熱くして飲む薬なのか、熱を上げるか下げるかする薬なのか。とにかくいつも飲んでいて薬があったのだろう。獄に入って以降はそれを飲めないでいるのだろうか。なお、後に見るように [→作品番号 06-4-004]、^{げんほう}元豊6年春に蘇軾が眼を患っていたとわかる記録があるので、この文章が書かれたのはその頃であるとされている]

■ 【06-2-057】聞捷、并引

【^{おうせい ゆ}解題】对岸の王齐愈 [→作品番号 06-1-030] を訪ねたときの詩。序文がある。

【訳文】

^{いん}引[序文]

^{げんほう}元豊四年十月二十二日、^{ちやうこう}長江の南で^{おうせい ゆ}王齐愈に会ったところ、^{ちんぞう}ちょうど陳慥からの手紙が届いていて、「この月の四日、^{ちやうがく}种諤が兵士を率いて敵地に深く入り、^{せい か}西夏の兵士六万余人を破り殺し、馬五千頭を獲た」と^{しん}報せてきていた。一同は喜び、^{がく}勝利を祝う楽を唱え、おのおの大きな^{さかづき}觥を飲み干した。

聞くところでは、

官軍は敵の塞を取ったと。

將軍の軍団の速さは鬼神のようである。

よっていますでにわかるのは、

かの地の無定河の柳も、我が都の柳とどもに、

来年は同じ一つの春の内において、

白い絮わたを飛ばすであらうこと。

【補足】[蘇軾は、西方の西夏国せい かい こくとの戦争を始めることに強く反対していた [→作品番号05-3-024]。皇帝はこの年の6月、西夏国との開戦を決断し、ただちに种諤ちゆうがくらが攻撃を始めた。宋軍そうぐんは連戦連勝で、ここにあるように大勝利をおさめたとの報せが10月4日に都に届き、皇帝は大いに喜んだ。陳誥ちんごうは独自の情報網を持っていたのだろうか、いち早くそのことを知って、王齊愈おうせい ゆに報せた。そもそも戦争には反対であった蘇軾も、捷報しょうほうを聞けば嬉しいもので、皆で祝ってこの詩を作った。座興の詩で、蘇軾の作とは思えないほどひどく拙いとの評がある。緒戦の勝利は実は西夏側の計略で、宋軍は敵地に深く誘い込まれて補給が困難になり、反撃に遇ってたちまち瓦解してしまうのだった]

■ 【06-2-058】 杭州故人信至齊安

【解題】こう杭州の知人たちから手紙や差し入れが届いての詩。

【訳文】

昨夜は風月ふうげつが清く、夢で西湖せい このほどりに行った。

朝になると、戸を叩く者があり、

杭州こうからの好い言葉よが聞けただけでなく、

呉ごの地の食べ物もたらされた。

円く軽やかな白曬荔はく し れい[果実]、

濃くてまろやかな紅螺醬こう ら し ょ う[調味料]、

さらには西庵茶さいあんちゃもあって、

それらで江瘴[川べりの地の風土による病]を洗えと勧めてくださる。

昔の友人は情義が重く、

一年雇いの二人の召使を従えて、

千里の彼方から西に向かって必ずお訪ねするであろうといってくる。

そして、詩文の集まりを結ばよとの提案であるのだが、

詩帳を編んだりしたならまた罪を蒙りかねないのかわかっておられない。

私はまた夢に魂を飛ばし、

次の夜は杭州の江漲橋こうちやうきやうに到るのである。

■【06-2-059】答陳師仲主簿書

【解題】杭州の錢塘県で主簿しゅぼの職にある陳師仲ちん しちゆうから手紙が届いたのでそれへの返事。

陳師仲じよは徐州の人で、後に蘇門六学士そもんろくがくしの1人として数えられるようになる陳師道ちん しどうの兄である。

【訳文】

……先に徐州じよにおりましたときに再会する機会があり、顔復君がんぷくらに聞いたところ、皆が貴君の文詞が特に優れ、志節が高く明らかで、毎日語り合いたいと思っているということでありました。たまたま貴君に関わりのある訟訴事そうそじがあつて、それからはお話することもなくなってしまいました。貴君の一門の不幸であり、また官員にとって楽しいものではありませんでした。かれこれ思うところあります。私は私で罪を負って遠くに追放され、ますます消息を聞くことがなくなってしまいました。いまお手紙を頂戴して、昔に増すお気持ちの厚さに感じ、また前の事は意に介していない御様子で、はなはだ幸いに存じます。

私が罪を得てから後には、かつては親しくしてくださった人も何もいってこようしなくなったのですが、貴君だけが多くの人が忌むところをなさるのはどうしてなのでしょう。送ってくださった詩文を拝見して、数篇を

見たばかりで、手を打って嘆息したのです。これはいまの世に珍しい人で、世俗の人にはその価値を量ることはなかなかできないであろうと思いました。詩文はどれも優れて美しく、寄せる思いは多岐にわたったりつも、すべて大道に合致しています。私にはなかなかいえないものです。また十のうち四ないし五には弟について触れていて、その情愛の深さが現れています。世俗とは齟齬するところが多くあって、それで己を厭い、他人についてとやかまいところはあります。そうしたところは私も同様でありますので、私はこのままでよいのだらうという気にならせてもらえます。……

御祖父様^{ちんき}〔陳泊〕の詩を幸いにも拝見でき、諸公が書かれた後ろに数文字を書き添えました。

『超然台』^{ちやうぜんたい}と『黄樓』^{こうろう}に関連する作品を集めた二集は大変貴重な賜物です。かつて私は編集したことがなく、幾つかの作品がありましたのも、私が罪を得たときに焼き尽くしてしまいました。まさか貴君のところにあるとは思いませんでした。道理に合わないところを添削して残したいと思います。

私は錢塘^{せんとう}〔杭州〕の人々に何も恩恵を施していなかったのに、人々はどして私のことをいまも念ってくださるのでしょうか。私もまた年に何度も夢で西湖^{せいこ}に行きます。俗にいうところの前世の縁なのでありましょうか。私は杭州^{じやうせいじん}にいたときに寿星院に遊んで、門から入ってすぐにここにはかつてきたことがあると悟りました。寿星院の後ろの山に石があることを言い当て、それでそのとき詠んだ詩に「前生已到^{ぜん}」〔前生已に到る〕の語があったのです。貴君は^{せんとうしゅぼ}いま錢塘主簿として寿星院に出入りすることも許されて、か
のときの私のように自由に遊ぶことができるでしょう。山水の極めて絶妙なところには、しばしば私の題字があるでしょう、その後で誰かが書いたものもあるでしょう。貴君が至ったならば、詩体によらずに年月の順序に従って記録してください。その一つでも二つでも寄せてくださるならば我が思いは大いに慰められます。

【補足】〔(1) 徐州で顔復と親しくしていたことは作品番号 05-4-080 などで見ている。(2) 祖父^{ちんき}の陳泊の詩集に添えた文章は次に見る。(3) 『超然台』『黄樓』の二集とは、蘇軾と蘇轍の作品に触発されて諸家が唱和した作品を集めたものであろう。作品番号 06-2-017 で見たように、当局の捜査を怖れた家人によって蘇軾の家にあった文書

類の多くは焼かれてしまったので、陳師仲ちん しちゆうのような蘇軾ファンのもとにあったものから蘇軾の作品群は復元されたのであろう。その後も何度か散逸や消失の危難を乗り越えて現在にまでに伝わったものを我々は読んでいるのだ。(4) 後半には、杭州こうへの蘇軾の思いが綴られている。寿星院じゆせいいんに遊んだことは作品番号 04-2-082 で見ている。「前世已到」の語は、そのときの詩ではなく、作品番号 05-1-068 に「前生我已到杭州」
 [前生我已ぜんせい われすでに杭州こうしゆうに到る]と詠まれている。あるいは寿星院で確かに詠んだけれどもその詩は失われてしまったのかもしれない]

■ 【06-2-060】題陳吏部詩後

【解題】上に見た陳師仲ちん しちゆうの祖父の陳泊ちん きの詩集にこの後書きを記した。陳泊はかつて朝廷の高官であった。

【訳文】

もとの三司副使吏部の陳公さん し ふく し り ぶ ちんこう ちん き[陳泊]とは、私はお会いすることができなかった。私が若い頃、当時の名高い方々の多くが陳公のことを尊んでいた。それから先輩方は徐々に減り、ほとんどおられなくなるにつれて、公の詩を称えて誦しょうじる人を見ないようになった。しかし、公のちょっとした言葉や遺した事柄を見ると、どれも記録し、宝物として大切にしておくべきものばかりで、まして文章は非常に優れている。公の孫ちん しちゆうの陳師仲君が公の詩の二十五篇を集めて私に見せてくれた。再三感嘆しつつ、公のありお姿を想像するものである。

元豊四年十一月二十二日、眉州びの蘇軾が書く。

■ 【06-2-061】跋所書摩利支経後

【解題】仏典の『摩利支経』ま り し きやうを書き写し、この跋文を書き添えた。この経は従兄その蘇

不疑 [→作品番号 06-2-048] の息子の蘇安節のために写したものである。

【訳文】

甥の蘇安節は元豊庚申六月の大水の中を舟で峡谷を下り、常にこの経を持って陰難を脱することを
得た。あくる年の十二月に黄州に至り、私に会った。そして、この経を私が写したものを持って蜀に帰ら
いと願った。

眉陽の蘇軾が書く。

■ 【06-2-062】 侄安節遠来夜坐三首

【解題】 上に見たように、甥の蘇安節が前年の夏に蜀を出て、この年の 12 月の黄州
にきた。そのことを詠んだ詩。

【訳文】

其の一

私が蜀を離れて南の地に来てから、
それと思わぬうちに、流れた月日が山のように積み重なってしまった。

今夜は君と坐し、

冷たくなった灰をかきまぜながら雨音を聴いている。

私はもはや眼に文章をさらして読むようなことをしていない。

人に伴う燈火にしみじみ情があると感ずるだけだ。

私は自身の出鱈目のために郷里に帰ることができない。

君はここまでの人生で何もかもがうまくいかないという。

それでも、燈火が短くなるまで君と話し込んで、

白髪になったことをただただ嘆いてばかりでなくすんでいる。

其の二

私も君も心が衰え、顔貌も改まり、ひどく痩せてしまった。

しかし、会って語り合えば声は互いに昔と変わらない。

私は秋の夜長に遙か故郷のことを思っていたのだが、

一年の終わりのときに、君が遠く来てくれたその情の深さを知る。

私は人を畏れて癡鈍おろかものように黙んまりを決めてきた。

君に旧知の人々のことを次々に尋ねて、

その半ばが死生を異にしたことに驚かされる。

人生の夢は断たれ、酒は醒め、雨も絶たれた。

笑って看ようではないか、

飢えた鼠が燭台の上に登って行くのを。

其の三

落第した君に、酒はいかなる味なのか。

私は詩を吟じても、ただ飢えが耐え難いと嘆く声しか出ない。

思うに、穀類を絶って仙人になろうとするのはよい方策でないだろう、

郷里に帰って田を耕せばよいと、そればかりを説くのは、

人の情として物足りないものがある。

それでも、昔、剣を売って牛を買うことを勧めた賢者がいたように、

牛にまたがるなら心はのどかでいられるし、

川洲に勝手に成長する水草を採っても生きられないことはない。

君の弓はひとたびは緩んでしまったようにみえても、
何もそっくり作り直さなければならないというものではないのだ。

【補足】〔蘇安節が黄州に蘇軾を訪ねた事情は上の短文とこの詩から推測するしかない。其の三に「落第」の二文字があるので、蘇安節はこの秋にどこか〔たぶん都〕で科挙の地方試験を受けて不合格となったのだろう。失意の帰郷の途中で黄州に立ち寄り、今後の支えとなるよう『摩利支経』を書いてほしいと蘇軾に頼んだのだろう。蘇軾の父の蘇洵には蘇澹、蘇渙の兄がいて、蘇澹もその息子も科挙には合格しておらず、孫の蘇林は受験に失敗して失意のうちに亡くなっている〔→作品番号 03-3-028〕。蘇渙が蘇家で初めて科挙に合格して官員となったのだが〔→作品番号 02-4-017〕、その息子たちは、昨年亡くなった蘇不欺も、蘇安節の父の蘇不疑も、三男の蘇不危も科挙に合格できなかったので、次代のホープとして蘇安節にはかなりの重圧がかかっていたのだろう。それで、其の二に「心が衰え、顔貌も改まり」と詠まれているのだろう〕

■ 【06-2-063】 冬至日贈安節

【解題】蘇安節が来たのは冬至の直前で、この詩を冬至の日に贈った。

【訳文】

私の人生で幾度の冬至があったろうか。
少年の頃のことがいまも昨日のように思い出される——
長寿を祝うために、膝をむき出しにして、当時の年長者に拝礼した。
私はこの十年間を官舎で過ごし、
白髪は衰えと疾いを催すばかりだ。
かつて私の前には不欺、不疑、不危の三人がいて、

私の後には轍てつが一人だけいた。
 いま、近い者ちゆうこ[弟]も長江を隔へてているし、
 遠い者[従兄たち]は天の向むかう側の壁のあたりあたりにいる。
 今朝は何の幸さいいか、
 万里の向むかうからきた君を見ることことになった。
 憶おぼい出すのに、君はまだ子供の髪かみをしていて、
 泣なくといえ、梨や栗りを乱みだがってのことことだった。
 今来た君を見れば、
 天下のことを慨嘆がいたんし、志気しきは鉄石てつせきのようように堅かい。
 蘇その家の子孫こそんがみな君きみのようようであるなら、
 我が一族いっさくはいつまでも続ついてゆくゆくであらう。
 この詩うたがてきてみると、
 超然ちょうぜんとして涙なみだなど滴たり落おちるようなことはないのだ。

■ 【06-2-064】 記与安節飲

【解題】 同じ日に蘇安節そあんせつと飲のんだことを記ししたごく短みづかい文ぶんもある。

【訳文】

げんほうしんゆう
元豊辛酉、冬至の日。

私わがは黄州こうしゅうにいて、蘇安節そあんせつは千里せんりの道みちも遠とほくはないとして訪まねてきた。酒さけを飲のんではなはたた楽たのしく、蘇安節そあんせつは黄鐘こうしゅうで『梁州りやうしゅう』の曲うたを吹ふいた。少年せうねんがそれそれに合あわせて舞まった。酔よいから醒さめてこの一時いっしの楽たのしさを識しるす。

【補足】 [黄鐘こうしゅうは管楽器くわんがくぎである]

■【06-2-065】伯父送先人下第歸蜀詩云、人稀野店休安枕、路入靈関穩跨驢。安節將去、為誦此句、因以為韻、作小詩十四首送之

【**解題**】蘇安節そあんせつが短い滞在の後に帰ることになり、この一連の送別の詩を贈った。詩題は「我が父が科挙そかんに落第して故郷に帰ったとき、伯父の蘇渙そかんが詩を送ってくれた。その中に『人稀野店休安枕、路入靈関穩跨驢』ひとま 野店 枕に安んずる 休し、路は靈関みちに入って穩れいかんやかに驢はいに跨おだがる」という句があった。蘇安節が行くにあたって、この句を誦し、それぞれの文字を韻しょうしにして小詩十四首を作って送った」。この詩は六言四句という珍しい形式で作られていて、それで「小詩」といったのだろう。蘇軾の父の蘇洵そじゆんが科挙の二次試験を都で受けたものの不合格になったのは宝元元年〔1038年〕で〔→作品番号 01-2-001〕、これより43年前であった。そのときに兄〔蘇安節の祖父〕が弟を慰めた詩を引いて、今度は叔父が甥を慰めたのである。一族の情誼の厚さを感じさせる。

【訳文】

其の一

ここ黄州は、

昔から放逐された官員が住むところとなっている。

ただでさえ索漠さくもくとしているのに、

風雪のなか、

独り帰る人を見送る。

【**補足**】〔「放逐された官員」とは、例えば王禹偁おううしやう〔→作品番号 06-1-044〕であり、任にん伋きやう〔→作品番号 06-2-036〕であった〕

其の二

我が瘦せた骨は、寒さのために断たれるばかり、
 我が衰えた髯ひげは、摘まんでいよいよ稀まれてある。
 これが死別となるとも、
 それに甘んじようとは思わない。
 しかし、生きて故郷に帰れまいとの恐れはある。

其の三

日が上るとき、
 長江ちやうこうの上に満みちる気きにまず曙光しやうこうがくる。
 雪が晴はれるとき、
 東たかの坡かの野のに目が眩くらむほどの光ひかりがくる。
 君が家に帰ったとき、
 きっと思い出してほしー——
 ここで私が鋤うを手てにしていることを。

其の四

君の破これた裘うすに、月の明あるさが注つぎ、
 君の剣は、寒気せむせの厳こしさのために鈍鈍ってしまうだろう。
 私は家に戻かえって戸かどを閉とめて座まし、
 君がこれから経へて行く道筋みちすぢの宿しゆくを黙もく々と数かえるのである。

其の五

故郷の人々に寄せるべき言葉、
そのようなものはいまはない。
いつかきっと自分の口からいおう。
すっかり白髪になった者どろが顔を見合わせて、
「全てもう終わったのだ」と。

其の六

故郷の人々がかもしも私のことを^{おも}念ってくれるのなら、
君はこのようにいってくれたまえ。
「とにかく痩せていました。
身には患いがあり、
心を安らかにすることもできないようでした」

其の七

吾が兄[従兄の蘇不疑]は酒を喜ぶ人だ。
君もまたよく飲む人である。
帰ってから一緒に一杯やりながら、
兄にこういってほしい、
「万事、邯鄲の枕である」

其の八

あの東の道……

かんしょく
寒食の日に君とたどったあの川べりの路……

その先にある魏城君^{ぎじょうくん}[蘇軾の妻]の墓、

哀しいことに、

真新しかったあの墓もいまでは草に埋もれていることだろう。

【補足】[蘇軾が最初の妻の王弗^{おうふつ}を夢に見て詞に詠んだのは9年前であった [→作品番号 05-1-029]]

其の九

いよいよ別れに臨んでまたしおしおとなるのは、

互いに道に窮しているのを泣くのではない。

あの東の道を思うからだ。

君がまたそこに行ったならば、

牛や羊が我がもの顔で出入りすることがないようにしてくれたまえ。

其の十

夢に私は君の後を追って行く……

東の道では松が青々としているであろうか。

そして我が父が住まいとしていた門に入るなら、

先祖の霊に対して永く恥入らなければならぬだろう。

其の十一

どれほど旨いものでも、

人からの施しものなら羨むに足りない。

自ら得た米を背負い、
百里の道を親のもとへと運ぶのは、
少しも苦勞ではない。
身の栄華を飾る車馬がないのを恥じて、
私は故郷への道を取らないではない。

其の十二

私は実態よりも評判ばかりが高くなって、
そのために騒動を起こして身を損なった。
君がまだ世間に知られていないことを幸いてはいないか。
穏やかな気持ちで故郷に帰ることができるのだ。
それ以上にすばらしいことがあるだろうか。

其の十三

竹の筥はこと練り絹の着物、
佳き時を得て婚を終えた後に、
私が無事であるだろうかと気になったりしたならば、
また旅の鞍にまたがって来てくれたまえ。

【補足】 [この詩から推測するに、蘇安節そあんせつには縁談が進んでいたのだろう]

其の十四

万里の向こうから、
君がまたやって来る日にも、

私はなおここで同じわび住まいだ。

君は笑わずにはいられないだろう、

石磨いしうすを回す驢馬と同じく、

私がいっまでもぐるぐるしているのを。

■ 【06-2-066】 題子明詩後

【解題】蘇安節そ あんせつの父の蘇不疑そ ふぎ あぎな しめい [字は子明] の詩に書き添えた短文。終わりに、黄庭堅こうていけん
[字は魯直ろ ちよく] の添え書きがある。

【訳文】

吾が兄そ ふぎの蘇不疑そ ふぎはかつては酒をよく飲み、二十蕉葉しじょうよう[底の浅い盃で二十杯]に及んでようやく酔った。兄と一緒に遊ぶびのは眉州びの蟆頤山まごいざん観かんの侯老道士こうらうどうしで、歌いかつ飲んでいて。そのとき、気がたげ猛り、韻をはずれ、天地の大きさも、毛筋の小ささも知らないようなありさまであった。

それから兄を見ないこと十五年しよく、蜀の政事について特に噂されるなかに、昔のような兄について聞くとはなくなった。

蜀から甥そ あんせつの蘇安節そ あんせつがきて、兄は酒を飲んでもいまでは三蕉葉を過ぎることはないという。私は年少のころは酒の杯を見ただけで酔ったようになってしまったのだが、いまは三蕉葉くらいなら飲むことができる。しかし、かつて学んだことは地を掃うようにして消え去り、世に無用な枵然からっぽの廢物となってしまった。つまり、得られるものがあれば必ず失うものがあって、二つをともに得ることはできないのである。

侯老道士どうばとは東坡じゅうしやく[蘇軾そ しんげん]の従叔の蘇慎言そ じんげんである。今年、その孫の蘇汝楫そ じょけうが進士に及第した。東坡はここで三蕉葉を飲むといっているが、これは酔中の語で、私は東坡の家に行き二人で飲んだことがあるけれど、一大觥いちだいかうを尽くすことができないうちに酔って眠ってしまった。

ろ ちよく
魯直題す。

【補足】 [この短文からもわかるように、蘇軾は酒に弱く、すぐに眠ってしまうのだ
った]

■ 【06-2-067】 浣溪沙

【解題】 十二月二日と三日に作った詞。短い序文がある。

【訳文】

十二月二日、雨の後にわずかに雪が降った。^{じょたいじゅ}徐大受知事が酒を携えて訪ねてくれた。その場で『浣
溪沙』の詞三首を作った。翌日に酒が醒めると大雪になっていて、また二首作った。

【補足】 [ここでは、最初の3首から第一首と第二首を、後の2首から第二首を訳す。
始めの2首は知事の訪れを歓迎する詞、終わりの1首は翌朝の思い]

其の一

覆塊青青麦未蘇。[土くれを覆って青々と伸びる麦はまだ蘇っていません]

江南雲葉暗隨車。[知事殿の車に随って、^{ちやうこう}長江の南からのひとひらの雲がついてきます]

臨臯煙景世間無。[^{りんこうてい}臨臯亭からの煙のような景色は、世間にまたとはないのです]

雨脚半收簷断線、^{のき} [簷から落ちる雨脚の線が半ば断たれると]

雪林初下瓦跳珠。[雪は林へと下り、すぐに^{たま}瓦に珠が飛びます]

帰来冰顆乱黏鬚。[知事殿が帰るときには、^{ひげ}鬚に氷の粒がぐっつくことでしょう]

其の二

酔夢醺醺曉未蘇。[酔っての深い暁の夢からまだ蘇ってきていません]

門前轆轤使君車。[そのときに、門前でごとごとと音がするのは知事殿の車です]

扶頭一盞怎生無。[頭をあげ、一杯の酒くらいならないことないでしょう]

廃圃寒蔬挑翠羽、[小さな畑から冬野菜の翠の羽でもつまんできましょう]

小槽春酒滴真珠。[小さな酒の槽から滴るのはあたかも真珠]

清香細細嚼梅鬚。[梅の鬚[花蕊]からの清らかな香りをよくかみしめましょう]

【補足】[其の一で使った蘇、車、無、珠、鬚の四つの韻をそのまままた用いている]

其の五

万頃風濤不記蘇、[酔って見た長江一面の波の記憶はまだ蘇ってきません]

雪晴江上麦千車。[雪が晴れ上がった長江のほどりに想見するのは、麦を満載した千台の車]

但令人飽我愁無。[人々が飽くまで食べられるのなら我が愁いはないのです]

翠袖倚風縈柳絮、[柳の絮が風にめぐるように翻る妓女の袖、それは昨夜の宴]

絳唇得酒爛桜珠。[酒闌にして桜桃の花に見まごう赤い唇]

尊前呵手鑷霜鬚。[私は凍えた手で白い髭をひねっておりました]

【補足】[最初の句は、大雪で激しく波立ったのが思い出せないほどにきれいに晴れ上がったことをいう。雪は豊作の吉兆ということから、麦を満載した車が川べりの道に連なるありさまを想像したのが第二句。そして後半は、昨夜の宴席を回想して、自分だけは鬚をひねって思案に沈んでいたという。どのような思案かというと、東の^{たかまり}坡を開拓してきたこの1年間の自己の労苦に、民衆の労苦を重ねて合せて考えていたのだろう。それが第二句の空想を呼んだのである]

■ 【06-2-068】 与陳季常

【**解題**】 陳慥 [字は季常、方山子] [→作品番号 06-2-031] に宛てた手紙。

【訳文】

昨日は、人が還ってきて、お手紙を拜見し、こちらからのものがすでに届いたのを知りました。そして、今日は馬鋪からの報せを見ますと、李常君が二十一日に光州との境を通るとありますので、いまはもう光州に入っているのでしょう。黄州知事に特別に人を出してもらって、手紙を李常君に届け、岐亭で会う約束をしたいと思っています。私は一日にすくに発てば、二日の晩にはそちらにきつと着きます。こうて会えるのなら稀有のことでありましょう。貴君におかれては、我らをもてなすために決して殺生はなさいませんように。そして李常君には貴君からもお手紙を出して迎えてくれましたら、さらによいでしょ。とにかく急ぎますので、思うところは尽きませんが、これで失礼します。

【**補足**】 [李常は1年ほど前に公務で黄州に来た折に会っていた [→作品番号 06-1-101]。やはり公務による移動の途中で黄州と光州の境のあたりを通ると聞いたので、蘇軾は岐亭の陳慥の家で三人が会えるかもしれないと思い付いたのである。二十一日とあるのが十一月で、一日、二日は十二月であろうと推測されている。しかし、12月2日には、上の詞で見たように徐大受知事の訪問を受けているので、思う通りにはなかったのだろうか]

■ 【06-2-069】 与李公択

【**解題**】 李常 [字は公択] との再会を模索していた前後に李常に送った手紙を二通見ておこう。

【訳文】

(1)門を閉ざし、来客を断って、甚だ快適に暮らしております。気術[^{きじゅつ}氣をコントロールする健康法]について簡便な方法を得ました。これは面と向かってでない^きと伝えられないものなので、私一人だけを長生きさせたくないのなら、早々にこちらにお越しください。

弟は恙なく過しておりますが、娘を喪って十月で足掛け三年となりました。このような悲しみははげしいものであるのですが、心に慣れるのは難しく、自ずと解けるのを待つしかないでしょう。^{こう}光州知事の曹九章君のお気持ちについては、私の考えも添えて、弟に手紙を書きました。きっと話が成立することでしょう。……回文の『菩薩蛮』の四首をお寄せします。お笑ください。^{りゅうはん}貴君はかつて劉攽君が作った回文の詞を見たことがありましたでしょうか。これと似たようなものを劉君が作って見せてくれたのですが、いまは失ってしまいました。劉君からは何か消息がありますか。^{そんがく}孫覺君からはきつとお手紙が来ていることと思います。いまは徐州におられるのでしょうか。

【補足】[(1) 最初の部分は李常に会いたい気持ちをちょっとひねって記したもの。^{きてい}岐亭で会おうとしたのはこの手紙の少し後であろう。(2) ^{こう}光州知事の曹九章 [→作品番号 06-1-112] の気持ちとは、その息子の曹煥と蘇轍の娘との縁談で、初めに曹九章が希望して李常に口添えを頼み、李常が蘇軾に話を持って行き、蘇軾が弟に伝えたのである。これだけの手回しをされたのでは断るわけにはいかないだろう。(3) 李常に寄せた回文の詞はこの後に訳す。劉攽 [→作品番号 05-1-064 など] は蘇軾に似て諧謔好きで、^{そんがく}孫覺 [→作品番号 05-5-059] は李常と蘇軾の共通の友人である。三人とも蘇軾に連座して処分を受けている]

(2)しげはお手紙を頂戴し、お心遣い痛み入ります。このごろはいかがお過ごしでしょうか。しげは雪が降り、農耕に勤しむ思いを慰めてくれます。昨日、船が至り、橘の実やお酒が届きました。これまでに頂戴した絹を数えると三百匹にもなります。新年の杯を交わすことは叶いそひにありませんが、いずれは

きとお会いできましよう。このように窮して退いて自ら耕す暮らしたのも、人々からいろいろな頂戴
てますのも、どれも賜り物であるのでしょう。寒さの厳しい折から、万万自重されますように。

【補足】[どうやら岐亭^{きてい}では会えなかったようで、新年にも会えそうにないところに
記している]

■ 【06-2-070】 菩薩蛮

【解題】上の手紙にあった『菩薩蛮』の4首の詞から2首を見ておこう。回文の詩は
作品番号 06-2-029 ですで見ているが、この詞はそれとは違うタイプの回文で、第一
首の最初の14文字を見ると、「柳庭風静人眠昼。昼眠人静風庭柳」で、前から読んで
も後ろから読んで同じ字の並びになっている。1文字が1音である日本語や中国語
の特質を活かした言葉遊びである。面白いことに、前の句では「風が静か」であるの
に対して、後の句では「人が静か」と主体が入れ替わる。後半では、「藕」の字が4回
繰り返されていて、本来の「藕」^{はす}の意味と同音の「偶」^{ともなう}の意味を兼ねている。また
「糸」も同音の「思」^{おもい}の意味を兼ねている。とにかく言葉の遊戯をふんだんに盛り込
んでいて翻訳には向かない。内容的には、詞が本来得手とする女性の愁いを歌ってい
る。

【訳文】

其の一 ^{かいぶん か けいおん} 回文夏閨怨

柳庭風静人眠昼。[柳の庭に風は静かで、人の眠る昼]

昼眠人静風庭柳。[昼に眠る人は静かで、風は庭の柳を吹きます]

香汗薄衫涼。[香る汗に薄^{うわぎ}い衫は涼しく]

涼衫薄汗香。[涼衫は薄^{なつのうわぎ}くて汗が香ります]

手紅氷腕藕。[手には紅をほどこし、氷のような腕は藕はすの花のように白く]

藕腕氷紅手。[藕はすの腕は氷のように涼ひやしげで紅の手を添そえます]

郎笑藕糸長。[かの人ひとは笑わらい、藕はすの糸いとのように思おもいは長ながく]

長糸藕笑郎。[長ながい糸いとはかの人ひとに藕はすうのです]

其二 回文秋閨怨

井桐双照新妝冷。[井戸端いどの二本ふた本の桐きりは照あらし合あって新あたらたな妝うわも冷ひやしく]

冷妝新照双桐井。[冷ひやしく妝うわった新あたらりのひとは二本ふた本の桐きりのある井戸いどの水みづに照あり映うつえます]

羞对井花愁。[羞はじらはって井戸いどに向むかうのは花はなが愁うれうよう]

愁花井对羞。[愁うれいを含こんだ花はなは井戸端いどで羞はじらはうのです]

影孤憐夜永。[影ひどつは孤ひとりだけ、憐あはれをもよおしつつも夜よは永ながく]

永夜憐孤影。[永ながい夜よに憐あはれをおもおもう孤ひとりの影かげがあるのです]

楼上不宜秋。[楼閣ろうかくの上うへは、秋あきにはよよろしいものではなく]

秋宜不上楼。[秋あきによよろしいのは、楼閣ろうかくには上あらないことです]

■【06-2-071】送牛尾狸与徐使君

【解題】黄州知事こうの徐大受じょだいじゅから牛尾狸ぎゅうびりの肉にくが送おくられてきたので、それに応こたえた詩。牛尾狸とはハクビシンのことであるらしい。この日は大雪であったと、蘇軾そしつの注記しゆぎが添そえられている。

【訳文】

風が飛花[雪]を巻いて帷から入ってくるなかで、

貴君が杯を手にしつつ、

この詩を見て笑ってくれるであろうか想像している。

この雪のために泥が深くなるのが心配である。

なんとも意地悪く鷄頭鶻が鳴いている。

酒の方は浅く飲むくらいにして、

牛尾狸を喜んで嘗めてみる——

天下に旨いものといえば、「通印の子魚」に「披綿の黄雀」されるが、

子魚は骨が多くていけないし、

黄雀はやたらと脂ぎっている。

心を籠めて送ってくださったこの牛尾狸は、

繊細な腕前の人が刀を磨き、

白玉を削るようにして調理してくれたまたとない絶品である。

【補足】〔(1) 要は、珍しい肉を送ってくれたことへの謝礼であるから、もとより味
わい深い詩というわけにはいかない。「鷄頭鶻」やら「通印の子魚」やら「披綿の黄
雀」やらの珍品を持ち出して、知的興味を誘おうとしたのだろう。鷄頭鶻はシギの一
種で、蜀の人々はその声を「泥滑滑」と聞きなしていると、蘇軾の注記がある。「通
印の子魚」とは、子魚という美味な魚があり、とりわけ額に印を押したように見える
のが旨いという。「披綿の黄雀」とは、白い綿を被ったように脂身がたっぷりの鳥の
肉である。(2) このころに『四時詞四首』という作品があって、女性の愁いを四季ご
と詠んでいる。徐大受のもとにいる女性のために作ったのであろうか、優美な詩では
あるが、内容に乏しいので訳は割愛する〕

■ 【06-2-072】 雪後到乾明寺遂宿

【解題】 この冬は雪がよく降ったようだ。これは雪の日に乾明寺を訪ねて一泊した翌朝の詩。乾明寺 [→作品番号06-1-032] は東の坡たかまりからさほど遠くないところにあった。

【訳文】

乾明寺の門の外は、
 馬も驚くほど光に満ちている。
 階段から先は下駄の痕もなく、
 私が一番先に行く。
 皇城の庭園に誤って入ったかのように、
 一面に白い花が咲き、
 皇城の宮殿をとこしえに照らすかのように、
 月の光が満ちている。
 この純白の至上の潔癖さを、
 牛も羊もまた損なっていない。
 新たに晴れ上がったのを鳥たちが喜んでいる。
 今朝私がここでこしているのは、
 軒端の竹から雪解けの水が滴り落ちる音を聴いてみてはと、
 寺の僧が勧めてくれたからである。

■ 【06-2-073】 次韻陳四雪中賞梅

【解題】 陳慥ちんぞう [方山子ほうさんし] [→作品番号 06-2-068] が雪の中で梅を賞玩する詩を送ってきたので、それに次韻した。

【訳文】

歳としの終わりには、
雪と梅が新たな装いを競い合い、
酒が熟するにつれて貴君の詩も熟してゆく。
梅だけが独り咲くありさまは人の目を驚かせ、
花びらが地に落ちれば、隠者がおぼろ臥す趣がある。
とほとほ杜甫も老いを嘆いただけでなく、
春に先んじて咲く梅を見るときには詩を詠んだ。
三度雪を見ると、翌年は豊作になるとか。
ならば、人生の安楽を高らかに歌ってもよいであろう。

【補足】[雪は豊年の吉祥であるから、作品番号06-2-069で「しばしば雪が降り、農耕に勤しむ思いを慰めてくれます」と書いていたのである]

■ 【06-2-074】 書雪

【解題】このころに書いたと思われる短文があるので見ておこう。

【訳文】

今年、こう黄州では大雪が降り、一尺以上も積もった。私は東の坡にちょうど麦を植えたので、この雪を得ておろん喜んだのだが、他所の家を見れば、薪もなく米もなく、雪に苦しんでいる者がいる。そのため
にあれこれ思案して夜も眠れなくなった。悲しいことである。

【補足】[この一文は、こう黄州に赴く途中で雪に会い、「民衆のために悲歌する」[悲歌為黎元]と詠んだ [→作品番号06-1-005] のを思い出させる]

■ 【06-2-075】江神子

【解題】鄂知事がくの朱寿昌しゅじゅしやう〔→作品番号本章 06-1-096 など〕に送った詞。短い序文が付いている。

【訳文】

大雪しゆじゆしやうのときに朱寿昌知事おものこと懐おもった。それはきっと知事が私のことを念おもってくださっているからたと知り、
『江神子』の詞こうしんしを作って寄せる。

黄昏猶是雨織織。たそがれ〔黄昏どきは、まだまだしとしと雨が降っていました〕

曉開簾。すだれ〔曉に簾を開けたのです〕

欲平檐。のき〔檐まで平らになろうかとしていました〕

江闊天低、かわ〔広い江、低い天〕

無処認青帘。すだれ〔酒店の青い旗はどこにも認めることができません〕

孤坐凍吟誰伴我、〔独り座って凍てつく声で吟じれば、誰も伴う者はなく〕

堦病目、〔病んだ目をこすり〕

然衰髯。すげ〔衰えた髯をひねるのです〕

使君留客醉厭厭。おも〔知事殿は客人を留め静かに酔い続けます〕

水晶塩。すいしゆ〔水晶のような澄んだ酒〕

為誰甜。あま〔知事殿のためのよい味わい〕

手把梅花、〔梅の花を手に取り〕

東望憶陶潜。とうぞんめい〔東を見て思うのは陶淵明〔すなわち蘇軾〕のこと〕

雪似故人人似雪、[雪が人に似るのか、人が雪に似るのか]

誰可愛、[愛すべきなのでしょう]

有人嫌。[人を嫌うのでしょうか]

【補足】[(1) これは、^{しゅじゅしょう}朱寿昌の側に立って詠んでみたらという趣向の作品。(2) 終わりの三句は、雪は愛すべき存在でありつつ、人の行き来を妨げる存在でもあるということから、人の心理にも二面性があるということを含意しているようだ]

■ 【06-2-076】 蝶恋花

【解題】^{はんたいりん}潘大臨 [字は^{あざな}邠老] を送るとの添え書きがある詞。潘大臨は酒店を営む^{はんかく}潘革の孫である。潘革には^{はんこう}潘鯁 [字は^{しょうげん}昌言]、^{はんへい}潘丙 [字は^{げんめい}彦明] [→作品番号 06-2-003 など]、^{はんげん}潘原 [字は^{しょうそう}昌宗] [→作品番号 06-2-053] の息子がいて、^{はんたいかん}潘鯁の息子が^{はんたいかん}潘大臨と^{はんたいかん}潘大観である。潘大臨はこの年の秋に行われた科挙の地方試験に合格し、二次試験を受けるために上京するので、その送別の詞を蘇軾が作ったのである。一家から一人でも合格者が出れば社会的地位ががらりと変わるので、潘革は酒店の稼ぎを子弟の教育に注ぎ、何とかして一家から科挙の合格者を出そうとしていたのだろう。蘇軾の家ももとは絹を扱う商人であったろうと推測されていることから、潘の家に親近感を抱いていたのだろう。

【訳文】

別酒勸君君一醉。[別れの酒をあなたに勧めましょう、まずは酔いなさい]

清潤^{はん}潘郎、[潘さんはまことによい男]

又是何郎壻。[あの何晏だっかないませんよ]

記取^{かんざ}釵頭新利市。[釵をお買いになったのは知っていますよ]

莫将分付東隣子。[まさかそれをお隣さんにあげたりしませんよね]

回首長安佳麗地、[思い出せば、繁華な都で]

三十年前、[三十年前のこと]

我是風流帥。[わたしは風流の総大将でした]

為向青樓尋旧事、[色街にいてそのころのことを聞いてみなさい]

花枝欠処余名字。[花の枝を折り取った向こうにわたしの名が記してありますよ]

【補足】 [(1) この詞は、詞本来の世界である男女の情愛を下敷きにして、楽しく潘大臨^{だいろん}を励ましたものなのだろう。戯れの作である。(2) 前半は、晋の時代^{しん}に潘岳^{はんがく}という美青年がいたことを踏まえて、潘大臨を讃えたもの。(3) 後半は、都の色街で三十年前にその名を轟かせたと歌っているは、実は蘇軾が科挙に合格したことをいっているのだろう。つまり、潘大臨も蘇軾と同じように合格してたちまちその名を天下に知られるようになるというのである。(4) このころに李廌^{りたい あざな} [字は方叔] [→作品番号 06-2-039] が黄州^{こう}にごく短期間だけきて、蘇軾が詩を贈ったとされているが、その詩はいまに伝わっていない。李廌は身内の不幸によってこの秋の科挙の一次試験は受けなかったようだ]

■ 【06-2-077】 与仏印

【解題】 廬山^{ろざん}の仏印禪師^{ぶついでんぜんじりやうげん}了元 [→作品番号 06-1-080] からまた使いの者がきたので、それへの返事。

【訳文】

お使いの者がきて、忝^{かたじけな}くも重ねてのお手紙を頂戴しました。お心遣いの深さに感じ入っております。まさ

に十二月の雪の季節、山中はさぞお寒いことでありましょうたいう。法体の安らかであることを祈っております。
廬山とは長江を間に挟むだけありますのに、道場に詣でる縁がなく、お声に接することができません。ただ馳せ赴くことを想うばかりです。

■【06-2-078】与滕達道

【解題】とうげんはつ 滕元発 とうほ [滕甫、あざな 字は達道] [→作品番号 06-2-010] に宛てた手紙。

【訳文】

しよく 蜀からきた僧は貴君が書いてくれた楷書の大字を獲て帰りました。お蔭で私も胸を張ることができ、大いに感じ入っております。

しょうしょうろう 蕭相楼での詩は前に見えて、弟が楼の雄傑を説き、貴君の風烈を称えるのを聞きました。蕭相楼についての文書を記すのは名誉なことではありますが、私の拙い腕に適うものではありませんし、罪を得てからは敢えて文章を作ることはしていません。『経蔵記』は仏教に関連する語ばかりで、あれこれ詮索されるような畏れはないので、特に書いた次第です。蕭相楼の文はさらに何年か待って作るというのではいかがでしょうか。

ちゅうしゆ 仲殊の氣訣は詳しく知りたいもので、もしも伝授を許されたなら、その賜りものは莫大でありましょよぎう。仲殊は長らく廬山に遊ぶことを望んでいたと聞きましたが、その後はどうしているのでしょうか。もこちらを過ることがあるなら、望外の喜びです。……

【補足】 [(1) しよく 蜀からきた僧とは悟清 [→作品番号 06-2-010] のこと。滕元発の揮毫を得て成都に帰ったのである。(2) しょうしょうろう 蕭相楼の詩は作品番号 06-1-051 で見ている。蘇軾は詩文をもってまた罪に落とされるのを警戒して、滕元発からの執筆の依頼を断ったのである。(3) きけつ 氣訣はきじゆつ 気術と同様で、体内にき 気を正しく循環されることで長生を得ようとするもの。仲殊は当時名の知られた道人で、10年後に会うことになる。(4)

蕭相樓の記の執筆は断っているが、このころに滕元発に頼まれて、遙かに政治的な文章を記している。宋は西夏国との戦争を始め、緒戦の勝利をおさめたものの、反撃にあつてたちまち苦境に陥ってしまった [→作品番号 06-2-057]。戦争のすみやかな終結を願う文章を滕元発のために代筆して皇帝に提出したのである。それは戦争を人の病に譬え、故事を織り込んで巧みな構成であるのだが、訳は割愛する]

■ 【06-2-079】 陳太初尸解

【解説】 上の手紙にあった仲殊は黄州には現れなかったが、道士の陸惟忠がこの年、黄州を訪問している。陸惟忠は眉州眉山県、すなわち蘇軾と同郷の人。陸惟忠は自作の詩を示したり、丹薬の作り方や養生の法について教えたりした。そのことについて15年後に記した文章があるので見ておこう。

【訳文】

私は八歳で小学に入り、道士の張易簡を師とした。童子およそ百人がいたが、師は私と陳太初ばかりをいつも褒めていた。陳太初は眉山の市井の子であった。

私は成長するにつれて学問がますます進み、ついには科挙にも制科にも合格した。一方で陳太初は田舎の小役人になった。

その後、私は黄州に流され、そこに眉山の道士の陸惟忠が蜀から訪ねてきた。あれこれ話すなかで、「道を得た者に陳太初がいます」というので、詳しく尋ねてみると、我が同学の陳太初その人であった。

昨年[紹聖三年[1096年]]、私は惠州でまた陸惟忠に会った。陸惟忠はこのようにいった。

「陳太初はすでに尸解しました。蜀の人の呉師道が漢州の知事であったときのことで、陳太初は初めて知事に会いにきて、しばらくその客人となっていました。ちょうど元日の朝に、陳太初は知事に衣食と餞別の錢を求め、別れを告げました。陳太初は受け取ったもの全てを町の貧しい人に与えると、

城門の下に座り、そのまま死んでしまいました。それを聞くと、知事は役場の小使いに、亡骸を担ぎ出して野原で焼くよう命じました。小使いは亡骸のもとに行き、『このクノ道士め。なんだって元旦からこの俺さまに死人を担がせたりなんぞさせるのだ』と罵りました。すると、陳太初はにやりと笑い、『おまえを煩わせたりはせん』^{きんがんきょう}といって、門から金雁橋のたもとまで歩き、そこで座り、改めて死にました。小使いがそれを焼くと、もうと立ち昇る焰と煙の中に、くつきりと陳太初の姿が浮かびあがりました。見物に出た町中の者がそれを見たのです」

【補足】[この文章は幾つかの興味深い内容を含んでいる。(1) 蘇軾が8歳で張易簡^{ちやういかん}の寺子屋に入ったことは、すでに作品番号 01-2-002 などで見ている。(2) そこに陳太初^{ちんたいしよ}という優秀な同窓生がいて町の庶民の子であった。眉山^{びざん}の人々は教育に熱心だったのだろう。(3) 蘇軾が制科にも合格して超エリートとなった一方で、陳太初は小役人[原文は「小吏^{しやうり}」]になった。科挙に合格した高級官僚は地方官となっても原則3年の任期で各地を転々とする。下級の役人である吏人^{りじん}は同じ土地に留まる。庶民にとっては吏人になれるなら実に結構なことであるのだが、高級官僚と吏人とでは社会的地位に雲泥の差がある。陳太初には何かしら不満があったのか、思うところがあって、せつかくの職を棄てて道士^{どうし}になった。(4) 道士は社会のしがらみの枠外に出て自由に移動することができた。その代わり、衣食や住まいを得るには、地方官や庶民や社会のいろいろな階層の人々の心をうまく掴む必要があった。それで、いかさまな呪い事をしたり、インチキ薬を売ったりする道士が少なからずいたのである。陳太初はきちんとした教育を受けていたから、知事クラスの人を相手にして道教の教義をきちんと説くことができたのだろう、呉師道^{ごしどう}のもとにしばらく居候をした後に死んだのだ。知事としては、城門の下で元旦に死なれたのはいささか迷惑なことであったのだろう。(5) 道士の最終的な目標は、生死の枠外に出て仙人になることだ。それを達成する一つのやり方として、現世に死骸を遺して自分は昇天する尸解^{しかい}というものがあった。

尸解に関する古い伝承は数えきれないほどあるが、宋代そうだいにおいても衆人の目の前で尸解が行われたというのはおもしろい]

■【06-2-080】寒熱偈

【解題】寒と熱に関する思索を記した短文。黄州の夏を蘇軾は特に暑いと感じたようで、昨年もひどい暑さを嘆いていたが [→作品番号 06-1-068]、この年も酷暑であったところに記している。

【訳文】

今年は大熱で、熱さが八十日余りにわたり、物も我も同じ病み、この熱さは虚しいものではなかった。まさに熱いときはまた涼しくなるとは思えなかったのだが、すでに涼になると、熱さは果たしてどこにいったのかと思うのである。およそ世の寒と熱は交互に顛われ、熱がなくなると、涼が何かに従って立ち、私は涼しさがまたあると認めるのである。後に涼しさが改まって、また熱さが還ってくる。つまり、寒と熱は、それぞれが互いにあるときはないという関係になっている。

世のすべてこのように分かれていて、心に去来する塵によって浮想が生じるのも同様で、あるとかないとかで迷いが生じるのである。一方で、火が木を焼くように、また生じることがないものもある。火によって木は炭になり、炭は灰になり、灰はすっかりなくなってしまう。はてさて、これはいかなることなのかと、我が弟に問うたのである。

これは私が黄州で戯れに書いたもので、江夏の李康年こうか りこうねんがこれを持ち去った。それから七年後に、また李康年に都で会って、これを出してきた。茫然と夢の中の語のようである。

元祐げんゆう ぼしん戊辰三年三月三日。

【補足】 [(1) この短文 [偈] の、「世のすべて」以降は意味が十分にわからないので

いつも「ずっぱ訳」である。(2) 李康年 [字は楽道] は篆書に詳しい人であったとい
う]

■【06-2-081】書孟東野詩

【解題】馬正卿 [→作品番号 06-2-026] に贈った短文。

【訳文】

元豊四年、馬正卿と黄州の東禅で飲んだ。酔って後に、孟郊の詩を誦じた。

我亦不笑原憲貧。[我も亦た原憲の貧を笑わず]

この句に、思わず笑ってしまった。孟郊には原憲を笑える理由はないからである。

このことを書いて馬正卿に贈る。馬正卿はまだまだ孟郊を笑いきれないのである。

【補足】[(1) 東禅とは作品番号 06-2-003にある東禅荘院のことであろうか。(2) 孟郊について作品番号 05-4-009などで見ている。蘇軾は孟郊の詩をさほど高くは評価していないが嫌いではなかった。(3) 原憲は孔子の弟子で、孔子の死後、非常な貧乏でありながらも学問に励んだことで知られる。終わりの部分はかなりひねっているのでわかりにくい。孟郊よりも馬正卿の方が腹が座っているといたいのだろう]

■【06-2-082】与任德翁

【解題】任伯雨 [字は徳翁] に宛てた手紙。任伯雨は「大任」といわれた任孜 [→作品番号 06-2-037 など] の子である。

【訳文】

……貴君の甥がこられて手紙を受け取り、感慨無量であります。御尊体の佳勝であることを審らかに

し心が慰められます。お二人の御子息が科挙の地方試験に合格されたと聞き、喜びの余り、我が衰病の身も奮い立ちます。きつ天下に冠たる士大夫し たい ふとなって、任氏にんの名を慕うのは蔡州さいの人々だけではなく、陳慥ちん ぞう君が帰ってくれば、さらにまた詳しく知ることができるでしょうが、小四君しょう し くん〔任にん 伯はく 雨う〕がきゅういるので、任にん 伯はく 雨う殿は亡くなっていないようなものです。近頃のあれこれは綴り尽くせません。お会いする機会はなかなかありませんが、万万御自愛されますように。

【補足】〔(1) 科挙の試験結果は士大夫し たい ふにとって一大関心事であった。秋の地方試験の合否が何かと話題わだいになっている。任伯雨にん はく うのところでは二人の息子が合格したのだった。(2) 蔡州は「小任しょう にん」といわれた任伯にん はく うが退隠後に住むと定めていた場所で〔→作品番号06-1-006〕であったから、蔡州の人々が任氏を慕っているのは前からであるけれど、いずれ天下の人々がそうなるといっているのである。(3) 陳慥ちん ぞうの名が挙がっているのは、任伯にん はく うの四男がたぶん蔡州にきていて、その手助けをしていたのだろう〕

■ 【06-2-083】 与楊元素

【解題】楊よう 繪かい〔字は元素あざな げん そ〕に宛てた手紙。楊よう 繪かいはかつて杭州こうで親しくした人〔→作品番号06-2-054など〕。

【訳文】

筆が凍り、写そうとしてもまぐ字になりません。弟からは近頃も手紙がきて、恙なきことを知り、何百里も離れているような気がしません。ただ、手紙が届くまでには半月ほどかかります。

いろいろ秘蔵の話を記していただき、感嘆してやみません。最近になって知り合いが貴君ほんの編集した『本事じ きょく し曲子』を写したものを拝見しました。広く奇聞が集められていて、閑居の身の賑やかとなります。竊ひそかに思いますに、さらに知人たちからそれぞれ知るところの話を集めたなら、もっと手広く逸話を載せることができるようになるでしょう。そこで三件ほど記して献じます。さらに録れん たく取されて百四十篇ばかりにもなりま

したなら、十分でありますか。

【補足】 [ここに^{ほん じきよくし}ある『本事曲子』は詩詞に関する逸話を集めた著作である。原本は失われ、数篇だけが他の書物に引用されるなどして残った [→作品番号 06-3-023]]

■ 【06-2-084】 与趙昶晦之

【解題】 趙昶^{ちようちよう あざな かいし} [字は晦之] [→作品番号 06-1-106] に宛てた手紙。

【訳文】

お教えてください通りに、患難の中にあっておたおたすることもなく過ごせるのは、脳みそのない愚人であるか、鹿か豚か、はたまた木か石とも異なるところがないものでありましょう。それがかねてから夢にも見るような道^{みち}を得た者なのでありましょうか。

かつて得ていた蜀人^{しよくじん}の蒲永升^{ほ えいしょう}の山水四軸は近年の名筆であります。蒲永升はすでに亡くなってしまいましたが、贅沢にも書齋にこの画を掲げております。

ここの風土は美しく、訴訟事は少なく、優遊^{ゆうゆう}と歳を終えて、これ以上何を求めましょうか。私はこのことをはなはだ楽しみ、この地に安らかにいて懐^{おも}いを忘れ、まさしくもとより黄州^{こう}の人であって、一度も出仕していないかのようにあります。

【補足】 [(1) 前半は、反語的なユーモアなのだろうか。よくわからないままに訳した。(2) 蒲永升については作品番号 06-1-107 で見ている。水を描いた蒲永升の画を飾って楽しんでいたのである。(3) 最後は、すっかり黄州^{こう}の人になったといている]

■ 【06-2-085】 与杜孟堅

【解題】 杜沂^{と ぎん あざな どうげん} [字は道源] [→作品番号 06-2-018] の子^{と でん}の杜伝^{あざな もうけん} [字は孟堅] に宛てた手紙。

【訳文】

私のこのごろの様子からすると必ずしも罪は深くないのでありましょうか。郡中のもろもろは変わりがなく、同僚とともに遊んで、かつて壁に題した詩を見ると、いつも悵然とした想いになります。貴君は何事もなく、きっと著述するところが多くあることでしょう。拝見できないのが残念であります。今年は近い人々が黄州に来てくれたりし、あれやこれやとあって、去年の独り寂寞としていたのとはまるで異なっています。

【補足】[上の趙昶ちやうちやうへの手紙とともに、蘇軾は1年前とはかなり異なる心境で年末を迎えたことがわかる。自ら耕すことで精神の充実を得たとすると、馬正卿ばせいけい [→作品番号 06-2-081] の果たした役割は大きく、我々が蘇軾の黄州時代の詩文を味わい深く読めるのも馬正卿のお蔭であるのだろう]

■ 【06-2-086】 記夢回文二首、并叙

【解題】 夢の中で回文の詩を詠んだ。その序文だけを見ておく。

【訳文】

十二月二十五日、大雪が晴れ上がった。雪を解かした水で小団茶しょうだんちゃを煮て飲ませてもらった夢を見た。傍らで女性が歌っていた。私は回文の詩を作って女性に示した。夢から覚めると、「乱点余花唾碧衫」[乱点らんてんして余花よか 碧衫へきさんに唾だす]の句を記憶していた。袖に誤って唾をかけられた趙飛燕ちやうひえんが、ざりととりなした故事を用いたものである。これに続けて二首の絶句を作った。

■ 【06-2-087】 三朵花、并叙

【解題】 この年の終わりに「異人」いじんを詠んだ詩の序文だけを見ておこう。

【訳文】

ほう 房州の副知事の許安世きょあんせいからの手紙にこのようであった。

「吾が州いじんに異人がいます。常に三朶花さんたか[三本の花の枝]を頭に戴いています。その姓名を知る者はなく、郡の人々は『三朶花』をもってその名としています。よく詩を作り、どれにも神仙こころの意がこめられています。また自分の姿をよく画に写します。それをある人から得ました」

許副知事はその一枚を送ってくれるというので、この詩を作った。

【補足】[その詩は碩学の注釈家も理解不能としている。例えば、対句を成り立たせるために、「三朶花」のペアになる語として「一宿覚いちしゆくがく」という仏典にある特殊な用語を引っ張ってきているのは、蘇軾の恐るべき語彙力に脱帽するしかないとしても、「一宿覚」をどのような意味合いで使っているのか、いくら頭をひねってもわからないのである]

第6章 赤壁の賦——黃州

[第6章その三]

げんほう 元豐5年 [1082年]、そしよく 蘇軾47歳。

■【06-3-001】書歐陽公黃牛廟詩後

【解題】蘇軾の黃州生活は3年目に入った。年明け早々の1月2日に訪問客があり、話が歐陽脩に及んだ。そのことを記した文章。

【訳文】

右は歐陽文忠公[歐陽脩]が峽州の夷陵県の知事になったときに作った『黃牛廟の詩』である。この詩について、私はかつて歐陽公からこのように聞いたことがある。

「私が西京留守推官ならびに館閣校勘であったとき、私と同じ年に科挙に合格した丁宝臣[字は元珍]君がたまたま都にきていて、こんな夢を見たと言った——丁君は私と一緒に舟に乗って長江を遡り、ある廟の中に入り、本堂の下で拝謁した。丁君が先で私が後から付いて行こうとしたので、丁君はひどく遠慮した。私はそのまま押し通した。堂上で拝すると、神像が立ち上がり、私を近くに召し寄せ、神は私の耳元でしばらく語った。丁君は心ひそかに、神もまた世間と同じ歐陽脩を特別扱いするのだらうと思った。廟の門を出ると、そこに片耳しかない馬がいた。

そのような夢を丁君は見たといったのだが、私も丁君もそれが何を意味するのかわからなかった。それから数日足らずで、丁君は峽州推官に、私は夷陵県知事に、ともに左遷となった。

私と丁君は一緒に任地に向かい、先の夢のことは忘れていた。三峡を遡っていたある日、黃牛廟に詣てたところ、門に入って丁君は何やらぼんやりとした気分になった。そして、以前の夢と少しも変わらないことが起こった。私は県知事であったから立場として丁君の後に従わなければならなかった。門の外

に石を彫った馬があり、耳が一つ欠けていた。それを見て二人は大いに驚いた。

私は廟に一つの詩を書き留めた。その中に『石馬繫祠門』[石馬は祠門に繋がれる]の句があるが、片耳のない馬がいることは夢ですでに知っていたのである」

元豊五年、私は黄州に謫居していると、宜都県の知事となった朱嗣先君が立ち寄ってくれた。二人で(これから朱嗣先が行くことになる)三峡の風景について語っていて、たまたま話がこのことに及んだ。

朱知事は(欧陽脩の)『黄牛廟の詩』を書いて「いと私にいい、

「それを石に刻んで黄牛廟に置き、進退出入は人の力だけによるものではないということ、人に示したいと思います。耳が一つしかない馬のごときが欧陽公の事に関わっているはずありませんが、事は大きく前から定まっているものなのであります。公は神に対して礼を尽くしましたが、それでも詩の中ではその廟を『淫祀』であるといっています。公は信念の人で、神に対しても決して阿らないことがわかります」その言葉の味わい深さに感じてこの文章を記すことにした。

正月二日、眉山の蘇軾書す。

【補足】[(1) 宜都県も夷陵県ともに峡州に属し、朱嗣先はこれからの旅の途中で黄牛廟を通る。それで、蘇軾の書を石に刻んで廟に置こうといったのである。(2) 欧陽脩が夷陵県に左遷されたのは、46年前の景祐3年[1036年]で、30歳だった。左遷の原因は范仲淹を弁護したことだった。范仲淹は当時の宰相を強く批判したことで都から追放され、范仲淹の行為を擁護した余靖と尹洙も左遷となった。本来ならこのようなときに朝政を正す役目を担っているはずの高若訥が宰相の顔色をうかがって沈黙を決め込んでいるのは卑劣であるとして、欧陽脩は激しく高若訥を批判し、宰相の怒りを買って放逐された。こうした情勢を見て、蔡襄は『四賢一不肖の詩』[四賢は范仲淹、余靖、尹洙、欧陽脩の4人、一不肖は高若訥]を作り、天下に大いに流布した。蔡襄は蘇軾が本朝第一の書家とした人[→作品番号 06-2-013]である。この一連の追放劇は奇しくも蘇軾が生まれた年の出来事であった。なお、蘇軾が夷陵県にあ

る欧陽脩の旧居を訪ねて詠んだ詩を作品番号 01-1-039 で見ている。(3) あやしげな民間伝承の神を祭った祠を「淫祀」といい、その神が民衆を惑わせるようなことをした場合 [もちろん神がするのではなく、神を利用する人間がするのだが] には、神の崇りなどを恐れず、「淫祀」を毀つのが社会に責任のある士大夫の役目であるとされていた。その実例を陳慥 [方山子] [→作品番号 06-1-015] の父の陳希亮 [字は公弼] に見ることができる。陳希亮は若い頃に地方の長官であったときに、数百の「淫祀」を壊して 70 人余りのまじない師を追放したと、蘇軾は『陳公弼伝』 [→作品番号 02-3-015] の中で記している。なお、蘇軾が『陳公弼伝』を書いたのは黄州にいた間のことであったと推測されている]

■ 【06-3-002】 与陳季常

【解題】 陳慥 [字は季常、方山子] に与えた手紙。

【訳文】

新たな歳を迎え、心からお祝い申し上げます。今日はやや晴れておりますが、いかがお過ごしでしょうか。いつごろ町に来られるのでしょうか。昨日、季常君から手紙がきて、上元のころに出発するのことで、こちらに来られるのは月末のあたりでしょうか。そのときに貴君も来ていただけますか、どうでしょうか。こちらの普請は上元にはまだ終わっていないでしょう、私は外出がままならない身でありますから、上元の夜遊びのお供はできません。……正月二日。

【補足】 [(1) 蘇軾、陳慥、季常の三人で会うことは年末には実現しなかったようだが [→作品番号 06-2-068]、蘇軾は次の機会を期待した。ある人の手紙に、蘇軾は黄州において季常と複数回会ったように記しているので、作品番号 06-1-101 で見たときのほかにも会っていたのだろう。ただし、そのことを裏付けるような詩文は残されてい

ない。(2) ここにある普請とは、東の^{たかまり}坡で新たな建物を作ろうとしていたこと指し、後に詳しく見る]

■【06-3-003】祭堂兄子正文

【^{げんほう}解題】元豊3年9月に亡くなった従兄の^{そ ふ ぎ あざな しせい}蘇不欺 [字は子正] [→作品番号 06-1-103]を祭る文を1月3日に作った。郷里に帰って蘇不欺の葬儀の列に加われなかったのを残念に思い [→作品番号 06-2-048]、遠く^{こう}黄州の地で蘇不欺の靈にこの文を捧げたのである。

【訳文】

^{げんほう}元豊五年、^{じん ぼ}歳は壬戌、^{せきじゅ こうしゅうだんれんふくし}正月の三日、弟に当たる貴授黄州団練副使蘇軾は謹んで酒と果物を供え、^{そ ふ ぎ たいけい}亡くなった蘇不欺大兄の靈に申し上げる。

昔、我が伯父^{そ かん}[蘇渙]は身を修め、家の内での振る舞いは郷里の手本とされた。剛ならず柔ならず、武功あり文徳あり、喜びも^{いか}慍りも外に出すことがなかった。十一の官職を歴任し、伯父が治めた土地の民衆は、今に至るも伯父のことを思って泣くという。伯父の立つありさまを見るならば、^{じんじゅ}仁者は勇敢で雷にも動揺しないといわれる、まさにそのままであった。伯父の長男である我が大兄は^{ゆう}優にして毅で、甚だ伯父に似ていた。人の中にあつて^{きんじゅ}厳肅でありつつおどろとして、慎み深くて汚点がなく、顔に喜びが見えていた。人にはそれぞれの心があり、酸っぱさと塩辛らさは好みを異にし、赤と白は合わないものであるが、我が大兄は鷹揚で、衆人から賢者として尊ばれ、よろしくないといわれることがなかった。天は鼯鼠をしないといふけれど、富貴も長寿も我が大兄には無縁であった。それを不幸とはいふまい。我が大兄がそのようであったのは疑いもなく定めであったのだ。

私は黄州に移り、老いと病に見舞われ、ここで土地を耕す身となり、葬列に加わって我が大兄の棺を撫でることができず、残念に思い続けている。いずれ私も先祖伝来の墓所に眠り、木々の高く聳える

下で、我が大兄と墓を並べたいと思う。

もろもろの祖先、平生から好としてきた人々は年々我が大兄とともに亡くなり、私だけが生きて異なる場所にいる。このよに言えば悲しくてならない。千里の向こうに一樽を捧げる、我が大兄の靈よ、この酒を辞退しないでくれたまえ。

嗚呼 哀しいかな。

■ 【06-3-004】水竜吟

【解題】かつて黄州の知事であった閻丘孝終〔字は公顛〕のことを夢に見ての詞。序文がある。閻丘孝終とは蘇州で会っていた〔→作品番号 04-3-036〕。

【訳文】

閻丘孝終はかつて黄州の知事であった。棲霞楼を作り、それはこのあたりで優れた景勝地となった。元豊五年、私は黄州にて、一月十七日、夢に小さな舟で長江を渡った。流れの中ほどで見回すと、棲霞楼から歌と音楽が聞こえてきた。舟の人がいうには、閻丘知事が客人と酒宴をしているのであると。覚めて、不思議なことと思い、この詞を作った。閻丘知事はすでに退官して蘇州にいる。

小舟横截春江、〔小さな舟で春の江を横切り〕

臥看翠壁红楼起。〔臥して見るのは翠の壁と紅い楼閣〕

雲間笑語、〔雲の間から笑い声〕

使君高会、〔それは知事様のすてきな集まり〕

佳人半醉。〔佳い方々が半ば酔っておられるのです〕

危柱哀絃、〔高いところからの哀しげな絃〕

艷歌余響、〔艶やかな歌の余韻〕

邊雲滌水。[雲が止まり水が巡ります]

念故人老大、[思うのは、かの人は老いても]

風流未減、[変わらぬ風流]

独回首、[独^こり首^めを回^{めぐ}らせます]

烟波裏。[霧と波の内]

推枕惘然不見、[枕をぼんやりと推して]

但空江、[空しく見えません——江^{かわ}も]

月明千里。[千里にわたる月の明かりも]

五湖聞道、[聞くのは]

扁舟歸去、[舟に乗って湖のほとりに去ってしまったと]

仍携西子。[美しい人も携えて]

雲夢南州、[雲^{うん}夢^{ぼう}の南^{しま}の州]

武昌南岸、[武^ぶ昌^{しょう}の南^{なん}の岸]

昔遊応記。[昔遊ばれたところを覚えておられますか]

料多情夢裏、[きっと、情の深さのあまり夢のうちに]

端来见我、[私に会いに来てくださったのでしょ]

也參差是。[たぶんそうなのでしょ]

【補足】 [(1) 棲霞楼^{せい か しょう}については作品番号 06-2-049 で見ている。(2) 夢に人が現れるのは、その人が自分のことを深く思ってくれているからだ、昔の人々は考えていた。あたかも恋する人を夢に見たかのような気分で歌った詞である]

■ 【06-3-005】 正月二十日、与潘、郭二生出郊尋春、忽記去年是日同至女王城作詩、

乃和前韻

【解題】蘇軾は毎日のように長江に近い臨臯亭から東の坡へと通い、土地の人々にとってその姿はごく見慣れたものとなり、潘丙や郭遵や古耕道といった人々と連れ立って歩くのも、水戸黄門と助さん格さんではないけれど、すっかり黄州の風光に溶け込んだものとなっていた。この詩の題は「正月二十日、潘丙、郭遵の二人と郊外に出て春を尋ねた。たちまち思い出したのは、去年のこの日も同じようにして女王城に至って詩を作ったのだった。そこで同じ韻を用いてその詩に和した」。1年前の詩は作品番号06-2-003で見ている。

【訳文】

東の風[春の風]はまだ町の東の門から入ってきていない。

我等は去年尋ねた春をまた尋ねようと、

東の門から馬を走らせた。

我等は秋の渡り鳥のように、

義理堅く同じ日にまたきたのだけれど、

事は春の夢のようなもの、

去年のことは痕かたもなく消え去ってしまっている。

江沿いのこの田舎町の酒は濁っているが、

春風のもと、三杯も呑めば十分に酔いほどの濃さがある。

村の老人たちは何たか蒼い顔をしているけれど、

ひとたび笑うと温かな表情になる。

すでに私は皆と約束をした、

毎年毎年ここでこの日に会おうではないかと。

だから、都の友人たちよ、

どうか私を呼び戻そうなどとはしないでくれたまえ。

■【06-3-006】是日、偶至野人汪氏之居、有神降於其室、自称天人李全、字德通。善篆字、用筆奇妙、而字不可識、云、天篆也。与予言、有所会者。復作一篇、仍用前韻酒渴思茶漫扣門、那知竹裏是仙村。

【解題】前の詩の蒼い顔あおの老人とは、浅黒く日焼けし、一見するとやつれた陰気臭い感じの農民をいうのであろう。その一人、汪若谷おうじゃくこくの家に案内され、あやしげな神様に会って詠んだのがこの詩。詩の題は「この日、たまたま野人やじんの汪氏わんしの家に至ると、その一室に神が降り、自ら称するに、天人李全てんじんりぜんで、字は德通あざなとくつうであると。篆字てんじが書けるとして、奇妙に筆を用い、しかし、その字は判読できない。神はこれは『天篆てんてん』であるという。私と話をし、なるほどと思うところもあった。前の韻を用いて一篇の詩を作った」。一年前にも廁しこしんの神「紫姑神」に会っていて [→作品番号 06-2-001]、土地の人々は蘇軾と神との面談の場を設けることに熱心であったのだろうか。

【訳文】

酒を飲んで喉の渴き覚え、

茶が乱れて、適当にそこらの門を叩いてみた。

よもや竹の林の中にある村が、

仙人の住まうところであるとは知りしなかった。

神から聞かされたのは、

亀の甲羅を使って占う天の言葉にも通じているのだと。

筆から竜が躍り出るような墨の痕を見せてもらいました。

笑うべきは、

都から追放されてすっかり憔悴してしまったという昔の人。

何もあれこれ思い煩うことはないのだ、

ここに神がいて正しい道みちがあることは確かなのだから。

帰ってから、私は独りからんとした部屋に寝そべりつつ、

天人てんにんの意味深長な言葉が夢にまで入ってくるのではないかと、

いささか心配になったりもしている。

【補足】[ここは「天人てんにん」がいる土地なのだから、くよくよする必要などないと、蘇軾はこの詩でいっている。ただし、蘇軾が「天人」の真偽についてどのように考えていたのか、主人の汪若谷おうじやくこくに配慮してか、かなり曖昧である。次の文章でもう少し深く蘇軾の考え方を知ることができる]

■ 【06-3-007】 天篆記

【解題】上の詩にあった「天篆てんてん」について記した文章。

【訳文】

長江ちやうかうと淮河わいの間のあたりの習俗きとして鬼[亡くなった人の霊]を尊ぶ。

正月ほうきに、箒しに衣服こしんを着せて子姑神こくとし、時に字こうを書かくくような子姑神こくもいる。黄州こうの郭氏かくの子姑神こくが他と最も異なっていることについては去年記した。

今年おうじやくこくは黄州こうの汪若谷わうじやくこくの家の神が最も変わっていた。箸しを口くちとし、口くちの中に筆ふでを置き、人と問答もんたをして響こたくように応じた。

神かみがいうには、

「吾われは天人てんにんである。名なは全ぜん、字あざなは徳通とくつう、姓りは李氏り。汪若谷わうじやくこくが再び世の人になったので、その縁ゆかりで吾

「はここに降りたのである」

神は篆^{てんじ}字を書き、大した筆の勢^{せい}であったが、その字は判読^{はんとく}できなかつた。

神はいった。

「これは天篆^{てんてん}である」

私に三十字を示し、

「これは天蓬^{てんほう}[星の名]の咒^{じゆ}[まじないの言葉]である」

といった。隸字^{れいじ}でわかるように書いてもらおうとしたが、してくれなかつた。

神は黄州^{ちやうちゆう}の進士[科挙を受験したことのある者]、張炳^{ちやうへい}を見ていった。

「しばらくぶりであるが、恙^{つづが}なく過^あこしておったのか」

張炳は、

「私のことをご存知^{ごぞんじ}なのですか」

「そなたは劉苞^{りゅうほう}を覚えていないのか。吾はまさしく劉苞である」

神はそういって、張炳^{ちやうへい}がかつて劉苞と親しくしていたときのことを詳しく語ったので、張炳は驚いて私にいった。

「昔、私は都で劉苞君と知り合いになりました。青い頭巾^{頭のコート}を被り、裘^{せう}を着て、体に入れ墨をし、酒が好きで、齊州^{せいしゅう}の人であるといっていました。いまだここにいるのか知りません。本当に天人^{てんじん}になったのでしょうか」

ある人がいった。

「天人が箒^{ほう}となって子姑神^{ここ}として汪若谷^{わうじやく}のところに現れたりするものでしょうか」

私もそのようには思わない。しかし、鬼とか仙とか、もとよりよく知れるものではない。その全てをいかさまであると疑うべきではないだろう。天篆^{てんてん}は判読^{はんとく}できないが、神のい^いことには古^{いにしへ}の趣^{おもむき}があり、盗み食^{たうしき}いをするような愚かしい田舎^{いんさ}の鬼^{おに}ができるようなことではない。

昔、漢^{かん}の時代に、長陵^{ちやうりやう}に住む女^{にょ}が子を産んで間もなく死に、神^{かみ}となって兄弟^{けいだい}の妻^{つま}のところに現れた。

靈験があったので民衆はそれを祀った。武帝の祖母もそこに参詣して子孫が栄えたことから、武帝はその神を宮中に祀って「神君」と呼び、天下に大評判となった。このことをそつり疑うの度を越しているといふのであろう。

世の人が見るところのものは常に少なく、見ないところのものの方が常に多い。自分の耳や目の及ぶわずかなところのものをもって、「世外の事」[世に普通ではないこと]までを量り知ることはできないであろう。

天篆のことはとりあえずここに書いておいて、よく知る者を待つとしよう。

【補足】[漢の武帝の「神君」のことは『漢書』の「郊祀志」に記され、「郊祀志」には不可思議なことがたくさん記録されている。『漢書』に限らず、権威ある書物の数々に摩訶不思議な事例が多々記載されていて、その全てを疑うことはできないと蘇軾は考えていたのだろう。人を惑わし社会に害をなすような「淫祠」は許さないが、「天篆」のようなものについては、孔子の「怪力乱神を語らず」に習って、判断を保留しておくということなのだろう]

■ 【06-3-008】 浚井

【解題】春の初めの頃に井戸を浚った。井戸は東の坡で童僕[少年の使用人]が発見したもの[→作品番号06-2-024の其二]であろう。

【訳文】

荒れ地の雑草の中に埋もれていた古井戸。

その水が飲まれないままであったのを残念がる人はいなかった。

二本の縄に括り付けて罌をおろすと、

百尺の深さから蚯蚓が飛び出てきた。

泥とともに腥^{なまぐさ}い風が吹き上がり、
空洞の奥で水の滴り落ちる音が響いた。
井戸から始まる水路の上の方で、青く伸びた芹を取り除き、
下の方で、石をきれいに洗いあげた。
私はびしょ濡れになって童僕^{どうぼく}に笑われ、
冷え切った体を酒で温めようとした。
青い空に凍えるような碧色^{みどり}が落ちてくる夕方になって、
ようやく澄んだ水をたっぷり汲み出せるようになった。
それこそ、
もとからあったあの汚れが消滅して、
どこからこの新鮮で清潔な水が出てきたのだろうか。
井戸の深い深いところの、
それこそあるかないかのようなところで、
来るものもなければ失うものもなく、
水が湧き出ているのだろうか。

【補足】〔詩の終わりの部分は、奥深い暗闇の底から澄んだ水が得られる不思議さを、
仏教の「無」の概念を使って表現してみたのだろう〕

■ 【06-3-009】 紅梅三首

【訳文】 紅梅を見て詠んだ詩。

【訳文】

其の一

何かを^{おそ}恐れ、何かを愁えていたのか、

それとも^{ねむり}睡を貪っていたのか、

紅梅の開くのは遅い。

そうか、

自身の清らかな姿が時節に合わないのではないかと、

恐れていたのか。

だから、桃や杏^{あんず}の花の色を作って小さく開いたのか。

それでも、

独り雪や霜に耐える梅の姿がやはりそこにある。

梅の心は、春にすっかり溶け込もうとはしていないのだ。

紅いのは、

玉の^{はだか}肌^{はだか}が端無^{はだか}も酒のためにほんのり染まったためであるのだろうか。

ある詩の大家は、紅梅を見て、

「桃かと思えば緑の葉がなく、杏かと思えば青い枝がある」と詠んだ。

葉や枝を観察するまでもなく、

梅には梅の格があるのを知らなかったのだ。

【補足】「ある詩の大家」と訳した原文は「詩老^{しろう}」で、実際には石曼卿^{せきまんけい}のこと。詳しくは作品番号 06-4078 で見ることにする]

其の二

雪のうちに紅梅は開くけれど、

梅としては遅いのは、

春の初めの時期を、自分だけが我が物としてしまわないためであろうか。

造物者にはいかなる深い意こころがあつて、
紅梅には特に朱あかを施してこの妙姿を作ったのか。
しかし、
寒さが花の肌を一分ずつ損ない、
雨がいつしか花を千粒の涙に変えてしまう。
そして、桃や杏ではないことが明らかになる——
点々と「微酸びさん」がもう枝についているのだから。

【補足】[末句は、花の終わった後に残った小さな実にも早くも酸味を感じて、やはり杏や桃ではないと知るオチ]

其の三

今更なから残念がるのは、
春を探るのが遅かったこと、
紅い花芯が開き切る前に見ておくべきであつた。
仙薬がてきあがるうとするとき、
あるいは、美女がまぼと頬を染めるとき、
そのようなときの紅色が見られたであらうに。
いまはもう葉に隠されて実を結び初め、
盃に落ちた香りはすでに飲まれてしまった。
ならば、かの徐熙じょきに頼んで新たな画様を描いてもらおうか、
竹の間から斜めに出した枝の先にいまも開こうとする花を。

【補足】[徐熙じょきは五代十国時代に花鳥画で一家をなした人。墨で全体を描いた後に、わずかだけ色を施すことで、強く印象付ける画を描いた]

■ 【06-3-010】 定風波

【解題】 上に見た紅梅の詩の第一首を詞の形式に作り直した。より抒情性に富んだ作品になっている。キーワードは梅の「格」である。白かろうが赤かろうが、梅には梅としての風格があるという。そこに蘇軾自身の思いが籠められているのだろう。

【訳文】

好睡慵開莫厭遲、[眠るのが好きなのを、開くのがたるいのよ、それでぐずぐずしていたのをどうか怒らないで]

自憐冰臉不時宜、[困ったことに、^{まな}臉に氷なんかをつけていたら、いまの時節に合わないわよね]

偶作小紅桃杏色、[それで、たまたまですけど、桃や杏と同じ紅の色になってみたの]

閑雅、[どうかしら]

尚余孤瘦雪霜姿。[でも、やっぱり瘦せて雪や霜に独り耐える姿は残ってしまっているわよね]

休把閑心隨物態、[奥深い心までを物のありように従わせてはダメなのよね]

何事、[でもどうしたことか]

酒生微量沁瑤肌。[お酒のせいでわずかな曇りが白い肌を染めてしまったの]

詩老不知梅格在、[詩の大家のおじさんは、梅には梅の格があるのをご存知なかったのでしょうね]

吟詠、[詠んでみせたのは]

更看綠葉与青枝。[緑の葉や青い枝もよく見よう、ですって]

■ 【06-3-011】 武昌西山題名

【解題】 ^{ちやうこう}長江対岸の^{ぶしやう}武昌県の^{せいざんじ}西山寺 [→作品番号 06-1-045] に遊んだ記録。

【訳文】

蘇軾、李嬰、呉亮、趙安節、王齊愈、潘丙、元豊五年二月二十二日に遊ぶ。

【補足】[呉亮は武昌県の役人で、李嬰と趙安節は並び順からして、やはり同県の役人なのだろう。王齊愈と潘丙は我々もすでに馴染みである]

■ 【06-3-012】 次韻子由寄題孔平仲草庵

【解題】江州の役人である孔平仲 [字は毅甫あるいは毅父] が草庵を作り、蘇轍がそれについて詩を詠んだ。その詩に次韻した。孔平仲は、当時有名な孔文仲、孔武仲、孔平仲の三兄弟の一人で、孔文仲の名は作品番号 04-1-061 で、孔平仲の名は作品番号 05-5-087 でそれぞれすでに見ている。

【訳文】

私は人に逢えば「安心の法」を問い求め、

新しい任地に着くと、すぐに道士の草庵を訪ね歩いた。

昔むかし盧敖という人は、

仙人を探し当てて教えを受けたのだけれど、それに従うことはできなかった。

私かむしろ思うのは、

かつて蓋公が自分から曹参のもとを訪れたようなこと。

羨むのは、

貴君[孔平仲]の美しい玉[汚れぬ心]は三度の火を潜り抜けて少しも焼けないこと。

私の精神は蚕に八回も食べられた桑のようにもはや一枚の葉も残っていない。

しかしながら、

この長江は嬉しいことにまさに「同一味」であるのだから、

千里を隔てても貴君と清く甘い味を共にすることができるのだ。

【補足】〔(1) 盧敖や蓋公は道家の人。蓋公については作品番号05-2-035で詳しく見ている。(2) 「安心」「同一味」は仏教の用語。同一味とは、水はいかなる器にも入り、その味は変わらない、人の心も同じである、という意味。(3) 蘇軾は仏教と道教を混ぜこぜにしてこの詩に詠み込んでいる。全体として何が言いたいのか、実のところは訳者にはよくわからない〕

■ 【06-3-013】 二虫

【解題】「水馬児」と「鷓鴣堆」という2種の虫を詠んだ詩。どちらも種名は不明であるが、「水馬児」は水上を移動し、「鷓鴣堆」は風に乗って飛ぶ虫であるようだ。前に守宮を詠んだ詩があった〔→作品番号05-3-043〕。あまり美的ではない小動物をも詩の対象とするのは、先輩の梅堯臣が切り拓いた宋詩の新分野である。

【訳文】

さあ、水馬児を見てくれたまえ。

一步また一步と流れに逆らっている。

長江は東に向かって一日に千里流れるのに、

この虫は跳んで跳んでずっとここにいる。

さあ、鷓鴣堆を見てくれたまえ。

ひとたび決起して、追い風に乗る。

風に随ってひとたび去ってどこを宿とするのやら。

逆風に遇うと、草の中にこぼりと落ちる。

この二種の虫が賢いのか愚かなのか、私は知らない。

川べりに立って私は虫を笑うが、

人は私のことを知らない。

■【06-3-014】満庭芳

【解題】小さな虫の関連でこの詞を見ておこう。蝸牛^{かたつむり}の角の先にあるちっぽけな国で超有名人になっても、あるいは蠅^{はえ}の頭の上にあるちっぽけな国で莫大な利益を得ても意味がないと、黄州^{こう}に流される以前の己を笑うかのように歌っている。戯れの詞である。

【訳文】

蝸角虚名、[蝸牛^{かたつむり}の角^{つの}の国で大評判]

蠅頭微利、[蠅^{はえ}の頭^{あたま}の国で大儲け]

算来著甚幹忙。[あれこれ忙しくして何になるのでしょうか]

事皆前定、[名利などはどうせ前から定まっているのだし]

誰弱又誰強。[誰が弱くて誰が強いなどということはありません]

且趁閑身未老、[まだしばらく老いる前の閑なこの身で]

尽放我、[自分をすっかり放り出して]

些子疏狂。[好き放題をしようではありませんか]

百年裏、[人生は百年]

渾教是醉、[すべて酔っ払ったら]

三万六千場。[酔いは三万六千回]

思量。[考えてみたら]

能幾許、[人生がどれくらいでも]

憂愁風雨、[憂愁やら風雨やらか]

一半相妨。[交互に邪魔し合うのです]

又何須、[意味がありませんよね]

抵死説短論長。[命をかけて、何がよい、何が悪いと論じるのは]

幸対清風皓月、[よいではありませんか、清らかな風と白い月があって]

苔茵展、[草の敷物に]

雲幕高張。[雲の天幕テントがありさしたら]

江南好、[「江南よいとこ〜]

千鐘美酒、[「酒は旨いし〜]

一曲滿庭芳。[〜歌いましよよ、『滿庭芳』の曲まんていほうにのせて]

【補足】[この詞の前半の終わり、「百年裏、渾教是酔、三万六千場」[百年ひやくねんの裏うち、渾すべて是これをして酔よわ教しむさんまんろくせんじょうなら、三万六千場]は蘇軾らしい楽しい句である]

■ 【06-3-015】 与子安兄

【解題】郷里にいる従兄の蘇不危 [字は子安] に宛てた手紙。蘇不危は伯父の蘇渙そかんの三男で、蘇不疑 [→作品番号 06-2-066] の弟である。

【訳文】

近ごろ町の中に十数畝はの荒れ地を得て、その中で自ら耕しています。数部屋そうおくばかりの草屋をつくり、これを「東坡雪堂」と名付けました。野菜を植えたり、果樹を接いだりして、いさか老いを忘れております。長い一曲を寄せますので、笑って御覧ください。

遠い路ですから、手紙を書いても届かない恐れがあり、他の皆様にそれぞれ差し上げることはいたしませんから、よろしくお伝えください。

巢谷君そうこくはいま東たかの坡かにきております。前からの通りに虎このような男おとこで、風節ふうせつはますます堅かたなっています。我が幼こい二人の息子の師匠しせうとして極めて厳げんしく指導しどうしてもらっています。いつも自分で猪ぶたの頭に血ちを灌かんいで煮ゆて、生姜しょうがや豆まめや野菜やさいとともに羹かきを作り、はなはだ滋味じがあります。……

【訳文】【補足】〔(1) 草屋そうおくを作つくって「東坡雪堂とうぼせつどう」と名付けたとあるのが、先に陳隨ちんずいに宛てた手紙〔→作品番号 06-3-002〕に記してあった普請中の建物である。完成したのは2月で、この手紙はそれより後に書かれたもの。(2) 長い一曲を寄せるとあるのがどの詩詞であるのかは不明。(3) 息子たちの教育に当たっていると書かれているそうこく巢谷については後で詳しく見ることになる〔→作品番号 06-4-007〕〕

■ 【06-3-016】 雪堂記

【解題】上うへの手紙てがみにあった「東坡雪堂とうぼせつどう」について記した文章。潘大臨はんだいりん [字あざなはひんろう 邠老] と交まじわした問答もんたうをもとに書かれたとされ、潘大臨は作品番号 06-2-076 で見たように、科挙こぎやうの二次試験じにじけんを受けるために上京じやうきやうしていたので、蘇軾そしつがこれを執筆しつしつしたのは潘大臨はんだいりんが落第らくだいして帰郷ききやうした後のちということになる。訳者の力不足りきふそくによるのだが、この『雪堂記せつどうき』はいささかわかりにくく、十分に理解りかいが及およばないままに訳してある。

【訳文】

私は東たかの坡かのかたわらに廢すたれた畑はたけを得えてから、土壩つちづたを修復しゆふし、堂どうを作り、せつどう「雪堂」と名付けた。大雪おほゆきの中でそれを建てたからだ。さらに、四方しやうぱうの壁かべに隙間ひまなく雪景色ゆきけしきを画えき、立たって見ても、座まって見ても、あたりを顧かへみて雪ゆきではないものが目めに入いらないようにした。私は雪堂せつどうにいと、真まことにいるべきところを得えていると感あはれることができる。

あるとき、私は机にもたれ、昼間に目をつぶっていると、どこかに^{よるこんで}栩栩然行こうとして、はっと気が付いた。まだ意識がはっきりとはしてなくて、何かに触れた感じがあって、すっかり目が覚めた。そして、心は十分に満足しておらず、何かを失ったような感じかした。^{てのひら}掌で目をこすり、^{くつ}足に履をつけ、のそのそと堂から下った。

そこに客人が来て、私にこう尋ねた。

「君は、世にいい^{さんじん}『散人』[世間の束縛から解放されている人]なのかい、それとも^{こうじん}『拘人』[世間に強く束縛されている人]なのかい。散人にしては天性が浅すぎるようだし、拘人にしては^{しよく}嗜欲が深すぎるようだな。繋がれた馬にも似て、どこかに行きたいのに行けずにいるのではないのかい」

私には思うところがあったが、それを口にはまだ出さなくて、ゆっくり考えてから答えようと、客人に挨拶をして、堂上に招いた。

客人はいった。

「ああ、わかった。君は散人になりたくても、まだなれずにいるのだな。だったら、散人の^{みち}道について君に教えてあげよう。

洪水を治める名人や牛を解体する名人のすることを見ると、その知恵を散らしてしまい[つまり、知恵を使わないということ]、敢えてさまざまな障壁に立ち向かってみせたりしない。障壁を避けるのだ。だから、最も柔い水をもって最も^{つよ}剛い岩に当てながらも、岩をその^{じようもん}定紋に従って割ってしまし、最も^{つよ}剛い刀を最も柔い肉に当てて、たちどころに牛をばらばらにしてしまう。知恵を使って^{つよ}剛い岩や骨をどうにかしようとかいったことはしないのだ。自分の知恵を散らすことができるのなら、対象となった物[岩や牛]は己を縛っておくことができなくなるのだが、自分の知恵を散らすことができなければ、物は己をときほどくことができない。

君は知恵があるらしいな。それを自身の内側で働かせている分にはまあまあよいだろう。それはいわば^{はりねずみ}狷が袋の中にあるようなもので、時々その身体を動かしたところで、外で見ている者には、ただ一本か二本の毛があるようしか見えない。あるいは、風は縛れないし、影が捕えられないのは、子供でも

知っていることだ。名声というものは風とか影のようなものだ。どうか、君はそんなものに心を懸けているのではないのかな。だから、君はひねす狷が毛をいっばい立てるようなことをしてみせている。愚かな者はそんな君を見て驚く、知恵のある者は君を見て悔しく思いもするのだ。[こままで、散人になるには知恵を散らすこと[無心になること]が必要条件であるといっているようだ]

だから、私は君が今日のようになるのはむしろ遅かったと不思議に思っていたくらいだ。まあ、君は私に会えたのは幸いであったな。私は君を籠かごの外の遊びに連れて行こうと思うのだが、どうか、行ってみるかいい]

私はいった。

「私はここで、ずっと籠の外にいます。あなたはどこに行こうというのでしょうか」

客人はいった。

「ひどいものだ、君はまったくわかりが悪い。

権勢なんぞは籠というほどのものでなく、名誉も籠というほどのものでもない。天候の順不順も籠というほどのものでなく、世間の道徳も籠というほどのものでない。私が籠といっているのは、ただ知恵である。知恵は内にある、それが外に出ると言葉になる。言葉は指し示すものがあり、それは行為として形になる。行為にも指し示すものがある。君は知恵があるために、黙っていようとしても、黙ってまいとし、やめようとしても、やめまいとする。それは、譬えるなら、酔って怒った人が怒声を発しようとしているのにも、頭のおかしくなった人が明後日の行動をとろうとしているのにも似ている。その口を覆い、その腕をつかんでも、もごもごうめき、じたばたしてやめないのだ。知恵が人にとっての籠になっているとは、このようなことである。

人にとって患わざらいとなるのはその身体であり、身体にとって患いとなるのはその心である。君が畑の中に堂を構えたのは、君の身体をそこで安らかにしようとしてのことであろう。堂に雪を描いたのは君の心をそこで安らかにしようとしてのことであろう。堂があれば身体は安らかになれるけれど、人としての形からはもとより解放されるわけではない。心は雪によってすっきりしても、精神がもとより完全な充実を得るわけでは

ない。

君は知恵^たを焚いて、もう燃^もやしてしまったと思ったりしているかも知れないが、知恵は燃やし尽くしてもまた燃え出してしまふ。この堂を作るのはただ無益であるばかりでなく、君をさらに迷妄のうちに陥れてしまふのではないのかな。君は雪の白さを見ると、ぼんやりと目が眩み、君は雪の寒さを見ると、ぞっとして毛が逆立つ。五官に害になることでは、目から来るのが最もはなはたしい。だから、聖人はそのようなことはしない。

ここはなんと雪ばかり。君の知恵と、君が目にして見ているものを見ると、君は実に危ういものだな」[ここまでで、客人は雪堂を建てた蘇軾の考え方を徹底的に批判してきたのだが、次の言葉はその流れからずれるようだ]

ここで客人は杖を挙げて壁を指していった。

「ここに凹地があり、ここに凸地がある。雪はここ全体に同じように降り積もる。そこに強い風が通りすぎるとどうなるか。雪は凹地には留まり、凸地からは散じてゆくだろう。天は凹地を好み、凸地を嫌うのか。そうではあるまい。勢いとしてそのようになるだけなのだ。勢いのあるところでは、天もそれと違うようにすることはできない。まして人にはどうにもできない。君はここに居て、人から離れているとはいっても、畑に堂を建て、堂に名を付けて、実は人に対して目障りなことをしているのではなからうか。雪が凹地にあるのには及ばないではないのかな」

私はいった。

「私がしているのは、『適然』[適^{てき}た^{ぜん}、たま^{たま}しか^{しか}成り行きでこうなった]というだけのことであって、特に考えが合ったわけではありません。危ういとはどういうことなのでしょうか」

客人はいった。

「君はたまたまこうしたという。たまたま雨であったのなら、君は雨を画いたのかい。たまたま風が吹いていたら、君は風を画いたのかい。雨を画くのはよろしくないだろう。雲が激しく湧き立つのを見るなら、君には怒りの心が起こるだろう。風を画くのはよろしくないだろう。草木が揺れ靡く^{おろ}のを見るなら、君には懼れの

こころ
意が起こるだろう。雪を見ても、君の内側で何も動かないわけではない。雪の下にだって水や石がある。
だから、雪の絵画によっても怒りや懼れが誘われないわけではないだろう。

徳は心にある。心には眼がある。眼が物を見て、それによって徳が左右されてしまう。雨も風も雪も異なりはしないのだ]

私はいった。

「あなたのおっしゃることは正しいと思います。その教えを聞かないわけではありません。しかし、十分には尽くしていないようにも思われます。どうやら私はまだぐうの音も出なくなるまで承服するには至っていないようです。それはちょっと訴訟をおこして、理屈ではすでに屈しても、なおまだ言辞を絶たずにいられない者のようです。

しゅんたい
あなたは、春台[華やかな高台]に登ると雪堂に入るのとでは異なるところがあると思われるでしょう。か。春と雪を比べるなら、雪の方が静かです。台と堂を比べるのなら、堂の方が静かです。静かであるのならば得るものがあり、動くならば失つものがあります。

こころ しんじん せきすい こんちん びんしゅ
黄帝は太古の神人です。赤水の北に遊び、昆侖の丘に登り、南を望んで還ると、その「玄珠」[貴重な宝物、すなわち自分自身]を忘れてしまったといひます。遊こころぶとは意かなに適うことをいひます。望むとはそこに情を寓することをいひます。意に適って遊び、情を寓して望むなら、意は暢のび、情は出て、その本身を忘れるのです。そのときに何か貴重な物があっても、それを宝であるとしません。だから「玄珠」も忘れてしまったのです。[ここでは「適然」の一例として黄帝伝説を取り挙げたのだろう]

しかし、意はずっと同じところに留まるものではなく、情は出続けるものではありません。必ずまた最初のところに戻ります。そして驚いて失ったものを探し求めます。[これは蘇軾の現在の複雑で矛盾する思いをいうのであろう]

私のこの堂は、遠くにあるものを近くに、近くにあるものを内に収めるものです。つまり、天地の涯を眉毛の先に置くものです。[つまり黄帝の遊び、すなわち「適然」を實踐する場として雪堂があるといっているのだろう]

もののがわかった人がこの堂に上がるなら、逆風でなくても息が詰まるような思いかし、寒くなくてもぞっとして肌が凍え、それによって煩わしさがすっかり洗われ、手を炙るような人の譏りはなく、また飲食の疾いから免れられることでしょう。利害のからむ途に「ずくずくして、憂患のなかに気持ちをおかしくさせている者は、熱湯の中に手を突っ込んで洗おうとするのに少しも異なることはありません。

あなたのおっしゃることは『上』で、私のいうのは『下』です。私はあなたがおっしゃることができるのかも知りませんが、あなたには私がいうことはきっとできないでしょう。それを譬えるなら、御馳走をたらふく食べている者に、糟糠を食べさせたならきっと怒るであります。美しい衣服を着ている者に武人の帽子をかぶせたならきっと恥たとするでしょう。あなたの説く道は御馳走や美しい衣服の方で、『上』を得ようというものです。[客人が示す散人の道は辿り難いので、いまは「適然」でよししようといっているのだが、本文とは裏腹に「適然」を「上」とするかののような口吻がないわけでもない]

私はあなたを『師』とし、あなたは私を『資』『導くべき相手』とします。人は衣食を欠くことはできません。私はあなたと遊ぼうと思います。今日のことはしばらくおいて、また後に論じ合ひましょう。

私はあなたのために歌を作ってみました。聞いてください

雪堂之前後兮、[雪堂の前でも後ろでも]

春草齊。[春の草が一斉に出てきている]

雪堂之左右兮、[雪堂の右にも左にも]

斜径微。[斜めに細い径がある]

雪堂之上兮、[雪堂の上では]

有碩人之頎頎。[大きな人が嬉しそうにしている]

考盤於此兮、[それは賢い隠れ人で]

芒鞋而葛衣。[身に付けるのは草鞋に葛の衣]

挹清泉兮、[清らかな水を酌んで]

抱甕而忘其機。^{かめ}[甕を抱えたままそこに水を入れるのを忘れてる]

負頃筐兮、[小さな籠を背負って]

行歌而采薇。^{せんまい}[歩きながら歌って薇を採る]

吾不知五十九年之非而今日之是、[五十九年は間違っていて、いまが正しいのやら]

又不知五十九年之是而今日之非。^{せんまい}[五十九年が正しくて、いまが間違っているのやら]

吾不知天地之大也、[結局何もわかっていない、天地の大きさも]

寒暑之变、[四季の変化さえも]

悟昔日之臆、[わかっているのは、かつては痩せていたのに]

今日之肥。^{こころい}[今は太っていることくらい]

感子之言兮、[あなたの言葉に感じて]

始也抑吾之縦而鞭吾之口、[初めて勝手なことをいうのをやめて我が口を鞭で打った]

終也釋吾之縛而脱吾之鞵。^{こころい}[ついに我が束縛を解き、我が縄目から逃れられるのか]

是堂之作也、[この堂を作ったのは]

吾非取雪之勢、[雪の勢いを取るためではなく]

而取雪之意。^{こころい}[雪の意を取るため]

吾非逃世之事、[世の事物から逃げるためではなく]

而逃世之機。^{こころい}[世のからくりから逃げるため]

吾不知雪之為可觀賞、[雪は観てめでるべきであるとも]

吾不知世之為可依違。^{こころい}[世は反復してやまないものであることも、私は知らない]

性之便、[性情ののびるところ]

意之適、^{こころい}[意の適くところ]

不在於他、[それ以外のところではない]

在於群息已動、[そこではもろもろのものが動き出し]

大明既升、[日がすでに昇っている]

吾方輒転、[私はまぎに行こうとして]

一觀曉隙之塵飛。[暁の中に塵が飛ぶのを見る]

子不棄兮、[あなたが見捨てないのなら]

我其子歸。[私はついて行こう]

客人は嬉しそうに笑い、よしといって堂より出て行く。

私がその後に従うと、客人は振り返ってうなずき、

「そなたはそなたであるな」

といった。

【補足】[(1) 『雪堂記』がわかりにくく感じられるのは、もしかすると、蘇軾がこのころ大きな矛盾を抱え、矛盾を無理にときほくことなく、からまり合ったままに書き記したためであるのかもしれない。(2) キーワードの一つとして提示されているのが「適然」という概念だ。「適然」とは、適たま然、適くまに然る、なるようになる、よろしいようになる、自然と最もよろしいようになってゆく……、といったような意味であろうか。「適然」は矛盾を超えるためのあくまでも暫定な解なのだろう。

(3) 蘇軾は黄州に来て以来、数多くの詩文を記している。蘇軾の心の内は日々複雑に変化し、そこから生まれたのが詩文で、詩文から逆に蘇軾の心の変化を理解するのは実のところ容易ではない。そもそも罪を得たことが蘇軾にとってどれほどの重大事であったのか、現代の我々には窺い知れないものがある。蘇軾は自分を新たにしようと真剣に取り組んだ。しかし、そうしなければならない理由が本当のところはわれわれにはわからない。(4) この『雪堂記』では、蘇軾は「散人」と「拘人」の間でもがいているようだ。そもそも、蘇軾は8歳のときに4人のスーパースターに憧れ、科学

と制科せい かに合格して超エリートの道を歩んできた。国と民のために尽くすことを生涯の目標としてきたのであるから、その意味では徹頭徹尾「拘人」である。だから、「散人」と「拘人」を対比させていたのでは蘇軾は前に進めないはずである。二項対立を超えようとする作品を我々は間もなく見るであろう [→作品番号 06-3-057]。(5) 東のたかまり坡で農作業を始めてから陶淵明とうえんめいに急接近した。蘇軾も陶淵明も、自己の平安だけを求めるのをよしとはしない。常に民衆の労苦を必ず思わずにはいられない。退隠した陶淵明も罪を得た蘇軾も社会すべに働きかける術を持たない。「適然しだいふ」は、蘇軾が士大夫を自任する限りは究極的な解答にはならないだろう。だから、『雪堂記』で見たわかりにくさは、結局のところ生涯続くことになる。その点で、作品番号 06-1-097 にあった草取りの比喻は卓抜で、蘇軾は常に草を取り続け、だからこそ魅力的な作品を生み続けたのであろう]

■ 【06-3-017】与李通叔

【**解題**】李通叔り つうしゆくに宛てた手紙。通叔り げんちよくは李元直、もしくは李康年り こうねん あざなの字とされる。どちらにしても篆書てんしょを得意とする人で、雪堂せつどうに掲げる文字を書いてもらっている。

【訳文】

久しくお手紙を差し上げることもなく取心はな入っております。春の事物は妍やかはなにして麗わしく、無窮の喜びを与えてくれます。このごろはいかがお過ごしでしょうか。

先に、「雪堂」と篆字せつどう てんじで書いてくださったものを頂戴しました。筆勢はまことに美しく、この郊野に光を添えてくださいます。すくにもお礼に参上しなければならぬのに、罪深いことです。なかなかお目にかかれませんが、時節柄万々自重されますように。

■ 【06-3-018】 江神子

【解題】陶淵明とうえんめいの斜川しゃせんでの遊びを想つての詞。序文がある。陶淵明が若い頃に斜川で遊んで詩を詠んだことについては作品番号 05-5-008 で見ている。

【訳文】

陶淵明とうえんめいは正月五日しゅげつごにちに斜川しゃせんに遊び、人々と流れに臨んで並んで座り、南阜なんぶ[廬山ろざん]を眺め、また曾城そうじょう山の特とくに秀めてた姿を愛で、斜川の詩を作った。その詩によっていまその場を想い見ることができる。

元豊壬戌げんほうじんほの春、私は東あづまの坡のりを躬みづから耕せつどうし、そこに雪堂せつどうを築しいた。南みなみに四望亭しぼうていの後ろのちうしろの丘かみ、西にしに北山ほくざんの小さな泉いづみがある。ふと嘆息たんそくして、これもまた斜川の遊びと同じであらうと思った。

夢中むちゆう了りょう了りょう了りょう 醉中醒ざいちゆうせい。[夢の中でこそはっきりっきり、酔った中でこそ醒めています]

只淵明ただえんめい、[きっと陶淵明は]

是前生このぜんせい。[我が前世なのでしょう]

走遍人間しゅうべんじんかん、[人間世界を遍く走り]

依旧いじゆ卻躬耕にがみづか。[旧にもどって自ら耕します]

昨夜東坡たかみづ春雨足あめあ、[昨夜は東の坡に雨が足り]

烏鵲喜かきき、[鳥も鵲も喜んで]

報新晴しんせい。[新たな晴れを報せてくれます]

雪堂西畔せつどうせいぱん暗泉鳴くらしみずな。[雪堂の西のあたりで秘かに泉が鳴っています]

北山傾ほくざんかへ、[北の山が傾き見え]

小溪横せうきぎやう。[小さな溪流が横に流れます]

南望亭丘なんぼうてい、[南に望む亭と丘]

孤秀聳曾城。[ひとつ秀でて聳えるのはかの曾城山]

都是斜川当日景、[すべてこれはあの日の斜川の景色]

吾老矣、[私は老い]

寄余齡。[ここに余生を寄せるのです]

【補足】 [(1) この詞で、蘇軾は我が前世は陶淵明とうえんめいであるとまで歌っている。(2) 最後の句に「寄余齡」[余齡よれいを寄せる]とあるのは、「我が生は寄せるが如きのみ」としばしば歌ってきた末に、最後に寄せるのはここであると思いついたのであろう。こことは、黄州こうの東の坡たかまりに限定されるのではなく、斜川しやせんを想見できるところならどこでもよい。陶淵明の心と蘇軾の心は数百年の年月を隔て共鳴し、そして2人の心はまた誰かの心と共鳴し、宇宙のどこもが斜川であり東の坡となるのである。(3) この序文から、雪堂せつどうが四望亭しぼうてい [→作品番号06-1-032]の北側に位置することがわかる]

■ 【06-3-019】 陳季常見過三首

【解題】 2月のある日、陳慥ちんぞう [字は季常、方山子あざな きじょう ほうさんし] [→作品番号06-3-002] が訪れ、すぐに立ち去った。これが3度目の訪問である。

【訳文】

其の一

仕宦の身である間は常に人に対して畏れを抱かねばならなかった。

退居してからは、人目を気にせず、喜んで客人を迎えることができる。

貴君こうは黄州に来るときは私の家を宿としてくれ、

何ら馳走ができないのも気に留めることがない。

私はいう。

「東の坡とかのりですばらしいことがありましたよ、
十畝はにわたって麦を種えたのですよ」

貴君の目の内にある悦びの光をさらに増すためなら、
貴君の使用人にも、なげなしの白飯を振る舞ってしまいたくなる。

【補足】[「人目を気にせず、喜んで客人を迎える」という蘇軾のもとには、実際のところ頻繁に来客があった。ここ1カ月ほどの間に、詩や文や手紙に記録されていることからわかるだけでも、陳慥ちんりょうの他に沈遼もうぼう、毛滂とうえつ、董鍼といった人々が来ている。沈遼は新たな赴任地に向かう途中で立ち寄ったもので、毛滂については作品番号 06-3-077 で董鍼については作品番号 06-3-023 で見ることになる]

其の二

貴君を送って行く四十里の道は、
帆を吹く風に任せればよい。
川べりにならぶ千本の柳、
その影が洲頭に酒杯の中へと落ちてくる。
この行は遠い別れではない……
この楽しさは窮まりかない……
ただ願うのは、長くこのようであって、
往き来が一生同じように続くこと。

【補足】[(1) 陳慥ちんぞうの住む岐亭きていと黄州こうの町は水路でつながっていた。先に岐亭から舟で蘇軾が帰ってきたことは作品番号 06-2-009 で見ている。(2) この詩の終わりに「来往一生同らいおういつしゅうおなじからん」と詠んでいる。むろん一生続くものではなかった。陳慥が黄州に蘇軾を訪ねたのは7回、蘇軾が岐亭に陳慥を訪ねたのは5回であったと

いう。なお、作品番号 06-3-005 に「已約年年為此会」[已に約す、年年此の会を為す
を]と呼んでいたのも同じココロである]

其の三

聞(き)くところでは、貴君は龜軒を開いたとか。

龜軒の東側の欄干からは、高い木々が見おろされるといふ。

どうして龜軒なのか。

ある人はいふ——貴君は事を畏れて、龜のように頭を縮めるのだと。

私は知っている——貴君はそうではないことを。

龜は太陽の気を嚙んで永遠の生を養う、

貴君は朝飯ごとに東側の欄干から入る朝日を食らうのである。

よかったら、その朝の光の余りを私にも分けてほしい。

長寿を独り占めしてはいけませんぞ。

■ 【06-3-020】 柏石図詩、并叙

【解題】陳慥 [方山子] が所蔵する画に添えた詩。短い序文がある。

【訳文】

叙

陳希亮の家に『柏石の図』があり、その息子の陳慥に伝えられて、家宝としている。私は詩を作り、この画の銘とした。

二つの石の間から、柏の木が生え出した——

天は生まれたばかりの柏にいきなりこの運命を与えたのだ。

生きるのがいかに困難であっても、

柏は決して石から離れることができない。

とう かん ゆ
唐の韓愈は世を俯瞰する賢人であったが、

平地で自在に伸びてこそ美しいとして、

柏を移植する詩を詠んだ。

しかし、土が肥えているか、瓦礫まじりであるか、

それによって柏の成長にどれほどの差があるというのか。

見るがよい、

石から生えたこの柏の複雑な姿を。

移し替えるべき理由などどこにもありはしない。

あお
蒼い竜が身をくねらせ、黒い虎がわたかまっているかのようではないか。

この画師はなかなかの人で、

私の毛髪を逆立たせるほどの迫力がある。

きっと画いたそのときに、

韓愈なぞは何もわかっていないといおうとしたのだろう。

【補足】〔韓愈は詩に「二つの石に挟まれた柏は百年経っても大きくならない。平地に移してやるなら千丈の高さにまでなるだろう」といった趣旨のことを詠んでいる。

のびのびと本来の性質を遂げさせるのがよいというのが韓愈の主張である。一方、蘇

軾は「愈いよよ窮きゆうすれば則すなわち愈いよよ工たくみなり」の方を貴いとしたのだろう。蘇軾は時折、韓愈に楯突くことがある。そうするのは韓愈を尊敬し、その詩文に深く通じているからである。韓愈は華美に陥りがちであった詩文を改革した文学の革命児であつた。

それから200年余りを経てその精神を受け継いだのが歐陽脩である〔そのことを

作品番号 06-5-009 で見る]。だから、蘇軾は広い意味で韓愈の門弟とってよい。門弟であるからこそ敢えて反発してみせるのである]

■ 【06-3-021】 謝人恵雲巾方舄

【解題】 雲巾うんきん [雲のように高い頭巾] と方舄ほうせき [底が方形の靴] をプレゼントしてくれた人がいて、その謝礼に、雲巾と方舄に関連する故事をてんこ盛りにした二つの詩を作った。雲巾の方だけを訳す。

【訳文】

其の一

頭巾えんびを燕尾と呼ぶのはあまりぴったりした語句ではない。

雲巾うんきん——雲の端きれを剪り取ったとするのはなかなかかろうまい。

雲は無心で青山せいざん [靈妙な霧囲気のある山] の付き物である。

それを頭に載せるなら、仙人の気分になれようか。

現代の頭巾はかつては俗ニューモードつまいと評された新様だが、

いくら古雅を求めるとしても、

濁り酒を頭巾とうえんめいで漉して飲んだ陶淵明の真似はさすがにできない。

唐代とうだいの終わりに鹿門山ろくもんざんに隠棲した人が、

人に頭巾を贈って添えた詩に、

「黒い霧を裁ち、霜のように軽い」とあるが、

実はこの頭巾こそがそれではなかろうか。

■ 【06-3-022】 丹石硯銘、并叙

【**解題**】蘇軾はいろいろな人からいろいろなものをプレゼントされ、詩や銘を作ることをもってその謝礼としていた。これは唐垌^{とうけい あざな りん ふ} [字は林夫] [→作品番号 06-2-022] から贈られた赤い石の硯への返礼。

【訳文】

叙

唐垌^{とうけい たんせき}は丹石の硯を贈ってくれた。蓮の花が粲然^{さんぜん}と水から出てきたかのような趣^{おもしろ}があり、墨を磨りやすく、筆によく馴染み、硯としての美点を全て具えている。かつて唐詢^{とうじゆん}が天下の硯について叙述^{けんぶ}した『硯譜』を作ったが、この石の出るところについては知らずにいた。私はそれを知り、この銘を作った。

……[銘の本文は割愛]……

元豊壬戌^{げんほうじん ぼ}の春、東坡^{とうば}題する。

【**補足**】[東^{たかまり}の坡に土地を得て農耕を実践するようになってから、蘇軾^{とうば}は東坡を号として用いるようになったのだが、それがいつ始まったのかは明らかではない。残された作品に東坡の号があるからといって、実際に蘇軾自身がそのときに付したかどうかはわからない]

■ 【06-3-023】 滿江紅

【**解題**】董鍼^{とうえつ あざな き ふ} [字は毅夫] のために作った詞。楊繪^{ようかい}が編集した『本事曲集』^{ほんじきょくしゅう}に短文とともに収録されていた作品。『本事曲集』は作品番号 06-2-083 にあった『本事曲子』^{ほんじきょく}と同じで、楊繪はその後も記事の収集を続けていたのだろう。董鍼は蘇軾よりも8年遅れて科擧の合格した人で、蜀の梓州で官職を失い、船^{せんきょう}で三峡の難所を下って故郷^{こ郷}の鄱陽^{はよう}に帰る途中で黄州^{こう}に立ち寄り、しばらく滞在した。

【訳文】

ようかい ほん じ きょくしゅう
楊絵：『本事曲集』より

董鉞は罪を得て梓州から番陽に帰ることになり、途中で齊安[黄州]で蘇軾に遇った。蘇軾は董鉞がゆったりと得心した様子であるのを怪しんで尋ねると、董鉞はこのようにいった。

「私は再婚して柳氏を娶り、その三日後に官職から去ることになりました。私はもとよりよくは憂うことはなかったのですが、柳氏が我が進退についてがっかりするのではないかと、そればかりが心配でした。ところが、柳氏は私と気持ちを一つにしてくれて、むしろ富貴に向かうかのように欣然としているのを見て、私はますます安らぎになったのです」

そして、董鉞は家の少年に自作の『満江紅』の詞を歌わせた。蘇軾はそれを聞いて感心し、次韻した。

憂喜相尋、[憂いがあれば喜びがあり]

風雨過、[雨や風が通り過ぎれば]

一江春緑。[川は春の緑に包まれます]

巫峽夢、[巫峽を下る危険な旅も]

至今空有、[いまやすっかり終わって]

乱山屏簇。[山また山の陰しさもいまや夢となりました]

何似伯鸞携德耀、[かの賢人夫婦の伯鸞と徳耀のように]

簞瓢未足清飲足。[食べる物などなくても清らかな歓びに満ちているのです]

漸粲然、[いよいよ粲然として]

光彩照階庭、[庭には光が照り映えて]

生蘭玉。[玉のような蘭が生じることでしょう]

幽夢裏、[まるで夢の中でのように]

伝心曲。[この曲は心に伝わってきます]

腸断処、[深い感動のうちに]

憑他続。[誰が続きを歌うのでしょうか]

文君婿知否、[夫のことがわからない妻には]

笑君卑辱。[勝手に笑わせておけばよいのです]

君不見周南歌漢広、[さあ、古い古い歌を思い出してください]

天教夫子休喬木。[天はときに木の下で休むようにさせるのです]

便相将、[さあ、ともに]

左手抱琴書、[左手に、夫は書物を、妻は琴を抱えて]

雲間宿。[雲の間に宿るのです]

【補足】[(1) 前半にある伯鸞はくらんと徳耀とくようは、それぞれ梁鴻りょうこうと孟光もうこうの字で、富貴や美醜あざなによらずに互いの徳を認め合って夫婦となったことで有名で、蘇軾も時折詩文に引いている。(2) 後半には幾つかの故事が用いられているが、煩を避けて適当に訳した]

■ 【06-3-024】 答李昭玘書

【解題】李昭玘りしょうき [字は成季あざな せいき] に宛てた手紙。李昭玘は舒煥じょかん [→作品番号 05-4-110] に代わって徐州じょの学校の教授になった人で、当時、徐州知事じょは孫覺そんかくであったので、そのつてを使って蘇軾に詩文を送って己のことを知ってもらおうとしたようだ。手紙の最初に王適おうてき兄弟 [→作品番号 06-2-023] の名があるのは、王適はもともと徐州の人で、昨年の秋の科挙の地方試験を受けるために帰郷し [その結果がどうであったかはすぐ後で見ることになる]、弟おういつの王適は徐州にいたからである。

【訳文】

先に王適君兄弟から手紙を得たところ、貴君のことが具つぶさに書いてありました。また王適君兄弟に会うたびに、必ず貴君のことに話が及びますので、貴君のことが何かと思われ、しばしばお手紙を出そうとしておりました。一方で、私はいまは罪をもって廃されて追放された身で、かねてから知らない間柄でありながらお手紙を差し上げましたなら、私が人を欺く者ではないかと受け止められまいかと思われもしました。私か罪を得ましたのは、まさしく実際以上に名前だけが高くなったためです。私は罪を得てからは、これまでは好悪するところがあったものが皆衰えてしまえばかりであります。名が高いことだけは依然として畏れておまして、それは虎以上に畏れているのであります。そのようなことからこれまでお手紙を差し出してこなかったのです。

……[李昭玘の詩文を見ての感想を述べる]……

私は御恩によって黄州安置となりましてからは、処世の困苦を思っ、あたかも壁や谷に向かっているかのような気がして、何一つとして遂げ得たものはありません。ところが、勝れた文人を多く獲えることだけはできています。黄庭堅君、晁補之君、秦觀君、張耒君といった人々は世の中の人々がまだ知らないうちに、私独りが先に知ることができたのでした。いま貴君もまたひとかどの人物として私の前に現れ、貴君と語り合いたく思っております。造物者はどうしたわけか私ばかりにこのような楽しみをたくさん与えてくれているようです。ここに名を挙げた数人の者たちは、私がまだ知らない資質にもきつと限りなくあふれていて、それを窮め続けてゆくであります。

……黄庭堅君は妻を喪ってからは、五感の嗜好を絶ち、菜を食べて水を飲んで過ごしていて、これは最も勇気ある決断です。弟は、「道を学んで三十年余り、いまようやく明白みちわがかりかたけてきた」といっています。その言行を見ると、以前とはまるで違っています。私だけが残念なことに得るところがいまだにないままなのです。

徐州知事の孫覚君そんがくからは手紙がくるたびに、教えられることがあります。かつて会って話していたときのように、はっと気づかされるのです。貴君が王適君兄弟と知り合えたのはまことに結構であります。

鋭敏な貴君のことですから、たとえ試験に落第しましても、しはまた磨琢するならば、その立派な本質を成し遂げることでありましょう。……

【補足】[冒頭に王適君兄弟とあるのは、二人からの手紙が蘇軾のもとに届いていたからであろう]

■ 【06-3-025】 書淵明飲酒詩後

【解題】東の坡で農耕に励む蘇軾はよりいっそう陶淵明に接近する。これは陶淵明の『飲酒』の詩を書いて、その感想を記した短文。

【訳文】

陶淵明：『飲酒』

顔生稱為仁、[孔子の弟子の顔回[顔淵]は仁者と称えられ]

榮公言有道。[その昔の隱者の榮啓期は道を得た人といわれた]

屢空不獲年、[顔回はしはしば食べ物を得られなくて若死にし]

長饑至於老。[榮啓期はずっと餓えたまま老いた]

雖留身後名、[死後、その名を残したものの]

一生亦枯槁。[二人の一生は枯れ果てたものであった]

死去何所知、[死んでしまえば、名が残ったところで知ることはない]

称心固為好。[もとより生きていて心にかなうのがよいのだ]

容養千金軀、[千金の価値があるとしてその身体を養っても]

臨化消其宝。[死に臨んでは、その宝を消さなければならない]

裸葬何必惡、[裸で葬られるのも必ずしも悪くはない]

人当解意表。[人は生死の本当の意義を理解しなければならない]

これは陶淵明の『飲酒』の詩である。飲酒の最中に、どうしてこれだけたくさんの事柄を記すことができたのか、私にはわからない。

げんほう
元豊五年三月三日、私は客人と酒を飲み、客人がこの詩を書くようにいった。それでその後ろにこのように記す。

【補足】〔(1) 蘇軾は酒は好きでもあまり強くない。酔中にこれだけ味わい深い詩は作れないと素直に感心したのでだろう。(2) 中国では伝統的に死者を厚く葬ることをよしとし、「らそう裸葬」を嫌った。立派な棺に納められ、豊富な副葬品があることで、死後の世界で豊かに暮らせると信じていたのである。そうだい したいふ宋代の士大夫は、昔の王侯貴族のように豪華な墳墓を築くようなことはむろんできないけれども、それなりにきちんとした墓所を用意しようとし、そのためにかなり苦勞した。作品番号 06-1-055 で見たように、ぶんむこう文務光にとって父の棺を郷里に持ち帰るだけでも一大事業であった〕

■ 【06-3-026】 書淵明乞食詩後

【解題】 もう一つ、とうえんめい こつじき陶淵明の『乞食』[食を乞う] の詩の感想を記した短文も見ておこう。

【訳文】

とうえんめい
陶淵明は一回の食を得て、恵んでくれた主人に、「せめて冥土から恩返しをいたします」と詩中に詠んだ。おこもさん たひこれは巧者の言い草の類である。

私は実に哀しいと思う。私一人が哀しむのではなく、世を挙げて哀しまない者はいないだろう。

飢えと寒さは常に目の前にある。名声は死んで後に定まる。この二者は互いに矛盾し、それによってひと人は苦しまなければならぬ。

【補足】〔陶淵明とうえんめいの『乞食こつじき』の詩は、官職を得ようと懸命だったころの作。人の恩顧を得るために、わずか一食の恩に対しても、身を屈して卑屈な言葉を並べなければならぬ辛いことを詠んだものである〕

■ 【06-3-027】 寒食雨

【解題】冬至から105日目の寒食かんしょくの日に詠んだ詩。この詩は、蘇軾自身が書いた真筆『行書黃州寒食詩卷ぎょうしょこうしゅうかんじきしかん』が残っていることで非常によく知られている。その『詩卷』は実に数奇な運命をたどった。蘇軾が書いた後は士大夫の間を転々とし、元の時代になって皇帝のもとに納められ、明みんの時代に再び民間に流れて収集家のもとを転々とし、清の時代に再度皇帝のもとに納められた。後に円明園で保管され、英仏連合軍の攻撃によって円明園が全焼したときに、からくも略奪されたことで、一部が焦げたものの生きながらえることができた。そして、再び民間の収集家のもとに渡り、いつしか日本人の入手するところとなり、関東大震災であわや焼け失せようかというところを奇跡的に免れた。現在では、台北の故宮博物院の所蔵物となっている。

【訳文】

其の一

黄州こうに来てから、

三度の寒食かんしょくがすでに過ぎ去ろうとしている。

年年春を惜しもうとしているのに、

春はその気持ちいを容れてくれずに去ってしまう。

今年はこのいやな雨、

ここニカ月間は秋の寂しさである。

雨音の下に臥している間に、

なめらかな雪の肌[海棠の花びら]も泥に汚されてしまったと聞く。

誰かがいったように、夜というものはまことに力がある——

暗い中で時間を偷んで背負って行ってしまうのだ。

春とは少年のようなもの——

ふと病んでようやく起きられたと思ったら、

すでに頭は白くなってしまっているのだ。

【補足】[(1) 東の 坡^{たかまり}で畑を耕し、陶淵明^{とうえんめい}と時空を隔てた心の交流をする蘇軾は、それによって心が安定したかのように見えて、実のところはそうではなかった。この詩は重く苦しく、蘇軾の心の基底には常にこうしたものがわだかまっていた。この詩や「花に似て花にあらざるに似る」と楊を歌った詞 [→作品番号 06-2-016] が元来の蘇軾なのではないだろうか。(2) 蘇軾は黄州^{こう}にきてすぐに定惠院^{じょうゑいん}の東の山に海棠の花があるのを見つけていた [→作品番号 06-1-028]。海棠は蜀^{しよく}を代表する花で、蘇軾自身の象徴でもある]

其の二

雨の勢いはやむことがない。

戸口から春の川が入り込んで来そうだ。

もはや我が小屋は漁人の舟のよう、

濛濛とした水と雲の中にある。

がらんとした台所、

しなびた野菜を煮ようとしても、

竈は壊れているし、燃やすべき葦は湿っている。

ただでさえ火を使えないのだから、
 今日が寒食であると感じるのは、
 墓に手向けた紙銭しせんを鳥が銜くわえて飛ぶのを見てのこと。
 ああ、我が先祖の墳墓は万里の彼方、
 そして、皇城は九重の門の奥深く。
 途みちに窮したと、瘦せ我慢をせずに、泣いたってよいのだろう。
 火の消えた灰はいくら吹いてももう燃え上がらない……

【補足】[寒食かんしょくの日には火を使わずに食事をし、紙で作った銭を墓に供えて祭る。蘇軾は逆境にあっても、悲嘆する詩を詠まないのだが、この2首は違う。終わりの部分
 は、杜甫が、途とほに窮したと泣きはしないと、詩に詠んでいるのを踏まえている]

■ 【06-3-028】 徐使君分新火

【補足】寒食節かんしょくせつには火を使わず、一夜明けて最初しんかにつける火を新火という。その新火
 が徐大受知事じょだいじゆから届けられた。寒食節の翌日せいめいせつは清明節。

【訳文】

臨臯亭りんこうていに独りぼつんと座り、
 黄州こうにきて三度目の清明節、
 新火を見ようとしていた。
 私なんぞは笑うべき身、
 溝の中に落ちた枯木同然で、
 折って火をつけようとしたところで、
 燃え立ちもはしない。

長く病の内にある私を憐れんで、

黄州の知事さんは、

紅く燃える一本の枝を明け方に分け与えてくれた。

我が家の破れた釜はいつもからっぽなので魚が泳ぎ、

飯なんぞは食わなくても、痩せ我慢の詩を詠んでいる。

戴いた火を手にして、からんとした部屋の内を見てまわると、

煮炊きするものが一つもない。

そうか、そうか、知事さんがくださった新火は煮炊きの火ではなく、

仏教でいうところの「無^む尽^{じん}燈^{とう}」であるのだろう。

^{こんあん}昏暗のうちにいる人々を順に明るく照らすのである。

【補足】「無^む尽^{じん}燈^{とう}」とは仏典にあり、ひとつの燈火が百にも千にも増えてゆくように、
仏の教えによって明るく照らされる人が無限に増えてゆくことをいう]

■【06-3-029】定風波

【^{こう}解題】黄州の東南百十里に蕪^き水^{すい}県^{けん}城^{じょう}があり、その途中に沙湖^{さこ}がある。3月の始めに蘇軾はそのあたりを往き来した。それに関連する幾つかの詞と文を見る。最初に詞から。短い序文がある。

【訳文】

三月七日、沙湖^{さこ}に向かう道中で雨に遇った。雨具は先に行ってしまったので、同行の者は皆狼狽したが、私だけは気にもななかった。しばらくすると晴れた。そしてこの詞を作った。

莫聽穿林打葉聲、[聽^うくまでもありません、林を穿^うったり葉を打^うったりする音は]

何妨吟嘯且徐行。おもむろ〔何の妨げにもなりません、吟唱しつつ徐に行くことに〕

竹杖芒鞋輕勝馬、すすき わらじ〔竹の杖に芒の草鞋——これは馬に勝る軽やかさ〕

誰怕。おそ〔私は怕れません〕

一蓑烟雨任平生。ひさ〔煙る雨に蓑で包んだ身、そいつ暮らしてよらしいのです〕

料峭春風吹酒醒、ひやひや〔酒を醒ますのは料峭と吹きくる春風〕

微冷、〔うすらと寒く〕

山頭斜照卻相迎。ひ〔山のあたりが斜めに照らされて迎えてくれます〕

回首向來蕭瑟處、こうべ めぐ ひっそり〔首を回らせば、ここまで来たのは蕭瑟としたところ〕

歸去、〔帰り去こうか〕

也無風雨也無晴。ゆ〔風雨もなく晴れもないところへ〕

【補足】〔(1) この詞から、蘇軾は草鞋履きで歩いていたことが知れる。かつての州知事時代には概ね馬にまたがるか駕籠に乗るかしての移動であった。(2) 前半の終わりにある「一蓑烟雨、平生を任せる」は一種の自画像。ゴッホといえああの耳を切った自画像を想うように、後世の人々は蘇軾といえあここにある姿をイメージするようになった。(3) 後半は、これまでの歳月は雨の中にあつたが、これからは晴れて行くであろうということを暗示し、かつ、雨でも晴れでも構いはしないと結んでいる。先の「寒食の雨」の詩から「新火」の詩を経て、ここでは軽やかな気分を歌っている〕

■ 【06-3-030】遊沙湖

【解題】蘇軾は何のために沙湖さこに向かっていたのか。この文章に記してある。

【訳文】

黄州の東南三十里に沙湖がある。螺師店ともいう。

私は黄州と沙湖の間に田を買おうと、その田の様子を見に行き、疾やまいを得てしまった。麻橋まきょうの龐安時ほうあんじが善よい医者で、かつ聾者あうしやであると聞き、行って治療を受けた。

龐安時は聾者であるけれども、人より遙かに知恵の回りが速い。紙に字を書いて話をするのだが、数字書いただけで、すぐに深く人の意こころがわかってしまう。私は戯れて、「私は手をもって口と為し、あなたは眼をもって耳と為す。どちらも現代の『異人』でありましょう」といった。

疾やまいが愈えたので、龐安時と一緒に清泉寺せいせんじに遊んだ。寺は蕪水きすいの町の門から二里ばかりのところにある。昔ここで王羲之おうぎしが筆を洗ったという泉があり、その水は極めて甘い。寺から下くだに蘭溪らんけいを臨み、蘭溪の水は西に流れる。私は歌[[浣溪沙]]の詞を作った。

山下蘭芽短浸溪、[山の下の溪川に短く伸びた蘭の芽]

松間沙路淨無泥、[松の間は泥のない沙の道]

蕭蕭暮雨子規啼、[蕭蕭と夕暮れの雨が降る中、子規ほととぎすが啼いています]

誰道人生無再少、[誰がいうのでしょう、人生に若いときは再びないと]

君看流水尚能西、[見てください、流れる水だって西に向かっているではありませんか]

休将白髮唱黄鷄、[鷄が鳴くから白髪が増えてしまうなどと嘆くのはおやめなさい]

この日は劇飲して帰った。

【補足】[(1) 東の坡たかまりは高台なので、稲を作れるような低い土地を得ようとしたのだろうか。蘇軾は家計が苦しいことを前に述べていたが、具体的にどのような経済状態であったのか、田を買う蓄えくらいはあったのか、使用人は何人くらいいたのか、そういう細かいところはわからない。詩文に「童僕どうぼく」という語が散見されるので、幾

人かの使用人がいたのは間違いないが、給金を与えて土地の少年を雇っていたのか、蘇軾は何も記していない。(2) ここに記されているように、蘇軾は田を見に行つて病気になる、次の文などから左肘が腫れたとわかる。麻橋まきょう〔蕪水きすい県に属する村〕の医者、龐安時ほうあんじ〔字は安常あざな あんじょう〕の治療を受けた。「手をもって口と為す」とあるのは、筆談の情景であるのだが、思うことをたちまち詩文にしてしまう日頃のあり方〔それが罪を蒙る要因となった〕をもいっているのだろう。(3) 詞の後半で「流れる水が西に向かう」とあるのは、中国において川は基本的に東に流れるからで、川が西に流れるなら時間も逆転するだろうというのである]

■【06-3-031】書田

【解題】蘇軾が田を欲しがったことは次の短文にも見える。

【訳文】

私には世の中にこれといって求めるものはない。ただ二頃けいの稲田があればよい。それで十分に粥が食べられるだろう。あちこち訪ねまわっているのだが、全くもって得ることができずにいる。私が進む道かんに難なんが待ち受けるときには、どこに行こうとしてもうまくいかないものなのだろうか。そもそも人が生きるには、自ずから定まった持ち分があって、ささやかな満腹といえども、名声や富貴と同じくらいに、軽々しくは得られないようになっているのだろうか。

【補足】〔一見すると絶望しているかのようだが、実はそうではない。ここにある「人の生には自ずから定まった持ち分がある」〔人生自有定分〕とは、運命によって決まっているのだから諦めるしかないという意味ではない。そのような大局観を得ることで、先の詞に見た「風雨もなく晴れもない」〔也無風雨也無晴〕という境地になれるのである。なお、蘇軾は翌年もずっと田を得ることを模索し続けていて、この短

文はそのころに書いたものであるようだ]

■ 【06-3-032】 書呂道人硯

【解題】蘇軾が沙湖に行った折の短文。

【訳文】

沢州の呂道人の沈泥硯は、投壺のような形をしている。首のところ「呂」の字があり、それは刻んだのでもなく画いたのでもない。そして金属のように堅い。呂道人が死んでからはその硯は次第に得難くなった。

元豊五年三月七日、たまたま沙湖の黄氏の家に至り、一枚の呂道人の硯を見た。黄氏はその貴さを知らなかったので、それにこのように記した。

【補足】「投壺」は昔の宴席で使われた遊び道具。矢を壺に投げ入れて勝敗を競い、負けたものが何か芸をして人々を楽しませた]

■ 【06-3-033】 与陳季常

【解題】蘇軾が沙湖に行ったことについては、陳慥 [字は季常、方山子] [→作品番号 06-3-019] に宛てた手紙にも記されている。

【訳文】

近ごろ螺師店のあたりを往復して田を看てきました。螺師店の境にまで至ると、黄岡県の潘君と医者 龐安時君が会いにきてくれました。龐君は私の臂の腫れを視ると、「これは風気によるものではなく、薬石の毒によるものです。針でそれを取り去らないと、きっと瘡となってしまふでしょう」というので、一緒に麻橋の龐君の家に行き、数日間滞在して針で治療してもらいました。その結果、龐君がいった通りに

愈えたのでした。

家に帰ると、貴君からのお手紙と薬が届けられ、深く御心配して下さったことや、このところ安らかにお過ごしであることなどを審つまびらかにいたしました。

かつてこの老翁でんとうろうくが所望した『伝燈録』なども届けて下さり、一つ一つ感謝ごだいしに堪えません。『五代史』もまた受け取っております。

看てきた田はそれほどよいものではありませんでした。しほやめておきましょう。蕪水きすいの溪山はなかなか秀逸でしたし、龐君は熟達した医者で奇士であります。……

【補足】 [(1) 臂ひじの不調で蘇軾は薬を服していたのだろうか、龐安時ほうあんじは鍼による治療を提案して、よい結果を得たのだった。(2) 陳慥ちんぞうからいろいろな書物を借りていたことがわかる。『伝燈録』は仏教の書物で、『五代史』は五代十国時代に関する史書である]

■ 【06-3-034】 単龐二医

【解題】 龐安時ほうあんじ [字は安常あざな あんじょう] ともう一人の医者について記した文章。

【訳文】

蜀しよくの人の単驥たんじは、科挙を受けたものの不合格となり、その後、医術をもって高い評判を得た。その術は『難経』素問なんきやう そもんといった古い医学書に基づき、そこから新たな工夫を出し、しほば巧みな技を發揮してみごとに治した。ただ完壁けんぱくというわけではなかった。仁宗皇帝が病氣じんそうになったときに、孫兆そんちやうとともに単驥が治療に当たった。しかし、よい効果がなくて皇帝は亡くなってしまった。二人は(治療に失敗したことから)死罪こうたいごうになるところを、皇太后[仁宗の曹皇后そうこうごう]の優しさをたのみとして、医者いしやの罪ではないとされ、数年間の官職停止ですんだ。単驥はいま朝廷の官僚となり、孫兆はすでに亡くなった。

私は黄州こうしうに来たところ、隣の町に龐安時ほうあんじという評判の医者いしやがいた。その医術は単驥に似ていて、そ

れに加えて鍼^{はり}の術が絶妙である。ただ、聾^{ろう}を患いそれを自分で治すことはできなかった。人の病を愈やすことでは神のようである。古^{いにしへ}の人も目を見張り、称賛するであろう。

単驤も龐安時も治療代を厳しく求めることはなく、様々な事物や歴史にもひろく通じていて、それも人より優れている。

元豊五年三月、私はたまたま左腕の腫れを患ったところ、龐安時は鍼ですぐに治してくれた。それでこのことを記しておく。

【補足】[前半は単驤^{たんじょう}のエピソード。仁宗皇帝^{じんそう}の病気は症状から推測するに脳梗塞ないしは脳出血であったようで、何度か発作を繰り返し、後遺症による言語障害や身体麻痺もあった。いかに名医であっても、宋代^{そうだい}の医術でそれを治すことは不可能であったろう。朝廷内の権力抗争もからんで、孫兆^{そんちよう}と単驤が死罪になりかけたのを曹皇后^{そうこうごう}が救った。曹皇后が優れた人であったことは、蘇軾が獄中で詩に詠んでいる [→作品番号 05-5-093]]

■ 【06-3-035】 西江月

【解題】同じ時期に詠んだ詞。短い序文がある。

【訳文】

春の夜に、蘄水^{きすい}のあたりを歩き、酒家^{しゅか}に寄って飲んだ。酒に酔い、月に乗じてある川の橋の上にまで行き、馬から下り、^{ひじ}脛を曲げて休み、しばらく眠った。目が覚めるともう暁に及んでいて、たぐさんの山が並び立ち、水が音を立てて流れていた。人の世ではないように思えた。それでこの詞を橋の柱に書き付けた。

照野^{しょうや}弥弥浅浪、[野を照らすのは弥弥と流れる浅い浪[によって反射する月の光]]

横空隱隱層霄。あれあわ〔空に横たわるのは隠隠と重なる雲〕

障泥未解玉驄驕。〔泥除けをまだ解かない白い駿馬は元気いっぱい〕

我欲醉眠芳草。〔でも私は酔って草の上で眠ってしまうのです〕

可惜一溪風月、〔愛すべきはこの川べりの月〕

莫教踏碎瓊瑤。びぎょく〔美玉のような光を踏み潰してはなりません〕

解鞍軟枕緑楊橋。〔鞍を解いて枕とします、緑の楊の橋で〕

杜宇一声春曉。ほととぎす〔杜宇が一声鳴ればもう春の暁です〕

【補足】〔橋の上で眠って朝を迎えたのが事実であったかどうかはわからない。3月の中ごろはいまの暦で4月後半だとしても、橋の上で夜明かしてできるほどに暖かくはないだろう。しかも肘を病んでいるはずなのに、肘を曲げてごろ寝をするといっている。先の詞にあった「一蓑烟雨、平生を任せる」いちりゆうえん う へいぜい まかの自画像の一つのバリエーションとしてこのような己を描いてみせたのだろう〕

■ 【06-3-036】次韻答元素、并引

【解題】楊絵ようかい〔字は元素あざな げん そ〕〔→作品番号 06-2-083〕から送られてきた詩に次韻した。序文がある。

【訳文】

いん
引〔序文〕

私がかつて楊絵ようかいに贈った詞に「天涯同是傷流落」てんがいのを こ りゅうらく いた〔天涯同じは是れ流落を傷む〕という句があった。楊絵は、(今回送ってきてくれた詩のなかで)この句は今日のありあさまをあらかじめ示すものであったといつて、そのとき一緒だった六人の存亡を悲しんだ。六人とは、張先ちやうせん〔字は子野〕、劉述りゅうじつ〔字は孝叔〕、

陳舜俞^{ちんしゆん ゆ}〔字は令挙^{れいきよ}〕、李常^{りじやう}〔字は公択^{こうたく}〕、そして楊絵と私である。

【補足】〔(1)「天涯同是傷流落」の句は作品番号 04-3-088 で見ている。(2) 上に言及している6人が集まった酒宴については作品番号06-2-054で見ている。張先^{ちやうせん}、劉述^{りゆうじゆつ}、陳舜俞^{ちんしゆん ゆ}の3人は先に亡くなり〔→作品番号 05-5-075〕、楊絵^{やうかい}、李常^{りじやう}、蘇軾^{そしつ}の3人は健在であったが、それぞれに官界では不如意な状況に置かれていた]

愁うまでもない——

春が終り、柳絮^{りゆうじよ}が風に随って飛んだとしても。

喜ぶまでもない——

仙薬の効果があつて頬に紅が増したりしても。

あらかじめしるしがあつたりするのだろうか——

天^{はて}の涯に流落すること。

たまたまうまくいってしまうこともあるか——

銅の像とともに数百年の歳月を見るようなことも。

はと覚めたら何もかもが夢であつた——

というわけではないだろう。

はたと悟つたら全てが空^{くう}であつた——

そういうわけでもないだろう。

生きるか死ぬか、六人の者をあれこれ悲しむ必要などない——

地獄も浄土も結局は同じなのだから。

【補足】〔楊絵^{やうかい}は、きっと感傷的な詩を返してくると期待していたのだろう。それがわかるから、蘇軾^{そしつ}はわざとまぜつかえすような句を並べたのだろう]

■ 【06-3-037】 臨江仙

【解題】 この詞は、上の詩と同じところにやはり楊絵 [字は元素] に贈ったものであるようだ。

【訳文】

詩句端来磨我鈍、[貴君の詩句がきて鈍い私を磨いてくれましたが]

鈍錐不解生銹。[鈍い錐である私は袋の中にあっても鋭さを見せるようなことはできません]

歡顔為我解冰霜。[貴君の歡びの顔は私を閉ざす氷を融かして下さり]

酒闌清夢覺、[酒たけなわにして夢はさっぱりと覺めて]

春草滿池塘。[池のほとりは春の草でいっぱいになるでしょう]

忘念雪堂坡下老、[東の坡の雪堂で老いるこの私は]

昔年共采芸香。[昔ともに宮中の書庫の香の内におりました]

功成名遂早還鄉。[貴君は功成り名を遂げて郷里に帰るのでしょう]

回車來過我、[車を回らせて私を訪ねて下さるのなら]

我喬木擁千草。[私は庭の木、庭の草とともにお迎えしましょう]

【補足】 [(1) 後段にある「共采芸香」は、宮中の「芸閣」[書庫] でともに仕事をしたことを意味し、この詞が楊絵に贈られたと推測する根拠の一つとなっている。(2) 楊絵はこのころに黄州から数十キロ下流の興国軍の知事 [「軍」は行政単位の呼称。州と同レベル] となったので、赴任する際に黄州にまで足を伸ばした可能性がある。ここでは、楊絵がこれから黄州を訪問するという詩を寄越した返事であるという解釈に基づいて訳した]

■ 【06-3-038】 二紅飯

【解題】東の坡^{たかまり}を開墾して2年目の夏、大麦二十石余りが収穫できた。そのことについて書いた短文。

【訳文】

今年、東の坡^{たかまり}で大麦二十石余りが収穫できた。これを売ったところで非常に安い値にしかないし、
^{うるちまい}ちょうど粳米がなくなろうとしていたので、使用人に課してこれを舂^つき、飯として食べることにした。大麦の
飯は嚼^{さく}むと嘖^{さく}嘖と音がし、小さな子供たちは歯を食^くいしばって、「虱子^{しらみ}かみかみ、かみかみ虱子」と声
を合わせる。それでも、午後に腹が減っているときなら、水でひたしてふやかしてやると、甘酸っぱくてさら
ざらと食べることができ、西北の田舎村の風情がある。今日は、料理人に小豆とまぎれて炊いてもらった
ところ、これは最も味がよかった。老妻は大いに笑って、「これは新発明の『二紅飯』^{にこうはん}でございますね」と
いった。

【補足】〔(1) 蘇軾は食についても一家言あったが、贅沢な食事を好むものではなかった。粗食にも喜びを見出す心の大きさがあった。(2) 「西北の田舎村」とあるのはかつて赴任した鳳翔^{ほうしょう}のあたりを指すのだろうか。水田は中国の南東側〔淮河^{わいが}、長江^{ちょうこう}の下流域^{らくよう}〕に多く、その米^{ちようあん}を洛陽^{らくよう}や長安^{ちやうあん}に運ぶために隋^{ずい}の煬帝^{ようたい}は大運河を建設した。鳳翔は長安よりもさらに西で、米は貴重品であった。(3) どうやって大麦を食べたらよいか工夫し、小豆と混ぜて炊くのが最もよいと発見した。大麦は薄い紅色を呈するので、小豆と合わせて「二紅飯^{にこうはん}」というのである〕

■ 【06-3-039】 与仏印

【解題】廬山^{ろざん}の仏印^{ぶついでん}禪師^{じりょうげん}了元^{りょうげん}〔→作品番号06-2-077〕に宛てた手紙。

【訳文】

数百枚の美しい石を収集し、戯れに『怪石供』の一篇を作りました。どうぞお笑ください。ここに記した通りになりましたなら、山中のお食事は今後一切心配せずにすむであります。それを想うとさらにまた大いに笑えます。土地の者が墓中より得た銅盆を一枚持ってきましたので、怪石を盛るのによからうと、それを買いました。それも結縁のためにお送りいたします。

【補足】 [この手紙の内容は次の『怪石供』の文章を読むとよくわかる]

■ 【06-3-040】 怪石供

【解題】 蘇軾は赤壁で美しい石を拾っている [→作品番号 06-1-082]。これはその後日談。

【訳文】

『書経』の「禹貢篇」に「青州に鉛、松、怪石がある」と記されている。これを解釈する者は「怪石とは石で玉に似たものである」という。

いま齊安[黄州]の長江のほとりて美しい石がよく得られる。玉と区別しにくく、紅、黄、白が多い。石には、人の指にある螺のような、精妙で愛すべき模様がある。巧みな者が意を尽して描こうとしてもこれには及ばない。これが昔の人のいう「怪石」なのだろうか。

物が醜いとか好いとかは、その形や見栄えから生じるのだから、私は醜、好のもとがどこにあるのかいまだにわかっていない。もし世の中の石がおしなべてこの美しい石のようであったなら、いまは平凡とされる石がかえって非凡な怪石となるのではなからうか。

世界には形態でものを語り合う国があるという。口ではものがいえず、身体で形態で伝え合うのだ。形態で語るのは口で語るより速いといふけれど、我々がそれをしようとしても非常に難しいであろう。

天の機が動くときには、美しい石だから形態でものを語る人たろうか、たちまちできあがるのだが、人は

それをひどく巧みであるとする。それたものでありながらも、怪石は、「禹貢篇」の書かれた時代から「怪」であるとされてきた。

齊安の子供等は長江で水浴びをして時々この怪石を得る。私は遊びで餅餌[小麦で作った平たい団子]と石を交換し、すてに二百九十八枚を得た。大きいものは二寸、小さいものは棗、栗、菱、芡の大ききである。虎や豹の首のようで、口、鼻、眼らしいところがあるのも一つあり、それを群石の中の長としている。

古い銅の盆[鉢]が一つあったので、そこに石を盛り、水を汲んで注ぐと、きらきらと輝く。

廬山の帰宗寺の仏印禪師の使者がたまたま黄州にきたので、この怪石を禪師に供えることにした。禪師はもとより道眼[悟りを開いた眼]をもって一切を観ている[世界の本質を得ている]。その観点からすれば、世界は混沌として空虚、一切の物は実は存在していない。夜光の一尺の璧[古来有名な宝玉]も瓦礫と同じである。ましてこの怪石などは取るに足りないものである。

しかし、禪師におかれては、これを供えることをどうか受け入れていただきたい。硯に注ぐ水をこれにかけて、無理にでも一つ笑っていただきたい。そしてこれからは、山の僧や野の人が禪師に何かを供えようとするときに、衣服や飲食や寝具をまかなう力がない者は、浄らかな水を怪石に注ぐということにしてはどうか。私からその慣習が始まったということになるであろう。

元豊五年五月、黄州の東の坡の雪堂で書く。

【補足】[最後は、物として何も供えることのできないような人でもこれならできるという蘇軾のやさしい思いである。そのような怪石が帰宗寺にあるということが評判になれば、参詣する者が増えて寄進される金品も増えるであろうから、寺では食べる物に困ることはもうないだろうというのが、上で見た手紙の内容である]

■ 【06-3-041】 後怪石供

【解題】怪石の後日談。これは1年ほど後に記された文章で、ついでにここで見てお

こう。驚くことに、翌年^{こう}に杭州^{さんりょう}から参寥^{どうせん} [道潜] [→作品番号 06-1-081] がきてしばらく^{こう}黄州に滞在し、その夏頃に交わされた会話の記録。

【訳文】

私が^{かいせき}怪石を^{ぶついでんぜんじ}仏印禪師に供えたところ、^{ぶついでんぜん}仏印禪師は私の文を石に刻んだ。私はそれを聞いておかしく感じ、^{さんりょう}参寥に向かつてこのようにいった。

「そもそも怪石がどこからきたのかといったら、子供たちから餅^{へい}と交換して得たのです。食べられるものと、何の用にもならないものを交換したのです。それだけで十分に笑えます。^{ぶついでんぜん}仏印禪師は私の文をわざわざ石に刻みました。それもまた笑えます。もしも^{ぶついでんぜん}仏印禪師に初めから餅を供えたのなら、^{ぶついでんぜん}仏印禪師はそんなことを石に刻んだりしませんでしょう。石と餅はどこが違うのでしょうか。これでさらにまた笑えます」

参寥は、

「そうそう。供えるのも幻、受けるのも幻、言葉を刻むのもやはり幻でありましょう。幻で結構ではありませんか」

そして、腕を挙げて私に示し、

「この腕^{きょう}を拱して[両腕を胸の前に組んで]人に挨拶しますと、人はきっと喜びます。この腕^{びき}を戟して[腕を曲げて肘を突き出す]人を罵りますと、人はきっと怒ります。同じ腕でも喜ばせたり怒らせたり、異なったことになります。世の中はこう いったことばかりです。拱も戟もつまりは幻で、喜びも怒りもあるようにいて根には何もありません。石に刻もうが刻むまいが、どうでもよいではありませんか」

私は大いに笑い、

「あなたはどれくらい面白いのですか」

怪石およそ二百五十を示したところ、参寥は二つを手にとった。

■ 【06-3-042】 哨遍

【**解題**】しばらく黄州に滞在していた董鉞〔字は毅夫〕〔→作品番号 06-3-023〕がいよいよ故郷に帰ることになり、蘇軾はこの詞を贈った。これは陶淵明の『**歸去来兮の辞**』〔→作品番号 06-2-051〕を改作したものである。短文が添えてある。

【**訳文**】

陶淵明は『**歸去来兮の辞**』を作った。その詞はあるがその声〔**節回し**〕はない。

私は東の坡で耕し、雪堂を建てた。人はその陋ているのを笑うのだが、鄱陽の董鉞君だけはここに来て悦んでくれ、隣に住みたいとまでいった。そこで、『**歸去来兮の辞**』の詞を使い、やや改変して声律に合うようにして、董鉞君に贈った。

東の坡に行って、家の者にこれを歌わせ、耒を手にとり、牛の角で節を取ったなら、きっと楽しいであろう。

為米折腰、〔米のために腰を折りました〕

因酒棄家、〔酒が乱れて郷里を棄てました〕

口体交相累。〔口と体がともにも累となりました〕

歸去来、〔帰りましょう〕

誰不遣君歸。〔誰が君を帰らせてくれないのでしょうか〕

覺従前皆非今是。〔わかりましたよ、これまでは全部が馱目、いまがよいのです〕

露未晞、〔露はまだ乾きません〕

征夫指予歸路、〔旅人は私の帰り道を指してくれます〕

門前笑語喧童稚。〔門の前で子供たちがにぎやかに笑っています〕

嗟旧菊都荒、〔ああ、もどからあった菊はみんな枯れてしまいました〕

新松暗老、〔新しい松がもう立派に暗い蔭をつくっています〕

吾年今已如此。[私の年齢はすでにこうなのです]

但小窓容膝閉柴扉、[小さな窓のある部屋に膝を入れて門を閉ざしましょう]

策杖看孤雲暮鴻飛。[杖をついて、ぽつんと雲が暮れ、^{おおどり}鴻が飛ぶのを見るのです]

雲出無心、[雲は無心より出て]

鳥倦知還、[鳥は倦めば還るのを知っています]

本非有意。[もとより何の意もないのです]

噫歸去來兮、[ああ、帰りましょう]

我今忘我兼忘世。[わたしはいま我を忘れ、世も忘れました]

親戚無浪語、[親戚とも無駄口はたたきません]

琴書中有真味。[琴と書物の中に真の味があります]

歩翠麓崎嶇、[山^{みどり}の翠の高い低いを歩き]

泛溪窈窕、[谷川^{うが}の奥深い流れに舟を泛べます]

涓涓暗谷流春水。[暗い谷からこんこんと春の水が流れてきます]

親草木欣榮、[草木^{よろこ}が欣び榮えるのを見るのです]

幽人自感、[ひっそりと生きる人は自分で感じます]

吾生行且休矣。[我が人生はこいて終わってゆくのだと]

念寓形宇内復幾時、[思うに、宇宙に自分の形を寓^{ぐう}するのはどれほどのことなのでしょうか]

不自覺皇皇欲何之。[遠く遠くどこに行くとも知れません]

委吾心、[自分の心に任せればよいのです]

去留誰計。[行くのも留まるのも]

神仙知在何處。[神仙がどこかにいるかは知れません]

富貴非吾願。[富貴も私の願いではありません]

但知臨水登山嘯詠、[ただ水に臨み山に登って吟唱するだけです]

自引壺觴自醉。[自分で酒を注ぎ自分で酔うのです]

此生天命更何疑、[我が人生はかくあれとの天の定めには疑いはありません]

且乗流、[さあ、流れに乗って]

遇坎還止。[止まるところに遇^あったら止まるだけです]

【補足】[免官となった董鉞^{とうえつ}に贈るのにまことにふさわしい作品であるのだろう。董鉞は罪人となった蘇軾が東の坡^{たかまり}で耕す姿を見て感じるどころがあった。蘇軾は陶淵明^{とうえんめい}を大きなよりどころとして東の坡^{しやうへん}で耕していた。この『哨遍』は陶淵明と蘇軾の心の共鳴から生まれた詞で、それがまた董鉞の心に共鳴するのである]

■【06-3-043】与朱康叔

【解題】^{がく}鄂州知事^{しゅじゅしやう}の朱寿昌^{あざな} [字は康叔] [→作品番号 06-2-075] に宛てた手紙。上で見た詞について記している。

【訳文】

^{かくめい}閣名については長らく思案していますが、まだ佳^よい名を思いつきません。閣のまわりの様子や、近隣にゆかりのある故事や故跡についてさらに詳しく教えていただければ幸いです。

^{とうえつ}董鉞君とは多くの日を一緒ににはなはだ楽しく過ごしました。毎日のように貴君のことを褒めておられました。

私^しはかねてから陶淵明^{とうえんめい}の『^{ききょんらいけい}歸去来兮の辞』を好んで誦じておりましたが、音律にうまく合わないのを常々残念に思っていました。近頃、少し言葉を足したり削ったりして、『哨遍^{しやうへん}』の詞としました。言葉を改めたとはいえ、その意^{こころ}は改めていません。……

【補足】[朱寿昌^{しゅじゅしやう}は新たに完成した閣の命名を蘇軾に依頼したのであろう、そのこと

が冒頭に記されている]

■ 【06-3-044】 蜜酒歌、并叙

【解題】蘇軾のもとには時折「異人」が訪れる。蜀の綿竹の出身の道士の楊世昌が廬山から来てしばらく黄州に滞在した。楊世昌は蜜酒〔蜂蜜を水に溶かして発酵させた酒〕の製法を伝授し、蘇軾はそのことを詩に詠んだ。短い序文がある。

【訳文】

叙
西蜀の道士楊世昌は蜜酒を上手に作る。極めて醇い醜い酒である。私はその製法を教えてもらったので、この歌を作って贈る。

六カ月もの間、農夫が汗を流し、
真珠にも玉にもたとえられる米ができて、
それからよい酒が作られる。
その香りも、春のうちから自ずと甕に生じるこの酒には及ばない。
これは蜂が耕し、花を米とした酒だ。
作り始めて一日目には、魚が吐くような小さな沫が出て、
二日目には、きらきらと光が生じ、
三日目には、甕を開くとその香りが町中に満ちる。
十分に発酵するのを待てなくて銀の瓶に注ぐと、
いわゆる甘露の少し濁ったもの、
あるいは醍醐の少し澄んだもの、

一斗に百銭を払ってもよいくらいのこまやかさに声も出ない。

見るがよい、

畑の野菜の花に雨が降るように集まる蜂を。

天は蜂に酒を醸^{かも}すことを教え、

先生[私]を酔わせてくれるのである。

先生はこのところ骨の髄まで困窮し、

人に米を乞うても全く得られずにいた。

世間の万事は先生とは無関係に移り行く。

ただ蜂だけが大いに先生のことを気に掛けてくれているのだ。

■【06-3-045】又一首答二猶子与王郎見和

【解題】上の「蜜酒」の詩に、蘇軾の2人の息子と王適^{おうてき}が和し、それに対してさらにもう1首詠んだ。王適は蘇轍の娘の婿で、科挙の一次試験を受けるために徐州^{じょ}に行ったことは作品番号06-2-023で見えていたが、残念ながら不合格となり、舅の蘇轍が待つ筠州^{いん}に帰ることになり、その途中で黄州^{こう}に立ち寄ったのだった。

【訳文】

青い苔が乾し肉に、青い蒲^{がま}が焼肉に、

瓠^{ひょうたん}の実が鴨の肉に、豆の煮汁が乳に、

肉の脂^{ヨーグルト}が酥^ろに、菜種の油が蠟燭^{ろうそく}に、……、

昔から種々の発明は、

貧乏な家に何もなくて、困り果てた人がひねり出してきた。

蜜酒もそのひとつだ。

とはいえ、何でもかんでも代用品でまかなうのでは自然の摂理を乱すであろう。

私は詩書を酒に代わる楽しみとしてきた。

それによって、田舎親爺がいわしの先生のようにってしまったのだが、

しかし、根本がなっていないのだから、

いつまでも化けの皮を保ってられなくて、

冠をぬいで、犁に助けられる親爺にまた戻ってしまったのだ。

蜜酒はたとえ代用品でも、暑かろうが寒かろうが味は変わらないので、

ころころ変わるこの田舎親爺はととも及ばない。

田舎親爺の詩の味わいは薄いのだが、

愛すべきは諸君三人が作った詩で、本物の酒のようにまい。

それいえば、昔むかしある貴族の娘が王君とかいっ人のもとに嫁いたところ、

娘がひどく浮かぬ顔でいるので、

一族の長が「夫君に何か不満でもあるのかい」と、その娘に尋ねた。

娘がいうには、

「我が一族の某君、某某君、某某某君……は、

幼いころから見てきましたけれど、いずれも優れた男子です。

世の中の殿方とは全てそいふものだと思っておりましたのに……」

ああ、我が家では全く逆で、

息子どもを見ていたのでは、

王適君のような人が世間にいるとは想像もできない。

【補足】[この詩の終わりは、同じ王姓の男児でも、昔の婿殿は期待はずれだったが、いまの王適は非常に優れているとして、試験に落ちた王適を励まそうとしたのだ]

■【06-3-046】与滕達道

【解題】蘇軾^{みつしゅ}に蜜酒^{みつしゅ}を伝授^{ようせいしやう}した楊世昌^{ようせいしやう}がしばらく^{こう}黄州^{こう}に滞在^{とうげんはつ}したことは、滕元発^{とう} [滕甫^{あびな たつどう}、字は達道] [→作品番号 06-2-078] に宛てたこの手紙からも知ることができる。

【訳文】

私は時氣^{じき}に感じて時に痛み、月を超えて臥せってしまうことがあります。いまはすっかりよくなりました。ただし、幼い者たちがお臥せっていて、ごたごたしております。楊世昌^{ようせいしやう}という道人^{どうじん}きていまして、綿竹^{めんちく}の人で、多芸^{ふんまん}でいろいろなことができます。それによって何やら憤懣^{ふんまん}を晴らしているかのようです。ここに留まっ
てほぼ一年となります。よく知るにつれて、そのことがわかってくることでしよう。

【補足】 [(1) 楊世昌はなかなか複雑な人物であったのだろう。 (2) 楊世昌がいつ黄州^{こう}にきたのかははっきりとはわからないが、黄州を発ったのはこの翌年の5月9日である。滕元発^{とうげんはつ}にこの手紙を書いた時期は確定されていないが、楊世昌は遅くともこの年の初めには黄州にきていたのだろう]

■【06-3-047】归来引送王子立帰筠州

【解題】王適^{おうてき} [字は子立^{あびな しりゆう}] が筠州^{いん}に帰るに際して、陶淵明^{とうえんめい}の『^{ききよらいげい} 歸去来兮の辞^じ』に基づく作品を贈った。この詩は、最初は王適のセリフ、次に蘇軾のセリフ、そしてそれを繰り返すという体裁で訳す。

【訳文】

おうてき
王適——

帰ろうてはないか。

世間に求められなかったのだから、

帰ればよいだけなのだ。

北を見れば水がひどく溢れて流れ、

西を見ればひどく濁った塵に覆われ、

野には馬が乱れて走り回っている。

幸いにも我が首は馬のように繋がれていない。

じょ
徐州を出て南に走り、

丘陵が続くのを見て、ためらいが増した。

わい が
淮河の流れに乗って、

水面を俯き見て、自分の姿が以前と変わってしまったことに驚かされた。

そして、東の坡たかみりに取り残されている老人のことを想い、

千里の道も軽いとして、

老人の家の扉を叩いた——

蘇軾——

私は君と雪堂せつどうで清らかな夜をともに過ごし、

明月の光を身に浴びる。

かつて君がここに来たとき、

何の馳走もてきず、

がらんとした部屋にあったのは虫の声だけだった。

私は君の袖を曳いて引き留めるのだが、

君の僕夫は早く帰ろと促す——

王適——

帰ろうてはないかい。

道は遙かへと窮まることかない。

ここからどこに行くのか、

北の川から南へ、

南の川から北へ……

蘇軾——

ここにいる君を見れば、

厳しく聳え立ち、豊かにして大きい。

貧窮のうちにあっても君が堂々としているのは、

糠を食らっているからではなく、

身の内にみち道を抱いているからだ。

君がますます穏やかであるのは、

己に打ち克っているからだ。

私はいま荒れた浪の中において、

視てもこんこん昏昏として暗く、聴いてももくもく黙黙として音かない。

君でなければ私の過ちを救うことはできない。

君をしばらく見ないと自分が損なわれてゆくのを恐れる。

私は君とともに行きたいと思う。

しかし、私が行く道はないのだろし、

君もまた何かに畏れて私と一緒にいようとはしない。

そうだ、君には我が弟がいる。

君は宝玉の原石、弟はそれを磨くこうじん工人である。

【補足】[ちなみに、蘇軾の弟子に当たる秦觀しんかんはこの春に都で科挙の二次試験に挑んだものの不合格となった。蘇軾の高弟といえども科挙には苦労したのだった]

■【06-3-048】与李公拱書

【解題】親友の李常りじょう あざな こうたく [字は公拱] [→作品番号 06-2-069] は朝廷に召されて都に行くことになり、蘇軾はこの手紙を送った。

【訳文】

行動を治め、用いるところを控えることについて、昔から変わるところがないと知りました。私は五十歳になって、それを初めて実際に活かせるようになりました。

大ざっぱいことけちると「慳」に尽きます。飾って美しくいなら「儉約」です。私かこれをするのはそこの俗人とは少しばかり異なって、まことに淡いといえますか、味のあるものです。古い詩に「不戢不難、受福不那な」[苦難が集まると、たぐさんの福を受ける]とある通りです。口や体が欲しがるものは窮まるところがありません。いつもいつもそれを節制するならば、福を惜しみ、寿命を延ばす道となりましょう。これはごく俗なことのようにいて、やむをえないところから出てくるものです。

私が思いますに、これは優れた策で、私独りで用いるよりはと、貴君にも献じたいと思います。貴君はこれから都に行かれるわけですが、ぜひこの策を用いられますように。お笑いだされよ。

【補足】[(1) 蘇軾は黄州こうにきて経済的に逼迫し、賈耘老かうんろうの法を用いるようになったことは作品番号 06-1-103 で見ている。それは単に銭の遣り繰りにとどまらず、一つの哲学となったようだ。それを都に行く李常りじょうに授けたのである。(2) 同じく李常に宛てた作品番号 06-1-043 の手紙と合わせて読むなら、蘇軾が友に何を伝えたかったかがよりよくわかってくるであろう]

■ 【06-3-049】 謝陳季常惠一掬巾

【解題】 5月に陳慥^{ちんぞう} [方山子^{ほうさんし}] [→作品番号 06-3-033] がきて、深く被るタイプの頭巾^{あんきん} [掬巾] を贈ってくれたので、それへの謝礼の詩。

【訳文】

陳先生^{ちんせんせい} [陳慥^{ちんぞう}]の胸の内はというと、
一万斛^{こく}の荷を積載する船を容れるほど広いのに、
この丸っこい頭巾はどうしてなかなか小ぶりである。
陶淵明^{とうえんめい}は頭巾^こで酒を漉したというが、
この頭巾ではたった半升しか入らないだろう。
杜欽^{と きん}という人は、目の不自由^{あざけ}さを嘲るあだ名で呼ばれるのを嫌い、
別のところを目立たせようと、わずか二寸のちんちりんの冠を被ったという、
この頭巾はそれくらい大きしかない。
陳先生は、本来は武勲を挙げて黄金を頭に戴くべき人で、
いつまでも書生のような服を着て過ごしてはいないだろう。
いつかきつと、
弓^やを手に箭を腰に付け、異国の山を登って、その王を捕えることだろう。

【補足】 [先に雲巾^{うんきん}を贈られた謝礼の詩を詠んでいる [→作品番号 06-3-021]。頭巾は贈答品としてよく用いられたのだろう。それとも、蘇軾にはより似合う頭巾を被らせたいかなるところがあったのだろうか]

■ 【06-3-050】 贈黃山人

【**解題**】例によって蘇軾の「異人」^{いじん} 好みを示す詩。黃山人^{こうさんじん}がいかなる人であったのか、この詩のほかにはわかるものはない。

【訳文】

黄山人^{こうさんじん}の頬は赤くて人を照らすほど、
 黄山人の眉毛は長くて眼を覆うほど。
 道^{みち}に遊ぶのに倦^うみ、もはや道教の奥義を語ることもなく、
 菩薩の教えを説^{ひげ}きりも、鬚をせせと伸ばしている。
 学問を絶ってこそ真の知恵、
 禅を説く坊主などお笑い草。
 この東の坡^{たかまり}で先生とともに、
 爐でことごと三年の間、仙薬を煮つめるとしよう。

■ 【06-3-051】問大治長老乞桃花茶栽東坡

【**解題**】東^{たかまり}の坡に茶を植えようと、大治長老^{だい や ちょうろう}に桃花茶^{とう か ちゃ}という品種の種子を求めた詩。興国軍大治県に桃花寺^{とう か じ}があって、そこの泉のまわりで栽培される茶が桃花茶で、絶品だという。大治長老は桃花寺の僧なのだろう。興国軍は作品番号 06-3-037 で見たように楊絵^{ようかい}の赴任地で、黄州から長江^{ちようこう}を少し下ったところの南側なので、詩中に「江^{こう}南^{なん}」と詠まれている。

【訳文】

古^{しゅう}く周の時代の詩では茶は苦いものとされ、
 茗飲^{めいじん}[茶を飲む]の習慣は近世[南北朝時代]に始まったという。

初めは御馳走を食べすぎたときに、
茶によって腹の滞り^{すす}を雪ごうとするものだった。
私の畑はちっぴん^{チン}で、
麦や桑だけもいっぱいいっぱいであるのに、
わずかの隙間も無駄にはまいと、
なんとまあ、さらに茶の種子をもらって植えようとしている。
飢えから免れられるかどうかはまだわかっていないのに、
たらふく食べた後の算段をしようというのだ。

農業をするのも商売と同じように、
新しい取り引きが成り立つかどうかまず試すべきで、
茶の種子をいただけるか否かのお尋ねをする。

春が来ると、凍っていた地を裂いて、
紫色の茶の芽が鋭く出てくるようになるだろう。

牛や羊がその芽を踏まぬように叱りつけ、
茶道具を用意するのはまだまだ先のこと。

こうなん^{こうなん}の老いた道人^{だいやちやうろう} [大治長老]は、

歯や髪が年々抜けてゆくわけだが、

ここ東の坡^{たかまり}では年々茶が増えていって、

いつしか「雪堂茶」^{せつどうちや}は名品であるとして知られるようになったりするのか。

その願いは空しく、やはり桃花茶の後裔だと伝えられるのだろうか。

【補足】^{せつどう} [雪堂の近くで栽培するので「雪堂茶」^{せつどうちや}の名を得て、天下で評判になると空想した。茶の種子を送ってくれなければ、茶が有名になる絶好の機会を逃してしまうだろうと、^{だいやちやうろう} 大治長老を冗談で脅したのだ]

■ 【06-3-052】 題温庭筠湖陰曲後

【解題】朱寿昌^{しゅじゅしょう} [→作品番号 06-3-043] はこの年の4月に鄂州知事を辞め、後任として陳瀚^{ちんかん}が赴任した。これは2年後に書かれた文章。題にある『湖陰曲』は、唐代の温庭筠^{ていじん}が歴史を題材に詠んだ詩。

【訳文】

元豊五年、黄州^{げんほう}に謫居^{こう}していたとき、蕪湖^{たくきょ}の東承天院^ぶの僧^この蘊湘^{とうしょうてんいん}が、劉誼君^{うんしょう}を通じて、私^{りゆうぎ}に書^{しょ}を所望^{しよ}してきた。湖陰^{こいん}の故事^{こいん}を石^{いん}に刻^{いん}みたいので、温庭筠^{おんていじん}の詞^{おんていじん}を書^{いん}いてほしいというのであった。私は、鄂州知事^{がく}の陳瀚^{ちんかん}君^{ちんかん}に書^{いん}いてもらったらよいだろうと、その口添^{いん}えをした。

元豊七年六月二十三日、舟^{ぶね}で蕪湖^こを過^こり、その折^{せき}に詞^しを書^{いん}いて渡し、石^{いん}に刻^{いん}んでもらうことにした。

汝州^{じょしゅう}団練^{だんれん}副使^{ふくし}員^{いん}外置^{がいち}蘇軾^{そしつ}が書^{いん}く。

【補足】 [(1) 蘇軾^{しよ}の書^{しよ}をほしが^{しよ}る人がたくさんいて、いろいろな手蔓^{しよ}を使^{しよ}って依頼^{しよ}してきたのだろう。仲立^{ちゆうりゆう}ちをした劉誼^{りゆうぎ}がいかなる人か^{しよ}はわからない。蘇軾^{ちんかん}は陳瀚^{ちんかん}にたらいまわしたものの、結局^{しよ}、2年後^{しよ}に自分^{しよ}で書^{しよ}くことになったのだ。(2) 朱寿昌^{しゅじゅしょう}は鄂州^{がく}を離^{しよ}れてからさほど時^{しよ}をおか^{しよ}ずに亡^{しよ}くなった。70歳^{しよ}であった。蘇軾^{こしう}が黄州^{こしう}に流^{しよ}されたのが朱寿昌^{しよ}が対岸^{しよ}の州知事^{しよ}である間^{しよ}であったのは幸運^{しよ}であった]

■ 【06-3-053】 次韻孔毅甫久早已而甚雨三首

【解題】孔平仲^{こうへいちゆう} [字^{あざな}は毅甫^{きほ}あるいは毅父^{きほ}] [→作品番号 06-3-012] から送^{しよ}られてきた『久^{しよ}しく日^{しよ}照^{しよ}り続^{しよ}いたけれど、た^{しよ}くさん雨^{しよ}が降^{しよ}った』という詩^{しよ}に次韻^{しよ}した。

【訳文】

其の一

飢えた人は夢に見る——

おお、^{こしき}甑に飯が溢れている……

ああ、たらふく食べられる……

いままでの百の憂い ^いがすっかり消える……

夢の中での満腹——それはまさしく「^{くう}空」である。

そんな夢を見ているくらいでは、

まだ真の飢えが何物であるのかを悟っていないのだ。

私の半生は農地を持たずに、^{すり}硯から飯を磨り出してきた。

ここにきて硯が枯れ、磨っても何も出なくなった。

去年は太歳[^{たいさい}木星]が酉の方角にあつたので、

そういう年は、酒食に事欠かないといわれているのに、

隣家に乞い願ってもなお得るところはなかった。

今年はいえ、日照りの趨勢がまだ続き、

この一年、我が^{かまど}竈にどうやって煙を上げたらよいのやら。

^{せいてん}青天に向かって叫んでも、天は遙か遠く……

答えはない。

泥の仏に頭を下げても……

やはり何ともならない。

笑ってしまうのは甕の中の蜥蜴だ、

雨を降らせる仕事の見返りに天から^{ちつろく}秩禄をもらっているはずなのに、

手脚を伸ばしたり縮めたりして這いまわっているだけではないか。

陰陽の入れ替わりにはその時節があり、

雨が降るべきときにはその定めがあるはずだ。
 そもそも民は天が生んだものなのだから、
 天は民を恤^{あわ}れみ、正しく自然を運行させるべきではないのか。
 私はいま窮まり苦しんでいるとはいえ、
 他の人より特にひどいわけではない。
 要するに自分もまた民の一人であるだけだ。
 私の姿は飼い主を失って途方に暮れている狗のようではあっても、
 誰かれ構わずに耳を垂れて我が身を委ねようとはしない。
 冠は逆さま、頭巾は落としてしまって、
 蚊とともに襤褸家に暮らしているさまは、
 人に見せられたものではない。
 昔からの知り合いは、
 私が門を閉ざして開こうとしない^{いか}と唄^{うた}るのであるが、
 貴君に見てもらえばすぐにわかる通り、
 我が門は歪んで開かないだけなのである。
 有り難いことに、
 月の光は我が門からも入ってきて、
 私の部屋を水が撥ねるような明るさしてくれる。
 南からは風が入ってきて、
 疲れ切った私のむしむしとした気分をさっぱりと洗ってくれる。
 衣の裾をたくし上げてその風を入れ、
 貴君が送ってくれた『快哉^{かいさい}の謠^{うた}』に和そうと思う。
 餓えと寒さの心配で、

これまでは明日のことを思う余裕もない私であっただけけれども。

【補足】 [(1) 孔平仲の詩『快哉の謠』は恵みの雨によって旱魃の危機を脱した喜びを歌っていて、それを読んで明日への希望を得たというのがこの第1首。(2) 蚯蚓とこげ水をかけて雨乞いをすることは作品番号05-3-043で見ている。(3) 「要するに自分もまた民の一人である」ようするにまたおのすからたみのいち「要亦自是民之一」の句は蘇軾の平等主義を示す貴重な句であるう]

其の二

去年は東の坡たかまりに瓦礫を拾い、
三百尺にわたって自ら桑を種え、
今年せつどうは草を刈って雪堂を建てた。
日あぶに炙られ、風に吹かれ、
顔は日焼けと汚れで墨のように真黒である。
かつては怠けてばかりだったのを後悔している。
農耕に励むなら、天もその実直さをちゃんと認めてくれるのを、
いまになってようやく知った。
造化ぞうか あるじの主は無心なのかどうか、
そこのところは測り知れないとしても、
天は三尺にもなろうという雨をざあっと降らせてくれた。
雨を降らせる竜にはそれぞれに持ち場があると聞かば、
いまは四方も上も下も同じ一つの雲のうちだ。
草の下の土が潤ったならば、
明け方を待って耕しに行こう。

夜は燈火のもとで機織りをしよう。

そのように思いつつも、

老いた私は疲れてごろんと横になってしまう。

腐れ儒者であるこの私も、自ら精出して耕すなら、

人々の憐れみを受けることなく、

乏しいながらも百年の暮らしを支えることができるであろう。

そこに立っていると、垣根の東から履音を響かせてくる人がいて、

「奔流がやまなくて、長江の谷は水でいっぱいです。

折れた葦やら枯れた荷やらが恣に漂っています」

という。

この雨でこちらの陂が破れてしまったならば、

水が漏れて、次の日照りのときには大変なことになる。

人力のまだ及ばないところは、

天がよしてくれるのを求めるしかないのか。

西北側に千歩の長さにわたって塘を作り、

山からの水を遮るようしたらよいであろう。

人々は私には銭がないのを知っているけれど、

近所の人々はたぶん連れ立って助けにきてくれるだろう。

そうなれば、来年は水路を勢いよく流れる雨を、

何の心配もなく眺めていられるはずだ。

餓えるか飽けは自分自身の努力にあって、

天が関与することではないのだ。

豊作を祝って、一緒に田の中で誰か飲んでくれるだろうか。

酔って倒れても、我が腕枕さえあれば事が足りるだろう。

其の三

天公^{てんこう てんでい}[天帝]は号令を一度しか出さないという。

雨が降ったら降りっぱなし、

十日も続けば長雨を愁うようになる。

貴君の家には田圃があるから、田圃は水びだし、

私の家には田圃はないが、家が水をかふるのを心配しないとならない。

ここに蜀人の楊道士^{しよくじん ようどうし}がきたのだが、

己の両膝だけに従って万里を気ままに旅し、

ひとひらの葉っぱのような小舟があれば、

流れに沿うのもよし、遡るのも悪くはない、

草でも麦でも、食べるものに頓着しない、

泥の中を行こうか地面に寝ようか^{やまい}疾になることもない。

私とはいえば、夜になると餓えた腹がぐぐうと雷のように鳴るし、

ここに身を寄せる愁いは酒かなければ開くことができない。

杜甫^{とほ}は、秋の長雨の下で苔むす白骨を見るときは、

酒を飲まずに哀しむのがよいと詩に歌った。

楊道士^{ようどうし}が洞簫[笛]を手にして清らかに吹く曲は、

それだけですでに十分にもの哀しい。

【補足】^{ようどうし}[楊道士とは作品番号 06-3-044 で名を挙げた楊世昌^{ようせいしやう}である]

■ 【06-3-054】 魚蛮子

【解題】詩題の「魚蛮子」は蘇軾の造語なのだろうか。字面は魚獲りをする少数民族の男子という意味。「漁父」や「漁翁」[→作品番号 05-1-051]よりも野性味が強いのだろう。

【訳文】

魚蛮子ぎょばんしにとっての畑ちようこうは長江わいや淮河が、
 魚蛮子にとっての居室かじは舟ふねの楫かじ、
 魚蛮子の糧かては魚えびに蝦えび、
 耕かさなくても、もとよりふんたんふんたんにある。
 世間の人とは異なる魚蛮子であっても、
 他国から来た人間ではない。
 舟ふねを連ねて川をすみかとし、
 竹の瓦の下に三尺の廬いぼを結び、
 長く子々孫々をここに伝えてきた。
 背中の曲がった者やら、背丈のごく低い者やら、
 風変わりな連中が水を切り開いて、
 道で拾うよりもやすやすと魚を手づかみにする。
 釜は破れて塩もないので、
 魚を刻んで青菜と混ぜて食べる。
 腹が膨れたらごろっと寝るだけ、
 獺かわうそや狙さると異なるところがない。
 人間界の生きる道は困難ばかりで、
 地べたの上に立つなら賦租ふそを納めなければならない。

魚蛮子が波に乗って空虚に浮かぶ暮らしに及ばない。

私がかうっかり、

「その空虚というやつも、いつまであてにできようか。

昔の大臣様は舟や車からも税金を徴収することを発案したのだから

と、いったものだから、

魚蛮子は頭を地面に打ち付けて泣きながら、

「どうかどうか、そのことはお役人さまの耳には入れないでくださいまし」

【補足】 [(1) 蘇軾は罪を得て黄州に置かれているのに、時にはこの詩の終わりにあ
るような政治批判をしてしまう。(2) この魚蛮子の詩からすぐに連想されるのは、
『水滸伝』に登場する阮氏三兄弟であろう。三人は漁師の息子で、水の中で自在に動
き回り、この詩の末尾のように情けなく泣いたりせず、水上の戦いで官軍を撃滅さ
せてしまう。『水滸伝』のモデルとなった宋江が反乱を起こすのは、この詩が詠まれ
てから39年後である。蘇軾は京東の地で反乱が起こるのを心配していたが [→作品番
号 05-4-104]、その予言の通りになってしまうのである]

■ 【06-3-055】 洞仙歌

【解題】 唐と宋の間の五代十国時代に、蘇軾の故郷、眉州眉山県の属する蜀の地には、
蜀国 [前蜀と後蜀] の独立政権があった。後蜀の2代目にして最後の皇帝が孟昶だ
った。蘇軾は7歳のとき、孟昶の宮中に入出入りしていたという尼僧に会ったというこ
とが、この詞の序文に記されている。蘇軾が7歳というと西暦1042年で、後蜀が亡ん
だのが965年であるから、77年を経ている。

【訳文】

叙

私は七歳のときに眉山びざんで老いた尼しゆを見た。姓は朱しゆで名は忘れたが、年齢は九十余りだった。

「かつて師匠ししやうに従って蜀主孟昶もうちやう様の宮中きゆうちゆうに出入りしてました」

といい、

「あるとき、ひどく暑い日に、蜀主しゆしゆ様と花蕊夫人かすい様が摩訶池まかちのほとりで夕涼みをなさり、蜀主様しゆしゆが一つの詞をお作りになりました。いまよく覚えております」

それから四十年が経ち、朱氏はずっと前に亡くなり、その詞を知る者はいまや誰もいない。私は始めの二句ばかりを覚えているだけだった。ある暇な折に、その句を吟味し、『洞仙歌令どうせんかれい』の曲ではなからうかと思ひ、それに継ぎ足してみた。

冰肌玉骨、[氷ひやうの肌きに玉ぎよくの骨]

自清涼無汗。[自みづから清きよく涼すずしく、汗あせをかくことはありません]

水殿風来暗香滿。[水みづ辺べの高たか殿てんに風かぜがくるとひそやかに香かほりが満みちます]

繡簾開、[刺繡すいずいのある簾れんが開ひらかれていて]

一点明月窺人、[ちちらりと明あるい月つきが覗のぞきます]

人未寝、[人ひとはまだ寝ねずに]

欹枕釵横鬢乱。[枕まくらが斜かために、簪かんざしが横よこたわり、鬢かみの毛けが乱みだれます]

起来携素手、[立たって手てを携たえ]

庭戸無声、[庭にわの戸かどから声こゑもなく出でて]

時見疏星渡河漢。[ふと見ると、天あまの川がはを流ながれ星ほしが渡わたります]

試問夜如何、[夜よはどれほどかかと尋たずねると]

夜已三更、[すすででに真ま夜よ中ちゆうすぎ]

金波淡、[天の川は淡く]

玉繩低転。[北極星のまわりの星が低く移ります]

但屈指、[指を折って数えるのは]

西風幾時来、[いつ秋がくるのかと]

又不道、[そしてこれはいけません]

年暗中偷換。[暗いうちに歳月がすっかり流れてしまうとは]

【補足】〔(1) 唐代に始まった詞を洗練された韻文学に育てたのは韋荘であった。韋荘は唐王朝末期の混乱期に辛酸を嘗め尽くした文化人の一人で、蜀の地に国 [前蜀] を構えた王建に庇護を求め、宰相にまでなった。王建は、韋荘を始めとして唐の都から逃げてきた人々を保護し、唐の文化の伝統は蜀の地で受け継がれた。前蜀が亡んで後蜀に代わってからも高い文化水準が保たれ、後蜀の二代皇帝の孟昶は自らも詞を作るような風雅を愛する人であった。しかし、文弱で贅沢に耽って国を亡ぼしたと評判ははなはだ芳しくない。(2) 蘇軾は、杭州の副知事であったころから精力的に詞を作るようになり、従来の詞とは全く異なる豪壮な作品を生み出し、その代表作がこの後で見る『念奴嬌』 [→作品番号 06-3-058] である。しかし、優美な詞も決して不得手ではなく、この『洞仙歌』は孟昶自身の作と見まごうばかりで、前半の終わりの部分などはかなり官能的である。後半は後蜀の栄華も虚しく消え去ったことを哀しんでいて、郷里の旧君として孟昶に対して特別な思いがあったのだろう〕

■ 【06-3-056】 題伯父謝啓後

【解題】伯父の蘇渙 [→作品番号 06-2-065] がかつて記した手紙を手に入れたので、この一文を添えて蘇渙の息子の蘇不疑 [→作品番号 06-2-066] に送った。

【解題】

天聖年間^{てんせい}に伯父^びは眉州^びでの科挙の地方試験に合格した。時に二十三歳だった。このころの試験は規定がまだ緩く、答案用紙に記された受験生^びの名を採点するときには隠すということをしていなかった。眉州副知事^{しょうどう}の蔣堂は、試験が終わって受験生が提出した文を見て、伯父の賦したものに至ると、それが精妙で群を抜いていることに驚き、伯父に向かって「首席となるのは君以外にはいない」といった。伯父は「私はまだまだ若く、もっと年長の者がいます。私は決して選ばれるような者には当たりません」と強い調子で応じた。蔣堂はそれを聞いて、「これはまさしく『論語』にある『君子は人の美を成す』『君子は人の美点を挙げる]であるな」といって、伯父は実に賢いとした。そして伯父を第三位にした。翌年伯父は科挙の最終試験にも合格した。

この手紙は合格後に蔣堂に送った礼状である。伯父が亡くなって十三年後に単錫^{たんしやく}の家に伝わった。単錫が蔣堂と同じ宜興^{ぎこう}の人だからだ。それから八年にして私の手元にきたので、自ら表装して、伯父の次男^{そふぎ}〔蘇不疑〕のもとに帰すことにした。これを家の宝として、伯父の徳が盛んであったことを忘れずこいてほしいと思う。

元豊五年七月十三日、伯父の甥である貴授^{せきじゆ}黄州^{こうしゅう}団練副使^{だんれんふくし}軾^しが謹んで誌るす。

【補足】〔(1) 科挙では情実や不正の入る余地が一切ないよう、答案用紙に記された受験生^びの名が採点者に知られないようにした。これを「糊名^{こめい}』というが、伯父の蘇洵の頃にはまだそれが行われていなかったことがこの文章からわかる。(2) 蔣堂〔字は希魯^{きろ}〕は眉州の副知事を勤めた後に泗州の知事となり、朝廷に召されたり地方の高官を務めたりして、長く官界で活躍した。単錫〔字は君賜^{くんし}〕は蘇軾と同じ年に科挙に合格し、蘇軾の親類の娘を娶った。(3) 蘇不疑の弟の蘇不危〔字は子安^{あざな}〕には、作品番号 06-3-015 で見た手紙に続けて、伯父の礼状を添えると記している〕

■ 【06-3-057】 赤壁賦

【**解題**】上の文を書いて3日後の7月16日、蘇軾^{ちようこう}は長江に舟を浮かべ、赤壁^{せきへき} [→作品番号 06-1-082] に遊び、この賦^ふを作った。賦とは詩や詞とは異なる韻文の一形式で、小川環樹・山本和義選訳『蘇東坡詩選』（1975年）の解説をそのまま拝借すると、「『賦』は楚辞^{そじ}の流れを汲んで、漢代に生まれた文学形式。問答形式をとって韻をふみながら華麗なことばを連ねる叙事文学で、朗誦されるものである」。歐陽脩^{おうようしゅう}は賦を外面を飾るものから内容重視のものへと変えようと努め、それを受け継いだのが蘇軾のこの『赤壁の賦』である。

【訳文】

壬戌之秋、[元豊五年の秋]

七月既望、[七月の満月の翌日]

蘇子与客汎舟游于赤壁之下。[蘇先生は客と舟を浮かべ、赤壁の下に遊んだ]

清風徐来、[清らかな風が静かにきて]

水波不興、[波は立たず]

举酒属客、[酒を挙げて客に勧めつつ]

誦明月之詩、[明るい月を待つ詩を朗誦し]

歌窈窕之章。[美しい人を求める古代の詩を歌った]

少焉、[しばらくすると]

月出於東山之上、[月が東の山の上に出て]

徘徊於斗牛之間、[斗宿と牛宿の間をさまよい]

白露横江、[長江^{ちようこう}いっぱい露の気配が横たわり]

水光接天、[光が水に満ちて天と一つになり]

縱一葦之所如、[一本の葦のような舟を行くに任せて]

凌万頃之茫然。ばんけい ぼうよう〔万頃の茫洋とした広かゝりを超えて行った〕

浩浩乎如憑虚御風、ひろびろ〔浩浩と虚空に乗って風をあやつるようにして〕

而不知其所止、〔その止まるところを知らず〕

飄飄乎如遺世独立、ふわふわ〔飄飄と世間のことなど忘れて独りだけとなり〕

羽化而登仙。うか〔あたかも羽化して仙人になったかのようであった〕

於是飲酒樂甚、〔そこで酒を飲んで大いに楽しみ〕

扣舷而歌之。〔舟ばたをたたいて歌った〕

歌曰：〔その歌は〕

「桂棹兮蘭槳、きお かい〔桂の棹に蘭の槳〕

擊空明兮泝流光。〔明るい空間を撃ち、流れる光をさかのぼる〕

渺渺兮余懷、はるか おも〔渺渺なるかな我が懐い〕

望美人兮天一方。〔美しい人を天の彼方に望み見る〕

客有吹洞簫者、どうしょう〔客に洞簫を吹く者がいて〕

倚歌而和之、〔歌とともにそれに和し〕

其声嗚嗚然、ほわほわ〔その声は嗚嗚然として〕

如怨、〔怨むかのよう〕

如慕、〔慕うかのよう〕

如泣、〔泣くかのよう〕

如訴、〔訴るえかのよう〕

余音嫋嫋、ほそほそ〔余韻は嫋嫋とつづき〕

不絶如縷。〔糸のように絶えることがなかった〕

舞幽壑之潜蛟、〔それは深い谷に潜む竜を舞わせ〕

泣孤舟之嫠婦。〔夫を失った舟上の女を泣かせるものであった〕

蘇子愀然、[蘇先生は表情を改め]

正襟危坐、[襟をただし、きちんと坐り直して]

而問客曰:[客に尋ねた]

「何為其然也」.[「これはどうなされたのですか」]

客曰:[客はいった]

「『月明星稀、烏鵲南飛』、[『月明らかに星稀れに、烏鵲南に飛ぶ』]

此非曹孟德之詩乎。[これは曹操そうそうの詩であります]

西望夏口、[ここから西を望めば夏口かこう]

東望武昌、[東を望めば武昌ぶしやう]

山川相繆、[山と川が互いにもつれ合い]

鬱乎蒼蒼、[暗くもりとしています]

此非孟德之困於周郎者乎。[曹操しやうやうが周瑜のために苦しめられたのはこなのではありませんか]

方其破荊州、[曹操はそれまでに荊州けいしゅうを破り]

下江陵、[江陵かうりやうへと下り]

順流而東也、[流れに従って東に向かい]

舳舻千里、[船を千里に渡って連ね]

旌旗蔽空、[旗は空を覆い]

酈酒臨江、[酒を瀉こして長江に注ぎ]

橫槊賦詩、[槊を横たえてこの詩を賦ほこしたのです]

固一世之雄也、[まさに一時代の英雄であります]

而今安在哉。[いまだここにいるのでしょうか]

況吾与子漁樵於江渚之上、[まして、私とあなたは、長江の渚のあたりで魚を獲り木を切り]

侶魚蝦而友麋鹿、[魚や蝦えびに伴い、鹿を友とし]

駕一葉之扁舟、[ひとひらの舟に乗り]

拳匏罇以相屬、[ひょうたんの酒を互いに挙げ]

寄蜉蝣於天地、[かげろうのような身を天地に寄せ]

渺滄海之一粟。[広く青い海のひと粒の粟のような存在でしかありません]

哀吾生之須臾、[我が一生が束の間であるのを悲しみ]

羨長江之無窮。[長江が無窮であるのを羨みます]

挾飛仙以遨遊、[空を飛ぶ仙人を両脇に従えてともに遊び]

抱明月而長終。[明るい月を抱いて永遠に過ごすなど]

知不可乎驟得、[にわかに得られるはずもないので]

託遺響於悲風。[悲しげな風に余韻を託したのです]

蘇子曰：[蘇先生はい]

「客亦知夫水与月乎。[「あなたも水と月を知っていますよ]

逝者如斯、[水はこのように^い逝き続けていますか]

而未嘗往也、[往ってしまっ^いてそれぎりということでは決してありません]

盈虚者如彼、[月はこのように満ちたり欠けたりしていますが]

而卒莫消長也、[ついには消え去ってしまったり大きくなりっぱなしということもありません]

蓋将自其変者而觀之、[そもそも変化するところから観みるなら]

則天地曾不能以一瞬、[天地は一瞬たりとも変わらずにいることはありません]

自其不變者而觀之、[変わらないところから観みるなら]

則物与我皆無尽也、[物にしても私にしてもどれも尽き果ててしまうことはありません]

而又何羨乎。[何を羨むのでしょうか]

且夫天地之間、[天地の間にある物には]

物各有主、[それぞれの所有者がいます]

苟非吾之所有、[自分が持つものでなければ]
雖一毫而莫取。[毛筋一本だって取ることはできません]
惟江上之清風、[ただし、川のほとりの清らかな風と]
与山間之明月、[山の間の明るい月は]
耳得之而為声、[耳に得てその声を聞き]
目遇之而成色、[目に遇ってその色を見て]
取之無禁、[これをいくら取っても禁じられることはなく]
用之不竭、[これをいくら用いても竭きることはありません]
是造物者之無尽蔵也、[これは造物者の無尽蔵^{むじんぞう}といものです]
而吾与子之所共食」。[私とあなたと一緒にこれを食らおうてはありませんか]
客喜而笑、[客は喜んで笑い]
洗盞更酌。[盃を洗ってさらに酌んだ]
肴核既尽、[酒の肴は尽き]
杯盤狼籍、[杯や皿が散らかり]
相与枕藉乎舟中、[ともに枕となって舟に眠り]
不知東方之既白。[東方がすでに白むのも知らずにいたのだった]

【補足】 [(1) 同舟の者が洞簫^{どうしょう} [笛の一種] を吹いたとの叙述がある。廬山^{ろざん}からきていた道士の楊世昌^{ようせいしょう}が洞簫を吹くことを作品番号 06-3-053 の其の二で見ているので、楊世昌が一緒であったと推測されている。(2) 「造物者の無尽蔵^{むじんぞう}」。これこそが黄州^{こう}にきて以来、己を新しくしようときまざまに思索を重ねてきた一つの到達点であったといつてよいであろう。『雪堂^{せつどう}の記^き』では「散人^{さんじん}」と「拘人^{こうじん}」を対比して、「散人」になるには知恵を去らなければならぬといっていた。黄州^{こう}にきた当初^{あんこくじ}は安国寺に参禅して「空」の境地を得ようとした。ここに至って「空」ではなく「無尽蔵」を見出し、

「散人」だろうが「拘人」だろうが誰であってもいかなる境遇にあっても、その「無尽蔵」はいくらでも享受できると歌い上げた。一見すると安直な楽観主義のようであるけれど、苦悩の末に見出したひとつの答えだったのだ。(3) かつて『書臨阜亭』しよりんこうてい [→作品番号 06-1-061] で直感的に記したことを発展させたと見ることもできるだろうか]

■ 【06-1-058】 念奴嬌

【解題】 上の『赤壁の賦』せきへきふ では三国時代の英雄の名を出したものの、それは脇役でしかなかった。そこで、周瑜しゅうゆを主役にした詞を別に作った。「赤壁懷古」せきへきかいこの副題がある。

【訳文】

大江東去、[大いなる長江ちやうかうは東に流れ行き]

浪淘尽、[浪は洗い尽しれてしまいます——]

千古風流人物。[千年にわたる風流な人々をも]

故壘西辺、[古い石垣の西のあたり]

人道是、[人はいいます、これは]

三国周郎赤壁。[三国時代の周瑜しゅうゆの赤壁せきへきであると]

乱石崩雲、[崩れる雲のように乱れた岩]

驚濤裂岸、[岸壁を裂くように打ち付ける波は]

捲起千堆雪。[千段に積み重なった雪を巻き起こします]

江山如画、[画かわのような江と山]

一時多少豪傑。[かのときにどれほど多くの豪傑がいたのでしょうか]

遙想公瑾当年、[遙かに想うのは、そのときの周瑜]

小喬初嫁了、[喬姉妹の妹を妻に迎えたばかり]

雄姿英発。[雄姿は英しく洗刺としていました]

羽扇綸巾、[羽根の団扇に綸子の頭巾]

談笑間、[談笑する間に]

強虜灰飛煙滅。[強い敵は灰となって飛び、煙となって消え去ったのです]

故国神遊、[所縁ある国に神を遊ばせると]

多情応笑我、[情ある人は私に笑いかけ]

早生華髮。[早くも白髪になりましたなあということでしょう]

人間如夢、[人間世界は夢のよう]

一樽還酹江月。[ひと樽の酒を江の月に捧げようではありませんか]

【補足】[(1) 後世の『三国志演義』などでは、赤壁で曹操の大軍を破った最大の功
労者は諸葛孔明であったように描かれもするが、実際は周瑜こそが立役者であった。

この詞は周瑜を中心に置いている。(2)「風流人物」とあるのは、日本語の「風流な
人」とはかなり異なり、何物にも捉われない独立不羈の人物、曹操や周瑜のような
人々を指す。(3)「羽扇綸巾」[貴族がくつろいで過ごすときの服装]は、『三国志演

義』などでは悠揚迫らぬ諸葛孔明の姿を描く常套語となっているが、蘇軾は周瑜を描
写するのに用いている。ただし、ほとんどの解説書では、ここでもやはり諸葛孔明の
ことであるという解釈をとっている。そうだとしたら、周瑜の存在がかすんでしまっ

て興味がかなり削がれるのではなかろうか。(4) この『念奴嬌』は、蘇軾の詞の最高
傑作と評されることが多い。蘇軾は、酒席の余興から始まった詞を、文学的な鑑賞に
十分耐えうるものに変革すべく努め、「豪放派」の開祖とされ、この詞がその到達点
であるとされる。「豪放派」はこの作品に見られるように、ごつごつとした印象の語

句を使って堅い内容の詞を作る。一方で、蘇軾によって詞は結局のところ詩にされてしまったとする批判があり、「豪放派」を受け継ぐ者はそう多くはなかった。宋代の詞の本流を形作ったのは、蘇軾ではなくむしろ張先ちやうせんや柳永りゆうえいであった。蘇軾が杭州時代に張先と交流があったことはしばしば見ていて、多数の歌妓を連れて西湖で舟遊びをする姿はまさに詞の名手にふさわしい。柳永は蘇軾よりも50年ほど先輩で、若い頃に科挙を受けたものの、色里の流行歌を作っているような者は朕の朝廷にはいらないと皇帝が不合格にしたという伝説がある。柳永は妓女のために詞を作る専門の作詞家になり、都の井戸端で柳永の詞を歌う女性の声が聞かれない日はないといわれるまでにその詞は人々に愛された。その後、50歳の頃に発奮して再び科挙を受け、短い期間ではあったが地方で官僚勤めをし、蘇軾が18歳のときに亡くなった。蘇軾のこの『念奴嬌』がいかに傑作であっても、井戸端で歌われるようなものではなく、大衆が求める詞のあり方からはずれていたのだろう。とはいえ、蘇軾も優美で繊細な詞を多数作っていて、先に見た楊の詞 [→作品番号 06-2-016]の方が優れているようにも思える]

■ 【06-3-059】夜坐与邁聯句

【解題】夜、臨臯亭りんこうていに坐して息子の蘇邁そまいと交互れんくに句を詠む連句をした。蘇軾の句を青字で、蘇邁の句を赤字で示す。

【訳文】

清風来無辺、[清らかな風が無限の彼方から来て]

明月翳復吐。[明るい月が翳かげったり雲からまた吐かれたりする]

松声満虚空、[松の声[上の風に対応]が虚空に満ち]

竹影侵半戸。[竹の影[上の月に対応]が戸から入り込んでく]

暗枝有驚鵲、[暗がりの枝で驚いて鵲が鳴き]

壞壁鳴饑鼠。[壊れた壁で餓えた鼠が鳴く]

露葉耿高梧、[露を帯びた葉が高い梧に輝き]

風螢落空廡。[風に飛ぶ螢が人のいない廡に落ちる]

微涼感团扇、[微かな涼しさにもはや捨てられる团扇を感じ]

古意歌白紵。[無官の服のままにいてることを嘆く古い歌をうたう]

樂哉今夕遊、[それにつけても、この夕べの遊びの楽しさは]

復此陪杖屨。[こうしてまた父上のお供ができるのだから]

伝家詩律細、[我が家に伝わる詩律は細やかであるが]

已自過宗武。[君はすでに杜甫の息子の宗武を凌ぐものがあるだろう]

短詩膝上成、[我が膝の上でこのように詩を作ってくれて]

聊以慰懷祖。[祖先に対していさか鼻が高い]

【補足】[蘇邁はこのとき 24 歳であった。24 歳といえば蘇軾が官職に就くために都に向かったときの年齢で、そのときの旅で詠んだ詩は第 1 章で見たように、すでに父の蘇洵を凌ぐものとなっていた。それと比べると、全く酷な比較だが、息子の詩才は特別光るものではなかったようだ]

■ 【06-3-060】次韻和王鞏六首

【解題】蘇軾に連座して遥か南方の賓州に置かれていた王鞏 [字は定国] [→作品番号 06-2-050 など] から送られてきた詩に次韻した。

【訳文】

其の一

貴君は、近くにある陽朔山ようさくざんのことを詩中に談じて、
 一銭の価値も生まない山だという。
 その巖いわおには頭が二つある毒蛇が潜み、
 千仞せんの高さを飛ぶ鳥を落としてしまう毒気を放っている。
 ならば、極悪人を放逐するのによしいところで、
 舜しゆんのような聖人が登ったとの伝説があるのははなはだ訝しい。
 この山に少しの間いるだけで、
 鏡を見ると顔はもう真っ黒になってしまっているくらいに恐ろしいところなのだ。
 苦い霧のために、飲むものも食べるものも味が変わってしまう。
 貴君は三年もの間、そんなところで囚われ人となっている。
 しかし、善い人は天地の徳を身に荷っているのだから、
 決してそこでは死なないはずだ。
 私はというと、黄州の岡のもとにいて、
 枕に横たわって長江の碧みどりの流れを眺めている。
 川の向こうには武昌山ぶしやうざんがあって、
 いつも私と顔を向かい合わせにして立っている。
 軟らかな土からは春の野菜が生じ、
 蒼い崖を裂いて筍たけのこが出てくる。
 私が貴君を巻き込んで陽朔山のもとに行かせてしまったのに、
 私はこの地にきてかえって安らかに暮らしている。
 遥かに聞くところでは、
 そちらの近くたんなに丹砂の産地があるとか。
 だからいつか貴君も仙薬を得て、

仙人の名簿の中に貴君の名を見ることになるのだろう。

【補足】^{たん さ}丹砂は不老不死の薬の原料になると考えられていて、先に^{おうきょう}王翬に送った手紙の中でもそれについて言及していた [→作品番号 06-1-105 など]

其の二

若いときは、

刀剣を腰に帯びて従軍したら楽しいであろうと思っていた。

老いてからは、

剣^とを鎔かして鋤こして農事に服することとなった。

少しの武勲も挙げなかったのに、

朝廷は耕す土地を与えてくださった。

春は川の氷を砕いて紙を梳き、

秋は葦を刈って布を織り、

冬は櫟^{くわき}の林を斬って炭とし、

夏には土手の竹から皮を剥き取る。

四季ごとに採るものがあり、

天の与えてくれるものは十分に満足させてくれる。

貴君は裕福な家に生まれたので、

そのような四季の仕事を学ぶ必要はなかっただろう。

貴君の左右におられる腕が細くて白い美女には、

薪を束ねるようなことはできるはずもない。

こんなことを私がいっているとは、

当の美女には聞かせないでほしい、

私だってわざわざ美しい方々を怒らせたくはないので。

笑ってしまうのは、

我があばら家には、

ぎゃあぎゃあ騒がしいだけの女どもがどっさりいることだ。

【補足】〔王翬^{おうきゆう}は名家に育ち、贅沢な暮らしをしていたのだろう。流謫^{るたく}の地にも美しい侍女を多数連れて行ったようで、蘇軾はそのことをかねてから気にかけていて、この一連の詩でもやんわりと教訓めいたことをいっている〕

其の三

千年に一度だけ実を結ぶという伝説の桃^{もも}こしても、

まずは寒い冬を耐えてから二月に花を咲かせる。

骨にまで至るような苦勞をしてこそ、

果てしない寿命^{じゆんめい}が得られるのだ。

私は罪による死を免れただけ十分で、

この上さらに長生を求めるようなことはしない。

貴君のいる賓州^{ひんしゅう}はどこであろうかと、

棲霞楼^{せいかりゅう}に昇って見るとしよう。

【補足】〔棲霞楼^{せいかりゅう}は作品番号 06-2-050 で見ている〕

其の四

近隣の人々にはそれぞれ異なる趣^{おもむき}がある。

だから、互いに往き来するのがよろしかろう。

奇妙な人と思って厭わずに、

数回会えば自ずと親しくなるのだ。

また、何事もなく黙って坐わっているのもよい。

自分の内側から光がめぐりきて、また己を照らすのを覚えるであろう。

いずれにしても、

貴君が宮廷に堂々と立つ姿をきっとまた見ることになるであろう。

【補足】 [この詩では、土地の人とも分け隔てなく交際するようアドバイスしている。蘇軾のように土地の庶民とも親しくするというのは、エリートである士大夫したいふの誰もができるようなことではなかったのだろう]

其の五

普段から私は他の人々を軽んじてきたのだが、

老年に到ると、私のことを気に掛ける者など誰もいなくなっていた。

巧みな語を出したように思っていたのは自分だけで、

実際は本物の宝じゆだま玉と数珠玉の実くらいに違っていたのだ。

せめてまずいことをいってしまわないようにしようとしても、

我が癖を治す薬はどこにもありません。

子どもの出来の悪さときたら、

やはり陶淵明とうえんめいが嘆いた通りだが、

ただ妻が慎ましやかであるのは、

馮衍ふうえんが妻のやかましさに悩まされたのとはえらい違いた。

私が貧乏であるのはなぜかと聞かれたら、

天の与えたものだと応えよう。

黄州こうに流されて初めて財布がからっぽになったのではないのだ。

【補足】 [(1) 陶淵明とうえんめいには子供の出来の悪さを嘆く詩がある。(2) 馮衍ふうえんは後漢ごかんの人で、蘇軾自身がこの詩に付した注記で、「私の文章は馮衍に及ばないものの、意気と志では愧はじるものではない。当時の皇帝は優れた士を好んだものの、馮衍は不遇で都の遠くに置かれ、私と似ている。しかし、馮衍の妻はひどく嫉妬深く、この一点は私にはない。そこで私の方が馮衍より勝っているということになる」と記している。このことは、もしかすると妻の容認のもと王朝雲おうちよううんを深く愛するようになっていたことを示唆するものであろうか]

其の六

貴君の家の女性は、
 青色の衣に美しい腕を通し、
 宮廷の女性のように黄色い粉を額に施し、
 私のような下等の客はお目にかかることもできなかったのだが、
 そちらでも、南国の鄙びた歌を習ったりはしないで、
 雅みやびなことばかりを変わらず語り続けているだろうけれど、
 衣を薫らせる香が少なくなってしまったのはさすがに嘆いているだろうか。
 貴君は北に帰るときには、
 その女性を携えて私のところに会いにきてくれるといっているのだが、
 雪の山を崩すような大きな浪に阻まれたとか何とか、
 言い訳をきっとすることになるだろうね。

【補足】 [第六首のこの訳は原文よりも皮肉な口調がきつくなっている]

■ 【06-3-061】 念奴嬌

【**解題**】『ねん ど きょう念奴嬌』の曲で8月15日の中秋節に詞を作った。この詞はかつてみつ密州でやはり中秋節に作った詞『すいちよう かとう水調歌頭』[→作品番号 05-2-028]を踏まえ、地上と月の世界を行きつ戻りつする。

【**訳文**】

憑高眺遠、[高いところから遠く眺めると]

見長空万里、[見えるのは万里にわたる広大な空]

雲無留跡。[雲はどこにも跡を留めません]

桂魄飛来光射处、[月が飛び来て射す光]

冷浸一天秋碧。[ひやひやと満天の秋のあお碧を浸します]

玉宇瓊楼、[天の上の玉の宮殿へと]

乘鶯来去、[鶯おうに乗り]

人在清涼国。[人は清く涼しい国に来るのです]

江山如画、[(月から見る)かわ江や山は画のよう]

望中煙樹歷歷。[望み見る霧の中に樹々が連なっています]

我醉拍手狂歌、[私は酔い、手を打っておかしげに歌い]

举杯邀月、[杯を挙げて月を迎え]

对影成三客。[私と影と月と三人になります]

起舞徘徊風露下、[秋風のもとで起って舞い、あたりを歩き]

今夕不知何夕。[この夕べは月の世界ではいつの夕べなのでしょう]

便欲乘风、[さあ、風に乗って]

翻然归去、[翻ひるがえり飛んで帰かえりましょ]

何用騎鵬翼。^{おおとり}〔鵬の翼に騎らないでもよいのです〕

水晶宮裏、〔月の水晶宮で〕

一声吹断横笛。〔一声、横笛が吹かれます〕

■ 【06-3-062】 与毅父宣徳

【解題】^{こうへいちゆう}孔平仲 ^{あざな き ぼ}〔字は毅甫あるいは毅父〕^{き ふ}〔→作品番号 06-3-053〕に宛てた手紙。

【訳文】

お手紙を頂戴^{かたじけな}し 忝く存じます。安らかにお過ごしのことでありましょう。明日は重九^{ちゅうきゅう}であります、その日に会える会えないまいかなる縁によるものなのか、毎回不思議な気持ちになります。貴君は、文人には相手を軽んじる病があるのを嫌っておられ、しかしながら、不肖の私のことを過大に評価して下さっています。それははなはたいわれなきことであります。詩文を断ちましたと先に誓いましたことは隠せませんので、どうぞ私のことをお笑ください。甥婿^{そうかん}となる曹煥君が行くのに合わせてこのお手紙を届けてもらいます。これからは冷えてゆきますので、万万自重されますように。……

【補足】〔(1) ^{こう}光州知事^{そうきゅうしょう}の曹九章^{そうかん}の息子の曹煥〔→作品番号 06-2-069〕と蘇轍の娘との縁談がまとまったので、曹煥は黄州にきて蘇軾に挨拶してから蘇轍のいる筠州^{いん}に向かった。孔平仲は江州^{こう}にいて、ちょうど通り道に当たっているので、この手紙を曹煥に託したのである。(2) このときに、曹煥を通じて曹九章に贈った詞があるのだが、意味がよく汲み取れないので訳は割愛する〕

■ 【06-3-063】 醉蓬萊

【解題】9月9日の重陽^{ちゅうよう}の節句^{じょだいじゆ}に徐大受^{あざな くんゆう}〔字は君猷〕知事が酒宴を開き、そこでこの詞を詠んだ。序文がある。

【訳文】

私は黃州^{こう}謫居^{たくきょ}となって三度^{さんど}目の重陽^{ちゆうやう}の節を迎えた。徐知事^{じよ}は毎年^{まいねん}棲霞樓^{せいかにろう}で宴を開いてきたが、今年^{ことし}は任期^{てんき}が満ちて、湖南^{こなん}に移ることを希望しているという。そのことを思うと寂しく、この詞を作った。

笑^{わら}勞^{らう}生^{せい}一^{いつ}夢^む、[笑ってしまうのは、生きる苦勞^{くらう}もひとつの夢]

羈^か旅^{りょ}三^{さん}年^{ねん}、[遠く三年の旅]

又^{また}還^{かへ}重^{じゆう}九^{きゆう}。[また重陽の節句となりました]

華^か髮^{ふつ}蕭^{しゆう}蕭^{しゆう}、[まばらな白い髪]

対^{たい}荒^{かう}園^{えん}搔^{さう}首^{しゆう}。[荒れた庭を見つつ頭を搔きます]

頼^{たの}有^{ゆう}多^た情^{じゆう}、[頼みとするのは(知事殿^{ちじゆだん})情の深さ]

好^{こう}飲^{いん}無^む事^じ、[何事もなく飲むのを好み]

似^に古^こ人^{にん}賢^{けん}守^{しゆう}。[古の賢太守^{けんたいしゆう}に似ておられます]

歳^{さい}歳^{さい}登^{とう}高^{かう}、[毎年毎年(重陽の節句には)高いところに登り]

年^{ねん}年^{ねん}落^{らく}帽^{ぼう}、[毎年毎年帽子を落としてまいりましたのは]

物^{ぶつ}華^か依^い旧^{きゆう}。[昔の結構な故事に従ってのことでした]

此^こ会^{かい}応^{おう}須^{しゆ}爛^{らん}醉^{さい}、[今日の会では大いに酔いましょう]

仍^い把^ぱ紫^し菊^{きく}茱^{しゆ}萸^ゆ、[菊の花と茱萸^{しゆゆ}の実を手にして]

細^{さい}看^{かん}重^{じゆう}嗅^{きゆう}。[細やかに見て重ねて香りを嗅ぎましょう]

搖^{しゆう}落^{らく}霜^{しゆう}風^{ふう}、[間もなく、葉を落とす風が]

有^{ゆう}手^て栽^{さい}双^{しゆう}柳^{りゆう}。[手ずから植えた二本の柳にも吹き寄せましょう]

来^{らい}歳^{さい}今^{こん}朝^{ちゆう}、[来年のこの朝には]

為我西顧、[私のために西を見て]

酌羽觴江口。[川べりて杯を酌んでください]

会与州人、[私はこの地の人々とともに]

飲公遺愛、[知事殿を偲んで飲み]

一江醇酎。[川に酒を注ぎましょう]

【補足】[(1) 始めにある「^{きりよさんねん}羈旅三年」は、知事の任期が通常3年であることと、蘇軾が^{こう}黄州に流されて3年になることを兼ねているのだろう。(2) 「^{そうしゅ}搔首」とは首がかゆくて^か搔くわけではなく、思い悩む仕草を表す慣用句。(3) ^{ちやうよう}重陽の節句に風に吹かれて帽子を落とす故事は何度か見ている。(4) 最後のところは、^{ちやうこう}黄州で長江に酒を注ぐから、新たな任地である下流でそれを受け取ってほしいということ]

■ 【06-3-064】 記夢賦詩

【解題】蘇軾はときどき夢の中で詩詞を聞いたり賦したりしている。本当に夢に見たのか、想像を夢に託したのかはわからない。

【訳文】

私は科挙を受けるために蜀から都に行き、途中で^{かせいきやう}華清宮を通った。夢に、^{げんそう}玄宗皇帝が『^{たいしん ひくん}太真妃裙^{たいし}帯詞』を賦すように命じるのを見た。目覚めてその詞を記憶していた。いまこれを書いて、^{ほんだいらん}潘大臨に贈る。

その詞は、

百量^{スカート}漪漪水皺、[(貴妃の裳の広がりは)百量もの^{さらさら}漪漪と流れる水の皺]

六銖^{しゅ}縦縦雲^{ひらひら}輕。[(その重さはわずか)六銖で縦縦として雲より軽いです]

植立含風広殿、[風を含んで広い高殿にすくと立つならば]

微聞環佩搖声。[腰に着けた環が揺れる音が微かにします]

げん ほう
元豊五年十月七日。

【補足】 [(1) 蘇軾が科挙を受験するために都に行ったのは嘉祐元年 [1056 年] のこと。この短文も一つの根拠となって、そのときの旅は長安を経由する陸路であったと知れる。華清宮は長安の東にある温泉地で、唐の玄宗皇帝が楊貴妃 [太真妃] と遊んだところとして有名。(2) 潘大臨 [字は邠老] は潘丙の兄の子 [→作品番号 06-3-016]]

■ 【06-3-065】 後赤壁賦

【解題】 10 月 15 日に蘇軾は再び赤壁に遊び、この賦を作った。同行の者が 2 人いたとあり、1 人は先の『赤壁の賦』と同じく道士の楊世昌であることは、次の作品番号で明らかである。もう 1 人は誰だったのか。その者が魚を獲り舟を操ったとすると、先の『魚蛮子』 [→作品番号 06-3-054] に歌われていた漁師であったりするのだろうか。

【訳文】

是歳十月之望、[この歳の十月の満月の日]

歩自雪堂、[雪堂から歩いて]

将帰於臨臯。[臨臯亭に帰ろうとした]

二客従予、[二人の友が一緒に]

過黄泥之坂。[黄泥の坂を通った]

霜露既降、[霜や露の気配がすでに下り]

木葉尽脱、[木の葉はことごとく落ち]

人影在地、[人の影が地面にあって]

仰見明月、[明るい月を仰ぎ見て]

顧而樂之、[互いに顧みて楽しみ合い]

行歌相答。[歩きつつ歌って唱和した]

已而歎曰、[ふと嘆息していった]

「有客無酒、[友がいるのに酒がありません]

有酒無肴、[たとえ酒があっても肴がありません]

月白風清、[月は明るく風は清らかで]

如此良夜何」[この良き夜をどうしたらよろしいのでしょうか]

客曰、[友は言った]

「今者薄暮、[今日の夕方]

拳網得魚、[網を挙げて魚を得ました]

巨口細鱗、[口が大きく鱗が細かく]

状如松江之鱸。[松江の有名な鱸しゅうこうに形が似ています]

顧安所得酒乎」[たまたどこで酒を得たらよろしいでしょうか]

歸而謀諸婦。[帰ってそのことを妻に相談した]

婦曰、[妻がいうには]

「我有斗酒、[わたたくしに一斗の酒がございます]

藏之久矣、[これを久しくしまっておき]

以待子不時之需」[あなたさまが急にお求めになるのに備えておりました]

於是携酒与魚、[そこで酒と魚を携え]

復遊於赤壁之下。[また赤壁せきへきの下で遊ぶことになった]

江流有声、[長江あながしは音を立てて流れ]

断岸千尺、[切り立った岸は千尺]

山高月小、[山は高く月は小さく]

水落石出。[水量が減って石が出ている]

曾日月之幾何、[日や月はあれからどれだけ巡ったのか]

而江山不可復識矣。[江も山もまるで識らないところであるかのようだ]

予乃攝衣而上、[私は衣をかきあげて陸に上り]

履巉巖、[陰しく切り立ったところを踏み]

披蒙茸、[草むらを開き]

踞虎豹、[虎や豹のようにわたかまる岩にまたがり]

登虬竜、[竜のようにねじれた木を登り]

攀棲鶻之危巢、[鶻の棲む危うい巢をよじのぼり]

俯馮夷之幽宮。[馮夷[水の神]の宮殿を見下ろした]

蓋二客不能従焉。[どうやら二人の友は付いてこられなかった]

劃然長嘯、[空気を裂くように長く嘯くと]

草木震動、[草木が震動し]

山鳴谷応、[山が鳴り谷が応え]

風起水湧。[風が起き水が湧いた]

予亦悄然而悲、[私はふと悄然として悲しみ]

蕭然而恐、[蕭然として恐れ]

凜乎其不可留也。[凜乎としてもはやそこにいられなくなった]

反而登舟、[かえって舟に乗り]

放乎中流、[流れの中ほどに放ち]

聽其所止而休焉。[その止まるところにまかせて休んだ]

時夜将半、[時に夜はもう半ば]

四顧寂寥。[四方を顧みると静まり返っていた]

適有孤鶴、[たまたま一羽の鶴が]

横江東来。^{かわ}[江を横切って東からやって来た]

翹如車輪、^{つばさ}[翹は車輪ように大きく]

玄裳縞衣、^{ほかにま}[黒い裳に白い絹の衣]

戛然長鳴、[鋭く長く鳴き]

掠予舟而西也。[私の船を掠めて西へと飛んだ]

須臾客去、[間もなく友人は帰り]

予亦就睡。[私も眠りについた]

夢一道士、[夢に一人の道士を見た]

羽衣蹁躚、[羽の衣を翻し]

過臨臯之下、^{りんこうてい}[臨臯亭の下を通り]

揖予而言曰、[私に会釈していった]

「赤壁之遊楽」。[赤壁の遊びは楽しかったですか]

問其姓名、[その姓名を問うと]

俛而不答。[俯いて答えなかった]

「嗚呼噫嘻、[ああ、ああ]

我知之矣。[私はわかっております]

疇昔之夜、[昨日の夜]

飛鳴而過我者、[飛んで鳴いて私の前を通ったのは]

非子也耶」。[あなただったのであります]

道士顧笑、[道士は顧みて笑い]

予亦驚寤。[私ははっと目を覚ました]

開戸視之、[戸を開いて道士を見ようとしたが]

不見其処。[どこにもいなかった]

【補足】[(1) この賦を『後の赤壁の賦』といい、それに対して先の賦を『前の赤壁の賦』という。『前の赤壁の賦』は理屈を述べ、『後の赤壁の賦』は幻想的である。二つを合わせて『赤壁の賦』は完成するということなのだろう。(2) 5行目にある「黄泥の坂」は後に詳しく見ることになる]

■ 【06-3-066】 帖贈楊世昌

【解題】道士の楊世昌のために書いて贈った短文。

【訳文】

十月十五日夜、楊道士と赤壁に舟を浮かべ、飲みかつ酔った。夜半に、一羽の鶴が長江の南からきて、翅は車輪の如く、戛然と長く鳴いて、私の舟を掠めて西に去った。それが何の祥かわからなかった。いさかまたこのことを記す。

■ 【06-3-067】 弔李台卿、并叙

【解題】光州知事の曹九章 [字は演甫] [→作品番号 06-3-062] から手紙が届き、かつて黄州管轄内の麻城県で主簿を務めていた李台卿が亡くなったことを知った。李台卿とは生前にわずかな交流があっただけだったが、その人柄を想ってこの詩を作った。序文がある。

【訳文】

叙

李台卿、字は明仲は、廬州の人である。風貌がひどく不細工で、変わり者で、人と群れることがなかった。しかし、博学で記憶力のよさは人の及ぶところではなかった。『春秋左氏伝』を好み、『史学考正同異』を著して新たに発見したところが多数あった。天文や暦も詳しく知り、千年間の暦を知り尽くしていた。私が黄州に謫居となったとき、李台卿は麻城県の主簿で、初めてその名を識った。間もなく李台卿は辞めて廬州に帰ったのだが、光州知事の曹九章から李台卿が亡くなったことを報らされた。李台卿は曹九章の妻の一族である。

初め私は貴君を知らなかった。

人々は貴君のことを、

病気になった鶴がたらんと頭を垂れたような姿をしているとか、

七つの穴が全て土煙に覆われたような顔をしているとか、

そんなことをいって笑いの種にしていた。

ある日、貴君は破れた衣をまとって私のところに来たのだが、

釣り糸を垂れる人であるかのように座っているだけだった。

しかし、容貌の醜さで名を残した古の醜蔑と同じく、

たった一語を発するとそれは妙所を突いていて、

横顔をちらりと見ただけで賢人を見分けた古の楮裊のように、

私はたちまち貴君に驚かされたのだった。

貴君はのろのろとさざ波の上を渡っているよういて、

実は極まりない大海の涯までも見ているのだった。

唐の太宗は、画に描いたような頑固一徹の大臣を、

軟弱で朕に媚びているようにしか見えないといったように、

ひと
士といものはもとより軽々しくは料り知れない。

貴君が書物を見るのは、

月の光のように隅々までも照らさないところはない。

私は年齢とともに忘れてしまうことが多くなったのに、

貴君はどんどん若くなっていくかのようにより多く覚えるのだった。

諸々の学問に通じ、博ひろかつ要を得ていた。

しかし、残念なことに、言動に飾り気がなかったために、

老年に至っても外に輝きを見せることがなかった。

だから、その人生は世に識しられず、

すでに亡くなって、弔う者は誰もいない。

私は詩を作って貴君を知る人々に贈ろうと思う。

できることなら俗人どもの過ちを正したいのだ。

■【06-3-068】曹既見和復次其韻

【解題】上の詩に曹九章そうきゅうしょうが和したので、それにまた次韻した。

【訳文】

造物者のすることはもとより小児の戯れ、

ゲップをすると大風に、笑うと雷になり、

地上を震わせ、人々をやたらと驚かせてしまう。

人間ともは川でも湖でもやたらと走り回り、

網を投げたり釣糸を垂れたり忙しい。

偶然にも立派な魚を六匹も獲ったなら、俺は妙手の持ち主だと思ってしまうし、

たまたま空しく海辺に三年間もうずくまったままの者もいる。

長く貧乏するのは辛抱できなくはないとしても、

いつ死ぬのかということは料り知れない。

占ってみたところで、仏の眼でもなければ見えはしない。

李台卿君の学問は誰が嗣ぐのだろうか。

残念なことに、

李君の子息はなお年少であり、

李君を惜しむ私も曹君もすでに老い衰え、世に不要な存在となっている。

いろいろ我々が述べたところで空しく、

李君の学問を救えはしないけれど、

優れた仕事は後に必ず耀くはずである。

貴君[曹九章]が吟じる五言詩は千金の經典よりも価値がある。

この私の詩は貴君だけが見て外に出さないでくれたまえ、

私がおかしなことを言っていると世間の連中から譏られたくないので。

【補足】[よくわからないが、この詩には世間に対する皮肉が籠められているのだらう]

■【06-3-069】 弔徐徳占、并引

【解題】同じころにもう一つ亡き人を弔う詩を詠んでいる。序文がある。

【訳文】

引[序]

私は初めは徐禧のことを識らなかつた。ただ、呂恵卿の推薦によって、無官でありながら用いられたと

いことだけを聞いていた。元豊五年三月、徐禧がたまたま蘄水に至ったときに、私が馭舎ぎょしゃにいと聞いて訪ねてきた。語り合い、人に優れるところがあると知った。この歳の十月、徐禧が禍わざわいに遇った聞き、詩を作って弔うこととした。

【補足】〔呂惠卿りょけいけいは改革派の中心人物の1人で、西夏との戦争〔→作品番号 06-2-057〕を主導した。徐禧はその呂惠卿に策を献じて用いられ、一旗挙げてやろうと前線に行つて戦没した。蘇軾そしが3月に蘄水きすいに行ったことは作品番号 06-3-029 で見ている〕

優れた人が松を植えるのは、
いつしか門に影を落とすのを見ようと思うからだ。
松は成長が速いとはいえ、実は栽培が難しく、
水の流れが悪いと根が病気になるてしまつて、
残念ながら、寒さにも負けない堂々の姿を見ることはできない。
あるいは、松も役立ちそうな姿をしていると、
それが過ちとなつて斧で切られてしまう。
そうした災難あに遭つて初めて、
山林の内にいれよよかつたと覚るのだ。
もとより本当の棟梁は、
どぞその屋敷に植えられている木などは顧みないもので、
深い山にある大木を求める。
大きな家が傾こうしているときに、
まわりで牛がわさわさ騒いだからといってどうにもならない。
何といつても、深い谷の奥にあつて古い、
子孫が枝を繁らせるのを待つのがよいのだ。

死んだ者は悔いてももうどうにもならない。

私はただ後に残された者のためにいうのである。

【補足】[この詩は何がほしいのかはなはだ不明瞭である。たぶん敢えてそうしたのだろう。ここでは隠された主旨がいくらか読み取りやすいように無理やり訳している。あけすけにいとってしまうと、徐禧じよきは大言壮語して無定見りょけいけんの呂惠卿に用いられて空しく戦場に散ってしまったので、その子孫は、そうしたばかばかしいことにならないよう、十分に注意して己を成長させてほしいということなのだろう。同じ時代の人々による徐禧の毀誉には大きな幅があり、その中で蘇軾は高く評価している方であるという]

■【06-3-070】答李方叔

【解題】李廌りたい あざな ほうしゆく [字は方叔] [→作品番号 06-2-039] に宛てた手紙。冒頭にある字句から李廌こうが黄州にきたことがわかり、また別の史料からも黄州を訪問していたことが知られ、それはこの年の初めないし前年の終わりころであったと推測されている [→作品番号 06-2-076]。なお、李廌の家は都にほど近い陽翟ようたきにあつて、しかも貧窮に苦しんでもいたようなので、どのようにして黄州にまで来たのだろうか。

【訳文】

お別れてから二度にわたってお手紙をいただき、いずれにも御返事を差し上げないままいたところに、お使いの人がきて、長いお手紙をいただきました。……貴君の文章はまさしく川の水が増すかのよう
にその至るべきところを極めようとして、霜が降り水が落ちるときになって、自ずから涯はてが見えてき
て、その本当の価値がわかるようになるのでしよう。……近ごろしたいふの士大夫にはとんでもなく僭侈おごる者がたく
さんいて、ややもすると己を周公旦しゅうこうたんや孔子こうしにも及ぶかのように誇り、孟子もうし以下の人物に比べられると

ひどく不満であるようにいいます。このような風潮を長じさせてはなりません。私がよく考えますに、禍わざわいを得るのは皆実際よりも評判が高いところから始まるのです。造物者は功績がないのに名ばかりが重んじられる者がいるのに耐えられず、その重さに釣り合った罪を与えるのでしょう。人が言葉を操作して粉飾するのを憎むのであります。……古の君子はなお葬儀が終わらないうちは衣服を変えず、官職に就くこともありませんでした。貴君は大切な葬儀を完了させるべきなのでしょう。後に貴君が世に名を得たときに、埋葬の儀が終わってればその墓に堂々と報告できることでしょう。親しさの余り、いろいろ申し述べました。冬の寒い折から、どうか自重されますように。

【補足】り たい [李廌の家は貧窮のために三代にわたってきちんとした葬儀がなされていなかった。それを終えて後に官職を得るのを悲願としていた。このことについて蘇軾が支援するのを次の章で見る]

■ 【06-3-071】跋李康年篆心経後

【解題】でんしよ 篆書を得意とする李康年り こうねん [→作品番号 06-3-017] からは、時折、篆字で記したものが送られてきていた。これは李康年が書いた『般若心経』ほんにやしんぎょう に添えた跋文。

【訳文】

こう か ぶ しょう 江夏[武昌]の李康年り こうねん は古のいにしへ ことを好み、博学で、特に小篆しょうてん について非常に精しく知っている。その家族の忌日に『般若心経』ほんにやしんぎょう を篆書でんしよ で記して追福とし、私に跋文を求めた。

私は、この經典は言語で表わされ文字で記されているとはいえ、文字を見て、言語で理解しようとしても、それによってわかるものではないと聞いている。篆書がいくら巧みであっても、それが理解の助けになることはなく、まして跋文がどうこうできるものではない。

人はその家族のために、仏の道に帰依することを願い、それぞれのできる範囲で仏事を行う。砂を集めて地面に經典を記すのも十分で、まして篆書がこれほど巧みであるのならいうことはない。ただし、私

が恐れるのは、篆書の巧みさばかりを見て、本当に大事なことに目を向けないていることだ。だから、私はこれを観る者のために、そうはならないようにと書き記すのである。

げんぼう
元豊五年十二月十三日。

【補足】[この短文はかなりひねったかたちで李康年の篆書を褒めたものなのだろう。書かれた字のみごとさから経典が有難いと思ってしまうのは間違いであるというのは、つまり、間違わせてしまうほどに字がみごとであるといっているのである]

■【06-3-072】李委吹笛、并引

【解題】12月19日のちょっとした出来事を記録した詩。序文がある。

【訳文】

いん
引[序]

げんぼう 元豊五年十二月十九日、私の誕生日に赤壁の磯辺に酒を置いた。高い峰の下に踞り、鶴の巢を見上げた。酒たけなわ 酣のころに、流れの上から笛の声が起こった。

友人の郭かくこう 遵こうどうと古耕道は音楽をよく知っていて、

「この笛の声には新しい意匠があります。そこの俗な笛吹きてはありませんでしょう」

と、私にいった。

人をやって尋ねると、笛の主は進士[科挙の一次試験を通過したことのある者]の李委であった。李委は今日が私の誕生日だと聞いていて、新しい曲『鶴南飛』を作ったので、それを献したいという。

李委を呼んだところ、青い頭巾を被り、紫の上着を着て、笛を腰にこしていた。その新曲を演奏してくれ、さらに快く数曲を吹いてくれた。音がよく通り、雲を穿ち石を裂くばかりであった。酒席に並ぶ者はすっかり酔いしれてしまった。

李委は袖から美しい紙一幅を出し、

「私はあなたさまから何かを頂戴しようとする曲を献じたのではありませんが、ただ一首の絶句なりを詠んでいただけたらと思います」

私は笑って詩を作った。

貴君の曲に誘われ、

山の頂から一羽の鶴が南に向かって飛んだ。

私を載せ、南の空に遊び、九嶷きゅうぎに到った。

下界ではまた誰かが笛を吹いている。

曲の可憐さのあまり、

鶴は今度は龜茲きんじにまで飛ぼうとする。

【補足】りい あぎな こうたつ李委 [字は公達] は蘇軾の作った『後赤壁賦ごせきへきふ』を知っていて、鶴のイメージを音楽で表わそうと『鶴南飛かくなんひ』の曲を作ったのではなかろうか。この詩もまた鶴を歌って、黄州こうから九嶷きゅうぎへと飛んで行くという。九嶷は古代の聖天子しんてんの舜を葬ったところである。次の行き先である龜茲きんじは西域シルクロードの国]

■ 【06-3-073】 醉翁操詞

【解題】りい李委は笛の名手であったが、さいかん あぎな せいろう琴の名手である崔閑 [字は誠老] がこのころに黄州こうに来てしばらく滞在した。崔閑は若いときは都に出て学問に励み、折々に琴を弾いて楽しんでいただけだが、後ろざん ぎょくかんに廬山の玉澗に隠棲して、ぎょくかんどうじん玉澗道人と呼ばれた。崔閑の求めに応じて作ったのがこの詞。序文がある。

【訳文】

じよ ろうや滁州の瑯邪の奥深い谷は山水が美しく、人気のない谷間に滝の音が響き、それは音階に適うかの

ようである。醉翁^{すいおう}〔歐陽脩^{おうようしゅう}の号〕はこれを喜び、酒を携えて聴きに行き、^{よろこ}欣びのあまり帰るのを忘れるほどだった。

醉翁が滁州を去って十余年の後、好奇の士である沈遵^{ちんじゅん}がこのことを聞いて瑯邪に行き、琴でその声を写し、その曲を『醉翁操』と名付けた。その節回しは自在に変化し、その音調は華やかにしてのびやかで、琴を知る者は絶品であるとした。

その曲には声はあっても^{ことば}辞がなかったので、醉翁自身が歌詞を付けた。しかし、琴の音階と合わないところがあった。また、醉翁は楚辞の体裁で『醉翁引』を作ったところ、好事家がそれによって曲を作った。それは辞と曲がまば釣り合っていたものの、琴は辞の制約を受けて自然でないところがあった。

それから三十余年が経ち、醉翁はすでに亡くなり、沈遵も没して久しい。ここに廬山^{ろざん}の玉潤道人^{ぎょくくわんどうじん}こと崔閑^{さいかん}は琴の妙手で、沈遵の曲にぴったり合う辞がないのを残念に思い、この曲を譜に写し、東坡居士^{とうぼこじ}に辞を補うよう要請した。

瑯然、〔^{からから}瑯然と〕

清園、〔^{きやきや}清園と〕

誰弾、〔誰が弾くのか〕

響空山、〔ひっそりとした山に響き〕

無言。〔^{ことば}言はありません〕

惟翁醉中知其天。〔^{すいおう}ただ醉翁だけが醉中にその天の音を知ったのです〕

月明風露娟娟。〔月は明るく風はしっとりとして清らかです〕

人未眠、〔人〔醉翁〕はまだ眠らずにいると〕

荷蕢過山前、〔竹籠を荷って山の^よ前を過ぎる人がいます〕

曰有心也哉此賢。〔(醉翁は)います「心あるかな、この賢者は」と〕

醉翁嘯詠、〔醉翁が吟唱すると〕

声和流泉。[流れる泉がその声に和します]

醉翁去後、[醉翁が去った後は]

空有朝吟夜怨、[空しく朝に吟じ夜に怨む泉の声がある]

山有時而童巔、[山では時に従って葉が落ち]

水有時而回川。[水は時に従って川を巡るだけです]

思翁無歳年、[醉翁を思って長い歳月がたち]

翁今為飛仙、[今や醉翁は仙人となり]

此意在人間、[ただ(瑯琊を愛した)意だけが人間世界にあって]

試聽徽外三兩弦。[それを琴の弦に聴くことができます]

【補足】[歐陽脩は 30 歳のときに夷陵に左遷され [→作品番号 06-3-001]、その後中央に復帰したが、39 歳ときに今度は滁州に左遷された。滁州的瑯琊のあたりの風光をことに愛してしばしば酒宴を開き、自ら醉翁と号して醉翁亭を建てた。そのことを記した『醉翁亭の記』は現在でも漢文の教科書に載るほどに有名な文章で、簡潔で平易、かつ深い内容があることから、宋代の散文の規範となった。黄州に来てからの蘇軾の振る舞いは滁州的醉翁に見習うところがあり、また『醉翁操の詞』が『醉翁亭の記』を踏まえていることから、ここで『醉翁亭の記』を見ておきたい。

【訳文】

歐陽脩：『醉翁亭記』

滁州をめぐっては皆山である。

森や谷が最も美しいのが西南の峰々だ。望み見てこんもりとして深くすぐれた姿の山がある。琅琊山である。

山道を行くこと六里ないし七里、さらさらと水の流れる音が聞こえて来て、二つの峰の間から湧き出る

泉がある。醸泉である。

峰を回って道が折れ曲がる先に、翼を広げるようにして泉のほりに立つ建物がある。醉翁亭である。

醉翁亭を作ったのは誰か。山の僧の智僊だ。醉翁亭の名を付けたのは誰か。滁州の太守[知事]その人である。

太守は客人と連れ立ってここに来て飲む。少し飲むとすぐに酔い、しかも一番の年長だ。だから自ら号して「醉翁」というのである。

醉翁が思いを寄せるのは酒ではない。山水の内にあることだ。山水の楽しみを心に得るために、それを酒に含ませて飲むのである。

山に日が昇るとき、林の雲気は明るく開かれる。山に雲が帰るとき、巖の穴は暗く塞がれる。明暗がこゝろで変化するのは、山の朝と暮れである。

野の花が開いてかすかな香りを放ち、木が盛んに繁茂して深い蔭を作り、風が高く吹きわたって清らかな霜を降らせ、水が落ちて石が現れ出る。これは山の四季である。

朝に行き暮れに帰る、あるいは四季それぞれの景色は同じではない。だから、その楽しみは無窮である。

ここにおいて、担う者は路傍に歌い、歩く者は木の下に休み、前の者が呼べば後ろの者が応え、腰の曲がった老人がいれば手を引く童子がいる。往来して絶えることがないのは、滁の人の「遊」である。

ここにおいて、溪に臨んで漁をすれば、溪は深く魚は肥えている。泉の水で酒を作れば、水は香しくて酒は清らかである。山の幸、野の幸を雑然と前に並べるのは太守の「宴」である。

ここにおいて、宴が酣となったの楽しみは、楽器の糸や竹が生む音色にあるのではない。矢を射て当たるか外れるか、碁を打って勝つか負けるか、賞罰の杯が入り乱れ、立つ者もいて座る者もいて、騒がしく言い募るのは、大勢の客人の「歡」である。

ここにおいて、蒼い顔、白い髪で、この「遊」「宴」「歡」の間にあつて身を崩しているのは太守の「醉」である。

かくて夕日が山に入り、人影が散り散りとなって、太守が帰るのなら、客人もそれに従う。樹林は陰翳

を深く、上下に鳴く声は、遊ぶ人々が去ってからの鳥たちの楽しみである。

鳥は山林の楽しみを知っていて、人の楽しみを知らない。

人々は太守の遊びに従って楽しむことを知っていて、太守の楽しみは人々が楽しんでいるのを楽しむところにあるのを知らない。

酔えばその楽しみを人々と一緒にし、醒めればそれを文章にして述べる。それをするのが太守である。

太守とは誰なのか。^{ろりょう} 廬陵の^{おうようしゅう} 欧陽脩である。

【補足】〔(1) 左遷された者は悲嘆に沈む——かつての常識〔というよりは人間の自然の心理〕を覆したのが^{おうようしゅう} 欧陽脩である。地方に飛ばされたなら、その地の課題に鋭意取り組み、土地の人々の喜びを自分の喜びとする——そのような新たな常識を実践して見せたのが^{すいおうてい} 欧陽脩であり、それを文章で表わしたのがこの『^き 醉翁亭の記』である。少年^{はんちゆうえん} 蘇軾が^{かん} 撞れた4人の^ふ スーパースターのほかの3人、^ふ 范仲淹、^き 韓琦、^ふ 富弼も、^{そかん} 伯父の^{だいにん} 蘇洵も、^{しやうにん} 郷里の大先輩の「大任」も「小任」も皆がこの新常識を共有していた。(2) 『^{じょ} 醉翁亭の記』の冒頭にある「^{みな} 滁州をめぐるは皆山である」〔^{そうだい} 環滁皆山也〕は宋代の文章のあり方を端的に示すものである。何の飾りもない原文の5文字を生み出すのに、実は^{じょ} 欧陽脩は苦心に苦心を重ねた。始めは^{そうだい} 滁州をめぐる数々の山々を言葉を尽くして描き分け、推敲を繰り返した末に全てを削ってここに至った。最も大切なことを簡潔に伝えるのを理想としたのである。欧陽脩が何度も推敲を重ねたことについては次のような記録がある。「^{かえん} 欧陽脩は文を作り終わると、それを壁に貼り、^{しゆんしよきぶん} 書き改めて最善を尽くしてからようやく人に示した」(何蘧著『^{ふん} 春渚紀聞』〔→作品番号 04-2-091〕)

■ 【06-3-074】 答濠州陳章朝請

【^{ごう} 解題】^{ちんしやう} 濠州知事の^{あざな} 陳章〔^{ちやうしやう} 字は朝請〕に宛てた手紙。陳章は^{こう} 杭州で親しくした^{ちんじやう} 陳襄

[→作品番号 04-3-049] の弟である。上で見たさいかん催閑について触れている。

【訳文】

……琴を学んで楽しみとしてはどうかとお勧めいただき、私もそのようにしたいものだと思っています。ただし、怠惰な老人は心を奮い立たせることができずにおります。廬山のろざん崔閑君は、琴に極めて通じていて、遠くられてここに留まり、時に琴を聴かせてくれます。

こう江副知事の使いの者がきていて、その人が帰るのに合わせてお手紙を差し上げようとしていましたところ、たまたま寒さのために咳がひどくなり、またこの人が急に帰ると言い出したために、十分に申し述べることができません。……

【補足】[詩や書や画については一流の域に到達した蘇軾も、音楽についてそれほどではなく、特に楽器の演奏は不得手だったようだ]

■ 【06-3-075】 与蹇授之

【解題】この12月に、弟の蘇轍がいんいる筠州を管轄下に置く行政官僚としてけんじょしん蹇序辰 [字は授之] が赴任することになり、移動の途中でこう黄州のあたりを通った。そのときに蘇軾は会う機会を得られず、その後この手紙を記した。

【訳文】

貴君にお手紙を差し出しますのは、決して徒然の筆のすさびによるものではありません。心に申し上げたいと深く思ふのがあるためですが、しかし、いま十分に述べることができないのが残念でなりません。弟が貴君の部下となるのは甚だ幸いで、貴君が早々に交替してしまうのを心配するばかりです。短い手紙を届けるだけでも無闇と吏人を煩わせてしまいます。音信が稀であるのも、きとお答めなざりしませんでしょう。ちんどう陳慥君の勧めによって、いつしかお目にかかることがあるかと思っています。

【補足】〔陳慥ちんぞう〔→作品番号 06-3-049〕の名が挙がっているのは、蹇序辰けんじょしんと陳慥には姻戚関係があるからだ〕

■ 【06-3-076】 与上官彝

【解題】巴陵はりょう県知事じょうかん いの上官彝じょうかん いに宛てた手紙。上官彝は蘇軾よりも20年ほど後に科挙に合格した人。この年に書いたと推測されている手紙が3通あり、一部を拾い読みしておこう。

【訳文】

(1)お使いの方がこられて、お手紙と詩文二冊をいただきました。頂戴するのは何によってであろうかと驚くとともに、喜んでおります。……私は老いて荒廢のうちにあり、筆硯に近づくこともないままにすでに数年を過ごし、あたりを見ても索然さくぜんとしてお返してきるものもありません。ただ頂戴したものを大切に、永く好むことをもってそのかわりしたいと思います。たまたま病中であって、人も還えると申していますので、早々に失礼いたします。

(2)貴君の詩篇は多く洞庭湖の君山の景物を写していて、これを読むと、超然と神がかの地を馳せるのを見るような気がいたします。拝見して詩を作りたくもなりますが、我が才の拙さを思い、また、難多く、人を畏れ、一字も作らなくなってすでに三年となります。居るところは大江に臨み、武昌の諸山を間近に望み、時に一枚の葉のような舟にまかせてその間で遊んでいます。風雨雲月、陰晴早暮、そのおりさまは千万に変化し、それをぼんやりとでも写す言葉がないのが残念であります。お会いする由もありませんが、ただ千万自重されますように。……

■ 【06-3-077】 題所書歸去來詞後

【**解題**】毛維瞻〔字は国鎮〕の依頼で陶淵明の『**帰去来兮の辞**』〔→作品番号 06-3-042〕を書き、それにこの短文を添えた。毛維瞻は弟の蘇轍が流された筠州の知事。蘇軾が7歳のときに科挙に合格した官界の大先輩で、筠州では蘇轍と多数の詩を唱和していた。この年で退官することになり、息子の毛滂〔→作品番号 06-3-019 でその名を挙げた〕を黄州に寄越して蘇軾に書を求めている。

【訳文】

毛維瞻は私に書^{しよ}を求め、「林下^{りんか}において眺めて楽しめるものを」ということであつた。それで陶淵明の『**帰去来兮の辞**』を書いて贈ることにした。

毛維瞻は果たして林下の人なのだろうか。譬えていなら、扇の絹地に、冬^{ふゆ}の林や雪の竹^{たけ}を画く——世間において得難い高潔さを画く——それこそが毛維瞻で、本当は朝廷の中央におられるのを観るべきなのである。

■ 【06-3-078】 与陳大夫

【**解題**】前^{こゝ}の黄州知事の陳軾〔→作品番号 06-2-019〕とは手紙のやりとりが続いていた。その一部を見ておこう。

【訳文】

……かつてお会いしていたのはすでに昔となり、いつしか年が二度改まりました。閑居の折に夢幻の変化を静かに照らし見て、超然たる想いかいたします。私はお蔭をもちまして、ついに黄州の人となりました。いつの日か手を取り合つて笑いともしたいものです。書に臨んで悲しくなります。……

【**補足**】〔(1) ここに「年が二度改まり」とあるが、その間には亡くなった人もあり、黄州にきた当初に訪ねてきた杜沂〔→作品番号 06-1-039〕がこの年のうちに他界

している。(2) このころに劉攽^{りゅうはん あざな こうふ} [字は貢父] [→作品番号 05-5-085 など] が遠く南方に左遷となり、移動の途中に黄州^{こう}に立ち寄って、蘇軾が詩を詠んだとされるが、その作品は残っていない]

■ 【06-3-079】 与子明兄

【解題】 従兄の蘇不疑^{そふぎ あざな しめい} [字は子明] [→作品番号 06-3-056] に宛てた手紙。

【訳文】

兄上のような才気があれば、どこへ行かれようとも不可なることはなく、蜀中^{しよく}に留まればかりでなくともよろしいのであります。私は、もしも黄州を離れることが赦されましたなら、家族を荆南^{けいなん}の地に残して独りで都に行き、わずかな物だけを携えて、江淮^{かうわい}のどどこかに住まいを構えるのも一策であろうかと思っています。いつか子孫が科挙に応じて仕官するのにも便宜がよいのであります。弟もまたそのようにしたいと思っています。ただ先祖の墳墓を見る者が誰もいなくなってしまうのは忍びないことでもあります。……我が兄弟はともに老い、季節によって自ら楽しむところを得て、世事万端、気にかげないようしております。自ら楽しむものは、世俗の人の楽しむところのものではありません。胸中^{かくせん}は廓然として何もなく、天地の内の山川草木虫魚の類の全てを我が楽しみとするのです。……近ごろ『歸去来引^{ききょらいいん}』の一首を作りましたので、お寄せします。どうか歌ってみてください。……

【補足】 [(1) 前半は長江中流域^{ちやうこう}のどこかに隠棲しようと検討していると記している。沙湖^{さこ}の近くで田を得ることはできなかつたので [→作品番号 06-3-030]、長男の蘇邁^{そまい}が別の土地を探していた。(2) 『歸去来引』とあるのは作品番号 06-3-042 の『哨遍^{しょうへん}』のことであろう]

■ 【06-3-080】 書贈王十六

【**解題**】蘇軾のもとにはいろいろな人がきて、経済的に逼迫していながらも、居候として置いていた者もいたようだ。これは、妻の親戚筋に当たると推測される王禹錫に贈った文章。

【**訳文**】

王禹錫君は私の書を蓄えることを好み、私に従うこと三年ばかり、囊かばんぱんになるまで集めた。都の太学に入ることになり、これほどは持って行けないので、一部を王斉愈君のもとに遺すことになった。王禹錫君が嚴重に封印をしたので、王斉愈君は、「お互いに葛の蔓のようなよるべのない身でありますのに、ここまでしますかな」と、ぼやいた。

【**補足**】〔(1) 王禹錫は蘇軾の書をとにかく自分のものとして持っていたかったのだろう。(2) その後、王禹錫は科擧に合格し、その祝いとして蘇軾は硯を贈っている〕

■ 【06-3-081】黄泥坂詞

【**解題**】臨臯亭から東の坡に行くには途中で坂を登り、それを黄泥坂といった。年末にその坂を「詞」に詠んだ。題に「詞」とあるが、既存の曲に合わせて歌うタイプの「詞」ではなく、朗誦するものであるようだ。

【**訳文**】

出臨臯而東驚兮、[臨臯亭を出て東にせかせかと、兮]
 並叢祠而北轉。[こんもりとした祠のところで北に曲がります]
 走雪堂之陂陀兮、[雪堂に行くにはでこぼこの、兮]
 歷黄泥之長阪。[長い黄泥の坂が間にあります]
 大江洶以左繚兮、[左側で、長江が湧くようにまわり、兮]

渺雲濤之舒卷。[雲と波が巻き付いています]

草木層累而右附兮、[右側で、草木が重なり、兮]^{イエーイ}

蔚柯丘之葱蒨。[柯丘がどっしりと構えています]^{か きゅう}

余且往而夕還兮、[私は朝にここをいき夕へにここを帰り、兮]^{イエーイ}

歩徒倚而盤桓。[歩くのはためらったり、ずくずしたりです]

雖信美不可居兮、[ここは実に美しいけれどずっといられるところではなく、兮]^{イエーイ}

苟娛余於一盼。[見えるものをとにかく楽しみたいのです]

余幼好此奇服兮、[私には幼いころからおかしな趣味がありまして、兮]^{イエーイ}

襲前人之詭幻。[昔の人の奇怪なところを真似してきました]

老更変而自哂兮、[老いてますます変で、自分で笑ってしまい、兮]^{イエーイ}

悟驚俗之来患。[人々をびっくりさせてばかりではまずいということを知りました]

釈宝璐而被繪絮兮、[まともな服などは捨ててしまって、綿のどてらをひっかけ、兮]^{イエーイ}

雜市人而無弁。[土地の人に雑ざって見分けがつかません]

路悠悠其莫往来兮、[世間の路は遥かに長いけれど、往来することはなく、兮]^{みち}^{イエーイ}

守一席而窮年。[ここらをちんまり守って年を終えようとしています]

時遊歩而遠覽兮、[時にぶらりと歩いて遠くを見ても、兮]^{イエーイ}

路窮尽而旋反。[路が行き止まりになるとすぐに引き返します]

朝嬉黃泥之白雲兮、[朝には黄泥の坂の上の白い雲を喜び、兮]^{イエーイ}

暮宿雪堂之青煙。[暮れには雪堂に宿って青い煙を上げます]

喜魚鳥之莫余驚兮、[うれしいことに、魚や鳥が私を驚かせることはありませんし、兮]^{イエーイ}

幸樵蘇之我媪。[幸いにも、村人は私を阿呆扱いしてくれます]

初被酒以行歌兮、[酒を飲んで歩きながら歌って、兮]^{イエーイ}

忽放杖而醉偃。[杖を放り投げ、酔って倒れ伏してしまいます]

草為茵而塊為枕兮、[草を敷物にし、土くれを枕にし、兮]^{イエーイ}

穆華堂之清晏。[それで立派な建物で安らかに眠っている気分です]

紛墜露之湿衣兮、[露が落ちてきて衣を湿らすと、兮]^{イエーイ}

升素月之团团。[まん丸の白い月が昇ってきます]

感父老之呼覚兮、[ふと感ずるのは、老人たちが呼び覚ますとする声、兮]^{イエーイ}

恐牛羊之予踐。[牛や羊が私を踏んつけてしまうのを心配してくれたのです]

於是蹶然而起、[私はさっと起き上がり]

起而歌曰、[立って歌います]

月明兮星稀、[月は明るく、兮、星は稀れに]^{イエーイ}

迎余往兮饒余歸。[余が往くのを迎え、兮、余が帰るのを饒る]^{わたし ゆ イエーイ わたし おく}

歳既晏兮草木腓、[歳はすでに晏り、兮、草木は腓み]^{おわ イエーイ きば}

归来归来兮、[归来归来、兮]^{かえろ帰るかえろ帰らん イエーイ}

黄泥不可以久嬉。[黄泥は久しく嬉ぶべからず]^{よろこ}

【補足】[(1) 最後の歌にある「月明星稀」は曹操の詩にあり [→作品番号 06-3-057]、

「归来」は陶淵明の『帰去来兮の辞』にある [→作品番号 06-2-051 など]。(2) 蘇軾は

臨臯亭と東の坡との日々の往復を楽しみ、これがいつまでも続くことを望む気持ち

がありつつも、そのようには決してならない [なつては困る] とも思っていた。(3)

このころに岐亭に行って陳慥 [方山子] [→作品番号 06-3-049] と会ったようだ。4 回

目の岐亭訪問である]

第6章 赤壁の賦——黄州

[第6章その四]

げんほう 元豊6年 [1083年]、そしよく蘇軾48歳。

■ 【06-4-001】 正月三日点燈会客

【こ解題】黄州に来て3度目の正月を迎え、1月3日、りんこうてい臨臯亭に集まった客人と話すうちに、話題は自ずと1月15日じょうげんせつの上元節の都の賑わいに及んだのだろう。灯籠をともして、この詩を作った。

【訳文】

ちやうこう長江の上を吹く東の風[春風]、

天に触れるばかりの浪が立ち、

寒さはなぶらおも無頼、

春がうつく妍しくなろうとするのを駄目にしようとしているのか。

寒さよけに、

うんぼう こうじしゅ雲夢の羔兒酒を開いて味見をしたり、

せんとう やくぎやくせん錢塘の葉玉船をさっと注いだりする。

春の初めといえは、

ようさんいち養蚕市に遊んだのは遠い少年時代、

ここは我が故郷ではない。

都ばの馬行街の灯籠の記憶ははつきりと残っているが、

それだってもう昔のこと。

冷やかな霽に湿った雪、
 それでも梅の花が密やかに開くのはやはり春であるからだろう。
 まだ早いけれど、
 燈火を掲げて上元の思いをなすでしょうか。

【補足】〔(1)「雲夢の羔兒酒」や「錢塘の薬玉船」は、それぞれの土地にそういう名の酒や薬があったのだろう。(2)蘇軾の故郷で養蚕に必要な道具類を売る「蠶市」が賑やかに開かれたことは作品番号 02-3-002 で見ている。(3)馬行街は都で最大の繁華街で、上元節には無数の灯籠で飾られた。それは間違いなくこの時代の地球上で最も明るい夜景であった〕

■【06-4-002】唐画羅漢贊

【解題】蘇軾の家には十六羅漢図があって、折々に茶や花を供えるなどしていた。黃州にいる間に、十六羅漢の一人ずつに贊を作っている。記者にはそれを解する力がなないので割愛し、ここでは別の羅漢図に書き添えた贊を見ておこう。このころに成都からまた悟清〔→作品番号 06-2-010〕がきていたようで、軽いフットワークを活かして、蘇軾のために動いている。

【訳文】

東坡居士は悟清師にこのように告げた。

「昔、紹遠上人は唐の時代に描かれた十六大阿羅漢の画を持っておられ、紹遠上人はその画によって見守られているかのようにありました。紹遠上人は亡くなり、いまその画は黃梅山の常公の道場にあります。もし師がそちらに行かれるのでしたら、常公に、その画を私かゞ乱がっているので譲ってもらえないかと尋ねていただきたい。もし常公がその画を愛して手放すことができないとおっしゃるのなら、そ

れて結構です。手放しても惜しくないということでしたら、もらってきてください。惜しくはないけれど手放せないということでしたら、どうか取ってきてください」

それから十八日で悟清師は帰り、画を持ってきてくれた。

東坡居士は堂に昇り、画に向かって焼香して礼をなし、四方の大衆に告げて、紹遠上人のために追ついで福減罪ふくめつざいを祈った。

人々は東坡居士に尋ねた。

「この羅漢の画はどのような勝相しょうさう〔有難いしるし〕があるのでしょうか。供奉贊嘆くぶさんたんして何か功德くどくがあるのでしょうか。また、画の謝礼として何をもって常公に酬むかいのおつもりでしょうか」

東坡居士はいった。

「この画には実のところ勝相はありません。また功德也没有。常公に酬むかいするのはこれによつてです。それでこの贊を作ったのである。

五更粥熟聞魚鼓ごこう、〔五更には粥が熟して太鼓が聞こえる〕

起对孤灯与誰語。〔起きて灯のもとで誰と語るのか〕。

溪边洗鉢月中帰、〔谷川で鉢を洗って月の下を帰る〕

還君羅漢君收取。〔君に羅漢を還すから君は取って収めるがよい〕

【補足】〔(1) 紹遠上人や常公について詳しいことはわからないようだ。(2) 黄こう梅ばいは黄州から南東に直線距離で百キロほどであるので、ここに記された日数で往復することは十分に可能である。(3) 贊の部分は意味がわからないままに訳してある。画を譲り渡すココロを常公に代わって詠んだのであろうか〕

■ 【06-4-003】 六年正月二十日、復出東門、仍用前韻

【解題】 1月20日に郊外に出て春を尋ねるのはもはや恒例行事となり、作品番号06-2-

003 および 06-3-005 で見た詩と同じ韻をまた用いて詩を作った。潘丙^{はんへい}、郭邁^{かくこう}、古耕道^{ここうどう}の名は明記されていないが、たぶん同行したのだらう。

【訳文】

黄州^{こう}の町はあまたの山^{めぐ}が環るなか。

東の門を出て、前の川を渡り、

我が身をちぢみけな村に置く。

私は、狭い畑を得て、どうにか一生食べて行けそうな算段がたった。

旧くからある巢に積もった塵を鳥が掃除するのを繰り返し見た。

川べりの沙で鷗とすっかり慣れ親しんだだけでなく、

いつも釣り糸を垂れる岩場は私の温もりを覚えてくれている。

今日この一月二十日に東の風[春風]と逢う約束もすでに長く、

梅はいつも花の魂を呼び戻してひそやかな香りを漂わせてくれている。

■ 【06-4-004】 口目相語

【解題】 このころから蘇軾は眼病を患い、風邪もひいたようだ。後に次のような短文を記している。

【訳文】

私が赤目を患ったとき、ある人は膾^{なます}[魚の刺身]を食べてはいけな^{なます}い^{なます}った。私はそれに従おうとしたところ、口がそれはためた^{なます}い^{なます}った。

「おいら^{なます}はあんたのために口^{なます}になっ^{なます}ている。あいつ^{なます}はあんたのために眼^{なます}になっ^{なます}ている。あいつにはよ^{なます}くして、おい^{なます}らに^{なます}はな^{なます}お^{なます}ざ^{なます}り」とい^{なます}れ^{なます}け^{なます}な^{なます}のかい。あいつ^{なます}が患^{なます}ったから^{なます}とい^{なます}って、おい^{なます}らに^{なます}食^{なます}わ^{なます}せ^{なます}ない^{なます}とは、ひ^{なます}どい^{なます}

ではないか」

それで私は決めることができなくなった。

口は眼にいった。

「こんどおいらが患ったら、あんたが物を視るのを禁じてやるからな」

昔、管仲かんちゆうはこういった。

「お上の威令を病のように畏れるのは民として上の部類じゆうである。自分の思いに従って流れてしまうのは民として下の部類げである」

またこうもいった。

「のんびり楽するのは猛毒である。それに耽たってはならない」

『礼記』らい きにはこうある。

「君子はきちんとしていると日に日に立派になり、安楽あんらくにしていると日に日にためになる」

この語を皆が目立つところに書き記したという。

そこで私は、

「お上の威令を病のように畏れる」

と、自分のためにここに記しておく。

【補足】[蘇軾は初めに笑い話として前半部分を書き、あとで我が身の戒めとして後半を付け加えたのだらう。とすると、口の言い分はきかないことにして、節制なますして膾を食くべなくなったのだらうか]

■ 【06-4-005】次韻孔毅甫集古人句見贈五首

【解題】孔平仲こうへいちゆう [字は毅甫あざな き ぽあるいは毅父き ふ] [→作品番号 06-3-053] が昔の人の詩から句を拾い集めて再構成した詩を送ってきた。それに次韻した。昔の人の詩句を再構成

する例としては、陶淵明^{とうえんめい}の『歸去來兮の辞』^{ききょらいけい じ}の語句を使った蘇軾自身の作を作品番号06-2-051で見ている。しかし、そのような行為はあくまでも遊びの範囲であると蘇軾は捉え、この詩も遊びで応えたもの。よって訳も遊びである。

【訳文】

其の一

まこと羨ましい、
貴君が戯れに他人の詩を呼び集め、
町の子供を顎でこき使うのと同じようにしているのは。
天の彼方を飛ぶ気高い鴻鵠を、
そこらの家で飼われている鶏とペアを組ませたりもしている。
しかし、どうなのだろう、
そんなことをされたのでは、
韓愈^{かんゆ}はたまげず笑い、杜甫^{とほ}はがっくりと泣くのではないのかな。
そんな騒ぎになって、貴君は家でぐつろいでいられるかな。
世の人が好い句だとするものは世の人のものなのだ。
明るい月がどの家にも射し込むのと同じく、
貴君一人が独占してじりまわしてよいものではないだろうに。

【補足】[蘇軾の詩は、孔平仲^{こうへいちゆう}が集めた句からキーワードを抽出し、巧みに再構成して戯れの苦言を呈しているようだ。そうした高度な技を訳文に反映させることはとてもできない]

其の二

^{らくだ}
駱駝のこぶの肉がどれほど旨いものなのか僕は知らないけれど、
それを鶏や豚の肉に雑せてしまったら、
まったもって残念としか言いようがないだろう。
貴君は居ながらにして、
^{しょうじょう} 猩の唇とか ^{てのひら} 熊の掌とかの最高の珍味を集めたわけだが、
道端で拾ったへつぽこな槍と、
名工が鍛えた名剣とをいっしょたにするようなことをしたのは、
何にもならない。
四の五のいわずに私にまかせてくれたらよい、
貴君が気を失うくらいにみごとに使いこなしてみせるだろう。

其の三

天下^{とほ}に杜甫の詩を学ぶ者は多いけれど、
せいぜい皮に触れるくらいで、
深く骨まで理解する者はまずいない。
目の前に巨大な山が聳え立っていて、
よちよち歩きの羊が、その険しさに恐れ入るしかないようなものだ。
杜甫の詩はどれも名章^{しんご}、俊語に満ちている。
当時いかなる情^{こころ}でそれを用いたのか、
誰もわかっちゃいないのだが、
貴君の前生はきっと杜甫であったのだろうね、
手当たり次第に使いこなしてしまうのだから。

其の四

詩人は自然から詩句を彫り出す。

最も肝腎なところを抉り出すと、

鬼神もそれに応じて泣くという。

そうした詩句を千回も万回も繰り返して黙誦するのがよい。

右から悲しい句を取り出し、

左から愛すべき句を取り出し、

いつも心を豊かにしていただけるだろう。

いつか貴君と会ったら、ともに一杯やって、

「私は眠くなったから、君はもう帰りたまえ」

とだけいって、詩については一切何も語らないつもりだ。

【補足】 [「私は眠くなった……」は陶淵明の詩にあるセリフ]

其の五

蠟燭は光を出すために自身の身を焼いてしまわなければならない。

象は牙のために、翡翠は羽根のためにその身を失ってしまう。

多く言うのは窮するもとど昔から決まっている。

かすかにほめかすことで事態を解きほぐすこともある。

愚かな者は、

とにかくやたらとたくさんよさそうなものを集めたがるだけで、

何が本物なのかわかっていない。

千章万句を並べたところで、

どうせ自分のものではないだから、

やめた方がよいと貴君にいいたいのだが、
すでに手遅れみたいだね。

【補足】[蘇軾は集句という行為を頭から否定したわけではないだろう。原作を十分に理解しないで珍奇な対比をしてみせたり、むやみと名句同士を並べたりするのは、原作者を悲しませるものだといっているのだろう]

■ 【06-4-006】 食柑

【解題】^{こう}黄州のあたりは柑橘類が豊富なことは作品番号 06-1-103 で、また、東の^{たかまり}坡に柑橘類を植えたいと思っていたことは作品番号 06-2-024 の其の六でそれぞれ見ているが、これは柑橘類を食べた詩。

【訳文】

^{とう}唐の皇帝が薄絹みかんに包んで蜜柑を臣下に賜ったということを聞くと、
朝廷おを逐われた身でありながら、
林の下で呑気に蜜柑を食べるのには、いさか取じらいを覺えずにはいられない。
冬でも青々とした葉を付けたままの枝を剪きって、盤ばんに盛られた金色の実、
手に取って香り高い皮を剥く。
清らかな泉の水が、さらさらと齒に流れ、
香る霧が、さやさやと鼻に吹きかかると、
客人は蜜柑を持ってきて殷勤に私に勧めてくれるのだが、
千人の召使いに譬えられる蜜柑であっても、
私の貧乏はどうすることもできないだろう。

【補足】[千本の蜜柑が千人の召使いに相当するという故事はやはり作品番号 06-2-024

にある]

■【06-4-007】大寒歩至東坡贈巢三

【解題】巢谷〔字は元修〕という眉州眉山びびざん県出身の者が黄州こうにきていたことは作品番号 06-3-015 で見ていたが、大寒の日とともに東の坡たかまりに行き、この詩を贈った。巢谷も蘇軾好みの「異人」である。初めその名を穀こくといい、科挙を受験するために都に行ったところ、武芸の方に心を魅かれ、そちらで身を立てようと考え、各地を旅して武芸者と交わりを結び、韓存宝かんそんほうという者から兵書を教わった。宋は夏国かこくと戦争を起こして失敗し〔→作品番号 06-3-069〕、作戦に関わった韓存宝は敗北の責任を問われて死を覚悟し、「自分が死罪になるのを恐れはしないが、妻子を飢え死にさせるのは忍びない。ここに数百両の銀がある。家に届けてくれまいか」と巢穀に託した。巢穀は名を変え、秘かに韓存宝の故郷に行つてその銀を渡し、しばし身を隠していた。己に罪が及ばないことを聞いてようやく身を顕わし、蘇軾を訪問した。

【訳文】

春の雨であるのに、暗い塵のように降り注ぎ、

春の風であるのに、人を倒さんばかりに吹いてくる。

東の坡たかまりの我が家には幾つかの部屋がある。

貴君が誰かの隣に住むとしたら、ここ以外にどこがあるうか。

見たまえ、

床ベッドにはぼろぼろの綿を詰めた布団がある、

壊れた竈かまどには湿った薪が積んである。

貴君は一度も「寒い」とはいわないのは、

哀しいかな、

僕が貧乏であるのを知っているからだ。

僕にだってなけなしの酒がある。

たった一つの瓢ひょうこにあるだけだから、

僕の頬を赤くすることもできないけれど、

これを独りで飲んでしまうのはまことに不人情というもの、

貴君の唇を少しでも潤おしてくれたまえ。

僕の知り合いには、

いまや莫大な俸禄をもらって、

馭者でさえも酒を飲み過ぎて豪華な敷物に吐瀉して平然としているとか。

そんな連中は知りもしないのだ、

僕と貴君がこうして冬の蟬のように呻吟しているなどとは。

僕も貴君も己の力を尽し、天を怨むことはない。

僕も貴君もれっきとした天の民だ。

そのうち柳に花がづくのを見るだろう。

そうになったら、

天の与える無辺むへんの春を享受しようではないか。

【補足】 [(1) この詩のキーワードは終わりに出てくる「天民てんみん」と「無辺むへんの春」であろう。「天民」とは天のもとに生まれ、天の法則に従って生きる民で、天のもとでは誰もが平等である。「無辺の春」とは無限に広がる春である。それを享受するとは、『赤壁せきへきの賦ふ』で提示された「造物者の無尽蔵」を我がものとして受けるということである。(2) 中頃に「僕の知り合い」とあるのは、具体的には蒲宗孟ほ そうもう あざな だんせい [字は伝正] [→ 作品番号 05-4-002] のことであるという。蒲宗孟は、先に亡くなった従兄の蘇不欺そ ふ きの

妻の兄弟で、つまり、巢谷も蘇軾も皆が同郷である。蒲宗孟は都で要職に就いていて、巢谷に金を与えるよう皇帝に願い出たのだが、許されなかったという。そうした事情を知りながら、ここでは知らん顔をしているかのよう詩に詠んで、わざとからかっているのである。後に、蘇軾は蒲宗孟に浪費癖を改めるよう苦言を呈したりする。(3) この詩は後に石に刻まれて成都の州庁に置かれたという]

■ 【06-4-008】 与巢元修

【解題】巢谷〔字は元修〕に宛てた手紙。巢谷は自由人で、しばらくの間、対岸の各地を巡っていたようで、王斉愈〔→作品番号 06-1-030〕のところにいるとわかったので、この手紙を送ったのである。

【訳文】

貴君が帰るのを日々待ち望んでおりましたところ、王斉愈君から手紙がきて、前日に君瑞君と一緒に
出掛けたとありました。貴君がいないので、東の坡は荒れてしまいました。春の筍が出始めていて、餅
餠はもうそろそろ終わってしまいます。このように聞いたら、すくに来てくれるでしょうか。

お別れしてからも御壮健のことと想っておりますが、私はこの数日来、咳に苦しみ、飲食も話すのもほとんどできないほどで、何の楽しいこともありませんでした。今日はようやくよくなってきたところです。

近ごろ牢獄から火が出て、ほぼ全焼してしまい、雪堂もまた危ういところでありました。潘家の人々も皆走って避難しました。雪堂のあたりにも炎が飛び、軒が焦げるばかりでありました。幸いにも先生の二つの瓢箪は無事で、四本の柏の木からは芽が出てきています。

【補足】〔(1) 君瑞とあるのは王天麟〔→作品番号 06-1-041〕のことだという説があるが、その根拠は不明であるという。(2) 餅餠は季節の食べ物であるらしいが、どのようなものであるかはわからない。(3) 後半には火事があったことが記されている。〕

はんかく
潘革の営む酒店は対岸の樊口にあったのだが [→作品番号 06-1-042]、潘の家の誰かが
せつどう
雪堂の近くに住んでいたのだらう。(4) 先に見た陳章 [字は朝請] に宛てた手紙
[→作品番号 06-3-074] に「寒さのために咳がひどくなり」とあったのは、あるいは
このころに書いたものであるのかもしれない]

■ 【06-4-009】 与徐得之

【解題】 蘇軾が眼病を患ったことは、徐大正 [字は得之] に宛てたこの手紙にも記さ
れている。徐大正は黄州知事の徐大受 [→作品番号 06-3-063] の弟で、このころに黄
州にきたようである。

【解題】

私は春に眼を病み、開けられないほどでありました。……このころは、園中の桃や李が美しく咲いており
ます。同輩が雪堂の前に移植してくれるというので、それで一絶句を作って、日々を過ごすというはど
うでしょうか。昨日の夢で、ある杭州の人が竜団茶を山ほど贈ってくれまして、しかもそれを一遍にすっか
り飲んでしまったのです。これはどういふ意味だかわかりになりますか。……三月十六日。

【補足】 [夢に見たことには何かしら意味があると昔の人は考えていた。蘇軾には夢
にまつわるエピソードがたくさんある]

■ 【06-4-010】 与子由書

【解題】 黄州から弟の蘇轍に宛てた手紙が幾つか残されている。三月二十五日の日付
のあるものとともに、3通をまとめて読んでおこう。

【訳文】

(1)心は口と異なることなく、口は心と異なることなく、心はそのまま口で、口はそのまま心である——近ごろこの禅語めいたものをこらえましたが、これは君の人となりを表すものです。要するに、君は己を欺く世間の連中とは違っています。この言葉を兄に当てはめようとしても、それはできません。人は水を飲むと、冷たいのか温かいのかすくにわかります。死と生とが入れ替わるのも、禍と福とが交互に起こるのも、それと同じなのでしょう。会って話せないのが残念です。

(2)本性に任せてぶらぶらする、縁に従って広く放つ、俗な心を消し去る——このほかに「勝解」[最善の解決法]はない。

このことをもって自分自身を顧みると、俗な心を消し去るということが「勝解」であるのは実際にはっきりとしています。ただし、この「勝解」はあると思えばあり、ないと思えばないようで、言葉によって伝えられるものではありません。ですから人を教え導く師もここまでしかいっていないのです。

譬えるなら、眼の(視界を遮っている)翳を取り除くなら、眼は自ずからはっきりと見えるようになります。医師はただ翳を取り除く薬を用いるのであって、はっきりと見えるようにする薬を用いるではありません。はっきり見えることを求めるのなら、きっとまたそこに翳が生じてしまうでしょう。もとより、翳の中にあってはっきり見えることを求めることはできませんし、翳とは別に、はっきりと見えなくさせているものがあるわけでもありません。

世間の愚昧な人は、ぼんやりとして何も認知していないのが仏の境地であるかのようにいいます。もし仏の境地がそのようなものであるのなら、猫や犬が熟睡して、腹を揺らし鼻ですうすう息をし、土やら木やらと同じような状態になっているときは、まさしく毛筋一本ほどの思念もないのですから、猫や犬は仏の境地に入っているのでしょうか。

およそ学ぶ者は、妄を観て愛欲を除くことを、大より小に至るまで、全てを忘れずに毎日毎日行っておむことがありません。

君が教えてくれたのは、つまりは以上のようなことでしょうか。

ここまで書いてきたところで、塙の向こうで怒りに任せて夫婦者が殴り合いの喧嘩を始めました。罵り声は火を噴くようで、猪の叫び、犬の吠え声のようです。ここからもわかるのは、猪の叫び、犬の吠え声のうちにも、一点の光明がはっきりとあるのでしょう。譬えていうと、大河の本性は、砂を飛ばし石を走らせる激しさの内にあるのでしょう。普段の静かな流れを見ているだけではわからないのです。今日の喧嘩からもいささか得られるものがあります。

げんほう
元豊六年三月二十五日。

(3)ある人が僕にいいます。

「草木が成長するのは常に夜明けのころだ。早く起きて観察すると、筍が最も甚だしくて数寸も伸びる」
「夏と秋の境目で、稲がまぎに穂を出すとき、夕暮れに月が出ると、露の珠が根元に生じ、それを押し上げる者がいるかのように次々に上ってゆく。あるものは茎の中心にあり、あるものは葉の末にある。そして、稲の穂が出て実を結ぶ。観察するとその通りになっている」

この二つの事は君の養生の説と符合するように思うので、書いてお知らせします。

【補足】 [これらの文章はいずれも弟からの手紙に記してあったことを踏まえて書かれているのだろう。よくわからない箇所があるのは、こちらの読解力のなさだけでなく、致し方ないところもあるのかもしれない]

■ 【06-4-011】 東坡

【解題】 この頃の日常のひとこまを詠んだ詩。

【訳文】

雨が東の坡たかまりを洗って、
月の光が澄みわたると、

市人^{しじん}[町中の人]はすでに行き尽くし、

野人^{やじん}[郊外の農夫]ばかりが行く。

犖^{ごるごる}確と石だらけの坡^{たかまり}のどつきの路^{みち}を嫌いはしない、

鏗^{からから}然と杖を曳く音が愛おしい。

【補足】市人^{しじん}と野人^{やじん}を対比させ、蘇軾自身はもちろん野人の一人である。「坡^{たかまり}のどつきの路」とは先に見た黄泥坂^{こうでいばん} [→作品番号 06-3-081] である。なお、黄泥坂^{とう}や東坡^{とう}や雪堂^{せつどう}が実際にどの場所にあったのかという議論は現在に至るも続いているようだ。これまでに見たように、蘇軾は詩文の中にたくさんの地名や位置関係、方角などを入れ込んでいるので、場所探しはとりわけ地元の人にとって楽しいテーマであるのだろう]

■ 【06-4-012】 日日出東門

【解題】黄州^{こう}にある東門^{とうもん}から毎日出て歩いていることを歌った詩。

【訳文】

日に日に東門^{とうもん}から出て、

歩いて東城^{とうじょう}を尋ねて遊ぶ。

東門にいつもいる門衛が、

「あちに行って何を求めておられるのかね」

と、笑って問いかけた。

私が答えるに、

「求めるものなどないさ。

ここに駕^かるのは心の憂いを写すため。

思い通りに適うところがあると、返るのを忘れてしまい、
路が行き止まりになったら、そこでおしまいさ。
遙かに想像するのは百年先、
こゝ
黄州の爺さんたちが、
かつてここを僕が往き来していたことを語ったりするのもね。
大昔から、賢人も達人も誰もかこの路を通ったものだ。
こゝ
この路というのは、町から出て行く路のことだ。
かつてかの町に住んでいた謝安しゃあんという人が亡くなると、
葬送の列は西州門せいしゅうもんから出て行った、
謝安に可愛がられていた甥の羊曇ようどんは、
その日からこの路を決して通るまいと心に決めた、
しかし、ある日、酔っていつの間にか西州門にきて倒れ伏し、
醒めてそこが西州門であると知ると、
羊曇は号泣した。
人の一生は百年、
豪壮な家で裕福に暮らしても、
千年後にはいかなる人も山丘さんきゅう〔墓場〕に帰っている。
まあ、君はいつもここにいるわけだから、
酔いから醒めていちいち私のために泣いてくれたりはしないだろうね

【補足】〔(1) 謝安しゃあんと羊曇ようどんの故事は作品番号04-2-070ですで見ている。ここでは、その説明を織り込んで訳文を作ったので、かなり冗漫になっている。(2) 前の詩の補足で位置の比定について触れたが、この詩の題である東門とうもんについて少しだけ検討してみよう。作品番号06-4-003でも見ているように、東門は町と郊外の境になっている。一

方で、この詩には、「東門を出て東城とうじょうに遊ぶ」とある。黄州の町は州庁等のある府城ふじょうとその東側の東城に分かれていたようだ。府城は城壁で囲まれ、東城はどうやら囲まれていなかったのだろう。東門は府城と東城の境目にあり、東門を出ると東城にも行けるし、そのまま郊外に行けるのである。別の考証によると、作品番号 06-1-032 で見られた乾明寺けんめいじも城壁の外側の、東門から五十歩のところにあった。では東の坡たかまりはどこにあったかという、東門を出て北東側に進んで少し上ったところであるようだ。一方で、長江ちやうかうに臨む臨臯亭りんこうていは、府城の南、もしかすると城壁の外側にあったのだろう。とすると、蘇軾が臨臯亭から雪堂に行くには、府城を經由して東門から出て行くルートと、府城の外側を大きくまわるルートとがあったのだろう。ここの詩では、毎日のように東門から出て行くと詠んでいるので、通常は府城を經由するルートを使い、その方がずっと近かったのだろう。そして黄泥坂かうでいはんはその途中のどこかにあったのだろう。作品番号 06-5-026 で、蘇軾が去って90年ほど後の雪堂の様子について触れるが、そのときすでに水の流れが変わっていたりしている、現在と過去を結び付けるのはなかなか容易ではない]

■ 【06-4-013】 記所作詩

【解題】 上の詩に関連する短い文章。

【訳文】

私の詩に、

日日出東門、[日に日に東門とうもんを出て]

歩尋東城遊。[歩いて東城とうじょうを尋ねて遊ぶ]

城門抱関卒、[城門^{ほうかん}の抱関^{そつ}の卒は]

怪我此何求。[此^{ここ}に何を求めるのかと我^{あや}を怪しむ]

吾亦無所求、[吾^{また}に亦求める所なし]

駕言写我憂。[駕^がしてここに我が憂^{あや}いを写す]

というのがある。

章惇^{しょうてん}はこの詩を見て参寥^{さんりょう}にいった。

「前に『歩』とあって後には『駕』とある。最初は歩いていたはずなのに、なぜか馬車^のに駕っている。前と後ろでひどくちやくちやてはないか」

私は参寥からこのことを聞いていった。

「私は尻をもって輪^{こころ}となし、神^がをもって馬となし、それに駕して歩くのだ。前と後ろでちゃんと辻褄^が合っているのさ」

参寥はいった。

「貴君が文章を飾って理屈を超えようとするのは孫綽^{そんしゃく}にそっくりだ。『流れ^{まくら}に枕するのは耳を洗うため、石^{すす}で漱^みくのは歯^がを礪^がためだ』と孫綽^{そんしゃく}が言い逃れをしたのは、きっと貴君の入れ知恵^{いれちえ}だったんだろうね」

【補足】 [(1) ここに登場する章惇^{しょうてん} [作品番号 06-2-028 など] と参寥^{さんりょう} [道潜^{どうせん}] [→作品番号 06-1-081 など] は蘇軾のかねてからの親しい友で、この文章からすると、参寥に向かつて蘇軾の詩の揚げ足取りのいちゃもんをつけているくらいであるから、章惇は引き続き蘇軾のことを気の置けない友人であると考えていたのだろう。章惇と参寥のこの会話がいつ行われたのかというと、たぶんこれはかなり無理な解釈であるのだろうが、蘇軾のこの詩はすぐに都にまで伝わり、たまたまそのときに参寥が都^こにいたのではないだろう。そして、その後で都から参寥が黄州^{こうしゅう}にきてこの話を蘇軾に伝えたのだろう。参寥がこの年の夏以降に黄州にきてしばらく滞在したのは確かなことであ

るので、一応辻褄は合っているのだが、参寥が杭州を発ってどうしてわざわざ遠く都を經由してから黄州にきたのかが不可解である (2) 蘇軾は章惇のいちゃもんに対して、わざと屁理屈をこねてみせたのだろう。参寥はそこで、有名な孫綽そんしゃくの故事を引いて笑ったのである。それがまさに蘇軾の狙いで、参寥とは息がぴったりと合っていたのである。孫綽は若い頃に、隠者になる志があると友人に語り、「石に枕し、流れに漱ぐ」といおうとして「流れに枕し、石に漱ぐ」と言い間違え、それを指摘されると、あくまでもこれでよいのだと強弁した。夏目漱石のペンネームはこの故事に由来する]

■ 【06-4014】参寥泉銘

【解題】これはこれより 9 年後に書かれた文章であるが、この年のどこかの時点で参寥さんりょう [道潜どうせん] が黄州こうにきて、年をまたがって滞在したことがわかる。

【訳文】

私は黄州こうしゅう 謫居たくきょとなったとき、参寥さんりょうは(杭州こうから)数千里の道も遠いとせずこに黄州こうにまで来てくれた。年を越えて滞在し、ともに武昌ぶしょうの西山せいざんに遊んだ。私は夢の中で参寥とともに詩を賦し、そのなかに「寒食かんしょく清明せいめい」、「石泉槐火せきせんかい」の句があった。語としてははなはだ美しいけれども、その意味するところはわからなかった。

それから七年後に、私は知事ちじとして杭州こうに赴任すると、そこに参寥さんりょうがいた。翌年、参寥は智果寺ちかじの精舎に入り、さらにある年に新たな居所を作った。ちょうど私は寒食の日に杭州を去ることになったので、そのことを告げに参寥のもとを訪ねた。

精舎の下には石の間から湧き出る古い泉があった。この月、石を鑿うがったところ、泉がまた湧き、水がよりっそう澄んでいた。参寥は新茶を摘み、泉の水を沸かしてそれに注いだ。私は笑っていた。

「これは九年前に見た夢そのままだ」

一同はみなひどく驚いた。

運命を知らせる何かがあっても、その意味はなかなかわからないものだ。

この泉さんりゅうせんを参寥泉と名付け、銘を作った。

【補足】 [ここに記されている泉については改めて第9章で見ることになる]

■ 【06-4-015】 和黄魯直食筍次韻

【こうていけん あざな り ちやく たけのこ 解題】 黄庭堅 [字は魯直] から 筍 を食べる詩が送られてきたので、それに次韻した。黄庭堅の名は作品番号 06-2-066 などでも見ているが、蘇軾の高弟ないし友人で、ほくそう 北宋の著名な詩人の名を挙げるとすると、蘇軾、おうようしゅう 欧陽脩、おうあんせき 王安石、黄庭堅の4人を欠かすことはできない。その中で、黄庭堅の詩が最も難解で、蘇軾と黄庭堅の間で行き来した詩は、我々には容易には理解できないものが多い。この訳文は晦渋さを100倍は希釈しているので、原詩とは似てもいらない非なるものである。

【訳文】

たっぷり食べて肉をごっそり残す人もあれば、
野菜の切れ端さえなくて食に餓えている人もいる。

食べ物のことで喜んだり怒ったり、

ごたごたとしたありさまは、

ちようさん ぼ し
「朝三暮四」の猿と変わらない。

そこに一人だけ覚醒しているのは、

り り ほか
凜凜しい白下の貴君で、

一日いっばんに一飯の暮らしは在家の僧と同じ、

しらく ふえ
至楽とは不壊の道心であるとしている。

前の世では貴君はきっと書物を食らう虫だったのだろう、
 今の世でその罪を償うために筍を齧っているのだ。
 酒樽にも俎板にも何もなく、筍以外のものは雑まじえない。
 しかし、霜や雪に被われた筍を見るがよい、
 幼いときから早くも脱俗の姿、
 それをどうして乱暴に食べてしまえるのかな。
 三度その香りを嗅ぐなら、口にするのは忍びないではないか。
 筍は朝に皮をはらりと解くなら、
 風雷に迫る勢いで伸び上がるのだ。
 貴君に願うのは、
 竹筒に飯を盛って、五色の糸で縛り、
 私のことを思って、水に投じてくれたまえ。

【補足】 [(1) 「白下」とあるのは、こうていけん黄庭堅たいわのこのときの勤務地である太和県の古い地名。(2) 最後のところは、不幸にして投身自殺した屈原くつげんを弔うために始まったとされる端午の節句の行事を踏まえている。蘇軾は自分の境遇を屈原になぞらえたのである]

■ 【06-4-016】書謗

【ゲマ解題】謗についての一文。これはずっと後に書かれたものだが、その前半部分を訳す。

【訳文】

私がこう黄州たくきょに謫居していた間に、曾鞏そうきょうは母の喪に服して臨川りんせんに帰り、そのままその地で亡くなった。すると、人々が私と曾鞏が同じ日に死んだと妄みだりにとう言い伝えた。唐の時代に、李賀りがが天帝に召されて死

んだといわれたように、二人は天帝に召されたのだと人々は噂した。先帝^{しんそう}〔神宗皇帝〕はこのことを聞いて慨嘆^{しよく}し、蜀^ほの人の蒲宗孟^{そうもう}に真相を尋ねられた。

【補足】〔(1) 曾鞏^{そうきやう}が亡くなったのはこの年の4月11日で、65歳だった。曾鞏は蘇軾と同時に科挙に合格した人。そのときの試験委員長であった欧陽脩^{おうようしゅう}は、二次試験の答案で最も優れた論文は、自分の弟子である曾鞏が書いたものではないかと疑い、一番と二番の成績を入れ替えて発表したところ、曾鞏が首席になってしまったというエピソードがあることは作品番号 01-2-012 で見ている。唐と宋の散文の名手として特に優れた8人〔唐の韓愈^{かんゆ}、柳宗元^{りゅうそうげん}、宋の欧陽脩^{そうしゆん}、蘇洵^{そじゆん}、蘇軾^{そう}、蘇轍^{そう}、曾鞏^{そうあんせき}、王安石^{とう}〕を唐宋八大家^{そうはちたいか}というが、宋代の6人のうち王安石以外は欧陽脩とその近い人々である。

(2) 唐代の李賀は優れた才能と独特の感性がありながら、不遇のまま27歳で若死したので、天帝に召されたといわれた。曾鞏と蘇軾の2人の才人も、改革に批判的であったために政治的に不遇で、同時に天帝に召されたという噂が生まれた。(3) 蘇軾が死んだとの噂に神宗皇帝が驚いたことは、少し後の時代に書かれた何遜^{かえん}の隨筆^{しゆん}『春渚紀聞^{しよきぶん}』に次のように記されている。「皇帝は食事をしようとして何度も嘆息し、『才難^{なん}』とつぶやき、ついには食事をやめて起った。意^{こころ}はなはだ喜ばないようであった」。

「才難」とは「蘇軾のような才能のある者は他には得難い」という意味であろうけれど、「才能がある故の苦難」と読んでみたくもなる。(4) 皇帝は噂の真偽を同じ蜀出身の蒲宗孟^{ほそうもう}〔→作品番号 06-4-007〕に尋ねた。(5) 神宗皇帝はこれより1年ほど前に蘇軾を朝廷に呼び戻そうと考えたものの、側近の者によって阻まれたということがあったようだ。公的な記録によるものではないので事実であるとの保証はない]

■ 【06-4-017】 与范蜀公

【解題】同郷の大先輩である范鎮^{はんちん}〔蜀公〕^{しよくこう}〔→作品番号 06-1-063〕も、上に見た噂を

聞いて蘇軾の身を案じた一人で、^{こう}黄州に人を遣わして真偽を確かめた。これはそれに
応えた蘇軾の手紙。

【訳文】

^{りせいはいく}李成伯長官が来られてお手紙を頂戴しました。御佳勝の由を承り、気持ちがいよいよはた慰められました。
新居がすでに完成し、池や畑はまことによろしく、友人も子供たちも皆がいて、人間界の楽しみとしてこ
れに過ぎるものはありません。およそ必要なものはまぼ揃っています。ただ、春から夏にかけて、病気が
ちで赤目も患い、門を閉ざして人に会うこともなく過ごしておりましたところ、噂を伝える者がついには私が
死んだとまで言い出して、人々を心配させてしまったとか。李成伯長官からこのことを聞いて、笑ってし
まいました。普段から私の毀誉褒貶に関するものはほとんどがこの類です。お目にかかれますのはい
つのことになりましょうか、この手紙に臨んで呆然としてしまいます。

【補足】^{はんちん}〔范鎮の手紙を持参して都での噂を伝えた^{りせいはいく}李成伯がどのような人物であるの
かはわからない。〕

■ 【06-4-018】 臨江仙

【解題】この詞には「夜、^{りんこう}臨臯に帰る」との副題がある。

【訳文】

夜飲東坡醒復醉、[夜、^{たかま}東の坡で飲み、醒めて、また酔いかまわってきます]

帰来彷彿三更。[帰ってきたのはもはや真夜中です]

家童鼻息已雷鳴。[小僧たちの鼻息はまるで雷鳴のよう]

敲門都不応、[門を叩いても応じる者がいないので]

倚杖聽江声。[杖に身を寄せて^{ちようこう}長江の音を聴いているのです]

長恨此身非我有、[長く残念に思っているのは、この身が我がものではないこと]

何時忘却營營。[いつしかあせく生きることを忘却できるのでしょうか]

夜闌風靜穀紋平。[夜はさらにふけ、風は静かで、川にはさざ波も立ちません]

小舟從此逝、[小さな舟でここより逝き]

江海寄余生。[我が余生を長江から海へと寄せましょう]

【補足】[この詞がまた別のデマを生んだという話がある。蘇軾はほろ酔い気分で、この詞を大声で歌いつつ臨臯亭りんこうていに帰り、それを見送った友人が、翌朝川辺に行ってみると、蘇軾の衣冠だけが遺されていた。友人は、蘇軾が本当に舟に乗って黄州こうを去ってしまったと早合点し、たちまち騒ぎとなった。それを聞いた知事の徐大受じょだいじゆが慌てて捜索に乗り出したところ、当の本人は臨臯亭で大きいびきをかいて眠っていた。これはたぶんそっくり作り話であるのだろう]

■【06-4-019】帖贈楊世昌

【解題】蜀出身の道人しよく、楊世昌ようせいしやう [→作品番号06-3-066など] に贈った短い文章。これによると楊世昌は5月9日に黄州こうを去ったのだった。

【訳文】

私は黄州こうに謫居たくきょとなり、綿竹めんちくの武都山ぶとさんの道士どうし、楊世昌ようせいしやう、字は子京あざなは、廬山しけいから私のところろさんにきた。その人は山水を善く画き、鼓と琴を得意とし、天体の運行や人相しほないしは画を見て占うことに詳しく、朱砂しよを用いた薬方にも通じていて、高い技芸の持ち主である。明日はここを去るので悲しくてならないのだが、僧侶は同じところに三日宿らぬとはまさしこのことなのだろう。

元豊六年五月八日、東坡居士とうぼ記す。

【補足】[楊世昌^{ようせいしょう}や參寥^{さんりょう}のような人は、黄州^{こう}滞在中に蘇軾のもとに居候をしていたわけではなく、それぞれ道觀や仏寺に身を寄せていたと考えられている。官員はもちろん自分で宿泊する場所を確保し、親類やごく限られた者だけが蘇軾のやっかいになったのであろう]

■ 【06-4-020】 与蔡景繁

【解説】蔡承禧^{さいしょう き} [字は景繁^{あざな けいはん}] に宛てた手紙。蔡承禧とは1年ほど前から手紙の行き来があり、黄州^{こう}にいる間に蔡承禧に送った手紙が14通残っている。蔡承禧と蘇軾は同じ年の科挙で合格したいわゆる「同年^{どうねん}」の間柄。蔡承禧の父の蔡元導^{さいげんどう} [字は濬^{しゅん}仲^{ちゆう}] もそのときの科挙で同時に合格し、父子で「同年」という極めて珍しい例であった。父の蔡元導は先に亡くなり、蔡承禧は当時の執行部に批判的であったために地方に出されていて、このころは淮河^{わい が}の下流部を管轄する路の役人であった。

● 修正

【訳文】

お嬢様がちょっとした病^{かか}に罹^{かか}られたと伺いしましたが、いまごろはきっとすっかりよくなっているでありません。私は咳を患い、月を超えてまだやまずにいます。憂いほどのものではないにしても、なかなか治りません。臨臯亭^{りんこうてい}の南に、ついに三部屋を建て増しすることができました。亭の前の何もなかったところを遮^{かざ}って来て、夏には具合がよろしいです。浅からぬ賜^{たま}り物であります。海に臨^{くざん}む胸山の石室はまことにいわれている通りのところで、私はかつて家の者たちを連れて遊んだことがあります。そのときには胡琴^{こきん}を弾^はく婢^{めかけ}が家^{いえ}にいて、石室^{いしむ}の中で『夔索涼州』^{かくさくりょうしゅう}の曲を弾かせたところ、凜然^{りんぜん}として兵車鉄馬^{へいしゃてつば}の音がしました。その婢^{めかけ}はずっと前に去り、貴君のお手紙からふと思ひ出しました。もしも貴君が実際にそこに遊ぶことがありましたなら、新しい詩^{うた}がでるでありません。そうなれば、私も

こう
黄州での戒めを破ってその詩に和すであります。

【補足】〔(1) 臨臯亭りんこうていの南に建て増しをしたことは次の詩で詳しく見る。蔡承禧さいしょうきはその屋根を葺く費用を支援してくれたのである。(2) 胸山くざんの石室かいは海州にある。かつて蘇軾が海州に立ち寄ったことは作品番号 05-1-004 以下で見ている。そのときには、胡琴を演奏する女性が蘇軾のもとにいたのだが、罪人となってからは、そうした人たちは去って行ったのだろう [→作品番号 06-1-054]。(3) 蔡承禧の詩に和すとの約束は後に果たされることになる]

■ 【06-4-021】南堂五首

【解題】臨臯亭りんこうていの南に三部屋を増築して南堂なんどうと名付けたことを詠んだ詩。建築の支援をしてくれた蔡承禧さいしょうきへの謝礼を兼ねてこの詩を作った。なお、范鎮はんちんに送った手紙 [→作品番号 06-4-017] にあった「新居」とはこの南堂のことであるのかもしれない。

【訳文】

其の一

ちょうこう
長江に浴う山は町の西側に並び、
そのために川の堤の半分が隠されている。
なぜかこの町の建物は西向きに建っていて、
ただ南堂なんどうだけが西南に向いている。
だから、千の帆が浅い谷間を去ってゆくのが、
寝そべったままで見られるのだ。

其の二

老年に及んでもなお眼力はあるし、
やまい病がちではあっても髪の毛はまだ真白ではない。
 だから、南堂に作った明るい窓辺で小さな字を書き、
 さらには、南堂のたんき小部屋で丹砂から薬を作っている。

其の三

かつては夜の雨には、
 面倒でも寢床を移さなければならなかった。
 雨の音が愁いの声となって我が心を傷めるのを嫌ったのだ。
 南堂に新たに葺いた瓦に響く雨音を聴くようになってからは、
 蓮の香を聞くような心持ちでいられるようになった。

【補足】[瓦の効用を特に強調しているのは蔡承禧さいしょうきへの感謝を示すためであろう]

其の四

田舎の暮らしてあるから蜂の巣を割いて食を補い、
 子供らのために小さな畑を新たに拓いて野菜を作る。
 南堂に客人を容れられる部屋ができたので、
 門の外に友人の車がきても困ることはなくなった。

【補足】[臨臯亭りんこうていが手狭で客人を迎えるにはやや難なんがあったことは陳慥ちんぞうに宛てた手紙にも記されていた [→作品番号 06-1-072]]

其の五

床を掃き、香を焚き、扉を閉して眠る。

夏莫産なつこさは水のようにひんやりとし、帳カーテンは霧のようである。

客人がきて夢から覚め、

はてここはどこかと思っていると、

西の窓の向こうで、

浪が天と触れ合っている。

■ 【06-4-022】 与蹇授之

【**解題**】蹇序辰けんじょしん [字は授之あぎな じゆし] [→作品番号 06-3-075] に宛てた手紙。

【訳文】

陳慥君ちんぞうからの手紙で、貴君の奥方が亡くなられたのを知りました。家の内外に慶びを積み、淑徳で評判の高かったお方がどうしてにわかにこのようなことになってしまったのでしょうか。貴君は御両親のもとを遠く離れて、ややもすれば憂慮の念に駆られてしまうところを、さらにやるせない思いであります。陳慥君も悲しみに耐えがたく、ただ書物を見てその痛みを解いているとのこと。私はたまたま目を患い、この短い手紙を記すのがやっとなで、まことに申し訳ありません。弟からは手紙がくるたびに、貴君の徳によって庇護されていると申しております。……

【**補足**】 [(1) 蹇序辰けんじょしんの妻が亡くなったことが記されている。その妻は陳慥ちんぞうの親族なのだろう [→作品番号 06-3-075]。また、蹇序辰の父はこのころ都で要職に就いていた。(2) 同じころに陳章ちんしょう [→作品番号 06-3-074] に宛てた手紙があって、そこには兄の陳襄ちんじょうが亡くなったことが記されている。「春、夏以来、百日ばかりも伏せてしまいまなお眼の病気に苦しんでいます」とも書いていて、やはり眼の不調が長く続いたことがわかる。(3) さらに、6月3日の日付の楊絵ようかい [→作品番号 06-3-036] 宛ての手紙にも、多病でただ伏せて暑さをしのいでいるということが記されている]

■ 【06-4-023】 滿庭芳

【解題】 上の手紙に陳慥〔方山子〕の名が挙がっていたが、陳慥は夏のあるときに長江の南に行くついでに黄州にきたようで、その折に蘇軾はこの詞を作っている。短い序文がある。

【訳文】

王長官おうちやうかんという人がいる。官職を棄てて三十三年になり、黄州こうの人々は王先生と呼んでいる。陳慥ちんぞうが王長官を送って私のところこうにきたので、この詞を賦した。

三十三年、〔三十三年〕

今誰存者、〔今もいるのは誰なのでしょう〕

算只君与長江。〔数えど、王長官おうちやうかんと長江ちやうこうだけです〕

凜然蒼檜、〔しゃきとした蒼い檜あお ひのきの〕

霜幹苦難双。〔霜に耐えた幹のような王長官に並ぶ者は誰もいません〕

聞道司州古県、〔聞るところでは、王長官のお住まいは古い所縁のあるところ〕

雲溪上、〔溪の上に雲がゆかかって〕

竹戸松窓。〔竹を戸に松を窓としています〕

江南岸、〔長江のこの岸辺に〕

不因送子、〔送られてくるのでなければ〕

寧肯過君邦。〔私のところよきを過ることなどありません〕

樅樅。〔樅樅と〕

疏雨過、[まばらな雨が過ぎると]

風林舞破、[林が風に舞い]

煙蓋雲幢。[霧の蓋が雲の旗となって流れます]

願持此邀君、[願いが叶って王長官を迎えて]

一飲空缸。[ひとたび飲むや、酒の缸かめはもう空っぽです]

居士先生老矣、[東坡居士とうぼこじは老いました]

真夢裏、[まことにこれは夢のなかかなのでしょう]

相對殘缸。[残った缸に向き合います]

歌舞斷、[歌と舞いが終って]

行人未起、[行く人がまだ起たないうちに]

船鼓已逢逢。[船では太鼓とんとんが逢逢と鳴らされます]

【補足】 [最後は、出発を促す太鼓の音が無情にも鳴っているということ]

■ 【06-4-024】 元修菜、并叙

【解題】 巢谷そうこく [字は元修あざな げんしゅう] [→作品番号 06-4-008] に贈った詩。序文があり、その中に引かれている故事については説明も織り交ぜて訳す。

【訳文】

叙

野菜で旨いものといったら、我が故郷そうさいの巢菜そうさいがある。友人の巢元修そうげんしゅう [巢谷そうこく] はこれが好きで、私も好きである。

昔むかしのこと、孔坦こうたん がとある楊ようさんの家を訪ねた。楊さんは留守で、九歳の息子が応対した。息子が楊梅やまももの実を出してもてなしたところ、孔坦は楊梅にひっかけて、「これは君の家の果物だよ」とい

た。すると息子は即座に、「孔雀がおじさんの家の鳥だとは聞いておりませんけれどね」と答えた。

巢元修は、「孔雀が孔坦の家の鳥なら、巢菜こそは我が家の野菜ですな」といった。それで私は巢菜を「元修菜」と呼ぶことにした。

私は故郷を離れて十五年になり、「元修菜」を食べたいと思っても得られずにいた。たまたま巢元修が黄州にきたので、この詩を作り、巢元修が故郷に帰ったならばこの詩をその息子に見せて、「元修菜」を東の坡に植えられるようとりはからってほしいと頼むものである。

旨いものといったら、貴君の家の野菜だ。

旺盛な成長力は、緑を畑一面に敷き詰めたようになる。

豆の莢は円くて小さく、そこからふっくらとした小さな芽が出る。

これを植えるのは秋の雨の後で、

霜がさかんに降るころにくんぐん伸びる。

花が咲こうとしても夢がなくて、青虫がたぐさんついているような感じになったときに、

青い裾をはいた女性たちが畑に出て、せせと葉を摘み取る。

蒸すなり茹でるなりすると、その色と香が盆いっぱいになり満ちる。

酒を垂らして鹽鼓とあえてもよし、橙を細かく切っても、薑や蔥を加えてもよい。

これさえあれば鶏やら豚やらの肉はいらない。

問題はあつという間になくなって、

箸が行き場なく中空でさまようことになることだ。

春が終わる頃には葉が枯れ出し、

煙る雨の中で畑を耕せば、

自然の潤いによって化して泥の中へと溶け込む。

植えてから終わりまで、人の労力に応えないことはなく、

人の力と土の力によって成長する。

私は老いて故郷の家を忘れ、

子供等の言葉は蜀音しよくおんではなく楚音そ おんに変わってしまった。

それでもこの野菜のすばらしさは、いつも私の胸の中にある。

貴君は帰ったならば、その子に頼んでくれたまえ、

袋にたっぷり入れて送ってほしいのだ、

決して箱に詰めて封をしてはいけぬ。

かん
漢の時代に、

ちょうけん
張騫は馬に食わせる首蓆うまごやしを西域から移植し、

それは白菜のように人が食べることもできた、

また馬援は薏苡ぼえん よくいを載せて西域から還り、

それは大いに連なって繁るようになった。

ならば、この野菜を蜀からここに移すなら、

東の坡の下の痩せた土地も稔り多いところとなって、

黄州の人々はこの菜を指さして、

私と貴君の両翁の功績であると長く語り継ぐであろう。

■ 【06-4-025】 聖散子叙

【解題】そうこく巢谷は「せいさん し聖散子」という秘伝の薬方を知っていて、こう黄州界限で疫病がはやった際に蘇軾がその薬を試しに用いてみると著しい薬効があった。これは「聖散子」を世に広めようとして書いた宣伝文。医術に関わるこの文章は、中国の古い医術に関して全くの無知である訳者には解し難いところが多々あり、大きな誤りをしない程度に大略を汲み取って訳す。

【訳文】

昔、『千金方』[唐代の孫思邈が編んだ医学書]にある「三建散」の条を読んだところ、「胃病も熱病もいかなる病も治さないことはない」とあった。孫思邈が特にこのように記しているのは、この薬の効果が尋常ではなく、危急を救うのに非常に験があると考えたからだろう。優れたものの効き目は普通の理屈にはよらないところがあって、人智では計り知れないものがある。いま私が蓄えるところの「聖散子」はほとんどこのであろうか。

古来、病を論じるときは傷寒[熱病、疫病]を最も危急とし、その症状の微妙な差異によってある治療法で救えるものと救えないものがあるとした。しかし、「聖散子」は一切を問わない。男女によらず、症状が危急に至った者でも、続けて数回服用すれば、汗が出て気が通じ、飲食がやや進むようになり、気分がはっきりと回復する。他の薬を併用する必要はない。軽い症状の者は少し汗をかいて恙なく治る。薬の性質としては少し体を熱く、飲むとすぐに病毒による不快な感じがすっきりとする。ほとんど理解できないほどの効き目がある。

もしも疫病がはやったならば、大釜でこの薬を煮て、老人も子供も誰でも大きな蓋で一杯飲むなら、疫病が身体に入り込むのを防ぐことができる。普段の病気ではないときにも、空腹時に一服すれば、飲食が倍に進み、百病ともに生じない。まことの世を救う道具であり、家の宝である。

「聖散子」の薬方がどこから出たのかは知らないが、私は眉山の人である巢谷君から教わった。巢谷君は多くを学び薬方も好み、「聖散子」の薬方は惜しんでその子にも伝えずいた。私は強く求めてこの薬方を得た。私が黄州謫居になったときに疫病がはやり、この薬を人々に与えたところ、それによって数えきれないくらいたくさんの方が救われた。

巢谷君が最初に私にこの薬方を授けてくれたときに、ほかの人には伝えないと長江の水にかけず誓った。しかし、私はこっそりこれを洩らし、蕲水の人である龐安時君に伝えた。龐安時君は今の世に善い医者として名が聞こえ、善い医書も書いているので、後世にもこの薬方が伝わるようにと思ってこれを

授けたのだ。そうなれば巢谷君の名もこの薬方と同じ不朽のものとなるであろう。

【補足】〔(1) 蘇軾が蘄水^{きすい}県の医者、龐安時^{ほうあんじ}〔字は安常^{あざな あんじょう}〕の治療を受けたことは作品番号 06-3-029 で見ている。(2) 聖散子^{せいさんし}は実際によく効き、しかも蘇軾が大いに宣伝に努めたことから、広く使われるようになった。ここではいかなる疫病にも効くと書いてあるが、もちろんそのような万能薬があるはずもなく、ずっと後に都で疫病がはやったときに、やたらと聖散子を用いたためにかえって救えなかった者が大勢いたという残念なことも起こった〕

■ 【06-4-026】杜処士伝

【解題】薬の宣伝文を見たついでに、薬の名前をふんだんに盛り込んだ全編駄洒落のかたまり、終始言葉遊びという戯れの文を見ておこう。執筆年代は確定されていないが、黃州^{こう}時代のものであろうと推測されている。杜^とというある庶民の伝記であるかのように見せかけ、さも意味ありげな議論を展開しているが、全て出鱈目である。冒頭の「杜仲^{とちゆう}は郁裏^{いくり}の人である」というところからして、「杜仲^{とちゆう}」と「郁李仁^{いくりじん}」という薬の名の語呂合わせである。こうしたいわゆる親父ギャグを無理に訳したところで意味がないので、原文を前半の5分の1ほどを掲げ、薬の名前〔もしくはそれと同音〕の部分^をを赤色で示す。

【原文】

杜仲、郁裏人〔=郁李仁〕也。

天資厚樸、而有遠志、聞黄環名、從之遊。

因陳〔=茵陳〕曰「願輔子〔=附子〕与半夏、幸仁〔=杏仁〕憫焉、使得旋復自古揚權〔=羊角〕」

環曰「子言匪実〔=樞実〕、宜蚤休、少從容〔=松蓉〕、將訶子矣」

仲曰「人之相仁、雖不百合、亦自然同[=自然銅]、況吐新意以[=蕙苾]前乎。吾聞夫子[=附子]雌黃冠衆、故求決明於子、今子微[=紫葳]銜吾、為其非儕乎」

……[以下略]……

【補足】[語彙が豊富で言葉を自在に操ることができる蘇軾ならではの遊びである。先に見た回文の詞といい、蘇軾は逆境にあっても心に余裕があった [ありすぎた?]。この他にも、現在の政治状況を皮肉るような架空の伝記も作っている]

■ 【06-4-027】 寄周安孺茶

【解題】しゅうあんじゆ周安孺が贈ってくれた茶に寄せた詩。周安孺がどういう人であるのかはわかっていないようだ。蘇軾の詩ではこれが最長の作とされる。蘇軾が茶を詠んだ詩はすでに幾篇か見えて、いずれも広範な知識を凝縮して難解な上に、訳者が茶に関して無知であることから、残念ながらはなはだ不正確な訳であった。この詩はそれらよりはまだしも理解しやすく、不正確さは何害か減じられているであろう。

【訳文】

天の屋根の下は広大で、植物にはどれほどのそく族があるのやら。

茶は靈品として、平凡な草木を遥かに超えた存在とされる。

茶の名は、古しゅうこうくは周公が書いたものなかに初めて見え、

『桐君とうくんやくろく葉録』に記載されて次第に広まった。

最初に茶をふ賦に詠じたのが誰かという、

今に伝わるものでは杜毓といくのものがある。

唐とうの人は初めはまだ茶を好んではいなかったが、

陸羽りくうが茶を論じた書物[『茶ちやきやう経』]を著すと、

じょうはくゆう り きけい

常伯熊、李季卿といった人たちが、

陸羽の高い品行を慕って清らかな流れを作り、

天下しの士が茶を嗜むようになり、

さらには一般の風俗となり、

中国国内で珍重されるだけでなく、

広く外国にも売られるようになった。

ろくもんざん ひ じつきゅう
ここに鹿門山の佳士である皮日休は、

目に触れないものはないくらいに知識が豊富で、

りく きもち
陸亀蒙に出会うと、茶について幾篇も唱和し合った。

いざん
皮日休は頤山の下に庭を作り、

しやうこう
陸亀蒙は松江のほとりに隠棲し、

それぞれ興が湧けば筆を揮って燦然と輝く筆跡を遺した。

私はといえば、

もとより愛好するものは少なく、

茶を嗜好することも篤いわけではなかった。

若い頃から都でうろうろするようになり、

王侯の門に出入りできるような者ではなかったものの、

ときには立派な家を構えた人に呼ばれ、

立派な衣服を着けた人々とまじわることもあった。

贅沢な料理は口に合わなくて、

しやうりゅう
ただ「小竜」[茶の品名]をしばしば試みると、

糞土の中に珠玉を見るような思いかし、

だんらん き か
「团鳳」や「葵花」[どちらも茶の品名]などは魚の目に雑じる真珠のようであった。

貴人はそれぞれに好んで誇るものがあり、

愛玩する茶を箱かんに入れて緘かんをしていた。

「日注」[茶の産地]などはさほどではなく、

「双井」[茶の産地]なども名ばかりが高いと知った。

ここに研究、検討を重ね、至味とされるものの五つ六つを知るようになった。

その後は地方に出て、幽独の僧を尋ねると、

高人こうじんはもとより暇が多く、茶の探究もすこぶる深いものがあった。

聞くところでは、

早春の日の出のころに茶籠を携えて茶葉を摘みに行くと、

また雷が驚かせて葉を開かせる前であることから、

摘めるのは両手に満たないほどであるのだが、

戻って清らかな水で洗って蒸しあげる、

すると香は葉に留まったままとなる。

それをすくいに布で包んで水気を取って軽く、

火で慎重に焙って縮める。

骨折ることを憚らなければ、

蓄えて時を経ても廃れることがないのだが、

汚れのない漆の茶筒、二重の竹籠を用いる必要がある。

最も畏れるのは梅雨の湿気で、

人が煖火おきびで暖めなければならなくなる。

茶の性は剛耿こうこうで、

高潔な人が穢けがれた俗世に置かれてはならないように、

ささいな塵芥に触れさせてもいけない。

晴れ上がった空のもと、からりとした屋敷の内で、

石臼で軽やかな緑の葉を磨り潰し、

日長いちにち、閑な客人とともに、

にゅうせん
乳泉[新鮮な水]で新たなる香りを生じさせると、

その香りのこまやかさは蘭の花のお株を奪い、

その色の若ましきは秋の菊よりもまさる。

びん
閩の地では茶の品種を誇って競い合い、

その表面は粥のようになめらかで豊潤で、

中でも「ようかぱく葉家白」[茶の品名]は「中山の酒」[酒の品名]よりも濃密であると喧伝している。

ともあれ、一杯の茶を深く飲んで、午後の窓辺で春の眠りに入ると、

りゅうわき
清らかな風が両腋に吹いてきて、

おおとり
鴻鵠を凌いで大空を飛んでいるような気分になる。

我が茶の楽しみはますます深まり、

水が肝要であることから『水経』[すいけい地理書の古典]もしばしば読み、

陸羽は中冷泉(の水)が一番で、次が康王谷(の水)であるという。

私はかつてははばい薑培の水を嘗めようと、

かめ
瓶を持たせて僮僕を走らせたこともあったけれど、

このごろは老いて、しかもものぐさになったので、

細々したことまでは望まないようになった。

美も悪も両方ともに忘れてしまったし、

無理に追求しようとしてもそれはできない。

だんだんと我がしよく蜀の地の習慣に戻り、

生姜と塩をまぜて白く攪拌して飲むようになった。

茶を飲むのは心を物の束縛から放とうとするため
 口や腹の欲を満たすためのものではない。
 食べるのも味わいの薄いものでよく、
 日々の食は荒搗あらづきの米だ。
 外物を慕うことはすてになくなり、
 もはやそれに束縛されることはない。
 少し前のこと、ゆったり散歩していて、
 たまたま天峰山てんぼうざん [東の坡たかまりのあたりのどこかであろう]の麓にさしかかると、
 山の畑にちょうど春の風が吹いて、茶の芽が一斉に萌え出していた。
 ここは田舎の地で誰も私に気を遣う者はないので、
 その息子を呼んで客人としてもらい、
 葉を採取して一服させてもらった。
 その茶葉は包んで厨房の戸棚にぽんとしまっておき、
 もとより茶の優劣をとやかきいふことはなく、
 たたねむ睡りからの目覚めが速いのを喜ぶだけである。
 ここのところは、長い夏の日中は人間世界に炎毒が満ち、
 閑な私にはすべきこともなく、
 午飯には野菜をたっぶり食べ、北の窓辺でござりと横になると、
 微かな風が竹を動かす。
 茶釜にたっぶりと湯を沸かし、
 人の世はまことにあくせくしているが、
 茶を飲むと、意こころは爽やかにひょうぜんなり、飄然として仙人になったよう、
 頭は軽く、髪を洗ったような快さだ。

昔の人にもいろいろな癖があったけれど、
私のこのような癖はまあまあゆるされるものであろう。
かの劉伶りゅうれいなどは酒好きのあまり、
麴こを枕に酒糟さうを布団ふとんにして眠るといったけれど、
それよりはきっとましなのだ。

■ 【06-4-028】 送僧応純偈

【解題】 応純おうじゆんという僧そうが廬山ろざんに行くのを見送ったときの作品。

【訳文】

蘇寿明そじゆめい、巢谷そうこく、僧応純そうおうじゆん、それに東坡居士とうぼこじは皆が眉州びの人である。たまたま黄崗こうこう〔黄州〕に会した。
応純ろうざんが廬山いに行くので、この偈げを作って送る。

一般口眼、両般腸肚。認取郷人、聞早歸去。

【補足】 [(1) 蘇寿明そじゆめいも応純おうじゆんもどのような人あるかはわかっていない。(2) 巢谷そうこく [→ 作品番号 06-4-024] はこの後郷里に帰ったようだ。(3) 偈げの部分は意味がさっぱりわからないので、原文のまま置いておく]

■ 【06-4-029】 東坡羹

【解題】 応純おうじゆんが廬山ろざんに行くに際して蘇軾そしは料理のレシピを一つ授けた。蘇軾は書画であろうが健康法であろうがいろいろなものを深く探究し、料理にも創意工夫を重ねた。先に「二紅飯にこうはん」なるものを見たが [→ 作品番号 06-3-038]、「東坡羹とうぼこう」というものも考案した。レシピの記述法など定まっていなかったからであろう、このレシピに基づい

て東坡羹を再現しようとする人の人が頭を悩ませてきた。これぞ正解というものはないようだ。ここでは嘘が半分に満たない程度に要約して訳す。

【訳文】

東坡羹は東坡居士が野菜を煮て作る羹である。魚肉を用いずに自然の旨味を出す。その作り方は、まず白菜、蕪、大根、薺などをよく揉んで数回洗ってあくを取り去る。油を少し塗った釜の上に碗を載せる。釜で湯を沸かし、その中で野菜を煮る。上の碗には米と少量の生姜を入れて蒸す。碗は釜に蓋をするように載せる。釜の湯が触れないようにする。触れると油気が生じるし、熱が除かれにくくなる。それらを火の上に置いて蒸すのだが、普通に飯を炊くのと同じように、急ぎ過ぎではならない。野菜からの湯気が十分に米を行き渡るようにさせないと米が上手には炊けない。もし上記の野菜がなければ、瓜でも蓮でも刻んで入れる。赤豆と米を半々ずつ混ぜてもよい。

応純道人が廬山に行くので、これを山中の好き者に広めてもらうことにした。

東坡羹の頌歌：

甘苦嘗從極廻回、[甘いと苦いはぐるぐる巡り]

鹹酸未必是塩梅。[人間世界の辛酸はちょうどよい塩梅というわけにはいかない]

問師此個天真味、[天の与える真の味を師に問うなら]

根上来塵塵上来。[野菜の根は塵から出てくる]

■ 【06-4-030】 題沈君琴

【解題】 琴についての詩。序文がある。

【訳文】

武昌^{ぶしょう}県の主簿^{しゅぼ}の呉亮^{ごりょう} [字は君采^{あざな} くんさい] 君が、その友人^{ちん}の沈君^{しん}の十二琴^{じゅうにきん} [十二絃^{じゅうにせん}の琴] についての説や、高齋^{こうさい}先生^{せんせい} [趙抃^{ちやうべん}] による空同子^{くどうし} についての文と太平^{たいへい}の頌歌^{しょうか}を携えてきてくれた。私は沈君^{しん}のことを識^しらなかつたが、その書^{しよ}を読むと、その義^ぎと趣^{すい}を得て、その人^{ひと}をまじに見て、その十二琴^{じゅうにきん}の声^{こゑ}を聞くやうな気がした。

私はかつて高齋先生^{こうさいせんせい}に従^{したが}って遊^{あそ}んだことがあり、家宝^{けぼ}としてゐる琴^{きん}を見せてもらった。銘^{めい}がなく、識^しるされたものもなく、いずれの時代^{じだい}のものであるのかわからなかつた。

そこで、呉亮君^{ごりょうくん}と沈君^{しんくん}の二人^{ふたり}に願^{ねが}うのは、高齋先生^{こうさいせんせい}に頼^{たの}んでその琴^{きん}を見せてもらい、一緒に^{いっしょ}に演奏^{えんそう}して声^{こゑ}を和^なしていただきたい。

元豊^{げんほう}六年^{ねん}閏^{にち}六月^{ごく}二十四日^{にち}に記^しす。

【補足】 [呉亮^{ごりょう}は 4 年前^{ねん}前に科挙^{かきよ}に合格^{ごうかく}した若手^{わかしゅ}官僚^{くわんりやう}。沈君^{しん}についてはここに記^ししてあることしかわならない。趙抃^{ちやうべん}は作品番号^{さくひんばんごう} 05-5-082 などで見^みていて、衢州^くに隠棲^{こんせい}して高齋^{こうさい}と名付^なけた書齋^{しよさい}があることからここでは高齋先生^{こうさいせんせい}と呼^よんでいる。空同子^{くどうし}は不詳^{ふしやう}]

もしも琴^{きん}の上に琴^{きん}の声^{こゑ}があるのなら、

箱^{はこ}の中に納^なめられているときに、

琴^{きん}はどうして鳴^ならないのか。

もしも琴^{きん}の声^{こゑ}は君^{きみ}の指^{ゆび}の先^{さき}にあるというのなら、

君^{きみ}の指^{ゆび}の上^{うへ}からはどうして聴^きこえてこないのか。

【補足】 [(1) この詩^しは、沈君^{しん}の説^{せつ}が、琴^{きん}の声^{こゑ}はどこから生^なじるのかといったことを論^{ろん}じていたのに応^おじたものであるのだろう。同じような議論^{ぎろん}を作品番号^{さくひんばんごう} 06-2-033 で見^みている。(2) このころには体調^{たいじょう}も回復^{かいふく}したのでだろう、7 月^{げつ} 6 日^{にち}には対岸^{たいがん}に渡^わって王齊^{おうせい}愈^ゆ、王齊^{おうせい}万^{まん}の兄弟^{けいだい} [→作品番号^{さくひんばんごう} 06-1-030] を訪^{たず}ね、自家^{自家}製の酒^{しよ}を振^{ふる}る舞^まわれて大^{だい}酔^{すい}し、昔^{むかし}の人^{ひと}の詩句^{しきよ}を集^あめて竹^{たけ}を歌^{うた}った詞^しを作^{つく}っている [訳^{わけ}は割愛^{わりあい}]]

■ 【06-4-031】 跋吳道子地獄变相

【解題】唐代の画の名人である吳道子〔吳道玄〕が描いた地獄の画に書き添えた跋文。吳道子の画は作品番号 02-1-018 の其の三以降、何度も詩文で触れられている。

【訳文】

吳道子は画聖である。新意を法度の内より出し、妙理を豪放の外に寄せた〔奔放自在に新味を生み出しているように見えて実は理に合っているという意味〕。いわゆる、刃の余りの地に遊んで、斤を運らせて風を成すということである〔達人は刃や斤のような道具をあたかも何気なく弄んでいるように使いこなすという意味〕。

『地獄变相』を観ると、業を造った原因はそこには見られず、罪を受けているありさまだけが見られ、悲しい限りだ。これによって清浄な一念を起こすなら、因果の理から脱け出ることができのだろうか。それとも、路傍の草が野火に焼き尽くされるのを恐れるだけなのだろうか。春風が吹いて草はまた生じてくるのか。

元豊六年七月十日、黄州の臨臯亭で画を借りて観る。

【補足】〔(1) 刃や斤を使いこなす達人は『莊子』の寓話に登場する。刃の達人はたちまち牛を解体し、斤の達人は鼻の先に止まった蠅を真っ二つにする。(2) 「路傍の草」とは地獄で罰せられるわれわれのこと。酷い仕打ちを受けているありさまが描かれている図柄を見て、絵師としての技量は別として、蘇軾はあまり感心していないようだ〕

■ 【06-4-032】 跋先君与孫叔静帖、并書

【解題】蘇軾の父の蘇洵が孫翬〔字は叔静〕に与えた手紙に書き添えた跋文。蘇軾

兄弟が制科の特別試験を受験した時期に、蘇洵は都で『太常因革礼』という宋代の礼法の変革を記した書物の編集に当たっていた [→作品番号 02-1-002]。そのときに孫藝は蘇洵のもとで仕事をした。孫藝は蘇軾よりも4歳若いので、そのころはまだ22歳前後であった。題に「並びに書」とあるのは、跋文とともに孫藝への手紙もあるからで、手紙はもっぱら孫藝の文章を褒めたもので、ここでは割愛する。

【訳文】

嘉祐、治平年間に我が父は『太常因革礼』の編集に携わった。父は都の多数の学者に問い合わせ、それに応じてくれた中で、孫藝兄弟が篤学で文章が優れ、父は非常に褒めていた。

父は没してすでに十八年、私は黄州に謫居となり、孫藝が都から蕪州にこられ、わざわざ道を枉げて寄ってくださった。孫藝は我が父の手紙を出して示していただき、私はこれを頂戴したいと願った。孫藝は承知されなかったのでついに返した。

父は平生から手紙の往還は稀で、弟子に教えるのも口で授けることが多かった。ただこの真筆があるのは、まことに孫藝のことを厚く善しとしていたからである。

元豊六年七月十五日。記す。

【補足】[孫藝の新しい任地は洛陽に近い偃師だったようで、何かの事情があって全く方向の異なる蕪州 [→作品番号 06-3-029] にきて、足を延ばして黄州にも立ち寄ったのだろう。孫藝はこの後、南京応天府を経由して偃師に向かったことが作品番号 06-4-042 からわかる。不思議な大回遊ルートである]

■ 【06-4-033】 書劉庭式事

【解題】蘇軾が密州にいたときに副知事であった劉庭式 [字は得之] [→作品番号 05-1-062] について記した文章。

【訳文】

かつて私が密州みつしゅうにいたとき、劉庭式りゅうていしきが副知事ふくちじだった。劉庭式りゅうていしきは齊せいの人で、弟の蘇轍そてつが齊州せいしゅうの掌書記しょうしきとなったときに、その土地の人が劉庭式りゅうていしきについて語っていることを聞き、私に教えてくれた。以下はその話。

——劉庭式りゅうていしきは礼学に通じた学究の徒で、また科挙に合格する前に、郷里のある娘を娶る話が進み、約束はしたものの結納は交わしていなかった。劉庭式りゅうていしきは科挙に合格し、その一方で、娘は病気になって両目の視力を失ってしまった。娘の家は農家で、ひどい困窮に陥り、婚約についてあえてまた言うことはなかった。ある人が、劉庭式りゅうていしきに妹の方を娶るよう勧めると、劉庭式りゅうていしきは笑っていった。

「私は結婚するとすてに心は決めたのだ。失明したからといって、我が初心に背くことはできない」
劉庭式りゅうていしきはその娘と結婚し、生涯を共にすることになった——。

劉庭式りゅうていしきの妻は密州で亡くなり、劉庭式りゅうていしきは妻を喪ってからというもの是一年を超えても哀しみが衰えず、再び娶ることもなかった。

私はたまたま劉庭式りゅうていしきに尋ねた。

「哀しみは愛から生まれ、愛とは色しき[主に外面に引かれる情]から生まれるものであるのでしょうか。あなたは眼の見えない女性を娶り、一生を共にしようしました。それは信義として立派ですが、愛は何から生まれ、哀しみは何から出るのでしょうか」

劉庭式りゅうていしきはいった。

「私が知るの、我が妻を喪ったということだけです。眼が見えても我が妻であり、眼が見えなくても我が妻です。色によって愛が生まれ、その愛によって哀しみが生まれるのであれば、色が衰えると愛は弛み、哀しみも忘れられましょう。町で袖を振って誘い、目配せをして心を引き寄せようとする女性を、妻にする

ようなことでよろしいのでしょうか」

私はその言葉に感じていった。

「あなたは、きっと名を挙げるか富貴になる人です」

ある人がそれは言い過ぎではないかといったので、私は、

「そんなことはありません。昔、晋国の羊祜は夏侯霸の娘を娶りました。後に、夏侯霸が晋国に背いて蜀国に降ると、夏侯霸の親類縁者は皆夏侯霸との縁を切りました。しかし、羊祜だけはその妻をそのまま家に置き、ますます礼をもって接しました。このことから君子は羊祜が気高い人物であると知ったのでした。その後、羊祜は晋国の元勳となりました。いまの劉庭式はほとんどこれに近いものです。高位に昇らないとしても、必ず道を得るに違いありません」

という、人々は憮然として、私の言葉を信じなかった。

昨日ある人が廬山からきて、このようにいった。

「劉庭式はいま廬山にいて、太平観の監査をしています。顔色は輝くばかりで、紫の光が射し、急な坂の上り下りも自在に歩き、六十里の道を飛ぶように往復しています。穀物を絶ってすでに数年になります。このようなことができるのは、道を得たからなのでありましょうか」

これを聞いて私は非常に喜んだ。私かいったことは妄言ではなかったのだ。

このことを手紙に書いて密州の趙杲卿に寄せることにした。趙杲卿は密州で劉庭式と親しく、かつて私かいったことを聞いていた者の一人である。科挙の一次試験に合格した郷貢進士で、振る舞いがきちんとした人物である。

元豊六年七月十五日、東坡居士記す。

【補足】〔(1) 劉庭式のことは同じ時代の沈括 [→作品番号 06-2-043] の随筆『夢溪筆談』にも記録されている。それによると、婚約者は隣家の娘で、劉庭式が科挙に合格して郷里に帰るまでの間に、娘は父が亡くなり自分も盲目になるという不幸に襲われた。家は貧窮に陥り、娘は固く辞退したのだが、劉庭式は約束通り結婚し、常に妻

と手を携えて歩き、数人の子を育て、妻が亡くなると劉庭式は悲しみの余り呆然とし、字を書いても誰も判読できなかった。そして劉庭式の善行が世に知れたのは蘇軾の文章による、とある。(2) 羊祐^{ようこ}についてはこれまでに作品番号 05-1-076 など別のエピソードを見ている。(3) 趙杲卿^{ちようこうけい}の名は作品番号 05-2-029 などで見ている]

■ 【06-4-034】次韻子由種杉竹

【解題】弟の蘇轍^{とうけん き}は、前に『東軒記』[→作品番号 06-1-112] で見たように、休憩の場として作った建物の脇に杉と竹を植えていた。それを詠んだ詩に次韻した。

【訳文】

諸役人が帰ると、
 役所はがらんとして、檐^{のき}で雀が騒ぐだけとなる。
 門を閉じ、独り宿直する長い夜に、
 君はこの詩を詠んだという。
 梨^{なつめ}と棗を同時に植えるとよいというのは聞いた気がする。
 杉と竹はどうか。
 杉と竹は、同じ日数を刻んでもともに成長するであろう。
 杉も竹も、その高潔な精神は酒に酔うこともなく、
 壮健であることでは、雪や霜に損なわれることもない。
 杉と竹は、互いに潤し合うのだ。
 杉と竹が清らかな大きな蔭を作るようになるのを、
 君はゆるゆると待つ気ているようだけれど、
 人々は君が田舎でいつまでもくずくずしているのを、

空しく嘆いているのだ。

■ 【06-4-035】 孔毅甫妻挽詞

【解題】 ここまでにたびたび詩の贈答があった孔平仲 こうへいちゆう [字は毅甫あるいは毅父] あざな き ぽ [→ き ふ 作品番号 06-4-005] の妻が亡くなり、その挽詞を作った。

【訳文】

貴君の細君は、

結納を交わしたときの最初の喜びを永く記憶し、

かいろうどうけつ 偕老同穴の契りを永く結ぼうと心に期していた。

夫として選んだのは晋の温嶠のような素敵なお人であり、

子を産んでは晋の王済よりも勝った。

貴君と細君は親友同士のような気高い風儀を見せ、

さらに、古来の義を守って兄弟のようであった。

貴君が「吏隠」の精神を貫けば細君も従い、

困窮も栄達ももとより気に掛けなかった。

しかし、どうしたことであったのか、

病のためにたちまち一世を終えてしまった。

細君の部屋はひっそりとして窓は閉ざされ、

ふんたい たた粉黛の香が衣服に残っている。

たとえ百年の寿命を満たすことができて、

いつかはきつと逝かなければならない路である。

有限の身をもって、無益の涙を長く流してよいものではないだろう。

貴君の文は古今を照らすすばらしさがあり、

もろ
脆い山の岩とは比べものにならない。

千字の文字を細君に捧げるのがよく、

墓に百金を埋める必要などはない。

【補足】〔(1) 温嶠おんきょうや王濟おうさいはよい夫、よい子の代表例としてその名が挙げられている。その事績をいちいち顧みなくてもよいだろう。(2) 夫婦は親友のようにそして兄弟のようであれというのは一つの理想であった。(3) 「脆もろい山の岩」とは反語のようであるが、それ以上に孔平仲こうへいちゆうの文は不易であるというのだ。哀悼の文さえあれば、莫大な費用をかけて葬るには及ばないというのが結びである。この時代には、葬儀にひと財産を投じてしまうほどに「厚葬こうそう」の弊害が目立つようになってきていた〕

■ 【06-4-036】祭陳君式文

【解題】前こうの黄州知事であった陳軾ちんしやく〔字は式文あざな しきぶん〕〔→作品番号06-3-078〕が亡くなり、蘇軾はこの祭文を書いた。

【訳文】

ちんたい ふ
陳大夫の靈に申し上げる。

陳大夫は優れて徳があり、民のために心を尽くし、世俗に随うことなく、己の信念を貫いた。陳大夫は天の定める命めいのままに安らかに生き、親のもとで自ら耕して十年を過ごし、親が亡くなると血の涙を流し、ほとんど失明するばかりになった。喪が明けると、哀しいことに貧窮のために官に仕えることになり、そして黄州知事こうになると官吏を厳しく指導し、民には法を緩く使い、黄州わんびの薇を食べ、土地の泉の水を飲んで暮らした。

私は重い罪によって川べりの地に流され、親類や友人からは排斥され、私自身も己の所業を憎ん

だ。陳大夫だけは交わりを結ぼうとしてくれて、日々に私の門に立ち寄ってくれた。私は陳大夫が汚されてしまうのを恐れたのだが、陳大夫は冠の紐が切れてしまうまでに大いに笑って語るのであった。我が憂患を陳大夫は鎮めてくれ、私に示してくれた数篇の詩は蕭然として世間の塵から遠く離れたものであった。

陳大夫は黃州を去って郷里に帰り、淡然として求めるものはなく、潔さを抱いて残りの生涯を過ごそうとしていた。

ああ、優れた陳大夫、生があれば死があり、それは影が随うようなもの、環が回るかのよう、富貴も貧賤も浮き雲のように消える。人には子があるとはいえ、陳大夫の二人の子ほど賢い者はいないだろう。千里の彼方より一杯の酒とこの文を捧げる。

■【06-4-037】初秋寄子由

【解題】秋の初めに弟に寄せた詩。秋に感傷的になるのは蘇軾の常のようだ。

【訳文】

もろもろの川は日夜に流れ逝く。

万物も、己もまたそれに従ってただ去りゆけばかり……

それでも、昔からの心がかこにある、

それだけは何とどこをそのままに守っている。

憶えているよね——

都の懷遠かいえんえき駅のあの下宿で、

秋の始めの暑さの中で門を閉ざし、

野菜の汁をすすりながら書物に向かい、

汗を揮って君と勉強していたときのことを。

たちまち秋の風が厳しく吹いてきて、
 窓辺から落ち葉が入り込んできたよね。
 君は立ち上がって^{あわせ}袷の着物を尋ね、
 そして感に堪えない風で僕の手を執り、
 「^{しゅがんだの}朱顔恃むべからず」[^{おうようしゅう}若さは永遠ではないという歐陽脩の言葉]、
 この語は疑いようがありません。
 別離はたぶん免れないでしょう。
 功績を挙げ栄誉を得ることはきっと期し難いものです」
 といった。

このときからすでに僕は悲しみの内にあり、
 ましていまや君も僕もこのように衰老してしまった。
 失った^{みち}途はもはや追うことはできないし、
 道^{みち}を学ぶことが遅かったのは恨むばかりだ。
 すでに君と相談しているように、
 僕は田を買うことにした。
 春にはそこに家を建てることだってできるだろう。
 だから——
 いま雪堂は風雨の中で夜を迎えているけれど、
 その雨音は、
 僕には早くも「^{たいしゅう}対牀の声」をなしていると聞こえてくるのだよ。

【補足】 [(1) 兄弟の合言葉は「^{やうたいしゅう}夜雨対牀」[^{ベッド}牀を並べて一緒に夜の雨に耳を傾ける]
 である [→作品番号 02-1-013]。そのことを弟が言い出したのは、^{せい か}制科を受けるための
 勉強を、都の^{かいえん}懷遠駅の下宿で一緒にしているときであった。(2) 蘇軾は先に見たよう

に沙湖^{きこ}のあたりに田を買おうとしたもののそれは実現しなかったのだが [→作品番号 06-3-030]、その後も本格的に農地を買って官界からすっかり退くようなことも検討していた。それが実現して弟もともに住むようになれば、「夜雨対牀」は常に兄弟のもとにあることになる]

■ 【06-4-038】 聞子由為郡僚所掬、恐当去官

【解説】 弟は兄よりも剛直で、役所の同僚と何やらよろしくないことがあり、そのために官職を去るのではないかと兄は心配し、この詩を作った。詩の題にある「掬^く」の原義は「拾い集める」。ここでは、ちょっとした言動を拾い集めて人を罪に陥れるという意味合いで使われているようだ。

【訳文】

若いころから僕等が学問に向かったのは、
我が一身のためではなく、
もとより志すところがあったからだ。
我が思いが必ず実現するわけではなく、
己が用いられるか捨てられるかは己の関知するところではない。
天は初めは僕等を助けるかのようで、
後に広大な成果を生むとのしるしが現れ出たと僕らは見た。
せつかく天が与えてくれたのなら、それに背かないで、
我が身を棄てて機会を活かすつもりでいた。
僕は大きな過ちをしてしまうとは全く知らずに歩みきて、
たまたた狼狽する事態となってしまった。

こんな僕であるから、
 君にイエスは何も無い。
こし
 甑を落として割ってしまったならば後悔しても遅い。
 君は僕よりはわずかに免れているけれど、
 全く安心できるものではない。
 罪を畏れてよく謹み、敢えて退くのもよいだろう。
 もしも人が疑いを抱くのなら、
 君のために僕も罪を得てもよい。
 その時がきたなら、帰ればよいのさ、
たかまり すき
 東の坡で一緒に来を手にしようではないか。

【補足】 [蘇軾は東の坡で弟と並んで土を耕す姿を想像し、それはまさに「耦耕」
 [→作品番号 06-5-008] が実現するものとして、実は心躍るものであったのではな
 かなか。しかし、それは「もとより志すところ」と反するものであった]

■ 【06-4-039】次韻王鞏南遷初歸

【解題】 遠く南方に流されていた王鞏 [字は定国] [→作品番号 06-2-050 など] は罪
 を赦されて都に帰ることになった。王鞏の作った詩に次韻した。

【訳文】

其の一

貴君に問うのは、
 南方の賓州ひんに謫遷たくせんされてから、
 野の葛を幾尺ばかり食べたのかな。

賓州で逢う人は、髪が黄色で眼が碧いとか。

そこでの三年間は過し難いものがある、

座ってただ天の壁を見つめていたという。

しかし、帰ってくるに当たって、

貴君の容貌はもとのままで、言辞も的を破る勢いがある。

詩も酒も決して止めることはしないし、ときには禪寂に入ることもする。

私が期待するのは、

天より二羽の鳥を履として賜り、

大臣となって朝廷に出入りすることだ。

【補足】[むかし王喬という仙人が、鳥を履として空を飛んで皇帝にもとにきたことは作品番号 01-2-037 で見ている。王翬と王喬で音が似ていることからこの故事を用いたのだろう]

其の二

昔のある人は、元の家に戻ってきてみると、

竹の太さが一尺ほども増し、何事も以前と変わってしまっていて、

川の流れの碧さだけが元のままだと嘆いたとか。

私が貴君と痛飲して貴君の家の壁に書いた字はそのままあるだろう、

貴君を迎える父君の友人には大臣も名将も混ざっているだろう。

何より三本の槐は老いてますます盛んに茂っているし、

貴君が家に着く春には楊の絮が静かに庭を満たしていることだろう。

一生のなかりほどで微小なところに沈んだとて、

その先はまるで違ったことになるのだ。

何よりも貴君は堂々の先祖が守ってくれているではないか。

【補足】[王翬が名門の出身で、庭に家の繁栄を祈った三本の槐えんじゅが植えられていることは作品番号05-5-004の『三槐堂の銘』で見ている]

■【06-4-040】与李公択

【解題】親友の李常りじょう あざな こうたく [字は公択] [→作品番号06-3-048] に宛てた手紙。

【訳文】

春から夏にかけて傷やら腫れ物やら赤目やらに苦しみ、門を閉ざし、何もする事なく過こしております。噂を流す者は、病気がひどくてついに死んでしまったと言いつらしましたが、そこまでひどいことにはならず、いまは恙つつがなく過こしております。すてにすこぶる健やかとなり、それでもなお来客は断っておりますので、またおかしな噂が流れて貴君に御心配をかけてしまうこともあろうかと思ひ、とくに記しておきます。鄭国公ていこくこう ふつ [富弼]はすでに八十歳を超えられていたといえ、かくも長老の方々が少なくなっていますと、この国も寂さびくなったものたと思われてなりません。

一方で、貴君そんがくや孫覚君がまた朝廷に用いられたのは喜ばしく、これから次第にこうしたことが広がっていくのでありましょうか。ただ、何からこのようなことが始まったのかまだ聞いていませんし、朝廷内の様子もわかりませんので、果たして手放して喜んでよいのでありましょうか。……

【補足】[(1) 最初に蘇軾が死んだという噂について触れている。(2) 富弼が亡くなったことがここに記されている。富弼はこの年の閏6月21日に他界し、80歳だった。これで蘇軾が8歳のときに憧れた4人のスーパースター、范仲淹、富弼、韓琦、歐陽脩しゅうは皆この世を去り、謫居たくきょの身として寂しい思いを強くしたのであろう。後に蘇軾は富弼の詳しい伝記を執筆する。(3) 蘇軾に連座して罰を受けた李常りじょうも孫覚そんがくも朝廷で用いられることになり、王翬も都への帰還が赦され、政治情勢が変わってきたかのようで

あるが、蘇軾はなお警戒している。]

■【06-4-041】与范子豊

【解題】^{はんひやく か あざな しほう}范百嘉 [字は子豊] に宛てた手紙。范百嘉の名は作品番号 06-1-063 で見ていて、大先輩の^{はんちん}范鎮 [→作品番号 06-4-017] の三男で、親子で蘇軾の身の上を心配してくれていた。

【訳文】

^{こう}黄州の町から少しばかり西の山の麓に、^{ちようこう}長江に突き出すようにして^{あか}丹い岩が積み上がっています。言い伝えによると、^{そうそう}曹操が敗れたところ、いわゆる^{せきへき}赤壁であるとされています。ただし、そうではないともいわれています。曹操が敗れたときに逃げ帰った^{かよう}華容の路は泥でぬかるんでいるところがたくさんあって、老人や弱ったものを先に行かせ、曹操はそれを^ふ踏み潰して進み、^{りゆうび}「劉備の智恵は人より優れてはいりけれど、事を見るのが遅い。華容の道は両側が^{よし}葎でおおわれている。もしもここに火を放ったならば、我らは生き延びられなかったであろう」といいました。いまの赤壁から少し西の^{かようちん}対岸は華容鎮で、あるいはこのことなのでしょう。しかし、^{がく}岳州にも華容県があって、そちらであるのかもしれませんが。

今日は^{り い しゅうさい}李委秀才とお別れするので、小さい^{さげなわ}船に酒を載せて赤壁の下で飲みました。李君は笛を吹くのが上手で、酒^{さけ}酣に何度か吹いてくれました。笛の音につれて風が起り、水が湧き、大魚が現れ出ました。山の上には^{はぶひ}鶻の巢があり、鶻も驚いて飛び立ちました。そぞろに^{しゅうい おも}劉備や周瑜を念い、昨日のことであったかのように感じたのでした。

たまたま^{ほん}范君兄弟が私に字を求めてこられましたので、このことを書いて送ります。

^{あざな こうたつ}李君は字は公達といっています。

^{げんほう}元豊六年八月五日。

【補足】[(1) 赤壁については、作品番号 06-1-082 でも見ているように、蘇軾はそこが

有名な古戦場ではあるまいと、かなりの度合いで疑っていたようである。(2) 笛が巧みな李委については作品番号 06-3-072 で見ている。(3) 范百嘉にはこの手紙に添えて、『後の赤壁の賦』[→作品番号 06-3-065] も書いて送ったようである]

■ 【06-4-042】 与張安道

【解題】蘇軾父子の大恩人である張方平〔字は安道〕[→作品番号 06-2-052] に宛てた手紙。

【訳文】

……今年の春から夏にかけて少々病んだために、門を閉ざして来客を断っておりましたところ、実際とは異なる噂を伝える者がいて、先生にまで御心配をおかけしてしまいました。秋に入って体の方はすこぶる調子がよく、道についてまだ得るところはないものの、時ならず生じる雑念はまぼ灰のようになりました。先生におかれましては、私の実情を察せられて、何かお薬を調合してはいただけないでしょうか。

王鞏君が北に帰ることとなり、さぞお喜びであります。お祝いの盃を挙げるお伴ができないのが残念であります。……近頃、孫髻君が偃師に赴くのに合わせて、二枚の箆を託しました。もうお手元に届いていますでしょうか。

いま、息子が荆南に行って田を買う手立てを探っています。もし田が得られたならば、ついには楚郢のあたりの人となります。先生からは遠く離れたままで、いつお会いできるとも知れず、風に臨んでは嘆いてばかりおります。万一、天恩によって身を放たれましたなら、千里も遠いとはせずに先生のところに参ります。

ここにお願いしたいことがございます。門下生のよしみとして、先生のところにあります金丹の奇薬を数粒ばかりでも分けてはいただけませんか。金丹への強い思いからいまだに免れることができていない、ただ手にしてみたいだけで、その思いを遂げられましたなら、謹んで秘蔵して取立て服すようなこと

はいけません。

弟は^{いん}筠州で安らかにして、復官を果たして、少しの間でも家族が集まれるようになるのを望んでいます。近頃、公務に関連して一人の役人の怒りから始まって、あれこれと面倒なことが起こっているようです。まだ害されるまでには至っていないようですが、人間関係には何かと煩わさなければならぬものなてありましょう。

……八月二十二日。

【補足】〔(1) この手紙には蘇軾のまわりの様々なことが記されている。噂とは、作品番号06-4-016で見た、蘇軾が死んだというデマである。(2) ^{おうきょう}王鞏は^{ちようほうへい}張方平の婿で、帰還を許されたことは作品番号 06-4-039 で見ている。(3) ^{そんこう}孫翬が^{こう}黄州にきたことは作品番号 06-4-032 で見ている。(4) 長男の^{そまい}蘇邁が^{ちようこう}長江の対岸に渡って土地を入手する算段をしていることが記されている。いろいろな人の助力を得て、蘇邁は土地売買の許可を得るために上京するまでに至るのだが、結果としては実現しなかった。(5) この手紙にもあるように、硫化水銀を原材料とする^{きんたん}仙薬、金丹に蘇軾は強い関心を持ち、それは晩年まで尽きることがない。ただし、ここでも断っているように、服薬することには極めて慎重であった。(6) 弟が巻き込まれたトラブル [→作品番号 06-4-038] の詳細はわからないが、大きなトラブルにならずにすみ、^{いん}筠州にそのまま留まることができた]

■ 【06-4-043】上張安道養生訣論

【解題】上の手紙では、罪人としての悩ましきから脱する方法を、薬の調合になぞらえて^{ちようほうへい}張方平 [字は^{あざな}安道] に尋ねていた。その一方で、^き気を養う健康法について実践に努めた結果として得られた^{ようじょう}養生の秘訣を、この手紙で張方平に伝えている。道家は、^{どうか}謎の臓器の「^{たん}丹田」を重要な場所として捉えていて、以下の本文では、丹田に「^き気」

を送り込む方法が養生の要かなめであるとして説かれている。丹たん [練り上げた靈妙な薬] と同様な効果を及ぼす何かを耕す場所であるから丹田という。臍の下三寸にあるとされるが、人体をいかように解剖しても丹田に相当する器官は存在しない。実践的には、丹田の有無によらず健康増進に資する呼吸法でありマッサージ術であるのだろう。もしかすると、春から夏にかけての不調も、この養生の秘訣を得たことで克服できたのかもしれない。

【訳文】

このごろはすこぶる養生ようじょうに留意しています。書物を読むと、大勢ほうしの方士が養生について書いていて、その方法は数十から百もありませんか。その中で簡単で行いやすいものを選び、人に問い、自分で行ってその効果を試しています。特に効果があれば虚語そらごとではなかったと知れます。その効果は、初めのうちは気付かない程度でも、百日余りにわたって続けると、量り知れないくらいになります。薬も合わせて用いるとその力は百倍にもなります。これを知り合いの者に伝えようとしても、その妙処は言葉では形容し難いところがあります。その大略だけなら示すことができますか。もしこれを信じて行なうなら、きっと大きな益があります。

毎夜ね、子の刻の後【原注：三更こう三四点てんないし五更の後【いずれにしても真夜中】】に衣を被って床の上うへに起き上がり、東もしくは南に向いて座り、叩齒こうし [歯を叩き合わせる] を三十六回行い、握固あくこ 【原注：親指で第三指を抑えるか、第四指で親指を抑えるかして手を固く握って腰と腹の間で構える】、閉息そく 【原注：これは道家の要の妙処で、まず目を閉じて思慮を退け、雑念を掃き去り、心を澄ませて諸念が起らないようにし、自然と息の出入りが調うようにしてから、口と鼻を閉じる】、そして五臓ないかん を内観します。肺臓は白、肝臓は青、脾臓は黄、心臓は赤、腎臓は黒と見ます【原注：常に五臓の図を壁に掛け、心の中に五臓六腑の形状を熟知しておく】。次に心臓こ を炎える火と見て、その光明たんでん を丹田の中へと移します。腹が満ちて気が極まるのを待っておもむろに息を吐きます【原注：耐えられなくなったら吐

〈だけのこと〉。息が整ってきたら、舌で唇と歯の間を触れ、唾液を十分に出します【原注：もしも鼻汁が混じっても、それも使う。塩辛いのを嫌わなければ自然と甘くなる。これも真の気で棄ててはいけない】。唾液はまだ飲み下さずに、同じことを三回繰り返して、唾液が口と鼻に満ちたなら、頭を下げて飲み下し、^{ごぼごぼ} 気を丹田に送り込みます。十分に注意を払って、唾液と精気を下すと谷谷と音がして、ただちに丹田に入るようになります。これを繰り返して、飲み下すこと三回で止めます。そして、左右の手で両方の脚^{きやく}心^{しん}【原注：ここが湧き出す重要な場所で、^{きけつ} 氣訣の妙処】[土踏まず]と、臍の下、腰と背の間を摩ると、暖かくなってきます【原注：ゆっりとさするとわずかに汗が出る。息が切れるようではいけない】。次に両手で眼、頬、耳、項^{うなじ}を熱くなるまで擦ります。鼻の左右を五六回擦り、髪を百回余り梳^{くけず}り、そして横になって明るくなるまで眠ります。

この法は至って簡単で、いつも怠らずに行い続けると大きな効果があります。ために十日ないし二十日ほど行ってみてください。精神がこれまでとは同じでなくなり、臍の下が熱く、腰や脚が軽快になったと感じます。さらに続けるなら、仙人になるのも遠くないでしょう。

息を止めるのは少しずつ長くするのがよいでしょう。脈で時間を計り、五つ数えて一息することから始め、私はこのごろは百二十まで息を止められます。それを二十回繰り返しています。ただしあまり長く息を止めると気が錯乱し、ときには一気に噴き出して、かえって害になるので、どうぞ慎んでください。また夕食は少なめにしてください。食べても腹の中に広い空間があると、気が回転できます。昼間も閑があれば、時々目を閉ざして「内観」を行い、唾液を飲み込み、耳や目を擦って気の働きを助けます。

清浄であることが一番です。清浄であれば功が見えやすく神仙の術に至りましょう。よくないのが、一に^{ふんそう} 忿躁、二に陰険、三に貪欲です。貴公は^{かりょうせいどく} 雅量清徳でありますからこの三つはないと思いますが、そつと申し上げておきます。

こまごまとしたところは、他日またお会いしたときに申し上げよう。文章で秘訣を書くのは、枝葉の言葉やら言うに言えない言葉がたくさんあって、いまはただ要点を記すだけです。長生の根本は言葉を煩わすものではないでしょう。どうかこれは深く秘めて、凡庸の徒には見せないでください。天の至道^{しどう}を泄ら

すことになりますので。

【補足】[言葉では伝えにくいと蘇軾自身がいう秘訣を書いた文章を、「凡庸の徒」にも及ばない訳者が正しく翻訳するのは逆立ちしたところで無理な話だ。前半は林語堂『蘇東坡』に訳があるのを参考にしたが、原文の逐語訳ではない達意の訳[林語堂は英語で書いた]であるので、それに従わなかったところもある]

■【06-4-044】節飲食説

【解題】健康法に関連して、飲食を節制すると三つの得をするという「三養説」^{さんようせつ}を記した短文を読んでおこう。

【訳文】

^{とうば こじ}東坡居士は昔も今も、朝夕の飲食は一杯の酒と一椀の肉だけである。立派な客人をもてなすときにはもう一品だけを加え、それより減らすわけでもなく増やすわけでもない。私を招いてくれる人があると、あらかじめこのことを告げ、もし主人がそれに従わずに過剰にもてなすときには、いつも通りのところで止める。

これには三つの効用^{さんよう}[三養]がある。一に分に安んじて福^{ぶん}を養える。二に胃を寛^{ゆる}化^きして気を養える。三に費^きを省^しいて財^{さい}を養える。

^{げんほう}元豊六年八月二十七日。

【補足】[蘇軾は酒好きであるが、体質的に酒に弱く、二杯、三杯と重ねるとたちまち酔って眠ってしまうので、酒で身上を潰すようなことはなかった。]

■【06-4-045】好事近

【解題】^{こう}黄州知事の^{じょだいじゆ}徐大受^{あざな} [字は君猷^{くんゆう}] が知事としての任を終えて発つことになり、

その送別の詞。詞の中に「半年の離別」とあるのは、とりあえず家族を黄州に残し、半年間だけ離れる心づもりであったからだという。

【訳文】

紅粉莫悲啼、[紅粉こうふん[美しく化粧した歌妓]よ、悲しく泣くのはおやめなさい]

俯仰半年離別。[半年間の離別など、上を見て下を見る間のこと]

看取雪堂坡下、[見てせつどう たか堂下さい、雪堂の坡の下で]

老農夫淒切。[老いた農夫[蘇軾のこと]が寂しげにしているのを]

明年春水漾桃花、[来年、春の水に桃の花がたたはようころ]

柳岸隘舟楫。[柳の岸辺にたくさんの舟が着くことでしょう]

從此滿城歌吹、[町中から歌があふれ出し]

看黄州鬪咽。こう[黄州に[知事の帰還を歓迎する]音楽が満ちるのです]

【補足】じょだいじゆ[徐大受知事のもとに多数の歌妓がいたことは作品番号06-2-014で見ている]

■ 【06-4-046】遺愛亭記

【解題】じょだいじゆ 徐大受知事がこう黄州を去った後で、そうこく巢谷 [→作品番号 06-4-028 など] に頼まれてこの文章を代筆した。巢谷は蜀に帰還したはずなので、この文章が書かれた経緯や時期ははっきりとは定められないようだ。

【訳文】

漢の時代に何武かんは地方官かぶを歴任し、その地かかくにいる間は赫赫の名[特別に評判となるような名声]を挙げることはなく、その地を去った後になってから人々は何武のことを思うのが常であった。これを「遺愛」

[愛を遺す]といった。

君子は道理に従って行動を起こし、道理が窮したところで止まる。外物の必要性に応じて事を作し、外物の必要性がなくなれば元に復す。それだけのことであるので、赫赫の名が挙がるようなことはないのである。

東海郡の徐大受君は黄州知事となって、一度も怒ったことがなく、しかし民は知事の命に背くことがなかった。一度も監察したことがなく、しかし役人は知事の眼を欺くことがなかった。日々何事もなく、知事はただ詩歌を嘯詠するだけだった。毎年春になると、知事は眉山県の蘇軾とともに安国寺に遊び、竹林の間にある亭で酒を飲み、亭の下にある茶の木の葉を摘んで煮て飲んだ。

徐知事が黄州を去ると、安国寺の僧、継連はその亭の名を蘇軾に請い、「遺愛亭」と名付けた。

このとき巢谷が蜀からきていて、蘇軾の客人となり、蘇軾を通して徐知事に会っていた。徐知事から巢谷に、「遺愛亭」の由来について書かう依頼があった。しかし、巢谷は愚かで不器用な旅人で、徐知事の事をよく知っているわけではなかった。そこで人々が語る言葉を集めて蘇軾に託した。よってこの記が作られたのである。

【補足】[継連の名は『安国寺の記』] [→作品番号 06-1-024] ですすでに見ている]

■ 【06-4-047】 与楊元素

【解題】楊絵 [字は元素] [→作品番号 06-3-036] に宛てた手紙。土地の入手に関して楊絵が何かと尽力してくれていたことがわかる。

【訳文】

弟君が来ていただきましたが、岸の下には船を泊めるところがなく、風雨に苦しめられて、匆匆に去ってしまわれ、いまま残念に思われます。田を得ることについてお教えいただき、まことに感謝しております。このようなことにまで御配慮いただき、言葉にならないほどに感激しております。私は都にはこうした案件で助け

てくれる人を知りませんので、すべて貴君のお考え通りで結構です。……今日は章質夫君の息子さんがお上の御用で黄州を通過して行かれました。……

【補足】〔(1) 土地の入手を巡っては、このほかにも楊絵宛てに何通もの手紙を書いていて、どのような土地が検討されていたのか具体的な記述がある。この手紙に楊絵の弟がきたとあるのは、土地について陳慥も交えて相談するためであったようだ。〕

(2) 章質夫は徐州で親しくした人物である [→作品番号 06-1-099]

■ 【06-4-048】 答范蜀公

【解題】范鎮〔蜀公〕〔→作品番号 06-4-017〕に宛てた手紙。范鎮は蘇軾の身を案じて、許州にある屋敷の隣に住んではどうかと提案もしてくれた。それへの返事。

【訳文】

お隣に住んではどうかとお示ししたり、これは平生から最も願うところのものであります。先生のおそばに身を寄せて朝夕に道について聞かせていただけますし、また親戚の末端でもありますし、そちらの風物の美しさはそこで生涯を終えるに足りるところでもありますから、これ以上の幸いはありません。ただ我が囊中にはわずかな錢もなく、しかも息子が荆南の渚の小さな農園を買おうとしているところでもあります。残念なのは先生のお話を聞くことが遅かったことです。……

【補足】〔蘇軾は、范鎮からの提案を有難く思いながらも、経済的な問題と、別に土地を得ようとしていたことを理由に辞退している。実は、ここには書いていない別の懸念もあったことが次に記されている〕

■ 【06-4-049】 書蜀公約隣

【解題】范鎮〔范蜀公〕が隣に住んだらどうか誘ってくれたことについて記した短文。

【訳文】

范鎮はんちんは私きよを許州きよしゅうに呼んで隣に住んたらどうかといってくれた。

許州にはたくさんこうけいの公卿[朝廷に名を連ねるような人々]がいるのに対して、いまの私は、蓑を着て竹の笠を被って東の坡たかまりのあたりをふらふらしている身である。とても公卿とのお付き合いなどはできない。

長く放浪を続けていると、何か病気があっても気付かずいいて、休養をとったとたんにいろいろな病気が生じたりする。州や県を長きちんと治めないしていると、何事もいい加減になり、それはそれで事なくすんでしまうのだが、たまたましっかりした役人がくると、たくさんいぢりうえいの弊害が明らかになって、何カ月かかってもきちんとした状態に治すことができない。

断固として退かない覚悟こそが必要なのである。これはいわゆる「一勞永逸」[ひとたびの苦勞によって永い楽しみがある]である。[いまの私はそのようなことはとてもできないので許州には行けない]

【補足】きよ許州は都から南西に百キロ余りのところで、何かと条件のよい場所であった。しかし、蘇軾には逆にそれが懸念材料となっていた。都に近くて高い地位にある人が大勢いるようなところに住むには、完全に引退するとの強い決断をしてからでないと、たちまち政争に巻き込まれてしまうだろうと恐れたのである。そのあたりのことを別のひねった表現にすると、作品番号 06-1-063 で見た、税金がかからないという言い方になってくるのだろう]

■ 【06-4-050】 鷓鴣天

【解題】夏の終わらないし秋の初め、東の坡たかまり でのある一日をさらりとスケッチした詞。

【訳文】

林断山明竹隱牆、[林が途切れ山が明るく見えるここに、竹に隠れた垣根]

乱蟬衰草小池塘。[たくさんの蟬、衰えゆく草、小さな池があります]

翻空白鳥時時見、[空に翻る白い鳥が、時々姿を見せ]

照水紅葉細細香。[水を照らす紅い蓮からは、^{こま}細やかな香りがただよいます]

村舎外、[村の家並みの外]

古城傍。[古い^{まち}城のかたわら]

杖藜徐歩軒斜陽。[杖をついてゆるゆると歩くうちに日が斜めに転じます]

殷勤昨夜三更雨、[昨日の夜中の雨はまことに思いやりがあつて]

又得浮生一日涼。[浮世の一日の涼しさがこゝろで得られたのです]

■ 【06-4-051】 西江月

【解題】9月9日の重陽の節句に棲霞楼で座中の人々を喜ばせるために作った詞。棲霞楼は作品番号06-2-050などで見ている。

【訳文】

点点楼頭細雨、[点々と楼閣に注ぐ細かな雨]

重重江外平湖。[長江の外に幾重にも重なる平らな湖]

当年戲馬会東徐。[あの年の重陽の節句は徐州の戲馬台で]

今日淒涼南浦。[そして今日はこの寂しい水辺です]

莫恨黄花未吐、[黄色い菊の花がまだ開かないのは残念でも]

且教紅粉相扶。[紅い装いの女性が支えてくれましょ]

酒闌不必看茱萸。[酒宴のさなかに茱萸の実に長寿を願ったところで]

俯仰人間今古。[一度うなづく間に今はもう昔になってしまうのです]

【補足】[徐州に戯馬台という有名な遺跡があることは作品番号05-4-053で見ている]

■【06-4-052】書張芸叟詩

【解題】張舜民 [字は芸叟] の詩についての短文。張舜民は蘇軾より8年後れて科挙に合格した人で、これより15年前に蘇軾の姿を垣間見たことを隨筆『画墁録』に記録していた [→作品番号03-1-010]。張舜民は先の西夏国との戦争のときに、高遵裕が指揮する軍団に書記として従い、敵地に入って靈州城を攻めたものの大敗したありさまを実際に見ていた。

【訳文】

張舜民は邠州の人である。西方の事情に通じていて、詩が巧みである。高遵裕の西征に従って各地を巡り、その途中で二首の絶句を作った。

靈州城下千株柳、[靈州城の千株の柳]

総被官軍斫作薪。[官軍はすべて伐って薪にしてしまった]

他日玉関歸去路、[後に玉門関からここを通って都に帰る人は]

將何攀折贈行人。[送別につきものの柳の枝をどこで折り取ればよいのだろうか]

[これは靈州城で官軍が大敗したことを暗に詠んだものである]

青銅峽裏韋州路、[青銅峽や韋州の路]

十去從軍九不回。[從軍した者の十人に九人は帰らなかった]

白骨似沙似雪、[雪のように見えるのは、沙漠に残された白骨]

將軍休上望郷台。[だから、將軍よ、高台に上るのはやめにしなさい]

[これは西方各地で官軍が多数の戦没者を出したことを詠んだものである]

転運判官の李察の奏上するところによって張君は郴州監税に左遷となった。

張君はいう。

「官軍が靈武を囲んで攻めたが下すことができないままに、食糧が尽きて退くことになりました。そのとき西方の連中は城の上から大声で『官軍の漢人ともは元擦しないのか』と叫んだ。ある者が上を向いて、『元擦とはなんだ』と応じると、城の上の者が皆が大笑いしました。西方の連中は慚じることを元擦というのです」

【補足】 [(1) 張舜民は従軍して有効な策を出さなかった上に、敗戦を嘲るような詩を作ったのはけしからぬと告発されて左遷となった。任務地の郴州は黄州から長江を遡り、さらに支流に沿って南に遠く上った先の地である。(2) 張舜民の黄州訪問の詳細いことは、自身が書き残しているのをそれを読んでおこう]

【訳文】

張舜民：『画墁録』より

壬戌[元豊六年九月二十日]、朝早くに黄州に停泊した。州知事の楊案、副知事の孟震、団練副使の蘇軾とともに、蘇軾の居所で会い、晩飯を蘇軾の東の坡の雪堂で食べた。蘇軾は詩で獄に陥り、ここに謫されて数年になる。……丙寅[九月二十四日]、蘇軾を招いて、武昌の樊山で遊ぶことにした。……食事をすませから舟を移して黄州を離れ、対岸の樊溪口に泊めた。蘇軾も舟で長江を渡り、一緒に武昌県に行った。……県知事の季観等とともに樊山に遊んだ。

【補足】 [新しい黄州知事の楊案についてはまた後で見ることになる]

■ 【06-4-053】牛酒帖

【解題】蘇軾は人気者で、書いたものはほんの切れ端でも珍重された。その一例として、先にも引いた何遠かえんの随筆『春渚紀聞』[→作品番号 06-3-073]に記録された短文を見ておこう。何遠かえんは蘇軾より一世代ほど若く、蘇軾の友であった章惇しょうじゆんと直接の交流があった。とにかく蘇軾の熱烈なファンで、その事績を熱心に調べ、その記事は信頼に値するとされている。

【訳文】

何遠かえん：『春渚紀聞』より

先生たかざり[蘇軾]が東の坡たかざりにいたころは、いつも大勢の者が集まって酒を飲み、先生は戯れに筆を執って、坐客を楽しませた。そのため先生が書いたものが多数伝わっている。とりわけ畢少董ひつしょうくんが所蔵する一帖は、酔いに任せた墨跡が躍動し、語も特別に味わいがある。

今日は数人の友と酒を飲んだ。そこにちょうど純臣じゆんしん君がやってきた。秋の熱さはまだやまない。酒は白く濁っている。何という酒だか知らぬが、腹に入ったが最後、たちまち閻魔大王えんまに会わなければならないようなしろものだ。純臣君と飲むことになったものの酒の肴がない。西隣の家(ついで)にたまたま足が病氣になった耕牛かたどがいたので、これを炙って食べた。飲んで酔っ払い、東の坡たかざりの東から真っ直ぐに出て、春草亭しゆんそうていにまで至り、そこから帰った。時はすでに真夜中だった。

春草亭しゆんそうていというのは郡城ぐんじょう[町]の外にある。先生は友人と酒を飲んで、私的に耕牛を殺し、酒に酔った勢いで城壁を越え、夜の禁令を犯して帰ったのだろう。純臣とはいかなる人であるのかわからないが、普通に町中を往き来するような者ではなかったのだろう。

【補足】〔(1) 我々は一読して何とも思わないのだが、実は、お上に内緒で酒を造ることも牛を屠ることも禁止されていて、夜間に門が閉ざされた城内に入ることも禁止されていたので、蘇軾はそれらの禁をことごとく犯したのではないかと、何^か遠^んはちよっと顔をしかめてみせながら推測しているのである。それで、純^{じゆん}臣^{しん}〔誰かの字であろう〕はまともな人間ではあるまいと書いている。例によって「異^い人^{じん}」の一人なのだろう。(2) 春^{しゆん}草^{そう}亭^{てい}は後の文章〔→作品番号 06-5-010〕にも出てくるが、黄^{こう}州^{しゅう}の府^ふ城^{じょう}〔郡^{ぐん}城^{じょう}〕の外^{ぐわい}にあったようだ。東^{とう}門^{もん}〔→作品番号 06-4-012〕を守る馴^{じゆん}染^{せん}の門^{もん}衛^{ゑい}がすでに門を閉ざしてしまったので、どこかで城壁を乗り越えた^と何^な遠^んは考^{こう}えた^たの^のだ^らう。しかし、臨^{りん}臯^{こう}亭^{てい}に帰^{かへ}る^{ため}なら、少^{せう}し^遠回^りり^すれ^ば無^む理^りに城^{じょう}壁^{へき}を^乗り^越え^なく^ても^すん^だは^ずで^ある。(3) なお、このときに食^くべ^た牛^{うし}は、黄^{こう}州^{しゅう}特^{とく}産^{さん}の水^{すい}牛^{ぎゅう}〔→作品番号06-1-006〕であったのかも知^しれ^ない〕

■ 【06-4-054】孔毅甫以詩戒飲酒、問買田、且乞墨竹、次其韻

【^こ解^{かい}題^{だい}】孔^{こう}平^{へい}仲^{ちゆう}〔字^{あざな}は毅^き甫^ふあるいは毅^き父^ふ〕〔→作品番号 06-4-035 など〕から送られてきた詩に次韻した。孔平仲からの詩には、飲酒を戒め、田を買おうとしていることについて問い、竹の墨絵を請うといったことが詠み込まれていた。

【訳文】

酒^{しゅ}中^{ちゆう}の真^{まこと}とは、
 さてさて何^{なに}か好^{この}い^いのか。
 か^かの有^{ゆう}名^{めい}な孟^{もう}嘉^かは酒^{しゅ}好^{この}きの賢^{けん}人^{にん}だ^たた^けれ^ど、
 ま^まだ酒^{しゅ}の道^{みち}ま^までは聞^きいてい^いな^かっ^た。
 酔^{すい}と一^{いつ}万^{まん}の思^し慮^{りょ}が一^{いつ}掃^{そう}さ^れて空^{くう}に^なる。

しかし、醒めた後には、

によきによきと思慮しゅくが宿草しゅくそう[多年生の草]のように生え出てきてしまう。

十年かかって酒で全てを洗いつけてこそ、

真まと妄もうとが見えてくるのだ。

酒がわからない者は、石像の女、あるいは焼け焦げた種——

そのココロは、子を産まないし、芽は出ない、

つまり、何も生み出すものがない。

我が身は酒を貯かめえる瓶——

そのココロは、満ちているときは人に楽しみを与え、からつぽになったら倒れてしまう。

武昌ぶしやう兄弟あうの家かで痛飲したのは私がそうしたいと思ったのではない。

私の本性として人との衝突は避けるので、

相手に合せるかためにあれこれ悩ましいことになりもするのだ。

我が身中にある一寸四方の田けい[すなわち心]は耕して尽きないものだ。

どして千金を費やして百頃けいばかりの田を買う必要があるか。

貴君の家の松は大きく、十畝はもの広さの蔭を作っているとか。

その下に一つの庵いかりを置いて私に貸してくれるのなら、そこで心を洗えるだろう。

書物を枕にして熟睡し、いくら呼ばれても起きないのだ。

貴君は学問を好み、しかもあれこれ雑多に忙しんでいる。

それを憐れんで、

貴君の新しい詩と交換に墨で竹を描くしょうか。

【補足】[三つのテーマを盛り込み、しかも次韻するという制約から、まとまりなく
ごたごたした感じになっている。酒については慎む気はないと返事し、田を買うこと
については話をはぐらかし、竹の画については孔平仲こうへいちゆうの意向に沿うと応えたのである]

■【06-4-055】子由作二頌、頌石台長老問公、手写蓮經、字如黒蟻、且誦万遍、脇不至席二十余年。予亦作二首

【解題】蘇軾兄弟は罪を得て以来、それまで以上に深く仏教を学ぶようになり、弟の方がより強く仏教に引かれて行ったようだ。詩の題は「弟が石台長老を頌める二首の頌詩を作った。長老は法華經を手ずから写してその字は黒蟻のようで、それを誦すること一万遍、その間は寢床で眠ることなく二十余年に及んだ。私もまた二首を作る」。

【訳文】

其の一

眼の前にあるのはもそもそ動く大きな黒蟻、
口の端にぶくぶくと白い珠が浮かぶ。
吾が師には何ら礙がなくなるものはないはずで、
試しいま唱えているこの經を焼いてしまっても怒ることはないだろう。

其の二

眼も心も両方とも虚しく円いものだ。
眼と心を閉ざして床につかないこと二十年に及んだ。
「吾が師は眠らなかつたのではない」
そのように私がいって、誰が信じるだろうか。
吾が師においては、睡蛇[睡眠の煩惱]などは死んだのであるから、
常に安眠を得ているのである。

【補足】〔仏教に関連した詩、特に弟との間でかわしたものは、訳者にはほぼ理解不能で、二首とも著しい「ずっぽ訳」である。もっとも、第二首の終わりの句については、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随『蘇東坡詩集』（1927年）も「殆ど語を成して居らぬ」と評しているので、訳者ごときにわからなくて当然である。それでも弟にはちゃんとわかったのだろう〕

■ 【06-4-056】 十拍子

【解題】 暮秋に作った詞。

【訳文】

白酒新開九醞、〔この白い酒は新たに開いた九醞きゅううん〔名高い酒〕の美酒〕

黄花已過重陽。〔この黄色い花はすでに重陽ちゅうようを過ぎてしまった菊〕

身外儻来都似夢、〔自分の身の外からくるものは全てが夢に似て〕

醉裏無何即是郷。〔酔えばここがたちまち無何有郷ニュートピア〕

東坡日月長。〔東たかまりの坡ではゆったりと歳月が流れます〕

玉粉旋烹茶乳、〔玉のような茶の粉を煮ればたちまち乳のよう〕

金薤新搗橙香。〔薤いらを刻み橙っを搗いて香りを合わせます〕

強染霜髭扶翠袖。〔白い髭を無理やり染めて翠みどりの袖をまといましょか〕

莫道狂夫不解狂。〔狂った人は己の物狂いがわかりません〕

狂夫老更狂。〔物狂いは老いてますます狂うのです〕

■ 【06-4-057】 洗兒戲作

【補足】9月27日、蘇軾に四番目の男児が生まれた。母は王朝雲おうちょううんで、子の名を遼とんという。王朝雲は12歳のときに蘇軾のもとに引き取られ [→作品番号 04-3-069]、21歳になっていた。記録にある限りでは蘇軾には4人の男児があつて、女兒はいなかったようで、遼が最後の子であつた。子が生まれて3日目に「洗児せんじ」という行事をすることは作品番号 04-3-076 で見ているが、遼の洗児に際して蘇軾はこの詩を作った。

【訳文】

人は皆、子を育てて聡明であることを望む。

私は聡明であるとされて一生を誤ることになった。

我が子に望むのは、ただ愚ぐかつ魯ろであること。

その上で、災さいもなく難なんもなく、公卿こうけいに至ることだ。

【補足】〔(1) 愚ぐも魯ろも意味はほぼ共通しているが、愚は頭の鈍いことをいい、魯は合せて動作ものろくさいことをいうようなニュアンスがありそうだ。息子は馬鹿で阿呆でよいといっていながら、高位に昇ってくれと望んでいるので、「戯れの作」と題したのだろう。(2) この翻訳で大いに頼りにしている書物の一つに李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』(2011年)があるが、この詩にある「私は聡明であるとされて一生を誤ることになった [我被聡明誤一生]」の句を、蘇軾の一生を象徴とするものとして序文の題として選んでいる。その序文の主旨に合わせるには、「私は聡明の運命を荷わされて一生を誤ることとなった」と訳した方がよりよいだろう。さほど聡明でなければ、もともとの農民として、あるいはしばしば記しているような「異人いじん」の一人として一生を送ったのだろう〕

■ 【06-4-058】鄧忠臣母周氏挽詞

【**解題**】^{とうちゆうしん}鄧忠臣が^こ船に母の棺を載せて郷里に帰る途中で^{こう}黄州に立ち寄ったので、蘇軾はこの挽詞を作った。鄧忠臣は詩が巧みだったので、蘇軾も思わず力んでしまったのか、この詩は難しい故事の用い方をされていて、訳者には到底理解が及ばないので初めの部分だけをテキトーに訳す。岩垂憲徳・釈清潭・久保天随『蘇東坡詩集』（1927年）は、「^{ばん し こ}挽詩此に至りては^{いた}鈎句棘語、^{こう く きょく ご}人の死に於て己の^{ひと し}才学を示す具に^{おい おのれ}供するもの^{さいがく しめ}の如くで、^{ぐ きょう}読む者は^{こと}感動しないと思ふ」と、厳しく評している。とはいえ、蘇軾が書いたものなら何でも有難がる人が大勢いたので、鄧忠臣としても蘇軾に詩を作ってもらえただけで嬉しかったであろう。なお、「^{こう く きょく ご}鈎句棘語」とは、釣り針や棘がぐさぐさひっかかるように極度に読みにくい文章のことで、蘇軾の一部の詩文を言い表す語としてまことにぴったりで、古き時代の漢学者の語彙力はやはり恐るべきものがある。

【訳文】

この微かな生命はまことに草や木と同じで、
 天の力によらないところはない。
 母の慈顔はまさに天が吹かせる春の風のようにであるが、
 桃や李の実が熟するころには、
 哀しいかな、もはや春の風は吹いていないのである。
 この恨みは古今に変わるところがなく、
 母に報いる志があっても、
 わずかの間に時が失われてしまうのである。
 ……

■ 【06-4-059】 記承天寺夜遊

【**解題**】張ちようかい懷みん民 [字は夢得または偃あき佺] と承しょうてん天寺じに遊んだことを記した小文。張懷民は何らかの事情で左遷されて黄州こうにきていた人で、後で見ると、長江ちようこうを南に一望する亭あずまやを建て、蘇軾かいさいが「快哉亭」と名付けた [→作品番号 06-4-067]。承天寺は臨臯亭こうていの南東の岸辺近くにあったので、快哉亭も含めてごく近くである。なお、張懷民と張夢得は別人だという説もあるが、ここでは本名と字あざなであるとの説に従う。

【訳文】

元豊六年十月十二日の夜、衣を解いて眠ろとすると、月の光が戸から入り込んできた。欣よろこび、起たって行くことにした。

ともに楽しむ者がいないことを念おもい、承天寺しょうてん じにまで至り張懷民ちようかいみんを尋ねた。張懷民もまだ寝ていなかった。ともに承天寺の中庭を歩いた。庭は水を張ったかのように明るく透き通っていた。水中に藻や荇あざがゆらゆらと交差すると見えたのは、竹や木の影であった。

夜に月がないわけではない。庭に竹や木がないわけではない。ただ、私や張懷民のような閑な人が少ないだけである。

【**補足**】 [これは詩情に溢れた短文として極めて有名である。上の挽詩とは対照的に難しい語句は何一つ使われていない]

■ 【06-4-060】 記故人病

【**解題**】 ある知人の死に遭遇して記した短文。

【訳文】

元豊六年十月十二日、夜の最初の太鼓が鳴った後で、友人が病み気になったというので急いで視のこに行くと、すでに物をいへなくなっていた。死と生が争い、陰の気と陽の気が争い、友人の苦しみは錮

で木を切るよりも甚たいものであった。私はもう助からないと知り、黙って安らかな死を祈るだけであった。ああ、哀しいではないか。これは何の罪によるのか。酒色たのの楽しみによるのか。昔の人は「美食は毒、快楽は猛獣の爪や牙」といったが、それは虚言ではないのだ。

翌日、若い者に会い、このことをもって戒めると、若い者は笑っていった。

「そこまでいいですかね。なんとも野暮ではありませんか。僕はもとより色を好みますよ。死の痛みなど怖がったりするものですか」

「死は怖くないのと君はいうのだね。道で物乞いをする者は、地面に伏して大声でこのように叫ぶよね。『どうか一椀のご飯をお恵みください。きっと千斛こくの米をお返します』[物乞いの常套句で、来世において大きな酬いがあるという意味]。それを聞くと町の人はみんな嘲笑うだろう。千斛の米を返せるのだったら、どうして一椀の飯がなかりたりするものかと。子供だってたませやしない。君は死など恐れないという。それでいて、生きて色を好むという。どうして私を欺けようか」

今の世の強かりをいう者はたいたいこの若者と同じである。

「戒かいは定じょうを生じ、定じょうは慧えを生ず」[戒律じょうりつは入定にゅうじょう[悟りに近づき瞑想]を生じ、入定は偉大な智慧を生じる]とは変わることはない至言である。戒律に従わなくても悟れるかのようにいのは妄言である。智者のように見えて実は痴れ者であり、覚めているようにいて実は夢の内にあるのだ。悲しいことだ。

【補足】[(1) 死の苦しみを目の当たりにして、悲しんだり無常を感じたりするのにとどまらずに、生きる哲学を論じるところがいかにも蘇軾らしい。(2) 前の文章と同じ日付で、同じ夜に二つのことが起こったのだろうか。そうだとしたら、その晩の蘇軾の感情の揺れ幅はどれだけ大きかったのか、そして趣の全く異なる二つの文章を書くときの心持はどれだけ異なっていたのだろうか]

■ 【06-4-061】書唐林夫患諸葛筆

【解題】宣州せんしゅうの諸葛氏しよかつが作る筆は天下の名品とされた [→作品番号 06-1-048]。唐垌とうりゅう

〔字は林夫〕〔→作品番号 06-2-022〕が諸葛氏の筆を贈ってくれたのでそれへの謝礼としてこの短文を書いた。

【訳文】

唐垌が諸葛氏の筆、二束を送ってくれた。一束が十種の筆で、どれも精妙を極めている。唐垌のように書を善くする者でなければこの筆は使いこなせない。唐垌は私に行書と草書を求めてきた。それで、この数枚の紙に書いてみた。

元豊六年十月十五日、酔中に題す。

【補足】〔(1) 酔中といっているのは、上手には書けていない言い訳としたのだろう。 (2) 蘇軾は書の道具についても造詣が深く、黄州時代に書いたとされる短文をいくつか以下にここで見ておこう〕

■ 【06-4-062】 書名僧令休硯

【解題】黄岡県〔黄州〕の役人である段▲〔▲は王の右に与〕が古い硯を贈ってくれたのでそのことを記した。

【訳文】

黄岡県の主簿の段君は、かつて都にいたときに、書物を筆写する者のところで一つの風字硯〔古代の硯の一種〕を得た。

硯の下に、「祥符己酉、これを信州鉛山の観音院で得た。名僧令休の手元にあったものだ。明年夏に鵝湖山で刻み記す」と刻まれている。硯の横には、錢易が題して「荒靈」の二字が刻まれている。それは歙州の石である硯の蓋の美しさをいうのだろう。

「己酉」は今から七十四年前で、令休とはどこの僧なのか。禅月大師の貫休は信州の人であるから、

令休はあるいはその兄弟なのか。鉛山にいたのだろうか。「荒霊」の二字はその意味がよわわからない。段君がこの硯を私にくれたので、このことを書いてその謝礼とする。

元豊六年冬至の日に書く。

【補足】〔(1) 蘇軾は硯に刻まれた文字に興味を抱いた。令休とは誰なのか、貫休の兄弟ではないかと推測している。貫休は五代十国時代の著名な僧で、成都を中心に栄えた前蜀国の王に招かれて、文化保護政策を説いた〔作品番号 06-3-055 で触れた章莊とも詩のやりとりがあった〕。銭易は宋代初めの人で、五代十国時代に杭州を中心に栄えた呉越国の王の息子である。唐の文化の伝統は呉越国や蜀国、あるいは南唐国〔上の短文で見た諸葛筆は南唐王の庇護のもとで技術を高めた〕に引き継がれたのだった。(2) この書状は、段君から別の人の手に渡り、7年後の元祐5年〔1090年〕4月18日に蘇軾は再びそれを見ることになる。そのとき蘇軾は知事として杭州にいた。蘇軾の書は人々に好まれ、人から人へと渡っていったのである〕

■ 【06-4-063】孔毅甫竜尾硯銘

【解題】孔平仲〔字は毅甫あるいは毅父〕〔→作品番号 06-4-054〕が所有する竜尾硯という硯の銘を作った。

【訳文】

「渋」は筆を留めるものではなく、「滑」は墨を拒むものではない。

表面には竜の爪のような細かい模様があり、金属のような音がし、玉の徳を讃える響きがある。厚くかつ堅く、古今の優れた人を見るかのようで、素朴にして重く、人に随って軽々しく南北に行くようなことはない。

【補足】〔「渋」とは硯に筆を置いたときの感触、「滑」とは墨を磨るときの感触をい

う]

■ 【06-4-064】 書懷民所遺墨

【解題】 張懷民 [字は夢得または偃佺] [→作品番号 06-4-059] が墨をくれたのでその謝礼。

【訳文】

世間の人々が墨を論じるとき、多くの人々は黒さを貴び、光沢についてはあまりわかない。光沢があっても黒くなければ、それは棄ててしまってもよいものである。黒くて光沢がないのは寂しく栄えるところがないので、やはり用いるに足りない。光沢が清らかで浮き上がることがなく、小児の瞳のように澄んでいるのは佳い墨である。

張懷民が贈ってくれた二枚の墨には、表には「清煙煤法墨」、裏には「道卿既黒而光」と記されている。まさに黒にして光る佳い墨である。この書をもって謝礼とする。

■ 【06-4-065】 書龐安時見遺廷珪墨

【解題】 医者ほうあんの龐安時 [字は安常] [→作品番号 06-3-030] からもらった廷珪墨について記した短文。廷珪墨は、五代十国時代の南唐国で王のための墨を作る役人であった李廷珪が開発した墨。宋代において第一の墨として珍重された。

【訳文】

私はたくさんの墨を蓄えている。その中の数丸は李廷珪が造ったものであるとされている。色や形状は確かに他の墨と異なっているのだが、歳月を経るうちに多くはその真の風合いを失ってしまい、疑わしくて廷珪墨であるとは決めかねている。

この廷珪墨はある人が二代にわたって蓄えていたものである。その人は不幸にも重い病に罹り、医者ほうあんじの龐安時の治療を受けた。龐安時は一銭も取ることなく、この墨だけを求めた。龐安時はこれを得ると私に与えてくれ、その代わりに数幅すうふくの書しよを求めた。

龐安時は蕪水きすいの人で、医術の学は妙所しよくに至り、立派な行いがあり、蜀の人である単驤たんじやうにかなり似ている。珍しい病よ気も善く治療する。字は安常あんじやうである。古今の医学書かんないに通じ、漢代に張仲景が『傷寒論しやうかん』[疫病に関する古典]を書いて以来の傷寒に関する種々の本を極めて詳しく比較検討した書物を編んでいる。傷寒の治療に関してはこれによって万全を尽くすることができる。

【補足】 [(1) 龐安時ほうあんじと単驤たんじやうを比較した文章を作品番号 06-3-034 で見ている。(2) 作品番号 06-4-025 で蘇軾しよつかんは傷寒について論じていたが、その知識は龐安時から得たのだろう。(3) なお、ここに記述されている龐安時が編集した傷寒論の完成版を見るのは4年後のことである]

■ 【06-4-066】 与蔡景繁

【解題】 蔡承禧さいしやうき [字は景繁あざなけいはん] [→作品番号 06-4-020] に宛てた手紙。

【訳文】

先の日に許安世君きよあんせいがにわかに亡くなるのを間近に見ました。それから数日のうちに、董鉞君どうえつが亡くなったと聞きました。人の命もちは脆くはかなく、呼吸をする間にも消えてしまうようなものであるでしょう。だから世を厭う気持ちがありますます起こるのでありましょう。許君は喪に服すために帰郷する途中でにわかに亡くなり、囊のうちゆう中はほとんど空っぽで、棺に納めることさえもできません。弟は麻城県知事をしていますが、はなはだ貧乏で、埋葬する土地などはありません。これを聞いて、貴君も悲しく思われることでしょう。朝廷もまた憐れんでくださるでしょうから、貴君からももひとつこと申し出ていただけたなら、重く耳を傾けてくださるでしょう。差し出がましいことを申し上げますのを、どうぞお許しください。

【補足】 [(1) 許安世^{きよあんせい}は蘇軾よりも 10 年後れて科擧の合格した人。作品番号 06-4-060 に記されていたのはこの人の臨終の場面であったのかもしれない。 (2) 董鉞^{とうえつ}は 1 年ほど前に別れたばかりの人である [→作品番号 06-3-042]。 (3) ここの記述からも、亡くなった人をきちんと葬るのはかなり大変であったとわかる。蘇軾の父が都でなくなったときには、周囲の助力を得て、特に皇帝から葬儀費用を援助してもらえたのだった]

■ 【06-4-067】 水調歌頭

【解題】 張懷民^{ちやうかいみん} [字は夢得^{あざな}または偃佺^{ぼうとく}] [→作品番号 06-4-064] の快哉亭^{かいさいてい}で詠んだ詞。

【訳文】

落日繡簾卷、[落日^{すだれ}の繡のついた簾を巻くと]

亭下水連空。^{あずまや}[亭の下は空に連なる水]

知君為我、[あなたは私のために]

新作窓戸湿青紅。^{あずまや}[新たに窓に青や紅を施して(た)ざり、その漆がまた湿っています]

長記平山堂上、[いまも覚えているのは平山堂^{へいざんどう}の上で]

歌枕江南煙雨、[江南^{こうなん}の地の煙った雨を見たこと]

杳杳没孤鴻。^{おどど}[遙か遠くに孤独の鴻が消えてゆきました]

認得醉翁語、[ここから見るのはまさ^{すいおう おうようしゅう}に醉翁[歐陽脩]の言葉そのまま]

山色有無中。^{おどど}[山の色はあるかなしかのなかにあります]

一千頃、[一千頃^{けい}の広がりに]

都鏡浄、[全て鏡^{きよ}のように浄らかで]

倒碧峰。^{みどり}[碧の峰が逆さまに映ります]

忽然浪起、[忽然として浪が起り]

掀舞一葉白頭翁。[白髮の翁の乗るひとひらの小舟が舞い上がります]

堪笑蘭台公子、[笑ってしまうのは、蘭台に登ったかの高貴な人[楚の襄王]]

未解莊生天籟、[莊子の天籟を理解することもなく]

剛道有雌雄。[風に雌雄があるという説を聞いたのでした]

一点浩然氣、[(天籟を起こす)浩然の氣は一点から起こって]

千里快哉風。[千里をわたる快哉の風となるのです]

【補足】 [(1) この詞では、歐陽脩が建てた平山堂と黄州の快哉亭とを渾然一体のものとして詠んでいる。平山堂は長江の遙か下流の揚州にあって、これより4年前に立ち寄って詞を詠んでいる [→作品番号 05-5-037]。そのときには欧陽脩が平山堂で詠んだ詞から「手ずから種える堂前の楊柳、別れ来て幾度の春風」の句を引いていたが、ここの詞では同じ詞から「山色有無の中」の句を引いている。(2) これまで度量衡の単位について注記することはほとんどなかった。「一千頃」がどのくらいの広さで、「千里」がどのくらいの距離であるかを詮索したところで意味がないと思うからだ。「千」という数字が広く遠いイメージを生み出せばそれでよいだろう。(3) 「天籟」とは莊子がいう万物が共鳴する「宇宙のオーケストラ」。風に雌雄の差があるとかないとか、よくわからない理屈をこねまわすのは実にちまちましたことである [風に雌雄があるという話については次に見る弟の文章に記されている]。「浩然の氣」とは孟子がいう天地間に満ちる正しいエネルギー。「天籟」と「浩然の氣」が一体となって、快哉亭の前を吹く風となっているというのがこの詞の結び、「一点浩然の氣、千里快哉の風」である。(4) この詞は『赤壁の賦』 [→作品番号 06-3-057] や『後の赤壁の賦』 [→作品番号 06-3-065] と同じ思想のもとにある。(5) 快哉亭については弟の蘇轍がその由来を記した『黄州快哉亭の記』があるので、ここで読んでおこう]

【訳文】

そ ぞつ こうしゅうかいさいてい き
蘇轍：『黄州快哉亭記』

ちようこう せいらいこうきう きんきよう
長江は西陵峡[三峡の最下流]を出ると、初めて平地を得て、流れは奔放、勝手放題に広が^り、南から湘江、沅江が合流し、北から漢水が合流し、その勢いはますます漲^り、赤壁の下に到るに及んで、海と比べられるまでに波の流れが満ち溢れる。

せい が ちようほうとく こう たくきよ あずまや
清河出身の張夢得は黄州に謫居する身となり、住まいの西南に亭を作って長江の景勝を眺められるようにしたところ、我が兄の蘇軾はそれに「快哉亭」の名を付けた。

亭から見えるのは南北百里、東西三十里で、そこにおいて濤瀾が洶湧^し[大波が湧き立ち]、風雲が開闔する[風と雲が開いたり閉じたりする]。昼間は亭の前で舟が出没し、夜間は亭の下で魚鼈[水の怪物]が悲しげに嘯く。一瞬ごとに光景が変化し、目を駭かし心を動かすので、じっと視ていられない。しかし、張夢得は數物の上でこれを遊び、目を挙げるだけでその全貌を見てとるのである。

ぶ しやう こうりやう そうもく
西には武昌の諸山があつて、岡陵が起伏し、草木が行列する。朝靄が消えて日が出ると、漁師や木こりの家が、指さして数えられるほどにくっきりと現れ出る。

こうしたことから、亭にいれば「快哉」[すばらしいではないか]と叫ぶようになるのである。

このあたりにある長い洲の岸辺と古い城の墟は、かつて曹操と孫権が睨み合ったところで、周瑜と陸遜が馳せまわったところだ。こうした人々の風儀の遺跡は俗世の人々に「快」といわせるに十分なものがある。

さらに昔のこと、楚の襄王は宋玉と景差を従えて蘭台の宮殿[黄州の北西百キロ余りのところにあつた]に昇ったところ、風が颯然と吹いてきたので、襄王は襟を広げて風を入れ、「快いなこの風は。私はこの風を庶民とともに楽しむことができるであろうか」といった。

すると、宋玉はいった。

「これは大王様のための『雄風』であります。庶民がともに楽しむことができるものではありません」

宋玉のこの言葉はきつと諷する[皮肉を籠める]ものであったのだらう。そもそも風に「雌風」「雄風」の違いがあるのだらうか。人には厚遇と不遇の変化がある。襄王が楽しんでいるのと、庶民が憂いているとの違いは、人の厚遇と不遇の変化によるものである。風とは何の関係もない。

人は世に生まれて、その心の中に自ら得ていないものがあると、どこに行こうとも苦しまずにはいられない。心の中が坦然として[平らかに安らかである]、その本性が外物によって傷つけられていないのであれば、どこに行こうとも「快」でないことはない。

いま張夢得は謫居となってもそれを憂いとするのではない。出納事務の余りの時間を竊んで、山水の間に己を解放させている。これはその人の中に人を超えたものがあるからなのだらう。草を扉とし破れた甕を窓とするような襤褸家であっても、「快」でないことはない。まして、長江の清流で心を洗い、西山の白雲に挨拶し、耳と目で景勝を窮め、自らに適うようにしているのであるから、「快」でなかるうはずがないのである。

もしもそうでなければ、山の連なりも、切り立った谷も、横たわる林も古い木も、それを振わず清らかな風も、それを照らす明るい月も、そのどれもが騷人[憂愁の詩人]や思士[苦悩の人]が悲傷憔悴して耐え難くするものとなって、見ても「快」とすることなどとてもできないのである。

元豊六年十一月一日、趙郡の蘇轍が記す。

【補足】宋代以前の人々は、流謫の身となると、この文の終わりにあるように、美しい風景を見ても「快」とはせず悲傷憔悴して悲嘆の詩文を作った。歐陽脩が滁州に流されたときに書いた『醉翁亭記』[→作品番号 06-3-073]は悲嘆しない新しい士大夫のあり方を端的に示したもので、『快哉亭記』はそれを受け継ぐものであるといつてよいだらうし、ここで見た蘇軾の詞は欧陽脩への敬慕の念に満ちている]

■ 【06-4-068】 郭忠恕画賛

【**解説**】張懷民^{ちやうかいみん}〔字は夢得^{あざな}または僇^{ぼうとく}〕が所蔵する画に描き添えた文。

【**訳文**】

右は張懷民^{ちやうかいみん}が所蔵する郭忠恕^{かくちゆうじよ}の画いた『山水屋木』〔山水^{さんすい}と家屋^{かえ}と樹木^{じゆぼく}〕の一幅である。

郭忠恕^{あざな じよせん}は字を恕先^{じよせん}といい、字の方でよく知られている。洛陽^{らくやう}の人である。

郭忠恕は若い頃から文章に優れ、古い書体や文字の学問に通じ、儒家の九つの經典をよく理解していた。七歳で少年のための科挙を受けるよう推薦を受け、後漢国^{ごかんこく}〔五代十国時代の地方政権の一つ〕の劉贊^{りゅうさん}が王となったときに属官に召された。しかし、董喬^{とうぎやう}と争い事を起こし、職を辞して去った。後周朝^{こうしゅうちやう}の初代皇帝によって『周易』^{しゅうえき}を講義する博士として招かれ、[そのまま宋朝^{そうちやう}に仕え]宋の世の最初の頃に、符昭文^{ふしょうぶん}と朝廷で言い争いをし、乾州^{けんしゅう}に左遷された。そこで任期が満ちると、それからは仕えなかった。

岐^き、雍^{やう}、陝^{せん}、洛^{らく}のあたりを広く自由に歩きまわり、人に逢うと相手の身分が高かろうが低かろうが、自分のことを「猫^{ネコ}」〔吾輩は猫である〕と自称した。美しい山水に遇うと十日もそこに留まった。あるときは穀物を絶ち、夏の炎天下でも汗をかかず、極寒の頃に氷に穴を開けて水浴びをした。

画を最も得意とし、「山水屋木」の妙を掴んだ。画を求める者があると、必ず怒って追い払った。画を描く気になると、たちまち自分から描いた。

郭從義^{かくじゆうぎ}が節度使として岐山^{きざん}にいたとき、郭忠恕^{あざな}を招いて山の亭^{てい}に留め、そこに白い絹の画布と墨と絵具を用意した。数カ月ほど経ってから、酔いに乗じて、画布の隅に遠山の数峰を描いた。郭從義はそれを宝とした。岐山には画を好む金持ちの息子がいて、くる日もくる日もよい酒を用意して郭忠恕をはなはだ厚くもてなした。これをしばらく続けてから、自分の希望を言い、一匹の絹を差し出した。郭忠恕は、小さな子供が糸巻きを持って風鳶^{たこ}を上げているありさまを描き、数丈の長さの線を引き、一匹の絹を満たした。金持ちの息子は怒り、郭忠恕との交わりを絶った。

張忠恕^{ちんちゆう}はよく人足のような庶民^{しよじん}を連れて町の店に繰り出して飲み食いし、

「わしと遊ぶのは諸君等のような者だ」

といった。

宋の太宗皇帝[二代皇帝]は郭忠恕の評判を聞き、宮城に呼び寄せた。宦官の竇神興が管理する官舎に宿泊した。郭忠恕の髯は長く美しかったのだが、突然それを剃ってしまったので、竇神興が驚いてそのわけを尋ねると、

「いさか貴殿の鬚に倣ったまでです」

と、答えた。竇神興は激怒した[宦官は去勢されているために鬚が生えない。そのことをあからさまにいうのは極めて侮蔑的である]。

郭忠恕は国子監の役人に任命され、太学の官舎に宿泊するようになり、ますます酒をほしきままにし、政治向きのことについて放言し、ひどく誹謗の言があった。それが朝廷に聞こえ、杖刑[棒で叩く刑罰]を受けて登州に配流となった。齊州の臨清県にまで行くと、護送の役人に向かって、

「わしは逝くぞ」

といって、地面に穴を掘り、顔を容れられるまでになると、そこに首を突っ込んで死んだ。道の傍らに仮に埋葬し、数カ月後に知り合いがきて改葬しようとする、衣服と夜具だけが残った。きつと尸解した[仙人になった]のである。

画賛に曰く。

長松攬天、[高い松が天を突き刺し]

蒼壁挿水、[蒼い岩壁が水を差し挟む]

憑欄飛觀、[高い楼閣の欄干にもたれ]

縹緲誰子、[遠くを眺めるのは誰か]

空蒙寂歷、[からんとして寂しく]

煙雨減没、[全ては霧雨の内に消える]

恕先在焉、[郭忠恕はこの画の中にいて]

呼之或出。[呼べば現れ出るであろう]

【補足】[蘇軾はまことに「異人^{いじん}」好きである。画賛でありながら、ほぼ郭忠恕^{かくちゆうじよ}の伝記になっている。昇仙した郭忠恕であるから、自身が描いた画の中にも不思議ではない。誰が呼び掛けても現れ出てくるのではなく、張懷民^{ちやうかいみん}や蘇軾のような人でなければならぬのだらう]

■【06-4-069】与滕達道

【解題】滕元発^{とうげんはつ} 滕甫^{とうほ}、字は達道^{あざな たつどう} [→作品番号 06-3-046] に宛てた手紙。

【訳文】

夏の間、少し調子を崩されたとのこと、すぐに全快されたてありましょうか。

近頃、楊絵君^{ようかい}が侍妓^{じぎ}を四人放ったと聞きました。これは安らかな暮らしをする妙策であります。その一人は郭姓^{かく}で、いまは李莘君^{りしん}のところへいます。楊絵君は醒めようとしたのに、李莘君はこれから酔おうというのでしょうか。

分けてくださいました小団^{しょうだん}[茶の名品]はまことに結構なものです。蘇合酒^{そごうしゆ}も絶佳です。いつもお心遣いいただきまことに痛み入ります。

今日の報せを見ると、蒲宗孟君^{ほそうもう}が天寿院^{てんじゆいん}から出されたとか。何があったのでしょうか。また張懷民君^{ちやうかいみん}に会いました。大した佳人であります。

【補足】[(1) 何人か名前が挙がっている者のなかで、李莘^{りしん}だけが初登場で、蘇軾の親友^{りじゆう}の李常 [→作品番号 06-4-040] の兄である。(2) 宋代^{そうだい}の士大夫^{しだいふ}に、技芸をもった女性を抱える風潮があったことは、現代の我々からすると忌むべき悪弊であると断じるしかなく、それを糾弾する趣旨で書かれた研究書もある。蘇軾もかつては複数の女

性が身の回りにいたし、^{こう}黄州に謫居してからでも妻のほか、^{おうちよううん}少なくとも王朝雲がいて、赤ん坊も生まれていた [→作品番号 06-4-057]。それでも、この手紙の原文では「衛生の妙策」と書いているように、女性を解放することがいろいろな意味から望ましいと考えるようになっていた。だから、^{ようかい}楊絵 [→作品番号 06-4-047] の行為に賛意を示し、^{かく}李華の行為に首をかしげたのである。郭という女性が^{かく}楊絵のもとから^{かく}李華のもとに移ったのには、たぶん間に誰かが入った上で金銭の授受を伴ったはずで、要するに人身売買に他ならなかった。士大夫として推奨すべきやり方は、たとえ自分が金銭を出して引き取った女性であっても、しかるべき男性のもとに何がしかの手当を添えて嫁として出すということであって、^ほ蘇軾はできるかぎりそうであろうと務めたようである。(2) ^ほ蒲宗孟 [→作品番号 06-4-007] について記されていることがどのような事柄であるのか、後にわかるであろう]

■ 【06-4-070】 孟仰之

【^{こう}解題】 ^{こう}黄州副知事の^{もうしん}孟^{あざな}震 [字は^{ぎようし}仰之] [→作品番号 06-4-052] のために記した短文。

【訳文】

^{こう}私は^{たくきょ}黄州謫居となり、^{もうしん}黄州の副知事の^{あざな}孟震、字は^{ぎようし}仰之、とはすこぶる善い関係にある。^{こう}光州知事の^{そうきゅうしやう}曹九章からの手紙にも、「^{あざな}孟震君は君子である」と書いてある。私はこのことを^{おもむく}徐に察するに、^{あざな}そう書かれるのにまさしくふさわしい人物である。

^{あざな}孟震は^{うん}鄆州の人で、^{きんし}進士に及第したことのほか、特に目立ったことはなかった。しかし、^{けいとう}京東の狂人の^{こうちよくん}孔直温が謀反を企てたとされて^{じゆ}獄に下ったとき、^{せきかい}事は^{せきかい}石介の子にも及んで逮捕されてしまい、さらに四方で捕まる者が増えてゆくまでになった。^{あざな}孟震は^{せきかい}石介のことはもともと知っていて、^{かんぎこうかんき}韓魏公[韓琦]と

はそれまで縁がなかったのだが、手紙で、孔直温は狂人であって、実際に謀反を企てるような能力はなく、また石介は正しい道のために死ぬような人で、それが家風となっているので、その息子が狂人とともに謀るようなことは断じてないと記した。韓魏公はそれを読んで感心し、すぐに孟震の書いた通りのことを上疏した。それで孔直温の件は深く取り調べるには及ばないとなって、関りがあるとされた者は皆が釈放され、大勢の者が救われたのだった。

孟震の片舎には非常に清らかな泉があり、旱魃のときにも水が涸れることはない。私はそれこそ「君子くんし泉せん」と名付け、弟がそれを記念する文を作った。

げんほう
元豊六年十一月七日記す。

【補足】〔(1) 光州知事の曹九章そうきゅうしょうの名は作品番号 06-3-067 などで見ている。(2) 韓琦かんきは蘇軾が8歳のときに憧れたスーパースターの一人ですすでに故人である〔→作品番号 05-1-053〕。石介は、蘇軾が韓琦の名を知るきっかけとなった『慶曆聖徳詩』を作った人である〔→作品番号 01-2-001 の年譜〕

■ 【06-4-071】 書子由君子泉銘後

【解題】上の文章にあるように、孟震もうしんのために、蘇轍くんしせんが『君子泉の銘』を作ったので、それにこの後書きを添えた。

【訳文】

弟がこの文を作り、私はこれを石に刻んで泉のほりに置こうと考えた。しかし、孟震君は同意しなかった。孟震君は「名といものは物の累おづみであります」という。それでそのことを書いて残すことにした。

げんほう
元豊六年十一月九日題す。

【補足】〔孟震もうしんのこの言葉から、確かに君子であったと知れるであろう〕

■ 【06-4-072】 与王定国

【解題】 都への帰還を赦されて北上しつつあった王鞏^{おうきょう} [字は定国^{あざな ていこく}] [→作品番号 06-4-039] に宛てた手紙。

【訳文】

昨日、弟からの手紙を受け取り、その中に貴君の手簡が封じてありました。すでに江西^{こうせい}に至り、お健やかであると承知しました。貴君の忠信の心は、天の日によって照らされている通りで、生還を遂げられてこれからどのような境遇にまで進まれるのか、量り知ることはできません。容姿のほどは以前よりも少し老いつつ、もしや南方の草色に染まったりしたでしょうか。

先にお出した手紙は弟を通してきつと達しているであります。お教えたいた通りなら、今月の五日か六日ごろには九江^{きゅうきゅう}に到るであります。弟からの手紙は十一月中には着いているであります。いま人に託したこの手紙は果たしていつどこで見ただけになるのでしょうか。……

【補足】 [この手紙にある「今月」が何月であるのか定かではなく、この年の12月ないしは翌年の1月なのだろう]

■ 【06-4-073】 王定国詩集叙

【解題】 上の手紙で見たように、王鞏^{おうきょう} [字は定国^{あざな ていこく}] はこのころに長江を臨む九江^{きゅうきゅう}に至った。かつて弟の蘇轍は九江から足を伸ばして兄のいる黄州^{こうしゅう}にまできたのだが [→作品番号 06-1-058]、王鞏はそのまま都に向かった。その際に、流謫^{りゅうたく}の地で詠んだ詩を集めて蘇軾に送ったので、その詩集に蘇軾は序文を書いた。これが執筆されたのは翌年になってからであろうが、ここで合わせて読んでおこう。

【訳文】

太史公たいしこう〔司馬遷しばせん〕は『詩経』〔孔子こうしが編集した詩歌の古典〕についてこのように論じた。

「『詩経』に納められたこくふう『国風』百六十篇の詩は男女の情を歌いながらも淫靡いんびに流れていない。『小雅』七十四篇の詩は怨みうらつらみを歌いながらも規範を乱すものではない」

私はこのことを考えるに、『詩経』の中でもやや時代が下って詠まれた「変風」や「変雅」について司馬遷しばせんは識るだけで、『詩経』の中でも初めせいふうのころの「正風」や「正雅」についてきちんと見ていたとはいえない。先王せんおう〔古代の聖王〕の徳の余沢が衰えた後になって、「変風」の詩が情から発せられた。衰えたといえ余沢は枯渇し尽きたわけではなかったので、なお礼や義の内に留まっていた。留まるどころがなくなったのよりはまさっていたというだけのことである。

もしも人の本性から発して忠や孝に留まる詩があるのならば、「変風」、「変雅」と一緒に語ることはできない。古今の詩人は大勢いるが、杜甫を第一とするのは、流落して飢えと寒さに苦しみ、ついに国に用いられなかったにもかかわらず、食事の際にも国君のことを忘れることがなかったからだ。

王鞏おうきやうは私のために罪を得て、遠く海辺の地に流されて五年、一人の子は貶所へんしょで亡くなり、一人の子は故郷で亡くなり、王鞏もまた病気でほとんど死にそうになった。王鞏は私のことをひどく怨んでいるだろうと思い、敢えて手紙で暮らし向きを問うようなことはしなかった。

ここに王鞏は帰還を赦されて江西こうせい ちやうこう〔長江の南〕に至り、嶺外れいがい〔山の彼方の南の地〕で作った詩数百首を私に寄せてきた。その詩はどれも清澄にして平静、そして豊融ほうゆうで〔穏やかで和らいている〕、藹然あいぜんでよく治まった世の音色があって、王鞏が詩によって述べているところのものは、志を得て道を行く者がいるところのものとも異なることがない。中には憂いに塞がり嘆きを発する作もあるが、それは嶺外の地に死んだならば、天子の恩に報いることができず、父祖の名を辱めてしまうのを恐れたものである。孔子は「天を怨まず、人を尤とがめず」といった。王鞏は私を怨まないのであるから、まして天を怨んだり決してしない。私は王鞏の詩巻を置いて嘆息し、その人の理解が浅すぎたことを残念に思った。

思えばかつて王鞏ほうじやうは彭城県じょ〔徐州〕にいる私を訪ねて、十日ほど留まり、詩のやりとりをしてほとんど百余篇に及んだ。私はその多さに苦しみ、その速さを畏れ、その巧みであることに感服した。ある日、王鞏

は顔復と泗水に遊び、桓山に登り、笛を吹き酒を飲んで、月の光の中を帰ってきた。私は黄楼の上で酒を用意して待ち、「李白が死んでから、世にこの楽しみをする人がいないこと三百年になる」といったのだった。

今や私は老いて詩は作らないし、病気で酒も止め、門を閉ざして外に出ることもない。門の外は数歩ですぐに長江であるのだが、もうひと月余りも長江のほとりにも行ってない。眊眊と過ごしてまことに一人の老農夫でしかない。

王鞏は詩はますます巧みで、酒を飲むことは衰えず、至るところで山水の景勝地を窮め、困苦し老いたことをもってその生き方を変えることなどしない。今から後に私が王鞏に畏服するのはその詩によるだけではないのである。

【補足】 [(1) 蘇軾は、王鞏に手紙を書かなかったとか、老いて詩を作らないとか、必ずしも事実ではないことを記している。序文の趣旨を強調するためである。(2) 徐州知事であったときに王鞏が訪ねてきたことは作品番号05-4-075以下で見ている。「李白が死んでから三百年」というのは作品番号05-4-097にある]

■ 【06-4-074】 録趙貧子語

【解題】 また一人「異人」が蘇軾の前に現れた。趙貧子 [趙の貧乏先生] という仇名の人物で、これはその人の言葉を記録した文章。

【訳文】

趙貧子がある人にいった。

「あなたの精神は完全ではありません」

その人は承服しないていった。

「私の友は立派な車に乗ってたくさんの従者を従え、大軍でさえも蟻の群れのようにみなして指揮してい

ます。私はといえば、富貴などは米糠こめぬかのように見て、生死も昼夜の交替に変わらないと達観しています。これでどうして精神が完全でないというのですか」

趙貧子は笑っていった。

「それは血気に助けられ、議論に激発して思うまでのこと。完全なる精神の功ではありません」

翌日、趙貧子はまたその人に尋ねた。

「あなたの御両親は御存命ですか」

「たいふ前に他界しました」

「夢に見ることはありますか」

「よくあります」

「その夢の中では、あなたは御両親が亡くなったことを知っていますか。それとも生きておられると思っているのですか」

「夢では二人とも生きていると思っています」

「父母が生きているのか亡くなっているのか、考えるまでもなくわかることです。日中にあなたに問えば、即座に応えましょ。夜に夢に見ると、亡くなった人が生きています。死と生でさえ、夢を見ているときと覚醒しているときとは異なります。外物がもしもあなたを惑わしても、あなたがそれに気付くのは、父母の生死よりも難しいのではないのでしょうか。あなたは自分の精神は完全だとして学ばずにいるのは、憂うべきことではないでしょうか」

私はこのごろこの言葉を聞いたので、これを記録しておく。

【補足】[趙貧子とは誰なのか。弟の蘇轍が『丐者趙生伝』に書いている丐者[乞食]の趙吉である。趙貧子が黄州にきてから後のことまで記されているので、参考として『丐者趙生伝』を見ておこう]

【訳文】

そ てつ かいしやちやうせい でん
蘇轍：『丐者趙生伝』

こうあん いん ちやう
高安[筠州]の趙さんは、ぼろぼろの衣服にぼさぼさ頭、身体を洗ったことなどない。飲酒を好み、酔うと町の人を罵ったり殴ったりする。物好きな人が呼んで話をすると、無茶苦茶な言い方で悪事をばらしたりする。一度も会ったことがない相手でも、普段の善行や悪事、病気などを言い当ててしまう。それで人々は「あれは有^{ゆう}道の者[最高の徳を得た人]ではなからうか」という。

げんほう
元豊三年、私は高安に左遷^{させん}となってから、途で趙さんを見ても、その物狂いを畏れて敢えて挨拶することはなかった。

その年の暮れのこと、趙さんが会いにきたので私は尋ねた。

「あなたはかつて人に要望することはなかったと聞きます。今日はどうして私のところに来たのですか」

趙さんは、

「あんたを見たかったのだ」

といい、しばらくしてこうもいった。

「あんたは道を好むが要^{かひの}を得ておらん。陽の気が下らず、陰の気が昇らずにいる。だから肉が多くて浮つき、顔が赤くて、ぶつ、ぶつがあるのだ。水を全身の骨^{ほね}にかけたらよい。十日もすればもろもろの疾^{やま}い^きが去るだろう。一年間息^{いき}らずに行えば、俗世を超^こえることもできなくはないだろう」

私はその説を用い、言った通りであるとわかったが、怠^怠ってしまって長く続かなかった。だからその妙を究めることはなかった。

あるとき、趙さんが、

「今夜はあんたのところに泊^{とまり}まろうと思う」

と、いったので、私はそれを許したのだが、夜になっても来^来なかった。後でそのわけを尋ねると、

「わしはあんたを他所^よ所に遊びに連れて行こうとしたのだが、あんたが驚いて、気が変^やになってしまってもいかん^{かん}と思ってやめたのだ」

「あなたはどこに行くのですか」

「わしはいつも泰山たいざんの下に行っておる。世間でいうところの地獄と同じだ。あんたがそこを見たら、もう仕官をする気がなくなるだろう」

「それはどうしてですか」

「地獄にいるのは大半が僧と官吏だからだよ。僧は決まりを破るし、官吏は物を貪る。それだけのことだ」

「あんたがそこに行くと、向こうの人はあなたに挨拶とかするのですか」

「わしにはあの連中が見えるが、あの連中はわしを見ることはできない」

そして嘆息して、

「これもよこしま邪な術だ。正しい道ではない。あんたは自分の気を養い、気と性が完全になったなら、出処進退は考えるまでもなく正しくできるようになるだろう」

「気を養うことは以前に教わりました。性を養うのはどのようにしたらよいのでしょうか」

趙さんは答えてくれなかった。

またある日、趙さんは唐突にこう尋ねた。

「あんたは夢を見るかね」

「見ます」

「亡くなったお父さんを見ることあるかね」

「あります」

「夢の中では、お父さんが生きているのか亡くなっているのか、楽しいのか憂うのか、わかっておるかね」

「わかっておりません」

趙さんは笑い、

「あんたは以前に性を養うことを尋ねた。いま夢と覚めているときの違いをあんたと話した。それはつまり性が完全ではないということだ」

私ははっとして趙さんの言葉が優れているのを知った。それからは趙さんが特別な術を持っていないくても、生死を知る者であると知った。

趙さんは両眼ともに翳^{かげ}があって、はっきりとは物が視^みられない。しかし、ときに翳を除くことができ、そのときは瞳^{みどり}は碧色になる。臍から上は骨が亀の甲羅のようになっていて、心臓より下は骨が鋒^{ほこ}のように出っ張っている。あばらの両側が合うところには指が入るくらいの隙間がある。

趙さんはかつて自己の干支をいい、それによると百二十七歳である。家はもと代州にあり、名は吉で、五台山^{ごたいさん}の僧に仕えのだが、それを続けられずに四方の旅に出た。少年の頃は素行が悪く、不法行為をしばしば行った。揚州の蔣君とともに学び、蔣君は趙さんを嫌い、毒薬をその目に塗った。それで翳ができたのだ。しかし、趙さんによると、蔣君はちゃんと理に従わなかったので、趙さんを殺すことができなかったのだ。

このころ、兄の蘇軾^{こう たくきょ}は黄州に謫居していた。趙さんは書を求めて黄州に行き、一度会^えいと、兄が易に詳しいことを喜び、半年ほど滞在した。兄が黄州を離れると、それについて興国^{こうこく}に行き、楊絵^{ようかい}と会い、そこに留まった。趙さんは鳥や獣を好み、いつも何かしら連れていて、興国では騾^{らば}を飼い、騾のせいで怪我をし、それで死んだ。楊絵は棺を用意して葬った。

元祐元年、私と兄は都に帰還^{きょく}し、蜀の地から僧の法震^{ほうしん}が会いに来てこのようにいった。

「愚僧がこのたび長江を下って旅をしておりますときに、雲安に至りますと、旅館である乞食^{うんあん}に会い、それがいつには、『わしは趙という者だが、かつて黄州で蘇公と知り合った。わしのためによろしく言ってくれ』と」

私はそれを聞いて驚き、乞食の容貌を尋ねるとまさに趙さんであった。

ちょうど興国の知事である朱彦博^{しゅげんぱく}の子がその場に居合せたので、興国に帰ってこの話を父に伝え、趙さんの墓を開いてみたところ、棺はからっぽで、ただ一本の杖と、両脛の骨だけがあつた。

有道^{ゆうどう}の者は、そのことを他人が知るのを嫌うと、私は聞いている。それでひどい言葉を投げつけたり汚らしい行為をしたりして自らを晦^{くら}ますのである。しかし、完全に覆い尽くすことはできないので、その徳が時折外に出てしまう。趙さんを見ると、田舎じみて鈍^{くさ}くさ、怒りに満ちて、自らを晦ましているようにほとんど見えない。しかし、その言うことは時に道に合致している。道に関して見るところがなければ、たぶん術も大

したことはないのだから。術が精妙に至っても、また道を尽したことはないのだから。長く生きて術に通じて、古代の真人しんじん〔完全な有道者〕について語ることはできないのだから。それでも道教の書物にはこう書いてある。「尸仮し か げの下の者〔昇仙した中では下級の者〕は脚の骨を一本留める」。とすると、趙さんはそうなのだろうか。

【補足】〔(1) 蘇軾と蘇轍の兄弟を比べると、つい相違する点にばかり目が向いてしまいが、実際は共通するところの方が多い。この『丐者趙生伝』は兄が書いた『方山子伝』〔→作品番号 06-1-015〕と雰囲気が共通し、蘇轍も「異人」好きであったのだから。蘇轍が書いた人物伝は3篇しかなく、その中に巢谷そうこく〔→作品番号 06-4-024 など〕を描いたものもある。『巢谷伝』は15年先に読むことにしよう。(2) 趙生を葬った楊よう絵は作品番号 06-4-047 など何度も見ている人物である〕

■ 【06-4-075】延年術

【解題】これも「異人」について記した文。

【訳文】

私がこれまでに聞いたところでは、世の中の道人どうじんで長生きの術を得たとする者として、趙抱一ちようほういつ、徐登じょとう、張元夢ちようげんぼうなどがいたが、いずれも百歳近くまで生きたものの、ついには死んで普通の人と異なるところはない。

黄州こうに来てから、浮光ふこうに朱元経しゅげんけいという人がいて、他の人と非常に異なり、尊師として仰ぐ人があはなはだ大勢いた。しかし、ついには病気で亡くなった。死んだときは中風の震えがあった。ただし、黄白こうはくの術〔鍊金術〕をよし、また薬も作った。朱元経の作った金は官に納められた。

世の中には果して人とは異なる者がいるのだろうか。いるけれども普通の人は見ることができないのだろうか。それならいらないのと同じではないだろうか。昔の人が記したことの虚実はわからない。現在見るとこ

ると大差がなく、好事家が話に尾ひれをつけたのだろうか。

■ 【06-4-076】 贈楊耆、并引

【解題】 この人もまた「異人」の中に入るのだろうか。不遇に生きる気の毒な人であるけれど、蘇軾は人間としての尊厳を見てとっていて、それでこの詩を作ったのである。作品番号 02-3-024 としてすでに見ているが、改めてここでも読んでおこう。蘇軾が鳳翔府ほうしょうにいたときに会っていた楊耆ようきと再会しての詩である。

【訳文】

引[序文]

西蜀せいしよくの楊耆ようきは、二十年ほど前に会ったとき甚だ貧乏であった。いま会つとやはり貧乏である。昔と何が異なるかといふと、顔がやつれ白髪になったことだけだ。

女性は容貌の美醜にかかわらず富む者は優美であるといふ。男子は賢であろうが不肖であろうが貧乏であると田舎びてしまふといふ。たまたま時代にうまく合つと造作なく当世風ひとの士になる。

かつて扶風ふふうの宿で、夜に外からの歌声を聞いた。はなはだ悲しげであつたので、起きて声の主を呼んで尋ねた。すると、その者は、昔は富んでいたが、いまは貧乏になつてしまつたといふ。私は身につまされ、一緒に酒を飲み、詩を作つた。

今日は冷たい雨が降り続き、かのときのことがまざまざと思ひ出される。楊君の困窮はもとのままだ。そして私も楊君と同じ故郷を離れた旅の身である。よつて、そのときの詩をまたここに書いて楊君に贈る。

小さなこの村にも、

わずかばかりの雨が秋の涼しさを送つてくれたこのときに、

旅の宿では、

夜長に愁いてずっと嘆き続ける人がいる。
眠れぬままに、馬がまくさを食らうのをただ見つめていると、
虫が悲しげに歌い、それにまた虫が応える。
天候はこれからは寒くなり、
実らなかつた穂は畦に横たわるようになるだろう。
歳は暮れようとするが、
機織り機は糸がないためにむなし壁に立てかけたままとなるのだろうか。
君にもう一杯の酒を勧める。
しばしここで眠ろうではないか。
人間界の貧富など、
どうせ大海の波のようにあてどないものなのだ。

■ 【06-4-077】 与楊耆秀才釀錢帖

【**解題**】蘇軾は楊耆に詩を書いて贈っただけでなく、一筆記して、それを持って黄州の知人のもとをまわるよういった。

【訳文】

楊耆秀才は学問を志したが、いまだ成就するに至らず、旅の囊の中は空っぽである。潘原君、郭遵君、公頤君、何聖可君、韓君がそれぞれ五百銭を出してくれたらと思うのだが、どうだろうか。

【**補足**】〔蘇軾は楊耆に奉加帳を持たせて知人のもとを回らせたのである。ここに名の挙がっているのはいずれも黄州の庶民であるところがおもしろい。潘原、郭遵の名はすでに見ているが、公頤は不詳で、何聖可はこの後の作品番号 06-4-094 に登場し、韓君は作品番号 06-5-010 にある韓毅甫であろう〕

■ 【06-4-078】 和蔡景繁海州石室

【解題】蔡承禧〔字は景繁〕が海州にある石室〔自然にできた石の洞窟〕について詠んだ詩を送ってきたのでそれに和した。作品番号 06-4-020 で見たように、蔡承禧が石室の詩を詠んだなら和すと蘇軾は約束をしていた。この詩の冒頭にある「芙蓉仙人」とは石延年〔字は曼卿〕のことだと蘇軾自身が注記している。石延年は一時期海州の副知事を務め、そのときのことがこの詩に詠まれている。石延年は大の酒豪で詩や書に巧みであった。欧陽脩の友人で、欧陽脩は石延年の墓表を書いているので、その一部を参考までに読んでおこう。

【訳文】

欧陽脩『石曼卿墓表』

……石延年は自ら豪気であるとして、書物を読むときも一字一句を吟味するようなことばかりで、昔の人の奇節、偉行、普通でない功績を慕い、世俗をちまちましたものと見下し、我が意を動かすに足りないとした。己はいまの時代に合わないと、ひたすら酒を飲んでまぎらわしていた。劇飲して大酔するのを好み、酔ってほいままに振る舞った。それでますます世と合わなくなった。石延年とともに遊ぶ人はその物事にこだわらないところを愛したのだが、その才能に用いるべきものがあるのを知らなかった。四十八歳で都で亡くなった

……風貌は堂々とし、酒を飲むことを喜んで、自ら豪傑たとして、規律によって正すことができないような振る舞いをした。その普段の生き方を見るなら、出处進退に関わる大きな節度においては一つも理にもとるところはなかった。人と接するときは、賢となく愚となく皆と喜びを尽した。天下の是非、善悪を判断するときに、石延年に意に適う者は幾人もいなかった。その文章は力強く、その意気とぴったりするものだった。

……その友、歐陽脩がその墓に表して曰く、

「ああ、石延年は自らを高く見せかけること^はしても、身を屈めて世間に合わせるようなことはしなかった。自身を重んじた士^しというべきであろう。士の自負するものが大きければ、自身を顧みて重しとするであろう。自身を顧みて重しとするならば、世間に合わせるのはますます難しくなる。大事を行って奇功を立てようとするならば、石延年のように自身を重んじて世間と合い難い士を得なければならぬ。昔から特に優れた人は必ず世から抜き出た志の持ち主であった。己を損ない我が生涯の跡を汚すよりは、世間にその名が聞こえる功績を挙げられずに終わるのを苦む方を選ぶのだ。あるいは老いてまさに死のうとするときに幸いにも巡り合って、世に少々の施しを遺す者もいる。しかし、石延年は、世と合い難く、世に施すこともなく、不幸にしてさらに不幸にも五十歳に至ること^もなかった。これは石延年の運命であったのか。哀しまずにはいられない。

【補足】〔(1) 部分的な引用であっても、^{おうようしゅう} 歐陽脩が優れた文章家であったことがよくわかるであろう。鬱屈した思いを抱いて苦しみ続けた人物をみごとに描写している。

(2) ^{せきえんねん} 石延年は48歳で亡くなった。蘇軾がこの年48歳であることを思うと、以下の詩の味わいがいささか違ってくるであろうか。なお、作品番号 06-3-009 の紅梅の詩で、「桃かと思えば緑の葉がなく、杏かと思えば思えば青い枝がある」と紅梅について詠んだ昔の詩を批判していたが、その詩の作者が実はこの石延年である〕

【訳文】

^ふ芙蓉仙人はかつて^{かい}海州に遊び、

^{あお}蒼い藤が^{みどり}翠の岩壁にまわりついて^{みち}路すらもない山を見て、

戯れに、桃の種を黄色い泥で包み、岩の間に雨のように撒き散らした。

それによって、何も^{さんしゅう}ない山に錦繡をまかせ、

天上から無数の花が海を照らす光景を作ろうとしたのだ。

今日では、桃の花が開き、
 その間に、車を容れられるくらいせきしつの大きさの石室がある。
 いずれの年にか、雷がここから仙人の納まるぎよくかん玉棺を飛び出させたのか。
 抜け出た跡は、仙界の靈嚴な堂宇を覗き見る趣がある。
 かつて芙蓉仙人はこの山で酔い続けること千日、
 いまに至るも石の間には飲み残しの酒が染みついている。
 芙蓉仙人は去って五十年、
 花は古い、石室はからっぽ、
 手ずから植えた松が空を覆い、蒼い髯ひげを垂らしている。
 ここに蔡君[蔡承禧]さい さいしゅうきが芙蓉仙人のために酒を注ぎ、
 伴い来た女性こきんに胡琴を奏でさせると、
 氷のように澄んだ音が巖の間から響きわたり、
 たちまち海の波が呼応し、松が舞い出した。
 このような遊びは芙蓉仙人以来のこと、
 さすが酒でこ伍する者なき蔡君である。
 蔡君は断岸より臨んで朝日を呼び出し、
 紅い波と碧の絶壁が互いに呑んだり吐いたりするありさまを現出させた。
 ここに蔡君は己の内にことば語を尋ね、
 杖で銅鼓どうこを叩きつつ声の限りを尽して詩を朗誦した。
 そのときの長篇の詩を書いて、蔡君は遠く私のところに寄せた。
 一唱三嘆し、心がきりりとひきまり、
 折からちやうこう長江の風が我が顔に雨の滴しずくを飛ばしたのは、
 あたかも海の波をかぶらふつつ胡琴の音を聴くかのようにある。

私は老病の身で門を出ることもなく、
海州の山の石室を尋ねることなどはできない。
ここでは桃の花は門の外で自ずと開いて自ずと落ち、
部屋の隅に置いた酒の甕は塵にまみれたままだ。
まわりに柳を植えた小部屋で、心を洗って仏道に帰する日々、
かつての歳月は夢の中のことと一笑に付し、
今も昔も一瞬のことと思うのである。
貴君に頼むのは、
どうかこの詩を石に刻むようなことはしないでくれたまえ。

海が山に、山が海に変わるのも、朝から日暮れまでの間のことなのだから。

【補足】 [この詩に添えて蔡承禧^{さいしゅう き}に送った手紙が残っていて、その後半に、冬至から門を閉ざして来客を断って齋居して奥深い味わいを得ている旨を記している。3年前に冬至後の49日間を天慶観^{てんけいかん}に籠っていたが [→作品番号 06-1-103 など]、この年も、あるいは毎年、同じようなことを行っていたのだろうか]

■ 【06-4-079】 書四戒

【解題】 このころに、蘇軾は我が身を戒めるスローガンを4箇条32文字にまとめて、雪堂^{せつどう}に掲げた。

【訳文】

(1) 出輿入輦^{しゅつよ にのうれん けつ い し き}、蹶痿之機

「輿^{こし}に乗って出て、輦^{かこ}に乗って帰る」。そのココロは、「つまずいたり、萎えたり、足を駄目にしてくれるでしよ

う」

どうぼうせいきゆう かんねつしはい
 (2)洞房清宮、寒熱之媒

「家が大きく、部屋が広い」。そのココロは、「風邪をひかせてくれるでしょう」

こうしがび ぼつせいしふ
 (3)皓齒蛾眉、伐性之斧

「歯が白くて眉を長く引く美女」。そのココロは、「精力を伐り取る斧となるでしょう」

かんせいひのう ふちようしやく
 (4)甘脆肥濃、腐腸之藥

「おいしい肉に濃い酒」。そのココロは、「腸を腐らせる薬でしょう」

この三十二字を私は雪堂の門にも窓にも座席にも衣服にも盆にも書き、立っても座ってもこれを見て、

寝食これを念うようにしている。

げんほう せつどう
 元豊六年十一月、雪堂で書く。

■【06-4-080】徐君猷挽詞

【解題】こう黄州知事であった徐大受じょだいじゆ あざな くんゆう [字は君猷]は夏に新たな任地へとちようこう長江を下って行ったのだが [→作品番号 06-4-045]、不幸にも旅の途中で亡くなり、棺を乗せた船が冬に黄州に戻ってきた。蘇軾はその船を迎えてこの挽歌を作った。

【訳文】

貴君は一艘の船に乗って南に旅し、

ついに帰らなかった。

我等の悲しみは、ちようこう せきへき長江と赤壁によって照らし出されている。

見れば、長江を往還する人々は貴君のために涙を流してはいない。

しかし、貴君がこう黄州を治めた功績は欺けはしない。

思い出すのは、

雪の後で一人、ふらりときて柳を植えたこと、

竹の間を往き来して茶を飲んだこと……。

貴君とともに酒を囲んだ友はみな散り散りとなり、

昔を悲しみ、新たに愁うのはただ私だけなのか。

【補足】〔徐知事の棺が黄州に戻ってきたのは、家族がここに残っていたからである〕

■ 【06-4-081】 祭徐君猷文

【解題】徐大受〔字は君猷〕の靈に蘇軾はこの文を捧げた。

【訳文】

もとの黄州知事の徐公の靈に捧げる。

公は初めから贅沢を嫌い、ひたすら勉学に努め、晩年には州知事となって、二つの地で高い評判を得た。公の家からはかねてから名臣が出て、誰もが法を守る官吏であった。襄陽の伝統を受け継ぎ、晋の建安のころの風流を体現する人であった。公の優れた議論を聞こうと、満座の人が耳を傾け、人知れず数多くの徳を施した。

私は愚かさを窮め、自ら放逐される身となり、家族からも竊かに笑われ、ほとんどの親友からは交わりを絶たれ、わずか十杯の水を得るだけでも人々と争うようなありさまとなり、それでも五杯も得られないのだった。波の荒れる川の中にいるような私にとって、そこに浮かぶ一つの瓢、それが公の支えてあった。その徳にまた報いることがないうちに、すでに永遠の別れの哀しみが興ったのである。

いまははっきりと見えるかつてのお姿にこの酒を供える。公のいなくなったこの間にも、我らの思いは変わらぬと誓い、棺を撫して慟哭する。

嗚呼、哀しかな。

【補足】〔襄陽や建安と徐大受との関連性はよくわからないが、南朝時代の風流人の趣があるということなのだろう〕

■ 【06-4082】 与徐得之

【解題】徐大受^{じょだいじゅ}の突然^{こつぜん}の死に、黄州^{こうしゅう}に残っていた家族は途方に暮れてしまったようだ。弟の徐大正^{じょだいせい} [字は得之^{あざな とくし}] が万事処置していかねばならなくなったのだが、どうやら世事に慣れていなかったようで、蘇軾^{そしつ}が何かと手を差し延べることになった。これは徐大正に向けて書いた手紙で、これからの心構えについて記している。徐大受の故郷は遙か遠く^{びんちゆう}の閩中で、そこに帰って葬儀を行うだけでも一大事で、徐大正はしばらく黄州に留まって、棺を携えての長旅に出る支度をする。先に許安世^{きょあんせい}の突然の死で、蘇軾は何か支援できないか模索していたばかりで [→作品番号 06-4066]、また一つより深く関わらねばならない案件が出てきたのである。

【訳文】

私が黄州^{こうしゅう}に謫^{たく}されたとき、あたりを見回して親しい人は一人もいませんでした。兄上にお会いすると、まるで身内の者であるかのように遇していただきました。その意^{こころ}は忘れることはありません。

残念ながら、謫所^{たくしょ}に靡^{つな}がれているために、千里の旅をして葬儀に加わることはできません。兄上のお子様方はまだ年少で、ほとんど何もできません。貴君が兄弟の愛をもって、何事もよろしく処置されるのでありましょう。もしもわずかでも不十分なところがありましたなら、その責めは兄上のお子様方ではなく、貴君が引き受けられることになるでありましょう。そうしたことを深く留意されて、人としての情を惜しみませんように。

兄上のお子様方はいずれも俊才というべきで、学問を失うことのないよう導かれますように。舅^{ちやうちゆう}の張仲謨君^{ぼ じょだいじゅ} [徐大受の妻の兄^{みやび}] の雅なことはかねてからお聞きしています。まだ面識はなく、お手紙を差し上げることはいたしませんか、今後の御懇意を願っております。御葬儀を終えられましたなら、兄上のお子様方を貴君が迎え入れて、学問を授けましたならば、兄上がまた蘇るようなことになるでありましょう。…

...

■ 【06-4-083】 記張公規論去欲

【解題】これは新しい黄州知事の楊案〔字は君素〕と、同じく新しい副知事の張公規らとの会話の記録。

【訳文】

昨日、知事の楊案君と副知事の張公規君が迎えを寄越したので、出かけて安国寺に遊んだ。座中、気を整え生を養うことについて議論になった。

私が、

「どのお考えも十分だとは思えません。難しいのは欲を去ることでしょう」

というと、張副知事が、

「漢の時代の英雄である蘇武は、異国の地で捕虜となったときに、雪を噛み、毛氈を食らい、背中を踏まれて血を流してもへこたれた言葉は一語も漏らしませんでした。生死の境を超えたというべきでしょう。しかし、異国の娘に子を孕ませるということは避けられませんでした。異郷の地で困苦のなかりにあつてさえそうなのですから、飾り立てた部屋の内にあつてはなおさらです。このことから欲望を消すのは難しいとわかります」

集まっていた人々は皆大いに笑った。私はこの言葉の理を愛し、ここに記しておく。

【補足】〔王朝雲が出産したばかりであつたから [→作品番号 06-4-057]、蘇軾としては笑うよりほかなかつたのだろう〕

■ 【06-4-084】 与滕達道

【解題】滕元発〔滕甫、字は達道〕 [→作品番号 06-4-069] に宛てた手紙。滕元発は

朝廷に呼ばれ、安州知事を辞めて上京することになった。安州は黄州の西隣なので、上京する際に会えるチャンスがあるのではないかと蘇軾は考えた。そうしたことを記した一連の手紙を見ておこう。

【訳文】

(1) 州知事の任を解かれて朝廷に赴かれるとのこと、きっと岐亭のあたりをお通りになるでしょうから、お手紙であらかじめお知らせいたなければ、すばやく走って行くのも難しくはありませんでしょう。道を枉げてこちらにまで来られるには及びませんので、よく御検討ください。寒い折から、御自愛されますように。

【補足】[岐亭は文字通り交通の分岐点であったから [→作品番号 06-1-015]、滕元発はそこを通るであろうと考えたのである]

(2) 私が黄陂に至ったときに、貴君は五日に出発されて、信陽の路で都に向かわれたと聞きました。日を数えると、間に合わないどころか、黄州に帰ることにしました。雨と雪が交互に降っています。僧房の窓辺で、熱い炭の塊をいじりつつ、『漢書』の「戻太子伝の賛」を読んでいます。……そこにちょうど貴君からの手紙が届き、思いがかりと晴れました。やや晴れてきて暖かくなってきましたので、陽羅江に舟を放って黄州に帰ります。

【補足】[黄陂は岐亭よりも西側で、安州との境に近いところである。滕元発は東に出ずに真直ぐ信陽へと北上したので、二人は会えなかったのである。ここにある「五日」はたぶん12月であろう]

(3) お使いの方がまた来られて、すでに信陽を通過したと承りました。風雨の中を進んで、従う方々にも苦労があったことでしょう。いまはどのようにしておられますか。州の境でお会いしようとの心づもりで、きっと黄陂の通られると考えたのですが、私の計算が当たらず、お会いできなかったのがまことに残念で

す。……

(4)お会いして一言だけ申し上げたかったことがあります。我らは新法の初めのときに、偏った見方に立って、白か黒かをはっきりさせようとした。これは国を憂いて、ふつ、ふつと起こる思いから出たものであったとはいえ、言うところは誤謬が多く、わずかばかりの理ことわりがあっただけでした。いま聖徳は日に日に新たに成り、衆は大成に化しており、先に我らが執心していたところを見直しますと、よろしくなかったとますます思えてくるのであります。志を変えて、易やすきについて昇進を求めるようなことは論外ですが、いつまでも古い議論を蒸しかえずのは、憂うれいいが深くなるだけです。……

【補足】[この手紙は微妙な言い回しで書かれている。ここでは含意がわかりやすいように訳したので、蘇軾の心遣いのきめ細かさと用心深さをほんのわずかしかなら伝えられていない。都に行ったならば慎重に振舞うようにというアドバイスを、他の人に見られてもよいような自省の念に満ちた書き方をしているのである。蘇軾が滕元発とうげんはつに会おうと懸命に努めたのは、直接でなければ伝えるのが難しいと思っていたからなのだろう。ただ、二人が会うこと自体が嫌疑を招きかねるので、もしかすると滕元発は敢えて道を違えて上京したのかもしれない。滕元発が都でどのように迎えられたのか、後で見ることになる]

■ 【06-4-085】 橄欖

【解題】かんらん橄欖について詠んだ詩。橄欖は熱帯系の植物で、オリーブに似た実をつける。こう黄州に橄欖の木があって、蘇軾は珍しく感じたのだろう。

【訳文】

紅い塩ぼろぼろを木に塗ると、紛紛と青い実が落ちてくる。

そのももとの味はというと、

びりびり
森森と刺すような苦さがある。

じっと待っていると、

わずかな甘さが齒や頬に伝わってくるのだが、

がいみつ
崖蜜が十分に甘いときであるから、

初めからそれに負けているのである。

【補足】がいみつ [崖蜜は崖に生えて甘い実をつける植物であるようだ]

■ 【06-4-086】 南柯子

【解題】こう 黄州の十二月八日に張ちようかいみん 懐民 [→作品番号 06-4-067] の小閣で飲んだ、という添え書きのある詞。小閣は快哉亭であろうか。

【訳文】

衛えい 霍かく 元勳後、[衛氏、霍氏なら元勳の後]

韋い 平へい 外族賢。[韋氏、平氏なら外族の賢人でしょう]

吹笙ふえ 只合在緱山。[笙を吹くならかの仙山にいるべきでしょう]

閑たふ 駕彩鸞たふ 歸去、[仙界から謫された女性を妻として]

趁新年。[新たな年を迎えるのです]

烘あたたか 暖あたたか 烧あたたか 香閣、[手を火にあぶって香を焚くと]

輕あたたか 寒あたたか 浴あたたか 仏天。[仏天のもと寒さも軽やかに感じられます]

他年一醉画堂前、[いつか美しい部屋で酔うことがあるとしても]

莫忘故人憔悴、[忘れることはないでしょう、友と憔悴して]

老江辺。^{ちやうこう}〔長江のほとりで老いの日を過ごしたことを〕

【補足】〔それぞれの句の意味はよくわからないが、全体として何が言いたいのかと推測してこの訳文を作った。三割程度は当たっているだろう〕

■ 【06-4-087】 賭書字

【解題】^{ちやうかいみん}張懷民が^{ちやうしょうげん}賭け碁をしたということを書いた短文。勝負の相手をした張昌言が何者であるのかはわからない。

【訳文】

^{ちやうかいみん}張懷民と^{ちやうしょうげん}張昌言が碁を打っている。私が字を記した一枚の紙を賭けていて、勝った方がそれを得て、負けた方は五百銭を出して、私に御飯をおごるのである。土地の神々よ、この約束を守らなかった者は神々の足元に伏して、二度と起き上がれないであろう。

【補足】〔ずっと後に、蘇軾は、碁はわからないながらも息子が碁を打つのを楽しく眺めていると書いている。ここでも、二人の勝負を脇から見物していたのだろう〕

■ 【06-4-088】 生日、王郎以詩見慶、次其韻、並寄茶二十一片

【解題】12月19日は^{おうてき}蘇軾の誕生日。それに合わせて、弟の娘の婿である王適^{あざな}〔字は^{しりゅう}子立〕〔→作品番号06-3-047など〕が祝いの詩を送ってきたので次韻した。

【訳文】

^{せつよう}『折楊』の新曲〔耳に馴染む俗な曲の例〕には万人が集まる。

^{ういろう}『于焉于』の曲〔独創的な高尚な曲の例〕に和すのは貴君だけだ。

^{ぎよく}美しい玉は奥深くまわられていても必ずや売れる。

手当たり次第に投げ売りするようなものとは全く違うのだ。

貴君はしばし私に従って旅をし、

かつて江南こうなんの町で芙蓉に囲まれた。

いまは我が弟に従って儒学に励み、

貴君の弟とともにいずれ天下の士となるであろう。

松柏しょうはくも谷を暗く塞ぐ霧を嫌わずにいるならば、

ついには大建築を支える梁はりとなるまでに成長する。

貴君の議論かん論は鉋から出る切り屑のように尽きることがなく、

貴君の詩は連なる珠たまに似て妙味がある。

我が誕生日に、遙か遠くより、

老いてもなお枯れぬようにと長寿を祝ってくれたことに感じ、

何か返そうとするのだが、

君の詩に及ぶものは作れないので、

建溪けんけいの茶をいささか切り分けて贈ることにした。

【補足】 [(1) 王適おうてきは科挙に落ちているので、この詩の大半は王適を励ますものとなっている。(2) 湖州で王適とともに無数の蓮を愛でたことは作品番号 05-5-077 で見ている]

■ 【06-4-089】 喜王定国北帰第五橋

【解題】 王翬おうきゆう あぎた ていこく [字は定国] [→作品番号 06-4-073] はこの年の終わりから翌年の初めに都に到着した。その報せを聞いての詩。

【訳文】

はくろ
白露の季節、

折からの秋の風が南方の悪い^き気を洗い流してくれ、

貴君は帰還の旅に上った。

夢は巡り還り、

再び都の人々と会えば誰もが^{せいぜん}凄然とした思いになる。

訪れる者もなくさびれてしまっていた貴君の家も、今日からは見違えるようになり、

向こうでは杖をついていた貴君も、これからは若返るばかりだ。

世の辛苦を経験した貴君は熱さに触れる前に手を縮めることを覚え、

こうして帰ってきたものの、貴君が取じるのは、

まだ皇帝の恩に報いられずにいること。

都の^{だいごきょう}第五橋の水に照らされるのは、

唐代の^{とうだい}老いた^{ていけん}鄭虔のような人ではないのだ。

【補足】〔(1) ^{だいごきょう}第五橋は唐の都の^{ちやうあん}長安にあったことがよく知られている。同名もしくはそれと比せられる橋が^{おうきやう}王鞏の屋敷の近くにあったのだろう。(2) ^{ていけん}鄭虔は^{げんそう}玄宗皇帝のもとで文人として評判が高かったが、^{あんろくざん}安祿山の乱に際して賊軍の捕虜となって職を授けられ、そのために乱が平定された後は罪人とされ、失意のまま亡くなった〕

■【06-4-090】率子廉伝

【解題】^{おうきやう}王鞏に関連して^{そつしれん}率子廉という「異人」の伝記を見ておこう。

【訳文】

^{そつしれん}率子廉は^{こうざん}衡山の農夫である。愚か者の^{ぼくねんじん}朴念仁で、不遜な振る舞いをするので、人々は^{そつぎやう}「率牛」と呼んでいた。

晩年なんがくかんは南嶽なんがくかん観くわんに属する道士どうしとなった。南嶽なんがくかん観くわんの西南七里しきよかくに紫虚閣しんがあり、晋しんの時代きに魏夫人ぎが仙人になる修行をしたところだという。南嶽なんがくかん観くわんの道士たちは紫虚閣しんが荒れて寂しい場所であるので、敢えてそこに住もうとする者はいなかった。しかし、率子廉しつしけんだけは喜んで行き、ただ黙ってそこに居て、何をしているのかを見に行く者はいなかった。ひどく酒が好きで、しばしば山の林で酔い伏し、雨風が激しくなっても知らずにいて、虎や狼がその前を通っても害することはなかった。

もとの礼部侍郎れいぶじろろうの王祐おうごが都を出されて長沙ちやうさの知事になったときに、皇帝の詔を奉じて南嶽なんがくかん観くわんで禱り、紫虚閣を訪れた。そのとき率子廉はちょうど酔っていて起つことができなかった。王祐をじろっと見て、「田舎道士は酒を愛するのに、いつもいつもそれが得られるわけではありません。得られるとすぐに酔っ払ってしまいます。殿様、どうか大目に見てください」

といった。王祐は率子廉が異い〔常人ではない〕であると察し、車に載せて連れ帰った。率子廉は王祐のもとにひと月余りいたが、ぼんやりとしてもを言わないので、また山に送り返した。そのときに王祐は率子廉に、

「先生は光を隠して内側を照らしておられるのでしょうか。私はそれを測り知ることができませんでした。詩をお贈りたいと思います」

といった。しかし、王祐はそのことを忘れて、詩を作らなかった。

ある日、王祐が昼寝をしていると、夢の中に率子廉がきて詩を求めた。そこで二首の絶句を作った。一方で、率子廉は二首の絶句を板に書き、王祐の作だと称して紫虚閣の上に掲げた。道士たちがそれ見て驚き、「率牛はこれをどこから得たのだろうか」と言い合った。

太平興国五年六月十七日、率子廉は人を使わして道観の人々にいった。

「わしいま行くところだ。紫虚閣に人がいないわけにはいかない。すぐに後を継ぐ者を派遣してくれ」。

道士たちは王祐の詩を得てからは率子廉をやや異とするようになっていたので、このときは驚き、

「いまこの暑さのなか、率牛はいったどこに行くのだろうか」

といって、急いで見に行くと、率子廉はすでに死んでいた。皆は驚き、初めて大いにこれを異とした。

「率牛は死ぬ日を知っていたのだ」

といって、南嶽の下に葬った。

それからいくばく経たないうちに、南台寺なんたいじの僧しゅんの守澄しゅちやうが都から帰ってきた。守澄は都を出たときに、南なん薰門くんもんの外で率子廉そくしれんに会った。雰囲気ふんいきが実に清らかで、守澄は率子廉に、

「どうして山から出て来たのか」

と尋ねた。率子廉は笑って、

「閑なので遊びにきただけだ」

といい、山の人々への手紙を託した。守澄は帰ってから率子廉が死んでいたことを知り、その手紙を改めて確かめると、それは率子廉が死んだ日に受け取ったものであった。率子廉の墓を開いて見ると、杖と履き物だけがあつた。

東坡居士とうはこくしが思うに、

「士ひと【ひとかどの人間】は何かしら持っているものがあつて、それから小さな技であつても、軽々しくは外に出さないものだ。まして至人しじん【最高の脱俗者】であるならなおさらだ。至人はもとよりなれるようなものではなく、至人しを識しるののは難しい。王祐おうごが道を得た人ではなかつたならば、率牛が異であるのを知ることはできなかつただろう」。

東坡居士はかつて『三槐堂の銘さんかいどう めい』を作つた。そのときに王祐はただ単に子孫に余慶を遺しただけの人ではなく、ほとんど道を得た者であろうかと考えた。率子廉のことを知るに及んで、ますますそれは確かであると信じるようになった。

王祐の詩はその全篇を見ることはできなかつたが、このことを書いてその曾孫そうそんの王鞏おうきやうに送り、王祐の詩を求めてその家集を補うにけし、あるいは石に刻んで紫虚閣の上に置いてもらいたいと思う。

【補足】王鞏おうきやうの依頼いらいで『三槐堂の銘さんかいどう めい』を書いたことは作品番号 05-5-004 で見た。そこには王鞏の曾祖父そうこの王祐おうごが子孫の繁栄を願つて庭に三本の槐えんじゆを植えたことが書かれていた。この『率子廉伝』は王祐のエピソードを伝える。蘇軾そつ しれんでんはこれを湖州知事こで

あったときに書いたとする説もある]

■ 【06-4-091】 読仲閔詩卷因成長句

【解題】 黄州で付き合う人々は広範囲に及び、仲閔 [恐らく字で、姓は伝わらない] という詩を得意とする実業家もいた。その詩集を読んでの感想。

【訳文】

麦の秋[麦の収穫期]に、

西の風[秋の風]が麦畑に吹き寄せるのを見るのは嬉しいものだ。

これによって老いた農夫は年々の苦勞を忘れるのだ。

手足を泥まみれにして、

珠のような麦の粒を人よりも倍収穫しようと、

二年越して努めてきた。

貴君はいまや壮年で仕事に励んでよく稼いでいる。

私はといえば、田畑を耕すのに苦勞している。

竹に囲まれた雪堂を照らす月だけは、

愁いに沈む私を憐れんで、清らかな光を注いでくれる。

【補足】 [恐らく同じ時期であったのだろう、仲閔は、収穫を終えたばかりの新しい麦で団子を作って蘇軾に贈っている。蘇軾は返礼の詩を作り、その中で、「しこたま麦を買い込んだと聞くが、それは飢饉がきて値が上がるのを待ってのことか」というようなことを冗談半分、皮肉半分でいっている]

■ 【06-4-092】 与錢濟明

【**解題**】^{こう}黄州にいる間に^{せんせいゆう}銭世雄 [^{あざな}字は^{せいみん}済明] [→作品番号 05-5-049] に送った手紙が残っているの、ここでその一部を読んでおこう。

【訳文】

(1)……私は何もかも今日も昨日のように過ごし、弟もまた安らかに暮らしています。息子は手蔓を求めてまだ帰ってきていません。昨日は^{わいなんてんうんし}淮南転運使が来られ、今日は新しい州知事が到着しました。間もなく元の州知事が去るでしょう。世に棄てられた暇な私もまた何かとせわしないものです。……

【**補足**】 [^{こう}これは黄州知事が交替したころに書いた手紙。息子が土地を得るためにあちこちまわっていることがここにも書かれている]

(2)……こちらにこられた役人^{い きょうきょう}に『遺教経』の跋文を託しましたので、きっと届いているでありましょう。呉江^{こう そ} [蘇州]でのお仕事の御様子はいかがでしょう。お仲間は佳い方々^よでしょう。垂虹亭^{すいこうてい}は復旧したと聞きましたかどうなのでしょう。旅の寓居でまた歳が終わろうとしています。長江^{ちやうこう}のほとりに長く居て、楽しさがますます増してきています。たまたま小さな田もなく、漂遊するままで、暮らしの根を下ろすところがないのが残念であります。息子は来年の二月に^{とくこう}徳興に赴くでありましょう。家族の人数が減れば、一息つけるでありましょうか。ほかに憂慮すべきことはありません、いつお会いできるかわかりませんが、万万御自愛されますように。

【**補足**】 [(1) ^{せんせいゆう}銭世雄の父が書いた『遺教経』に添えた跋文について触れていて、その訳は作品番号 05-5-049 ですで見ている。(2) ^{い きょうきょう}銭世雄は湖州から蘇州に任地が変わったのだろう。(3) ^{すいこうてい}垂虹亭が洪水で壊れてしまったことは作品番号 06-2-054 で見たが、修復されたのだろう。(4) 来年の2月に息子が^{とくこう}徳興に行くところのは、蘇邁が徳興^{じょう}県の尉として初めて官の仕事に就くことが決まったからである。尉というのは地域の治安に関わる職で、警察部長レベルであるという。蘇邁は、高官の子弟は科挙に合

格していなくても官職に就けるといふ特典によってこの職を得たのだが、徳興県はかなり田舎の町で、制科に合格した蘇軾がいきなり重要都市の幹部になったのとはかなり異なっている]

■【06-4-093】書贈胡道師

【解題】異人好みの蘇軾のもとには入れ替わり立ち代わり個性的な人物が訪れたようだ。これは胡洞微こどうびという道士どうしについて記した文章。

【訳文】

龐安時ほうあんじ君は医者で、利によって心が動かされぬ。しかし、書や画には心を奪われ、我を忘れてしまふほどだ。九江の胡道士こどうしは医術にすこぶる通じ、私のために薬を用いてくれたのだが、報酬を受け取らないので、数枚の草書を作って渡すことにした。それで、胡道士にこのように告げる。

「これは龐安時君の故事である。廃すべきではない」

參寥師さんりょうしは病になったので、胡道士に治療を求めた。參寥師には銭がなく、しかも書や画が得意ではなかったため、あわてて私に助けて求めてきた。そこで私は戯れに、

「昔の名立たる禅僧だって、戯れの語を連ねた詩を作らなかったわけではあるまいに」

と、いってやった。

龐安時君や胡道士と会うと、いつも陸に上がった魚が水を得たような思いがする。

【補足】〔(1) 医者ほうあんじの龐安時については作品番号06-4-065などで見ている。(2) 胡洞微こどうびがいつごろ黄州こうにきたのかははっきりとはわかっていないが、蘇軾はこの年の春から夏にかけて病気がちであったので、胡洞微の薬で回復したのかもしれない。參寥さんりょうが黄州こうにきていたことは〔→作品番号06-4-014〕、この文章からもわかる〕

■ 【06-4-094】 書贈何聖可

【解題】何聖可^{か せい か}に贈った短文。何聖可^{こう こうこう}は黄州黄岡県の人であること以外は不明だが、後にまた登場する。

【訳文】

一年がここに暮れようとしている。

雨と風は寂しい。竹作りの部屋の紙の窓辺で、燈火が青くまたたいている。このようなときに私はいつも少しばかり^{よ おもむき}の佳^よい趣^{おもしろ}を覚える。

その半分^{こうこう}を黄岡^{か せい か}の何聖可^{か せい か}に寄せて与えようと思う。

一緒に享受するには佳^よい客^{きやく}を選ばなければならない。もしもそいつ^{そいつ}が人でないならば、すぐに人を使わして誘^よいを取り消さなければならない。

【補足】[蘇軾^{か せい か}に見込まれた何聖可^{か せい か}はきっと急いでやってきたのだろう]

■ 【06-4-095】 夢中作祭春牛文

【解題】立春に土で作った牛の像を道に並べて豊凶を占う行事があることは作品番号05-1-084で見ている。その土牛^{どぎゅう}は用が済めば壊されて棄てられてしまう。天帝は土牛のそうした運命を憐れみ、土牛を祭る文を書くよう蘇軾^{か せい か}に依頼した、という話。

【訳文】

^{げんぼう}元豊六年十二月二十七日、天がまさに明けようとするころ、夢に見たのは――

数人の役人が一幅の紙を持ってやってきた。その上に題して『春牛^{しゅんぎゅう}を祭る文』とあり、それを書いてははいどの依頼であった。

私は筆を取ってさらさらと書いた。

「春はすでに至り、もろもろの草が伸び出した。ここに土牛どぎゅうを持ち出して、農事に励めと戒める。土牛は派手な色の衣をまとっているが、もとは泥から出たものだ。土牛が成るのと毀こわされるのはほんの短時間のこと。喜んだり怒ったりする間もないではないか」

役人は微かに笑っていった。

「最後のところは、牛は怒っているということなのだろうか」

傍らのもう一人がいった。

「それでもよいではないか。もう目覚めてしまふぞ」

【補足】[天帝の遣いの者は、蘇軾の書いた祭文に若干の不満があったものの、蘇軾が目覚めてしまふのを恐れてそのまま持ち帰ったのだらう]

第6章 赤壁の賦——黄州

[第6章その五]

げんぽう 元豊7年 [1084年]、そしよく 蘇軾49歳。

■【06-5-001】和秦太虚梅花

【解説】黄州で4回目の正月を迎え、黄州暮らしは足掛け5年となった。いつものように1月20日に潘、郭、古の諸氏と郊外に出て梅を見たのかどうか、伝わる詩がないのでわからない。これは秦観 [字は太虚] [→作品番号 06-1-103] から送られてきた梅の詩に和したもの。

【訳文】

宋代に入ってから、梅を詠んでの絶唱といえよ、

西湖の孤山に棲み、骨までも枯れているといわれた林逋の詩。

貴君の詩はそれをも圧倒しようか。

東坡先生の心はすでに火の消えた灰となっていたはずなのに、

貴君の詩の愛すべきによって、

花に悩まされ、あれやこれやと乱れ初め、

黄昏時を待って馬にまたかることとなった。

残りの雪は消えるのが遅く、月の出るのは早く、

川べりの千本の梅の樹が春の暗がりのなかにある。

竹の向こうに一枝だけ斜めに見えるのはさらに好い。

西湖の孤山といえよ、かつて酔って眠ったところ、

山の梅は、美女の裾スカートに点々と散りかかったのを払わずにいるかのようであった。

あれから万里の彼方に放逐された私のもとにも春はきてくれたけれど、

孤山の梅は人を見送ること十年、その繰り返しの中に老いたであろうか。

去年の梅の花が開いたころは私は病気がちで、

今年は花と向かい合うことができたものの花は早々に去ってしまう。

雨と風が春を巻き取って帰ってしまうのか……。

梅の香りもそっくり拾い集めて天へと持ち去って行く……。

【補足】〔(1) 林逋りんぼは蘇軾より 70 年前に生まれた人で、孤山こざんに隱棲し、清らかな詩を詠んだ。(2) 1年前のこの時期は眼病を患うなど蘇軾は何かと不調であった〕

■【06-5-002】再和潜師

【解題】前年から黄州こうに滞在していた參寥さんりょう [道潜どうせん] [→作品番号 06-4-093 など] が秦しん觀かんの梅の詩に和したので、蘇軾がさらにそれに和した。この詩も前の詩と同様に、杭州こうの寒梅を念頭に置いて詠んでいる。

【訳文】

造化たくみの工[天帝]は、

枯れたもろもろを蘇らせてやろうとまだ決めていないうちに、

まずは寒梅に向かって合図を送る。

江南こうなんの地には雪がなく、

春のうちから早くも熱の毒気が生じてしまうので、

氷のような梅の花で熱の悩ましさを除こうとするのだろうか。

風が清らかで月が落ちて人の姿のないときに、

早朝の鐘とともに装いを整えて、

梅の花は開く。

そこに二羽の白鷺が飛びきて、

羽と花が清らかな好きを競い合う。

ごさんどうじん さんりょう
呉山道人[參寥]の心は水に似て静寂で、

眼には掃うべき塵もない。

似ても似つかぬ多情なる身の私に妙語をもって寄せるのは、

私がいかりばかりの縦横の気を具えていようと試めすのであろう。

どうば こじ しゅうけ
東坡居士の習気[俗気]は除いても尽きることがなく、

凝りもせずに長々と詩を作ったり乱れた草書を書いたりしている。

長い梅の枝を揺り動かし、落ちてくる花びらを食べてもみようか。

飢えの堪えがたさに天に向かって叫ぶような真似はしないですむように。

【補足】さんりょう [參寥と唱和する詩は概ね仏説を踏まえて難解であることが多く、この訳詩はおよその大意を汲んで作った「ずっぱ訳」である]

■ 【06-5-003】 代滕甫弁謗乞郡状

【解題】 昨年とうげんはつの終わりごろに都に呼ばれた滕元発 [または滕甫、字は達道] [→作品番号 06-4-084] は、たちまち強烈な逆風にさらされた。滕元発を嫌う人々が画策して、たまたま滕元発の親類に罪人が出たことと結び付けて、遠くいん筠州に流してしまおうとした [筠州には蘇轍がいる]。1月6日にその辞令が出ると、滕元発はすぐには従わずに、自分は無罪であるとの弁明書を朝廷に差し出した。実はそれは滕元発の草稿をもとに蘇軾が書いたものであった。人のために代筆した文章でありながら、それは、散文の名手である唐宋八大家の名品を集めた『唐宋八家文読本』に納められている。皇

帝に提出する弁明の手本として読まれたのだらう。皇帝に判断の変更を乞うのであるから、非礼にならぬよう細心の注意を払わなければならない。長々とした前置きがあるのはそのためである。

【訳文】

臣わたし [滕元発]が聞いておりますには、賢人であろうが愚人であろうが、人情として、天を恐れ父の厳さを憚るものであると。しかし、痛み苦しむときは父を呼び、窮まり差し迫ったときには天に叫びます。身の内より情が発して、言葉を選ぶことなく呼んだり叫んだりしてしまうのであって、憚り畏れる心がなくなったわけではありません。

いま臣わたしが患いますのは痛み苦しむのにとどまらず、憂うのは窮まり差し迫るよりもはなはたしいものがあります。君父くん ぶに呼び叫なんびとばずして何人のところに走って赴せいじいたらよろしいのでしょうか。伏して聖慈を望み、少れんさつしく憐察を加えていただきたく思ふのであります。

臣わたしはもとより學術がなく、また才能ありません。ただ忠義の心があることだけは生れてより自負するところのものであります。

昔しゆんじゆう、(春秋時代の)季孫きそんはこのようにいました。

「君主に礼ある者を見たなら、孝子が父母を養うようにその者に仕えよ。君主に礼のない者を見たなら、鷹や鷓が雀を追うようにその者を誅殺せよ」

臣わたしは不肖ではありますが、この言葉をきちんと踏まえるようにしてまいりました。道みち [正しく普遍的な道德]をひたすらに信じて真直ぐに進み、他の人々も己のようになっていると考えておりました。すでに聖主せいしゅに深く知っていたことを蒙りましてからは、他の人々との交わりを結ぶようなことは考えませんでした。そのためか、そこらに愚かしい考えがうごめいて、ついには仇怨きゆうおんを積むことになってしまいました。ひとたびお傍そばから離れ去ってすでに十二年、(私を誹謗する)言辞が、水が潤浸すようにあまねく行き渡ったのでした。

臣わたしがひそかに国に反する者と一党となり、罪人を見逃しているという者さえ出るありさまとなりました。もし

もその通りであるのならば、死刑となってもその罪を塞ぐことはできません。

伏して心の内で思いますに、漢の宣帝は英主でありましたが、ほんの言葉の端を耳にしただけで楊惲を誅殺してしまいました。唐の太宗は唐朝を興した帝王でありましたが、たった一つの詞を耳にしただけで劉洎をやはり誅殺してしまいました。古より忠臣、烈士が時運に遇って君主に仕えることができて、しかも禍を免れた者は果たしてどれほどの数があったのでしょうか。

臣だけは皇帝陛下が一部始終を照察していただき、愛惜し保全することをこれまで蒙ってまいりました。これはすなわち、陛下の聖なる度量が宣帝、太宗を超えておられ、なおかつ臣が時運に出会いましたのは古からかつてないものであったからで、日月が上にある限りは、何ら憂い虞れることはないのです。

ただ気になりますのは、世には臣を増む者が大勢いて、臣が天より授かりました命が至って薄いことあります。積もる毀りは骨をも消滅させ、巧みな言葉は金をもとろかすものであり、三人が同じことを言い募るなら、いかに落ち着いた人でも驚き立つといえます。それらしいことを人々が言い続けるなら、時がくれば自ずと真実が明らかになるはずではありません。陛下におかれましてもあるいは赦し難く思われるやも知れません。ここをもって今はまだ何事もない間に、少しばかり危惧する詞を申し述べる次第です。

晋朝の王導は王敦の従弟で、王敦は国に反逆しましたが、王導は元臣のまま害われることはありませんでした。唐朝の崔造は源休の甥で、源休は国に反逆しましたが、崔造は宰相のまま廃されることはありませんでした。臣と国に反するとされている者との関係は、路ですれ違う者と変わらぬ程度の淡いものでしかありません。それでありながら寛大な朝廷において、臣にとって終身の累いとなってしまうのは悲しいことです。

およそ仕官した士で、貴い位の人と少しでも親類関係があり、あるは半面識でもありましたならば、あちこちで特別に優遇され、人もまた批判がましいことはありません。臣は陛下の中興の治の初めに知っていただきましたが、衆人の知遇に遇うよりも前に、臣は容赦なく毀られ、恣に踏み潰されてしまい、もはや何かを申し上げるすべもありません。臣は涕泣して自ら傷むばかりであります。

いま臣わたくしはすでに善地せいどに安んじ、清班せいはんを忝かたじけなくしています[遠く追放されたことを逆にいっている]。敢えてこれよりまかに僥倖りやうじやうを求めるものではありませんし、さらに登用とうようしていただくことを思うものでもありません。ただこれまでの患難わづらひの後で積もる憂いうれが心を傷め、風波の間を移動する間に、怖れる思いおそが疾いと成ってしまいましたので、敢えて陛下わたくしが臣わたくしの余生あわが幾ばくでもないことを憫あはれまれて、かつての特別な御恩ごおんをさら究めていただきますようお願いわたくし願わいせつうのもであります。もしも臣わたくしを淮浙わいせつの間の小郡せうぐんに移していただきますのなら、少しばかり先祖せんぞの墓所ぼじよの近くになり、漸ようう退隱たいいんを謀れることとなりましょう。さらにいつの日にか、枯れ朽ちた余りの身てんじつで、天日あまひの表おもて[皇帝てんていの顔かほ]を仰ぎ見ることができましたなら、その後は田野でんやに退き隠れ、自ら老臣らうしんと称して、かつての出会いの始終しじうを語り、もって郷里きやうりの父老ふらうに誇るつもりです。区々たる願ねがいはそれで永久えいきうに終わるものであります。伏して陛下わたくしに願ねがいます。この志を憐れみ、その愚を察して、罪を赦ゆるされますように。

臣わたくしは恩おんに感じ罪つみを知り、激切げきせつ屏堂へいどうの至いたりてあります。

【補足】〔(1) 一読して知れるように、はなはだへりくだっていて、蘇轍が兄ために皇帝に差し出した文章〔→作品番号 05-5-094〕と似ている。(2) この弁明書が皇帝の心を動かしのだろうか、5月23日に藤元発とうげんはつは筠州いんよりももっと都みやこに近い湖州知事に改めて任命された。湖州といえば蘇軾も一時期その知事となった風光明媚なよい土地柄である]

■ 【06-5-004】師中庵題名

【解題】春のある日の遊びを記した短文。

【訳文】

元豊七年二月一日、東坡居士とうぼこじは徐大正じょだいせい、參寥師さんりょうしと雪堂せつどうから歩き、柯氏かの池いけを通して乾明寺けんめいじに行いって竹林ちんりんを見て、乳母にんの任氏にんしの墓ぼに詣よで、茶烟ちやえんの手入れをし、さらに趙氏ちやうしの園えんに至いたって梅堂ばいどうを探り、

尚^{しょう}氏の屋敷^しに行き、老いた^{からたち}枳^かが竜のように曲がり^りくねっているのを見てから定^{じょう}恵^{えい}院^{いん}の僧^{そう}舎^{しゃ}に憩^いい、
任^{にん}公^{こう}亭^{てい}と師^し中^{ちゅう}庵^{あん}で茶^{ちや}を飲^{いん}んだ。か^かて、また後^ご日^{にち}、酒^{しゆ}を携^ええて春^{はる}をこ^こに尋^{たづ}ねよと約^{やく}束^{そく}した。

【補足】〔(1) 徐^{じょ}大^{だい}正^{せい}は先^まに亡^なくな^つた徐^{じょ}大^{だい}受^{じゆ}前^{ぜん}知^ち事^じの弟^{てい}〔→作品番号 06-4-082〕。これより後の2月28日に、徐大正は、兄の棺を載せた船がなかなか出発できずにいると記した手紙を蘇軾に送っている。(2) この遊びは、東の坡にある雪堂から、府城の中に入らないソートをおおむね南へと歩んだもの。柯^か氏^しの池^い、乾^{けん}明^{めい}寺^じ、定^{じょう}恵^{えい}院^{いん}などの名は先の諸作品で見ている。(3) 黄^{こう}州^{しゅう}で乳母を葬ったことは作品番号 06-1-083 で見たが、その墓は乾明寺の近くにあったことがここから知れる。(4) 「枳^き」は慣例に従って「からたち」としたが、似た別種であるようだ。(4) 任^{にん}公^{こう}亭^{てい}と師^し中^{ちゅう}庵^{あん}は郷里の大先輩である任^{にん}佖^き〔字は師中〕に所縁の場所〔→作品番号 06-2-037〕。(5) 「後日の約束」は1カ月後に果たされる]

■ 【06-5-005】 与千乘侄

【解題】甥^{せう}の蘇^そ千^{せん}乘^{じょう}に宛^あてた手紙。元^{げん}豊^{ほう}3年^{ねん}に亡^なくな^つた従^{じゆう}兄^{けい}の蘇^そ不^ふ欺^ぎ〔→作品番号 06-3-003〕の子である。

【訳文】

お別れたまままた春が深くなってきて、君への思いが心を去りません。邁^{まい}が北から還ってきてお手紙を得ました。数首の詩を見て、心が慰められ、言葉にならないくらいに嬉しく思います。日月は留まることなく、もう喪服を脱かれたとはいえ、折々に何ともいえない哀しみが湧き上がってくることであります。長らく郷里からの手紙はきていませんが、皆安らかに過ごしているのでしょう。……我が家門は今や凋落し、老いたこの私にはもはや何の望みもなく、不^ふ疑^ぎ君も我が弟もころんで起き上がれずについて、ただ望むべきは我等が甥たちばかりです。このことだけが心にあります。いつ会えるともわかりませんが、千

万自愛されますように。

【補足】〔(1) 蘇千乗そ せんじょうは科挙の受験に備えて都にいたのだらう。息子の蘇邁そ まいが、土地を取得する件で上京した折に会い、蘇軾への手紙を携えて帰ってきたのだった。(2) 蘇の家は科挙の合格者を2世代にわたって3人出したのだが、その後続く者はまだいなかった。高い地位にまで昇れば息子たちが特例で官僚になれる特典はあるにしても、士大夫一家の浮沈し たい ふはやはり科挙にかかっていた]

■ 【06-5-006】次韻曹九章見贈

【解題】光州知事の曹九章そう きゅうしやう あざな えん ぼ〔字は演甫〕〔→作品番号 06-3-067〕から詩が送られてきたのでそれに次韻した。

【訳文】

昔、蘧伯玉きょはくぎょくが五十歳になったとき、
 「我が四十九年は間違っていた」といった——
 私はこの人を師と仰ぎたい。
 五十本ある古い竹の棒を、
 すでに四十九本まで使ってしまった——
 我が命運は窮まったのか。
 そんな私であるのに、
 貴君一人だけがともに学びたいといってくれるのなら、
 一切出し惜しみすることはない。
 しかし、いまの私がしていることといたら、
 剣を売り牛を買って老いるだけ。

さらに疑いようもなく確実なのは、

銭を得たなら酒を買うこと。

いつの日か鶏や豚を煮て一緒に村の祭りを楽しむなら、

貴君と千篇の詩を唱和するであろう。

【補足】^{きよはくぎよく} 蘧伯玉は^{こうし}孔子と同じ時代の人である]

■ 【06-5-007】 書淵明歸去來序

【解題】 前の詩で「剣を売り牛を買って老いる」と詠んだ。これは、本来は、戦争が終わった後ないしは戦乱を避けて、武器を手放して平和に暮らすことをいうが、蘇軾は公の仕事を放棄して田園に生きる意に転用している。そうした生き方の先達はむろん^{とうえんめい}陶淵明である。^{こう}黄州において陶淵明について書いた短文をさら三篇まとめて見ておこう。

【訳文】

世俗にこのような笑い話がある。

ある書生[科挙の受験勉強をしている者]が役所の庫に入ったところ、銭が積んであるのを見てそれとはわからずにいた。ある人が不思議に思って、「まさかあれが銭であるのかおわかりにならなかったのですか」と尋ねると、書生はいった。「銭であろうかとは思ったのですが、銭というものは紙にちんまり包んであるものであって、ああもどっきり積んであるのが不思議で、別のものに違いないと思ひまして」。

[書生というものは貧乏で、せいぜい代筆などでわずかな謝礼を稼ぐくらいであるから、たくさん銭を見たことかはないというオチ]

私はたまたま陶淵明の『^{とうえんめい ききよらいけい じ}歸去來兮の辞』を読んだところ、そこに「幼稚盈室、瓶無儲粟」[子供たちは部屋にとっさり入るのに、^{かめ}瓶には米の蓄えがない]とあった。これによって、なるほど世俗の笑い話は実際にあるものなのだと知った。瓶に米を蓄えたところではなはたわずかなものでしかない。陶淵明は普段から瓶の中のわずかな米しか見ていなかったのだ。

^{ご かん ば}後漢の馬皇后の女官は、^{だいらん}馬皇后が着ている大練[粗い絹の織物、馬皇后は日頃から質素な暮らしを心がけていた]を見て、変なものを身に付けていると思った。^{しん けいてい}晋の恵帝は飢饉で民衆が餓死したと聞くと、「米がないのなら、^{スープ}肉の糜を食べればよいだろう」といった。

よく考えれば、これらはみな同じ理屈からきているのである。

ついでながら、^{おうようしゅう}欧陽脩はこのようなことをいっていた。

「^{とう もうこう}唐の孟郊の詩に『^{びん}白髮辺有糸、不堪織寒衣』[鬢の辺りには糸[白い毛]があるけれど、冬の衣を織るほどではない]とあるが、たとえ織れたところで、どれほどのものになるうか」

以上、もの好きな人の笑いに供するまで。

【補足】[(1) 貧乏に関係するいくつかの話と並べ、^{とうえんめい}陶淵明も笑いの種にしている。この当時、蘇軾も同様に暮らし向きで、強い親近感を持ったのだろう。(2) ^{しん けいてい}晋の恵帝の話は、マリー・アントワネットが民衆が餓えていると聞いて、「パンがなければケーキを食べればよいじゃないの」といって、民衆の怒りの火に油を注いでフランス革命が勃発する要因となったという話と同様、かなり眉唾ものである]

■ 【06-5-008】題淵明詩

【解題】これは^{とうえんめい}陶淵明の詩に添えたごく短い文章。それを味わうために、蘇軾が引いている陶淵明のものと詩と、それと関連する^{ろん ご}『論語』の文章を先に見ておこう。陶淵明の詩は、『^{ききよらいけい じ}歸去來兮の辞』を書いて最終的に隱棲するよりも前の39歳の作。『論語』に記されている事柄は^{こう し}孔子が61歳の頃のこととされる。

【訳文】

とうえんめい とうえんめい き ぼう とし はる はじ でんしゃ かい こ
陶淵明：『癸卯歳始春懐古田舎』[癸卯の歳、春の始め、田舎で懐古する]其の二

先師有遺訓、[孔子が遺した教えに]

憂道不憂貧。[「道を会得できないことを憂い、貧乏であることを憂うな」とある]

瞻望邈難逮、[その教えは遥かに仰ぎ見るだけでとても及ばないのだから]

転欲志長勤。[長く努力しようとは思い思っている]

秉耒歆時務、^{すき}[鋤をとって春の農作業を歎び]

解顔勸農人。[顔をほころばせて農民に仕事を勧める]

平疇交遠風、[平らな田畑に遠くからの風が吹いてきて]

良苗亦懐新。[良い苗から新しい芽が育まれる]

雖未量歲功、[まだ今年の稔りのほどは量れないけれど]

即事多所欣。[目の前のことがたくさん^{よみこ}の欣びとなる]

耕種有時息、[耕したり植えたりしつつ時に休息するのだが]

行者無問津。[そこに渡し場を問う旅人は現れない]

日入相与歸、[日が落ちると人々とともに帰り]

壺漿勞近隣。^{ねが}[酒壺をもって隣人を労う]

長吟掩柴門、[長く吟じて柴の戸を閉ざすと]

聊為隴畝民。[いささか田畑に生きる民になれるのだ]

【補足】[この詩の途中にある「渡し場を問う旅人」^{しん} [津を問う行者]^{たびびと} は次の『論語』^{ろんご}の一節に基づく]

【訳文】

りんご びしへん
『論語』「微子編」より

ちようそ けつてい
長沮と桀溺が並んで耕していた。

こうし
孔子がそこを通りかかり、(弟子の)子路に津[渡し場]を尋ねさせた。

長沮はいった。

「あの手綱を持つ者は誰かね」

子路はいった。

こうきゆう
「孔丘[孔子]です」

ろこく
「魯国の孔丘かね」

「そうです」

「あれなら津を知っておろう」

「どうしてそのようにいわれるのですか」

子路は桀溺に尋ねた。

桀溺はいった。

「そなたは誰かね」

ちゆうゆ
「仲由です」

「魯国の孔丘の弟子かね」

「そうです」

「いま天下はどこも洪水のようになっている。誰がそれを変えられるというのかね。悪人を避けるようなあの人物[孔子のこと]というよりも、世を避ける人物といた方がよいのではないのかな」

そういって土をかぶせる仕事をやめなかった。

子路は孔子に告げた。孔子は憮然としていった。

「鳥や獣とは一緒に群をなすことはできない。私は世の人と一緒にいるのではなくて、誰とともいようするの。天下に道があるのなら、私は敢えて変えようとはしないのだ」

【補足】 [これは『論語』の中でも特に有名な一節である。孔子は長沮、桀溺という二人の隠者に出会い、隠者は、天下を変えようとしているくらいの者なら、人に渡し場を尋ねなければならないほどの無知であるはずがないと、渡し場への道を教えなかった。孔子は、隠者の生き方は鳥や獣と同じであると強く否定した。しかし、長沮、桀溺は理想の隠者とされ、並んで耕す「耦耕」は、世が乱れたときに賢者が採る生き方を象徴する語となった。先の陶淵明の詩では、陶淵明は長沮、桀溺のように農地を耕しつつも、まだ完全に隠棲したわけではなく、津を問う者 [孔子] が来たなら、それに従いたいという思いを含ませているのだろう。なお、陶淵明が詩中に長沮、桀溺を詠んだ作品は作品番号 06-2-045 でも見ている]

【訳文】

陶淵明の詩にいう。

平疇返遠風、[平疇 遠風 返し]

良苗亦懷新。[良苗 亦 新を懷<]

古の並んで耕し[耦耕]、杖を突き立てて草を刈る隠者でなければこの語をいうことはできない。

私のように代々の農民でなければ、この語の妙所を識ることはできない。

【補足】 [蘇軾は、東の 坡 を耕すなかで陶淵明の詩を深く味読できるようになったのを喜んでいるのである。ただ代々の農民であったかどうかはやや疑念がある]

■ 【06-5-009】 書淵明義農去我久詩

【**解題**】^{とうえんめい}陶淵明の作品を読みたいと思ったなら、現代のわれわれは現存する全作品をネットで容易に閲覧することもできる。蘇軾にとってはたやすくはなかった。^{きてい}岐亭の^{こていし}胡定之が万巻の書物を所蔵していて気安く貸してくれると作品番号06-1-103にあったが、陶淵明の作品集を手にするにはいささか労力を要したということがこの短文に記されている。

【訳文】

私は^{こう}江州の^{とうりんじ}東林寺に^{とうえんめい}陶淵明の詩集があると聞き、人を遣わしてこれを求めようとす。すると、江州の^り李知事がすくりに一部を送ってくれた。字が大きく、紙が厚く、非常に喜ぶべきものである。体調が佳くないときに、いつもこれを手に取って読む。ただし、一篇だけおこしておく。読み尽くしてしまったなら、その後では自分の思いを慰めるものがなくなってしまうのを恐れるからである。

【**補足**】〔(1) これは^{とうえんめい}陶淵明の詩の「^{ぎのう}義農去我久」〔^{ぎのう}義農我を去ること久し〕の句に書き添えたもの。義農とは伝説上の古代の帝王で、人間に農業を教えたとされる。(2) ^{こう}江州の^{とうりんじ}東林寺は^{ろざん}廬山にある有名な寺。(3) 本を得るのが難しかったことでは、^{おうようしゅう}恩人の^{おうようしゅう}歐陽脩は若い頃に非常に苦勞している。そのことを記した文章を参考までにここに掲げる〕

【訳文】

^{おうようしゅう}歐陽脩：『^{きゅうほんかんぶん}記日本韓文後』〔^{あとしる}旧本韓文の後に記す〕

私は年少のころは^{かんとう}漢東〔^{ずい}随州〕に住んでいた〔^{おうようしゅう}歐陽脩は四歳で父を喪い、^{ずい}随州の叔父に養われ、母から文字を教わった〕。漢東はひどい田舎で、学者はいないし、我が家は貧乏で、蔵書はなかった。州の南に豪族の^り李家があり、その息子の^{りぎゅうほ}李堯輔はなかなか学問を好み、子供のころよくその家に遊びに行った。ある一間に壊れた筐が置いてあり、古い書物を貯えていた。開けてみると、^{とう}唐の時代

の『昌黎先生文集』六卷[韓愈の文集]があった。脱落があたり入れ違いがあたりで、順序が乱れていた。李氏に乞うてこれを持って帰って読んだ。その言葉が深厚で雄博であるのを見たものの、私はまだ幼く、その意味を十分に知ることができなかつた。ただそれが浩然として涯しく、愛すべきであるのを見てとっただけだつた。

そのころは、天下の学問をする者は、楊億や劉筠の作風をいまの時代の文であるとし、それを上手に書く者が科挙に合格し、名声をほいほいまにし、世間に対して誇り、榮を得ていた。韓愈の文章についていう者は一人もいなかつた。

私は科挙を受け、都の礼部で行われる詩賦の試験に挑もうとした。十七歳のときに、州で行われた一次試験を受けたものの落ちてしまった。家にあった韓愈の文集を手にとって読み、大きく溜め息をついて、「学ぶ者は必ずこれを目標にすべきである」と考え、いまの時代の人々がどうして韓愈のことをいわないのか不思議に思った。しかし、我が身を顧みると、韓愈の文章を学んでいる余裕はないのだつた。何かにつけ自分独りで次のように思った。科挙に合格して俸禄を得て親を養うのだ、もし俸禄を得られるようになったならば、きっと韓愈の文を読むことに力を尽くし、本来の志を遂げよう。

その七年後に、科挙の進士科に及第し、洛陽で官職に就くと、そこには尹洙らがいり、一緒に古文[韓愈が提唱した復古調の、実は新しい文体]を作るようになった。私は所蔵する『昌黎先生文集』を出して補綴し、ほかの人の家にある古い本を求めて校定した。その後、天下の学ぶ者も次第に古に赴くようになり、韓愈の文体が世に行われるようになった。それから三十余年、韓愈の文でなければ学ばないりほどにまでなつた。実に盛んになつたのである。

道は遠く昔に行われて近い時代に滞ることがあり、あるいは、昔はゆるがせにされて今は貴ばれることがあるのは、世間の人の好き嫌いによってそのようになるだけでなく、しかるべき理由があるのだろう。昔、孔子や孟子の学問がすたれた時代もあつたが、しかしそれは千世、万世にわたる師法である。韓愈の文も二百年にわたって顧みられることがなかつたのだが、いまでは大いに行われている。これは好き嫌いが上下するだけによることではないのだ。時間が経つことでいよいよそれが磨滅すべからざるもの

であることが明らかになったのであって、しほ蔽われていたといえどもついに無窮に輝くのは、まさしくそれが正しいものであるからなのだ。

私が初めて韓愈の文を知ったのは、埋もれ棄てられていたときに当たる。私のもとより時代の流行を追って地位や利益を得ることなどは取るに足りないと考えていた。韓愈の文を学ぶのは、それで名誉を得たり地位を得たりするためのものではない。長にこれを志していたのである。私が官に仕えて昇進することを喜びとはせず、退くのも恐れないのは、志が最初から定まっていた、学ぶものがきちんとしているからである。

私が蔵する韓愈の文集はもとは蜀しよくの地から出たものだ。文字は今世の俗な本よりも精緻であるが、脱漏や誤謬が非常に多い。この三十年間に、善よい本を持つ人があると聞くと、必ず求めて改正した。ただし最後の巻が欠けていて足りないのを、今もって補わずにいる。それは原本を変えてしまうことを憚るからだ。私の家には万卷の書物があるが、この『昌黎先生文集』だけが旧ふるいままのものである。

ああ、韓愈の文の道は万世にわたって尊ばれるものであり、天下に伝えて保つべきものである。私はこの本が前々から家にあることをもって特に大切に思うのである。

■ 【06-5-010】 上巳日、与二三子携酒出游、随所見輒作数句、明日集之為詩、故辞無倫次

【解題】 先に参寥さんりよう、徐大正じょたいせい [徐大受の弟じょたいじゆ] と遊び、再び同じように春を尋ねようと約束していた [→作品番号 06-5-004]。3月3日、催閑さいかん [字は成老あざな] [→作品番号 06-3-073] も加えて酒を携えてあちこち見て回り、その先々で数句の詩を作り、翌日に一つにまとめた。必ずしも時間順に並んではないと詩の題で断っている。

【訳文】

空は一面の薄い雲、

それでも雨にはならないので、

暁から杖をついて、千の花の乱れる土手を歩く。

かし
柯氏の丘の林の奥で独り笑う海棠、

その悔ることのできない姿をかつて私は詩に詠んだ。

ほうしゅ
卯酒[朝酒]を三杯もひっかければ人はたちまち酔い、

竹林に棲む老人に請うて枕を借りると、

ねむ
春の睡りはすぐに正午になる。

この主人は書物などは読まないはずなのに、

誰に教わったのか、

昔の風流人の故事に倣って門を閉ざして私を留めようとする。

のき からたち とうかかえ
簷から出る枳の株は十圍もあり、

その影こそが真実を写すのたろう、

それはつまり壁に千の竜が舞っているのである。

たか野 つつみ
竹林の外には東の坡に作った塘が通じ、

今では幾尺もの深さになっていて、

ねまら
ときに酒を携えてそこで農工の苦を勞うことがある。

とうもん
流れる川のあたりを尋ねようと東門の外を行く、

壊れた垣根、古い堀のあたりに、

誰にも世話されずに下に臥して桃や李が開き、

あおさぎ
鷓鴣が向き合って格好のよさを競っている。

春の晴れ着が泥に汚れるのも構わずに、

道端に草を敷いて勢い付けに酒樽をまた開く。

再び衣服をまくり上げ、

しゅんそうてい

春草亭のあたりを通り、

門を叩いて韓家[韓毅甫]の農地に入る。

井戸の轆轤の縄は切れ、底には深い碧の水がある。

フランコ

鞆が垂れ下がっているので、

これに乗る女性はどこにいるのだろうか、

水を請うふりをして門より声をかけてみるが応じる声はなく、

小さな桃の枝が簾の前あるだけだ。

南に行って古い見晴らし台に上り、

ちょうこう

長江の断岸に臨むと、

雪をはらんだ雲が空に翻って、

上が下やら下が上やら、ぐらぐらとする。

知り合いが我等に羹を振る舞ってくれるが、

誰のためこいつ煮たものなのか、

煙は消えて火は冷えてしまっている。

荒れた急な道を助け合って下ると、

花を隔てて女性たちが楽しそうに話をしている。

町のはずれの僧房に立ち寄り、

落ち行く日を追うようにして残った酒を片付ける。

主人が足を洗って眠るよう勧めてくれたので、

ベッド

牀に倒れ込んだが最後、

鐘の音も耳に入らぬままに朝を迎える。

なんと門の外は一尺の深さの泥で、

夜中にひどい雨が降ったのを初めて知る。

普段から私は、行く先々で何一つとして成し遂げたものはないのだが、
今回の遊び^{あそ}だけはなぜか天も阻むことがなかった。

これはまことに我が友が決して窮迫することがないお蔭であるのだろう。

友とすべき君子を神が与えてくれているのだ。

【補足】 [ここに詠まれた場所は、我々にもすでに馴染みとなっているところが多い。

ブランコ^{ブランコ}も作品番号 06-1-032 ですで見ている]

■ 【06-5-011】 記游定惠院

【解題】 上の詩で見た遊びを記した文章がある。詩と文とで違うところがあるのは、
上の詩題に「倫次無し^{りんじなし}」とある所以なのであろう。

【訳文】

黄州^{こうしゅう}の定惠院^{じょうゑいん}の東の小さな山の上に、一株の海棠があり、よく繁茂している。毎年、盛んに開化ぎに、
必ず友人と連れ立って酒を置き、花のもとで酔うことすてに五回となった。今年^{ことし}は参寥師^{さんりょうし}および二、三
の友と訪れた。

園^{あるじ}の主はすでに替わっていた。主は市井^{しせい}の人であるが、私のために海棠の木を大切にしてくれている。

この山には老いた枳^{からたち}の木がたくさんあり、樹皮^{きんみく}がごわごわとし、筋脈^{きんみく}が露^あわで老人の首のようである。

花は白くて円く、大きな珠^{たま}が重なり合うように咲き、香りもたたずまいも非凡である。この木は人に喜ばれる
ものではなく、ややもすると伐られてしまうのだが、主人はやはり私のために伐らずにいてくれる。

ここで飲んでから、尚氏^{しょうし}の屋敷^{きょしよ}に行き行って休憩した。尚氏もまた市井^{しせい}の人である。居処^{きょしよ}は清潔でよく整
い、呉越^{ごえつ}のあたりの隠棲者^{しんせいか}の住まいに似て、竹林も花圃^{しゅうばんかく}もどれも喜ぶべきものがある。酔って小板閣^{しょうばんかく}
の上に臥せた。

ようやく目覚めたころに、一行中の崔閑^{さいかん}が雷氏^{らいし}の琴を弾くのを聞いた。錚錚^{そうそう}として暁の月の下を悲しげ

に吹く風のように、人間世界にいる気がしなかった。

晩に出て町の東を歩いて、大きな木の桶を買った。泉から清らかな水を瓜と李すももに注ごうと思う。

そこから小さな溝に沿って何氏か し か せい か〔何聖可〕、韓氏かん し かん き ぼ〔韓毅甫〕の竹園に入った。何氏はちょうど竹の間に堂を作っていて、すでに地ならしかしてあった。竹の陰に酒を置いた。

役場りゅうとうねんに勤める劉唐年ゆ せん じが油煎餅い じん そ〔かりんとうのようなもの〕を持ってきてくれた。その名を為甚酥い じん そ〔なんでこんなサクサク?〕いって、味が極めてよい。友人たちはさらに飲もうとしたが、私はもう興が尽きたので帰った。道の途中か しで何氏の小さな店を過り、そこにある橋のひとむれを求め、雪堂せつどうの西に移すこととした。

一行の中に徐大正じょだいせいがいて、間もなく閩中びんちゆうに行くことになっている。これから後にまた会えるかどうかかわからないので、今回の遊びを記してしまいと私にいった。それを読んで後の楽しみの種こしようというのである。

このとき參寥師は酒を飲めないので、棗なつめの湯スープを代わりに飲んだ。

【補足】〔(1) 催閑さいかんは作品番号06-3-073で現れてからずっと黄州こうにいたのか、再び廬山ろざんからやってきたのか、そのあたりのことはわからない。(2) 「雷氏らいしの琴」は雷氏の作った琴の名器〔→作品番号06-2-031〕。(3) 「為甚酥い じん そ」は蘇軾の命名で、次にそれについて詠んだ詩を見る。(4) 徐大正じょだいせいはいよいよ兄を故郷びんちゆうに葬るために遠く閩中に行くのである〕

■【06-5-012】劉監倉家煎米粉作餅子、余云為甚酥。潘邠老家造逡巡酒、余飲之、云莫作醋、錯著水来否。後数日、余携家飲郊外、因作小詩戲劉公、求之

【解題】長い詩の題は、「劉唐年りゅうとうねんの家では米の粉こを煎にて餅子へいしを作る。私はこれを『為甚酥い じん そ』と呼んだ。潘大臨はんだいらんの家では逡巡酒しゆんじゆんしゆを造る。私はこれを飲み、『莫作醋ばくさくさん』と呼んで、『誤ちがって水みづに著けたのかい』いといった。その数日後に、私は家族を連れて郊外で

飲み、この小さな詩を詠んで、戯れに劉君に為甚酥を求めた」。潘大臨の名は作品番号 06-3-064 などで見ている。その自家製の酒は、薄くて酸っぱかったのだらう。

【訳文】

野原に飲み、
ここにあるのは花だけ、
目につくのは、高く伸びた一本の葦らしい。
すでに潘君の水のような酒は飲んでしまったので、
劉君の為甚酥を所望するでしょうか。

【補足】 [これは上の文章で見た遊びの折の作であるのかもしれない]

■ 【06-5-013】 海棠

【解題】 上の遊びで触れていた海棠を詠んだ詩。

【訳文】

東の風[春の風]が^{そよそよ}嫋嫋と吹いてきて、
崇の光が^{はな}泛^{うか}び出る。
香る霧[春の霞]が^{もやもや}空濛と立ちこめ、
月が回廊のあたりを廻る。
心配なのは、
夜の深さに花が眠ってしまっていること。
ことさらに高^{ろうそく}蠟燭を焼いて、
紅の粧を^{けしない}照らし出すとしよう。

【補足】[いまや黄州^{こう}には馴染みの人々が大勢いて、どこも馴染みの場所となっていて、折々の楽しみがあった。このような日々がこれからも続いていくのだらうと蘇軾は思っていたらうし、蘇軾ファンはもっともっと黄州での作品を読みたいと思うのだが、春の盛りのときに、新たな辞令が都から届いた]

■ 【06-5-014】謝量移汝州表

【解説】神宗皇帝^{しんそう}が蘇軾を赦して都に呼ぼうとしているという話は何度か噂として流れたようだが、この年の1月25日、皇帝は蘇軾^{けんこうすい}を^ぶ ^{いん}が^{いろ}う^{じょ}し^{ゆう}だ^んれ^んふ^くし^{りょう} ^{けんこうすい} ^ぶ ^{いん}が^{いろ}う^{じょ}し^{ゆう}だ^んれ^んふ^くし^{りょう} 汝州団練副使に量移するとの辞令に署名した。蘇軾の罪が確定したときに与えられた肩書 [→作品番号06-1-001] と比べると地名だけが異なっている。「量移」とは、遠方に流されていた官員が、罪を赦される前段階として都に近いところに移動させられることをいう。汝州は都の西方約150キロ、洛陽^{らくよう}の南方約60キロの町で、黄州と比べたら遥かに都に近い。この報せが蘇軾のもとに届いたのは、3月5日から3月8日の間であったようだ。先に見た『定恵院に遊ぶ記』にはこれから黄州を離れるような気配は全くなく、後で見ると3月9日にはすでに黄州を離れる用意が始まっている。皇帝の命令書が届くと、蘇軾はすぐに感謝状を書いて朝廷に提出した。

【訳文】

^{わたししよく}
臣軾は申し上げます。

^{わたし} ^{じょしゆうだんれんふくし} ^{ほんしゅうあん} ^ち ^ふ ^{とく} ^{せんしよこうじ} ^{こうめい} ^{わたし}
臣に汝州団練副使本州安置不得僉書公事を特に授けるとの正月二十五日の誥命を、臣は伏してお受けいたしました。都にやや近い地^ちに遷して、永久に棄てるものではないということをお示しくたしました。我が罪は万死に当たるとすでに甘んじておりましたので、この御恩は実に生き返るよりも大きなものがあります。謹んで訓辞に服し、ただ感涕あるばかりです。

わたししよく せいこうせいきょうとんしゅとんしゅ

臣 軾、誠惶誠恐頓首頓首。[ひたすら恐縮する意]

伏^{おも}して念^{わたし}いますに、臣は先に実態を過ぎた地位、他の人を超えた俸禄を頂戴しております。兄弟ともに進士合格を竊^{ぬす}み取りましたところ、衣冠^{い かん}[官僚]はこれは盛事であるとして、たちまち館職^{かんしよく}を頂戴し、都より出て諸郡を治めることとなりました。しかし、わずかな善いこともなく、記録すべきことは毛筋^{まき}ほとんどなく、重罪^{まじかり}を蒙^{まか}って、まさに処刑の鉞^{まじかり}を我が血で濡らすべきに至りました。

有り難い^{わたし}思^はし召^めしを蒙^{まか}りましたのは[死罪にならずにすんだことをいう]、臣の平生のあり方からして愧^はじるばかりでありました。一人我が影を憐れみ、川のほとりに我が命を寄せたのであります。我が魂は驚き入ったまま定まらず、夢の中でも常に縄で縛られておりました。人間ではない、ほどまでに憔悴し、心を失うまでに惑い^ま狂^{きやう}い、妻や子はひそかに冷笑し、親類も友人も交わりを絶つに至りました。毎年病気にかかり、人はすでに臣は死んだと言^いい伝えました。飢えと寒さに攻められ、臣はこの先も生きるのを嫌^{きら}いました。

草むらに捨てられた賤しい微々たるこの存在が、まさか朝廷の記録簿になお記載されていて、痛恨の苦しみを開いて、また用いて試してみるなどということがあろうとは思^{おも}ってもみませんでした。

これは皇帝陛下^{とうとくにっしん きやうじんてんふく}の「湯徳日新、堯仁天覆」[古代の聖天子のように日々に新たに天を覆うばかりに広がる仁徳]に遇^あうものであると伏^ふして感じるものであります。いま皇帝陛下は新たに廟を建てられて歴代皇帝を祀られ、官制を改正して今後の範となる型を作られ、百の眠っていたものが次々に興^{おこ}り、多くの才能ある者が集まって官位を授^{たま}わり、共に千年に一度の聖世との出^で会^あいを欣^{よろこ}んでおります。そこに一人の男が顔を覆^{おほ}って天下の隅で泣いているのを俣^たび難^{がた}く思^{おも}われて、一滴の水を枯れた草木に注^つがれたのでありま^ましょうか。

わたし
臣の身を顧^かみますに、死をもって御恩に酬^{たま}いようとしてもその方途はなく、いま身を殺しても何の益もありません。天に向かって我が思^{おも}いを言^いおうとしましても、口に出すならなお我が身を苦しめることになりま^ましょう。ただこのような思^{おも}いだけはありますので、いつの日にか果たしたいと思^{おも}います。

わたし おにん

臣、無任。[歓喜に耐えないの意味]

【補足】[このときの量移の命令について陳鵠の隨筆『西塘集耆旧統聞』に次のような話が記録されている。『西塘集耆旧統聞』は作品番号05-5-092で触れたように、記事の信憑性は必ずしも保証されないようだ]

【訳文】

ちんこく せいとうしゅう ききゅうぞくぶん
陳鵠:『西塘集耆旧統聞』より)

蘇軾が黄州に謫された元豊年間の末に、汝州団練副使に移されることになったときの制詞に、
「蘇軾は謫居すること久しく、咎を念うことすてに深い。人の才能は実に得難いものであるから、終身これを棄てたままにしておくのは忍ぶことができない」

とあった。蘇軾のこの部分に非常に嘆服し、きっと王震が起草した詞であろうと考えた。

げんゆう
元祐年間の初めに蘇軾が朝廷に入ると、王震と同僚になった。そのとき王震の詩に和した蘇軾の詩に次の句があるのは量移の命令を受けたときのことを詠み込んだものであろう。

清篇帯月来霜夜、[清篇が月を帯びて霜の夜に来ると]

妙語先春発病顔。[その妙語は春に先んじて病いの顔を発いてくれた]

【補足】[(1)「人の才能は実に得難い」の原文は「人才実難」である。神宗皇帝が蘇軾が死んだとの噂を聞いたときにつぶやいた言葉が「才難」であったことは作品番号06-4-016で見ている。(2) ついでながら同じ『西塘集耆旧統聞』は次のような興味深い逸話も記録されている]

【訳文】

ちんこく せいとうしゅう ききゅうぞくぶん
陳鵠:『西塘集耆旧統聞』より)

しゅざいじょう こう こう たくきょ
朱載上がかつて黄冈県にいたときに、蘇軾は黄州に謫居となった。蘇軾がまだ朱載上のことを知ら

ずいいたころに、ある客人が朱載上の次の詩句しやうを誦した。

官間無一事、[官かまは間で一事無く]

蝴蝶飛上階。[蝴蝶ちようちやうは上階に飛ぶ]

蘇軾は驚いていった。

「これはどの人の作品ですか」

客人が朱載上の作だと答えると、蘇軾は再三称賛し、幽雅の趣を深く得たものだといった。

後に蘇軾は朱載上と会い、朱載上はその門弟となった。

ある日、朱載上が蘇軾のもとを訪ね、来たことを伝えてもらったのだが、長い時間が過ぎても蘇軾は奥から出てこなかった。さらに待とうとして、しかし倦み疲れ、やはり去ろうとして、また奥に我が姓名の伝えてもらうと、ようやく蘇軾は出てきて、長く待たせてしまったことを謝り、

「たまたまいささかの日課を勤めているうちに失念してしまいました」

といった。坐が定まり、ほかの話が終わってから、朱載上は尋ねた。

「先生のおっしゃる日課とはいかなるものでしょうか」

「『漢書かんじよ』の抄録です」

「先生は一度書物を開いたなら、終身忘れることがないと伺っております。手ずから抄録なさる必要があるのでしょうか」

「そうではありません。私は『漢書』を抄録すること三度目となります。最初是一段のことを三文字にしてその題とし、次には二文字にし、今回は一文字にしているところです」

朱載上は膝を進め、

「先生はどのように抄録なさっているのでしょうか。よろしかったら教えていただけますでしょうか」

蘇軾は老いた召使に机上にあった一冊を取ってこさせた。朱載上がそれを見ると、その意味がまるで

わからなかった。

蘇軾はいった。

「試しにそこにある一字の題をおっしゃってみてください」

朱載上がそうすると、蘇軾はその声に応じてすぐに数百字を唱え、一字の過ちもなかった。数回同じように繰り返したが、皆同じであった。

朱載上は辞去すると嘆息すること久しく、

「先生は真まことに人間界に降りた仙人のような天才である」

といった。

【補足】[前に政敵の李定りていの話 [→作品番号 06-1-001] でも見たように、蘇軾の記憶力は尋常ではなかった。だからこそ故事をてんこもりにした詩もたちどころに作れるのである]

■ 【06-5-015】贈別王文甫

【解説】「量移りょうい」の命令は朗報とはいえ、手放しで喜べるものではなかった。上に見た感謝状じょうしゅうだんれんふくしに「汝州団練副使」の後ろに「本州安置不得僉書公事ほんしゅうあんちふとくせんしよこうじ」とあり、指定された場所以外のところには住んではいけないし、公の事は何もしてはならないという制約はそのまま、つまり、罪がすっかり赦されたわけではなかった。この先、たとえ公職に復帰できたとしても、また同じようなことになってしまう恐れもあった。実際のところ、蘇軾の感謝状が朝廷に届くと、その字句を細かく詮索して蘇軾は何も反省していないと難癖を付ける者がいた。それはそれとして、蘇軾じよは汝州に移る準備を大急ぎで進め、黄州こうの人々に順次別れを告げた。真っ先に蘇軾の頭に浮かんだのが長江ちやうこうの対岸に住む王芥愈おうせいゆ [字は文甫ぶんほ] とその弟 [→作品番号 06-1-030] で、すぐにこの文章を送った。

【訳文】

私が黄州に到着したのは元豊三年二月一日であった。このとき家族は南京応天府にて長男の邁だけが一緒であった。黄州には旧からの知り合いは一人もいなかった。

私はしばしば杖をついて長江のほとりに行っては、雲や濤の渺然な彼方を望み見ていた。このとき長江の南の地に王兄弟がいることなど知りしなかった。

十日余りて、長い髯の人がわざわざ立ち寄ってくれた。それが王齊愈の弟の王齊万であった。留まって語ること半日に及んだ。

王齊万がいつには、

「間もなく寒食です。ひとまず車湖に帰ります」

そこで私は川岸まで送った。弱い風に細かい雨が降り、王齊万は木の葉のような小舟に乗って長江を横切って去って行った。私は夏隩尾の高い丘に上り、舟が武昌の船着き場に着くのかげぼんやりと見えるまで眺め続け、それから還った。

以来、互いに往き来し、四年の間に百回以上にもなるであろうか。ついには近くに田を買ってそこで老いを送ろうと思ったこともあった。しかし、それは果たせなかった。

近ごろ突然、汝州に量移させられることになり、間もなくここを去る。後にまた会えるとは思えないと思つと、何につけても寂しく感じられ、懐いに耐えることができない。

「仏僧は同じ桑の下に三晩宿ことをしない」[執着心が生じるからである]というのは理由があることではなからうか。

元豊七年三月九日。

【補足】 [この文章を読んでから、黄州に到着したころの詩文にまた立ち戻ると、より情感深く味わうことができるであろう]

■ 【06-5-016】 与蘇子容

【解題】汝州への移動を命じられて、出発準備をしている間に蘇頌〔字は子容〕に宛てて書いた手紙。蘇頌の名は作品番号 05-3-038 などで見ている。

【訳文】

先に罪を得て譴責されましたのは私自身から出ましたもので、今回の量移の命は実に望外のことであります、貴君より重ねての御助言にますます感激しております。長らくの困苦が累重し、陸路ではとても行けませんし、舟の手配ができたとしても、汝州には夏の間にはまだ到らないてあります。

貴君が苦しんでおられるのは、恐らくさほど深刻なものではなくて、平凡な医者がそれについての知識がないために、適切な薬を用いることができないだけなのでしょう。薪水の人である龐安時君は、脈や薬について詳しく、博学多識で、試みに診てもらったところ、古の名医にも負けるものではありませんでした。その技芸がどれほどのものか量ることもできません。病気の状況を詳しく書いたものを見るだけでも、龐君は処方を考えて、十に五ないし六は的中します。人を遣わして龐君に手紙を送られたならきっと益があります。龐君は操行高雅で、利益について考えることはありません。私は龐君のことはよく知っていますので、貴君からの手紙が届くということをお知らせしておきましょう。……

【補足】〔(1) このころ蘇頌は都にいたようで、蘇軾に量移の命令が下ったのを聞いて、移動するについての支援を申し出たのであろう。(2) 龐安時は何度も見ている名医である〔→作品番号 06-4-093〕。(3) 別の手紙に、蘇頌が落馬したので、蘇軾は家伝の接骨丹を送る由を記している。たぶんこのときはそれとは別の病気であったのだらう〕

■ 【06-5-017】 大別方丈銘

【解題】蘇軾は3月10日ごろに黄州を離れたのだが、そのときの詩文を読む前に、

黄州において書いたと知られる作品を幾つか見ておこう。蘇軾はあるとき、大別山たいべつさんに遊び、そこにある方丈を訪れてこの銘を作った。大別山は黄州から少し長江ちようこうをさかのぼった漢陽かんよう県にある。

【訳文】

目を閉じて視る。目が見るところのものは冥冥めいめい蒙蒙もうもうとしている。耳を掩って聴く。耳が聞おくところのものは隱隱いんいん隆隆りゅうりゅうとしている。目や耳が使えなくなっても、見たり聞いたりすることは断たれないで、冥冥めいめい蒙蒙もうもうあるいは隱隱いんいん隆隆りゅうりゅうの中で揺らいている。目を開いていながら、全く視ることなく、ものを写す鏡のようであることは誰にもできないだろう、耳を傾けていながら、全く聴くことがなく、風を受ける穴のようであることは誰にもできないだろう。見ていながら視ない、聞いていながら聴かない、それは塵空じんくうの内にいるためだ[これは煩惱などに妨げられて本当の仏の道を知ることができないことをいっているのだろう]。塵がかりりと晴れるならば、遍く十方が地獄までも天宮までも明るく照らされて、水や火を踏み、鉄や石を通り抜けることさえできるのである。

私が大別山たいべつさんを観るところ、三門の外には長江ちようこうが東へと流れ、東西万里にわたる千の溪、百の谷がそこで一つになっている。私が大別山を見るところ、方丈の内には常あかに紅くもる一つの燈火があつて、門は閉されて開かれないが、隙間から光が長い虹かがやのように暁あけいて出ている。どうしてそなのかと問うと、方丈の僧は笑って答えない。近づくと、盲もうにして聾もうの僧である。見るに、龐然ほうぜんとして月のように美しい顔で、瞳は漆のように黒い。

私はこの銘を作り、その僧が叩く木魚と鼓鐘とともに唱える。

【補足】[(1) この銘の意味するところはよくわからないので、何となく雰囲気が伝わるように訳してみただけである。(2) 大別山たいべつさんの才長老さいちやうろうに送った手紙が3通残っていて、才長老さいちやうろうが黄州こうにきたり、蘇軾が大別山を訪れたりしたことが知れる。この方丈の主はその才長老ではないようだ]

■ 【06-5-018】 石恪画維摩頌

【解題】石恪が画いた維摩像に添えた頌歌。石恪は蜀の人で、蜀が宋によって併合されたところに都に行き、都で第一といわれる寺の相国寺の壁に画を描くよう命が下ったのだが、蜀に帰ることを願い、結局描かずに帰郷した。石恪は宋の都が気に入らなかつたのだらう、蜀の人々に様々に吹聴したという。仏陀の弟子である維摩詰について歌った部分は省略し、石恪に言及している終わりの8句だけを訳す。

【訳文】

……石処士君はと観るに、麻の鞋を履き、破れた帽子を被り、両肘を露わにした姿、筆を取り出すと、その先から維摩詰を描き出し、その神力は維摩詰を超えるものがあつた。もしこの画が実相でないとしたら、(維摩詰が住んでいた)毗耶城もまた実はなかつたことになるだらう。仏弟子が維摩像を作るならば、まさにこの画に観る維摩詰をもって維摩詰の正観とするに違いない。

■ 【06-5-019】 夢弥勒殿

【解題】これはずっと後年になって書かれたと推測される文章。

【訳文】

私は黄州にいたときに、夢で西湖のほりに至つた。夢の中でありながら、それが夢であることを知つていた。湖のほりに大きな建物が三つ並び、その東の建物に「弥勒下生」の額が掲げてあつた。夢の中で私は、

「これは私が昔書いたものだ」

と、いった。

大勢の僧がそのあたりを行き来し、その大半を知っていた。弁才師^{べんさいし}、海月師^{かいげつし}といった方々がいて、皆が私を見て不思議なことだと驚いた。私はぎっくりした衫^{うわぎ}に杖を携えていて、人々に向かって会釈し、「夢の中でこちらにきてしまいましたので、きちんと冠帯^{かんたい}を身につけるともありませんでした」と、言い訳した。

夢から覚めると全てが消え去った。

その翌日^{しゅうにん}に芝上人からの手紙が届いた。夢はそのしるしであったのだろう。それでこのことを書いて、芝上人に寄せるものである。

【補足】 [(1) 蘇軾が夢を語ることは本章だけでも、作品番号 06-2-005、06-2-086、06-3-064、06-4-095 などがある。 (2) 弁才師^{べんさいし}は作品番号 04-2-053 や 06-1-081 で見た弁才大師元浄^{べんさいだいしげんじょう}、海月師^{かいげつし}は作品番号 04-2-090 で見た海月禅師慧弁^{かいげつぜんしえいべん}のことである。 (3) 芝上人^{ししやうにん}は曇秀^{どんしゅう}という僧で、ずっと後に蘇軾が記した文章から杭州^{こう}にいたときに若干の交流があったことがわかる]

■ 【06-5-020】 書黄州古編鐘

【解題】 古代の打楽器である編鐘^{へんしやう}について記した短文。

【訳文】

黄州^{こう}の西北百里余りのところに歐陽院^{おうやういん}があり、その僧が古代の編鐘^{へんしやう}を蓄えている。農家の者から得たという。それを発見したところからは、四つの鐘が出土し、そのうちの二つは激しく壊れていて、一つからは銅が取り去られてしまい、残ったのがこの一つである。それを叩いた声^{こゝろ}は空籠として、すこぶる古風な感じがある。周の時代の「韶」や「濩」の音はいまは聞かれないが、あたかもこのようであったろうかと想像することができる。

【補足】 [古代の楽器について記した短文はほかにもあるが、訳者の理解が及ばない]

ので割愛する]

■【06-5-021】書李岩老棋

【解題】李岩老りがんろうの碁について記した短文。李岩老りしやうとは李樵こうという名の黄州の人であるという。

【訳文】

南嶽なんがくの李岩老りがんろうは居眠りが大好きである。人々が食事を終えて碁を打ち始めると、李岩老はたちまち眠ってしまう。数局を打ち終わったころに、李岩老は寢返りを打って目を開け、
「わしはまだ一局目を打ち始めたばかりであったはずだが、諸君らはもう何局も打ったのかな」と、いった。

私はこのように応じた。

「李岩老君はいつもの四脚の碁盤を持ち出し、黒い石を一つ置く。初めは、辺韶へんしやう [漢代の人]が相手だったけれど、いまは陳搏ちんたふ [宋代初めの隠者]が打とうとしている。初めは、勝ち負けがあったのだが、いまは一切何もない」

これは歐陽公おうえうこう [歐陽脩]の『夢の中の詩』と同じココロである。

夜涼吹笛千山月、[夜の涼しさのなか、千の山を照らす月の下に、笛の音が広がる]

路暗迷人百種花。[路は暗く、百種の花の間で人は迷ってしまう]

棋罷不知人換世、[ここに碁を打ち終わると、世の中が換わってしまったのも知らずにいる]

酒闌無奈客思家。[酒闌たげなわのうちに夢に落ち、旅人は家を思う気持ちをどうすることもできない]

【補足】[(1) 碁に夢中になると時間の経過を忘れてしまうことから、仙人が一局打つ間に何百年も経ってしまったというたぐいの伝説がある。それを踏まえて、蘇軾の

セリフとおうようしゆうの詩がある。(2) へんしやう ごかん 辺韶は後漢時代の人で、弟子たちを指導している間に居眠りをしてしまい、うとうとしながら、弟子たちがひそひそ先生をからかう言葉やささやいているのを耳にし、即座に絶妙な切り返しをしたというエピソードがある。ちんたん そうだい 陳搏は宋代初めの非常に有名な隠者。(3) おうようしゆう 欧陽脩の詩は、中央政界から追放されていた時期の作で、地方を転々とする悲哀を夢に託してさらりと詠んでいる。こうしゆうたく 黄州謫居の蘇軾が引くにはぴったりの詩であろう]

■【06-5-022】徐問真従欧陽公游

【解題】これはずっと後になって書かれた文章であるが、こう 黄州での出来事が記され、またおうようしゆう 欧陽脩と関りがあるので、ここで読んでおこう。例によって「いじん 異人」の話である。

【訳文】

どうじん じよもんしん い 道人の徐問真是自ら濰州の人であるといっていた。酒を嗜んでいまいまに狂い、ねぎ 葱や鮮魚を生のみま啖らう。指をもってはり 鍼とし、土をもって薬とし、病を治して神のようなしるし 験がある。

おうようぶんちゆうこう おうようしゆう せい 欧陽文忠公[欧陽脩]が青州知事であったとき、徐問真是公に従って遊び、しばらく過ごした後に辞去した。

公が引退したと聞いて徐問真是えい 穎州に来た。公は徐問真を屋敷に住まわせ、息子二人に世話をさせた。公は以前から足を病んでいて、病状が少し悪くなったのを、やわらげることができずにいた。徐問真は、かかと いんたき 気血を踵から頭の頂に汲引するよう教えた。公がその言を用いると、病はすぐに治った。

ある日、徐問真是突然出て行くことを強く求めた。公は引き留めたが、徐問真は、「私には罪があります。私はこれより公卿と遊ぶのです。もはや留まることはありません」といって聞かなかつた。

公は人を付けて徐問真を送らせたところ、身の丈八尺ばかり、鉄の冠を頭に載せた人が道に待っていた。徐問真は町を出ると、村の子供を雇って薬筒を持たせた。数里ほど行くと、子供はもう帰りたいといった。徐問真は髪の中からなつめ粟ひまごくらいの大きさの瓢を取り出し、掌の中で何度もひっくり返してから、子供の手の内に酒を注いだ。手にいっぱいになること二度、子供にそれを飲ませた。よい酒であった。これより徐問真がどこに行ったのかはわからない。その子供は後に頭がおかしくなり、その後どうなったのかやはりわからない。

私はかつて潁州で公に会い、以上のことを具に聞いた。その後、私は黄州に流されたときに、黄岡県知事の周孝孫が俄かにふくらはぎを重く患った。私が徐問真の方法を受けると、七日で癒えた。

元祐六年十一月二日、私は欧陽棐、欧陽弁と夜にこのことを語り合った。はなはた怪異なことであるので、あまり書くに気にはなれなかったのだが、徐問真はまことに異人なのであろう。

【補足】 [(1) 欧陽脩が政界を引退して潁州に退隠したのは、熙寧4年 [1071年] 6月で、蘇軾が杭州に赴任する途中に潁州を訪問したのはその年の9月であったから、徐問真はその間にきていたことになる。(2) 徐問真の「波引気血」の治療法が実際にどのようなことをするのかはわからない。(3) 元祐6年は蘇軾が黄州を離れてから7後である]

■ 【06-5-023】 陳昱再生

【解題】 耳にした不思議な話を記録した短文。

【訳文】

今年の三月、陳昱ちんいくという中書省の小役人がにわかに死に、三日後に甦った。そしてこのように語った。

初めに壁に^{あな}孔があるのか見えました。人がいて孔から一つの物を^な擲げました。それが地に落ちると人に化し、それは亡き姉でした。

私は姉と手を携えて孔の中に入り、通り抜けると、

「冥界の役人がそなたを追っています。私が先に行くので、ついてきなさい」

と、姉がいました。

見ると、役人がすぐそこにいました。あたりは夜のように暗く、遠くに明るいところが見え、そこに橋がありました。立札に^{かいめい}「会明」とありました。そこでは泥の銭を使って渡り賃を払うのでした。橋は非常に高く、橋の上を行く者がいました。姉は、

「あれは^{せいてん}生天です」

と、いました。

私たちは橋の下を歩きました。そこに行く人もいて、鳥に突かれている者もいました。

「あれは網で捕われた鳥なのです」

と、姉がいました。

また一つの橋があり、^{ようめい}「陽明」と書かれていました。ここでは紙の銭を用い、十人余りの役人がいて、書類を手にして、税金を徴収するようして、紙の銭を厳しく取り立てていました。

私は冥官様^{めい官}[閻魔大王]にお会いすることになりました。見ると、それは陳襄様^{ちんじょう}でありました。冥官様は、

「どうして乳母を殺したのか」

と、私にお尋ねになり、

「そのようなことはしていません」

と、答えると、冥官様は乳母を呼びました。乳母は顔から血を流し、赤ん坊を抱いていました。乳母はじっと私を見て、

「この人ではありません。門下省の小役人の陳周です」

冥官様は私を解放して還^{かえ}してくだることになり、

「路は遠い。竹の馬を貸してやろう」

と、いわれ、また係の者に名簿を調べさせると、

「この者は六十九歳で死ぬことになっています。最後は左班殿直に至ります」

と、いったので、

「普段から先祖の供養に熱心でないので、寿命があまり長くないのだな。行いを改めるのなら、これとは少し異なるようにしてやろう」

冥官様はいわれました。

私はこして帰ることができ、道の途中で、陳周が役人に追われてくるのが見えまた。

こして陳昱は蘇生し、陳周は果たして死んだのだった。

【補足】[(1) この種の臨死体験談は類話が非常に多い。(2) 蘇軾が杭州にいたときに知事を努めた陳襄^{ちんじょう}は昨年のうちに亡くなっている [→作品番号 06-4-022]。その後で、このような話が都で語られるようになったのだろうから、冒頭に「今年の三月」とあるのは、早くてもこの年のことであろう。(3) 官員として厳正な仕事をした者が死後に冥界で裁きを下すようになるという伝説は多々ある。(4) なおここで小役人と訳した原文は「吏」で、基本的に科挙に合格した高級官僚である「官」とは厳密に区別されている。ここの登場人物で陳襄だけが「官」で、他の者はすべて「吏」である]

■ 【06-5-024】魚枕冠頌

【解題】陳慥^{ちんぞう}は古風な方山冠^{ほうさんかん}を愛用していたので方山子^{ほうさんし}と呼ばれていたのだが [→作品番号 06-1-015]、魚枕冠^{ぎょちんかん}という珍しいタイプの冠も所有していた。蘇軾はそれへの頌

歌を作った。魚の頭骨の中に魚枕ぎょちん [あるいは魚魼ぎょしん] という骨があつて、それを飾りにしたのが魚枕冠である。

【訳文】

美しく清らかな魚枕冠ぎょちんかん、初めて細やかに観て、はてされこれは何物なのだろうか。

形と気がたまたま一つになると、忽然として魚となる。不幸にして網に遭い、割かれてしまうと、そこから魚枕骨ぎょちんこつが得られる。魚枕骨を得て見るならば、それはもはや魚ではない。魚が火と湯で煮られても魚枕骨が得られ、冠の上に載せられて五嶽のように聳え立つ。冠となったときにはもはやもとの魚枕骨ではない。

成ると壊れるには永久にやむことがなく、ついには冠もまたなくなってしまう。もしもまた壊れてはいないときであっても、これを髪のない人に与えるならば、簪かんざしを挿すことができず、冠としての用をなさない。我が身を観れば、幻のごときものでしかなく、露が乾く間のもの、あるいは雷が光る間のものである。我が身といえども己の物ではなく、露も雷もまたあるかないかのものである。

仏の慈悲を思うならば、私はこの冠を愛おしく見るべきであろうが、冠は果たして冠であるのだろうか、そして私は果たして私は私であるのだろうか。濁った五つの煩惱のなかりにあつて、美しく清らかなものに遇うときに歓喜を覚えるのである。

【補足】 [訳者はこの頌歌の意味がわからないままに日本語に置き換えているだけで、つまり「ずっぱ訳」の最下等のものである]

■ 【06-5-025】 与王文甫

【解題】 黄州こうを発つ準備を進める蘇軾にもどると、出発の少し前にこの手紙を王齊愈おうせいゆ

【字は文甫】 [→作品番号 06-5-015] に出した。

【訳文】

ここ数日、どのようにお過ごしでしょうか。先に御恩によって汝州に量移となり、黄州にいる間にお世話になった方々とも間もなくお別れとなります。つらつら思いますに、私の罪は大きく、しかし責めは軽く、君恩はまことに厚く、直ちに汝州に赴かなくてはなりません。ここ数日間考えて、いよいよ発つと決めました。すでに一艘の舟を得ましたので、この月の下旬までには出発します。長江の流れに乗って進み、淮河に入り、汴河を溯って雍丘と陳留の間に至ったところで陸に上がって汝州に至ることになるでしょう。かなりの費用を必要とするのはやむをえないところです。本心としては、江湖[田舎]に老いて、貴君と小舟で行き来し続けたいのですが、事と心がこのように違うのは仕方がないと、深く慨嘆するよりないのでしょう。貴君もこのことを聞いたら、凄然とされるでありません。是非是非お会いしてお話したいと思います。まだ準備が整わず、たさんのことが切迫しています。貴君におかれてはここ二、三日の間に特に来てはいただけないでしょうか。強く強く望む次第です。……

【補足】〔(1) 出発は「この月の下旬」とあるのは、3月下旬のことであろう。実施には4月10日にずれこんでしまった。(2) ここに示されている汝州への経路は、船を使った場合の最短ルートで、実際にどうなったのかは次の章で見ることになる。(3) この手紙に応じて王齊愈がきたかどうかはわからない。すぐ後で見ると、船に乗って下る途中で王齊愈の家に立ち寄っている〕

■ 【06-5-026】 満庭芳

【解題】黄州を発つに当たってこの詞を作った。序文がある。

【訳文】

元豊七年四月一日、私は黄州から汝州に行くことになり、雪堂で近隣の二、三人と送別会をした。たまたま李翔が江東から来ていて座中に加わったので、この詞を書いて渡した。

【補足】[李翔^{りしょう} [字は仲覧^{あざな ちゆうらん}] は楊絵^{ようかい} [→作品番号 06-4-047] の使者として時折黄州^{こう}にきていた。今回は、黄州を発ったならば、楊絵のいる興国^{こうこく}に寄ってほしいという希望を伝えるためにきたもので、この詞はそれへの返事となっている。興国は黄州から長^{ちやう}江^{こう}を数十キロほど下ったところにあり、この詞では「江東^{こうとう}」といっている]

歸去来兮、[陶淵明^{とうえんめい}はいました——歸去来兮^{かえりなんいさ}]

吾歸何処、[私はどこに帰るのでしょか]

万里家在岷峨。[家は万里の彼方^{ひんが が びさん}の岷河、峨眉山^{えびさん}のあたり]

百年強半、[人生は百年、その大半が過ぎてしま]

来日苦無多。[これから来る日々はさほど多くはありません]

坐見黄州再閏、[黄州^{こう}で二度^{うらうづき}の閏月を見て]

兒童尽、[子供等はみな]

楚語吳歌。[この地の言葉や歌に慣れました]

山中友、[山の中の友は]

鷄豚社酒、[鷄に豚に村の酒を携えて]

相勸老東坡。[老いた東坡居士^{とうば こじ}に勧めてくれます]

云何。[私は何をいいましょうか]

当此去、[ここを去って]

人生底事、[人生に何かあるのでしょうか]

来往如梭。[往^ひも来るも梭が飛ぶようなもの]

待間看秋風、[秋風が吹くのを看るころには]

洛水清波。[洛陽^{らくよう} [汝州の近く]の川に清らかな波が立っていることでしょう]

好在堂前細柳、[雪堂せつどうの前まへにあるああのななよよした柳りゅうは]

応念我、[ききと私わたしのこことを念おもうてししょうから]

莫翦柔柯。[柔ならかな枝えだをどどうか切きらないておおいていたたさい]

仍伝語、[(楊よう絵えへへの)言こと伝づて]

江南父老、[長江ちやうきやうの南みなみにいる父老ふらう[楊よう絵えのここと]よ]

時与曬漁蓑。[漁師たかまりの蓑かさをともに日ひに乾かかしましょう[共ともに釣つりをする=飲談いんたんする意]]

【補足】[(1) この詞の前段にいう「山の中の友」とは送別の宴に集まった黄州くわうの人々。人生の困難な時期に親しくした人々との別れは悲しいものがあつたであろう。

(2) この詞に詠まれているように雪堂せつどうは愛着の籠った場所ばしょで、それは潘大臨はんだいらん [→作品番号 06-3-016] に託した。蘇軾そしが去った後、雪堂は教育の場として使われたようだ。その後、黄州の東の坡たかまりが蘇軾の詩文を愛する文人墨客の訪れる名所と化すにつれて雪堂は重要な観光資源となった。これより86年後にそこを訪れた陸游りくゆうは次のように記している。「朝あ、東坡とう ぽに遊ぶ。黄州の城門から東は、岡が高くなったり低くなったりしているが、東坡まで来ると、平坦で広く開けた地形で、東の方にやや高くなった岡がある。三間の構えの家屋があり、亀の頭のように突き出した部屋があつて居士亭こしじとよばれている。亭の下に南に面した堂があり、なかなか立派で、四面の壁にはみな雪景色が描いてある。堂のなかには蘇東坡の像が置かれてあり、烏帽子と紫の裘え ぼ しを着かき、笻杖きやうじやうを横に構えている。これが雪堂である。堂の東に大きな柳があり、公が手ずから植えられたものといひ伝えている。堂の真南に橋がかかっている、札に「小橋」と書いてある。「小橋 流水を忘るる莫なかれ」の句から名付けられたものである。その下にはもともと小川はないのであるが、雨が降ると、細い流れができる。昔は平たい石を流れの上に敷いていただけにすぎなかったが、近ごろになって幅を広くして木の橋をかけ、屋根で覆ってしまったので、いささか気分を害してしまう」(岩国秀夫訳

『入蜀記』（1986年、平凡社）。雪堂に置かれていた蘇軾の像は、これぞ蘇軾というイメージとして定着していったものである。「堂の東の大きな柳」は上の詞にある柳である〔本物かどうかはわからない〕。東の^{たかまり}坡が観光地化し、大衆受けするよう「気分を害する」加工が施されていったことがわかる]

■ 【06-5-027】 記張君宜

【**解題**】蘇軾は^{こう}黄州を去るまでに間に、人々から請われるままに数々のものを書き残した。雪堂を託した^{はんだいらん}潘大臨には『^{せきへき ふ}赤壁の賦』を書いて渡し、4月6日には^{あんこくじ けい}安国寺の^{れん}繼連の望みに応じて『^{こうしゅうあんこくじ き}黄州安国寺の記』〔→作品番号 06-1-024〕を作り、4月7日にこの文書を記している。

【訳文】

近世の医者である^{きゅうてい}仇鼎は病気を治療すること当時第一とされた。仇鼎が死んでからはそれを継ぐ者がいないのだが、いま張君宜の能力はほとんど仇鼎に負けないほどである。仇鼎は性格が^{じゆんしゆく}純淑ではなく、世間の人を畏怖させていた。張君宜は心のほどが平安で、人を救うことを専らとしているので、治療の効果は仇鼎を遠く超えるものがある。

^{げんほう}元豊七年四月七日。

【**補足**】〔蘇軾はサービス精神旺盛であるから、地域の医者に対してご祝儀気分でこのような文章を書いたのだろうか。さらに妓女にもサービスしたというエピソードが、先にも引いた『^{しゆんしよ きぶん}春渚紀聞』〔→作品番号 06-4-053〕に記録されている〕

【訳文】

^{かえん しゆんしよ きぶん}何蘧：『春渚紀聞』より

蘇東坡先生が黄州にいた間のこと、人々が集まって宴会を開くと、先生は酔った勢いで墨をしたたらせて書をしたため、それを惜しむことなく人に与えた。接待に出た妓女にも、扇に書いたり、帯に画を描いてやったりした。

李琪という妓女がいて、なかなか賢く、書を読んでよく理解し、先生も李琪の顔を見ると喜ぶのだが、李琪は先生から何も頂くことがなかった。先生が汝州に移ることになり、まぎに出発しようというときの送別の宴で、酒酣のときに李琪は觴を捧げて蘇軾に再拝し、領巾を取り出して書を乞い願った。蘇軾は少しばかり李琪を見ていたが、李琪に墨をするよう命じ、墨が濃くすり上がると、先生は筆を執り、大きく書いた。

東坡五歳黄州住、[東坡居士は黄州に住むこと五年]

何事無言及李琪。[どうして李琪についていうことがなかったのか]

ここで筆を擲って手を袖に入れ、座客と笑談した。

人々は先生の書いたものを見て、

「語が平凡に見えます。それに一篇の詩はまだ終わっていません。どういことなのでしょう」

と言い合った。

いよいよ宴会が終わりそうになったときに、李琪がまた挨拶して、続きを願った。先生は大笑いしていった。

「ほとんど忘れて出て行くところだった」

書を継いでこう記した。

恰似西川杜工部、[それはつまり、杜甫が蜀にいたときに]

海棠雖好不留詩。[すばらしい海棠があっても詩に詠まなかったのと同じである]

一座の者は喝采し、酔いを尽して散会となった。

【補足】〔杜甫は蜀の地にしばらく滞在して数多くの詩を残したが、蜀の名花である海棠を詠んだものはないという。蘇軾が蜀の人で、こよなく海棠を愛しているのを黄州の人々は皆知っていた。だから、この即興の詩は李琪に対する大変な贅辞であると感嘆したのである〕

■ 【06-5-028】 別黄州

【解題】蘇軾はいよいよ黄州を去り、この詩を残した。

【訳文】

病みかつ傷だらけの老馬であるこの私は、
もはや手綱を付けられての活躍などできるものではない。
それでも君王は馬の亡骸を包むための使い古しの帷をたさった。
同じ木の下に三泊すると去り難い愛着が生じるというのに、
私は五年もの間、黄州にいた。
酒樽の前に置くこの身を、
そのまま保っていることができたのを喜びとしよう。
昔のある人は、腸の内に五千巻の書物が詰まっているといったが、
私の腸はせいぜい米を入れ込んでいるだけだ。
汝州の人間は瘤が多いといわれているから、
瘤を隠すような衣を作っておく必要があるだろう。
我が身は江湖〔田舎の地〕に投げ捨てられはしたものの、

しま
 終いには失われることはなかった。

これからはもう人のことをあげつらうようなことはいわないでいよう。

【補足】〔(1)「使い古しの帷とばり」とは、昔の名将が、辺境の地で命を落として襜褕布せんぷにくるまれてその地に葬られても国のために捧げる命であるから何も悔いはないといった故事に基づく。(2)汝州じょの人には瘤が多いとあるが、前に商州しょうの人には瘤が多いという話を見ている〔→作品番号02-2-027其の二〕。風土病のようなものであるのか、土地への偏見であるのか、同じようなことがいわれていたのだろう〕

■ 【06-5-029】和参寥

【解題】蘇軾こうが黄州を去ったときに、そのときまで黄州に滞在していた参寥さんりょう〔→作品番号06-5-002〕も一緒に発つことになった。これは雪堂せつどうとの別れを詠んだ参寥の詩に和したもの。

【訳文】

大河に浮かぶ塵のような舟、

これは小さな窪みにあるべきものだ。

貴僧とばりに使ってもらった粗末な紙の帳、

これは我が妻のせめてもの心づかいであった。

山の人さんりょう〔参寥〕は、ここから去るとはいわない、

月の光の残る暁の空、

そこに悲しく響く猿の啼き声……。

■ 【06-5-030】過江夜行武昌山聞黄州鼓角

【解題】蘇軾は船で黄州^{こう}を発ち、対岸の武昌^{ぶしょう}に渡った。最後まで別れを惜しんだせいか、すでに夜になっていた。黄州の町から夜風に乗って太鼓や角笛^{つのぶえ}の音が聞こえ、この詩を詠んだ。

【訳文】

清らかな風が水とともに戯れ、月は山に銜まれようとしている。

この夜に、

私は呉王峴^{ごおうけん} [武昌^{ぶしょう}の山の中の高い峰]の下へと渡りつつある。

よほど情が深いのか、

黄州^{こう}の鼓角^{こかく}が、

遠い距離をも辞さずに、私を送って南へとやってきてくれる。

聞えるのは『出塞^{しゅつさい}の曲^{どりて}』 [塞を出て敵地に向かう勇壮な曲]、

川の音と雑り合って、悲壮にして雄健である。

とほ 杜甫は、「国中に戦の角笛の音が響くいま自分はどこに行くのか」と、嘆いた。

ならば、この私は……。

江^{かわ}の鼉^{わに}は憤り、竜は愁え、そして私のために曲調が変わる。

私はきっと覚えていよう、

江^{かわべり}辺の枯れかけたあの柳の樹を。

互いにまだ死なずにいられたなら、

真の顔見知りとしてまた逢おうではないか。

いつの年にか小舟に乗って長江を遡ってきたときに、

黄州^{こう}の人々よ、

またこの曲を吹いて迎えてくれたまえ。

【補足】[杜甫は安禄山の乱の余燼がおさまらない時期に、放浪の旅人となって、「我が道はついでどこにゆくのか」と悲壮な句を吐いた。それと比べたら蘇軾の境遇は遥かに穏やかなものではあるはずなのだが、それでも「江の鼃は憤り、竜は愁え」というように激しい感情の起伏があった。罪が完全にはまだ赦されないままに都の近くに行くよりは、完全に政界を離れて東の坡で農民として生きた方がよいのではないかと、きっと思ったことだろう]

■ 【06-5-031】再書贈王文甫

【解題】蘇軾は車湖の湖畔に住む王齊愈兄弟〔→作品番号 06-5-025〕のもとに行き、そこで二泊した。車湖を離れるに当たってこの文章を残した。

【訳文】

昨日は大風で、行こうとしてもできなかった。今日は風がなく、行くことはできるのだが、私の意は留まりたいと思っている。

王齊愈君は私を行かせたいと思っているのだろう。王君は私の意に会うように風水を操ることができたりするのか。そうであるのなら、客人を何年でも留めておける準備をいまずくにするべきである。

■ 【06-5-032】自興国往筠宿石田駅南二十五里野人舍

【解題】蘇軾は長江を下り、なおも別れを惜しむ人々が多数同行した。王齊愈兄弟、潘丙ら潘一家の面々、郭漣、陳慥〔方山子〕、參寥師〔道潜〕、趙吉といった面々である。その全てが官職に就く者ではないいわゆる「異人」揃いであった。「異人」に囲まれた蘇軾こそは己を新たにしようとする懸命にもがいた末の到達点であったのではなかろうか。蘇軾は楊絵の求め〔→作品番号 06-5-026〕に応じて興国に行き、楊絵と会

って沈酔するまで飲み交わした。作品番号 06-4-074 で見たように趙吉はそのまま興国に留まった。一行には楊絵も加わって陸路せきでんえきで石田せきでんえき駅せきでんえきに行き、その南二十五里やじんで野人やじん [土地の農家] の家に宿をとった。

【訳文】

かわ
溪のほとりの青い山は三百畳の大きさ。
かる うわさ
軽いうわさ衫うわさをつけた身を馬に乘せて、
筆をさっとひと抹なすりするように、その前を走る。
よ
山に倚りかかる竹のもとに人家があり、
私の渴よきを知って道の横に冷たい水が湧いている。
草鞋は軽く、竹の杖でつく土は軟らかい。
がま むしろ
蒲の薦も松の床も香りよく手触りもよい。
ふうろ
夜深く風露が中庭に満ち、
ただ一匹の螢が明滅するのを見る。

■ 【06-5-033】 跋先君書送呉職方引

【訳文】石田せきでんえき駅せきでんえきのあたりで楊絵ようかいは引き返したようで、一行は慈湖じこに行き、そこで呉子ごし上ごしに会った。呉子上のもとには、蘇軾そしゆんの父の蘇洵そしゆんが呉子上の父のために書いた『送別じょうの辞』が遺あざなされていた。蘇軾はそれを見てこの文章を書き添えた。子上は字あざなであるうが、本名はわからない。

【訳文】

私の伯父そかん [蘇渙ごしじょう]は[呉子上ごしじょうの父の]呉中復ごちゆうふくとともに科挙に合格した。私は呉子上とともに科挙に合

格したので、二代にわたる「同年」となった。互いに深い契りがある。

我が父がまだ家にいたとき、父のことを知る人はほとんどいなかった。呉中復は我が父の文章を携えて都に行き、欧陽脩に見せた。欧陽脩はそれで初めて我が父のことを知った。

呉中復と欧陽脩は交わりを結ぶことが長く、欧陽脩が夷陵に流されたときに呉中復に贈った詩に「落筆妙天下」[筆を下せば天下一]の語があった。

私は黃州より汝州に遷るに際して舟で慈湖を過り、呉子とその弟は我が父のこの文を出して見せてくれた。私は泣いてこれを書いた。

元豊七年四月十四日、蘇軾謹んで記す。

■【06-5-034】記參寥童丘答問

【解題】慈湖までで一行の大半は帰ったようで、残った陳慥 [方山子、号は童丘]、參寥師 [道潜] とともに程氏の草堂を訪れた。程氏とは、才学徳行がありながらも仕官することを求めなかった程師徳であろうと推測されている。草堂での楽しい問答を蘇軾は記録した。

【訳文】

慈湖には程氏の草堂がある。二つの山の間から滝が流れ出て、草堂の後ろに落ちる。それは山に掛かる布、あるいは風の中の雪、あるいは鶴の群れが舞うかのようだ。

參寥は草堂の主人に老いをこの地で養うことを乞い、主人はそれを許した。

私が、

「そのときには、お布施集めの発起人として名を連ねるとしましょうか」

といったところ、陳慥は、

「施主の筆頭は私ですな」

といったので、参寥は首を振り、

「まあ、この滝を一口で呑み干された後で、そしていただきますよか」

といった。陳慥はよい切り返しができずに黙ってしまった。

■【06-5-035】岐亭五首、并叙

【解題】4月23日、蘇軾は九江に近い瑞昌ずいしやう県けんに到着し、陳慥ちんぞう [方山子ほうさんし] もここで帰ることになった。別れに際して、5年の間に陳慥との交流の折々に詠んだ詩を書いて贈った。序文がある。

【訳文】

叙

元豊三年正月、私は始めて黄州こうたくに謫たくせられた。

岐亭きていの北二十五里の山の上に至ると、白馬かきに乗り、青い蓋かきを連ねて迎むかへにきた者がいた。私の旧い知り合ちんぞういの陳慥であった。陳慥のもとに留とどまること五日、一篇の詩を賦かきして去った。

明年正月、陳慥の家いに会いに往いった。陳慥は人を遣いわして途中いで私いを勞いたわり迎むかえてくれた。私は長らく殺生ころをしていなかった。陳慥が私を歓待くわんたいするために殺生ころをするのではないかと恐れ、前の詩の韻うんを用もちいて詩を作り、陳慥に殺生ころを戒いめた。陳慥はそれからは殺生ころをしなくなり、岐亭の人々にも見習けんじゆう者が出て、肉を食べない者が多おほくなった。

その後、しばしば往いって会い、往いたびに必ず詩を作った。詩は必ず前の韻うんを用もちいた。

私は黄州にあることをおよそ四年[足掛あしかけけ五年]、岐亭に三回往いって陳慥に会い、陳慥は七回来て私に会った。一緒にいたのはきっと百日余りになるであろう。

元豊七年四月、私は汝州じょりやういに量移りやういとなり、長江ちやうこう、淮河わいがを経て洛陽らくやう[汝州は洛陽に近い]に行くことになった。見送けんこる者は慈湖じこまでで終わった。陳慥だけは九江きやうこうまできた。また前の韻うんを用もちいて詩を作った。

通算五篇としてこれを陳慥に贈る。

其の一

昨日は陰気な雲が重く垂れこめていた。

今日は東の風[春の風]が雪を融かして水にする。

遠くの林は木々がこんもりと暗い。

近くの家からは湿り気を帯びた煙が上がっている。

その下に俗世から隠れた君子がいて、

自得の境涯を楽しんで歌っている。

寒さを冒して私が出かけて来るのを知って、

酒を用意し、はなはだ意を傾けて迎えてくれる。

てのみら
掌を撫ぜるだけで近隣の人々が動き、

村を巡ってがちょう
鵝やら鴨やらを捕えてくる。

台所でがちやがちや
鏘と器の音が響いていたかと思うと、

カーテン
幔幕を照らすばかりに野菜や果物が並べられる。

よもぎ
萋蒿ようまいものたと聞いてはいたが、

ここで初めてその新芽が赤いを見る。

さかずき
盞が おうを洗って鵝黄[美酒の名]を酌み、

刀を磨いてゆうはく
熊白[熊の脂身のような美味な肉]を削る。

すぐに私は酔い、座ったまま眠って被り物を落としてしまう。

醒めたのはもう夜中になろうというころ、

しゅうしゅう
唧唧と銅の瓶から湯の湧く音かしている。

こう
黄州は遠いからどうかいいうのではない、

ただそこに友人がいないのを恐れるのである。

しかし、ここに安心して一緒にいられる主あるじがいる。

主にとってもこのような客人はいないであろう。

静いびりかなこの庵で朝を迎えると、

まわりにはただ山の峰が集まっているのが見えるだけだ。

【補足】[これは黄州こうに到着する直前の詩。『方山子伝』[→作品番号 06-1-015] とは、
2人の出会いの場面の記述が若干異なっている]

其の二

私わがは籃はまゆの中の蛤かきを哀れむ、

口を閉ざしてわずかに残った水を護ろうとしている。

私は網あみの中の魚も哀れむ、

口を開いてわずかな湿り気を吐いて身を濡らそうとしている。

蛤かきも魚も腸はらを刳きかれて苦痛を病む。

そのようなことをしたもてなしは、分を過ぎたものとして私はいただくことができない。

まだ会って寒暖の挨拶もしていないのに、

このことを私は是非とも頼むのである。

昔むかし、盧懷慎ろかいしんは客人を迎えると、

あたかも鴨を蒸しているような音を、豆を煮る鍋で立たせたのだが、

客人は皆笑いを我慢し、ついには罨カーテンを開けて知れてしまった[貧乏暮らしが露見した]。

昔むかし、王武子おうぶしは毎回、刀を血で赤く濡らして食事の用意をし、

武帝ぶていを迎えたときには琉璃るりの盆ひしに蒸した豚肉を載せて出した。

肉に白いものがかかっているので武帝が尋ねたところ、

人の乳であるとの答えに、武帝は(気分を害して)中座して帰ってしまった。

盧懷慎は貧乏であったけれども長生きをし、

王武子は豪勢な暮らしをしたが死ぬ前から神を泣かせた。

先生は万金の壁たまのような立派な人であるのに、

ただこの蟻の一穴のような欠点[殺生]がある。

一年も一回の夢のようなもの、

百年の一生も一時の旅のようなもの。

何が肝要であるのか――

この詩篇を棄てずに、貴君の詩集の末尾にでも入れておいてくれたまえ。

【補足】[この詩は黄州こうに来た翌年の正月、作品番号06-2-007の詩と同じときの作である]

其の三

貴君の家には蜂が巣を作り、

毎年たくさんの蜂蜜がとれる。

私の身は、鼻を穿たれて縄を付けられた牛だ、

舌を出していささか自身を潤おすことしかできない。

二年の間に三度貴君の門よぎを過り、

この訪問は真に心に得るものがある。

貴君は昔の侠客げきもうの劇孟に似て、

緩急の際に門たなを叩けばすくに応じてくれる。

貴君の家には頬に紅をさした女性がいて、

上手に『緑頭鴨りょくとうこう』の曲を歌ってくれる。

^{すだれ}
簾を隔てて見ると、花のような霧がその髪にまどわりついている。

貴君は私のために酒を取り、

親しく茶の包みを開いてくれ、

そして女性の白い手を煩わして茶を煎れてくれる。

楽しいかな、

貴君には何事もなく、

十年の間、頭さくにさく噴く[正式な場でのかぶりもの]を載せることなく暮らしているのは。

門を閉ざして子供等と遊び、

孫の泣く声、笑う声が雑じりりあっている。

西の方では苦しい戦が行われていて、

よい将軍がいなことに困っている。

貴君はしょかつこうめい (諸葛孔明)のはちじんず 八陣図を開いて、

攻守交替するありさまを論じる。

貴君自身が戦に行く必要はない、

ただ坐して兵法を教授すればよいのである。

【補足】[この詩は、こう 黄州に来て2年目の冬、作品番号06-2-073と同じころの作であろう]

其の四

酸しつがスープっぱい酒は齏湯のようであるし、

甘い酒は蜂蜜の汁のようである。

黄州の町に三年いて、

酒を飲んでも(ろくなのかないので)喉をちよいと湿らせるだけだ。

酒を選ぶことができたなら、
 よく酔うことができるだろうと、
 いつもあつぼうさい 黄州の人々が私的に作る酒を思うのだが、
 密造酒の禁令は日夜厳しくなり、
 西隣では役人に踏み込まれ、
 ちょうど酔っていた主人は食事をひっくり返して逃げ、
 酒を入れた甕かめは砕かれてしまった。
 貴君の家はさほど大きくもなく、
 壊れたところを覆う幕もないのに、
 どこからこの酒を得ているのだろうか。
しらふ 素面の者は貴君が赤い顔ねたをしているのを妬ましく見ている。
 きっと世間の好事家が、
りはく かの李白に千石の酒を供したようなことを貴君にしているのだろう。
 貴君のおかげで私も三日間酔うことができ、
 ぼさぼさに乱れた頭に被り物を載せることもない。
 夜更けになると、
 隣かめの家の甕から酒の熱した音が漏れるのを聞いて、
 垣根を超えて盗みに行った昔の下僕のようなことをしてみたい気にもなる。
 頭は禿げて歯が抜けるような年になってもこんなさまの私を見て、
 貴君の召使たちにはさんざ笑われている。
 三年の間にすでに四回ここにきて、
 年々貴君はこの悪い客に遇っている。
 人生は二つの履物はきものを履きつづぶす間のもの、

こしてしばしばることを嫌わないうくれたまえ。

【補足】 [この詩は、作品番号 06-3-081 と同じころの作であるという]

其の五

枯れた松から膏あぶらを採ることができるだろうか。

朽かれた竹から汁がしたたることがあるだろうか。

枯れた松と朽れた竹とが出会い、

互いに哀れみ、互いに湿らせ合うことができるだろうか。

私と貴君との交遊は、

一体何の得るところがあったのか。

幸いにも、心法しんぼう[仏教の真髓]を語り合うことができるのなら、

頭の上が燃えようかどうかということはない。

願うのは、

雲を穿って飛ぶたか鶴となること。

人に食べられてしまう鴨にはなりたくない。

私の旅はすでに初夏に及び、

別れの酒を温める火が幔幕に映る。

我が故郷はどこか、

西を望めば千山が赤く染まっている。

私の遊たびはどこで終わるのか、

東には万頃ばんけいの広さに波うかが白く泛んでいる。

貴君との飲のびが再びまたあるだろうか。

起って舞えば、花が頭に落ちてくる。

いま行くとして、
 苦しくて何もいえない。
 だからといって、子供のように泣きはしない。
 私にはもとより非とすべきことが多い。
 貴君とて一つの欠点もない人間ではあるまい。
 それぞれに別れの言葉を思い、
 他の人々を退けて戸を閉ざし、
 がらんとした部屋で向かい合う。
 虚白[何も無い透明]は道[最高の真理]の集まるどころ、
 ——もはや何も語らずにいよう。

【補足】[(1) 蘇軾の黄州での日々は、このようにして陳慥との出会いに始まり、陳慥のとの別れに終わり、ここに新たな游が始まったのである。(2) 蘇軾の作品を好む人々は、黄州時代に作られたものをとりわけ喜ぶ。蘇軾の人間性の奥行の深さがにじみ出て、何とも深い味わいがある。しかし、世の中にはそのように思う人ばかりではない。同じ時代の人々のなかには、罪人でありながら好き放題をしていると、苦々しく思っていた者が少なからずいた。政治的に対立する改革派の人々であればそのようであって当然であるとしても、同じく保守側の人であっても、蘇軾の黄州での振る舞いを嫌悪する人々がいた。その代表が程頤であった。程頤は学者肌の人で、後の朱子学につながる儒学の新思潮を切り開いた人物である。程頤は黄州における蘇軾は「猖狂放肆」であったとはなはだ厳しく断じ、後に二人は修復不能となるまでに対立し合うのである]

第6章 原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

■ 【06-1-001】 十二月二十八日、蒙恩貴授檢校水部員外郎黃州團練副使、復用前韻二首

其一

百日歸期恰及春、余年樂事最閑身。

出門便旋風吹面、走馬聯翩鵲啐人。

却對酒杯疑是夢、試拈詩筆已如神。

此災何必深追咎、竊祿從來豈有因。

其二

平生文字為吾累、此去聲名不厭低。

寒上縱歸他日馬、城東不鬪少年雞。

休官彭沢貧無酒、隱几維摩病有妻。

堪笑睢陽老從事、為余投檄向江西。

■ 【06-1-002】 文与可飛白贊

■ 【06-1-003】 陳州与文郎逸民飲別、携手河堤上、作此詩

白酒無聲滑瀉油、醉行堤上散吾愁。

春風料峭羊角轉、河水渺綿瓜蔓流。

君已思歸夢巴峽、我能未到說黃州。

此身聚散何窮已、未忍悲歌學楚囚。

■ 【06-1-004】 子由自南都來陳三日而別

夫子自逐客、尚能哀楚囚。

奔馳二百里、徑來寬我憂。

相逢知有得、道眼清不流。

別來未一年、落盡驕氣浮。

嗟我晚聞道、款啓如孫休。

至言雖久服、放心不自収。

悟彼善知識、妙藥忘所投。

納之憂患場、磨以百日愁。

冥頑雖難化、鑄癸亦已周。

平時種種心、次第去莫留。

但余無所還、永與夫子遊。

此別何足道、大江東西州。

畏蛇不下榻、睡足吾無求。

便為齊安民、何必歸故丘。

■ 【06-1-005】 正月十八日蔡州道上遇雪、次子由韻二首

其一

蘭菊有生意、微陽回寸根。

方憂集暮雪、復喜迎朝暉。

憶我故居室、浮光動南軒。

松竹半傾瀉、未數葵与萱。
三徑瑤草合、一瓶井花温。
至今行吟处、尚余履舄痕。
一朝出從仕、永愧李仲元。
晚歲益可羞、犯雪方南奔。
山城買廢圃、槁葉手自掀。
長使齊安人、指說故侯園。

其二

鉛膏染髭鬚、旋露霜雪根。
不如閉目坐、丹府夜自噉。
誰知憂患中、方寸寓羲軒。
大雪從压屋、我非兒女萱。
平生学踵息、坐覺兩鐙温。
下馬作雪詩、滿地鞭箠痕。
佇立望原野、悲歌為黎元。
道逢射獵子、遙指狐兔奔。
踪跡尚可原、窟穴何足掀。
寄謝李丞相、吾將反丘園。

■ 【06-1-006】 過新息留示鄉人任師中

昔年嘗羨任夫子、卜居新息臨淮水。
怪君便爾忘故鄉、稻熟魚肥信清美。

竹陂雁起天為黑、桐柏煙橫山半紫。
 知君坐受兒女困、悔不先歸弄清泚。
 塵埃我亦失收身、此行躑躅尤可鄙。
 寄食方將倚白足、附書未免煩黃耳。
 往雖不及來有年、詔恩倘許歸田里。
 却下關山入蔡州、為買烏糲三百尾。

■ 【06-1-007】 過淮

朝離新息県、初乱一水碧。
 暮宿淮南村、已渡千山赤。
 磨颺号古戍、霧雨暗破馭。
 回頭梁楚郊、永与中原隔。
 黃州在何許、想像雲夢沢。
 吾生如寄耳、初不挾所適。
 但有魚与稻、生理已自畢。
 独喜小兒子、少小事安佚。
 相從艱難中、肝肺如鉄石。
 便忘与晤語、何止寄衰疾。

■ 【06-1-008】 書磨公詩、并引

引

過加祿鎮南二十五里大許店、休馬於逆旅祁宗祥家。見壁上有幅紙題詩云、滿院秋光濃欲滴、老僧倚杖青松側。只怪高聲問不磨、曠余踏破蒼苔色。其後題云溢水僧宝磨。宗祥謂

余、此光黃間狂僧也。年百三十、死於熙寧十年、既死、人有見之者。宗祥言其異事甚多。作是詩以識之。磨公本名清戒、俗謂之戒和尚云。

磨公昔未化、來往淮山曲。
壽逾兩甲子、氣壓諸尊宿。
但嗟獨惡世、不受龍象蹴。
我來不及見、悵望空遺躅。
霜顛隱白毫、鎖骨埋青玉。
皆云似達摩、只履還天竺。
壁間余清詩、字勢頗拔俗。
為吟五字偈、一洗凡眼肉。

■ 【06-1-009】 遊淨居寺、并叙

叙

淨居寺、在光山縣南四十里大蘇山之南、小蘇山之北。寺僧居仁為余言、齊天保中、僧惠思過此、見父老、問其姓、曰蘇氏、又得二山名。乃嘆曰、吾師告我、遇三蘇則住。遂留結庵。而父老竟無有、蓋山神也。其後僧智顛見思於此山而得法焉、則世所謂思大和尚智者大師是也。唐神童中、道岸禪師始建寺於其地。弘明庚子之亂、寺廢於兵火、至乾興中乃復、而賜名曰梵天云。

十載遊名山、自製山中衣。
願言畢婚嫁、攜手老翠微。
不悟俗緣在、失身蹈危機。

刑名非夙学、陷穽損積威。
遂恐生死隔、永与雲山違。
今日復何日、芒鞋自輕飛。
稽首兩足尊、拳頭双涕揮。
靈山会未散、八部猶光輝。
願從二聖往、一洗千劫非。
徘徊竹溪月、空翠搖煙霏。
鐘声自送客、出谷猶依依。
回首吾家山、歲晚將焉歸。

■ 【06-1-010】 梅花二首

其一

春來幽谷水潺潺、的皜梅花草棘間。
一夜東風吹石裂、半隨飛雪渡關山。

其二

何人把酒慰深幽、開自無聊落更愁。
幸有清溪三百曲、不辭相送到黃州。

■ 【06-1-011】 万松亭、并叙

叙

麻城縣令張毅、植万松於道周、以苙行者、且以名其亭。去來十年、而松之存者十不及三四。傷來者之不嗣其意也、故作是詩。

十年栽種百年規、好德無人助我儀。
鼎令若同倉庾氏、亭松忝長子孫枝。
天公不救斧斤厄、野火解憐冰雪姿。
為問幾株能合抱、殷勤記取角弓詩。

■ 【06-1-012】 戲作種松

我昔少年日、種松滿東岡。
初移一寸根、瑣細如插秧。
二年黃茅下、一一攢麥芒。
三年出蓬艾、滿山散牛羊。
不見十余年、想作竜蛇長。
夜風破浪碎、朝露珠璣香。
我欲食其膏、已伐百本桑。
人事多乖迂、神業竟渺茫。
搗來齊安野、夾路鬚髯蒼。
會開龜蛇窟、不惜斤斧瘡。
縱未得茯苓、且當拾流肪。
釜盎百出入、皎然散飛霜。
槁死三彭仇、澡換五穀腸。
青骨凝綠髓、丹田發幽光。
白髮何足道、要使雙瞳方。
却後五百年、騎鶴還故鄉。

■ 【06-1-013】 張先生、并叙

叙

先生不知其名、黃州故隕人、本姓盧、為張氏所養。陽狂垢汚、寒暑不能侵、常独行市中、夜或不知其所止。往來者欲見之、多不能致、余試使人召之、欣然而來。既至、立而不言、與之言、不応、使之坐、不可。但俯仰熟視伝舎堂中、久之而去。夫孰非伝舎者、是中竟何有乎。然余以有思惟心追躡其意、蓋未得也。

熟視空堂竟不言、故応知我未天全。

肯來伝舎人皆説、能致先生子亦賢。

脱履不妨眠糞屋、流澌争看浴氷川。

士廉豈識桃椎妙、妄意称量未必然。

■ 【06-1-014】 記張愨子

■ 【06-1-015】 方山子伝

■ 【06-1-016】 陳季常所蓄朱陳村嫁娶図二首

其一

何年顧陸丹青手、画作朱陳嫁娶図。

聞道一村惟兩姓、不將門戸買崔盧。

其二

我是朱陳旧使君、勸農曾入杏花村。

而今風物那堪画、県吏催租夜打門。

■ 【06-1-017】 臨江仙

竜丘子自洛之蜀、載二侍女、戎裝駿馬。至溪山佳処、輒留、見者以為異人。後十年、築室黃岡之北、号静庵居士。作此贈之。

細馬遠馱双侍女、

青巾玉帶紅鞵。

溪山好處便為家。

誰知巴峽路、

却見洛城花。

面旋落英飛玉蕊、

人間春日初斜。

十年不見紫雲車。

竜丘新洞府、

鉛鼎養丹砂。

■ 【06-1-018】 少年時、嘗過一村院。見壁上有詩、云、夜涼疑有雨、院静似無僧。不知何人詩也。宿黃州禪智寺、寺僧皆不在、夜半雨作、偶記此詩、故作一絶

仏燈漸暗飢鼠出、山雨忽來修竹鳴。

知是何人旧詩句、已忘知我此時情。

■ 【06-1-019】 到黃州謝表

■ 【06-1-020】 初到黃州

自笑平生為口忙、老來事業轉荒唐。
長江繞郭知魚美、好竹連山覺筍香。
逐客不妨員外置、詩人例作水曹郎。
只慚無補糸毫事、尚費官家庄酒囊。

■ 【06-1-021】 黃州春日雜書四絕

其一

楚鄉春冷早梅天、柳色波光已鬪妍。
淮上雁行皆北向、可無消息到儂邊。

其二

中州臘盡春猶淺、只有梅花最可憐。
坐遣牡丹成俗物、豐肌弱骨不成妍。

其三

清曉披衣尋杖藜、隔のdaえある已見最繁枝。
老人無計酬清麗、夜就寒光誦楚辭。

其四

病腹難堪七碗茶、曉窗睡起日西斜。

貧無隙地栽桃李、日日門前看売花。

■ 【06-1-022】 安国寺浴

老來百事懶、身垢猶念浴。

衰髮不到耳、尚煩月一沐。

山城足薪炭、煙霧濛湯谷。

塵垢能幾何、翛然脫羈梏。

披衣坐小閣、散髮臨修竹。

心困万緣空、身安一牀足。

豈惟忘淨穢、兼以洗榮辱。

默歸毋多談、此理觀要熟。

■ 【06-1-023】 安国寺尋春

臥聞百舌呼春風、起尋花柳村村同。

城南古寺修竹合、小房曲檻歆深紅。

看花嘆老憶年少、对酒思家愁老翁。

病眼不羞雲母乱、鬢糸強理茶煙中。

遙知二月王城外、玉仙洪福花如海。

薄羅勻霧蓋新粧、快馬爭風鳴雜珮。

玉川先生真可憐、一生耽酒終無錢。

病過春風九十日、独抱添丁看花發。

■ 【06-1-024】 黃州安國寺記

■ 【06-1-025】 定惠院寓居月夜偶出

幽人無事不出門、偶逐東風轉良夜。
 參差玉宇飛木末、繚繞香煙來月下。
 江雲有態清自媚、竹露無聲浩如瀉。
 已驚弱柳萬條垂、尚有殘梅一枝亞。
 清詩獨吟還自和、白酒已盡誰能借。
 不惜青春忽忽過、但恐歡意年年謝。
 自知醉耳愛松風、會揀霜林結茅舍。
 浮浮大甌長炊玉、溜溜小槽如壓蔗。
 飲中真味老更濃、醉裏狂言醒可怕。
 閉門謝客對妻子、倒冠落佩從嘲罵。

■ 【06-1-026】 次韻前篇

去年花落在此州、對月酣歌美清夜。
 今年黃州見花發、小院閉門風露下。
 萬事如花不可期、余年似酒那禁瀉。
 憶昔扁舟泝巴峽、落帆樊口高桅亞。
 長江袞袞空自流、白髮紛紛寧少借。
 竟無五畝繼沮溺、空有千篇凌鮑謝。
 至今歸計負雲山、未免孤衾眠客舍。
 少年辛苦真食蓼、老境安閑如啖蔗。

饑寒未至且安居、憂患已空猶夢怕。
穿花踏月飲村酒、免使醉歸官長罵。

■ 【06-1-027】卜算子

缺月掛疏桐。
漏斷人初靜。
時見幽人獨往來、
縹緲孤鴻影。

驚起却回頭、
有恨無人省。
揀盡寒枝不肯棲、
寂寞沙洲冷。

■ 【06-1-028】寓居定惠院之東、雜花滿山、有海棠一株、土人不知貴也

江城地瘴蕃草木、只有名花苦幽獨。
嫣然一笑竹籬間、桃李滿山綵麤俗。
也知造物有深意、故遣佳人在空谷。
自然富貴出天姿、不待金盤薦華屋。
朱唇得酒暈生臉、翠袖卷紗紅映肉。
林深霧暗曉光遲、日暖風輕春睡足。
雨中有淚亦悽愴、月下無人更清淑。
先生食飽無一事、散步逍遙自捫腹。

不問人家与僧舍、拄杖敲門看修竹。
忽逢絕艷照衰朽、嘆息無言揩病目。
陋邦何處得此花、無乃好事移西蜀。
寸根千里不易到、銜子飛來定鴻鵠。
天涯流落俱可念、為飲一樽歌此曲。
明朝酒醒還獨來、雪落紛紛哪忍觸。

■ 【06-1-029】 訴衷情

海棠珠綴一重重、
清曉近簾櫳。
胭脂誰与勻淡、
偏向臉邊濃。

看葉嫩、
惜花紅。
意無窮。
如花似葉、
歲歲年年、
共占春風。

■ 【06-1-030】 王齊万秀才寓居武昌縣劉郎洑、正与伍洲相對、伍子胥奔吳所從渡江也

君家稻田冠西蜀、搗玉揚珠三万斛。
塞江流柿起書樓、碧瓦朱欄照山谷。

傾家取樂不論命、散盡黃金如轉燭。
惟余旧書一百車、方舟載入荆江曲。
江上青山亦何有、伍洲遙望劉郎藪。
明朝寒食當過君、請殺耕牛壓私酒。
與君飲酒細論文、酒酣訪古江之漬。
仲謀公瑾不須弔、一酌波神英烈君。

■ 【06-1-031】 二月二十六日、雨中熟睡、至晚、強起出門、還作此詩、意思殊昏昏也

卯酒困三杯、午餐便一肉。
雨聲來不斷、睡味清且熟。
昏昏覺還臥、展轉無由足。
強起出門行、孤夢猶可續。
泥深竹雞語、村暗鳩婦哭。
明朝看此詩、睡語忘難誦。

■ 【06-1-032】 雨晴後、步至四望亭下魚池上、遂自乾明寺前東岡上歸、二首

其一

雨過浮萍合、蛙聲滿四隣。
海棠真一夢、梅子欲嘗新。
拄杖閑挑菜、鞦韆不見人。
殷勤木芍藥、獨自殿余春。

其二

高亭廢已久、下有種魚塘。
暮色千山入、春風百草香。
市橋人寂寂、古寺竹蒼蒼。
鶴鶴來何處、号鳴滿夕陽。

■ 【06-1-033】 与王定国

■ 【06-1-034】 与陳季常書

■ 【06-1-035】 雨中看牡丹三首

其一

霧雨不成点、映空疑有無。
時於花上見、的皪走明珠。
秀色洗紅粉、暗香生雪膚。
黃昏更蕭瑟、頭重欲相扶。

其二

明日雨当止、晨光在松枝。
清寒入花骨、蕭蕭初自持。
午景發濃艷、一笑当及時。
依然暮還斂、亦自惜幽姿。

其三

幽姿不可惜、後日東風起。
酒醒何所見、金粉抱青子。
千花与百草、共尽無妍鄙。
未忍污泥沙、牛酥煎落蕊。

■ 【06-1-036】 次韻樂著作野步

老來幾不弁西東、秋後霜林且強紅。
眼暈見花真是病、耳虛聞蟻定非聰。
酒醒不覺春強半、睡起常驚日過中。
植杖偶逢為黍客、披衣閑詠舞雩風。
仰見落蕊收松粉、俯見新芽摘杞叢。
楚雨還昏雲夢沢、吳潮不到武昌宮。
廢興古郡詩無數、寂寞閑窗易粗通。
解組歸來成二老、風流他日与君同。

■ 【06-1-037】 次韻樂著作送酒

少年多病怯杯觴、老去方知此味長。
万斛羈愁都似雪、一壺春酒若為湯。

■ 【06-1-038】 次韻樂著作天慶觀醮

濁世紛紛肯下臨、夢尋飛步五雲深。
無因上到通明殿、只許微聞玉佩音。

■ 【06-1-039】 杜沂游武昌、以酴醾花菩薩泉見餉、二首

其一

酴醾不爭春、寂寞開最晚。
 青蛟走玉骨、羽蓋蒙珠幘。
 不粧艷已絕、無風香自遠。
 淒涼吳宮闕、紅粉埋故苑。
 至今微月夜、笙簫來絕巘。
 余妍入此花、千載尚清婉。
 怪君呼不歸、定為花所挽。
 昨宵雷雨惡、花盡君忘返。

其二

君言西山頂、自古流白泉。
 上為千牛乳、下有萬石鉛。
 不愧惠山味、但無陸子賢。
 願君揚其名、庶托文字傳。
 寒泉比吉士、清濁在其源。
 不食我心慙、於泉非所患。
 嗟我本何有、虛名空自纏。
 不見子柳子、余愚污溪山。

■ 【06-1-040】 与朱康叔書

■ 【06-1-041】 与朱鄂州書

■ 【06-1-042】 黃鄂之風

■ 【06-1-043】 与李公叔書

■ 【06-1-044】 五禽言五首、并叙

叙

梅聖俞作四禽言。余謫黃州、寓居定惠院、繞舍皆茂林修竹、荒池蒲葦。春夏之交、鳴鳥百族、土人多以其声之似者名之、遂用聖俞体作五禽言。

其一

使君向蘄州、更唱蘄州鬼。

我不識使君、寧知使君死。

人生作鬼會不免、使君已老知何晚。

其二

南山昨夜雨、西溪不可渡。

溪邊布穀兒、勸我脫破袴。

不辭脫袴溪水寒、水中照見催租瘢。

其三

去年麥不熟、挾彈規我肉。

今年麦上場、处处有殘粟。
豐年無象何処尋、聽取林間快活吟。

其四

力作力作、蠶糸一百箔。
壘上麦頭昂、林間桑子落。
願儂一箔千兩糸、纈糸得蛹飼爾雛。

其五

姑惡姑惡、姑不惡、妾命薄。
君不見東海孝婦死作三年乾、不如広漢龐姑去却還。

■ 【06-1-045】 武昌西山題名

■ 【06-1-046】 遊武昌寒溪西山寺

連山蟠武昌、翠木蔚樊口。
我来已百日、欲濟空搔首。
坐看鷗鳥没、夢逐麝麝走。
今朝橫江來、一葦寄衰朽。
高談破巨浪、飛屨輕重阜。
去人曾幾何、絕壁寒溪吼。
風泉兩部樂、松竹三益友。
徐行欣有得、芝朮在蓬莠。

西上九曲亭、衆山皆培塿。
却看江北路、雲水渺何有。
離離見吳宮、莽莽真楚藪。
空伝孫郎石、無復陶公柳。
爾來風流人、惟有漫浪叟。
買田吾已決、乳水沉宜酒。
所須修竹林、深處安井臼。
相將踏勝絕、更裹三日糗。

■ 【06-1-047】 与陳季常書

■ 【06-1-048】 書杜君懿感諸葛筆

■ 【06-1-049】 武昌銅劍歌、并叙

叙

供奉官鄭文、嘗官於武昌。江岸裂、出古銅劍、文得之以遺余。冶鑄精巧、非鍛冶所成者。

雨余江清風卷沙、雷公躡雲捕黃蛇。
蛇行空中如枉矢、電光煜煜燒蛇尾。
或投以塊鏗有聲、雷飛上天蛇入水。
水上青山如削鉄、神物欲出山自裂。
細看兩脅生碧花、猶是西江老蛟血。
蘇子得之何所為、崩厥彈鉄詠新詩。

君不見凌煙功臣長九尺、腰間玉具高拄頤。

■ 【06-1-050】 与王定国書

■ 【06-1-051】 題子由蕭丞相樓詩贈王文玉

■ 【06-1-052】 石芝、并引

引

元豐三年五月十一日癸酉、夜夢遊何人家。開堂西門、有小園、古井。井上皆蒼石。石上生紫藤如竜蛇、枝葉如赤箭。主人言、此石芝也。余率爾折食一枝、衆皆驚笑。其味如雞蘇而甘、明日作此詩。

空堂明月清且新、幽人睡息來初勻。
 了然非夢亦非覺、有人夜呼祁孔賓。
 披衣相從到何許、朱欄碧井開瓊戶。
 忽驚石上堆竜蛇、玉芝紫筍生無數。
 鏘然敲折青珊瑚、味如蜜藕和雞蘇。
 主人相顧一撫掌、滿堂坐客皆盧胡。
 亦知洞府嘲輕脫、終勝嵇康羨王烈。
 神山一合五百年、風吹石髓堅如鉄。

■ 【06-1-053】 与章子厚参政書

■ 【06-1-054】 与朱康叔書

■ 【06-1-055】 黃州再祭文与可文

■ 【06-1-056】 淨因淨照臻老真贊

■ 【06-1-057】 与李公叔書

■ 【06-1-058】 今年正月十四日、与子由別於陳州、五月、子由復至齊安、以詩迎之

驚塵急雪滿貂裘、淚灑東風別宛丘。

又向邯鄲枕中見、却來雲夢沢南州。

睽離動作三年計、牽挽當為十日留。

早晚青山映黃髮、相看万事一時休。

■ 【06-1-059】 曉至巴河口迎子由

去年御史府、拳動觸四壁。

幽幽百尺井、仰天無一席。

隔牆聞歌呼、自恨計之失。

留詩不忍写、苦淚漬紙筆。

余生復何幸、樂事有今日。

江流鏡面淨、煙雨輕霧霧。

孤舟如鸞鷲、点破千頃碧。

聞君在磁湖、欲見隔咫尺。

朝来好風色、旗脚西北擲。
行当中流見、笑眼清光溢。
此邦疑可老、修竹帶泉石。
欲買柯氏林、茲謀待君必。

■ 【06-1-060】 遷居臨臯亭

我生天地間、一蟻寄大磨。
区区欲右行、不救風輪左。
雖云走仁義、未免違寒餓。
劍米有危炊、針氈無穩坐。
豈無佳山水、借眼風雨過。
歸田不待老、勇決凡幾個。
幸茲廢棄余、疲馬解鞍馱。
全家占江駢、絕境天為破。
飢貧相乘除、未見可弔賀。
澹然無憂樂、苦語不成些。

■ 【06-1-061】 書臨臯亭

■ 【06-1-062】 南鄉子

晚景落瓊杯。
照眼雲山翠作堆。
認得岷峨春雪浪、

初來。

万頃蒲萄漲綠醅。

春雨暗陽台。

乱灑歌樓濕粉腮。

一陣東風來捲地、

吹迴。

落照江天一半開。

■ 【06-1-063】 書臨臯亭風月

■ 【06-1-064】 与朱康叔書

■ 【06-1-065】 与子由同遊寒溪西山

散人出入無町畦、朝游湖北暮淮西。

高安酒官雖未上、兩脚垂欲穿塵泥。

与君聚散若雲雨、共惜此日相提携。

千搖万兀到樊口、一箭放溜先鳧鷖。

層層草木暗西嶺、瀏瀏霜雪鳴寒溪。

空山古寺亦何有、歸路万頃青玻璃。

我今漂泊等鴻雁、江南江北無常棲。

幅巾不擬過城市、欲踏徑路開新蹊。

却憂別後不忍到、見子行迹空余悽。

吾儕流落豈天意、自坐迂闊非人擠。
行逢山水輒羞嘆、此去未免勤塩齏。
何当一遇李八百、相哀白髮分刀圭。

■ 【06-1-066】 記樊山

■ 【06-1-067】 次韻答子由

平生弱羽寄衝風、此去歸飛識所從。
好語似珠穿一一、妄心如膜退重重。
山僧有味寧知子、滝吏無言只笑儂。
尚有読書清浄業、未容春睡敵千鐘。

■ 【06-1-068】 与朱康叔書

■ 【06-1-069】 与司馬温公書

■ 【06-1-070】 菩薩蛮

七夕黃州朝天門上二首

其一

画檐初掛彎彎月。
孤光未滿先憂欠。
遥認玉簾鉤、天孫梳洗樓。

佳人言語好。

不願求新巧。

此恨固忘知。

願人無別離。

其二

風回仙馭雲開扇、

更闌月墮星河轉。

枕上夢魂驚、

曉來疏雨零。

相逢雖草草、

長共天難老。

終不羨人間。

人間日似年。

■【06-1-071】陳季常自岐亭見訪、郡中及旧州諸豪爭欲邀致之、戲作陳孟公詩一首

孟公好飲寧論鬪、醉後闔門防客走。

不妨閑過左阿君、百謫終為賢太守。

老居閩裏自浮沈、笑問伯松何苦心。

忽然載酒從陋巷、為愛揚雄作酒箴。

長安富兒求一過、千金壽君君笑唾。

汝家安得客孟公、從來只識陳驚座。

■ 【06-1-072】 与陳季常書

■ 【06-1-073】 定惠院顯師為余竹下開嘯軒

啼鳩催天明、喧喧相詆譏。

暗蛩泣夜永、唧唧自相弔。

飲風蟬至潔、長吟不改調。

食土蚓無腸、亦自終夕叫。

鳶貪声最鄙、鵲喜意可料。

皆緣不平鳴、慟哭等嬉笑。

阮生已粗率、孫子亦未妙。

道人開此軒、清坐默自照。

衝風振河海、不能号無竅。

累尽吾何言、風來竹自嘯。

■ 【06-1-074】 和何長官六言次韻

其一

作邑君真伯厚、去官我豈曼容。

一廬願託仁政、六字難賡變風。

其二

五噫已出東洛、三復願比南容。

学道未逢潘盎、草書猶似楊風。

其三

石渠何須反顧、水駟幸足相容。

長江大欲見庇、探支八月涼風。

其四

清風初号地籟、明月自写天容。

貧家何以娛客、但知抹月批風。

其五

青山自是絕色、無人誰与為容。

說向市朝公子、何殊馬耳東風。

■ 【06-1-075】 与參寥子

■ 【06-1-076】 与言上人

■ 【06-1-077】 与陳大夫書

■ 【06-1-078】 繡仏贊

■ 【06-1-079】 与章子厚書

■ 【06-1-080】 与仏印

■ 【06-1-081】 与参寥子

■ 【06-1-082】 記赤壁

■ 【06-1-083】 乳母任氏墓誌銘

■ 【06-1-084】 与王慶源

■ 【06-1-085】 次韻子由病酒肺疾發

憶子少年時、肺病疲坐臥。

喊呀或終日、勢若風雨過。

虛陽作浮漲、客冷仍下墮。

妻孥恐悵望、膾炙不登坐。

終年禁晚食、半夜發清餓。

胃強鬲苦滿、肺斂腹輒破。

三彭恣啖噉、二豎肯逋播。

寸田可治生、誰勸耕黃糯。

探懷得真藥、不待君臣佐。

初如雪花積、漸作桜珠大。

隔牆聞三噉、隱隱如軋磨。

自茲失故疾、陽唱陰輒和。
神仙多歷試、中路或坎坷。
平生不尽器、痛飲知無奈。
旧人眼看尽、老伴余幾箇。
殘年一斗粟、待子同春簸。
云何不自珍、醉病又一挫。
真源結梨棗、世味等糠莖。
耕耘当待穫、願子勤自課。
相將賦遠遊、仙語不用些。

■ 【06-1-086】 鉄拄杖、并叙

叙

柳真齡字安期、閩人也。家宝一鉄拄杖、如榔栗木、牙節宛轉天成、中空有簧、行輒微響。柳云得之浙中、相伝王審知以遺錢鏐、鏐以賜一僧。柳偶得之以遺余、作此詩謝之。

柳公手中黑蛇滑、千年老根生乳節。
忽聞鏗然爪甲声、四坐驚顧知是鉄。
含簧腹中細泉語、迸火石上飛星裂。
公言此物老有神、自昔閩王餉吳越。
不知流落幾人手、坐看變滅如春雪。
忽然贈我意安在、兩脚未許甘衰歇。
便尋轍跡訪空峒、徑渡洞庭探禹穴。
披榛覓葉采芝菌、刺虎鏃蛟擱蛇蠍。

会教化作兩錢錐、歸來見公未華髮。
問我鉄君無恙否、取出摩挲向公説。

■ 【06-1-087】 西江月

世事一場大夢、
人生幾度秋涼。
夜來風葉已鳴廊、
看取眉頭鬢上。

酒賤常愁客少、
月明多被雲妨。
中秋誰与共孤光、
把盞淒然北望。

■ 【06-1-088】 書蘇李詩後

■ 【06-1-089】 与宝月大師

■ 【06-1-090】 勝相院經藏記

■ 【06-1-091】 自跋勝相院經藏記

■ 【06-1-092】 中和勝相院記

■ 【06-1-093】 与滕達道

■ 【06-1-094】 商君功罪

■ 【06-1-095】 書南史盧度佖

■ 【06-1-096】 与朱康叔書

■ 【06-1-097】 答畢仲举書

■ 【06-1-098】 顏蠋巧於安貧

■ 【06-1-099】 与章質夫

■ 【06-1-100】 太守徐君猷、通守孟亨之、皆不飲酒、以詩戲之

孟嘉嗜酒桓温笑、徐邈狂言孟德疑。

公独未知其趣爾、臣今時復一中之。

風流自有高人識、通介寧隨薄俗移。

二子有靈應撫掌、吾孫還有独醒時。

■ 【06-1-101】 菩薩泉銘

- 【06-1-102】 記公扨天柱分桃

- 【06-1-103】 与秦太虚書

- 【06-1-104】 与李端叔書

- 【06-1-105】 与王定国書

- 【06-1-106】 趙先生舍利記

- 【06-1-107】 書蒲永昇画後

- 【06-1-108】 石氏画苑記

- 【06-1-109】 与王元直

- 【06-1-110】 与杜幾先

- 【06-1-111】 跋張希甫墓誌後

- 【06-1-112】 朱元經爐藥

- 【06-2-001】 子姑神記

■ 【06-2-002】 少年遊

玉肌鉛粉傲秋霜。

準擬鳳呼凰。

伶倫不見、

清香未吐、

且糠秕吹揚。

到處成双君独隻、

空無數、

爛文章。

一点香檀、

誰能借箸、

無復似張良。

■ 【06-2-003】 正月二十日、往岐亭、郡人潘、古、郭三人送余於女王城東禪莊院

十日春寒不出門、不知江柳已搖村。

稍聞泱泱流水谷、盡放青青沒燒痕。

數畝荒園留我住、半瓶濁酒待君溫。

去年今日關山路、細雨梅花正斷魂。

■ 【06-2-004】 黃州隋永安郡

■ 【06-2-005】 宓夢羅漢記

■ 【06-2-006】 王翊夢鹿剖桃核而得雄黃

■ 【06-2-007】 岐亭道上見梅花、戲贈季常

蕙死蘭枯菊亦摧、返魂香入嶺頭梅。

數枝殘綠風吹盡、一點芳心雀啁開。

野店初嘗竹葉酒、江雲欲落豆稭灰。

行當更向釵頭見、病起烏雲正作堆。

■ 【06-2-008】 蜀僧明操思歸書竈丘子壁

更厭勞生能幾日、莫將歸思擾衰年。

片雲會得無心否、南北東西只一天。

■ 【06-2-009】 書所獲鏡銘

■ 【06-2-010】 與滕達道

■ 【06-2-011】 四花相似說

■ 【06-2-012】 王文甫達軒評書

■ 【06-2-013】 跋蔡君謨書海會寺記、論君謨書、跋君謨書賦、評楊氏所藏歐蔡書、跋君謨

飛白

■ 【06-2-014】西江月

竜焙今年絕品、
谷簾自古珍泉。
雪芽双井散神仙。
苗裔來從北苑。

湯發雲腴醞白、
盞浮花乳輕円。
人間誰敢更爭妍。
鬪取紅窗粉面。

■ 【06-2-015】減字木蘭花

天真雅麗、
容態溫柔心性慧。
響亮歌喉、
邊住行雲翠不收。

妙詞佳曲、
轉出新聲能斷續。
重客多情、
滿勸金卮玉手擎。

■ 【06-2-016】 水龍吟

似花還似非花、
也無人惜從教墜。

拋街傍路、

思量却是、

無情有思。

縈損柔腸、

困酣嬌眼、

欲開還閉。

夢隨風万里、

尋郎去處、又還被、

鶯呼起。

不恨此花飛盡、

恨西園、落紅難綴。

曉來雨過、

遺蹤何在、

一池萍碎。

春色三分、

二分塵土、

一分流水。

細看來、

不是楊花、
点点是離人淚。

■ 【06-2-017】 黃州上文潞公書

■ 【06-2-018】 与杜道源

■ 【06-2-019】 与陳大夫

■ 【06-2-020】 少年遊

銀塘朱欄麴塵波。

凹綠捲新荷。

蘭條薦浴、

菖花釀酒、

天氣尚清和。

好將沈醉酬佳節、

十分酒、

一分歌。

獄草煙深、

訟庭人悄、

無吝宴遊過。

■ 【06-2-021】 跋子由栖賢堂記後

■ 【06-2-022】 書唐氏六家書後

■ 【06-2-023】 武昌酌菩薩泉送王子立

送行無酒亦無錢、勸爾一杯菩薩泉。

何處低頭不見我、四方同此水中天。

■ 【06-2-024】 東坡八首、并叙

叙

余至黃州二年、日以困匱、故人馬正卿哀余乏食、為於郡中請故營地數十畝、使得躬耕其中。地既久荒為茨棘瓦礫之場、而歲又大旱、墾闢之勞、筋力殆盡。釋耒而嘆、乃作是詩、自愍其勤、庶幾來歲之入以忘其勞焉。

其一

廢壘無人顧、頽垣滿蓬蒿。

誰能捐筋力、歲晚不償勞。

独有孤旅人、天窮無所逃。

端來拾瓦礫、歲旱土不膏。

崎嶇草棘中、欲刮一寸毛。

喟焉釋耒嘆、我廩何時高。

其二

荒田雖浪莽、高庫各有適。
下隰種杭稌、東原蒔棗栗。
江南有蜀士、桑果已許乞。
好竹不難栽、但恐鞭橫逸。
仍須卜佳處、規以安我室。
家童燒枯草、走報暗井出。
一飽未敢期、瓢飲已可必。

其三

自昔有微泉、來從遠嶺背。
穿城過聚落、流惡壯蓬艾。
去為柯氏陂、十畝魚蝦會。
歲旱泉亦竭、枯萍黏破塊。
昨夜南山雲、雨到一犁外。
泫然尋故瀆、知我理荒蕘。
泥芹有宿根、一寸嗟獨在。
雪芽何時動、春鳩行可膾。

其四

種稻清明前、樂事我能數。
毛空暗春沢、針水聞好語。
分秧及初夏、漸喜風葉舉。
月明看露上、一一珠垂縷。

秋來霜穗重、顛倒相撐拄。
 但聞畦隴間、蚱蟊如風雨。
 新春便入甑、玉粒照筐筥。
 我久食官倉、紅腐等泥土。
 行當知此味、口腹吾已許。

其五

良農惜地力、幸此十年荒。
 桑柘未及成、一麥庶可望。
 投種未逾月、覆塊已蒼蒼。
 農夫告我言、勿使苗葉昌。
 君欲富餅餌、要須縱牛羊。
 再揮謝苦言、得飽不敢忘。

其六

種棗期可剝、種松期可斲。
 事在十年外、吾計亦已愨。
 十年何足道、千載如風電。
 旧聞李衡奴、此策疑可學。
 我有同舍郎、官居在灑岳。
 遺我三寸甘、照座光卓犖。
 百栽倘可致、當及春水渥。
 想見竹籬間、青黃垂屋角。

其七

潘子久不調、沽酒江南村。
郭生本將種、売菜西市垣。
古生亦好事、恐是押牙孫。
家有十畝竹、無時客叩門。
我窮交旧絕、三子独見存。
從我於東坡、勞餉同一餐。
可憐杜拾遺、事与朱阮論。
吾師卜子夏、四海皆弟昆。

其八

馬生本窮士、從我二十年。
日夜望我貴、求分買山錢。
我今反累生、借耕輟茲田。
刮毛龜背上、何時得成氈。
可憐馬生癡、至今誇我賢。
衆笑終不悔、施一当獲千。

■ 【06-2-025】 馬正卿守節

■ 【06-2-026】 馬夢得同歲

■ 【06-2-027】 与王定国書

■ 【06-2-028】 与章子厚書

■ 【06-2-029】 題織錦図上回文三首

■ 【06-2-030】 書鷄鳴歌

■ 【06-2-031】 雜書琴事十首

■ 【06-2-032】 雜書琴曲十二首

■ 【06-2-033】 与彦正判官

■ 【06-2-034】 送海印禪師偈

■ 【06-2-035】 水調歌頭

昵昵兒女語、

燈火夜微明。

恩怨爾汝來去、

彈指淚和聲。

忽變軒昂勇士、

一鼓填然作氣、

千里不留行。

回首暮雲遠、

飛絮攪青冥。

衆禽裏、

真彩鳳、

獨不鳴。

躋攀寸步千險、

一落百尋輕。

煩子指間風雨、

置我腸中冰炭、

起坐不能平。

推手從歸去、

無淚與君傾。

■ 【06-2-036】 祭任師中文

■ 【06-2-037】 任師中挽詞

大任剛烈世無有、疾惡如風朱伯厚。

小任溫毅老更文、聰明慈愛小馮君。

兩任才行不須說、疇昔並友吾先人。

相看半作晨星沒、可憐太白配殘月。

大任先去冢未乾、小任相繼呼不還。

強寄一樽生死別、樽中有淚酒忘酸。
貴賤賢愚同盡耳、君家不盡綠賢子。
人間得喪了無憑、只有天公終可倚。

■ 【06-2-038】 答李琮書

■ 【06-2-039】 答李方叔

■ 【06-2-040】 与王正夫朝奉

■ 【06-2-041】 王大年哀詞

■ 【06-2-042】 記王彭論曹劉之況

■ 【06-2-043】 答吳子野

■ 【06-2-044】 書淵明酬劉柴桑詩

■ 【06-2-045】 跋陶潛詩

■ 【06-2-046】 書鄭君乘絹紙

■ 【06-2-047】 水龍吟

小溝東接長江、
柳堤葦岸連雲際。
煙村瀟灑、
人間一闕、
漁樵早市。
永昼端居、
寸陰虛度、
了成何事。
但糸蓴玉藕、
珠杭錦鯉、
相留戀、
又經歲。

因念浮邱旧侶、
慣瑤池、
羽觴沈醉。
青鸞歌舞、
銖衣搖曳、
壺中天地。
飄墮人間、
步虛聲斷、
露寒風細。
抱素琴、

独向銀蟾影裏、
此懷難寄。

■ 【06-2-048】 与子明兄

■ 【06-2-049】 南鄉子

霜降水痕収。
淺碧鱗鱗露遠洲。
酒力漸消風力軟、
颼颼。
破帽多情却恋頭。

佳節若為酬、
但把清尊斷送秋。
萬事到頭都是夢、
休休。
明日黃花蝶也愁。

■ 【06-2-050】 与王定国

■ 【06-2-051】 集歸去來詩十首、并引

其一
命駕欲何向、欣欣春木榮。

世人無往復、鄉老有逢迎。
雲外流泉遠、風前飛鳥輕。
相携就衡宇、酌酒話交情。

其二

涉世恨形役、告休成老夫。
良欣就歸路、不復向迷途。
去去徑猶菊、行行田欲蕪。
情親有還往、清酒引罇壺。

其三

與世不相入、膝琴聊自歎。
風光歸笑傲、雲物寄遊觀。
言話審無倦、心懷良獨安。
東臯清有趣、植杖日盤桓。

其四

世事非吾事、駕言歸路尋。
向時迷有命、今日悟無心。
庭內菊歸酒、窓前風入琴。
寓形知己老、猶未倦登臨。

其五

雲岫不知遠、巾車行復前。
僕夫尋老木、童子引清泉。
矯首獨傲世、委心還樂天。
農夫告春事、扶老向良田。

其六

富貴良非願、鄉閭歸去休。
携琴已尋壑、載酒復經丘。
翳翳景將入、涓涓泉欲流。
農夫人不樂、我獨與之遊。

其七

觴酒命童僕、言歸無復留。
輕車尋絕壑、孤棹入清流。
乘化欲安命、息交還絕遊。
琴書樂三徑、老矣亦何求。

其八

歸去復歸去、帝鄉安可期。
鳥還知己倦、雲出欲何之。
入室還携幼、臨流亦賦詩。
春風吹獨立、不是傲親知。

其九

役役倦人事、來歸車載奔。
征夫問前路、稚子候衡門。
入息亦詩策、出遊常酒樽。
交親書已絕、雲壑自相存。

其十

寄傲疑今是、求榮感昨非。
聊欣樽有酒、不恨室無衣。
丘壑世情遠、田園生事微。
柯庭還獨盼、時有鳥歸飛。

■ 【06-2-052】 樂全先生生日、以鐵拄杖為壽、二首

其一

先生真是地行仙、住世因循五百年。
每向銅人話疇昔、故教鐵杖鬪清堅。
入懷冰雪生秋思、倚壁蛟龍護昼眠。
遙想人天會方丈、衆中驚倒野狐禪。

其二

二年相伴影隨身、踏遍江湖草木春。
擗石旧痕猶作眼、閉門高節欲生鱗。
畏途自衛真無敵、捷徑爭先却累人。

遠寄知公不嫌重、筆端猶自斡千鈞。

■ 【06-2-053】 与潘三失解後飲酒

千金敝帚人誰買、半額蛾眉世所妍。

顧我自為都吒噪、憐君欲鬪小嬋娟。

青雲豈易量他日、黃菊猶忘似去年。

醉裏未知誰得喪、滿江風月不論錢。

■ 【06-2-054】 記游垂虹亭

■ 【06-2-055】 飲酒說

■ 【06-2-056】 飲酒說

■ 【06-2-057】 聞捷、并引

引

元豐四年十月二十二日、謁王文父齊愈於江南。坐上、得陳季常書報、是月四日、种諤領兵深入、破殺西夏六万余人、獲馬五千匹。衆喜忭唱樂、各飲一巨觥。

聞說將軍取乞闡、將軍旗鼓捷如神。

故知無定河邊柳、得共中原雪絮春。

■ 【06-2-058】 杭州故人信至齊安

昨夜風月清、夢到西湖上。

朝來聞好語、扣戶得吳餉。

輕円白曬荔、脆醞紅螺醬。

更將西庵茶、勸我洗江瘴。

故人情義重、說我必西向。

一年兩僕夫、千里問無恙。

相期結書社、未怕供詩帳。

還將夢魂去、一夜到江漲。

■ 【06-2-059】 答陳師仲主簿書

■ 【06-2-060】 題陳吏部詩後

■ 【06-2-061】 跋所書摩利支經後

■ 【06-2-062】 侄安節遠來夜坐三首

其一

南來不覺歲崢嶸、坐撥寒灰聽雨聲。

遮眼文書元不讀、伴人燈火亦多情。

嗟予潦倒無歸日、今汝蹉跎已半生。

免使韓公悲世事、白頭還對短燈檠。

其二

心衰面改瘦崢嶸、相見惟忘識旧声。
永夜思家在何处、残年知汝遠來情。
畏人默坐成癡鈍、問旧驚呼半死生。
夢断酒醒山雨絕、笑看飢鼠上燈檠。

其三

落第汝為中酒味、吟詩我作忍飢声。
便思絕粒真無策、苦說歸田似不情。
腰下牛閑方解佩、洲中奴長足為生。
大弰一弛何緣殼、已覺翻翻不受檠。

■ 【06-2-063】 冬至日贈安節

我生幾冬至、少小如昨日。
當時事父兄、上寿拜脱膝。
十年閱彫謝、白髮催衰疾。
瞻前惟兄三、顧後子由一。
近者隔濤江、遠者天一壁。
今朝復何幸、見此万里姪。
憶汝綵角時、啼笑為梨栗。
今來能慷慨、志氣堅鉄石。
諸孫行復爾、世事何時畢。
詩成却超然、老淚不成滴。

■ 【06-2-064】 記与安節飲

■ 【06-2-065】 伯父送先人下第歸蜀詩云、人稀野店休安枕、路入靈關穩跨驢。安節將去、為誦此句、因以為韻、作小詩十四首送之

其一

索漠齊安郡、從來著放臣。
如何風雪裏、更送獨歸人。

其二

瘦骨寒將斷、衰髯摘更稀。
未甘為死別、猶恐得生歸。

其三

日上氣曠江、雪晴光眩野。
記取到家時、鋤耰吾正把。

其四

月明穿破裘、霜雪泆孤劍。
歸來閉戶坐、默數來時店。

其五

諸兄無可寄、一語會須酬。

晚歲俱黃髮、相看万事休。

其六

故人如念我、為說瘦樂樂。

尚有身為患、已無心可安。

其七

吾兄喜酒人、今汝亦能飲。

一杯歸誦此、万事邯鄲枕。

其八

東阡在何許、寒食江頭路。

哀哉魏城君、宿草荒新墓。

其九

臨分亦泫然、不為窮途泣。

東阡時一到、莫遣牛羊入。

其十

我夢隨汝去、東阡松柏青。

却入西州門、永愧北山靈。

其十一

乞墦何足羨、負米可忘艱。
莫為無車馬、含羞入劍關。

其十二

我坐名過實、謹譁自招損。
汝幸無人知、莫厭家山穩。

其十三

竹筍与練裙、隨時畢婚嫁。
無事若相思、征鞍還一跨。

其十四

万里却來日、一庵仍獨居。
忘笑謀生拙、团团如磨驢。

■ 【06-2-066】 題子明詩後

■ 【06-2-067】 浣溪沙

十二月二日雨後微雪、太守徐君猷携酒見過、坐上作浣溪沙三首。明日酒醒、雪大作、又作二首。

其一

覆塊青青麥未蘇。

江南雲葉暗隨車。
臨臯煙景世間無。

雨脚半收簷斷線、
雪林初下瓦跳珠。
歸來水顆亂黏鬚。

其二

醉夢醺醺曉未蘇。
門前轆轤使君車。
扶頭一盞怎生無。

廢圃寒蔬挑翠羽、
小槽春酒滴真珠。
清香細細嚼梅鬚。

其五

万頃風濤不記蘇。
雪晴江上麥千車。
但令人飽我愁無。

翠袖倚風縈柳絮、
絳唇得酒爛桜珠。

尊前呵手鑷霜鬚。

■ 【06-2-068】 与陳季常

■ 【06-2-069】 与李公择

■ 【06-2-070】 菩薩蛮

其一 回文夏閨怨

柳庭風靜人眠昼。

昼眠人靜風庭柳。

香汗薄衫涼。

涼衫薄汗香。

手紅冰腕藕。

藕腕冰紅手。

郎笑藕糸長。

長糸藕笑郎。

其二 回文秋閨怨

井桐双照新妝冷。

冷妝新照双桐井。

羞对井花愁。

愁花井对羞。

影孤憐夜永。

永夜憐孤影。

樓上不宜秋。

秋宜不上樓。

■ 【06-2-071】 送牛尾狸与徐使君

風捲飛花自入帷、一樽遙想破愁眉。

泥深厭聽鷄頭鶻、酒淺欣賞牛尾狸。

通印子魚猶帶骨、披綿黃雀漫多脂。

殷勤送去煩纖手、為我磨刀削玉肌。

■ 【06-2-072】 雪後到乾明寺遂宿

門外山光馬亦驚、階前屐齒我先行。

風花誤入長春苑、雲月長臨不夜城。

未許牛羊傷至潔、且看鴉鷁弄新晴。

更須携被留僧榻、待聽催檐瀉竹声。

■ 【06-2-073】 次韻陳四雪中賞梅

臘酒詩催熟、寒梅雪鬪新。

杜陵休嘆老、韋曲已先春。

独秀驚凡目、遺英臥逸民。

高歌對三白、遲暮慰安仁。

■ 【06-2-074】 書雪

■ 【06-2-075】 江神子

大雪懷朱康叔使君、亦知使君之念我也。作江神子以寄之。

黃昏猶是雨纖纖。

曉開簾。

欲平檐。

江闊天低、

無處認青帘。

孤坐凍吟誰伴我、

增病目、

撚衰髯。

使君留客醉厭厭。

水晶鹽。

為誰甜。

手把梅花、

東望憶陶潛。

雪似故人人似雪、

誰可愛、

有人嫌。

■ 【06-2-076】 蝶恋花

別酒勸君君一醉。

清潤潘郎、

又是何郎壻。

記取釵頭新利市。

莫將分付東隣子。

回首長安佳麗地、

三十年前、

我是風流帥。

為向青樓尋旧事、

花枝欠處余名字。

■ 【06-2-077】 与仏印

■ 【06-2-078】 与滕達道

■ 【06-2-079】 陳太初尸解

■ 【06-2-080】 寒熱偈

■ 【06-2-081】 書孟東野詩

■ 【06-2-082】 与任德翁

■ 【06-2-083】 与楊元素

■ 【06-2-084】 与趙昶晦之

■ 【06-2-085】 与杜孟堅

■ 【06-2-086】 記夢回文二首、并叙

叙

十二月二十五日、大雪始晴。夢人以雪水烹小团茶、使美人歌以飲。余夢中為作回文詩、覺而記其一句云、乱点余花唾碧衫。意用飛燕唾花故事也。乃統之、為二絕句云。

其一

酡顏玉盃捧纖纖、乱点余花唾碧衫。

歌咽水雲凝靜院、夢驚松雪落空巖。

其二

空花落尽酒傾缸、日上山融雪漲江。

紅焙淺瓶新活火、龍团小碾鬪晴窗。

■ 【06-2-087】 三朵花、并叙

叙

房州通判許安世、以書遺余言、吾州有異人、常戴三朵花、莫知其姓名、郡人因以三朵花名之。能作詩、皆神仙意。又能自写真、人有得之者。許欲以一本見惠、乃為作此詩。

學道無成鬢已華、不勞千劫漫烝砂。

歸來且看一宿覺、未暇遠尋三朵花。

兩手欲遮瓶裏雀、四條深怕井中蛇。

画図要識先生面、試問房陵好事家。

■ 【06-3-001】 書歐陽公黃牛廟詩後

■ 【06-3-002】 与陳季常

■ 【06-3-003】 祭堂兄子正文

■ 【06-3-004】 水竜吟

閻邱大夫孝終公顛嘗守黃州、作棲霞樓、為郡中勝絕。元豐五年、余謫居黃、一月十七日、夢扁舟江、中流回望、樓中歌樂雜作。舟中人言、公顛方會客也。覺而異之、乃作此詞、公顛時已致仕在蘇州。

小舟橫截春江、

臥看翠壁紅樓起。

雲間笑語、

使君高會、
佳人半醉。
危柱哀絃、
艷歌余響、
遏雲縈水。
念故人老大、
風流未減、
獨回首、
烟波裏。

推枕惘然不見、
但空江、
月明千里。
五湖聞道、
扁舟歸去、
仍携西子。
雲夢南州、
武昌南岸、
昔遊應記。
料多情夢裏、
端來見我、
也參差是。

■ 【06-3-005】 正月二十日、与潘、郭二生出郊尋春、忽記去年是日同至女王城作詩、乃和前韻

東風未肯入東門、走馬還尋去歲春。
 人似秋鴻來有信、事如春夢了無痕。
 江城白酒三杯釀、野老蒼顏一笑溫。
 已約年年為此會、故人不用賦招魂。

■ 【06-3-006】 是日、偶至野人汪氏之居、有神降於其室、自称天人李全、字德通。善篆字、用筆奇妙、而字不可識、云、天篆也。与予言、有所會者。復作一篇、仍用前韻

酒渴思茶漫扣門、那知竹裏是仙村。
 已聞龜策通神語、更看竜蛇落筆痕。
 色瘁形枯忖笑屈、道存目擊豈非溫。
 歸來獨掃空齋臥、猶恐微言入夢魂。

■ 【06-3-007】 天篆記

■ 【06-3-008】 浚井

古井沒荒萊、不食誰為側。
 瓶罌下兩綆、蛙蚓飛百尺。
 腥風被泥滓、空響聞点滴。
 上除青青芹、下洗鑿鑿石。
 沾濡愧童僕、杯酒暖寒栗。
 白水漸泓渟、青天落寒碧。

云何失旧穢、底处来新潔。

并在有無中、無来亦無失。

■ 【06-3-009】紅梅三首

其一

怕愁貪睡独開遲、自恐冰容不入時。

故作小紅桃杏色、尚余孤瘦雪霜姿。

寒心未肯隨春態、酒暈無端上玉肌。

詩老不知梅格在、更看綠葉与青枝。

其二

雪裏開花却是遲、何如独占上春時。

也知造物含深意、故与施朱發妙姿。

細雨裊殘千顆淚、輕寒瘦損一分肌。

不応便雜妖桃杏、数点微酸已著枝。

其三

幽人自恨探春遲、不見檀心未吐時。

丹鼎奪胎那是宝、玉人頰頰更多姿。

抱叢暗蕊初含子、落盞穠香已透肌。

乞与徐熙新画樣、竹間璀璨出斜枝。

■ 【06-3-010】定風波

好睡慵開莫厭遲、
自憐冰臉不時宜。
偶作小紅桃杏色、
閑雅、
尚余孤瘦雪霜姿。

休把閑心隨物態、
何事、
酒生微暈沁瑤肌。
詩老不知梅格在、
吟詠、
更看綠葉與青枝。

■ 【06-3-011】 武昌西山題名

■ 【06-3-012】 次韻子由寄題孔平仲草庵

逢人欲覓安心法、到處先為問道庵。
盧子不須從若士、蓋公當自過曹參。
羨君美玉經三火、笑我枯桑困八蠶。
猶喜大江同一味、故應千里共清甘。

■ 【06-3-013】 二虫

君不見、水馬兒、步步逆流水、

大江東流日千里、此虫趨趨長在此。

君不見、鷓鴣濫堆、決起隨衝風、

隨風一去宿何許、逆風還落蓬蒿中。

二虫愚智俱莫測、江邊一笑無人識。

■ 【06-3-014】 滿庭芳

蝸角虛名、

蠅頭微利、

算來著甚幹忙。

事皆前定、

誰弱又誰強。

且趁閑身未老、

盡放我、

些子疏狂。

百年裏、

渾教是醉、

三万六千場。

思量。

能幾許、

憂愁風雨、

一半相妨。

又何須、

抵死説短論長。

幸对清風皓月、

苔茵展、

雲幕高張。

江南好、

千鐘美酒、

一曲滿庭芳。

■ 【06-3-015】 与子安兄

■ 【06-3-016】 雪堂記

■ 【06-3-017】 与李通叔

■ 【06-3-018】 江神子

陶淵明以正月五日遊斜川、臨流班座、顧瞻南阜、愛曾城之独秀、乃作斜川詩、至今使人想見其處。元豐壬戌之春、余躬耕於東坡、築雪堂居之。南挹四望亭之後丘、西控北山之微泉、概然而歎、此亦斜川之遊。

夢中了了醉中醒。

只淵明、

是前生。

走遍人間、

依旧却躬耕。

昨夜東坡春雨足、

烏鵲喜、

報新晴。

雪堂西畔暗泉鳴。

北山傾、

小溪橫。

南望亭丘、

孤秀聳曾城。

都是斜川当日景、

吾老矣、

寄余齡。

■ 【06-3-019】 陳季常見過三首

其一

仕宦常畏人、退居還喜客。

君來輒館我、未覺雞黍窄。

東坡有奇事、已種十畝麥。

但得君眼青、不辭奴飯白。

其二

送君四十里、只使一帆風。

江邊千樹柳、落我酒杯中。
此行非遠別、此樂固無窮。
但願長如此、來往一生同。

其三

聞君開龜軒、東檻俯喬木。
人言君畏事、欲作龜頭縮。
我知君不然、朝飯仰暘谷。
余光幸分我、不死安可獨。

■ 【06-3-020】 柏石圖詩、并叙

叙

陳公弼家藏柏石圖、其子慥季常傳寶之。東坡居士作詩、以為之銘。

柏生兩石間、天命本如此。
雖雲生之艱、與石相終始。
韓子俯仰人、但愛平地美。
土膏雜糞壤、成壤幾何耳。
君看此槎牙、豈有可移理。
蒼龍轉玉骨、黑虎抱金柅。
畫師亦可人、使我毛豨起。
當年落筆意、正欲譏韓子。

■ 【06-3-021】 謝人惠雲巾方舄二首

其一

燕尾称呼理未便、剪裁雲葉却天然。
無心只是青山物、覆頂宜歸紫府仙。
轉覺周家新樣俗、未容陶令旧名傳。
鹿門佳士勤相贈、黑霧玄霜合比肩。

其二

胡華短鞞格粗疏、古雅無如此樣殊。
妙手不勞盤作鳳、輕身只欲化為鳧。
魏風褊儉堪羞葛、楚客豪華可笑珠。
擬學梁家名解脫、便於禪坐作跏趺。

■ 【06-3-022】 丹石硯銘、并叙

■ 【06-3-023】 滿江紅

憂喜相尋、
風雨過、
一江春綠。
巫峽夢、
至今空有、
亂山屏簇。
何似伯鸞携德耀、

簞瓢未足清飲足。

漸粲然、

光彩照階庭、

生蘭玉。

幽夢裏、

伝心曲。

腸断処、

憑他続。

文君婿知否、

笑君卑辱。

君不見周南歌漢広、

天教夫子休喬木。

便相将、

左手抱琴書、

雲間宿。

■ 【06-3-024】 答李昭玘書

■ 【06-3-025】 書淵明飲酒詩後

■ 【06-3-026】 書淵明乞食詩後

■ 【06-3-027】 寒食雨二首

其一

自我來黃州、已過三寒食。
年年欲惜春、春去不容惜。
今年又苦雨、兩月秋蕭瑟。
臥聞海棠花、泥污燕脂雪。
暗中偷負去、夜半真有力。
何殊病少年、病起頭已白。

其二

春江欲入戶、雨勢來不已。
小屋如漁舟、濛濛水雲裏。
空庖煮寒菜、破竈燒濕葦。
那知是寒食、但見烏銜紙。
君門深九重、墳墓在萬里。
也擬哭途窮、死灰吹不起。

■ 【06-3-028】 徐使君分新火

臨臯亭中一危坐、三見清明改新火。
溝中枯木忘笑人、鑽斫不然誰似我。
黃州使君憐久病、分我五更紅一朵。
從來破釜躍江魚、只有清詩嘲飯顆。
起携蠟炬繞空屋、欲事烹煎無一可。

為公分作無盡燈、照破十方昏暗鎖。

■ 【06-3-029】 定風波

莫聽穿林打葉聲、
何妨吟嘯且徐行。
竹杖芒鞋輕勝馬、
誰怕。
一蓑烟雨任平生。

料峭春風吹酒醒、
微冷、
山頭斜照卻相迎。
回首向來蕭瑟處、
歸去、
也無風雨也無晴。

■ 【06-3-030】 游沙湖

山下蘭芽短浸溪、
松間沙路淨無泥、
蕭蕭暮雨子規啼。

誰道人生無再少、
君看流水尚能西。

休將白髮唱黃鷄。

■ 【06-3-031】 書田

■ 【06-3-032】 書呂道人硯

■ 【06-3-033】 與陳季常

■ 【06-3-034】 單龐二醫

■ 【06-3-035】 西江月

照野弥弥淺浪、

橫空隱隱層霄。

障泥未解玉驄驕。

我欲醉眠芳草。

可惜一溪風月、

莫教踏碎瓊瑤。

解鞍欹枕綠楊橋。

杜宇一聲春曉。

■ 【06-3-036】 次韻答元素、并引

引

余旧有贈元素詞云、天涯同是傷流落。元素以為今日之先兆、且悲當時六客之存亡。六客蓋張子野、劉孝叔、陳令舉、李公沢及元素与余也。

不愁春尽絮随風、但喜丹砂入頰紅。
流落天涯先有識、摩挲金狄会当同。
蘧蘧未必都非夢、了了方知不落空。
莫把存亡悲六客、已将地獄等天宮。

■ 【06-3-037】 臨江仙

詩句端來磨我鈍、
鈍錐不解生銑。
歛顏為我解冰霜。
酒闌清夢覺、
春草滿池塘。

忘念雪堂坡下老、
昔年共采芸香。
功成名遂早還鄉。
回車來過我、
我喬木擁千草。

■ 【06-3-038】 二紅飯

■ 【06-3-039】 与仏印

■ 【06-3-040】 怪石供

■ 【06-3-041】 後怪石供

■ 【06-3-042】 哨遍

為米折腰、
因酒棄家、
口体交相累。
歸去來、
誰不遣君歸。
覺從前皆非今是。
露未晞、
征夫指予歸路、
門前笑語喧童稚。
嗟旧菊都荒、
新松暗老、
吾年今已如此。
但小窓容膝閉柴扉、
策杖看孤雲暮鴻飛。
雲出無心、
鳥倦知還、

本非有意。

噫歸去來兮、

我今忘我兼忘世。

親戚無浪語、

琴書中有真味。

步翠麓崎嶇、

泛溪窈窕、

涓涓暗谷流春水。

觀草木欣榮、

幽人自感、

吾生行且休矣。

念寓形宇內復幾時、

不自覺皇皇欲何之。

委吾心、

去留誰計。

神仙知在何處。

富貴非吾願。

但知臨水登山嘯詠、

自引壺觴自醉。

此生天命更何疑、

且乘流、

遇坎還止。

■ 【06-3-043】 与朱康叔

■ 【06-3-044】 蜜酒歌、并叙

叙

西蜀道士楊世昌、善作蜜酒、絕醇醖。余既得其方、作此歌遺之。

真珠為漿玉為醴、六月田夫汗流泚。

不如春甕自生香、蜂為耕耘花作米。

一日小沸魚吐沫、二日眩軫清光活。

三日開甕香滿城、快瀉銀瓶不須撥。

百錢一斗濃無声、甘露微濁醖翻清。

君不見南園采花蜂似雨、天教釀酒醉先生。

先生年來窮到骨、問人乞米何曾得。

世間万事真悠悠、蜜蜂大勝監河侯。

■ 【06-3-045】 又一首答二猶子与王郎見和

脯青苔、炙青蒲、爛蒸鵝鴨乃瓠壺。

煮豆作乳脂為酥、高燒油燭斟蜜酒、貧家百物初何有。

古來百巧出窮人、搜羅佞合乱天真。

詩書与我為曲蘖、醖釀老夫成搢紳。

質非文是終難久、脫冠還作扶犁叟。

不如蜜酒無煖寒、冬不加甜夏不酸。

老夫作詩殊少味、愛此三篇如酒美。
封胡羯末已可憐、不知更有王郎子。

■ 【06-3-046】 与滕達道

■ 【06-3-047】 歸來引送王子立歸筠州

歸去來兮、世不汝求胡不歸。
洵北望之橫流兮、渺西顧之塵霏。
紛野馬之決驟兮、幸余首之未鞿。
出彭城而南驚兮、眷丘壟而增歎。
亂清淮而俯鑒兮、驚昔容之是非。
念東坡之遺老兮、輕千里而款余扉。
共雪堂之清夜兮、攬明月之余輝。
曾雞黍之未熟兮、嘆空室之伊威。
我挽袖而莫留兮、僕夫在門歌式微。
歸去來兮、路渺渺其何極。
將稅駕於何許兮、北江之南、南江之北。
于此有人兮、儼峨峨其豐碩。
孰居約而爾肥兮、非糠覈其何食。
久抱一而不試兮、愈溫溫而自克。
吾居世之荒浪兮、視昏昏而聽默默。
非之子莫振吾過兮、久不見恐自賊。
吾欲往而道無由兮、子何畏而不即。

將以彼為玉人兮、以子為之璞也。

■ 【06-3-048】 与李公叔書

■ 【06-3-049】 謝陳季常惠一掬巾

夫子胸中万斛寬、此巾何事小团团。
半升僅漉淵明酒、二寸纔容子夏冠。
好戴黄金双得勝、休教白苧一生酸。
臂弓腰箭何時去、直上陰山取可汗。

■ 【06-3-050】 贈黃山人

面頰照人元自赤、眉毛覆眼見來烏。
倦遊不擬談玄牝、示病何妨出白鬚。
絕學已生真定惠、說禪長笑老浮屠。
東坡若肯三年住、親與先生看藥爐。

■ 【06-3-051】 問大冶長老乞桃花茶栽東坡

周詩記苦茶、茗飲出近世。
初緣厭梁肉、佞此雪昏滯。
嗟我五畝園、桑麥苦蒙翳。
不令寸地閑、更乞茶子蘗。
飢寒未知免、已作太飽計。
庶將通有無、農末不相戾。

春来凍地裂、紫筍森已銳。
 牛羊煩訶叱、筐筥未敢睨。
 江南老道人、齒髮日夜逝。
 他年雪堂品、空記桃花裔。

■ 【06-3-052】 題温庭筠湖陰曲後

■ 【06-3-053】 次韻孔毅甫久旱已而甚雨三首

其一

飢人忽夢飯甑溢、夢中一飽百憂失。
 只知夢飽本來空、未悟真飢定何物。
 我生無田食破硯、爾來硯枯磨不出。
 去年太歲空在酉、傍舍壺漿不容乞。
 今年旱勢復如此、歲晚何以黔吾突。
 青天蕩蕩呼不聞、況欲稽首号泥仏。
 甕中蜥蜴尤可笑、跂跂脈脈何等秩。
 陰陽有時雨有數、民是天民天自恤。
 我雖窮苦不如人、要亦自是民之一。
 形容可似喪家狗、未肯弭耳爭投骨。
 倒冠落幘謝朋友、獨与蚊雷共主筆。
 故人嗔我不開門、君視我門誰肯屈。
 可憐明月如潑水、夜半清光翻我室。
 風從南來非雨候、且為疲人洗蒸鬱。

褰裳一和快哉謠、未暇飢寒念明日。

其二

去年東坡拾瓦礫、自種黃桑三百尺。
今年刈草蓋雪堂、日炙風吹面如墨。
平生懶惰今始悔、老大勸農天所直。
沛然例賜三尺雨、造物無心悅難測。
四方上下同一雲、甘霖不為竜所隔。
蓬蒿下濕迎曉未、燈火新涼催夜織。
老夫作罷得甘寢、臥聽牆東人響屐。
奔流未已坑谷平、折葦枯荷恣漂溺。
腐儒粗糲支百年、力耕不受衆目憐。
破陂漏水不耐旱、人力未至求天全。
會當作塘徑千步、橫斷西北遮山泉。
四隣相率助拳杵、人人知我囊無錢。
明年共看決渠雨、飢飽在我寧關天。
誰能伴我田間飲、醉倒惟有支頭磚。

其三

天公号令不再出、十日愁霖並為一。
君家有田水冒田、我家無田憂入室。
不如西州楊道士、万里隨身惟兩膝。
沿流不惡泝亦佳、一葉扁舟任飄突。

山芎麥麴都不用、泥行露宿終無疾。
 夜來飢腸如轉雷、旅愁非酒不可開。
 楊生自言識音律、洞簫入手清且哀。
 不須更待秋井塌、見人白骨方銜杯。

■ 【06-3-054】 魚蠻子

江淮水為田、舟楫為室居。
 魚蝦以為糧、不耕自有餘。
 異哉魚蠻子、本非左衽徒。
 連排入江住、竹瓦三尺廬。
 於焉長子孫、戚施且侏儒。
 擘水取魴鯉、易如拾諸途。
 破釜不著塩、雪鱗芼青蔬。
 一飽便甘寢、何異獮與狙。
 人間行路難、踏地出賦租。
 不如魚蠻子、駕浪浮空虛。
 空虛未可知、會當算舟車。
 蠻子叩頭泣、勿語桑大夫。

■ 【06-3-055】 洞仙歌

叙

僕七歲時、見眉山老尼、姓朱、忘其名、年九十余、自言、嘗隨其師入蜀主孟昶宮中。一日、大熱、蜀主与花蕊夫人夜起避暑摩訶池上、作一詞、朱具能記之。今四十年、朱已死、人無

知此詞者。獨記其首兩句。暇日尋味、豈洞仙歌令乎、乃為足之云。

冰肌玉骨、
自清涼無汗。
水殿風來暗香滿。
繡簾開、
一點明月窺人、
人未寢、
欹枕釵橫鬢亂。

起來携素手、
庭戶無聲、
時見疏星渡河漢。
試問夜如何、
夜已三更、
金波淡、
玉繩低轉。
但屈指、
西風幾時來、
又不道、
年暗中偷換。

■ 【06-3-056】 題伯父謝啓後

■ 【06-3-057】 赤壁賦

壬戌之秋、七月既望、蘇子与客汎舟游于赤壁之下。

清風徐来、水波不興、举酒属客、誦明月之詩、歌窈窕之章。

少焉、月出於東山之上、徘徊於斗牛之間、白露橫江、水光接天、縱一葦之所如、凌万頃之茫然。

浩浩乎如憑虚御風、而不知其所止、飄飄乎如遺世独立、羽化而登仙。

於是飲酒樂甚、扣舷而歌之。

歌曰、桂棹兮蘭槳、擊空明兮泝流光。

渺渺兮余懷、望美人兮天一方。

客有吹洞簫者、倚歌而和之、其声嗚嗚然、如怨、如慕、如泣、如訴、余音嫋嫋、不絕如縷。

舞幽壑之潛蛟、泣孤舟之嫠婦。

蘇子愀然、正襟危坐、而問客曰、何為其然也。

客曰、月明星稀、烏鵲南飛、此非曹孟德之詩乎。

西望夏口、東望武昌、山川相繆、鬱乎蒼蒼、此非孟德之困於周郎者乎。

方其破荊州、下江陵、順流而東也、舳艫千里、旌旗蔽空、酾酒臨江、橫槊賦詩、固一世之雄也、而今安在哉。

況吾与子漁樵於江渚之上、侶魚蝦而友麋鹿、駕一葉之扁舟、举匏樽以相属、寄蜉蝣於天地、渺滄海之一粟。

哀吾生之須臾、羨長江之無窮。

挾飛仙以遨遊、抱明月而長終。

知不可乎驟得、託遺響於悲風。

蘇子曰、客亦知夫水与月乎。

逝者如斯、而未嘗往也、盈虛者如彼、而卒莫消長也、

蓋將自其變者而觀之、則天地曾不能以一瞬、自其不變者而觀之、則物与我皆無盡也、而
又何羨乎。

且夫天地之間、物各有主、苟非吾之所有、雖一毫而莫取。

惟江上之清風、与山間之明月、耳得之而為声、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭、是造
物者之無盡藏也、而吾与子之所共食。

客喜而笑、洗盞更酌。

肴核既盡、杯盤狼籍、相与枕藉乎舟中、不知東方之既白。

■ 【06-3-058】念奴嬌

大江東去、

浪淘盡、

千古風流人物。

故壘西邊、

人道是、

三国周郎赤壁。

乱石崩雲、

驚濤裂岸、

捲起千堆雪。

江山如画、

一時多少豪傑。

遙想公瑾当年、

小喬初嫁了、
雄姿英發。
羽扇綸巾、
談笑間、
強虜灰飛煙滅。
故国神遊、
多情應笑我、
早生華髮。
人間如夢、
一樽還酹江月。

■ 【06-3-059】 夜坐与邁聯句

清風来無辺、明月翳復吐。(自)
松声滿虚空、竹影侵半戸。(邁)
暗枝有驚鵲、壞壁鳴飢鼠。(自)
露葉耿高梧、風螢落空廡。(邁)
微涼感团扇、古意歌白紵。(自)
樂哉今夕遊、獲此陪杖屨。(邁)
伝家詩律細、已自過宗武。
短詩膝上成、聊以慰懷祖。(自)

■ 【06-3-060】 次韻和王鞏六首

其一

君談陽朔山、不作一錢直。
巖藏兩頭蛇、瘴落千仞翼。
雅宜驩兜放、頗訝真舜陟。
暫來已可畏、覽鏡憂面黑。
況子三年囚、苦霧變飲食。
吉人終不死、仰荷天地德。
我來黃岡下、欹枕江流碧。
江南武昌山、向我如咫尺。
春蔬黃土軟、凍筍蒼崖坼。
茲行我累君、乃反得安宅。
遙知丹穴近、為斲勾漏石。
他年分刀圭、名字掛仙籍。

其二

少年帶刀劍、但識從軍樂。
老大服犁鋤、解佩付鎔鑠。
雖無獻捷功、會賜力田爵。
敲冰春搗紙、刈葦秋織箔。
櫟林斬冬炭、竹塢收夏籜。
四時俯有取、一飽天所酢。
君生紈綺間、欲學非其脚。
左右玉纖纖、束薪誰為縛。
勿令聞此語、翠黛頰將惡。

笑我一間茅、婦姑紛六鑿。

其三

欲結千年實、先摧二月花。
故教窮到骨、要使壽無涯。
久已逃天網、何須服日華。
賓州在何處、為子上棲霞。

其四

隣裏有異趣、何妨傾蓋新。
殊方君莫厭、數面自成親。
默坐無余事、回光照此身。
他年赤墀下、玉立看垂紳。

其五

平生我亦輕余子、晚歲人誰念此翁。
巧語屢曾遭薏苡、瘦詞聊復托芎藭。
子還可貴同元亮、妻却差賢勝敬通。
若問我貧天所賦、不因遷謫始囊空。

其六

君家玉臂貫銅青、下客何時見目成。
勤把鉛黃記宮樣、莫教弦管作蠻聲。

熏衣漸歎衙香少、擁髻遙憐夜語清。
記取北歸携過我、南江風浪雪山傾。

■【06-3-061】念奴嬌

憑高眺遠、
見長空万里、
雲無留跡。
桂魄飛來光射處、
冷浸一天秋碧。
玉宇瓊樓、
乘鶯來去、
人在清涼國。
江山如画、
望中煙樹歷歷。

我醉拍手狂歌、
拳杯邀月、
對影成三客。
起舞徘徊風露下、
今夕不知何夕。
便欲乘風、
翻然歸去、
何用騎鵬翼。

水晶宮裏、
一声吹断横笛。

■ 【06-3-062】 与毅父宣德

■ 【06-3-063】 醉蓬莱

笑勞生一夢、

羈旅三年、

又還重九。

華髮蕭蕭、

对荒園搔首。

頼有多情、

好飲無事、

似古人賢守。

歲歲登高、

年年落帽、

物華依旧。

此会応須爛醉、

仍把紫菊茱萸、

細看重嗅。

搖落霜風、

有手栽双柳。

來歲今朝、
為我西顧、
酌羽觴江口。
會與州人、
飲公遺愛、
一江醇酎。

■ 【06-3-064】 記夢賦詩

■ 【06-3-065】 後赤壁賦

是歲十月之望、步自雪堂、將歸於臨臯。
二客從予、過黃泥之坂。
霜露既降、木葉盡脫、人影在地、仰見明月、顧而樂之、行歌相答。
已而歎曰、有客無酒、有酒無肴、月白風清、如此良夜何。
客曰、今者薄暮、拳網得魚、巨口細鱗、狀如松江之鱸。
顧安所得酒乎。
歸而謀諸婦。
婦曰、我有斗酒、藏之久矣、以待子不時之需。
於是携酒與魚、復遊於赤壁之下。
江流有聲、斷岸千尺、山高月小、水落石出。
曾日月之幾何、而江山不可復識矣。
予乃攝衣而上、履巉巖、披蒙茸、踞虎豹、登虬螭、攀棲鶴之危巢、俯馮夷之幽宮。
蓋二客不能從焉。

劃然長嘯、草木震動、山鳴谷応、風起水湧。

予亦悄然而悲、肅然而恐、凜乎其不可留也。

反而登舟、放乎中流、聽其所止而休焉。

時夜將半、四顧寂寥。

適有孤鶴、橫江東來。

翹如車輪、玄裳縞衣、戛然長鳴、掠予舟而西也。

須臾客去、予亦就睡。

夢一道士、羽衣蹁躚、過臨臯之下、揖予而言曰、赤壁之遊樂。

問其姓名、俛而不答。

嗚呼噫嘻、我知之矣。

疇昔之夜、飛鳴而過我者、非子也耶。

道士顧笑、予亦驚寤。

開戶視之、不見其處。

■ 【06-3-066】 帖贈楊世昌

■ 【06-3-067】 弔李台卿、并叙

叙

李台卿、字明仲、廬州人。貌陋甚、性介不群、而博學強記、罕見其比。好左氏、有史學、考正同異、多所發明。知天文律曆、千歲之日可坐數也。軾謫居黃州、台卿為麻城主簿、始識之。既罷居於廬、而曹光州演甫以書報其亡。台卿、光州之妻黨也。

我初未識君、人以君為笑。

垂頭老鶴雀、煙雨霾七竅。
敝衣來過我、危坐若持釣。
褚裒半面新、醜蔑一語妙。
徐徐涉其瀾、極望不得徼。
却觀元嫵媚、士固難輕料。
看書眼如月、罅隙靡不照。
我老多遺忘、得君如再少。
從橫通雜芸、甚博且知要。
所恨言無文、至老幽不耀。
其生世莫識、已死誰復弔。
作詩遺故人、庶解俗子譙。

■ 【06-3-068】 曹既見和復次韻

造物本兒嬉、風噫雷電笑。
誰令妄驚怪、失匕号万竅。
人人走江湖、一一操網釣。
偶然連六鼈、便謂此手妙。
空令任公子、三歲蹲海徼。
長貧固不辭、一死實未料。
難將著草算、除用仏眼照。
何人嗣家学、恨子兒尚少。
嗟我与曹君、衰老世不要。
空言今無救、奇志後必耀。

吟公五字詩、義重千金甲。

收藏慎勿出、免使群兒譙。

■ 【06-3-069】 弔徐德占、并引

引

余初不識德占、但聞其初為呂惠卿所薦、以處士用。元豐五年三月、偶以事至蘄水。德占聞余在伝舎、惠然見訪、与之語、有過人者。是歲十月、聞其遇禍、作詩弔之。

美人種松柏、欲使低映門。

栽培雖易長、流惡病其根。

哀哉歲寒姿、骯髒誰与倫。

竟為明所誤、不免刀斧痕。

一遭兒女汚、始覺山林尊。

從來覓棟梁、未免傍籬藩。

南山隔秦嶺、千樹竜蛇奔。

大廈若果傾、万牛何足言。

不然老巖壑、合抱枝生孫。

死者不可悔、吾將遺後昆。

■ 【06-3-070】 答李方叔

■ 【06-3-071】 跋李康年篆心經後

■ 【06-3-072】 李委吹笛、並引

引

元豐五年十二月十九日、東坡生日也。置酒赤壁磯下、踞高峰、俯鵲巢。酒酣、笛聲起於江上。客有郭、古二生、頗知音、謂坡曰、笛聲有新意、非俗工也。使人問之、則進士李委、聞坡生日、作新曲曰鶴南飛以獻。呼之使前、則青巾紫裘要笛而已。既奏新曲、又快作數弄、嘹然有穿雲裂石之聲。坐客皆引滿醉倒。委袖出嘉紙一幅、曰、吾無求於公、得一絕句足矣。坡笑而從之。

山頭孤鶴向南飛、載我南遊到九嶷。

下界何人也吹笛、可憐時復犯龜茲。

■ 【06-3-073】 醉翁操、并引

引

瑯邪幽谷、山水奇麗、泉鳴空澗、若中音會。醉翁喜之、把酒臨聽、輒欣然忘歸。既去十餘年、而好奇之士沈遵聞之、往游焉。以琴寫其聲、曰醉翁操、節奏疏宕而音指華暢、知琴者以為絕倫。然有其聲而無其辭、翁雖為作歌、而與琴聲不合。又依楚辭作醉翁、好事者亦倚其辭以製曲、雖粗合均度、而琴聲為辭繩約、非天成也。後三十餘年、翁既捐館舍、而遵亦沒矣。有廬山玉澗道人崔閑、特妙于琴、恨此曲之無辭、乃譜其聲、而請於東坡居士以補之云。

瑯然、

清圓、

誰彈、

響空山、
無言。
惟翁醉中知其天。
月明風露娟娟。
人未眠、
荷蕢過山前、
曰有心也哉此賢。
醉翁嘯詠、
声和流泉。
醉翁去後、
空有朝吟夜怨、
山有時而童顛、
水有時而回川。
思翁無歲年、
翁今為飛仙、
此意在人間、
試聽徽外三兩弦。

■ 【06-3-074】 答濠州陳章朝請

■ 【06-3-075】 与蹇授之

■ 【06-3-076】 与上官彝

■ 【06-3-077】 題所書歸去來詞後

■ 【06-3-078】 与陳大夫

■ 【06-3-079】 与子明兄

■ 【06-3-080】 書贈王十六

■ 【06-3-081】 黃泥坂詞

出臨臯而東驚兮、

並叢祠而北轉。

走雪堂之陂陀兮、

歷黃泥之長阪。

大江洶以左繚兮、

渺雲濤之舒卷。

草木層累而右附兮、

蔚柯丘之葱蒨。

余旦往而夕還兮、

步徙倚而盤桓。

雖信美不可居兮、

苟娛余於一盼。

余幼好此奇服兮、

襲前人之詭幻。
老更變而自哂兮、
悟驚俗之來患。
積寶璐而被繪絮兮、
雜市人而無弁。
路悠悠其莫往來兮、
守一席而窮年。
時遊步而遠覽兮、
路窮盡而旋反。
朝嬉黃泥之白雲兮、
暮宿雪堂之青煙。
喜魚鳥之莫余驚兮、
幸樵蘇之我嫚。
初被酒以行歌兮、
忽放杖而醉偃。
草為茵而塊為枕兮、
穆華堂之清晏。
紛墜露之濕衣兮、
升素月之团团。
感父老之呼覺兮、
恐牛羊之予踐。
於是蹶然而起、
起而歌曰、

月明兮星稀、
迎余往兮餞余歸。
歲既晏兮草木腓、
歸來歸來兮、
黃泥不可以久嬉。

■ 【06-4-001】正月三日点燈会客

江上東風浪接天、苦寒無賴破春妍。
試開雲夢羔兒酒、快瀉錢塘葉玉船。
蠶市光陰非故國、馬行燈火記當年。
冷煙濕雪梅花在、留得新春作上元。

■ 【06-4-002】唐画羅漢贊

■ 【06-4-003】六年正月二十日、復出東門、仍用前韻

乱山環合水侵門、身在淮南尽处村。
五畝漸成終老計、九重新掃旧巢痕。
豈惟見慣沙鷗熟、已覺來多釣石温。
長与東風約今日、暗香先返玉梅魂。

■ 【06-4-004】口目相語

■ 【06-4-005】次韻孔毅甫集古人句見贈五首

其一

羨君戲集他人詩、指呼市人如使兒。
 天邊鴻鵠不易得、便令作对隨家雞。
 退之驚笑子美泣、問君久伋何時歸。
 世間好句世人共、明月自滿千家壩。

其二

紫駝之峰人莫識、雜以雞豚真可惜。
 今君坐致五侯鯖、尽是猩脣与熊白。
 路傍拾得半段槍、何必開爐鑄矛戟。
 用之如何在我耳、入手当令君喪魄。

其三

天下幾人学杜甫、誰得其皮与其骨。
 画如太華当我前、跛●欲上驚岫峯。[●は牛+羊]
 名章俊語紛交衡、無人巧会当时情。
 前生子美只君是、信手拈得俱天成。

其四

詩人雕刻閑草木、搜扶肝腎神忘哭。
 不如默誦千万首、左抽右取談笑足。
 夜吟石鼎声悲秋、可憐好事劉与侯。
 何当一醉百不問、我欲眠矣君歸休。

其五

膏明蘭臭俱自焚、象牙翠羽狀其身。
多言自古為數窮、微中有時堪解紛。
癡人但數羊羔兒、不知何者是左慈。
千章萬句卒非我、急走捉君忘已遲。

■ 【06-4-006】 食柑

一双羅帕未分珍、林下先嘗愧逐臣。
露葉霜枝剪寒碧、金盤玉指破芳辛。
清泉蔌蔌先流齒、香霧霏霏欲噀人。
坐客殷勤為取子、千奴一掬奈吾貧。

■ 【06-4-007】 大寒步至東坡贈巢三

春雨如暗塵、春風吹倒人。
東坡數間屋、巢子誰與隣。
空牀斂敗絮、破竈鬱生薪。
相對不言寒、哀哉知我貧。
我有一瓢酒、獨飲良不仁。
未能禱我類、聊復濡子唇。
故人千鐘祿、馭吏醉吐茵。
那知我与子、坐作寒蟄呻。
努力莫怨天、我爾皆天民。

行看花柳動、共享無邊春。

■ 【06-4-008】 与巢元修

■ 【06-4-009】 与徐得之

■ 【06-4-010】 与子由弟

■ 【06-4-011】 東坡

雨洗東坡月色清、市人行尽野人行。

莫嫌犖確坡頭路、自愛鏗然曳杖声。

■ 【06-4-012】 日日出東門

日日出東門、步尋東城游。

城門抱關卒、笑我此何求。

我亦無所求、駕言写我憂。

意適忽忘返、路窮乃歸休。

懸知百歲後、父老說故侯。

古來賢達人、此路誰不由。

百年寓華屋、千載歸山丘。

何事羊公子、不肯過西州。

■ 【06-4-013】 記所作詩

■ 【06-4-014】 參寥泉銘

■ 【06-4-015】 和黃魯直食筍次韻

飽食有殘肉、飢食無余菜。

紛然生喜怒、似被狙公壳。

爾來誰獨覺、凜凜白下宰。

一飯在家僧、至樂甘不壞。

多生味蠹簡、食筍乃余債。

蕭然映樽俎、未肯雜菘芥。

君看霜雪姿、童稚已耿介。

胡為遭暴橫、三嗅不忍噉。

朝來忽解籜、勢迫風雷噫。

尚可餉三閭、飯筒纏五采。

■ 【06-4-016】 書諺

■ 【06-4-017】 与范蜀公

■ 【06-4-018】 臨江仙

夜飲東坡醒復醉、

歸來彷彿三更。

家童鼻息已雷鳴。

敲門都不応、
倚杖聽江聲。

長恨此身非我有、
何時忘却營營。
夜闌風靜縠紋平。
小舟從此逝、
江海寄余生。

■ 【06-4-019】 帖贈楊世昌

■ 【06-4-020】 与蔡景繁

■ 【06-4-021】 南堂五首

其一

江上西山半隱堤、此邦台館一時西。
南堂独有西南向、臥看千帆落淺溪。

其二

暮年眼力嗟猶在、多病顛毛却未華。
故作明窗書小字、更開幽室養丹砂。

其三

他年雨夜困移牀、坐厭愁声点客腸。
一聽南堂新瓦響、似聞東塢小荷香。

其四

山家為割千房蜜、稚子新畦五畝蔬。
更有南堂堪著客、不憂門外故人車。

其五

掃地焚香閉閣眠、簾紋如水帳如煙。
客來夢覺知何處、挂起西窗浪接天。

■ 【06-4-022】 与蹇授之

■ 【06-4-023】 滿庭芳

三十三年、
今誰存者、
算只君与長江。
凜然蒼檜、
霜幹苦難双。
聞道司州古鼎、
雲溪上、
竹戶松窓。
江南岸、

不因送子、
寧肯過君邦。

縱縱。

疏雨過、

風林舞破、

煙蓋雲幢。

願持此邀君、

一飲空缸。

居士先生老矣、

真夢裏、

相對殘缸。

歌舞斷、

行人未起、

船鼓已逢逢。

■ 【06-4-024】 元修菜、并叙

叙

菜之美者、有吾鄉之巢。故人巢元修嗜之、余亦嗜之。元修云、使孔北海見、當復云吾家菜耶。因謂之元修菜。余去鄉十有五年、思而不可得。元修適自蜀來、見余於黃、乃作是詩、使歸致其子、而種之東坡之下云。

彼美君家菜、鋪田綠茸茸。

豆莢円且小、槐芽細而豐。
種之秋雨余、擢秀繁霜中。
欲花而未萼、一一如青虫。
是時青裙女、採擷何恩恩。
烝之復湘之、香色蔚其饒。
点酒下塩豉、縷橙芼薑蔥。
那知雞与豚、但恐放箸空。
春尽苗葉老、耕翻煙雨叢。
潤隨甘沢化、暖作青泥融。
始終不我負、力与糞壤同。
我老忘家舍、楚音变兒童。
此物独嫵媚、終年繫余胸。
君歸致其子、囊盛勿函封。
張騫移苜蓿、適用如葵菘。
馬援載薏苡、羅生等蒿蓬。
懸知東坡下、堦鹵化千鍾。
長使齊安人、指此說兩翁。

■ 【06-4-025】 聖散子叙

■ 【06-4-026】 杜處士伝

■ 【06-4-027】 寄周安孺茶

大哉天宇内、植物知幾族。
靈品独標奇、迥超凡草木。
名從姬旦始、漸播桐君錄。
賦詠誰最先、厥伝惟杜育。
唐人未知好、論著始於陸。
常李亦清流、当年慕高躅。
遂使天下士、嗜此偶於俗。
豈但中土珍、兼之異邦鬻。
鹿門有佳士、博覽無不矚。
邂逅天随翁、篇章互賽続。
開園頤山下、屏跡松江曲。
有興即揮毫、燦然存簡牘。
伊予素寡愛、嗜好本不篤。
粵自少年時、低徊客京輶。
雖非曳裾者、庇蔭或華屋。
頗見紈綺中、齒牙厭梁肉。
小竜得屢試、糞土視珠玉。
團鳳与葵花、玳瑁雜魚目。
貴人自矜惜、捧玩且緘櫛。
未数日注卑、定知双井辱。
於茲自研討、至味識五六。
自爾入江湖、尋僧訪幽独。
高人固多暇、探究亦頗熟。

聞道早春時、携簾赴初旭。
驚雷未破蕾、采采不盈掬。
旋洗玉泉蒸、芳馨豈停宿。
須臾布輕縷、火候謹盈縮。
不憚頃間勞、經時廢藏蓄。
鬆筒淨無染、箬籠勻且複。
苦畏梅潤侵、暖須人氣燠。
有如剛耿性、不受纖芥觸。
又若廉夫心、難將微穢瀆。
晴天敞虛府、石碾破輕綠。
永日遇閑賓、乳泉發新馥。
香濃奪蘭露、色嫩欺秋菊。
閩俗競佻誇、豐腴面如粥。
自云葉家白、頗勝中山醪。
好是一杯深、午窗春睡足。
清風擊兩腋、去欲凌鴻鵠。
嗟我樂何深、水經亦屢誦。
陸子詫中冷、次乃康王谷。
蟆培頃曾嘗、瓶罌走僮僕。
如今老且懶、細事百不欲。
美惡兩俱忘、誰能強追逐。
薑鹽拌白土、稍稍從吾蜀。
尚欲外形骸、安能徇心腹。

由来薄滋味、日飯止脱粟。
 外慕既已矣、胡為此羈束。
 昨日散幽步、偶上天峰麓。
 山圃正春風、蒙茸万旗簇。
 呼兒為佳客、采制聊亦復。
 地僻誰我從、包藏置廚籠。
 何嘗較優劣、但喜破睡速。
 況此夏日長、人間正炎毒。
 幽人無一事、午飯飽蔬菽。
 困臥北窗風、風微動窗竹。
 乳甌十分滿、人世真局促。
 意爽飄欲仙、頭輕快如沐。
 昔人固多癖、我癖良可贖。
 為問劉伯倫、胡然枕糟麴。

■ 【06-4-028】 送僧忘純偈

■ 【06-4-029】 東坡羹

■ 【06-4-030】 題沈君琴

■ 【06-4-031】 跋吳道子地獄变相

■ 【06-4-032】 跋先君与孫叔靜帖、并書

■ 【06-4-033】 書劉庭式事

■ 【06-4-034】 次韻子由種杉竹

吏散庭空雀噪簷、閉門獨宿夜厭厭。
似聞梨棗同時種、应与杉篁刻日添。
糟麴有神熏不醉、雪霜誇健巧相沾。
先生坐待清陰滿、空使人人嘆滯淹。

■ 【06-4-035】 孔毅甫妻挽詞

結褵記初歎、同穴期晚歲。
挾夫得温嶠、生子勝王濟。
高風相賓友、古義仍兄弟。
從君吏隱中、窮達初不計。
云何抱沈疾、俯仰便一世。
幽陰淒房櫳、芳沢在中袂。
百年縱得滿、此路行亦逝。
那將有限身、長瀉無益涕。
君文照今古、不比山石脆。
當觀千字誄、寧用百金瘞。

■ 【06-4-036】 祭陳君式文

■ 【06-4-037】 初秋寄子由

百川日夜逝、物我相隨去。
 惟有宿昔心、依然守故處。
 憶在懷遠賦、閉門秋暑中。
 藜羹對書史、揮汗與子同。
 西風忽淒厲、落葉穿戶牖。
 子起尋袂衣、感歎執我手。
 朱顏不可恃、此語君勿疑。
 別離恐不免、功名定難期。
 當時已淒斷、況此兩衰老。
 失塗既難追、學道恨不早。
 買田秋已議、築室春當成。
 雪堂風雨夜、已作對牀聲。

■ 【06-4-038】 聞子由為郡僚所摺、恐當去官

少學不為身、宿志固有在。
 雖然敢自必、用舍置度外。
 天初若相我、發跡造宏大。
 豈敢負所付、捐軀欲投會。
 寧知事大謬、拳步得狼狽。
 我已無可言、墮甑難追悔。
 子雖僅自免、雞肋安足賴。

低回畏罪罟、黽勉敢言退。
若人疑或使、為子得微罪。
時哉歸去來、共抱東坡耒。

■ 【06-4-039】次韻王鞏南遷初歸二首

其一

問君謫南賓、野葛食幾尺。
逢人瘴髮黃、入市胡眼碧。
三年不易過、坐晚倚天壁。
歸來貌如故、妙語仍破鑄。
那能廢詩酒、亦未妨禪寂。
願為尚書郎、還賜上方舄。

其二

江家旧池台、修竹圍一尺。
歸來万事非、惟見秦淮碧。
平生痛飲處、遺墨鴉棲壁。
西來故父客、金印雜鳴鏑。
三槐老更茂、花絮春寂寂。
中微未可料、家廟蔽赤舄。

■ 【06-4-040】与李公执

■ 【06-4-041】 与范子豊

■ 【06-4-042】 与張安道

■ 【06-4-043】 上張安道養生訣論

■ 【06-4-044】 節飲食説

■ 【06-4-045】 好事近

紅粉莫悲啼、
俯仰半年離別。
看取雪堂坡下、
老農夫淒切。

明年春水漾桃花、
柳岸隘舟楫。
從此滿城歌吹、
看黃州闐咽。

■ 【06-4-046】 遺愛亭記

■ 【06-4-047】 与楊元素

■ 【06-4-048】 答范蜀公

■ 【06-4-049】 書蜀公約隣

■ 【06-4-050】 鷓鴣天

林斷山明竹隱牆、
亂蟬衰草小池塘。
翻空白鳥時時見、
照水紅蕖細細香。

村舍外、
古城傍。
杖藜徐步轉斜陽。
殷勤昨夜三更雨、
又得浮生一日涼。

■ 【06-4-051】 西江月

点点樓頭細雨、
重重江外平湖。
當年戲馬會東徐。
今日淒涼南浦。

莫恨黃花未吐、

且教紅粉相扶。

酒闌不必看茱萸。

俯仰人間今古。

■ 【06-4-052】 書張芸叟詩

■ 【06-4-053】 牛酒帖

■ 【06-4-054】 孔毅甫以詩戒飲酒、問買田、且乞墨竹、次其韻

酒中真復有何好、孟生雖賢未聞道。

醉時萬慮一掃空、醒後紛紛如宿草。

十年揩洗見真妄、石女無兒焦穀槁。

此身何異貯酒瓶、滿輒予人空自倒。

武昌痛飲豈吾意、性不違人遭客惱。

君家長松十畝陰、借我一庵聊洗心。

我田方寸耕不尽、何用百頃糜千金。

枕書熟睡呼不起、好學憐君工雜擬。

且將墨竹換新詩、潤色何須待東里。

■ 【06-4-055】 子由作二頌、頌石台長老問公、手寫蓮經、字如黑蟻、且誦萬遍、脇不至席二十余年。予亦作二首

其一

眼前擾擾黑蚍蜉、口角霏霏白唾珠。

要識吾師無礙處、試將燒却看嗔無。

其二

眼睛心地兩虛円、脇不沾牀二十年。

誰信吾師非不睡、睡蛇已死得安眠。

■ 【06-4-056】 十拍子

白酒新開九醞、

黃花已過重陽。

身外儻來都似夢、

醉裏無何即是鄉。

東坡日月長。

玉粉旋烹茶乳、

金薤新搗橙香。

強染霜髭扶翠袖。

莫道狂夫不解狂。

狂夫老更狂。

■ 【06-4-057】 洗兒戲作

人皆養子望聰明、我被聰明誤一生。

惟願孩兒愚且魯、無災無難到公卿。

■ 【06-4-058】 鄧忠臣母周氏挽詞

微生真草木、無處謝天力。
慈顏如春風、不見桃李實。
古今抱此恨、有志俯仰失。
公子豈先知、戰戰常惜日。
吾君日月照、委曲到肝鬲。
哀哉人子心、吾何愛一邑。
家庭拜前後、粲然發笑色。
豈比黃壤下、焚瘞千金璧。
若人道德人、視此亦戲劇。
聊償曾閔意、遽與仙仙寂。
孤累臥江渚、永望墳墓隔。
作詩相楚挽、感慟淚再滴。

■ 【06-4-059】 記承天夜遊

■ 【06-4-060】 記故人病

■ 【06-4-061】 書唐林夫惠諸葛筆

■ 【06-4-062】 書名僧令休硯

■ 【06-4-063】 孔毅甫龍尾硯銘

■ 【06-4-064】 書懷民所遺墨

■ 【06-4-065】 書龐安時見遺廷珪墨

■ 【06-4-066】 与蔡景繁

■ 【06-4-067】 水調歌頭

落日繡簾卷、
亭下水連空。
知君為我、
新作窓戶濕青紅。
長記平山堂上、
欹枕江南煙雨、
杳杳沒孤鴻。
認得醉翁語、
山色有無中。

一千頃、
都鏡淨、
倒碧峰。
忽然浪起、
掀舞一葉白頭翁。

堪笑蘭台公子、
未解莊生天籟、
剛道有雌雄。
一点浩然氣、
千里快哉風。

■ 【06-4-068】 郭忠恕画賛

■ 【06-4-069】 与滕達道

■ 【06-4-070】 孟仰之

■ 【06-4-071】 書子由君子泉銘後

■ 【06-4-072】 与王定国

■ 【06-4-073】 王定国詩集叙

■ 【06-4-074】 録趙貧子語

■ 【06-4-075】 延年術

■ 【06-4-076】 贈楊耆

■ 【06-4-077】 与楊耆秀才贖錢帖

■ 【06-4-078】 和蔡景繁海州石室
芙蓉仙人旧遊处、蒼藤翠壁初無路。
戲將桃核裹黃泥、石間散擲如風雨。
坐令空山出錦繡、倚天照海花無數。
花間石室可容車、流蘇宝蓋窺靈宇。
何年霹靂起神物、玉棺飛出王喬墓。
當時醉臥動千日、至今石縫余糟醕。
仙人一去五十年、花老室空誰作主。
手植数松今偃蓋、蒼髯白甲低瓊戶。
我来取酒酌先生、後車仍載胡琴女。
一声冰鉄散巖谷、海為瀾翻松為舞。
爾来心賞復何人、持節中郎醉無伍。
独臨断岸呼日出、紅波碧嶺相吞吐。
徑尋我語覓余声、拄杖彭鏗叩銅鼓。
長篇小字遠相寄、一唱三嘆神淒楚。
江風海雨入牙頰、似聽石室胡琴語。
我今老病不出門、海山巖洞知何許。
門外桃花自開落、牀頭酒甕生塵土。
前年開閣放柳枝、今年洗心歸仏祖。
夢中旧事時一笑、坐覺俯仰成今古。

願君不用刻此詩、東海桑田真旦暮。

■ 【06-4-079】 書四戒

■ 【06-4-080】 徐君猷挽詞

一舸南遊遂不歸、清江赤壁照人悲。

請看行路無從涕、尽是当年不忍欺。

雪後独來栽柳處、竹間行復采茶時。

山城散盡樽前客、旧恨新愁只自知。

■ 【06-4-081】 祭徐君猷文

■ 【06-4-082】 与徐得之

■ 【06-4-083】 記張公規論去欲

■ 【06-4-084】 与滕達道

■ 【06-4-085】 橄欖

紛紛青子落紅塩、正味森森苦且嚴。

待得微甘回齒頰、已輸崖蜜十分甜。

■ 【06-4-086】 南柯子

衛霍元勳後、
韋平外族賢。
吹笙只合在緱山。
閑駕彩鸞歸去、
趁新年。

烘暖燒香閣、
輕寒浴仙天。
他年一醉畫堂前、
莫忘故人憔悴、
老江邊。

■ 【06-4-087】 賭書字

■ 【06-4-088】 生日、王郎以詩見慶、次其韻、並寄茶二十一片

折楊新曲萬人趨、獨和先生于菟于。
但信檀藏終自售、豈知盃脫本無樵。
揭從水叟來游宦、肯伴臞仙亦号儒。
棠棣並為天下士、芙蓉曾到海邊鄒。
不嫌霧谷霾松柏、終恐虹梁荷棟桴。
高論無窮如鋸屑、小詩有味似連珠。
感君生日遙稱壽、祝我余年老不枯。
未弁報君青玉案、建溪新餅截雲腴。

■ 【06-4-089】 喜王定国北歸第五橋

白露淒風洗瘴烟、夢回相對兩淒然。
雀羅廷尉非當日、鳩杖先生愈少年。
世事飽諳思縮手、主恩未報恥歸田。
誰憐第五橋邊水、獨照台州老鄭虔。

■ 【06-4-090】 率子廉伝

■ 【06-4-091】 讀仲閑詩卷因成長句

■ 【06-4-092】 与錢濟明

■ 【06-4-093】 書贈胡道師

■ 【06-4-094】 書贈何聖可

■ 【06-4-095】 夢中作祭春牛文

■ 【06-5-001】 和秦太虛梅花

西湖處士骨忘槁、只有此詩君压倒。
東坡先生心已灰、為愛君詩被花惱。
多情立馬待黃昏、殘雪消遲月出早。

江頭千樹春欲闌、竹外一枝斜更好。
孤山山下醉眠處、點綴裙腰紛不掃。
万里春隨逐客來、十年花送佳人老。
去年花開我已病、今年對花還草草。
不如風雨捲春歸、收拾余香還畀昊。

■ 【06-5-002】再和潛師

化工未議蘇群槁、先向寒梅一傾倒。
江南無雪春瘴生、為散冰花除熱惱。
風清月落無人見、洗妝自趁霜鐘早。
惟有飛來雙白鷺、玉羽瓊枝鬪清好、
吳山道人心似水、眼淨塵空無可掃。
故將妙語寄多情、橫機欲試東坡老。
東坡習氣除未盡、時復長篇書小草。
且撼長條餐落英、忍飢未擬窮呼昊。

■ 【06-5-003】代滕甫弁諉乞郡狀

■ 【06-5-004】師中庵題名

■ 【06-5-005】與千乘侄

■ 【06-5-006】次韻曹九章見贈

蘧瑗知非我所師、流年已似手中箸。
 正平獨肯從文舉、中散何曾靳孝尼。
 剝劍買牛真欲老、得錢沽酒更無疑。
 雞豚異日為同社、宥有千篇唱和詩。

■ 【06-5-007】 書淵明歸去來序

■ 【06-5-008】 題淵明詩

■ 【06-5-009】 書淵明羲農去我久詩

■ 【06-5-010】 上巳日、与二三子携酒出游、隨所見輒作數句、明日集之為詩、故辭無倫次

薄雲霏霏不成雨、杖藜曉入千花塢。
 柯丘海棠吾有詩、獨笑深林誰敢侮。
 三杯卯酒人徑醉、一枕春睡日亭午。
 竹間老人不讀書、留我閉門誰教汝。
 出簷藜枳十圍大、写真素壁千蛟舞。
 東坡作塘今幾尺、携酒一勞農工苦。
 却尋流水出東門、壞垣古塹花無主。
 臥開桃李為誰妍、對立鷓鴣相媚嫵。
 開樽藉草勸行路、不惜春衫污泥土。
 褰裳共過春草亭、扣門却入韓家圃。
 轆轤繩斷井深碧、鞦韆索挂人何所。

映簾空復小桃枝、乞漿不見鷹門女。
南山古台臨斷岸、雪陣翻空迷仰俯。
故人饋我玉葉羹、水冷烟消誰為煮。
崎嶇束蘊下荒徑、姪姪隔花聞好語。
更隨落景盡余樽、却傍孤城得僧宇。
主人勸我洗足眠、倒牀不復聞鐘鼓。
明朝門外泥一尺、始悟三更雨如許。
平生所向無一遂、茲游何事天不阻。
固知我友不終窮、豈弟君子神所予。

■ 【06-5-011】 記遊定惠院

■ 【06-5-012】 劉監倉家煎米粉作餅子、余云為甚酥。潘邠老家造逡巡酒、余飲之、云莫作醋、錯著水來否。後數日、余携家飲郊外、因作小詩戲劉公、求之

野飲花間百物無、杖頭惟掛一葫蘆。
已傾潘子錯著水、更覓君家為甚酥。

■ 【06-5-013】 海棠

東風嫋嫋泛崇光、香霧空濛月轉廊。
只恐夜深花睡去、故燒高燭照紅妝。

■ 【06-5-014】 謝量移汝州表

- 【06-5-015】 贈別王文甫

- 【06-5-016】 与蘇子容

- 【06-5-017】 大別方丈銘

- 【06-5-018】 石恪画維摩頌

- 【06-5-019】 夢弥勒殿

- 【06-5-020】 書黃州古編鐘

- 【06-5-021】 書李岩老棋

- 【06-5-022】 徐問真從歐陽公游

- 【06-5-023】 陳昱再生

- 【06-5-024】 魚枕冠頌

- 【06-5-025】 与王文甫

- 【06-5-026】 滿庭芳

歸去來兮、
吾歸何處、
万里家在岷峨。
百年強半、
來日苦無多。
坐見黃州再閏、
兒童盡、
楚語吳歌。
山中友、
鷄豚社酒、
相勸老東坡。

云何。
當此去、
人生底事、
來往如梭。
待間看秋風、
洛水清波。
好在堂前細柳、
忘念我、
莫翦柔柯。
仍伝語、
江南父老、

時与曬漁蓑。

■ 【06-5-027】 記張君宜

■ 【06-5-028】 別黃州

病瘡老馬不任韉、猶向君王得敵幃。
桑下豈無三宿恋、樽前聊与一身歸。
長腰尚載撐腸米、濶領先裁蓋瘦衣。
投老江湖終不失、來時莫遣故人非。

■ 【06-5-029】 和參寥

芥舟只合在坳堂、紙帳心期老孟光。
不道山人今忽去、曉猿啼处月茫茫。

■ 【06-5-030】 過江夜行武昌山聞黃州鼓角

清風弄水月銜山、幽人夜度吳王峴。
黃州鼓角亦多情、送我南來不辭遠。
江南又聞出塞曲、半雜江声作悲健。
誰言万方声一概、鼙憤鼉愁為余變。
我記江邊枯柳樹、未死相逢真識面。
他年一葉泝江來、還吹此曲相迎餞。

■ 【06-5-031】 再書贈王文甫

■ 【06-5-032】 自興国往筠宿石田馭南二十五里野人舍

■ 【06-5-033】 跋先君書送吳職方引

■ 【06-5-034】 記參寥竜丘答問

■ 【06-5-035】 岐亭五首、并叙

叙

元豐三年正月、余始謫黃州。至岐亭北二十五里山上、有白馬青蓋來迎者、則余故人陳慥季常也。為留五日、賦詩一篇而去。明年正月、復往見之、季常使人勞余於中途。余久不殺、恐季常之為余殺也、則以前韻作詩、為殺戒以遺季常。季常自爾不復殺、而岐亭之人多化之、有不食肉者。其後數往見之、往必作詩、詩必以前韻。凡余在黃四年、三往見季常、而季常七來見余、蓋相從百余日也。七年四月、余量移汝州、自江淮徂洛、送者皆止慈湖、而季常獨至九江。乃復用前韻、通為五篇以贈之。

其一

昨日雲陰重、東風融雪汁。

遠林草木暗、近舍煙火濕。

下有隱君子、嘯歌方自得。

知我犯寒來、呼酒意頗急。

撫掌動隣里、繞村捉鵝鴨。

房櫳鏘器聲、蔬果照巾冪。

久聞萋蒿美、初見新芽赤。
 洗盞酌鵝黃、磨刀削熊白。
 須臾我徑醉、坐睡落巾幘。
 醒時夜向闌、唧唧銅瓶泣。
 黃州豈云遠、但恐朋友欠。
 我當安所主、君亦無此客。
 朝來靜庵中、惟見峰巒集。

其二

我哀籃中蛤、閉口護殘汁。
 又哀網中魚、開口吐微濕。
 割腸彼交病、過分我何得。
 相逢未寒溫、相勸此最急。
 不見盧懷慎、烝壺似烝鴨。
 坐客皆忍笑、髡然發其冪。
 不見王武子、每食刀几赤。
 琉璃載烝豚、中有人乳白。
 盧公信寒陋、衰髮得滿幘。
 武子雖豪華、未死神已泣。
 先生萬金壁、護此一蟻欠。
 一年如一夢、百歲真過客。
 君無廢此篇、嚴詩編杜集。

其三

君家蜂作窠、歲歲添漆汁。
我身牛穿鼻、卷舌聊自濕。
二年三過君、此行真得得。
愛君似劇孟、扣門知緩急。
家有紅頰兒、能唱綠頭鴨。
行當隔簾見、花霧輕霧霧。
為我取黃封、親拆官泥赤。
仍須煩素手、自點葉家白。
樂哉無一事、十年不蓄憤。
閉門弄添丁、哇笑雜呱泣。
西方正苦戰、誰補將帥欠。
披圖見八陣、合散更主客。
不須親戎行、坐論教君集。

其四

酸酒如齏湯、甜酒如蜜汁。
三年黃州城、飲酒但飲濕。
我如更揀拔、一醉豈易得。
幾思壓茅柴、禁網日夜急。
西隣推甕盎、醉倒豬與鴨。
君家大如掌、破屋無遮幕。
何從得此酒、冷面妒君赤。

定応好事人、千石供李白。
 為君三日醉、蓬髮不暇幘。
 夜深欲踰垣、臥想春甕泣。
 君奴亦笑我、鬢齒行禿欠。
 三年已四至、歲歲遭惡客。
 人生幾兩屐、莫厭頻來集。

其五

枯松強鑽膏、槁竹欲瀝汁。
 兩窮相值遇、相哀莫相濕。
 不知我与君、交遊竟何得。
 心法幸相語、頭然未為急。
 願為穿雲鶴、莫作將雛鴨。
 我行及初夏、煮酒映疏冪。
 故鄉在何許、西望千山赤。
 茲游定安歸、東泛万頃白。
 一歡寧復再、起舞花墮幘。
 將行出苦語、不用兒女泣。
 吾非固多矣、君豈無一欠。
 各念別時言、閉戶謝衆客。
 空堂淨掃地、虛白道所集。